

剣姫の弟の二つ名は【リトル・アイズ】

ぶたやま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイズの弟作ってぶち込みました。完全なる自己満足です。
アイズは絶対姉属性が似合うと思います。

『余り構いすぎると嫌われるぞ』

そう注意され、嫌われたくない一心で弟に塩対応を始めたアイズさんが、冷え切ってしまった姉弟関係をどうにかしようと思奮闘するお話です。

2022年1月29日

誠に勝手ながら、16話目（第十五話）を再投稿しております。

前書きに修正後の要約を載せていますので、よろしければご一読下さい。

目次

本編

プロローグ

第一話	10
第二話	22
第三話	34
第四話	49
第五話	63
第六話	79
第七話	90
第八話	105
第九話	111
第十話	122
第十一話	132
第十二話	145
第十三話	156
第十四話	167
第十五話	178
第十六話	202
第十七話	217
第十八話	227
第十九話	240
第二十話	253
第二十一話	272
第二十二話	287

番外編 その2	524
番外編 その2 第二話	
番外編 第四話	504
番外編 第三話	486
番外編 第二話	469
番外編 第一話	464
番外編	
第三十一話	447
第三十話	426
第二十九話	413
第二十八話	402
第二十七話	382
第二十六話	361
第二十五話	345
第二十四話	323
第二十三話	307

本編

プロローグ

「シ、シロ……くん。いる……?」

とある一室の扉に、控えめに声をかける少女がいた。

金の長髪に金の瞳を持つ、オラリオ随一の有名人……同ファミリア内でもアイドル的な人気を誇る、Lv. 5の第一級冒険者『アイズ・ヴァレンシユタイン』である。

来訪者が彼女と知れば、大概の団員達は飛び起きて扉を開けるだろう。

主神のロキや「千の妖精」ならば、それこそ秒速で彼女の前に姿を晒す筈だ。

けれども、この扉はいつそ不遜な程に微動だにしなかった。

アイズは躊躇いつつ、もう一度室内に声を届けた。

「シロくん……?」

しかし、やはり返って来るのは沈黙のみ。

無情な返答に肩を落としていると、廊下の奥から聞き慣れた声が届く。

「アレ、どつたん? アイズたん」

見ると、主神が不思議そうな顔をしながら近づいて来ていた。

朱色の髪に糸目と似非関西弁なる物を操る神・ロキ。

「……男子部屋の区画やん。アイズたんが来るなんて珍しいなあ」

主神は何の他意もなく、ただ思った事を口に出しているといった感じだったが、次の瞬間ハツとした顔になる。

そして、馬鹿げた妄想を口走った。

「まさか、夜這いッ！ 嘘や、ウチのアイズたんが——」

「違います」

ロキの戯言は、物理的な拳と否定の言葉によって一刀両断される。殴られて尚嬉しそうな神は「スマンスマン」と片手をヒラヒラさせつつ、アイズが誰の部屋の前に立っているのかを見て、納得した様子

をみせた。

「あー、成程、マシロたんかあ。今朝出掛けてくの見たで。多分ダンジョンちやう？」

「え？ まだ朝の六時だよ……？」

「アイズが来るの察して早めに出たんちやうん？」

冗談半分で笑うロキに、アイズの表情が露骨に曇った。

それこそ「がーん」と肉声が聞こえてきそうな程の落胆具合に、女神は大慌てでフォローを始める。

「ジョークやジョーク！ てか、アイズたん『風』使えば居場所分かるやろ？」

「……分かるけど、使ったらシロくんにはバレる。スキルを使ってまで探してたのがバレたらきつと嫌われる……」

……いや、嫌われへんやろ。

という感想を口にするより先に、ロキはもつと気になる事を探ねた。

「てか、『くん』って。弟やろ？ なんでくん付け？」

その一見真つ当に思える疑問に、アイズは不満げな表情で頬を膨らませる。

「シロくらいの年頃の男の子は、姉にベタベタされるの嫌がるって、ロキが」

「いや、確かに言ったけども……」

ロキはアイズの思惑を理解する。

と、同時に頭を抱えた。

つまり、くん付けで無理矢理に『ベタベタ感』を消しているという事なのだ。

確かに親し気な感じは消せている。

消せてはいるが……、それ以上に違和感がトンデモナイ事になっていくことには気づいていないらしい。

「あのなあ、アイズたん。それはあくまで、必要以上に頭撫でたり抱きしめたり子供扱いしたりして構いすぎるなっちゅー事や。弟にくん付けなんて普通に考えて変やろ？」

「そ、そう……なの？」

青天の霹靂のように目を見開くアイズ。

「そ・う・や！ まあ、逆に弟をとことん甘やかす『ダダ甘系お姉ちゃん』やったらソレもアリやけど……」

「……？ とことん甘やかすなら出来るよ、私」

「せやろうなあ！ けど、ゴツツ嫌われるで？ マシロは子供扱いされるん虫唾が走る程嫌いやからなあ」

「……そう」

希望を見出したかのように瞳を輝かせたアイズだが、その輝きは一瞬で潰えた。

そもそも、構いすぎて嫌われる可能性を回避する為に『くん付け』で上澄みだけでも素っ気なさを演出していたのだ。

なのに、『くん付け』の違和感を拭う為『ダダ甘姉』を採用しては本末転倒だろう。

——このぐらいの事、普段のアイズなら分かりそうなモンやけど……。

どうも弟の事となるとポンコツ具合の加速する姉に、ロキは総括する様に告げた。

「とにかくや！ マシロに対する態度は今のままで良い！ 呼び方だけ変える！ これでファイナルアンサーや！」

その宣言に、アイズは少し考える素振りを見せる。

「……じゃあ、シロちゃんで」

「子供扱いはアカン言うとするやろ！ 『ちゃん付け』なんて一発アウトや！」

「じゃ、じゃあどうしたら……」

オロオロする自分の眷属に、ロキは思わず声を荒げてしまった。

「普通に呼び捨てで良いやろ！」

「……！ 成程……！」

「天然通り越してアホなんか、アイズたん！」

画期的提案を聞いたと言わんばかりの顔をする眷属に対し、流石のロキも強い言葉で突っ込まざるを得なかった。

「……で、そもそもこんな時間にどんな用だったんや？」

「今日、あの子の誕生日だから……。お祝いの言葉をとって……」

「ははーん？」と、ロキは悪い顔を作った。

「なるほどなるほど、普段嫌われん様極力接触控えとるけど、今日くらいは誕生日をダシに会いに来たって訳か」

「言い方……」

プクーンと膨れるアイズに対し、先程迄のお返しだと言わんばかりに揶揄いの言葉が重ねられる。

「まったく、アイズたんがもうちよつと器用だったら、普段から程よく触れ合えたんやけどなあ。特別な日狙って接触するなんて、回りにくい事せんでも良かったのにい」

アイズが更に膨れる。

その頬を指で突いていると、次の瞬間衝撃の事実が眷属の口から告げられた。

「いいもん。たまにあの子の部屋に忍び込んで一緒に寝てるから」

ムスツとそう告げるアイズ。

「……へ？」

余りにも予想外すぎる発言に、ロキは神の脳を持ってしても直ぐにその意味を理解する事が出来なかった。

そして、主神が問題発言を咀嚼する前に、アイズは更なる爆弾を投下する。

「寝てる時のあの子は何しても起きないから、あんな事やそんな事しても全然大丈夫だもん」

「あ、あ、あんな事やそんな事やとオオオ!!」

そして、驚愕し発狂するロキを尻目に、アイズはスタスタと歩いて行ってしまった。

「ちよつ、ちよつと待ていアイズたん！ 一体マシロに何を……!!
まさか、マジで夜這いしてるんとかやうやろな!!」

焦りに焦ったロキの声は恐らくアイズに届いている。

しかし彼女は歩みを止めず、そして否定も肯定もせずに遂に見えなくなってしまう。

一人廊下に取り残されたロキ。
彼女は冷や汗を流しながら薄目を開けて呟くのだった。

「こりや、一度ママに問い質して貰った方が良いかも知れへんなあ……」

午前六時、ダンジョン6階層。

ベル・クラネルがその光景を目にしたのは只の偶然だった。

銀色の流星が舞い、一条に延びる剣閃に触れた傍からウォーシャドウが消滅していく。

行われているのは冒険者とモンスターの群れとの戦闘の筈なのに、どこか華麗で、まるで優雅な舞を見ている様だった。

「凄い……」

ベルは迂闊にも目を奪われる。

ダンジョンの、それもモンスターのいる空間で武器も構えずにいるなど自殺行為だ。担当アドバイザーに知られれば即雷が落とされる事だろう。

しかし、ベルはその事を承知しながらも魅入ってしまった。

自分と同じ冒険者。

けれども格も、そもその技量も違うその戦闘に、羨望の眼差しを向けずにはいられない。

いったいどれほどの鍛錬と死線をくぐれば、ここまで洗練された剣技と体裁きを獲得出来るのだろう。

ベルは、時折ウォーシャドウの陰から除く銀色の髪の冒険者の動きを注視する。

少しでも何か盗める物はないモノかと、高速乱戦を続ける彼に意識を集中させる。

身体の重心は何処か。

どのタイミングで攻撃を避けているのか。
剣の振るいは？

攻撃の往なし方は？

視線は何処を向いている……？

その殆どがモンスターの体躯によって見えないが、ベルは必至で凝視を続けた。

だからこそ、ベルは気づかなかつたのだ。

自身の背後の岩肌から生まれた怪物の存在に……。

彼がそれ気付いたのは、新たに生まれたモンスターが無機質な雄たけびを上げ、漆黒の腕を振り上げた瞬間だった。

殺気を感じて振り返る。

「……！ ウォーシャドウ?! しま——」

防御は間に合わない。

そう判断したベルは、身を固くして衝撃に備える。

けれど次の瞬間、ウォーシャドウは途轍もないスピードで吹っ飛んでしまった。側面の壁に衝突し、轟音が轟く。

「えっ?! 何が……?」

戸惑いの最中にあるベルが事態を把握したのは、煙が晴れ、ウォーシャドウの姿が視界に収まった時だった。

剣が生えている。

いや、刺さっている……。

壁際に追いやられたモンスターの胸は、一振りの長剣に貫かれていた。

どこからか投擲された剣にひと思いに貫かれた。

そう解釈した瞬間、黒いモンスターは呆気なく消滅する。

ベルは、ゴクリと生唾を呑んだ。

流石に、この剣がどこから投げられたのかのぐらゐの検討は付く。再び銀髪の冒険者の戦闘に目をやると、既に彼の周りを取り巻く

ウォーシャドウは数体程度になっていた。

その為、より鮮明に姿を視認する事が出来る。

銀髪銀目、そしてまだ幼い子供と形容してよい彼……いや、彼女だ

ろうか？ この距離からでは性別までは判別できない。少なくともそれくらいには中性的な容姿をした冒険者。

そんな冒険者の手には、やはり武器はなかった。全くの丸腰だ。

やはり、彼……若しくは彼女が剣を投擲し、自分を危機から救ってくれたのだろう。

そう判断したベルは、齒噛みしながら大地を蹴った。

このままではあの冒険者がやられてしまう。

自分を助ける為、武器を投げ出してくれた所為で。

そんな事があって良い筈がなかった。

けれど、その行動が全く無駄なものであると、ベル・クラネルは直ぐに知る事となる。

全力をとして急接近していたからこそ、鼓膜が拾う事が出来ただ。

彼女……いや、『彼』の唱えた詠唱式を。

『目覚めよ』
テンベスト

次の瞬間、ベルの視界が暴風に染まった。

身体に衝撃が来ない事を不思議に思いつつ、吹き飛ばされない様に全力で踏ん張る。それしか出来ない。目を開けるなど、夢のまた夢だ。

「ぐ……ッ！　ぐううううう……ッ！」

必死に耐える事数秒。

ベル本人は分単位に感じていたが、実際は数秒だ。

その短い時間で、突如発生した暴風は収まった。

ベルは恐る恐る目を開ける。

当然、モンスターの姿はない。影も形も、その一切が消失している。

残ったのは、あの風を発生させたと思しき冒険者の少年ただ一人。

ウオーシャドウの群れを、ベル・クラネルを守りつつ討滅した銀髪銀目の少年。

彼に目立った外傷はなかった。

少なくともベルの見れる範囲には傷を負う事なく、あの状況を切り抜けたという事だ。

確実にLv. 2以上の冒険者だろう。

明らかにベルよりずっと年下であるにも関わらずだ。

そんな無茶苦茶な存在が、ベルの方へ歩き出した。

「あ、あの助けてくれて、あ、あり——」

『ありがとう』か『ありがとうございます』か……どう言うべきか逡巡しているベルの横を、銀髪の少年は無言で通り過ぎる。

「え、あの……」

首を回して視線で彼を追うと、どうやら壁に刺さった剣を回収しに行っている様だった。

少年は剣を引き抜き、美しい所作で鞘に納め……そして——。

「ダンジョン内で気を抜くな」

「……！」

痛い言葉が放たれる。他でもないベル自身に。

「見た所新米の冒険者か。それとも、自殺志願者か？ でなければ、ここに来るのは少し早い様だが……」

「そ、それは……すみません……」

ベルは何も言い返せずに俯く。口調も敬語を選んでしまう。

「……お前が無様を晒すのは構わん。だが、状況次第では他の冒険者も巻き込む事になる。分かるな？」

「……はい」

ベルは、ただただ頷く事しか出来なかった。

自分がたった一人の時に気を抜いて殺される分には別に良い。誰にも迷惑をかけていない。

けれど、例えば誰かとパーティーを組んでいた時。

また、近くに他の冒険者がいる時に同じことをしてみたらどうだ。

パーティーメンバーは確実に危険に晒し、近くの冒険者も此方を救おうとしてくれれば巻き添えにしてしまう事になる。

無論、自分を置いて逃げるといふ選択肢を取る者も多いだろうが、

全員が全員ではないだろう。

少なくとも、この少年はそうだった。

少年は言っているのだ。もしそうだった時、お前を助けようとした者が死んだらどうするつもりだ、と。

ベルは、自分の迂闊さに腹を立てて唇を噛むしかなかった。

そんな最中、少年の声が耳に届く。

「なら良い」

そして足音が聞こえ始めた。

彼はただ一言、それだけ言って、この場から立ち去ろうとしている様だ。

ベルは堪えられずに顔を上げ、口を開いた。

「あ、あの！ 貴方の名前は……？」

けれど、その問いに少年が足を止める事も、答える事もなかった。結局少年は一度も振り返る事なく姿を消す。

ベルは彼の消えて行った先に、短く頭を下げたのだった。

第一話

「何？ アイズがマシロにあんな事やそんな事やこんな事を……だと？」

「いや、こんな事は言っただけ……」

不穏な空気を漂わせる王族のエルフに、朱色髪の神は引き気味に突っ込んだ。

ここは、黄昏の館。

迷宮都市オラリオの最大派閥【ロキ・ファミリア】の本拠地……その執務室だ。

室内にいるのは主神のロキ、【勇者】フィン・デイルナに【重僕】ガレス・ランドロック。

そして、つい今しがた胡乱な声を上げた【九魔姫】リヴェリア・リコス・アールヴである。

主神と首脳陣が集まるこの場で取り上げられている議題は、とある姉弟についてだった。

『アイズ・ヴァレンシユタイン』と、『マシロ・ヴァレンシユタイン』。ファミリアの有する第一級と第二級冒険者の姉弟である。

今回の議題の提言者であるロキは、まず今朝姉の口から告げられた問題発言を彼らに伝える所から始めた。

その結果が、冒頭の穏やかでない空気に繋がるといふ訳だ。

目を細めるリヴェリアを宥める形で、ロキは続きの言葉を口にす
る。

「まあ、『あんな事やそんな事』に関しては天然アイズさんの下手糞な言葉の綾やろうけどなあ。あの口振りだと、添い寝やら腕枕やはしてても可笑しくないで」

「それでも十分過剰だ。アイズはもう十六、マシロも十二になるんだぞ。いい加減、弟に対する適切な距離感という物を——」

「まあまあ。四つも年が離れていて、実年齢より遥かに容姿の幼い弟

だ。アイズからしたら、可愛くて仕方がないんだろうさ」

ガミガミ小言を漏らすハイエルフを、団長の地位に就く男が宥める。持ち前の落ち着いた声音に少し困った色を乗せながら。

「それに、あ奴は普段嫌がられない様、極力接触を避けているのだろう？ その反動もあろうて」

「だとしても、年頃の男の部屋に勝手に押し掛ける理由になるか！ アイズには私からきつく言っておく！」

フィンの説得にガレスが援護射撃を加えても、リヴェリアは納得しきれないようだった。

これ以上言葉を重ねてもアイズの命運は変わりそうにない。そう判断したフィンは、心の中で彼女に合掌しつつ話題を切り替える。

「じゃあ、お説教は教育熱心なママに任せるとして……」

「誰がママだ」

「今後のアイズについて話し合おうか」

そう提案する【勇者】に対し、ロキが率直な感想を口にする。

「今後のアイズたんって……マシロたんにバレて盛大にドン引かれる未来しか見えへんのやけど……」

「アハハハ、そうだね。僕にもその最悪の未来が見えるよ。当日は親指が疼いて眠れなさそうだ」

「笑ってる場合か……。仮にマシロに嫌われた場合、アイズがどうなるか分からん。良くも悪くも、あ奴のスキルはマシロに影響される物が多すぎる」

苦笑するフィンに、ガレスが呆れながら指摘した。

そして、その指摘は大いに正しい。

この問題があるからこそ、ロキはわざわざ首脳陣を集めて会議を開いたのだ。

別にアイズのブラコンが行き過ぎているだけなら、ママに密告して終わりである。

しかし、ファミアリアの主力の戦闘面に響きかねない問題となると、流石に話は別だった。

スキルは、本人の本質や願望を反映させたものが多い。故に、アイ

ズはマシロへの愛情から、弟に関連づくスキルを多く持っていた。
スキル名と効果は以下の通りである。

- ・親愛庇護：親愛対象に対する慈愛に応じた防御能力の高域強化。現在の選定者は、マシロ・ヴァレンシユタイン。
- ・親愛包囲：親愛対象の探知効を魔法に与える。使用した事は、親愛対象にも魔法を介して伝わる。現在の選定者は、マシロ・ヴァレンシユタイン。

- ・親愛支心：精神力の超域強化。親愛対象が存在する限り効果永続。親愛対象の消失、または親愛対象に嫌われた際は効力を発揮しない。親愛対象の死亡時の精神負荷超域増幅。現在の選定者は、マシロ・ヴァレンシユタイン。

攻撃力を高める効果はないが、防御能力は勿論、精神を安定させるスキルの存在は馬鹿に出来ない。ダンジョンの中では僅かな動揺一つが命取りになるからだ

だというのに、よりにもよって精神安定スキルには、弟に嫌われた際のデメリットが明言されてしまっている。

他のスキルは特に明言こそされてはいないが、そもそもスキルは本人の精神性が現れたものだ。

全く影響がないという事はないだろう。

何より、精神がネガティブになる事で何かマイナスなスキルを覚えてしまうかも知れない。

加えて、『あのスキル』にどのような影響を与えてしまうか……。想像も出来ないし、したくもない。

だからフィン達は頭を捻った。
どうしたら爆弾の爆発を回避できるモノかと……。

「シー、一番良いのは、危険な橋渡りは辞めて貰う事なんだけど……。アイズだって、限界だからそんな事をしているんだらうしね……。」

「頭ごなしに禁止するのは還って危険か……。実際マシロの方はどうなんじゃ？ 案外アイズが一緒に寝ておっても喜んで受け入れるな

んて事は……」

「ある訳ないだろう。幼い子供なら悪戯で済むが、アイズぐらいの歳の者が知らぬ間に同じ布団に入っているなど恐怖でしかない」

「そうかー？ ウチにはご褒美やけど——」

「黙れ」

ロキの軽口を一蹴し、リヴェリアは続ける。

「ともかく、この事実を知ればマシロは確実に引く。そして、アイズに気を遣う事もないだろう。十中八九あの娘の気を沈ませる事を言う」
「それを責める事も出来ないしね。変態行為をしているのはアイズだ」

フィンも同意を示し、その横で伸びをしながらロキが呟いた。

「あーあ、マシロさんがドシスコンやったら、こないややくしくならんのかなあ。リヴェリアママの心労は増えそうやけど」

ニイツと笑うロキは、リヴェリアの視線を躲し、更に自分の考えを口にする。

「結局アレかあ？ 夜這いなんかせんとストレス発散できる様に、程良く構わせるしかないっちゆう事かあ？」

「簡単に言うが出来るのか？ それが出来なかったから今こうなっておるんじやろう？」

ガレスの見解は最もである。

この件は元々、アイズが余りにもマシロに構うものだから、見かねてロキが介入したというのが始まりだ。

実際、当時ベツタリくつついて来る姉に、弟は鬱陶しそうな顔を見せる事が多くなっていた。

案の定、当時のアイズはその様子に気付く素振りはなく……。

だから、『あまり構いすぎると嫌われるぞ』と、マシロが本格的に思春期に突入する前に忠告したのである。

アイズは涙目になりながら訊いてきた。

『どうすれば嫌われずに済むの？』と。

その問いに対し、リヴェリアは可笑しそうな顔で答えた。

『程良く付き合えばいい。それこそ、普通の姉弟の様に』

『まあ、君の場合は敢えて冷たく接した方が丁度良いかも知れないけどね』

親切心からそんなアドバイスを送ったのはフィンだ。

『ガハハハ、それもそうじゃな。そう意識しとらんとその内ベツタリに戻りそうじゃ!』

豪快に笑うガレスに対し、誰も否定や反論をしなかった。

全くどこにもツツコミどころのない推測だったからだ。

誰も彼も、アイズが本気で弟に冷たく接せられるとは思っていないなかつたのだ。だから、それくらいの気持ちで接するのが丁度良いと。

けれど次の日から、アイズはマシロと口を利かなくなった。

全く。

一言も。

リヴェリア達は焦り、矯正しようと努力したが、すべて無駄に終わり……。

結局は『殆ど弟と会話をしない姉』に落ち着くしかなかった。

それ以外は、

『全く一切弟に興味がない姉』

『弟を溺愛し過ぎて過剰過ぎるスキンシップを繰り返す姉』

『弟を溺愛し過ぎて過剰なスキンシップを繰り返す姉』

しかなく、それが一番マシな選択肢だったからである……。

リヴェリアは当時を思い出し頭痛を感じていた。

どう口で言ってもピーキーな強弱しか付けられない幼い【剣姫】。

当時の彼女を深層の階層主クラスに難敵だと感じたのは【九魔姫】だけではない筈だ。

けれど……。

「確かに難しい。だが、やらせるしかないだろう。アイズもあの時より成長している。もっと上手く調節できる筈だ」

リヴェリアはアイズを信じて宣言する。

それは決して無謀な提案ではないと、彼女は確信していた。

勿論、フィン、ガレス、ロキも同様だ。

「そうだね。けれど、前回と同じ轍は踏みたくない。今回は予めどの

程度まで態度を軟化させるのか具体的に決めておこう」

「具体的に？」

首を傾げるリヴェリアにフィンは答える。教鞭とる教師の様に、朗々と。

「うん。今回はその場でアイズにダメ出しをしたらどう？ 『もつと優しく！』とか『それじゃあ、甘すぎる！』とか。当時は僕らもその都度の調整で矯正できると思っていただけけど、出来なかった」

「だから先んじて『理想像』を決めておくという訳か？」

「その通りだよ、ガレス。勿論、アイズが直ぐにそれを演じられるとは思えないけど、理想像を作ってそれを目指させれば、自然と普段の態度も改善するだろう？」

「確かに……目標を与えた方があの子には分かり易いかも知れないな。今回は『程良い接し方』などと抽象的な事を言いつぎた」

フィンの策に納得したらしいリヴェリアは、鋭い眼光で悪知恵の回る小人に訊いた。

「それで、その理想像というのはどんなものだ？」

彼女の問いに、考える素振りを見せるフィン。

そして、彼の明晰な頭脳は、これまでの状況を加味して、アイズを目指すべき理想の姉像を叩きだした。

『「たまには弟と買い物に出かける友達のような姉」……なんてどうだい？」

：

：

早朝にダンジョンに潜っていたマシロ・ヴァレンシユタインは、現在本拠地の自室で睡眠を取っていた。

戦果である魔石は既に換金済み。

あとは、早起きした分の睡眠時間の埋め合わせをし、午前九時くらいから街に繰り出す。

そういう予定を立てていたのだ。

だが……。

「おつはよー！ マシロたん！ 朝やでエ！ 雲一つない快晴や！
可愛いお顔みしてえや！」

ドンドンドン！ と、無遠慮なノックと主神の叫び声が、彼の安眠
を見事に妨害した。

モゾツと動き、マシロは時計を確認する。

そして、ロキの要求を無視する事にした。

けれど、弾幕の様なノックは全く収まらない。

「まつしろ〜！」

一応現在時刻は午前八時十三分。

殆どの団員達は既に起きて朝食を摂っているのだろう。だからこ
その無遠慮なノック。

耳を塞ごうと聞こえて来るその爆音に、マシロは遂に寝続ける事を
断念した。

その代わり、苛立ちに任せてドアを蹴破る。

瞬間、神のハイテンションな悲鳴が鼓膜に轟いた。

「うわぁ、危な!! 扉の前に人がいるって分かってる奴の開け方ちや
うやろ、ソレ！」

「なんの用だ、ロキ。朝っぱらから随分なご挨拶だな……」

「なんちゆう表情しとんねん！ 可愛い顔が台無しやろ、ホラホラ
笑って〜？」

「……」

左右の人差し指で頬を突き、二ツと口角を上げて見せるロキ。

そんな主神の態度を見て、マシロは鼻を鳴らして扉を閉めた。

バン！ という音が響くと同時に、扉の外で再びロキが喚き出す。

結局、「分かった分かった！ 要件言うから開けてや〜！」という懇
願を聞き入れ、朱色の主神と顔を合わせた。

すると、ロキはマシロに金子袋を一つ差し出す。

受け取り中身を見ると、かなりの金額が詰まっている様だ。少なく
とも、今日一日くらい羽目を外しても懐が淋しくなる事はない程度に
は……。

「なんだ、コレは？」

主神の意図を汲みかね、直接訪ねる。

しかし、ロキはヘラヘラとした笑みを浮かべるばかりだった。

「今日自分の誕生日やろ？　ウチからのお駄賃や。パーツと遊んで
き」

「いらん」

「まあ、そう言わずに」

「くどいぞ。金には困ってねえ」

「そりやそうや。今朝早くダンジョンに潜って稼いで来たんやもんなあ」

「……」

その言葉を聞いて、マシロは目を細めた。

そんな眷属の様子が可笑しいのか、ロキは頭をポンポン叩きながら陽気に続ける。

「わざわざ遊ぶ金稼ぎに行ってたんやろ？　今日は誕生日やから自分に
ご褒美つて訳や。全くう、可愛いトコもあるんやなあ。ウチ、キ
ンキュンしてまうわ」

頬を染めながら体をくねらせる主神に、マシロの機嫌は急降下して
いく。

ここで違うと突っぱねても意味はない。神々は下界の民の嘘を見
抜く。

「成程……わざわざ俺を笑い者にしに来たのか。ご苦労な野郎だ」

誕生日に遊ぶ金を稼ぐ。

それは物凄く子供っぽい行為だと、まるでそう言われている様で、
マシロは酷く気分を害した。

実際彼自身もその自覚があった為、第三者に指摘されると余計に羞
恥心が沸いて来る。

けれど、ロキは眷属に睨みつけられたまま「ちやうちやう」と両手
を振った。

「そんなイジワルしに来た訳とちやうわ。ウチは純粹にマシロに楽し
んで来て貰おう思ってなあ。なんだって、可愛い子供やし」

そして、数回彼の頭を撫で回し髪をくちやくちやにした所で、「ほななく」と片手を上げて去って行く。

その間、マシロはロキに噛みつかなかった。

いや、噛みつけなかった。

『超越存在』とは良く言ったもので、ロキが声音を正し、真摯な手付きで頭を撫でただけで、マシロに伝わってしまったのだ。

彼女の行動に揶揄いや嘲りが含まれていない事が。

ただ純粹に、自分を思つての行動だと言う事が……。

マシロは廊下で一人立ち尽くし、自分の手に残った金子袋を一瞥する。

そして、見事に此方の心理を見透かし、自分の心理は見透かさせて帰って行った主神に対し、微妙な表情で悪態をつくのだった。

「くそっ……、相変わらず喰えない女神だ……」

：

同時刻。

アイズ・ヴァレンシユタインはリヴェリアに呼び出されていた。

【九魔姫】の私室にて、正座させられている【剣姫】。

彼女は何故自分が説教を受けるのか、その心当たりに見当を付けられずにいた。

「あの……リヴェリア……?」

その問いかけが合図だったように、麗人のエルフは口を開く。

「ロキから聞いた。アイズ、夜な夜なマシロの部屋に侵入しているぞうだな……?」

「……」

アイズは全てを察した。

そうだ、今朝ロキへの捨て台詞として、その秘密を暴露していた。自身の迂闊さを呪いつつ、アイズは盛大に冷や汗をかく。

彼女とて、流石に非常識な行動である自覚はあったのだ。

「ち、違うよ?! たまになの……週に一回くらい……」

「想像より多いわ、馬鹿者！」

「ご、ゴメンなさい……」

シユンとする【劍姫】の姿に、リヴェリアは咳払いをしつつ尋ねる。
「因みに、ロキには『あんな事やそんな事をしている』と言っていた様
だが……具体的に何をしていた」

「あ、頭を撫でたり……ギューツてしたり、ほっぺスリスリしたり
……」

「それだけか……?」

「う、うん」

「本当に誓ってか?」

「……? 本当……だよ?」

何を確認しようとしているのか分からない。

そういう反応を見せるアイズに、【九魔姫】は安堵する。

分かってはいた事だが、やはり一線を越えるような行為はしていない
様だ。まあ、ほっぺスリスリは普通にアウトゾーンな気もするが
……。

「なら良い。では、アイズ。何故そんな事をしていた?」

「そ、それは……。私も良く分からなくて……。ただ、たまに胸の奥が
キューッとするの。そうなる、どうしてもあの子に会いたくなって
……。ギューッてしたくなって……。でも、起きてる時にしたら嫌がられ
るから……」

どうやら、フィンの読みは正しかったらしい。普段触れ合えないが
故に、限界が来ている。

「それは、『思春期の弟に構いすぎるな』という私達の忠告を守ってい
るという事だな?」

「うん……」

「つまり、お前が全力でマシロに構えば嫌われると、他でもないお前自
身がそう感じているという解釈で構わないか?」

その問いに、アイズは更に肩を落として頷いた。ともすれば、泣き
出してしまうような表情にも見える。

「テイオネやテイオナ達を見ても、他のきょうだいの冒険者たちを見

てても、私のはちよつと行き過ぎって思う……」

「ふむ。きちんと自分を客観視出来ている様だな。それならば、思ったほど心配せずとも良さそうだ」

「え？」

うんうんと嬉しそうに頷くリヴェリアに、アイズは呆けた顔を晒す。

そんな【剣姫】に【九魔姫】は訊いた。

「では、お前の夜這い擬きがマシロに知られば、どうなるかの想像もつくな？」

「……本気で気持ち悪がられて、思春期抜けてももう喋ってくれなくなる……と思う」

答えるアイズは本当に苦しそうだった。

「そうだな。だから、もうやめろ。週一で忍び込んで、まだバレていないのは奇跡だぞ」

「あの子、寝たら本当に起きないんだよ？ 赤ちゃんみたいにグツスリで、凄く可愛い……」

ポツと頬を赤く染めるアイズに、やはりコイツはもう駄目かも知れないと思いつつも、リヴェリアはフィン達と決めた決定事項を伝える。

「とにかく、もうやめろ。ただ、それではいざれお前がパンクするだろう事も分かっている。そこで、お前のマシロへの接触度合いを少し解禁する」

まあ、そもそも私達が禁止していた訳でもないのだが……。

そうボヤキつつ、リヴェリアはピンと、綺麗な細指を一本立てた。

「アイズ。お前に一つ使命を課す。今日が何の日かは分かるな……？」

「シロの誕生日。十二歳になったんだよっ？」

嬉しそうに身を乗り出すアイズを、リヴェリアは手で制す。

「そうだな……。そこでだ、今日マシロは街に出かけるつもりでいる。お前も一緒についていけ」

「……え？ でも、嫌がらない？」

「嫌がるだろうが、そこは私達もサポートする。二人で出かけてガス抜きをしろ。そして、もう夜な夜な部屋に侵入などしなくても良い程度に、話せる関係になっておけ」

その言葉にアイズは目を輝かせたが、直ぐに曇る。

「で、でも、一緒にお出かけなんかしたら、私一瞬で嫌われそうな気がする……。いつも通りにしても、『なんでついて来たんだ』ってなるし、仲を深めようとしたらやり過ぎちゃうと思うから……」

「……本当に、思ったより自己分析が出来ているじゃないか、アイズ」
「むう……」

感心された事に頬を膨らませるアイズ。

そんな彼女に対し、ママはクスリと笑いながら「大丈夫だ」と言い切った。

何が大丈夫なの？ と、視線で告げる【剣姫】に【九魔姫】はとある紙を見せる。

そこには『アイズ理想の姉化計画』と書かれており、細かい字が用紙一杯に綴られていた。

「これは……?」

「フィンからの指令だ。お前には今後、『たまには弟と買い物に出かける友達の様な姉』を目指して貰う。今回はその足掛かりだ……」

「え?」

「他でもない、【勇者】直々に立案した作戦だ。不安に思う事などないだろう?」

「……!」

それを聞いたアイズは、目を輝かせて作戦を聞く体勢に入っていた。

第二話

本来の予定時刻から遅れること八分……。

身支度を終えたマシロ・ヴァレンシユタインは自室の扉を開けた。

格好はラフなもので、防具の類は付けていない。

冒険者の性故かベルトに短刀は刺しているがその程度だ。この軽装を見ただけでも、彼の目的地がダンジョンではない事が推測できる。

マシロは軽やかな足取りで廊下を突き進み、本拠地の玄関を目指した。

しかし階段を下り、いざ玄関ホールに踏み入ったその瞬間、盛大に顔を顰める事になる。

外へと繋がる扉。

その一枚板の前に、複数の団員が立っていたのだ。

まるで、自分を待ち伏せするかのよう……。

実際そんな意図はなかったのかも知れないが、マシロにはその様に感じられた。

唯一、彼の外出予定を知る主神が、一団の中に含まれていたからだ。

「おお、マシロ。これからかあ？」

ロキの快活な声がホールに響く。

いち早くこちらに気付き片手をブンブン振り回す神の他には、副団

長のリヴェリア・リヨス・アールヴと、団長のフィン・ディムナ……

そして意外な事に、【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの姿もあった。

普段自分とコンタクトを取らない実姉の存在に、本当に彼らは別の用件でこの場に居合わせただけなのかも知れないと思ひ直す。

すると、団長の落ち着いた声音が耳朶を叩いた。

「おはよう、マシロ。遊びに行くそうだね」

「……ああ」

『遊びに行く』。

その表現を若干不服に思いつつも、それ以外に妥当な表現も見つからないので素直に肯定しておく。

「今日はお前の誕生日だったか……。こんな日ぐらい羽目を外して来ると良い」

「……」

マシロはリヴェリアに胡乱な瞳を向けた。

その表情だけで、ママは彼の言いたい事を察した様だ。形の良い唇から朗々と心理を言い当てられる。

『……そんな事を言う為だけにお前達はここに来たのか?』とでも言いたげだな。いや、『流石に用事のついでか』とも思っている様だが……」

「怖えよ。エスパーかテメエは……」

ほぼほぼ間違いない言い当てて来たハイエルフに、マシロは堪らず唸り声を上げる。そして、彼女のセリフは次の様に続いた。

「残念ながら後者の予想は外れた。我々の用はお前だよ、マシロ」

「……土産なら買わねえぞ」

「馬鹿者。年長者の我々が最年少のお前に物をせびる訳がないだろう」

「説得力がねえな。ロキを省いて出直したらどうだ?」

「どういう意味や、マシロこら!」

あんまりな言い草に抗議の声を上げるロキだが、眷属達は一様にソレを無視してやり取りを続けた。

「ハハハ、特別な理由なんてなくても見送りぐらいするさ。家族だからね。ま、僕らも忙しい身だから毎回は無理だけど……」

フィンの発言にマシロは沈黙を返す。

そんな、ともすれば無礼だと受け取られかねない彼の態度に一切の嫌悪感を示すことなく、【勇者】は柔らかな笑みを浮かべ続ける。

圧倒的な包容力で、反抗的な態度を取る自分を包み込むファミリアの長に、マシロはバツが悪くなり目を逸らした。

瞬間、クスリと笑うフィンの声が鼓膜を撫で、やはり彼が自分より一枚も二枚も、三枚も上手である事を思い知らされる。

「そういえば、アイズも今から出掛けるんだったね」

「……うん、うん」

「ほう、どこへ行くかは決めているのか？」

「ううん」

リヴェリアの問いにアイズは首を横に振る。

今度はロキがマシロに訊いてきた。

「自分はどこに行くとか決めとんの？」

「……いや」

特には決めていない。

適当にブラついてその時々気分分で店に入ろうと思っていた。

偽る理由もないので素直に答えたマシロだが、同時に嫌な予感も覚え始める。

そして、それは的中した。

リヴェリアが頓狂な提案を口にしたのだ。

「なら、一緒に行つて来たらどうだ？ アイズ、マシロ」

「……行かない」

即答する。

が、マシロの返事など聞こえていなかったかのように、ロキは「お
お！ ええやん！」と盛り上がった。

フィンも頷いて賛同してくる。

「それは名案だ。どうだいマシロ？ 荷物持ちにでも一つ」

「何が名案だ。ふざけてんのかテメエら？ まさか、こんな事をする
為に待ち伏せしてた訳じゃねえだろうな……？」

「まさか。言っただろう？ 僕らは忙しい身なんだ」

「……ッ」

飄々と躲す小人族の勇者。

彼に抗議した所で無意味と悟ったマシロは、矛先を他二人に向けた。
た。

「大体、俺達は仲が悪いんだ。知ってんだろ？ 休日と一緒に出掛け
るような仲じゃねえ」

「仲の悪い他人なら確かにそうだが、お前等は姉弟だろう？ 関係値
が低くとも共にいる理由には足りると思うが？」

「……ッ！ そもそも、最初に口を利かなくなったのはソイツだ！

一緒に出掛けたくないのはソイツも同じだろう！」

リヴェリアにも言い負かされたマシロは切り口を変える。

アイズだって俺と一緒に不服だろう・と。

しかし、彼等は焦る素振り一つ見せず、【剣姫】の肩に手を置いた主神が余裕綽々とした声音を響かせた。

「ほうほう。じゃあ、アイズが嫌じゃなければ構わんちゆう事やなあ？ いや、自分の事だけじゃなく相手の事まで考えとるなんて、ホンマ優しい子やでマシロたん。ウチ嬉しい」

「……オイ、いつまでおちよくるつもりだ。いい加減不愉快だぞ」

一段階トーンを下げるマシロに、フィンは苦笑しながら弁明する。

「ゴメンゴメン。そんなつもりはなかったけど、気に障ったなら謝るよ」

「どちらにせよ、アイズの許可を取れという事だな？ どうだ、アイズ。マシロと一緒に出掛ける気はないか？」

そう姉に話を振るリヴェリアを、マシロはギョツとしながら見上げた。

アイズが首を縦に振る訳がない。

誰が好き好んで嫌いな相手と休日を通り越したいと言うのだ。

どういう意図があつて、ロキ達がこんな計画を立てたのかは分からないが、とにかくこれで今回の話は御破算だ。

流星に当事者二人に断られては強行突破も出来まい。

マシロはその様に考えて胸を撫でおろす。

ただ一つ、気になる事があるとすれば、それは【勇者】の存在だ。あの狡猾な小人がいて、こんな杜撰な展開にするだろうか……？

そんな事を思っていると、次の瞬間、マシロの耳に予想だにしない一言が飛びこんで来た。

「別に良いよ……。一緒に行つても」

「……………」

余りの衝撃に咄嗟に、マシロは声を出す事が出来なかった。

アイズに視線を向けるが、その鉄仮面からは何の表情も意図も読み取れない。

そして、こちらの動揺などお構いなしと言わんばかりに話が進む。「そうか、なら早速出かけて来ると良い。仲良くするんだぞ、お前達」まるで最初から答えが分かっていたかのような手際の良さで接近し、マシロをグイグイ押し出していくリヴェリア。

扉は既に開いており、外に放り出された瞬間、ドアノブを持って笑顔を作っているフィンの姿が目に入った。

「……ッー」

憎たらしい程の連係プレーに自然と顔が歪む。

扉は既に締まり始めており、ある意味で締め出しを喰らっている様な感覚だ。

そして、ヒョイと頭を出したロキの「いってらー」という声を最後に、黄昏の館の扉は完璧に閉ざされた。

ここまで光景を、マシロはスローモーションの様に見て尻餅を付く。

そして、数秒遅れでスツと綺麗な細指が差し出された。

アイズ・ヴァレンシユタインが中腰になりながら無表情で手を寄越して来ている。

だが、その手をマシロが取る事はなかった。

助け起こされる形になるのが癪だったからだ。

自力で起き上り、ズボンに付いた砂を払いのけ、そして、訊く。

「どういう風の吹きまわした……？」

手を貸そうとしてくれた事に対してではない。

何故、自分と出掛ける事を了承したのか・と言う意味だ。

「……別に」

しかし、案の定彼女の返答は素っ気ないモノだった。

返事ではあるが答えには成っていない。

まるで、『必要以上のコミュニケーションを取るつもりはない』と暗に告げられているかの様だった。

そしてその予想を肯定するかの様に、アイズは無言で歩き出す。

「……」

こちらを一切顧みないその態度に、このまま姿を眩ませても問題な

いのではないと思った。

仮に、気付かれたとしても、わざわざ追ってきはないだろうとも……。

だが結局、逡巡の末マシロは彼女の後を追いかける事にした。

何故そうしようと思ったのかは、自分でもよく分からなかったが……。

：

暫く歩くとメインストリートに出た。

ここまで来ると流石に人で賑わっており、至る所から喧騒が聞こえて来る。

子供の笑い声や商人の接客、神々の下劣な会話なども街の活気を付けるのに一役買っている。

マシロは本来そう言った物を煩わしく感じる質だが、今回ばかりは有難く思った。

原因は隣を歩く姉にある。

今も無表情で歩き続けている姉、アイズ・ヴァレンシュタイン。

彼女は自ら同行の意思を示してここにいるにも関わらず、これまでの道中一切口を開かなかったのだ。

マシロとて普段の姉と自分の関係性を鑑みて、会話が弾むとは思っていないが、流石に無言を貫かれては居心地が悪い。

大体、何か用件があるから一緒に歩いているのではないのか……？

こんな事なら、『一緒に出掛ける』等と言う縛りなんて設けず、別々に出発すれば良かったではないか。

それなら、沈黙に耳を傷める事もなかったというのに……。

だからだ。

だから、今だけはこのくらい喧騒が丁度良い。

気を抜くと、一人で来ていると錯覚してしまいそうになるから……。

マシロは右隣にいる筈の姉を見上げる。

向こうには悟られない様最小の動きで。

「……？」

けれど、マシロの視線がアイズを捉える事はなかった。

先程まで直ぐ傍にいた筈の姉は、忽然と姿を消している。

辺りを見渡すが、その特徴的な金髪はどこにも見付けられなかった。

「……そう…か」

マシロは何かを察した様に呟いた。

そこそこの人混みだ。

単純に逸れてしまった可能性もあるだろう。

だが、マシロの脳裏にその可能性が浮かぶことはなかった。

それよりも、もつと現実的な予測が思い浮かんでしまったからだ。

恐らく、自分の用事を済ませに行つたのだろう。

本拠地では、ロキヤリヴェリアの手前気を使った・という事だ。

彼女らを立てる為にあの場では「一緒に行く」と宣言し、メインストリートに着くまでは足並みを合わせていた。

別にマシロに用があつた訳でも、気まぐれが働いた訳でもない。

元々、ここからは別行動を取るつもりだったのだろう。

思い至つてしまえば何てことない。

至極当然の行動である。

そうと分かればこの場に留まる理由はない。

せつかく一人になったのだ。自由に気の向くままに今日と言う日を満喫するでしょう。

そう気持ちを切り替えて、マシロはオラリオの街を歩き始めた。

姉が隣にいると言う不安要素がなくなり、つつかかりが消えた筈の胸に一抹の靄を感じながら。

その影響だろうか……。

心なしか、少し足が重くなった様な気がする。

まるで、この場から離れたたかないと、足が駄々をこねているかの

様に。

何故こんな事になっているのかは分からなかったが、次の瞬間——マシロは、自身の身体が後ろに引つ張られる感覚を味わう。それは比喻でも何でもなく……強制的に足を止めさせられた彼は、自分の左肩に白い手が乗っているのを見た。

その雪の様に綺麗な手の主は、姿を消したはずの姉、アイズ・ヴァレンシユタインで……。

アイズはいつも通り無感情ながら、若干の焦りを感じさせる声音を発する。

「どこ行くの？ 勝手に……」

『勝手に……』の部分にマシロはムツとした。

「こつちの台詞だ。勝手にいなくなつたのはお前だろうが」

すると、アイズは一瞬目を丸くした。

そして「あ」と、小さく息を漏らしたかと思うと、おもむろに小さな紙袋を見せてくる。

「違う……。コレを買いに行つてたの」

「なんだそれ」

「ジャガ丸くん」

「……」

姉の言葉通り、紙袋からは『ジャガ丸くん』なるジャンクフードの香ばしい香りが漂っていた。美味しそうな匂いである。

朝食を摂らずに出てきたマシロの口の中に、大量の唾液が溢れた。

気を抜けば腹の虫も鳴ってしまいそうだった。

「そうか。だが、行くなら行くで——」

一言断つてから行け。

そう、注意しようとしたマシロだったが……。

「……ん」

アイズにジャガ丸くんを差し出された事によって、中断させられてしまう。

反射的に受け取ったソレをマシロは突き返そうとするが、既にジャガ丸くんに夢中な姉は取り合ってくれない。

けれど、視線は感じたらしく、何を思ったのか見当違いな質問をしてきた。

「……小豆クリーム味が良かった？」

「……いや、プレーンで良いが。てか、なんだその胃もたれしそうな組み合わせは……」

「おいしいよ？」

「どうでも良い。そんな事より、俺は買ってくれなんて頼んだ覚えはねえぞ」

そもそも、買いに行くと言われてもない訳だが……。

しかし、アイズはキョトンと小首を傾げるばかりだった。

「嫌いだった？」

「嫌いじゃ……ない」

「そう……」

「……」

確かにマシロはジャガ丸くんは嫌いではない。寧ろ好物の部類だけれど、施しを受けるのは癪だった。

そういうプライドが邪魔をして口を付けられない。

しかし……

グウウウウウウ……。

そんな物など下らないと言わんばかりに、腹の虫が産声を上げた。

「……」

アイズの視線がマシロの腹に向く。

俯いた状態でもソレが分かり、彼は自分の顔が、カアアアつと熱くなるのを感じた。

チラツと上目で姉の反応を伺うも、特に何か言ってくる様子はない。

全くの無言……。

突っ込まれるのも嫌だが、無反応なのもそれはそれで居た堪れなかった。

けれど、やはり何かを言われる方が羞恥心で憤死する気もして……。

故に、マシロはジャガ丸にかぶり付いた。

恥ずかしさを喰らい尽くすかの様に、素直に食べたのだから文句はないだろうと、だから何も言うなど、暗にそう伝える為に……。

その念がこの天然姉に伝わったかどうかは分からないが、ともかく彼女の意識を腹の音から逸らす事には成功したようだった。

「わあ、凄いね」

感嘆すら含まれたアイズの感想はある意味で当然のものだったのかも知れない。

何故なら、マシロはあの一瞬でもうジャガ丸くんを平らげてしまったのだから。

きっかけこそ羞恥心に後押しされた形ではあったが、いざ食してみると口一杯に広がる優しい香りと、サクサクホクホクの食感に完全敗北。

そもそも空腹状態であった事も手伝って、先んじて半分ほど食べ終えていたアイズを簡単に抜き去ってしまったのだ。

「おいしかった？」

アイズは首を傾げて訊いて来る。

自分の好物に好反応を示された事が余程嬉しかったのか、些か饒舌になっっている様だ。

相変わらず表情筋の殆どが死んでいるが、此方の顔を覗き込みながらそう訊いて来るさまは、さながら『おやつを食べてはしゃいだ子供を微笑ましく見詰めるお姉さん』の様だった。

実際の所はしゃいでいた訳ではないのだが、そう勘違いされても仕方ない行動を取ってしまったのは事実である。

だから、マシロは大声で強く反発出来ず、されど素直に旨かったとも伝えられず……。

「……うるさい。黙れ……」

そう、悪態をつく事しか出来なかった。

「そっか」

けれど、アイズは反抗的な態度さえも、どこか穏やかな表情で受け止める。

それが酷く居た堪れなくて、空気を換える為にマシロは話題を変えた。

「喉渴いた……」

芋の塊を一気食いしたのだから当然だ。事実、喉の渴きを感じてマシロはそう呟く。

「なんか買ってくる」

「ん、私も行く」

残ったジャガ丸くんを胃袋に収めながら、アイズは当然の様に言ってきた。

まるで、『姉弟なのだから一緒に行動するのが普通』だと言わんばかりの自然さである。

自分達は、全く普通の姉弟ではない筈なのに……。

会話なんて何年もしてなかった筈なのに……。

だと言うのに、今日のコイツは何なんだ。と、マシロは困惑した。

確かに言葉は素っ気ない。

会話もお互いの質問への返答ばかりだし、そもそも無言でいる時間の方が多だろう。

だが、それでもこの会話量は、既に異常の域なのだ。

ここ数年の平均の会話時間を大きく更新しているに違いない。

その上でジャガ丸くんと一緒に食るといふイベントも熟している。なんと、これからは飲み物を買に行くそうだ。

こんな事になるなど、一体誰が想像した？ 少なくとも、昨日の自分

分は思いもしなかった。

だと言うのに、一体どうして……。

……。
悉く疑問は尽きなかったが、当然マシロに答えを知る術はなく

だからこうして、当惑しつつも姉と共に歩いている。

人混みを利用すれば振り切る事も出来た筈なのに、何故かマシロはそうしたいとは思わなかった。

「何飲むの？」

「……お茶」

「じゃあ、私もソレで……」

飲み物を中心に売っている露天が見え、徐に話し始めるヴァレンシユタイン姉弟。

「金は俺が出す。それでチャラだ」

「……？」

「分かれよ。さっきのジャガ丸くんの分だ」

「……別に良いのに」

まるで普通の姉弟の様に、姉とやり取りを繰り返す。

マシロはその事に妙な感覚を覚えながら、とある事に気が付いた。ついさつき、アイスが無言でジャガ丸くんを買いに行った時、胸に感じた謎の靄。それが、いつの間にか晴れていたのだ。

結局何だったのか分からない程の小さなモヤモヤだったが、一体いつから感じなくなっていたのだろうか……？ 思い返してみれば、かなり前……そう、それこそアイスが戻ってきた時にはもう気にならなくなっていた気もする……。

「……」

マシロはジャガ丸くんを食べたからだ結論付けた。

恐らくあの靄は空腹感の一種で、小腹を満たした事で解消されたのだろう。

どうやら自分は思った以上に食い意地が張っていて、あの時は想像以上に空腹状態だったらしい。

……そう思う事にして、アイズの弟は早々にこの思考を打ち切った。

「……飲み物、二個も買ったの？」

「……悪いかよ」

まるで、これ以上考えるのは危険だと、本能が察したかのよう。

第三話

内心、アイズ・ヴァレンシユタインは舞い上がっていた。

今の所作戦は上手く行っている。文字頭に『とても』を付けても良いくらいだ。

数値で表すなら90〜100点。

少なくとも、アイズ自身はこれまでの自分の振る舞いをそう評価している。

過大評価と思われるかも知れないが、そうじゃない。

事実、隣を歩く弟、マシロ・ヴァレンシユタインは未だここにいる。

アイズはここ数年殆ど彼と口を利いていないが、それでも血の繋がった姉弟だ。彼の性格ぐらい理解している。

マシロは、一見捻くれて見えるが、その実割と単純な少年だ。

好きとは素直に言えないが、嫌いな事はハッキリと口に出す。

だから、もしアイズと歩くこの空気が気に食わなければ、彼はとつくに別行動をとっていただろう。つまり、彼と一緒に居れている事こそが、弟の機嫌を損ねていない何よりの証拠。ひいては、上手くやれている証明となる。

アイズは心の中でガッツポーズをし、自身の胸くらいにある銀色の頭を見下ろした。

姉弟なのに、今まで触れられなかったサラサラの髪の毛が、手を伸ばせば届く位置にある。

直ぐ傍を見下ろすだけで、そのちまつとした全身を眺めることが出来る。

頬が緩むのを感じた。

いけないと、アイズは表情を締め直す。

マシロは自分の事を冷めた姉だと思っているのだ。

そんな相手が急にニヤケ顔で見詰めてくるとなれば、彼はきつと警戒心を高めてしまうだろう。

不用意な事はするべきではない。

行き過ぎるくらいなら、現状維持で全く問題ない。

今回のこのデートは只の序章に過ぎないのだから……。
アイズは、出発前にリヴェリアに言われた事を思い出す。

：
：
：

数時間前・黄昏の館

リヴェリアの私室で自主的に正座の体勢となったアイズ・ヴァレン
シユタインは、とある計画の説明を受けていた。

『アイズ程良い姉化計画』の説明だ。

リヴェリアの流麗な声がフィンからの指令書の文字列を音にして
いく。

「まず、アイズ。この計画は一朝一夕のものでは無い。それなりの期
間を要する長期プランになるだろう。今回の作戦で一気に距離が縮
まる事はないだろうが、逆に多少の失敗は気にしなくて良い。次があ
る」

そんな前振りをされる。

「我々は、これ以上マシロと距離を取り続けければ、お前が爆発すると判
断した。故にこの計画がスタートした訳だが……」

「……爆発」

「物理的な話ではないぞ。もっと内面的な話だ」

自分の身体が爆発する姿を想像し、身振り手振りでそのさまを表現
したアイズだが、その瞬間、頭を【九魔姫】に叩かれる。

「我慢の限界……それに長年触れ合えなかった反動で、お前はマシロ
の事を猫のように可愛がるだろう。そして、構いすぎて嫌われるのは
火を見るより明らかだ」

「うん……」

その指摘にアイズは頷く事しか出来なかった。

容易に想像できる光景である。

その時がくれば、アイズは比喻抜きでマシロを離さないだろう。抱
き寄せているのが基本形態で寝食は勿論、入浴の時だってピッタリ
くっ付いている自信がある。

「やっぱり、そうだよね……。シロもお姉ちゃんと一緒に風呂とか
入りたくないよね……」

「そんな事、例えマシロが受け入れても私が許さんぞ……」

リヴェリアの声が一層重くなった。

やはり、自分のこの感情は過剰で可笑しくて、まともなぶつけられ嫌われてしまう悍ましいモノなのだ、頭を抑える副団長の姿を見て再認識する。

しかし、気を落とすアイズの耳朶に、明るさを取り戻した【九魔姫】の声が届いた。

「まあ、年頃の男子などそんなものだ。仮にテイオナやレフィーヤ辺りに弟がいても同じだろう。何もお前だからという訳ではない」

「……そう……かな。そうだと良いけど……」

リヴェリアの言葉に嘘があるとは思えないが、弟の事となるとアイズはどうしても臆病になってしまう。

何より、テイオナなら過剰スキンシップをとっても上手くやりそうな気がするし、レフィーヤ程女の子らしい女の子なら、自分とは違って逆に喜ばれるのではないだろうか？

そんな自虐的な思考に陥っていると、渦の中に声という名の手が差し伸べられた。

無論、リヴェリアの物だ。

「自信がないなら尚更、この『良い姉化計画』で理想の姉に化けてみる」

「……！ うん。私、頑張るよ」

アイズはリヴェリアの手を握る。

漸く前向きな発言が聞けたと、ママは本格的な計画の手順を話始めた。

「まず、善は急げ……という訳ではないが、丁度今日マシロに外出予定がある。アイズ、お前もそれに付いて行け」

瞬間、とある単語が頭をよぎり……ソワソワした。

「つまり、『でーと』？」

「……そんな所だが、奴の前ではそんな表現はするなよ」

ロキの様な発言をするアイズに、リヴェリアは釘をさす。

「たまたまお前も街に繰り出す予定があったという事にして、私達がマシロと引き合わせる。十中八九そこまでは上手くいくだろう」

ママの頼もしい言葉に目を輝かせながら、アイズは続く説明を待つ。

「さて、では実際街に着いた後だが、基本的にはいつも通りで良い。つまり、『弟に興味がない姉』をマシロの隣りでやるんだ」

「え、そんなの酷い」

アイズは反射的にそんな事を言っていた。

そして、それは確かに常識的な意見なのだが、リヴェリアに次のように突っ込まれてしまう。

「マシロは普段、お前にそれをやられているんだぞ？ 寧ろ隣にいる分、酷い酷くないの観点で言えば手温いとすら言える」

「……あ」

アイズは絶句した。

その通りだと思ってしまったからだ。

確かに普段の弟にする態度を考えれば、このくらいどうという事はない。恐らくマシロはなんのショックも受けないだろう。

改めて自分の普段の態度の酷さを痛感し、アイズは心を痛めた。

そんな彼女に対し、リヴェリアは一切フォローを入れるつもりはない様で……。

「アイズ。お前が何年もマシロと口を利いていないのは、お前があの子を避けているからだ」

グサツと突き刺さる。

アイズの顔から血の気がサーツと引いていった。彼女の中で、自分から避けたという負い目は相当な物になっているらしい。

けれど、リヴェリアは構わず、更に【剣姫】が聞きたくないであろう事実を突きつけ続けた。

「幾ら関係が冷め切っていようが、身内ならば最低限の会話はある」
グサ。

「だが現状、お前達は物理的に話せる距離にいない」
グサグサ。

「接触しなければ会話が出来ないのは道理だろうか？」
「うん……」

「逆に言えば、隣りに居させれば嫌でも話すんだ。二人きりで無言は気まずいからな。そして、その状態でいつも通りに振舞えば、まあ……『一般的な姉弟よりは冷めている関係』ぐらいには落ち着くだろう」

そこまで聞いて、アイズはこれまでの説明を咀嚼した。そして、微妙な表情で顔を上げる。

「リヴェリア……。言いたい事はわかったけど、その……」
「なんだ？」

アイズは口籠りながらも、正直な自分の意見を彼女に伝えた。

「多分私、いつも以上に上手くしゃべれないと思う……。特に、今回はシロが隣にいるから……。緊張しちやうって……。変な事言っちゃうかも」

瞬間、リヴェリアが大きな溜息を吐いた。

その行動に、反射的に頬を膨らませてしまうアイズだが、不満の言葉までは吐き出せない。

何故なら、彼女は当たり前前の反応をしているだけだから……。

「弟といえるのに緊張するなど、世界中を探してもお前だけで、アイズ」

耳が痛い。

「が、フィンはそんな事すらもお見通しだ」
「え？」

パツと顔を上げると、リヴェリアは不敵に笑っていた。どこことなく、後ろに【勇者】の影が見える……。気がする。

「メインストリートに着いたら何よりも先ずジャガ丸くんを買いに行け。お前とマシロの二人分だ」

「ジャガ丸くんを？」

アイズは訳が分からず訊き返す。

フィンの策と言うのなら意味のある行動なのだろうが、彼女の頭では彼の考えを察する事は出来なかった。

「ジャガ丸くんはお前の好物だろう。食べれば少しは落ち着くし、饒舌にもなる筈だ。変な事を口走っても『ジャガ丸くんを食べてテンションが上がっているから』とごまかす事も出来る」

ここで一呼吸置き、リヴェリアは更なる言葉を連ねた。

「何より、味の感想を言い合うなど、幾らでも会話のキツカケを作れるだろう」

「な、なるほど……！」

アイズにとつてその考え方は正に青天の霹靂だった。

やはりフィンとジャガ丸くんは凄いと、感動に打ち震える。

「そして、ジャガ丸くんはマシロ自身も好物。つまり——」

「シロの気も緩む……？」

リヴェリアが「フツ」と笑った。

「察しが良いな。その通りだ。そもそも誕生日に出掛けている時点で、奴も珍しく舞い上がっている。この期を逃す手はない」

「舞い上がってるんだ……可愛い……」

小躍りする弟の姿を想像しニヘラと微笑むアイズ。

そんなブラコンを拗らせすぎている姉を無視し、ママは注意事項を付け足した。

「そうだ。マシロの分だが、甘い味はやめておけよ。奴は甘い物も好きだが、好んで食べない方が格好が良いと思っている節がある」

「……？ どうして？」

「年頃だからだ。可愛いとでも思っておけ」

「分かった。簡単だね」

「……とにかく、ここで『今だけは普通の姉弟の様に接していい』という空気を作れ。ソレが出来れば後が大分楽になる」

「う、うん」

「では、ここまで上手くいったという前提で話を進めるぞ。まず、基本的にはマシロに付いて行け。居心地の良い空気になっていれば、奴も自分の行きたい場所に足を運ぶだろう。」

逆にいつまでたつてもそういう素振りを見せなければ、どこへ行くつもりだったのか此方から聞いてしまえ」

「それで、答えてくれなかったら……？」

「いつそお前の行きたい場所へ連れ回すのも手だ。まあ、余りにも女の子らしい場所は避けるべきだがな」

「えっと、何か買ってあげた方が良い？」

別に物で釣って好感度を上げようとかではなく、誕生日だからと出た純粋な問いだ。対するリヴェリアの返答はこうだった。

「それは実際の流れによりけりだ。ただ、あまり高額な物だと奴は嫌がる。姉貴風を吹かせ、無理をするのは逆効果だと覚えておけ」

「なるほど……」

「そうだな、これまでのお前達の関係性や奴自身の性格も考慮すると、『食事を奢る程度』が良いだろう。それが終われば自然とお開きにも出来る。これ以上はボロが出そうだと感じた時に切り出すのも手だ」

「ふむふむ」

高価なプレゼントは駄目で食事を奢る程度が適切。

会話は必要だが、接し方はいつも通りで問題ない。一緒にいれば嫌でも会話は生まれる。ジャガ丸くんを買ってそれをより円滑にする。

あとは、そのまま弟と一緒に行動すればいい。

今回で一気に仲良くなる算段の作戦ではない。今回はあくまでも足掛かり。

焦る必要はない。失敗も大きなものでなければ次で取り返せる。

リヴェリアから告げられた内容は大体こんなモノだろう。

改めて見ると、そこまで難しい事は要求されていない様に思える。

なんとたつて基本的に弟の近くで『冷たい姉』を演じれば良いだけなのだから。シチュエーションが異なるだけで、殆どいつも通りである。

そう考えると、アイズの心は大分楽になった。

そんな思考を察したのか、途端にリヴェリアの眼光が鋭く光る。

「では最後に、禁止事項についても話しておこう」

「き、禁止事項……？」

余りにも不穏な文字面に、アイズは思わずゴクリと唾を飲んだ。リヴェリアの真剣な面持ちも彼女に冷や汗をかかせる要因となっている。

ハイエルフは、その面持ちを保ったまま重い口を開いた。

「そうだ。絶対に侵してはならない禁止事項だ」

「それは――」

:

アイズはリヴェリアに言われた事を思い出しながら、これまでの行動を振り返っていた。

現状、減点だと思う部分は、無言でジャガ丸くんを買いに行ってしまった所のみ。

それだって、ジャガ丸くんの美味しさでうやむやになっているだろう。多分。

このまま行けば問題ない。

飲み物で喉を潤し終えたアイズは、マシロが飲み切るのを待って仕掛けた。

「……シロは、どこか行きたい所ある？」

その問いに対し、マシロはノソリと頭を持ち上げた。

銀の視線とがち合う。

「そういうお前も、何か用事があつたんじやないのか？ 別に俺に気を遣う事はねえんだぞ」

「……」

そうだ。

弟のその言葉に姉はハツとした。

アイズはそもそも出掛ける用事があつたという体を通してきているのだ。

それはつまり、マシロに付き合うのとは別に、何か個人的な目的が存在しているという事……。

この弟はそれを気にしているのだ。自分の事など気にせず、其方に行けと。

なんて優しい子なんだろう。

アイズは姉馬鹿全開の思考を張り巡らせた。

が、もう一方で冷静な彼女も思考を回す。

ここで、『特に用事は無い』とは言う訳にはいかない。そう言っしまえばそもそも前提条件が崩れてしまう。

「ぶ、武器の整備をしようと思っただけだから、後で良い……」

アイズ的には不自然ではない理由をでっち上げたつもりだったが、マシロの顔には納得とは程遠い表情が浮かんでいた。

「なんだ、遠征直後にしてなかったのか？」

「！」

冷や汗が流れるのを、アイズは必死に堪える。

確かに彼の指摘通りだ。

直近の遠征が終わってから既に五日が経つ。

本来、遠征が終わればその日の内……は無理にしても次の日かその次の日には消耗した武器の整備を行うもの。

常識的に考えれば既に整備など終わっている筈である。

しかし……。

「す、凄く疲れてたから、忘れてたの。だから今日……」

アイズはそうゴリ押す事にした。

一応通らなくもない主張だ。人間なのだから、疲れてそれどころではない時や、単純に忘れている事だってある。

まあ実際、アイズは遠征から帰還した一日後に愛刀をゴブニユ・ファミリアの所へ持って行っている為、マシロがその事を知っていたら詰みなのだが……。

「……そうか。なら俺に構わず行って来い」

どうやら、弟は関知していなかったらしい。

当然と言えば当然。

その上、把握されていれば筋が通らなくなる言い訳だったが、自身の動向がチェックされていなかった事に、アイズは内心シユンとしまふ。

けれど、俯いている場合でもなかった。

『俺に構わず行って来い』。

これは確実にアイズ一人に行かせるつもりの台詞である。このま

までは、ここからは別行動に・という流れになりかねない。

「シロは何か整備して貰う武器はないの？」

「ない」

「新しい武器の下見とかは……」

「しねえよ。俺は基本安物を使い捨ててんだ」

そう言つてマシロはそっぽを向く。

そうだった。

彼女やマシロの使う魔法、エアリアル出力は凄まじい。それこそ、戦闘中に使えば余程の武器でも直ぐに碎けてしまう。

その難点を、アイズは不懐属性の武器を使う事で強引に解決していたのだが……、マシロは安物の武器を使い捨てる方法を取っていた。

つまり、彼に武器を選んで買うという思考はない。

ただ、売れ残った中古品を、手持武器が少なくなつて来た段階で買
い漁るのみ……。

ならいつそ、自分が不懐属性の武器を買つてプレゼントするか？

そうすれば、『買つてあげるから一緒に行こう？』と出来る。

と、かなりぶつ飛んだ思考が頭を過るが、一瞬で廃案となった。

流石に二本目の不懐属性に手を出す程の財力はアイズにもない。

そもそも、高価すぎるプレゼントは嫌がられるとリヴェリアにも忠告されている。

では、どうする？ どうすれば良い？

考えがまとまらず半ば脳が混乱している最中、アイズは理屈も何も
ない言葉を吐き出した。

「じゃ、じゃあ行つてくるから、待つてて。ここで」

「は？ いや——」

「用事があるから」

当然、マシロの納得は得られていない。

彼は何かを言いかけていたが、アイズは強引に振り切つて、人混み
の中に姿を消したのだった。

:

姉が人の波の中に姿を消した後、マシロは場所を移していた。

別に薄情な彼が、彼女との口約束を破った・という訳ではない。単純に人通りの多い道を嫌った結果だ。

道路脇に壁に小さな背中を預ける。

彼は、ボケーツと人混みと青空の境目を眺めていた。

脳内に浮かんでいるのは、姉についてだ。

何故、今日に限ってアイズがこうも自分に構ってくるのだろう。

奴の用とはなんだ？

そもそも、どのくらいで戻って来る？

悉く疑問は尽きなかったが、どれも考えた所で答えなど出ない……

その類の疑問だ。

故にマシロは、早々に思考を放棄した。

その代わり……なのかどうかは知らないが、空っぽになった脳みそに、ふと在りし日の記憶が蘇った。

陽だまりの中、金の長髪を追う無邪気な自分……。

お姉ちゃん！

そう舌足らずに名を呼べば、その金髪は、いつも振り返って笑顔を見せてくれた。

胸に飛び込めば、決まって腕を回してくれた。

暖かった。

あの頃は、それでよかった。

そんな事をされるだけで、自分の心は満たされていた。

どうしようもない、甘ったれた大馬鹿野郎だったから……。

「チッ」

マシロは居た堪れなくなつて舌打ちを漏らした。

何故今更こんな昔の事を……。

これではまるで、俺がアイツに執着しているみたいじゃないか。

そう思つてマシロは頭を振った。

そして、記憶の映像が霧散したのを確認した後、ゆっくりと瞼を上げる。

「お、重い……。もう……。ダメだ〜」

……同時に、とある女神が眼前でへナへナとへたり込んだ。

：

やってしまった……。 :

人混みに紛れ少し歩いた後、アイズは道の端で頭を抱えて蹲っていた。

【剣姫】のその様な姿は当然民衆の目を引くが、本人はそれどころではない。

数多の視線など気にならないほど、彼女は後悔の念に駆られていた。

一緒に行動しなければ意味がないのに……その為に何処へ行くか聞いたのに、まさか自分から別行動をしてしまうとは……。

アイズは自分の迂闊さを盛大に呪う。

しかもだ。

これでもかというほど動揺し衝動的に動いてしまったせいで、碌に返事も聞かずに飛び出してしまった。これでは、マシロが何処かへ行ってしまうとしても文句は言えない。

というか、彼からしたら勝手に姿を眩ませたのはアイズの方だ。

今すぐ戻れば、仮にマシロが移動し始めていても追いつけるかも知れない。

しかし、剣の整備をしに行った事になっている以上、直ぐに引き返す事は出来なかった。

少なくとも、ゴブニュ・ファミリアに赴き整備を依頼するまでの時間分は、何処かで暇を潰さなければならぬ。

その上、整備に出すという事は、帰って来たアイズの腰にデスペレートが存在してはならないという事だ。

二重三重の問題がアイズに押し掛かる。

「はあ……」

重い溜息が漏れる。

しかし、その直後、アイズはノロリと立ち上がった。

とりあえず、マシロの元へ戻る事にしたのだ。

無論、直ぐに合流する事は出来ないが、このままでは別行動をする流れになりかねない。居場所だけは常に把握しておかなければと考えたのだ……。

風を使えば居場所など一発で分かるが、アレは極力使いたくなかった。

そんな理由で、元いた通りに戻る。

辺りを見渡すと、弟は……居た。

道路わきの壁にもたれ掛かっている姿を視認する。

アイズはホツと胸を撫で降ろした。

そして、待つてくれている事実がニヤケそうになる。

しかし、そのニヤケ顔は直ぐに真顔に変わった。

このまま弟の様子を伺いながら、上手い言い訳を考えようと思つていた矢先、大きな荷車を引いた小さな女神様が、彼の目の前で立ち止まったのだ。

重い荷車をヒーヒー言いながら引いて来て、丁度マシロの立っている位置で力尽きた。

そう理解するアイズだが、弟の姿が殆ど積荷に隠れてしまったこの状況に不満を感じずにはいられない。

早くそこを退いてくれ。

そう念じ続けるが、女神は既に限界らしく、荷台は殆ど動かなかつた。

もういつそ出て行って私が手を貸そうか……。

そう思つた瞬間、先に弟の方が行動を起こす。

荷車の持ち手を握り、顔を上げた女神と数回言葉を交わしたかと思うと、彼女と共に何処かへと歩き出してしまった。

無論、アイズもそのあとを追いかける。

一部始終は見ていた。

単純に、弟が困っている女神に手を貸している。今起こっている事は、ただそれだけだ。

もしあの場にいたのが自分でも、彼と同じことをするだろう。

だから、あの子がしている事は別段特別ではない。

だから、あの女神様がマシロにとって何か特別だという訳ではない。

アイズ自身も、それは重々承知している。なのに、どうしてこんなにも胸の辺りがモヤモヤするのか……。

その理由は全く分からなかった。

:

「うん、到着だ！　ここでOKだよ。ありがとう、マシロくん！」

快活な女神の声を聞いて、マシロは荷台の持ち手を降ろした。

そして、来た道を振り返りながら考える。

先程の場所からはかなり離れている。

ゴブニュ・ファミアアの元へ向かったアイズが戻るのももう少し後だろうが、余りもたもたしている時間がないのも事実だろう。

「じゃあ、俺はこれで……」

「ん？　おいおい待ってくれよ、マシロくん。まだボクはお礼をしてないぜ？」

さっさとお暇しようとしたマシロだが、女神の純粋な厚意に阻まれてしまった。

「要らねえよ」

「まあまあ、そんな事言わずに。ジャガ丸くん一個揚げるだけだし、そんな時間かかんないよ」

「ジャガ丸くん……？」

そう言えば、この女神が運んでいたのは大量の芋……つまり、ジャガ丸くんの材料……。

そう思った瞬間、女神は目を疑う早業でエプロンを身に纏い、荷車を停止させた場所に構えていた露店に入ってしまった。

そして、制止の声も聞かずに芋を洗い、蒸かし、すり潰し、丸め、高温の油でジュウつと揚げ始める。

時空すら歪めているのではないかという速度で完成したソレは産業的スピードで包装され、ズイツとマシロに差し出された。

「はい、一丁上がり！　プレーンなのは勘弁してくれよ？　勢いで

作ってしまったから味付けする余裕がなかった！」

「いや……俺は」

勢いに圧倒されるマシロ。

その様子に何を勘違いしたのか、女神はニマニマ笑って悪戯をする様に訊いて来た。

「遠慮する事はないよ。それともアレかい？ 『あくん』して欲しいのかい？ 全く仕方ないなあ」

「はっ？」

即座に彼女の言葉を理解できず、思わずそんな声が漏れてしまう。それは即ち、無防備に口が開いたという事だ。

瞬間、女神の手により、ホカホカのジャガ丸くんがそつと近付けられる。

胃袋を刺激する匂いと唇に感じる熱気に、一瞬そのまま齧り付いてしまいそうになるが、マシロは『あくん』を成立させたくない一心で必死に堪えた。

「……………」

不屈の精神で耐えていると、不意に視界が大きくブレる。

けれどそれは一瞬で、直ぐに目に映る風景は元通りになった。

何が起こったのかは分からない。

だが、女神が先程より少し離れた位置にいる事は確認できた。

位置関係自体も若干変化している様だ。

そして、背後にはピツタリと人の気配を感じる。というか、抱き寄せられているらしい。

誰だ？

そう思うより先に、見覚えのある金の長髪が視界に入った。

肩に置かれた手にも、鼻孔くすぐる匂いにも覚えがある。

その人はアイズ・ヴァレンシユタイン。

いつの間にか現れた姉は、弟を抱き留めながら女神に険しい視線を向けていた。

第四話

両親を亡くしたアイズ・ヴァレンシユタインにとって、マシロ・ヴァレンシユタインは唯一残された家族だった。

無論、ファミリアの仲間達の事も家族の様に思っている。

しかし『様に』と『家族だ』では明確な差があり、実際彼女にとって弟の存在は一種の精神安定剤となっていた。

仮に両親と共に彼まで失っていたら、【剣姫】は今頃己が憎しみの業火に焼き尽くされていたかも知れない。

いや、もしかすると、とつくの昔に燃え尽きて今は痕跡すらも残っていないかった可能性すらある。

つまり、アイズはマシロに依存していた。それも極度に。

普段は諸事情により『素っ気ない姉』を演じているが、内心いつも彼の事を気にしており、本来であればスキルで常に居所を把握しておきたいと思っている程だ。

それ程までに大切な存在が、自分以外の女性と話している。

例え相手が女神であったとしても、アイズは嫉妬心を抱かずにはいられなかった。

だから、女神が弟の口にジャガ丸くんを押し付けた瞬間……。

つまり、俗に言う『あーん』をしようとした瞬間、衝動的に体が動いてしまった。

L v . 5の脚力をフルに使い、一瞬で弟を強奪する。

その神速は、全知零能の神には何が起こったのかさえ分からないだろう。L v . 3に到達しているマシロでさえ、状況の把握には少し時間を要する筈だ。

「ア、アイズ……?」

そして、こちらに気付いたマシロが当惑交じりの声を出す。

彼の声音は、どんな感情を乗せていても耳触りが良い。アイズにとっては。

しかも、自分の名前を呼ばれた。

本来なら喜びに打ち震え、怒りなど霧散するシチュエーションであ

るが、アイズ・ヴァレンシユタインは欠片も険しい視線を緩めようと
しなかった。

当然、女神の方は酷く狼狽するしか選択肢がない。

「な、なんだい急に……？　ていうか、なんでそんな親の仇みたいにと
クを見ているんだ!？」

その問いに答える余裕はアイズにはなかった。

ある訳がなかった。

今もグツグツグツと、彼女の腸は盛んに煮え滾っている。

だから、キャッチボール等せずに一方的に訊く。

「……この子に何か用ですか?」

「いや、無視かい!？」

女神が叫ぶのも無理はない。

彼女視点で見れば、急に割り込んで来た子供に、何故かバリバリの
敵意を向けられているのだ。

理不尽極まりない状況だろう。

アイズだつてそう思う。

自分が意味不明な行動ををしている事ぐらい、彼女の冷静な部分は
分かっているのだ。

けれど、それ以上に嫉妬心が身体中を駆け巡っていてどうしようも
ない。

「誘拐……?」

そうではないのは知っている。

見ていたから。

けれど、溢れんばかりの嫉妬が、彼女の口を勝手に動かした。

どうせ、可愛いこの子連れ出す目的で、体よくあの場に膝をつい
たんだろう・と。

しかし、そんな決め付けに対する反論の言葉は、女神からではなく
自分の真下から飛んで来た。

つまり、マシロである。

「違えよ……。俺が勝手に手を貸したただけだ。いつまでも目の前で
ヒーヒーやられて目障りだったからな」

「言い方!! 言い方つてもものがあるだろう!! 可愛い女神が困っているからかわいそうに思つて、とかッ!」

「……困つてる姿が余りに滑稽だったんでな」

「だから言い方! ツンデレはデレないと只の嫌な奴だぞ、マシロ君!」

アイズはそのやりとりを見聞きし、視覚と聴覚がブラックアウトした。

湧き上がる苛立ちで会話の内容は上手く咀嚼できなかったが、彼らが今、何をしているのかは理解できる。

次の瞬間、【劍姫】は今日一番の大声を出した。

「いちやいちや、しないで……!」

「イチヤイチヤしてたかい今ボク達!」

女神の真つ当なツッコミもアイズの耳には入らない。

普段とは違う様子の姉に、堪らず静止をかけたマシロの声すら届いていないのだから当然だ。

どうあつても怒りが静まる様子のない姉に、弟は防衛本能が働き離れようとする。

その試みが更にアイズの神経を逆撫でた。

「逃げるの……? ねえ……? あの女神の所に行くの?」

その言葉に怒気はない。

弟に対して故か多少の自制心が働いた結果だろう。

しかし、それが返つて平時よりも平坦な音を作り出し、全く別種の迫力を生み出している。

「デメエ、何イカレてやがる? ダンジョンに潜り過ぎて頭でもやられたか?」

冷や汗を流しながらマシロが言う。

それが半分以上強がりなのは、誰の目から見ても明らかだったが、彼は強気な態度を崩さなかった。

今のアイズは普段以上に何を考えているか分からない。

次にどんな行動を起こすのか、一切の予想も立てられない。けれどそれでも、怖れを表に出すのは彼のプライドが許さなかったのだ。

「ううん、私は普通だよ。でも、シロはあの女神様に何かされちゃったのかな？」

「何を……ッ」

それは、マシロの琴線に触れる言葉だった。酷く顔を歪めて何かを叫ぼうとする。

しかし、その前に女神が口を開いた。泡を喰いながら全力で主張する。

「ちよ、ちよっと待ってくれ！ 君は何か勘違いをしている！ 確かに弟君が可愛いのは分かるが、ボクは君が思うような事はしていない！」

「は？ おいテメエ、神の癖に目玉腐ってんのか？」

無理やり割って入ったのだ。こんな反応も当然予想していた。

マシロは恐らく『可愛い弟』の、特に『可愛い』の部分に腹を立てているのだろう。この年頃の少年はそう言うものだ。

そして、姉である金髪の少女に関しては、弟との会話に割って入ったという行為そのものが地雷となる。

女神はそう踏んで、下手をすれば火の油を注ぐ行為であると覚悟していたのだが……。

「……え、なんでこの子が弟だって……？」

彼女の反応は意外なものだった。

声音も幾分柔らかい。

会話を邪魔した事への怒りより、姉弟である事を見抜かれた驚きが勝っている。そんな感じだ。

「え？ だって君達顔も雰囲気もそっくりだし……違ったかい？」

恐る恐ると言った様子で尋ねて来る女神。その問いを否定する理由はアイズにはなかった。

何故ならそれは本当に、女神の予想は全く以て的中していたからである。

そして、彼『顔も雰囲気もそっくり』という指摘も悪い気はしなかった。寧ろ嬉しい。

胸がポカポカしてくる。そんな感覚を覚える。

「合ってます……けど」

もう険はない。

アイズはこの女神に対し強い敵意を向けられなくなっていた。

ただ、マシロとの関係を言い当てられただけだと言うのに……。

たったそれだけの事で、自分達の繋がりを証明して貰った様な気さ
えして、酷く嬉しかった。

急に借りて来た猫の様に大人しくなるアイズ。

その様子に勝機を見たらしく、女神は更に言葉を連ねた。より快活
に、愉快に、愉し気に。

「いやあ、やっぱりそうかい！　じゃあ、仲良くデート中かな？　悪
かったねえ、姉弟水入らずを邪魔しちゃって！」

その弁舌からは、温められた空気を再び冷ましてなるものかと言う
信念が、ヒシヒシと伝わって来た。

こうなってしまうえば最早女神のペースである。アイズは顔を赤く
してシドロモドロになるしかない。

「い、いや、そんな事……」

「いや、それにしても本当に良く出来た弟君だよ！　最高だね！

誉れ高い！　こんな子の姉に生まれるなんて君は世界一の幸せ者だ
！」

「おい、褒める割に具体的な事ひとつも言わねえじゃねえか。絶対
思っていないだろ」

マシロのツツコミは完全にスルーされる。

「そして、マシロ君の姉はボクの恩人と言っても過言ではない！」

ビシッと、女神の細い指がアイズに向けられた。

「だから、ジャガ丸くんを作ってあげよう！　なに味が良い？」

「ほ、本当ですか!?!」

瞬間、アイズの怒りは完全に霧散した。

目の前にいるのは弟を誑かす女神ではない。途轍もない善神の神
格者だ。

赤子の様に目をキラキラさせながら、アイズはその女神を見る。

直ぐ傍ではマシロがなんとも言えない表情をしていたが、ジャガ丸

くんに釣られた【剣姫】は全く気付かなかった。

数分後、出来上がったジャガ丸くんにはアイズは齧り付く。抹茶ク
リーム味だ。

「おいしい……」

アイズの裏表ない率直な感想に、女神はカラツと笑う。そして、あ
る事に気が付いたようだ。

「それは良かった。て、そう言えばこんなに話してるのに、君とは自己
紹介がまだだったね」

「当然だろ。あんな喧嘩腰に乱入して来たんだからな」

そう吐き捨てるマシロ。

返す言葉がなかった。確かにあんな状態では自己紹介どころでは
ない。

アイズは羞恥で顔を赤くする。

「ごめんなさい……」

「なあに、良いんだよ。済んだ事だ。ボクはヘステイア。君は？」

そう言つて手を差し出してくる女神・ヘステイアに、アイズは感銘
を受けた。なんて心が広いんだと。

ロキと違って大人だ。凄い・と。

だから、彼女はホカホカした思いでその手を握り返した。この神と
はいい関係を築きたいと。というか、ジャガ丸露天の常連になろう
と。

そんな決意を抱きながら名を告げる。

それが、この優しい女神の態度を一変させる事になるとも知らず
に。

「アイズ・ヴァレンシユタインです」

「そうかいそうかい。アイズ……ヴァレンシユタイン？」

女神の声のトーンが急に下がる。笑顔も胡乱な表情に変わり、歪ん
だ瞳でアイズの顔を見上げ始めた。

「長い金髪に金の目……おまけにアイズ・ヴァレンシユタインだって
……？」

女神は暫くそうやって一人で何か独り言を呟いていたが、やがて全

てが繋がったと言わんばかりに目を見開き、首を傾げるアイズに食って掛かった。

「き、君がヴァレン何某かああああ!! よくも、ボクのベル君をおおおお！」

突然の女神の凶変に、アイズは勿論隣にいたマシロもギョツとする。

あの穏やかだった女神が子供の様に騒ぎ始めたのだ。彼らが驚くのも無理はなかった。

「ち、違います。ヴァレン何某じゃなくて、ヴァレンシユタイン……」
「今そこ訂正するトコじゃねえだろ」

「よくもよくもよくも！ ベル君はボクのベル君だぞ!!」

「べ、ベル君……? 誰……?」

「キイイイイイイ！ 無自覚で奪ったとでも言うつもりか、ムカツクウー！」

只々戸惑うアイズと、只ひたすらに地団駄を踏むヘスティア。

これでは丸つきりさつきとは真逆だ。まあ、ヘスティアの方は大分コミカルな怒り方をしているが……。

「話が見えねえな……。『奪った』ってのは額面通りの意味で良いのか? つまり、コイツがお前からベルって奴を奪ったと」

「え、いや」

マシロの切り込んだ質問にアイズは狼狽する。全く以て、誰かを奪った覚えなどなかったからだ。

「そうだよ、マシロ君！ その通り！ この泥棒猫が可愛いベル君を誑かして！」

「ちよ、何を……」

けれど、ヘスティアは全力で肯定してくる。

自分はその事してないのに。身に覚えのない罪を、よりにもよって弟の前で暴露される。

訳が分からない。馬鹿馬鹿しい。

でも、手足の先が温度を無くして来ているのが分かった。

「あの子も大概夢見がちだからね！ どうせその綺麗な顔で誘惑した

んだろう!! まっさらな生娘を演じて、ベル君を貪り食ったんだ!」
「……ッ」

本当に何を言っているんだこの女神は。
勘違いをするにしても限度があるだろう……。名誉棄損も甚だし
い。

アイズは再びヘステイアに対し怒りが込み上げてきた。
だが、それよりも懸念すべき点がある。

それは弟の存在だ。

彼にはこんな話、一秒だって聞かせたくない。

全く事実無根なのだが、万が一マシロが女神の戯言を信じてしまっ
たらと思うと……。

だからアイズはヘステイアではなく、マシロに向かって行つた。
当然弟はギョツとする。彼からすれば、当然ヘステイアの元へ歩い
ていくものだと思っていたからだ。

アイズは弟の両肩をガツと掴んだ。

そして、必死の形相で告げる。

「違うから!!」

「は?」

「違うの! 全部出鱈目なの! 私はなんにもしてないから……!
だから……」

続きの言葉は出て来なかった。

なんと続けようとしていたのかも分からない。

頭でセリフを考える前に、感情に任せてぶちまけてしまったから
だ。

空を切る口だけが小さく開閉を繰り返した。

急に喋り出して急に黙った姉に対し、弟はどう思ったのだろう。

考えるだけで、怖い。

「……言う相手が違うだろ。俺に言ってどうする? どんだけ混乱し
てんだテメエは」

「……あ」

マシロのその言葉を聞いて、やはりとアイズは確信した。

やはり、この子にとって私はどうでも良い存在なのだ。

姉が不貞を働いても無関心で入れる程の『他人』にカテゴライズされているのだ。

アイズは込み上げて来る『何か』を堪えるのに必死だった。

場に、再び重い空気が流れる。

だが、それをぶち壊したのは、またもや女神だった。彼女は首を傾げながら唇を動かす。

「えーっと、もしかしてだけどお。君達、血の繋がってない姉弟……。つまり、義姉弟だったりするのかい？」
違う。

アイズは即答する。心の中で。

声を出す気力はなかった。

代わりにマシロが答える。

「いや、ガッツリ血縁だが……」

「へえ、そうなのかい……？ えー、でも……うーん」

「……なんだ？ 言いたい事があるならハッキリ言え」

歯切れの悪い女神に対し苛立ったように告げるマシロ。

ヘスティアは尚も少し頭を捻った後、納得した様に笑みを咲かせた。

「まあ良いか！ それだけ君にご執心なら、ベル君を誑かすなんて事もないだろう！」

そして、アイズに近寄りパンパンと肩を叩く。

「いやあ、不愉快な事を言つて済まなかったねえ。君は清廉潔白だ。処女神の名を持ってボクがここに宣言しよう！」

むくりとアイズは顔を上げる。

「ほ、本当……ですか？」

「本当だとも！ 君はこのままマシロ君とのデートを楽しみたまえ！」

ヘスティアは返事を待たずして【剣姫】に顔を近付けた。そして、そつと耳打ちする。他の誰にも聞こえない声量で。

「がんばれ、ボクは応援してるよー！」

「……！」

そして、手を振りヘスティアは去って行った。

まあ、露天の中に入ったただけなので、未だ目の前にいるのだが……。

「たく……。行くぞ」

疲れた様な溜息を吐くマシロ。

その一言で、アイズたちは再び歩き始めた。

：

現在時刻：午後一時四十分。

炉の女神との遭遇を経て、気づけば既に午後となっていた。

正に昼時。

しかし、ヴァレンシユタイン姉弟が訪れたのは食事処ではなく、薬剤系派閥【ディアンケヒト・ファミリア】の直営所だった。

ジャガ丸くんで半端に腹を満たしていたからだ。

それ故に『昼食を摂る為に店を探す』という行為に移行できず、マシロに突っ込む時間を与えてしまった。

つまり、『整備に出しに行った装備を、なぜ今も腰に携えているのか』という質問が飛んできたのである。

ヘスティア事件ですっかり記憶から抜け落ちていたアイズは焦る。

そして、上手い言い訳など考えられる訳もなく……。

「い、いいの。やっぱり良かったの」

「はっ。」

「その……もう整備して貰ってた事、忘れてて……」

「……脳に利く薬を買いに行くぞ」

という流れになったのである。

因みにマシロは「なんなら【戦場の聖女】に診て貰え」とも言っていたが、今の所、アミッド・テアサナールを呼びに行く素振りは見せない。あコレに関しては流石に冗談だったのだろう。

今現在、ヴァレンシユタイン姉弟は、ポーションが売られている区画を物色していた。

一応目的は『脳に利く薬』との事だが、マシロは特別そんなものを探すつもりはないらしく、色とりどりの回復アイテムに目を滑らせている。

そして、アイズも既に『脳に利く薬』の事など忘れていた。彼女の目に映るのは冒険者御用達の、青色のアイテムのみ。

「あ、コレ安くなってる……」

一本のポーションを手に取り、【剣姫】は呟いた。

それは、普段愛用している物の上位互換。しかし、『ハイ・ポーション』程の効力はなく値段も手頃。

けれども大量購入が常故に普段は数本単位でしか買わない代物だ。それが、以前見た時より随分と値下がりしている。コレならば大量買ってもアリかも知れない。

なんて思っていると、横から覗いて来た弟に怪訝な顔をされる。

「……安くなってるってお前、コレ一本800ヴァリスもするじゃねえか。いつもこんな使ってるのかよ？」

「ち、違うよ？ いつもはコッチ」

アイズはすぐさま弁解する。

金銭感覚が壊れていると思われるのは何となく嫌だった。

しかし――。

「……670ヴァリスは十分高えよ。消耗品だって分かってんのか？」

「……そうかな？」

姉は首を傾げる。

確かにポーションの相場は500ヴァリス程度だが、自分が使っているのは、そこに120ヴァリスを加算した程度の物だ。消耗品である事を加味しても、十分許容範囲内だと思うのだが……。

それに、上には上がいる。

「ティオナは喉乾いた時用って言って、こっちの700ヴァリスの使ってるけど。味が良いんだって」

「バカゾネスが……。アレが物事の基準になる訳ねえだろ」

マシロは心底呆れた様子で呟いた。

まあ、流石に味の好みで高めのポーシオンを買うのはアイズもどうかと思っていた……。

テイオネやベートも口を揃えてバカだと言っている。

「……なんだかシロ、ベートさんみたいな言葉遣いするね」

「……は？　してねえ。気色悪いこと言うな」

「……？　そう？」

アイズにはベートとの違いが分からなかった。

しかし、弟が嫌がっているのならもうこの話題には触れまい。

「シロはどれ使ってるの？　私のお勧めはコレ」

「ジャガ丸くん味……。お前やっぱ頭イカレてんだろ」

「心外……」

そんな会話をしている、アイズは不意に気が付いた。

あれ？　いつの間にか私、この子と普通にしゃべってるよ・と。

自覚してからは急にフワフワした気分になった。

普通の姉弟の様に気の置けない会話。ずっとずっと求めていた事を今、実践している。それも、気負う事なく極自然にだ。

楽しい。

どうしようもなく楽しいと、そう感じた。

マシロはどう思っているのだろうか。

楽しいと、思ってくれているのだろうか？

そんな事を考えるが、アイズは心の中で首を振る。

いや、恐らく彼の事だ。特に何の感慨も抱いていないのだろう。

でも、それでいい。

今はそれで十分。

少なくとも、心は許してくれているのだから。

アイズは、その後も自然体で話し続けた。

自然に声を出し、自然に微笑み、自然にポーシオンを指し示す。

この空間を壊さない様に、バクバクする心臓を抑え付けながら、細心の注意を払って。

そしてそれは、店を出た後も続いた。

会話の流れで様々な店に入り、商品を物色する。

前からコレが気になつていたりとか、コレは要らないだとか、コレの用途は何なんだとか。

基本はアイズから話を振り、時にはマシロの呟きを拾って、なんて事ない不毛なやり取りを続けた。

しかし、お互い冒険者だけあつて話題は次第にダンジョンに関するモノに切り替わる。

地味に助かるアイテムはなんだとか、最近の武器・防具のトレンドはなんだとか、ダンジョンでこんな事があつただとか、珍しいドロップアイテムを手に入れただとか、そんな留めない話だ。

会話とは共同作業。

一人がその気でも、もう一人にその気がなければ成立しない。

つまり会話が成り立っている時点で、マシロにはアイズと時間を共有する意思があると言う事になる。

以前なら想像も出来なかつた事だ。

勇気を出して良かった。そう思う。

アイズはリヴェリアやフィンに心から感謝した。

私に一步を踏み出させてくれてありがとう・と。

そして、気が付けば夕方になつていた。

少し早めの夕食を摂っても問題ない時間だ。

アイズは決める。

このまま最高の気分で今日という日を終えようと。

「シロ、ご飯食べない?」

「……まあ、昼食も食ってないしな」

二つ返事で了承が返つて来た。

そうだ。お昼も食べていないのだ。殊更断る理由がない。すべての風向きが此方に向いて来ている。

……アイズ・ヴァレンシュタインは、そう思っていた。

しかし実際は風など吹いていなかったのだ。
いや、正確に言うのなら吹いてはいた。
しかし、その風を、流れを、他でもないアイス自身がぶち壊してしまふ。

そんな未来が待ち受けていたのだ……。

そして遂に辿り着く。食事処の扉が開く。

それは地獄の入り口が開いたのと同義だったが、この時のアイスに知る由はなかった。

「いらっしやいませ！ ようこそ『豊穣の女主人』へ！」

第五話

『豊穰の女主人』。

それは、迷宮都市オラリオに店を構える冒険者向けの酒屋だ。酒屋と言っても提供される料理の種類は豊富で量も多い。適当に一品二品注文するだけでも十二分に腹を満たす事が出来る。加えて味も絶品だ。

接客する店員たちが軒並み美人ということもあり、ロキ・ファミリアの打ち上げでは大抵この店が使われていた。

ほぼほぼ主神の独断だが、文句を言う団員は一人もいない。かくいうアイズも、この酒場はお気に入りだった。

いつ来店しても美味しい料理が食べられると言う安心感がある。最高の思い出を作ると言う一点に於いては申し分ない。これ以上の食事処もそうないだろう。

しかし、懸念もあった。

それは……。

「いらっしやいませ！・ ようこそ『豊穰の女主人』へ！」
働いている店員たちが可愛すぎる事だ。

例えば、ちょうど今、アイズたちを出迎えてくれたこのウェイトレス。

鈍色の髪を持つ可憐な少女は、とても女の子らしい女の子だった。容姿もそうだが、声も、仕草も、表情も、全てが男心に突き刺さるあざとさを持っていると、ロキは絶賛している。

アイズ自身もその通りだと思う。

そんな女の子代表のよいな店員は、アイズを認めて片手を口に近付けた。

「わあ、【剣姫】様じゃないですか！ 今日はお一人で？ ファミリアの方は一緒ではないんですか？」

普段、集団でしか訪れない故の質問だろう。

アイズ・ヴァレンシユタインが一人で来店するという考えがそもそもないのだ。

そんな店員に対し、アイズは静かに首を横に振った。

「今日は、私とこの子だけです」

「おりよ？…この子？」

店員の視線が落ちる。

そして、視界に弟が映ると、クスリと笑った。

その所作がいちいち可愛くて、アイズはハラハラする。

「なるほど、弟さんとデートですかあ。いいですねえ。仲睦まじくて」

そして、彼女はマシロに話を振った。

わざわざ膝を折って……弟の低い位置にある顔と視線を合わせる。

アイズは、彼を背中に隠したい欲求を必死に堪えた。

「……」

そう、これが唯一の問題だ。

ひたすら可憐な彼女に、マシロの心が奪われてしまわないか……それが心配だったのだ。

いや、彼女だけではない。

この酒場の店員は皆美人だ。

しかも接客のプロ。

愛想の良さは自分とは比較にならないだろう。

男なら誰しもがコロツと行きかねない可憐な店員達が相手では、マシロが心奪われたとしても文句は言えない。

寧ろ、自然な成り行きである様に感じる。

そんな懸念材料がありつつもここを選んだのは、マシロにとっても馴染みのある店だったからだ。

初めての店より居心地は良いだろうし、勝手も知っている。

只でさえ自分と出かけると言うイレギュラーに巻き込んでいるのだ。

少しでも彼の心労を減らそうと言う配慮だったが……。

正直今は後悔している。

現に今、鈍色の少女の花のような笑顔が、弟の目の前にある。

数多の男を一撃で落としてきたであろう女神も逃げ出す様な笑顔が。

「良かったですね。こんな美人なお姉さんとデート出来て。楽しかったですか？」

「……」

しかし、アイズの心配は杞憂に終わった。

弟は、プイツとそっぽを向いたのだ。

「ありや？」

見るに、恥ずかしくて顔を背けたと言う訳でもなさそうだ。

頬は赤くないし、何より眉間にシワが寄っている。

それに、店員が『もしもーし』と手を振る度に、シワはどんどん深くなっていった。

「シル。お客様をいつまでも扉の前に立たせておくのは不作法だ」

ここで、他の店員からの咳払いが飛んで来た。

「そうだね、リユウ。ごめんなさい【剣姫】様。こちらです」

「あ、はい」

そして、カウンターの席に通される。

早めの時間帯という事でテーブル席も空いていたが、今後団体客が来ることを見据えての判断だろう。

本当は、鈍色の店員がアイズの機微を読み取り気を利かせた結果なのだが、そんな事には露ほども気付かず隣の弟に姉貴風を吹かせた。

「シロ、さっきのは失礼……だよ？」

「うるせえな……。俺はアイツが嫌いなんだよ」

「え？」

「特に親しくもない癖に馴れ馴れしい。甘ったるい声も反吐が出る」

その発言にアイズは「はっ」とした。

『特に親しくないのに馴れ馴れしい』。

それは今の自分にも当てはまるのではないかと。

アイズとマシロは姉弟ではあるが、現状『親しい』とは言い難い状態だ。

これは、『これ以上馴れ馴れしくするようなら嫌うぞ』というメッセージなのではないか……。

「そ、そこまで言わなくても……。こ、声は仕方ないと思う………思いま

すし……」

「は？」

「あはははは」

珍妙な言葉回しになったアイズに胡乱な顔になるマシロ。

そんなヴァレンシュタイン姉弟の席に鈍色の少女が注文を取りに来た。

ついでにお冷も置かれる。

「なんで【剣姫】様が余所余所しくするんですか？ 余所余所しくしなきゃいけないのは私ですよ？」

「は、はい」

ぷしゅーと、頭から湯気が出る。

「それで、ご注文はお決まりですか？」

「えーっと、この蒸かし芋の盛り合わせと、ほうれん草とチーズのグラタン……シロは何が食べたい？」

「……任せる」

「じゃあ、若鳥のグリルとトマトスパゲッティを」

「かしこまりました！ 因みに、本日は良いお魚が入ってますので、お刺身なんかもお勧めですよ？」

「私はこれで十分ですし、この子は生魚が得意じゃないので……」

「そうでしたか。では、少々お待ちを」

終始笑顔のまま注文を取り終えたウェイトレスは笑顔のまま厨房に戻る。

第三者がいなくなった瞬間、マシロがボソツと呟いた。

「……よく覚えてたな。生魚ダメだって」

「う、うん」

寧ろその程度の事は覚えていて当たり前なのだが、マシロからすればそうではないのだろう。そもそも、四年近くもまともに口を利かなかったのだ。そんな相手の趣向など普通は覚えていない。

ヤバイ、引かれたかも……。

と思いつつ、アイズはもう一つ思いついた可能性について尋ねる。

「もしかして、大丈夫になってた？」

「いや、食えん」

「そう」

アイズは、ホツと肩を撫で降ろす。

が、直ぐにそれでは駄目だと自分に言い聞かせた。

油断するな。気を引き締めろ。

なんだか良い感じの雰囲気には成っているが、だからと言って調子に乗れば全てが水の泡だ。

第一、良い感じというのもアイズの主観でしかない。

それに、ヘステイアとの一件ではアイズは明らかに暴走気味だったのだ。それについてのフォローも碌にしていない。

マシロが特に突っ込んでこないので放置していたが、冷静に考えれば嫌がられていても不思議ではないのである。

思い出せ。

あくまでも今日は前座。今日仲良くなれなくても次がある。

だからもう黙ろう。

これ以上頑張らず、欲張らず、いつも通りの『冷たい姉』に戻ろう。

大丈夫、もう戦果は十分。

ここからは消極的なぐらいで丁度いい。

攻めてボロを出すよりはずっと良い。

そう決めた瞬間、タイミング良く……いや、悪くマシロが話を振って来た。

「……じゃ、ジャガ丸くん以外なんか好物あんのか？」

「……別に」

それで会話は終わった。

心苦しいがコレが良い。

丸くなったマシロの目の中に、『悲しみ』の色が混ざっていた様な気もしたが、自惚れだ。あまり自分の都合の良い様に考えるな。

鋼の意思でそう言い聞かせ、アイズはフォローも言葉も喉の奥で封殺した。

再び沈黙が落ちる。

先程迄まがいなりにも談笑していただけあって、やけに重たく感じられた。

そんな中、料理が届く。

良い匂いだ。エルフの店員がそれぞれの前に皿を置く。

思わず「おいしそうだね」と声をかけそうになるのも堪え、アイズはそそくさと手を合わせた。

いただきますをして、食べる。

「……おいしい」

ホワイトソースとチーズの旨味が口一杯に広がり、思わず声が出た。

やっぱりこの料理は絶品だ。

マシロも満足している様で、心なしか表情も明るい様に見える。

鶏肉にかぶりつくさまは年齢相応の幼さがあって凄く可愛かった。

だから、左手で右腕を物理的に抑える。

そうしていないと、今にも身体が弟の方へ動き出してしまいそうだったから。

必至に堪えて、アイズは食事に舌鼓を打った。

そして、お互い大体メインどころを食べ終えた所で、つい気が緩む。

「おいしいね」

話しかけてしまった。

「ああ」

幸い、気分を良くしているのは弟も同じらしい。

彼も素直に、寧ろ少し食い気味に肯定してくる。

そして、暫く無言を貫いた後、マシロは何か言い出し始めた。

「……その、なんだ」

「……？」

とても言い辛そうだ。

というか、恥ずかしそうだ。一体何を言うつもりだろう。

アイズは無言で続きを促した。

「今日は……いろいろ気を遣わせた。スマン」

「……！」

彼から告げられたのは謝罪の言葉だった。

『いろいろな気を遣わせた』。

つまり、今日のアイズの行動すべてを、彼女自身の厚意からの行動だと受け取ってくれていた様だ。

しかし、その後続く言葉は『スマン』。

『今日は俺の誕生日だから、本当は嫌だが気を回して一日付き合ってくれた』。

と、要はそんな感じの解釈をしているのだろう。

嫌がられていなかった。寧ろ感謝されていたのは喜ばしい事だが、同時に全く嬉しくない勘違いもされている。

誤解を解くために口を開くべきか、それとも次回以降に回すべきか、判断しあぐねていると、彼の言葉はまだ続いた。相変わらず歯切れの悪い、途切れ途切れの声だった。

「……悪くなかった。その……た、楽しかった」

キュンと、胸がときめく。

楽しかったと、確かにマシロはそう言った。

嫌いは素直に言うが、好きとは言えない弟がだ。

その言葉を口にするのに、彼は一体どれ程の胆力を振り絞った事だろう。どれほどのプライドと羞恥心、気恥ずかしさを振り払ってくれた事だろう。

大袈裟だと思われるかも知れないが、彼にとってはそういう事だ。

だから、アイズは弁明等どうでも良くなった。

そんな事は脳内から消し飛び、ただただ、衝動のまま動きたいと。

そして、その願いは、マシロの次の言葉で成就する事になる。

理性を取り払うと言う形で。

「……………ありがとう」

てしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまった
またやってしまったやってしまったやってしまったやってしまった
たやってしまったやってしまったやってしまったやってしまった
やってしまったやってしまったやってしまったやってしまった
てしまったやってしまったやってしまったやってしまった
またやってしまったやってしまったやってしまったやってしま
たやってしまったやってしまったやってしまったやってしま
やってしまったやってしまったやってしまった
てしまったやってしまったやってしまった
またやってしまったやってしまった
たやってしまったやってしまった
てしまったやってしまった
またやってしまった
たやってしまった

アイズは悔恨の念に駆られた。

抑えきれなかった。

制御できなかった。

愚かにも、自分の欲求に突き動かされて、最も愚かな選択をしてしま
った。

【剣姫】の脳裏に【九魔姫】の忠告が蘇る。

……

『最後に、禁止事項について話しておく』

『その名の通り、絶対に侵してはならない行動の一覧だ』

『頭を撫でる、身長を指摘する、可愛いと告げる……等々、様々な禁止
行為は存在するが、それらは最悪犯しても良い。数回程度なら誤魔化
しも効く』

『だが、抱擁。つまり抱きしめるのはまだ早い。これだけは我慢しろ』
『マシロが何かに轢かれそうになり、抱き寄せた結果近い体勢になる
と言うのなら話は別だが、何もなかったただ抱き締めれば言い訳不可
能だ』

『良いか？ 今のお前達の関係で、脈絡もなくソレをやれば、取り返し
がつかない。大袈裟ではあるが、それくらいに考えておけ』

……

次の瞬間、アイズは突き飛ばす様に抱擁を解く。精神力の全てを振
り絞ってソレを成した。

もしこのまま抱き締め続けていたらどうなっていたか。

一体どれほど愛を、一方的に叩き込んでいたか分からない。

だからアイズは弟から離れた。

離れて……そのままの足で、店を飛び出した。

背後から聞こえてくるマシロの声に、一切耳を貸さずに。

：

：

「おい、待てアイズ！ テメエ会計はどうする気だ!!」
分からない。

わけが分からない……。

急に抱きつき、突き放し、急に店から出て行った姉に対して、マシ
ロは理解が追いつかなかった。

ただただ、止まるように叫ぶ自分の声だけが店内に虚しく響く。

酒場にいる全ての人間の視線がマシロに集まった。それ程の音量
だったが、姉は立ち止まる素振りなどひとつも見せず……。

そもそも弟の声など耳に入っていないと言わんばかりの速度で、彼

女の後ろ姿は遠ざかって行ってしまった。

完全に姉の姿が見えなくなった後、呆然とした頭でマシロは考える。

まさか、姉は最初からこうするつもりだったのか・と。

最初から自分に擦り付けるつもりで……。

けれど、直ぐに反論意見も浮かんできた。

そもそも第一級冒険者が、他人を嵌めてまで代金を踏み倒すだろうか。

確かに『豊穡の女主人』は相場より代金が高いが……それでも、彼女の財力なら支払いなど余裕だろう。

如何に金欠であつたとしても、たかだか食事代が払えない第一級冒険者など聞いたことがない。

なら……単純に嫌がらせが目的で……？

俺が気に食わないから料金の高いこの酒場に連れて来て……。そもそも、今日俺に付き合つたのは全部この為の……。

マシロの思考は遂に行き着く所まで行く。

幾らなんでも流石にそれはないだろうとは思いつつ、一度勘繰ってしまえば、その疑いは直ぐには払拭できなかつた。

実際、アイズ・ヴァレンシユタインは弟を置き去りにしているのだから……。

マシロはすっかり疑心暗鬼になっていた。

そんな折、間の悪いことに、二人の店員が近づいて来る。

鈍色の髪ของヒューマンと、薄緑色の髪ของエルフだ。

彼女らの気配に、マシロはびくりと肩を震わす。

動揺を隠す余裕は、今の彼にはなかつた。

こんな状況だ。店側には、食い逃げを疑われているに違いない。

十中八九、代金の催促が始まるだろう。

マシロは顔を青くしながら財布の中身を確認する。

正直……ここの代金としては少々心許ない印象を受けた。

キチンと数えた訳ではないので断定はできない。

けれど、一人分ならともかく、アイズの分も支払うとなると、数ヴァリス足りない可能性が充分にある。

そして、僅かとは言え代金が払えないとなると、ミア・グラントが……。

かつて、悪酔いした【凶狼】を一撃で沈めた店主の剛腕を思い出し、マシロは盛大に身震いする。

そんな様子を察してか、鈍色の店員が心配そうな顔で訊いて来た。

「あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ！ 最悪ロキから貰った金に手を付ければ……！」
そうだ。

マシロ自身の手持ちではギリギリ足りない可能性もあったが、主神から貰ったお小遣いを使えば問題なく支払える。

これに手を付ける気はなかったが、背に腹は代えられない。

この時ばかりはロキが本当に女神に思えた。

「いえ、お代の事じゃなくて……」

「あ？」

「お姉さんに出ていかれて、その……すごく悲しそうな顔をしてらしたので……」

息が詰まった。

マシロは、比喻抜きで数秒間呼吸を忘れてシル・フローヴァを見つめていた。

悲しそうな顔だと？

この女は何を言っている。
ふぎけるな。ありえない。そんなわけがない。
今の一連の出来事の何処に、悲しむ要素があったというのだ。
感じているのは怒りだ。不満だ。
悲しみ等とは正反対の物だ。
だから――

「あの……」

だからそんな、哀れんだ目で……俺を見るな。

マシロは溢れんばかりの感情が萎んでいくのを知覚した。
何故かは分からない。

普段なら、哀れまれたことに怒りが込み上げる筈なのに。それを表に出す筈なのに。

そんな気力が、どうしても湧いてこなかった。

「……代金だ」

ただ、そう言ってヴァリスを鈍色の店員に手渡す。

「え、あ、はい。ありがとうございます」

「邪魔したな」

そして、誰とも目も合わせず、彼自身も店を後にしたのだった。

：

「はあ……はあ……はあ……！」

アイズはヤケクソに走っていた。

目的地などない。

ただひた走る。

そうしていないと、胸が引き裂かれてしまいそうだったから。
やってしまった。

アイズは胸中で、後悔の念に苛まれていた。

禁止事項を侵してしまった。

いや、そんな事よりも、あの子を置いて来てしまった。

これではまるで押し付けだ。

代金の支払いを押し付ける為に連れまわした。そう取られても仕方がない。

なんて酷い事をしてしまったんだ。

楽しかったと言ってくれたのに。

こんな私に、ありがとうと、照れながらも言ってくれたのに。

あの子の気持ちを完璧に踏みにじってしまった。

最低だ。私は……！

「うわっ!？」

「きゃっ」

次の瞬間、アイズは誰かにぶつかり尻餅を付く。

迂闊だ。

全く周りが見えていなかった。

下を向いていたのだから当然だが……。

「す、すみません！ 大丈夫ですか!？」

慌てて手を差し出して来るその人は、格好を見る限り新米の冒険者の様だった。そして若い。多分年下だ。

「ごめんなさい……大丈夫だから」

少年の手を取り立ち上がったアイズは、お礼を言おうと彼の顔を見た。

すると、綺麗な紅色の瞳と目が合った。

そして兎を思わせるフワフワの白髪。

どちらも覚えがある。

「君は、あの時の……」

そして、覚えがあるのは向こうも同じようだった。

「あ、あああああ、アイズ・ヴァレンシユティンさん!？」

そんなふうには彼は驚いていたが、直ぐに気づかわし気な視線を向けて来る。

「あ、あの……大丈夫ですか?！」

「……」

何が？ とは思わない。

明白だ。だって、自分は今、ボロボロと涙を流しているのだから。いつもなら「大丈夫です」とでも言ってこの場から離れていただろう。

しかし、アイズにはこの少年に謝らなければいけない事があった。ぶつかってしまった件の他に、先日ファミリアの不手際で、彼を危険な目に遭わせてしまっているのだ。

その事を謝罪しなければいけない。

いつもより鈍い脳味噌で緩やかにそう結論付けたアイズ。

しかし、緩慢だったが故に、アイズはタイミングを逸する。

先に、少年の方に口を開けられてしまった。

「何かあったんですか？ その……お話ぐらい聞きますよ……？」
「え？」

訊き返すと、彼は慌てたように両手を振った。

「ああ、いえ。別に深い意味とかはなくて……！ ただ、誰かに話すだけでも楽になると思って……」

「……どうして？ 私、他人だよ……？」

「いや……僕からしたら他人じゃないと言うか、何と言うか……」
「……？」

盛大に顔を赤くする彼に、アイズは首を傾げる。

「その……凄く辛そうな顔をしてるので、何か力になれば……」

「……」

台詞だけを聞けばその辺にいる『なんぱ男』なるものとも取れなくはなかった。

しかし彼等と違って、この少年には全く不快感がない。

それは彼が邪な気持ちではなく、ただ純粋な善意でそう言っているからなのだろう。

アイズには少年が眩しく思えた。

自分と違い綺麗な心を持っている……。

彼と話せば、この腹の底に渦巻いている思いとも、折り合いを付けられるかも知れない。

そんな気がして、アイズは滔々と、今日の出来事を話し始めた。

第六話

「お姉ちゃんー！」

銀髪の少年は、金の髪を持つ少女に駆け寄った。

ダンジョン帰りで疲れているであろう十二歳の女の子に、タツクルをかますかの様な勢いで突っ込む。

少女は衝撃を完璧に殺し、その小さすぎる身体を抱き留めた。

少年の顔には満開の花が咲く。

「おかえりー！」

「ただいま」

少女は慈しみの表情を向けながら、何度も彼の頭を撫でた。

「まだ起きてたの？」

もう夜も遅い。

多くの冒険者は宴だ何だでまだまだ騒いでいる時間だが、齢八歳の歳の子供は睡魔に負けているべき時間帯だ。

「うん、お姉ちゃん帰って来るの待ってたの！」

「そっか」

当然と言わんばかりに胸を張る少年は、確かに少女が帰ってくるまで眠りに落ちた事は一度たりともなかった。まるで、姉の生存を確認するまでは寝付けないと言わんばかりに。

少年は嬉しそうにおねだりを始める。

少女は身振り手振りで察しがついたらしく、ソファアに座り、自分の膝をパンパン叩いた。

そこに、ストーンと小さなお尻が座る。

これが彼の特等席だった。

少女は後ろから、そつと少年の身体に腕を回す。シートベルトの様に、がっちりど。

「どうだった？」

上を向いて、少年は訊く。

「いっぱい倒してきたよ」

少女の返事に、少年は更に質問を続けた。

「怪我してない？」

「うん、してない」

実際、少女の身体に目立った外傷はなかった。

ただ、服はいつもより汚れている印象を受ける。

それを指摘すると、少女は微笑みを零しながら人差し指を唇に当てた。

「リヴェリアやフィン達には内緒だよ」

そう前振り、教えてくれる。

いつもより少し深い階層まで潜った事を。

そして、怪我こそしてないがモンスターに吹っ飛ばされる事はあつたらしい。

「無茶しないで？ この辺？ 痛い？」

少年は泣きそうな顔で身体を捻り、少女のお腹辺りを摩る。

その瞬間、彼の身体にかかる圧力が強くなった。少女の力が強くなったのだ。

顔を上げると、少女の顔はすぐそこまで迫っており――。

すかさず額の辺りに小さな熱を感じた。

そこに口づけを落とされたと理解した瞬間、次は頬に大きな熱が。今度は頬擦りだ。頭にも手を回され、とても逃れられそうにない。

少年は口を尖らせた。

「むう……。それ、もう嫌」

「え」

少女は驚きの声を漏らす。

「ど、どうして？」

「なんか、嫌」

少女がシユンと肩を落とした。

そして、背中に回した腕の力も緩めようとするが……。

「それはいい」

「……あ」

即座に彼は少女の身体にしがみついた。

どうやら、特等席からは離れる気がないらしい。

少年を抱きしめる腕に、力が戻った。

「よかった」

少女はホツとしたのち気が付く。

少年が俯いたまま顔を上げない事に。

首を傾げどうしたのか尋ねると、少年はおずおずと口を開いた。

「ねえ、まだモンスター嫌い？」

「！」

「まだダンジョン行く？」

「……いくよ」

「どうしても？」

「シロは嫌だ？ 私がダンジョンに行くの」

「やだ」

即答だった。少女は困った顔になる。

「駄目だよ。モンスターはお父さんとお母さんの仇だから。この世に存在してちゃいけないものだから」

「……僕、お姉ちゃんが死んじゃう方が嫌だ」

「……」

「あ、お母さんたちが死んで良かったって言ってるんじゃないよ……」

「分かってるよ……」

「うん」

弁明する少年の頭を少女は撫でる。

ホツとした彼はそのまま少女の腕の中で眠りに落ちた。

それが、仲の良い姉弟の最後の会話となった。

∴ ∴

「それで、訳分からんよーになって飛び出してもうたつちゆうわけか

……」

「うん……」

纏めるように放たれた朱色髪の主神の台詞に、アイズ・ヴァレンシュタインは気落ちした顔で頷いた。

ここは【ロキ・ファミリア】の本拠地。その執務室だ。

彼女らの他にフィン、リヴェリア、ガレスの姿もある。

全員が神妙な面持ちだった。

「まずいね」

「ああ、致命的だ……」

「まさか一回目にして禁止事項を破るとはお……」

「ご、ごめんなさい」

耳の痛い指摘にアイズは身を小さくする。

けれど内心、仕方がなかったとも思う。あの可愛さは反則級だ。

あんなものを不意打ちで喰らって身体が動かない者等いるのだろうか？

まあ、そんな者は腐る程いるだろうが、ブラコンアイズにとってはまごう事なきクリーンヒットだった。

寧ろ直ぐに正気に戻って抱擁を解いた事を褒めて欲しいぐらいだ。

けれど、胆力を振り絞ったが故に、事態は悪化した。

「そこで逃げ出さなければ案外なんかなかったかも知れないね。これまでの話を聞く限り、マシロは思ったより君に心を開いている様だ」

「ほ、ほんとうに……？」

フィンの考察に表情を華やがせるアイズ。

そんな【剣姫】に、リヴェリアは頭痛を覚えながら現実を突きつけた。

「あくまでも、逃げ出さなければの話だ。お前が走り去った事で、マシロはどう考えたと思う？」

「その……お金も払わず出て行っちゃったから、代金を払わせる為に連れて来たって……」

「そうだな。盛大に困惑した後、その様な考えに行きつくだろう。寧ろ、それ以外に考えられるパターンがない」

アイズ・ヴァレンシユタインは第一級冒険者。

幾ら値段設定の高めな酒場と言っても、金欠で支払えない等ということはまずないだろう。

だから、浮上するとすれば『嫌がらせ』の可能性だ。

当然支払いは可能だが、嫌いな相手を困らせる目的で一連の行動を取ったと考えると、一応の筋が通ってしまふ。

「直前の抱擁に関してもだね。より大きい精神的ダメージを与える為の布石だったと、そう捉えられている可能性が高い」

「つまり、お前の秘めたる思いを察して機嫌が直るといふ期待も望み薄という訳だ」

リヴェリアとフィンが相互に言葉を連ねる。

そして、総括する様にガレスが口を開いた。

「まあ、そもそも、金勘定というデリケートな問題でやらかしておるのはアイズじゃ。現状、謝罪一択しかないじゃろうなあ」

「ウチもガレスの言う通りやと思うで。金の事に関しちや、マシロは間違いない部類やしなあ。昨日上げたお小遣いも、おかえりした瞬間付き返されたわ」

第一級冒険者のドワーフに同調する形の主神に、ファミリアの団長は大きく頷いた。

「そうだね。まずはそこからだろう。アイズ、マシロが立て替えた金額は分かるかい？」

フィン問いにアイズは答える。

「うん。あの後お店に戻って店員さんに聞いたから」

昨晚、ベル・クラネルなる少年に話を聞いて貰い、多少なりとも落ち着きを取り戻したアイズは、すぐさま『豊穣の女主人』に引き返していた。

店内には既に弟の姿は無く、こちらに気付いた店員に謝罪し代金を払おうとしたところで、彼が全額払ってくれている事を聞いたのである。

「だから、直ぐに戻って謝りに行っただけど……」

そこまで言ったアイズの瞳に、ジワリと涙が滲んだ。

昨晚の出来事を思い出し出しているのだろう。この様子を見るだけで何が起きたのか想像できる。

「お金返して謝ろうとしたら、『要らねえ』って……」

皆迄は言わなかったが、恐らく直後、乱暴に扉を閉められたのだろう。

たった一言拒絶の言葉と物理的なシャツアウト。

彼が意固地になっているのがありありと伝わってくる。

ガレスがヤレヤレと顎髭をさすった。

「取り付く島なしか……。どうするフィン？ 儂らが出張って金だけでも受け取らせるか？」

しかし、団長が返答する前に、副団長による反対意見が飛ぶ。

「それでは意味がないだろう。返金も謝罪も、アイズが自分の手で行ってこそだ」

「とは言ってものお。今アイズだけに任せても、マシロが応じるとは思えん」

「それは……」

ガレスとリヴェリアの主張を汲み取り、フィンは結論を出す。

「そうだね。これは僕らの助けなくアイズが行わなければならぬ事だ。けれど、今無理に接触してもマシロは応じないだろう。寧ろ逆効果になりかねない。誰かさんに似て、アレも相当意固地だからね」

小人族の英雄はアイズに目をやり、困ったような含み笑いを浮かべた。

「多少、頭を冷やす時間を与えよう」

「つまり、今は何もせずそつとしとくゆう事か？」

ロキの問いに、フィンは頷く。そして、アイズに語り掛けた。

「不安かい？ アイズ」

ドキリと、アイズの胸が鳴る。

そして、シヨンボリしながら首を縦に振った。

「う、うん……」

これまでそつとしておいた結果が今なのだ。

この期に及んでまた不干涉の一手を取る事に躊躇いを感じずには

いられない。

しかし、そんな心情を察していたのかフィンは落ち着いた声音で告げる。

「そう長い間放置する訳じゃない。僕らも同じ轍を踏む気はないからね。具体的な日数はマシロの機嫌次第だけど、案外直ぐに頭を冷やすんじゃないかな？」

「どうして……、そう思うの？」

不安そうに顔を上げるアイズに、フィンは穏やかな笑みを零した。

「言っただろう？ マシロは思ったより君に心を開いているって」

「……」

不安がないわけではない。

ましてや弟が自分に心を開いているなど、アイズは素直に受け入れられなかった。

いや、受け入れたいが、此方の都合の良い解釈である気がしてならなかったと言うのが本音だ。

しかし、アイズは団長の言葉を信じることにした。

というより、幾度となくファミリアの危機を救ってきた【勇者】の慧眼に、縋る他なかったのだ……。

「うん、わかった」

：

マシロ・ヴァレンシュタインはダンジョンに潜っていた。

金を稼ぐ為でも、研鑽の為でもない。

ただ自身の腹に燻っている苛立ちを発散する為だけに、数多の怪物達に八つ当たりをしている。

けれど、幾らモンスターを屠り去っても、幾度衝動に任せて剣を振り抜いても、彼のイライラは一向に収まらなかった。

だから、マシロは奥へ奥へと、下へ下へと突き進む。その道中で出現したモンスター達を等しく塵に還しながら。

薄暗い道を脇目も降らずに突き進んでいると、不意に人の声が耳朶を叩いた。

同業者が近くにいるのだろう。

そう予想しながら歩き続けると、通路を抜け出たルームのど真ん中で複数の冒険者がたむろしている光景が目に入った。

声の質を聞く限り、どうやら揉めている様だ。

というより、複数の冒険者が誰かを取り囲んでいるらしい。

その『誰か』は、彼ら自身が盾となつて視認出来ないが……、とにかく恫喝されているのが分かる。

胸糞悪いと思ひ……。

そうは思ったが、マシロは一団の横を素通りし始めた。

薄情である自覚はある。

が、こんなのは別に珍しい光景でもない。

ダンジョンでは割と良くあること。

寧ろ義勇心からられて下手に首を突っ込む方がタブーというものだ。

ファミリアにはそれぞれのやり方がある。

それを無視して無理に介入すれば、渦中の人間は更なる不幸に見舞われるかも知れない。

マシロは若いが歴とした冒険者だ。

当然、そんな光景も何回か見ている。

まあ、流石に絡まれているのが同じファミリアの仲間や、そもそも囲んでいるのがモンスターであったなら、また話は違つただろうが。

そんな事を考えながら、彼等の横を通り過ぎようとした……その瞬間……。

「待ちな」

集団の中から声をかけられる。

粗暴な声だ。

それが、マシロの背中を叩く。

マシロは振り返ったりはせず、足だけをその場に止めた。

「おい、どうした？」

「へへへ」

他の冒険者の怪訝そうな声がする。

どうやら、殆どの者は困惑しているらしい。

マシロを引き止めたのは集団全体の意思ではないという事なのだろう。

そして、マシロを呼び止めた男は、正面に回って舐め回すように彼の顔を凝視し始めた。

そして、「きやはー」と嗤う。

「やつぱりだ！ どっかで見たと思ったら昨日【剣姫】と街をぶらついてたガキだ！」

男は強引にマシロの腕を掴み、その小さな体を仲間に見えやすい様に掲げ上げる。

その言葉と、マシロの容姿を見て男達は沸き立った。

「マジかよ何者だ、そのガキ！」

「【リトル・アイズ】だよ！ 【剣姫】の妹の！」

「妹？ 弟じゃなかったか……？」

「どっちでも良い！ 何にせよ、あの【剣姫】の身内だ！ コイツを手く使えばトンデモねえ大金が手に入るぞ！」

「冒険者が身代金要求かよ！ ダッセエ！」

「知ったこつちやねえ！ ギャハハハハ！」

耳元で狂い笑う男。

それに釣られて他の冒険者たちも下品な笑い声を奏であげる。

そんな不愉快極まりない協奏曲の中で……、

マシロは静かに溜息をついた。

当然、それは男たちの耳には届かない。

だが、届こうが届くまいが、ゴングが鳴ったのは事実だった。次の瞬間、宙に浮いていたマシロの足が地面に付く。

きつく掴まれていた右腕も自由になっている。

「は？ なんてお前……」

代わりに、男の太腕は妙な方向を向いていた。

それは、決して曲がってはいけない方角で……。

「え、あ？ ギャああああああああ!!」

漸く自分の状況を解釈出来たらしい男は、両膝を折って叫び声を上げた。

その絶叫に笑い声を掻き消された仲間たちは、漸く異変に気付く。

別の冒険者が、慌てた様子で殴りかかってきた。

「な、何だ?! 何しやがったクソガ——」

が、台詞の途中で口内に歯と血液が舞う。

顔面に掌底を叩き込まれたのだ。

マシロのその一撃で、冒険者は簡単に伸される。

そして、その光景は先程の男の時とは違い、この場にいる全員が目撃した。

当然彼等の間で、分かり易く恐怖が伝播する。

「何を勝手に盛り上がってやがる」

マシロの眩きに、全員が震えあがった。

けれど、この状況でも未だ事態を飲み込めない人間は存在するもので……。

「もらったああ!」

そいつは、無謀にもマシロに対して剣を振りあげる。

が、それも腹を蹴飛ばして迎撃。

「まさかお前ら程度が、俺を攫えると思ってんじゃねえだろうな?」

「ひ、ヒイヒイヒイ!!」

凄味を効かせた声音に、遂に冒険者達は駆け出した。

無論、マシロとは逆方向に、蜘蛛の子を散らす様に・だ。

要は遁走を始めたのである。

それをいちいち追う様な真似を、マシロはしなかった。

男達が去り、ルームは静寂を取り戻す。

マシロも立ち去ろうとするが、その足は、再び人の声によって止められた。

「あ、あの……」

おずおず掛けられた言葉。

先程の男達に恫喝されていた人物の声だ。

高さからして恐らく女だろう。

マシロはやはり足を止めただけで振り返りはしない。まともに話を聞く気がないからだ。

「ありがとうございます……ごいしました」

その態度で察したのだろう。

それだけ言って、彼女の気配は遠ざかって行った。次第に足音も聞こえなくなる。

どうやら、マシロを『カモ』にするのはリスクが高いと判断したらしい。

賢明な判断だと言えるだろう。

マシロはL v. 3。

先程少女を取り囲んでいた冒険者達とは比べるべくもない強者である。

その上で、所属はあの「ロキ・ファミリア」だ。仮にマシロ自身を出し抜くことが出来ても、ファミリアに告げ口をされれば終わりである。

マシロは少女の瞳を思い出す。

利用価値があるかないか、此方を品定めしていた冷たい瞳を……。

「ありがとう……か」

また、少女の台詞も反芻する。

奇しくもそれは昨日、自身が姉に対して放ったのと同音の言葉だった。

思わず乾いた笑みが込み上げる。

「心にもない事を言いやがる」

そして、マシロは吐き捨てるように呟き、今度こそ迷宮の奥へと歩みを進めるのだった。

第七話

綺麗な金髪が視界の端に映る。

馴染み深くもあり、近寄りたくもあるその金髪の少女の名は、アイズ・ヴァレンシユタイン。

迷宮都市オラリオにおける最強の女剣士にして、L.V. 5の第一級冒険者だ。

この都市に於いて、知らぬ者などいないだろう程の有名人である姉。そんな彼女が、見知らぬ冒険者と歩いているという光景は、中々にスキャンダラスなものだろう。

マシロ・ヴァレンシユタインがそれを目にしたのは全くの偶然だったが、必然だろうが偶然だろうが、思わず二度見してしまうほど衝撃的光景だった事には変わりない。

冒険者の男は、アイズとそう変わらない背丈をしている。見る角度によつては完全に同じ頭の高さに見えるだろう。そのくらいに拮抗している。

しかし、歩き方、重心、身に着けている装備を鑑みるに、どう見ても釣り合っているようには見えなかった。

——新人冒険者か……？

いつの間にか身を隠すように二人の様子を伺っていたマシロは、そんな見解を打ち立てる。

処女雪の様な白髪にゴリゴリの初期装備をした中背中肉の冒険者。ファミリア内では見覚えのない風体だ。恐らくは、他派閥。

そんな相手と朝六時という早い時間帯に、他でもないアイズ・ヴァレンシユタイン……つまり、「ロキ・ファミリア」の幹部が、人目を忍ぶような道を歩いている……。

進行方向から考えて、恐らく都市の市壁へと昇る階段を目指しているのだろう。

ファミリアの誰か……特にレフイーヤ・ウイリデイスを始めとした【剣姫】の狂信者に見られたら大事になりかねない光景だ。

大派閥の幹部クラスが、他派閥の人間と密かに落ち合うなど褒めら

れた行為ではない。無論、まったく関りを持つなど言われている訳ではないだろうが『戦力流出』や『情報漏洩』を疑われるような行為は可能な限り慎むべきだろう。

そして、そんな事はアイズも重々承知している筈……。

天然且つ世間知らずな所のある姉ではあるが、だからと言ってまったく一般常識が無いわけではないのだ。進んでファミリアに迷惑が掛かるような真似はしないだろう。

だからこそ、今の彼女の行動が引つ掛かる。

正直、単に他派閥の少年と歩いているだけと言えなくもないが、時間と場所が良くない。

これでは、誰にも知られぬように密会している……。そう勘ぐられても仕方ないだろう。

「……」

——一応、後をつけておくべきか……？

「ロキ・ファミリア」の一員として、流星にその様に思案し始めた時だ。背後から異様な邪気と「ぐぬぬぬ」という呻き声が聞こえて来た。振り返ると、琴吹色の髪と白い肌、長い耳を持った若いエルフが、マシロの背中に数センチ空を残した程度の超至近距離で恨めしそうに歯噛みしている。

「なんだ、テメエ……!! いつから——」

「シッ！ 大きな声を出さないで下さい！ アイズさんに気付かれてしまいます！」

細い指をマシロの唇に近付けながらレファイヤ・ウイリデイスは、小声で注意を促してくる。

しかし、猛禽類の様にキラめく瞳は此方を向いておらず、金の長髪と綿毛のような白髪を捉え続けていた。

「登って行きますね……。市壁の階段を……」

「……そうだな」

いつにもまして物々しい雰囲気のエルフに、マシロは思わず物怖じする。

彼女とは特別親しいわけではないが、同一レベルの前衛と後衛とい

う関係上、パーティーを組むことは少なくない。実力もだいたい拮抗している為、ファミリア内で行う組手などの訓練を共に行うこともある。

だが、今のレフイーヤはその時のどれとも似つかわしない空気を醸し出していた。

故に、マシロは呆気に取られてしまった。

だから、容易く左腕をホールドされてしまう。

「おい、なんだ」

「なんだじゃありません！」

意味不明な行動を咎めるべくその様に問うが、逆に一蹴されてしまった。まるで此方が可笑しいと言わんばかりの勢いだ。

そして、グイグイと引つ張られてしまう。同じLv. 3同士、こうも容易く運ばれる程圧倒的筋力差がある訳がないのだが……。

「どこの馬とも知れない冒険者が、アイズさんと密会してるんですよ!? きつと、やましい考えがあるに違いありません！」

階段の前まで来ると、壁に身を隠しながらレフイーヤが言ってくる。

なるほど。だから尾行して動向を探る・と言うのは分からない話ではない。実際マシロもその様にしようとしていた……が、『二人でやましい話をする』のではなく『少年の方にやましい気持ちがある』か……。

「馬鹿かお前。第一級相手に何かできるわけねえだろ。誰が好き好んでゴリラのケツを触ろうとする」

マシロは、レフイーヤの主張を否定する。

確かに、アイズ・ヴァレンシュタインに下心を向ける冒険者は多い。というか、後を絶たない。ロキの言葉を借りるなら『アイドルの人気』というのを彼女は誇っているのだろう。

だが、その下心を持った数多の冒険者たちが、姉に危害を加えられるかと言えば答えはノーだ。最大派閥「ロキ・ファミリア」の団員にセクハラなどしようものなら、ファミリア総動員で報復されるだろう。何より第一級冒険者と言う上澄みの中の上澄みを相手にそんな愚

行をして、ただで済むとは思えない。

だから、レフイーヤの危惧するようなことはありえない。

そう説いたつもりだったのだが、琴吹色のエルフは安心するどころかワナワナ肩を震わせた。そして、次の瞬間――。

「アイズさんはゴリラじゃありません！」

咆哮の如き大絶叫が朝の冷えた空気を震わせた。

当然、階段の中腹辺りに居たアイズ達の背中が止まる。彼女らの顔が此方へと向く前に、マシロ達は慌てて壁に隠れた。

「……？　今、誰かの声が聞こえた気がしたけど……」

「誰もいませんね……」

そんな会話が聞こえて来たと思えば、再び階段を登る音が響き始める。恐る恐る顔を出すと、小さくなっていく二人の後姿が確認できた。

露骨に胸を撫で降ろすレフイーヤに、マシロは当然苦言を呈す。

「馬鹿野郎、デケエ声出さなかつたのは何処のどいつだ？　アイツ等がポンコツじゃなきや終わってたぞ」

「アイズさんはポンコツじゃ――」

「だからデカイ声出さなつての……！」

今度はレフイーヤが黙る番だった。

不満げな顔をするアイズ大好きつ子に、マシロは立ち上がりながら告げる。

「今ので分かっただろ。ポンコツはともかくとして、あれだけ騒いでた俺達にも気付けない奴に、第一級冒険者をどうこう出来る力はねえよ」

「そ、それはそうですけど……」

レフイーヤの声はしおらしい。彼女自身、あの少年がアイズ相手に力づくで何かできるとは思えないのだろう。当然だ。Lv. 1とLv. 5では大人と子供以上の力の差がある。その隔たりに、『万が一』という言葉の介在する余地はない。これは慢心ではなく厳然とした事実だ。

反論がないことを確認し、マシロは踵を返す。

「分かったなら俺はもう行くぞ。続けたいなら一人で勝手にやつてろ」

最初こそ、尾行しておこうとも考えたマシロだったが、レフィーヤが後を付けるなら自分がいる意味はない。第一、『他派閥の男と一緒にいる姉を尾行する』など、客観的に見てアレだろう……。具体的に何が『アレ』なのかは上手く表現できないが、なんというか……。そんな事を考えていると、不意に後方に引つ張られ、進行を阻まれる。

見ると、レフィーヤの白い手が、ガツチリと此方の手首を掴んでいた。

「……なんのつもりだ」

「……心配じゃないんですか?」

「は?」

マシロは思わず胡乱さを隠さぬ声を上げてしまった。

それ程、彼女の放った言葉が頓狂だったからだ。レベル差が四つもあると言うのに、何を心配する事があるというのか。

万に一つも、押し倒される可能性など皆無だろう。

だから、冗談で言っているのかと思えば、レフィーヤの顔は真剣そのものだった。

何も言い返せずにいると、彼女は艶やかな唇を動かして続ける。

「私は心配です。勿論、アイズさんとあのヒューマンのレベル差じや万が一にも間違いが起こらないのは分かっています。でも、億が一はあるかも知れない……」

その真摯な声音に、マシロはただ黙って聴くことしかできなかつた。

「人の良いアイズさんのことです。無理にお願いされたら断り切れないかも知れません。だから、二人が上でどんな話をするのか、すごく……気になります」

流石にそんな事はないと思いたいが、姉は天然だ。正直、行動が読めない。それは、先日自分自身が改めて体感したことだ……。

そこまで考えて、ふとマシロは自嘲気味に嗤った。

——いや、アレは俺が相手だったからか。

彼が思い出したのは先日の一件だ。

『豊穰の女主人』にて、代金をマシロに押し付けて逃げ出したあの明確な迷惑行為。

もし、あんな意味不明な行いを誰彼かまわず行っているとしたら、とつくに【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの名声は地に落ちていくだろう。というか、そんな奴歩く地雷過ぎる。常識的に考えて、そんな人間がいるわけがない。

——確かに、俺以外には人の良いアイズなら、頼み込めば……あるいは。

若干、胸の奥がチクリとした。こんな僅かな痛み、良く気付けたものだと密かに驚く。

「正直言つて、私を感じているこの気持ちは……嫉妬なんだと思います」

「……なに？」

レフィーヤの口にした言葉はかなり意外なものだった。いや、彼女があこのヒューマンに嫉妬しているのは意外でも何でも無い。

マシロが意外だと思ったのは、嫉妬している事実を他者に打ち明けた事だ。種族的に自尊心の高いエルフが……というのもあるが、仮に自分がレフィーヤと同じ立場だったとして、そんな心の内を外に漏らすなんて考えられない。

「アイズさんは私の憧れの先輩で、血は繋がってないけどお姉さんみたいな人で……。だから、急に現れた彼に家族を取られてしまったような気がして……。凄く、ムシヤクシヤしています。多分、あのヒューマンが他派閥の冒険者だから、余計にそう思うんでしょうね」

そういう感情になってしまうのはわかる……。と、思う。身内を差し置いて、何故わざわざ他人を相手にするのか……。と。あくまでも、一般論としては・の話だが……。

その様にレフィーヤの主張を咀嚼している最中、次いで奇想天外な物を口にぶち込まれた。

「マシロも、そうなんじゃないですか？」

「……」

「いいえ、私と違ってマシロは本当にアイズさんと姉弟なんだから、私よりずっと——」

「何が言いたい……」

強めの語気で、マシロはそのセリフを遮った。これ以上言わせてはならないと、本能が警鐘を鳴らしたからだ。

いつもの彼女なら、ここで口を閉ざしていただろう。

しかし、今日は違った。今日に限ってめげずに挫けずに、聞きたくない言葉を言い連ねて来た。

「本当は、貴方も皆みたい……アイズさんと——」

気が付いた時には、既に身体が動いていた。

自身の右手が、琴吹色のエルフの胸倉を掴んでいる。嫌なことを言われ、カツとなって衝動的に動いた。それが、この最低な行動の結果だろう。

マシロは激しく動揺した。

その所為で、手を放すのが遅れる。

そして、彼女の顔を見てしまった。見てしまって、更に瞠目するようになる。

目の前の少女が浮かべていたのは、怯えでも怒りでもなく——

『憐憫』の表情だった。

「……ッ」

右手から力が抜けていく。

自然と、レフィーヤは解放されて行き——。

自由の身となったエルフは、マシロの行動をいっさい責めたりはしなかった。

「わ、わるい……」

「いえ、私も意地悪なこと言っちゃいましたね。ごめんなさい……」

何故謝る……？ 今の一連の何処に、レフィーヤが謝るべき点が存在すると言うのだ。

すべて、マシロの未熟な心が引き起こしたアクシデントなのに……。

嫌な空気が流れる。

当然だ。他でもない、マシロ自身がこの空気を作った。きつかけと
なったのはレフイーヤの言葉だが、引き金を引いたマシロが全面的に
悪い。

正直、今すぐにでもこの場から立ち去りたかったが、最早そんな真
似ができよう筈もなかった。

マシロは階段を覗き込む。もう、アイズ達の姿はない。今のゴタゴ
タの間に登り切ってしまったようだ。そっと、レフイーヤに囁く。

「行くぞ」

すると、彼女は驚いたように顔を上げた。

「え？ 良いんですか？」

「拒否権ねえだろ、俺に」

無論、『急に胸倉掴んでくるような野蛮人と一緒に行けるわけねえ
だろ、ボケナス』と拒否されればそれまでだが、幸いレフイーヤは
「じゃ、行きましょう！」と、階段を登り始めた。

その背中を追いかけながらマシロは思う。本当に人が良いのは彼
女であると……。

：

：

市壁上部へと到着する。

頂上へ近づくにつれて大きくなっていった金属音がかなり鮮明に聞
こえて来る。

最早この段階で、二人が仲良く座って何かを話している訳ではない
と察することができた。

マシロとレフイーヤは、無言で頷き合いながら物陰に潜んでアイズ
と少年の様子を伺う。

視界に飛び込んで来たのは、剣で打ち合う男女の姿だった。

雄叫びを挙げながら特攻をしかける白髪を、金の長髪が容易く往な
している。力関係は明確で、どう見ても姉が少年に襲われていると
いった様子ではない。

「こ、これって……」

【千の妖精】が眩くと同時に、兎の様にちよこまかと動いていた少年が、再びアイズに斬りかかった。しかし――。

「動きが直線的すぎる……」

との言葉と共に、鞆を背中に叩きつけられる。

たったそれだけで、白髪の冒険者は地面に倒れ伏した。無理もない。峰打ちとは言えLv.5の一撃だ。下手な上級冒険者の攻撃より、よほど威力があるだろう。

地を這う少年の姿に、漸くレフィーヤも敵愾心丸出しの空気を解く。

「えっと、これ、もしかしなくても……」

「特訓……のようだな」

密会でも逢引でもない。何処からどう見ても『特訓』だ。

これでレフィーヤも安心するだろう。彼女が危惧したような俗なことは、一切行われていなかったのだから。

「……」

なのに。

だと言うのに、何故胸がモヤツとするのだろう。

というか、寧ろムカムカする……。

アイズに対してなのか、少年に対してなのかは分からない。だが、胸のモヤモヤはゆっくりと、しかし確実に大きくなっていった。

駄目だ。理由は分からないが、ここに留まっているのは精神衛生上よろしくない。

さっさと切り上げてしまうのが吉だろう。

そう判断して、マシロはレフィーヤに声をかける。

「良かったな。お前が危惧したことは何も――」

すると、レフィーヤは、何故か小刻みに震えていた。その様子にギョツとしていると、掠れた声が聞こえて来る。

「……せん」

「ほっ」

「良くありませんー！」

アイズ達が直ぐそこにいると言うのに、レフイーヤは一際大きな声を上げた。ビクリと肩を揺らし、マシロは姉と白髪の様子を伺う。幸い、変わらず打ち合いを続けている二人には、今の声は届かなかつたらしい。

胸を撫で降ろし、キツと睨む。

だが、アイズ大好きっ子は、それ以上に吊り上がった眦で地団駄を踏んだ。

「なんなんですか、なんなんですか、あのヒューマンは！　なんでアイズさんと二人つきりで特訓してるんですか！」

「お前みたいに騒ぐ連中が沸いて来るからだろ」

冷静に返すと、ズイツと顔を近付けられた。

「そりゃ、騒ぎますよ！　私だって滅多に特訓して貰った事ない……というか、恐れ多くて頼めないのに！　羨まし過ぎます！　厚かましいにも程がある！」

頼めないのは完全に彼女の自己責任ではあるが、それはそれとして、一理ある主張でもある。

やはり他派閥所属であるあの少年が、【剣姫】に稽古を付けて貰うというのは、『厚かましい』と言われても仕方がない行為だろう。

例えアイズの了承を得ていたとしても、周りの人間にとっては関係ない。

別にアイズⅡ【ロキ・ファミリア】の所有物という訳ではないが、自分達を差し置いて、どうしても他派閥の人間なんかと……と思ってしまうのが人間の性である。

だから、アイズに心酔しているこのエルフが顔を真赤にするのも無理はないのだが……。

如何せん、騒ぎすぎた様だ。

「……えっと、やつぱり、誰かいるみたいですね」「そうみたいだね……」

流星に気付かれたらしく、二人の足音が近づいて来る。

「ゲッ！」という顔をしたレフイーヤをジト〜と睨みつけ、バツが悪そうに顔を背けた【千の妖精】と共に辺りを見渡した。

隠れられそうなところは——無い。

下に降りようにも、このペースでは降りている最中に見つかるだろう。つまり、逃げ場はどこにも無いということだ。

「チ……ッ」

せめてもの抵抗として、マシロはレフィーヤの後ろに移動し、彼女自体を物陰とした。そして、生贄を差し出すかのようにグイグイ背中を押し。

「ちよ、往生際が悪いですよ、マシロ！」

「テメエにだけは言われたくねえんだよ……！」

等とやっている、遂に【劍姫】の影が覆い被さった。

「あれ、レフィーヤ？」

キョトンと目を丸くする姉に、【千の妖精】は面白いほど動揺し、たどたどしい反応を示す。

「あ、ああああ、アイズさん……！　こ、こんなところで奇遇ですねえ……！」

百人が百人『無理があるだろ』と感じる言い訳だが、相手はアイズだ。持ち前の天然とポンコツを遺憾なく発揮してくれる可能性もなくはない。

しかし——。

「え？　奇遇って……、こんな場所？」

「え、えーっと、そのお……」

どうやら少々姉のことを舐めていた様だ。流星に都市の市壁の上での『奇遇ですね』は通らなかつたらしい。

シドロモドロになるレフィーヤを尻目に、アイズは此方との距離を詰めて来た。

そして、困ったように眉を下げながら懇願する。

「あのね、レフィーヤ。ちよつと事情があつて……。出来ればこの事はフィン達には——」

そして、そこまで言いかけて、不意にアイズの台詞が止まった。

息を呑む音も、聞こえて来る。

見ずとも分かる。

彼女の視界に映ってしまったのだろう。マシロ・ヴァレンシユタインの姿が。

「し、シロ……?」

それを証明するかのようには、姉の口から彼の名が漏れる。彼女の声は、酷く揺れていた。それが、マシロには酷く不愉快に感じられた。まあ確かに、嫌いな相手に後をつけられていたのだから、良い気分ではないだろう。寧ろ、鳥肌が立つほど気持ち悪い筈だ。

恐らく、今アイズの心中を取り巻いている感情は純然たる『嫌悪感』に違いない。

それが堪らなく不快で、『ソレを不快だと感じている、自分自身』にも、マシロは酷く失望した。

後をつけられていたのだから、負の感情を抱くのは当然だ。だと言うのに、自分はその因果応報を受け容れられずにいる。

なんて身勝手な話だ。マシロ・ヴァレンシユタインという男の面の皮は、きつと深層モンスターの皮膚で出来ているのだろう。

「あ、あの……」

姉の声が耳朶に届いた。その瞬間、マシロは更に表情を歪ませ、顔を背けた。

背けてしまった。彼女の顔を視界に入れなくなかったからだ。

「……!」

次の瞬間、金の長髪が横を通って駆け抜ける。

彼女の匂いと、走り去る風が顔を撫でる。

「あ、アイズさん!!」

次いで、レフィーヤが声を上げた。

そつと顔を上げると、マシロの頬を生暖かい何かがペチツと叩く。

「もお、マシロのバカちゅん」

そう言い残し、レフィーヤはアイズを追いかけて行った。

女性組二人が消えたことで、この場に残ったのはマシロと白髪の冒険者だけとなった。

白髪は未だに状況を呑み込めていないらしく、呆然と立ち尽くして

いる。

まあ、無理もない。

このまま帰っても良かったが、マシロは罪悪感から彼に近寄って行った。

確かに彼のしたことは余り褒められた事ではないが、だからと言って特訓の途中で解散させられるのは無慈悲と言うものだろう。そもそも、新人であるがゆえに『他派閥の上級冒険者に特訓を頼むのはやっかみを買う行為』という暗黙の了解を知らなかった可能性もある。

どちらにせよ、自分が彼の予定を潰してしまったのは紛れもない事実だ。

故に話しかける。

「……悪かったな。特訓の邪魔をして」

「い、いえ……！ そのやっぱり、不味かつ——」

と、ここで少年の声が不自然に途切れる。胡乱な顔を向けると、彼は真紅の双眸でマジマジとマシロの顔を覗き込んで来た。

「お、おい、なんだ……」

見かけによらずグイグイ来るなど思っていると、白髪は目を見開き「ああああー」と叫んだ。

そして、興奮した様子で喋りかけて来る。

「や、やっぱり、あの時の……！」

「あ、あの時……？」

マシロは首を傾げる。口振りからして、彼は以前自分と会ったことがあるようだが……。

そう言われると、記憶の端に引っかかる何かがある気もする……。

「お、覚えてませんか!? 僕、何日か前に、ウォーシャドウから助けて貰って……!」

「ウォーシャドウ……？」

加えて、特徴的な白髪に赤い瞳。そして、新米冒険者……。

それらの要素が、ようやくマシロの中で繋がった。

「お前、あの時の……」

そう呟いた瞬間、少年は満面の笑みを咲かせて、何度も何度も頭を下げて来た。

その勢いに、マシロは見事に圧倒される。と、同時に少なからず驚愕していた。

確かに、マシロは以前彼と会ったことがある。ダンジョンの上層で、ウォーシャドウを狩っていた際に、途中からルームに入って来た冒険者が彼だ。あの時の彼は如何にも新米と言う感じで、周囲への警戒も、身のこなしも全くなっていなかった。

しかし、今の彼は違う。

十分新米冒険者と呼べるだけの覚束なさはあるが、それでも数日前とは天と地だ。正直、異常な成長スピードだと言って良い。

「……お前、名前は？」

「え？ あ、べ、ベル・クラネルです……！」

何故か異様に感極まった様子の冒険者、ベル・クラネルに、マシロは告げる。

「マシロ・ヴァレンシユタインだ。ベル・クラネル、もしお前がよければ……。て、なんだ、その顔は」

此方が名乗ると、ベルは呆けた様に口を開けて固まってしまった。

だが、直ぐに正気を取り戻し、彼は言う。

「あ、ああ、ごめんなさい！ そ、その、貴方がアイズさんの弟だったなんて……」

「……？ ああ」

少々驚き過ぎな気もするが、彼が先程迄師事していた人物の事を考えれば自然な反応だろう。……そう思う事にして、マシロは話を続ける。

「もし、お前さえよければ俺が代わりに埋め合わせをするが、どうする？」

「へ？」

ベル・クラネルは頓狂な声を出す。そして、恐る恐ると言った感じで訊いて来た。

「で、でも、僕に稽古をつけるのは不味かったんじゃ……」

「良い顔はされないうが、禁止されてる訳でもない。今回は相手が【剣姫】だったから嫉妬狂いのエルフが釣れただけだ」

「そ、そうなんですか……？」

ベルは何とも言えない表情を作る。

「だが、俺はLv. 3。奴ほど目くじらを立てられる事もないだろう。そもそも、ダンジョンに潜つてしまえば問題ない。誰かに何か言われなくても『お互いソロで潜っていて、たまたま目的が同じだったから臨時パーティーを組んだ』で押し通せる」

「な、なるほど……！ 確かにそうですね！」

「……」

眩しい。

マシロはピイツとベルから顔を逸らした。

曇り気一つない瞳だ。『純粹』という言葉がこれほど似合う者もそういないだろう。

なるほど。確かにコレならば、アイズが絆されていたとしても不思議ではない。

自分などより彼の方が余程、『理想的な弟』だ。

ズキ……。

再び微かな痛みと息苦しさを感じる。

だが、マシロはそれを無視して尋ねた。

「で、どうする？」

ベル・クラネルは嬉しそうに、本当に嬉しそうに答えた。

「は、はい！ じゃあ、ご迷惑じゃなければ、よろしくお願いします！」
こうして姉に代わり、マシロ・ヴァレンシユタインが彼の特訓を引き継ぐ事になったのだった――。

第八話

「はあ…はあ…はあ」

「待って下さい、アイズさん！」

「！」

背中を叩いた少女の声に、アイズ・ヴァレンシユタインはようやく足を止めた。

ヘトヘトになりながら熱感を放つ、山吹色の艶髪を持つエルフが、背後で乱れた呼吸を整えている。

「アイズさん……。速すぎです……」

「れ、レフイーヤ……」

レフイーヤ・ウイリデイス。

【ロキ・ファミアリア】所属の第二級冒険者。

後輩であり、自分を慕ってくれている人懐こいエルフの少女……。

そんな少女が口を尖らせて苦言を呈する。

「もう、どうして逃げるんですか……」

「……っ」

アイズは思わず肩を揺らした。

そうだ。逃げ出した。

また、マシロから……。

「ごめんね。レフイーヤから逃げた訳じゃないの……」

逃げたのは、弟からだ……。

「喧嘩でもしたんですか？ マシロと」

ある意味で鋭い指摘だが、そうじゃない。

喧嘩なんて相互性のあるものじゃない。アイズが一方的にやらかして、一方的に怒らせているだけだ。

「違うよ……。そんな、姉弟みたいなことしてない。レフイーヤだつて分かってるでしょ？ 私達の関係性……」

彼女が入団して来た時には既にマシロは思春期に入っていた。

つまり、アイズが塩対応を開始した後の状況しか知らないのだ。

実際、レフイーヤの前で、アイズがマシロと会話しただけの場面など片手

で数えるほどしかないだろう。

そう思つて後輩の顔を見ると、彼女はまだ勘違いをしている様だつた。

「うーん。それじゃあ、マシロが着替え覗いちやつたとか……？ 幾ら弟と言つても、直ぐには許せませんよね」

「ううん、覗かれてもいない……。それに、その何処に怒る要素があるの……？」

「え」

「え？」

まったく見当はずれな見解が飛び出したので、アイズは慌てて否定する。何故か、最後は驚かれてしまったが……それはさておき、アイズは告げる。

「……気を遣わなくていいよ、レフィーヤ。あの子は私に興味ないから、私を怒らせることもないし、喧嘩もしない」

何故かファミリア内では、アイズがマシロに興味が無いという空気になつている。出来の悪い弟に対し、姉が愛想を尽かしているのだと……。

だが、違う。

実際は真逆だ。

本当は今すぐにでも弟を抱きしめたい。

フワフワの頭を撫でまわしたい。

柔らかな頬を堪能したい。

しかし、それをすれば確実に関係は修復不可能になる。だから、精神力を振り絞つて我慢をしているだけ。

皆が思っている様に、マシロの矢印が自分に向いていたらどれだけ良かっただろうか……。

そんな事を思っていると、アイズの耳朶にレフィーヤの声が飛びこんで来た。

「別に興味無いなんて事、全然ないと思いますけど……」

レフィーヤはそう言つてくれる。

この子は優しいから当然と言えば当然だ。

しかし、彼女は先日のやらかしを知らない。だから、そういう認識でいてくれるのだろうか。

そして、レフィーヤは安心した様に胸を撫で降ろした。

「でも、良かった。アイズさん、別にマシロのこと嫌いじゃなかったんですね」

「え？ 良かったって？」

「だって、嫌われてたらマシロが可哀そうじゃないですか。口は悪いけど、あの子、いい子ですし」

「……う、うん？」

マシロが良い子だと言うのは自明の理だ。

全力で肯定せざるを得ないこの世の真理。

だが、自分に嫌われることが可哀そうとはどういう事だろうか？

私なんか嫌われた所で、あの子は痛くも痒くもないだろうに。

そんな事を思っていると、レフィーヤが否定の言葉を吐いた。恐らくアイズの表情と声音から、心情を読み取ったのだろう。

「あのですねえ、アイズさんに嫌われるなんて拷問以外のなにものでもないんですよ!! 常人なら耐えられない事なんですから……!」

自殺ものですよ!」

「そ、そんなこと……」

「そんなことあります!」

その迫力に気圧され、アイズは言葉を失ってしまった。

もし彼女の発言通りなら、こちらから声をかければマシロは喜んで

応じる事になる。

やはり、そんな事は有り得ないと思った。

別に、レフィーヤが敢えて嘘を言っているとは思わないが、自分を慕ってくれているが故の見当違いだと思ふ事にする。

「ありがとう。レフィーヤは優しいね」

アイズが微笑みかけると、エルフの顔が真っ赤に染まった。

驚きつつも蕩けるようにニヤケ顔になり、終いには両手で頬を支えながら「そ、そうですか? えへへ」とクネクネし始める。

「それじゃあ、話しは変わりますけど」

動きを止め、レフィーヤは満面の笑みのまま訊いて来た。

「うん」

「あのヒューマンは、何ですか？」

「え？」

笑顔には変わりない。

けれど、目は笑っていない。彼女は底冷えする様な雰囲気纏っていた。

* * *

「はああああー！」

ベル・クラネルの一閃が、最後のコボルトを斬り裂いた。

切り口から鮮血が噴き出し、怪物は最後っ屁も出せぬままに絶命する。

その奮闘っぷりに、マシロ・ヴァレンシユタインは改めて目を見開く事となった。

姉との訓練を盗み見た際、驚異的なスピードで力を付けているのは分かっていたが、実際戦いを目にする、その異常さが良く分かる。

戦闘技術はまだまだ拙い。

しかし、身体能力に関しては目を見張るものがあつた。

正直、単純なステイタスの数値で言えば、既にLv. 1上位層に片足突っ込んでいえると言えるだろう。

だからこそ、遭遇したコボルトの群れを容易く一掃することが出来た。

彼の戦果である魔石を、マシロは麻袋に詰めていく。

「ベル・クラネル」

そして、彼の名を呼んで放り投げた。

ベルは、両手でキャッチしながら、困ったように笑う。

「あ、ありがとうございます。……どうでした？」

控えめに此方の評価を待つ様は、不安に満ちている様に見えた。自分の成長率の異常性を正しく認識できていないのだろう。

正直、彼の性格を知らなければ嫌味に聞こえかねない発言だ。

「筋は良い」

言った瞬間、ベルの顔に満面の花が咲いた。

「だが、技や駆け引きはおざなりだ」

そして、シユンと肩を落とす。

随分と小動物の様なりアクシジョンを取るものだ。

ティオナあたりならば『可愛い！』と頭を撫でまわしそうな……、所謂母性本能を刺激するだろう行動の数々。

狙っているのなら中々に気色悪いし、そうでないなら逆に感心する。

等と、マシロが自分の性格の悪さを棚に上げ、そんな事を思っていると、ベルは「あはは」と笑いながらこんな事を言ってきた。

「アイズさん……お姉さんにも全く同じ事言われました」

「………そうか」

若干の沈黙の後、マシロは相槌を打つ。

「やっぱり姉弟だから着眼点が一緒なんですかね？」

「そんな訳ねえだろ。単にお前の戦闘技術が、誰の目から見ても劣ってるっただけだ」

「で、ですよね……。すみません」

乾いた声で謝られてしまい、マシロはガーツと自分の頭を搔いた。

何をムキになっているんだ。

そもそも身内の不始末を埋める為に付き合っているのに、彼に悪感情を抱いて良い訳がないだろう・と。

マシロは努めて意識を切り替える事にした。

「あくまでも、今のお前のレベルを考えれば物足りないっただけだ。

新米冒険者の中じゃ頭一つ抜けてるよ」

「ほ、ホントに!?!」

ベル・クラネルの顔がズイツと接近した。両手には彼の手が被せられており、キラキラした紅色の瞳が、真っ直ぐマシロを捉えて離さない。

「いちいちオーバーなりアクション取るんじゃないやねえ。気色の悪い奴め」

ベルの顔面を右手で押し返しながら、また悪態を吐いてしまったと内心反省する。

彼が心根の優しい少年である事は分かっている。

分かっているながら癩に触ってしまうのは、マシロの心が汚れているからだ。

彼の態度に苛立てば苛立つほど、その事実が浮き彫りになる。

だから落ち着けと、必死に自分自身を諫めた。

何故、こんなにも気持ちが悪撫でされるのか……その見当を付けられないまま、マシロはベルと共に、更に奥へと歩を進めた。

薄暗い迷宮の内部は、まるで醜い腹の中の様で、自分の内側をひた歩いている様な、そんな錯覚を覚えた。

第九話

地上へと顔を出すと、既に空は朱色に染まりかけていた。随分と長い時間ダンジョンに潜っていた様だ。

隣を歩く白髪の少年、ベル・クラネルは、疲れ切った足取りを隠せないでいる。

「ボク、あんなにモンスターを倒したの初めてです……」

ホクホクとした顔で、馬鹿みたいに明るいうちに出しながら、ベルは布袋を宙に掲げた。

中にはパンパンに魔石が入っている。

それが計4袋。

全てが上層域のモンスター産の低品質品ではあるが、塵も積もればなんとやら……換金すれば、それなりの額になるだろう。

そんな物をこれ見よがしに掲げているのだから、危なっかしいと言うのが、マシロの正直な感想だった。

「……あまり戦利品をひけらかすなよ。余計なトラブルに巻き込まれたくなければな」

「え？ あ、はい」

指摘すると、ベルはおずおずと袋をバツクパツクに仕舞い込む。

顔を見る限り、此方の意図を完全に汲み取ったという訳ではなさそうだ。

マシロは、ため息を吐いて口を開いた。

「最後に忠告しておいてやる」

「ちゆ、忠告？」

頭に疑問符を浮かべる新米冒険者。

マシロは先輩冒険者として、彼にとって耳の痛いセリフを吐き出した。

「お前はカモだ」

「ええええ？」

ギョツとする白兔。

その声に、近くにたむろしていた数名の冒険者が此方を向いたが、マシロは構わず続けた。

「正確に言うと、『お前等の様な駆け出しの冒険者は』だがな。右も左も分からない新参者から金や魔石、ドロップ品を巻き上げようとする輩は存外にいる」

「そんな……、冒険者がそんな事……」

「お前がどれだけ否定しようと、それが現実だ。誰も彼も、物語の英雄の様に、高潔な精神を持っている訳じゃない」

「……！」

ダンジョン内にて、マシロはベルの身の上話を少しばかり聞いていた。

英雄に憧れてオラリオを訪れ冒険者となり、『はーれむ』なる物を求めてダンジョンに潜っている。

そして、英雄にもなりたいのだという。

人の夢をとやかく言う義理はないが、随分と俗な目的だと思ったのは事実だ。

だからという訳では無いが、少しだけ彼の幻想を砕いてやりたくなった。

オラリオⅡ 『英雄が生まれる都』

その解釈は、別に間違っではない。

事実、フィンやオツタルを始めとした傑物達が軒並み集結している。

彼らの轟く名声を聞いているのなら、確かにオラリオや冒険者に対し、好意的な感情を抱くのも不思議ではない。

けれど、光ある所には影がある。

華やかな『英雄候補』達の陰で、一般の冒険者がどの様な活動をしているのか等、外部の人間は知る由もないのだ。

「……冒険者なんてのは基本、無法者の集まりだ。真つ当な方法で飯が食えないから、仕方なく化物と戦う道を選んだ社会不適合者が大半。そんな連中に、良識を求める方がどうかしてる」

「……」

ベルは絶句している。

冒険者達の実情を聞いて放心しているのか、それとも憧れを悪く言われて憤っているのか。

それは分からないが、マシロは構わず続けた。

「気を付けろよ。俺も含めて、いつ誰が出し抜いてくるか分からねえんだからな」

「あ、その……。うん……」

弱々しいベルの声が鼓膜を突く。

漸く、マシロが何を言いたいのかを理解できたのだろう。

大多数の冒険者に一般的な倫理観など通用しない。

油断したら喰われる。

だから、ホイホイと先達に付いて行くのは命取りだ。

これで、彼も少しは『警戒』という物を覚えるだろう。純粋なままでは、この都市では生きてはいけないのだ……。

けれど、次いで出たベルの言葉は、こうだった。

「ありがとう」

……は？

マシロは耳を疑った。

聞き間違いだと思った。

顔を上げると、彼は困り顔で頬を搔いており……。

「わざわざ忠告してくれて。そうだよ。世の中、どんな人がいるか分からないもんね。教えてくれてありがとう」

「……伝わらなかつたみたいだな。俺は、目の前の奴も警戒しておけと言った筈だが？」

「や、でも、僕を騙そうとしてるんだったら、余計な入れ知恵をする必要がないし……」

「馬鹿が。お前の油断を誘う方便かも知れないだろうが……」

「うーん。それでも大丈夫じゃないかな……？」

「なぜ？」

「うまくは言えないけど……。勘……？」

ベル・クラネルは、そんな世迷言を呟いて、また笑った。

困った顔のまま、微塵も此方に警戒心を見せずに、マシロの事を心底信用しているのが伝わって来た。

「……ッ」

歯が軋む音を聞いた。

血の味が、口内にじんわりと広がる。

握り込んだ爪が、薄皮を貫く痛覚が脳を支配する。

ベルの発言は、マシロには全く理解できないモノだった。

いつそ腹立たしいくらい意味が分からない。

冒険者にとって、『それ』は決して美德ではない筈なのに。

なのにどうして、こんなにも眩しく見えるのか。

「無駄話が過ぎたな……。さっさと換金に行くぞ」

マシロはベルから顔を背けたまま、逃げるように歩き出した。

：

エイナ・チュールのエメラルドグリーン色の瞳が、見知った白髪を捉える。

それは、澄んだルベライトの瞳が印象的な、線の細い少年だった。

最近冒険所登録をし、自身の担当冒険者となった男の子。

ベル・クラネルが、魔石を換金している。

時間的にも、恐らくはダンジョン帰りなのだろう。

今日も無事、あの少年は生き残った。

その事実にあ堵しつつ、エイナは換金所の前にいる彼に近付いて行く。

「あれ？」

すると、彼の隣にもう一人、換金作業を行っている冒険者がいる事に気が付いた。

ベルの胸ぐら位置にある銀髪は、少年の白髪と良く似ている。

一見すると年齢の離れた兄弟にも見えなくはないが、エイナは、その可能性を頭の隅に追いやった。

銀色の髪に小人族と見紛えるほどの小柄な体格。

この特徴に該当する冒険者を、ギルドの受付嬢たる彼女は知っていたからだ。

「こんにちは、ベル君」

換金を終えるタイミングを見計らって、エイナはベルに声をかける。

すると、花のような笑顔が此方を向いた。

「エイナさん！ こんにちは！」

嬉しそうに挨拶を返して来る姿は、まるで無邪気な子供だ。

十四歳の彼にそんな感想を告げたら流石に気を悪くするだろうか
ら口にはしないが、素直に可愛らしいと少年だと思う。

だから、エイナはついついお姉さん風を吹かせてしまう。

「ダンジョン帰りだよ？ 今日はどうだったのかな？」

「はい。今日は彼とダンジョンに潜って、戦い方を教えて貰っちゃいました」

タハハと少し気まずそうに後頭部を掻きながら、ベルは身体を引いて、連れ立っている冒険者を見せて来る。

そして、露になったその顔を見て、エイナは自身の予想が的中していた事を知った。

「マシロ・ヴァレンシユタイン氏……。『ロキ・ファミリア』の中堅冒険者が、どうしてベル君と？」

「……別に、単なる成り行きだ」

「最大派閥の団員と、新米冒険者がパーティーを組む成り行きですか……」

「随分含みのある言い方だな。よほどコイツの事を気にかけているらしい」

「……」

エイナはそつと唇を噛んだ。

心理を見透かされている。

だとしたら、迂遠な質問では全て躲されるだけだろう。

エイナは佇まいを直し、素直に尋ねる事にした。

「失礼致しました。ですが、私はクラネル氏の担当アドバイザーですので……。できれば、パーティーを組むに至った経緯をお聞かせ願いたいのですが……」

ベルが他の冒険者とパーティーを組むこと自体は喜ばしい事だ。単純に生存率が上がるし、ダンジョン攻略の効率も跳ね上がる。

ガラの悪い冒険者に無理を強いられる形で……。というのなら反対だが、マシロ・ヴァレンシユタインはそういった類の冒険者ではない。少なくとも、エイナはその様に認識している。

けれど、彼は大派閥の所属だ。

本来であれば、ベルがパーティーを組める様な相手ではないし、そもそも面識だつて持てない筈。

そんな相手と肩を並べて歩いているのだから、気になるのは当然だろう。

エイナ・チュールと言う個人としても、一ギルド職員としても見過ごせない。

これは、自分が過保護だからなのだろうか……？

一瞬過つたそんな疑念を振り払い、マシロの返答を待つ。だが、それより早くベル本人が釈明を開始した。

「え、えっと、特に変な事とかはないんです。ただ、アイズさんの代わりに気を使って……」

「ちよつと待つて、ベル君。なんで、そこでヴァレンシユタイン氏……【剣姫】氏が出て来るの？」

更なる爆弾の投下に、エイナは思わず説明を遮ってしまった。

完全に委縮してしまっているベルの様子に「しまった」と後悔しつつ、彼が口を字開くのを待つ。

「じ、実は……」

ベルからの説明を聞いて、エイナは更に頭を抱える事となった。

「全く、君は怖いもの知らずだねえ、ベル君。あの【剣姫】に隠れて稽古をつけて貰おうなんて……」

「あはは、成り行きで……」

成り行きで・じゃないよ。と、内心愚痴を零す。

正直、寿命が縮むかと思った。

ベルのこの行為は、多くの敵を作る事と同義だろう。

ロキ・ファミアリアは勿論、アイズ・ヴァレンシユタインのファンたちにも脱兎のごとく嫌われかねない行いだ。

ベル自身、アイズに気があるので余計に質が悪い。

これで、もし本当に恋人関係になった日には……。

弟分の凄惨な未来を想像し、エイナは身震いを覚えた。

「ヴァレンシユタイン氏。この事は……」

「言わねえよ」

「ありがとうございます……」

エイナはマシロに深く頭を下げた。

そして、顔を上げた後、おずおずと尋ねる。

「それと……ベル君とはこれからもパーティーを？」

「いや、そんな予定は無いが……」

「そう……ですか」

マシロの返答に、エイナは内心ホツとしてしまった。

すぐ隣で肩を落としているベルには悪いが、正直彼とはこれ以上関わって欲しくはない。

彼……【リトル・アイズ】は、異質な経歴を持った冒険者だ。

姉の所為で目立たないが、エイナはギルド職員故に、その馬鹿げた軌跡の一部を知っている。

マシロ・ヴァレンシユタインは、レベルアップの際、必ず格上の相手を屠り去っている。

それ自体は別に珍しくないが、彼の場合は『単独』でという言葉が付与される。

格上のモンスターに複数人で挑み、その際に得た良質な経験値を糧にレベルアップした訳では無い。

L v. 2 上がる際は、L v. 2 相当の大型モンスターをたつた一人で撃破し、L v. 3 に器を昇華させた際は、闇派閥の残党……極悪非道なL v. 4 の冒険者をタイマンで打ち破る偉業を成している。

撃破した相手が闇派閥の残党と言う事で、市民に余計な不安を与えぬ為にと、詳細を伏せた上でのレベルアップ告知となったが、そうしていなければ彼の名はもっと有名になっていただろう。

彼は、ベル・クラネルとは何もかもが違う。

彼の基準で戦っていたら、か弱い白兔は直ぐに死んでしまうだろう。

『冒険者は冒険してはいけない』。

【リトル・アイズ】は、まさしくその戒めの真逆にいる存在だ。

間違っても、ベルに師事して欲しい人物ではない。

「今日は、ありがとうございます。担当アドバイザーとして、私からもお礼を申し上げます」

エイナはマシロに対し、慇懃に腰を折る。

頭の上からは鼻を鳴らす音が聞こえて来た。

次いで、小さな体が動き出す気配も。

「そ、それじゃあエイナさん。また」

顔を上げると同時に、今度はベルがバツと頭を下げて来る。

そして、慌てた様子でマシロの後を追いかけて行った。

その後ろ姿に手を振りながら、エイナは一抹の不安を感じるのだった。

：

僕は、マシロを追いかける形でギルドを後にした。

なんだかエイナさん、僕がマシロとパーティーを組むことを余り良く思っていなかったみたいだけど……やっぱり他派閥の、しかもロキ・ファミリアの冒険者に特訓を付けて貰うのは色々問題があるんだろうか……。

でも……。

僕は、まだ……もう少しだけ、マシロとダンジョンに潜りたかった。まだまだ色んな事を教えて貰いたい。

それに、あの人に……アイズさんに告白された悩み事もある。

おせっかいかも知れないけど、少しでも力になれたらって、そう思うんだ。

だから、僕は意を決して彼に頼んだ。

「その……、マシロ。また明日も、僕とダンジョンに潜ってくれない……かな？」

ちらりと、銀色の大きな瞳が僕を貫く。

綺麗な瞳だ。本当に、アイズさんと良く似ている。

「……なんだ。てつきり明日は、隠れてアイズと落ち合うと思っただが」

「え？ え？ いや、そんな」

正直そうしたい下心はある。

多分来てはくれないだろうけど、明日市壁の上に行つて、もしアイズさんが待っていてくれたらと思うと、かなり後ろ髪が引つ張られる。

けど、そうじゃないんだ。

僕の軽率な行動で色んな人に迷惑をかけて、色んな人に注意された。

その上で、僕はまだマシロと一緒にダンジョンに潜ろうとしている。

あまり褒められた行為じゃないのを分かっているながら、性懲りもなく打診している。

「僕は君と……て、どうしたの？」

マシロは、僕ではなく何処か遠くを見ていた。

其方に視線を向けるけど、特に何かがある訳じゃない……と思う。いや、よく見ると、マシロは一点を見つめている様でそうじゃない。どこを見ているのか、正確な位置を悟らせない様な目配せだ。

一体どうして、彼はそんな事をしているんだろう？

そう疑問に思っていると、マシロは徐に答えた。

「良いぞ。何処でいつ落ち合う?」

「え!! そ、それってつまり……」

「いちいち驚くな、鬱陶しい。一緒に行つてやると言ってるんだ」
「本当に?!!」

僕は嬉しさのあまり、マシロの白い手を掴んでしまった。

当然嫌そうな顔をされてしまったけど、僕の勢いに引いてしまつて
いるのか振り解こうとはしてこない。

「ありがとう!・じゃあ、明日のお昼に、バベルに集合ね!」

マシロの小さな頭がコクリと頷く。

次の瞬間、僕の手を振り払つたマシロは「じゃあな」という言葉を
残して、帰路についた。

僕はその背中が見えなくなるまで見送つた後、明日の事を考えて胸
を躍らせる。

あの日の晩。

アイズさんが泣きながら走つて、僕にぶつかったあの日から、少し
ずつ『弟さん』の事について相談されるようになった。

相談と言っても、僕なんかが助言できる事なんか殆どなかったか
ら、只彼女の話を聞いていただけなんだけど。

それでもアイズさんは僕に感謝してくれて、特訓を付けると言つて
くれた。

だから、僕はそのお礼がしたいんだ。

全く役に立っていない僕に、アイズさんは感謝をくれた。

それが、とても嬉しかったから、僕はあの人に何か返したい。

アイズさんの望みである『弟との仲直り』の手助けをしてあげたい。
だから、マシロと話すんだ。

少しずつ。それでも確実に。話して、二人の不和の原因を探る。
そして――。

僕は決意を固めながら、そんな思考に囚われていた。

だから、すぐ下から聞こえて来る声に、直ぐに気づくことが出来な

かったんだ。

「お兄さん、お兄さん。白い髪のお兄さん」

小動物のように人懐っこい声音が、鼓膜を擦る。

驚いて視線を落とすと、真っ先に飛び込んで来たのは、大きなバッグだった。

そのバッグに不釣り合いな小ささの少女が、クリツとした目を僕に向けていた。

「初めまして、お兄さん。突然ですが、サポーターを探してはいませんか？」

「えっと、君は……？」

たどたどしく聞くと、女の子はニコリと微笑む。

「混乱しているんですか？ でも、今の状況は簡単ですよ」

「冒険者さんのおこぼれに預かりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来ているんです」

それが僕と、リルルカ・アーデの出会いだった。

第十話

微睡のなか目を覚ます。

綿毛の様な塊が頬に触れた。

フワフワと柔らかい。

それはまるで、太陽の光をパンパンに浴びた布団であるかの様だった。

しかし、自分の持つどの寝具とも微妙に感触が違う。

今まさに頭を埋めている枕とも、身体を支えているマットとも、聖母のように包み込んで来る毛布とも。

まるで、生きている様な温もりを感じた。

とても良い。

匂いも、触り心地も、肌に感じる暖かさも。全てが、少女にとってベストだった。

ベッドに紛れ込んだ異物だが、彼女はそれを抱き寄せる。

太陽の匂いが鼻孔を擦り、更なる微睡へと落ちて行きそうになった。

しかし、もぞりと、それが動く。

顔を上げると、驚いた。

なんと寝具には顔が付いていたのだ。

否、寝具だと思っていた物は、小さな男の子だった。

あどけない顔で両目を擦っているのは、どこからどう見ても少女の『弟』で……。

弟は姉の顔を見て、花のように笑う。

「おねえちゃん、おはよ」

そして、人懐っこく擦り付いてきた。

つられて両腕を回すと、小さな小さな丸い身体が、すっぽりと胸の中に納まる。

本当に小さい。

体格的に、まだ三歳そこそこと言った所だろう。

弟は、つい最近十二歳になった筈なのに。

「これは……夢？」

きつとそうだ。

少女は、自分が十六歳であると自覚しながら、無邪気な弟を抱きしめた。

例え夢でも、大好きな弟と触れ合えるのだ。

こんな機会を棒に振るなんて勿体ない。

こんな夢を見る自分を現金だとは思いつつ、少女は彼の心臓の音に聞き入っていた。

「ねえ、シロ」

「なあに？」

名前を呼ぶと、ズングリと丸っこい顔が上げられる。

もう本当に、いちいち仕草が可愛らしい。

自然と頬が緩むのを自覚しつつ、尋ねる。

「シロは、お姉ちゃんのこと好き？」

「すきー」

「そっか」

思った通りの返答だ。

幼い頃の彼なら、こう返してくれると確信していた。

分かっただけはいたとは言え、嬉しいものは嬉しい。

「おねえちゃんは、ボクのことすき？」

「大好きだよ」

当然、その様に答えた。

それ以外の返答など有り得ない。『大好き』という言葉以上の愛情表現を仕入れればその限りでもないが、現状の彼女の語彙ではそれが最上級だ。

「えへへへ」

嬉しそうに弟が笑う。

どうしてこの子はこの様なにも天使なのだろうと、姉馬鹿丸出しの思考が脳内を駆け巡る。

お餅の様な頬を夢中になって揉みくちやにしていると、不意に情景が変わった。

ふかふかのベッドの上から、固い地面に立っている。

左手には人肌が感じられた。

視線を落とすと、そこには弟の姿がある。

さつきより、少し大きい。

「ねえちゃん！ 早くいっしょ！」

舌足らずな発声も、若干鳴りを響めている。

多分、五歳くらい。

利発的な面が存分に表に出ていた時期。

先程とは、また別種の天使具合を発揮していた時代。

姉は、元気な弟を微笑ましく思いつつ、引かれるままに付いて行く。

「どいこくの？」

「お墓！」

「……え？」

元気いっぱいに場違いな単語を吐くものだから、なんて？ と、つい聞き返しそうになってしまった。

しかし、疑問を表に表す前に、目的地に辿り着いてしまった様だ。

一瞬前まで、オラリオのメインストリートにいた筈なのに……、少女の眼前には硬い墓石が飛び込んで来た。

静謐な雰囲気と、生温いそよ風が、妙に煩い心臓を鷲掴みにする。

「し、シロ？」

「なーに？」

「どうして……お墓なんか？」

「んー？」

この相槌を境に、また弟の声の高さが変わった。

「姉ちゃん、会いたいんでしょ？」

先程より、また少しだけ落ち着いた声音。それが弟の口から奏でられる。

彼は笑顔だ。

純粋な笑みだ。

可愛い。

天使。

の、筈なのに……少し怖いと、アイズ少女は思ってしまった。

「あ、会いたいって……」

誰に？

と続けようとする、瞬きした瞬間、再び弟の姿が成長する。

もう、彼から笑顔は消え失せていた。

「ほら、来たぞ」

「……？」

「お前の絶望の根源が——」

彼が指差す先を見て、少女アイズは目を見開く事になった。

「……！」

忘れる筈がない。見間違える訳がない。

そこに居たのは、弟にも並ぶ『最愛』。

「お父さん……。お母さん……」

気が付くと、アイズは駆け出していた。

ピッタリと肩をくっつけている両親の中間に飛び込む。

母と父は、十六歳の娘のタックルを優しく受け止めてくれる。頭を撫でてくれる。

暖かな掌の温もりが伝わって、アイズは泣いた。

わんわんわんと、幼子の様に。

言葉にならない声で、これまでの事を喋り出した。

それを、アリア・ヴァレンシユタイン達は、うんうんと聞いていた。どれくらい時間が経ったのだろうか。

ひとしきり泣き終えた所で、アイズは弟の存在を思い出す。

弟が物心つく前に、両親はこの世を去った。

だから、この温もりを、父と母を独り占めしてはいけないと、姉心が働いたのだ。

「おとうさん、おかあさん。あのね、シロもいるの」
そう告げながら、身を引く。

母達の視界に、弟の姿を入れる為に。
だが――。

「シロ……？」

弟は、距離を取っていた。

「離れすぎず近すぎず。」

けれど、何が起きても必ず対処できる位置取り。

まるで、モンスターと対峙する時の様な重心の置き方。

「どうしたの？ おかあさんたちだよ？ ほら……」

そう言つて視線を上げると、両親の真剣な面持ちが眼に入った。

「えっ？」

とても、息子との感動の再開という雰囲気ではない。

そう言えば、幼い弟は、両親とどの様に接していただろうか？

自分や母に甘えていた姿は思い出せる。

けれど、父親は？

おとうさんは、この子をどんな目で見ていた？

いつものように、足にじゃれつこうとした彼を、奴はどの様に扱つた――？

次の瞬間、父親は剣を鞘から引き抜いた。それを、あろうことかマシロに向ける。

「激烈な殺気を飛ばしている。」

「はっ？」

呆けた声が出てしまう。

理解が追い付かない。けれど、そんなアイズの事を、展開は待つてくれなかった。

「……『目覚めよ』テンベスト」

弟が風を纏う。

当然だ。この様子は只事ではない。

幾ら、父親相手と言つても、身の危険を感じて当たり前。

「うおおおおおおおおお!!!」

けれど、その行為が父を刺激してしまったらしい。

咆哮が上がる。

最早、声そのものが破壊力を帯びている。

これが、Lv. 8のイカレ振り。

「ど、どうしたの!! おとうさん! シロだよ!! わからないの!!」

アイズは叫ぶ。

けれど、父には届かない。

聞く耳を持たず、風を纏う弟の元へ、一直線に駆けて行った。

利き手には、万の獲物を引き裂いて来た凶刃がギラついており

……。

「やめて……っ!」

剛腕で、その得物が振り下ろされる。

弟の風は、空気と変わらず斬り裂かれ――。

「やめてええええええええええええええ――ッ!!!!!!」

まるで、夢の中の自分の絶叫に叩き起こされるかのように、アイズ・ヴァレンシユタインは現実で瞼を持ち上げた。

「はあ……はあ……はあ……」

上体を起こして、辺りを見渡す。直ぐには状況を理解できない。

私の部屋だ。

遅まきながらそう理解すると同時に、色々と呑み込めてきた。

「夢……」

ぽつりと呟く。

同時に零れたシズクが布団を濡らす。

「今のは……なに……?」

妙にリアルな。

しかし、有り得ない父親の凶行。

クシヤクシヤになった顔を、アイズは両手で抑えた。

:
:

アイズが食堂に着いた時、既に時刻は十一時近かった。物凄く半端な時間だ。

朝飯には遅く、昼食には早い時間故、食事を摂っている団員は少ない。

殆どがアイズと同じ寝坊組だろう。

そんな中で、明確に彼女の視線を奪った人物がいた。

弟の、マシロ・ヴァレンシユタインである。

あんな夢を見た後だからか、彼の姿に安堵してしまった。

良かった、どこも怪我をしていないと。

彼は既に食事を終えている様で、食器を洗い場に持って行っている。

そして、出入り口のある、此方に歩いて来た。

アイズと、目が合う。

ドクンと、心臓が跳ねる。

その距離が詰まって行く。

彼の一步一步の小さな足音は、近づくにつれて自身の心音に掻き消された。

そして、遂に互いの距離がゼロになった。

「あ、の……」

口から言葉が出かかる。

けれど、それを意にも介さず、弟は姉の横を通り抜けた。

「……ッ」

分かっていた筈なのに。

予期できた行動の筈なのに、アイズはとても苦しかった。

あんな夢を見た所為だと、そう思う。

そして、あんな夢を見てしまったのは、自分の中で彼と触れ合いたい欲が上限に達してしまっているからだろう。

フィンは、少し様子を見るように言った。

彼の機嫌が直るまで待った方が賢明だと。

けれど、本当にそれで良いのだろうか……？

一度は納得した立場からして、疑問に思うのは筋違いかも知れないが、どうしても考えずにはいられない。

こうして、手をこまねいている間に、関係修復不可能な程、彼の心が離れてしまうのではないか。

今からでも、引き止めて、謝って、全てを打ち明けてしまった方が良いのではないか。

それとも、この感情も、単に自分が楽になりたいだけなのだろうか？

誠意という意味では、さっさと謝ってしまうにこしたことは無い筈だが……。

けれど、自分の感情をぶつけて、もし気持ち悪がられてしまったら……。

そう思うと、委縮してしまう。

無難な現状維持を選んでしまいそうになる。

けれど、それでは良くないと叫び続ける自分もいるのだ。

いい加減、フィンヤリヴェリアに頼るのではなく、自分で考えて行動しろと。

他人に言われた通りにするのではなく、しっかり自分の行いに責任をもてと。

だから、アイズは一步だけ前に踏み出した。

いや、一步と言うには余りにも小さな一步である。

話しかけるなんてトンデモナイ。

けれど、こっそり彼の後を付いて行く事にしたのである。

装備を見る限り、彼はこれからダンジョンに赴く筈だ。

これまで、ホーム内や街に出かける彼の様子をこっそり見守っていた事はあった。

しかし、複雑迷奇なダンジョン内は別である。

この行動に、どんな意味があるのかは分からない。

単なるストーリーカー紛いの行為に終わるかも知れない。

それでも、アイズ・ヴァレンシユタインは動かずにはいらなかった

ただ。

：

第一級の経験値をフルに活用し、絶対にバレないように弟の後を付ける。

彼の目的地はやはりダンジョンだった。

その穴を塞ぐ、バベルへと辿り着く。

彼は誰かを探している様だった。

キヨロキヨロと、小作りの顔が辺りを見渡す。

待ち合わせの相手は、女の子じゃないと良いな……。

そんな事を思いながら様子を伺っていると、一人の冒険者が弟に向かって手を振って来た。

処女雪のような髪を持った男の子だ。

随分可愛い顔立ちだが、体格や装備から考えても『男』で間違いないだろう。

そう安堵すると同時に、アイズは待ち合わせの相手が自分の知る人物である事にも気が付いた。

ベル・クラネル。

ひよんなことから、自分の相談を聞いてくれた心優しい男の子である。

どうして弟とベルが、と一瞬疑問に思ったが、直ぐに合点が行った。

マシロも負けず劣らず優しい男の子である。

恐らく、昨日勝手に走り去ってしまい、一人になってしまったベルに同情し、稽古の続きを付けてくれていたのだろう。

そして、意気投合し、バベルで待ち合わせする仲になったという訳だ。

アイズはそう解釈して、微笑ましいものを感じた。

弟に、男の子の友達ができるのは大歓迎である。

そして、その相手がベル・クラネルというのは願ったり叶ったりだった。

いくら男の子であっても、素行の悪い子と仲良くなるのは、お姉ちゃん的には好ましくはない。

などと思っていると、ふと、違和感に気が付いた。

合流したと言うのに、二人はいつまで経っても動き出そうとしな
い。

まだ、誰か待っているのだろうか。

そんな疑問に対する答えは、直ぐに現れた。

トコトコトコと、四角い物体がマシロ達の元へ近付いて行く。

ベルが、小さく手を挙げた。

マシロが少し驚いた顔をしているのが分かる。

そして、アイズにも分かった事があった。

マシロ達に合流したもう一人……それは、小さな女の子だった。

「……………」

第十一話

当然の話ではあるがダンジョン攻略に於いて、単独と複数では、探索効率に天と地ほどの差が生まれる。

頭数が増えた分、単純に対処できるモンスターの数が増えるというものもあるが、360度どこから敵が出現するとも知れない中、周囲を警戒する眼が増えると言うのが、最も大きな点だろう。

「はあ……！」

ありふれた迷宮の通路。

その右手に出現したモンスターが、白髪の新米冒険者の手によって斬り裂かれた。

同時に彼は、凄まじい反応速度で左側に現れていた怪物にも斬りかかる。

——瞬間、サポーターの声が響いた。

「また右から来ます……二体！ 後方からも……！」

「……くっ！」

的確な状況説明だ。

しかしそれ故に、冒険者は一瞬身を固まらせた。

右と後ろ……どちらのモンスターを先に処理したらいいのか迷っている。

それが伝わってくる。

ここで、パーティーメンバーの少年が動いた。

「おたつくな。後ろは俺がやる」

「う、うん！」

彼の簡潔な指示で、少年の紅色の瞳から迷いが消える。

「はあああああ！」

気合の入った雄叫びと共に、新米の白兎は二体のモンスターを屠り去った。

：

幾つかの戦闘を終え、ルームに辿り着いた一行は、小休止を取る事

にした。

念入りに壁に傷をつけてから、冷たい地面に腰を下ろす。

一息つく中、パーティーの中心人物たる白髪の少年……ベル・クラネルが口を開いた。

「さつきはありがとう、リリ、マシロ。二人のお陰でなんとかなつたよ」

その言葉に、彼と臨時パーティーを組んでいる冒険者、マシロ・ヴァレンシユタインはこれまでの戦闘を思い起こした。

今回は昨日より一つ深い階層に潜っている。

故に、モンスターのレベルはともかくとして出現頻度は増している印象だ。

対面の一対一ならば、最早ベル・クラネルが遅れを取る事はないだろう。

しかし、側面や背後からの複数体の強襲には、どうしたって反応が遅れる。

恐らく、単独ではまだ捌き切れない筈だ。

だから、ベルの感想は正しい。『二人のお陰』というのは、謙遜でもなんでもなく正にその通りだ。

しかし――。

「そんな事はありません！ リリに出来る事は所詮、遠巻きにモンスターの有無を伝える事だけ……モンスターを倒しているのは、ベル様の実力あってこそです！」

リリルカ・アーデ。

昨日ベルが契約を結んだらしいサポーターの犬シアン・スロープ人は、手放しに契約主を褒めちぎる。

まあ、契約相手にべんちやらを使うのはおかしな話ではないが……。

「そ、そうかな……？」

言われた相手が真に受けてしまうのは問題だ。

新米であるベルには、圧倒的に経験が足りない。

他者から下される評価が適切か、持ち上げなのかの判断が出来ない

のだ。

故に、頬を緩めるのも仕方のない事なのだが……もし彼女と二人きりでパーティーを組んでいたと思うとゾツとする。

そして次の瞬間、サポーターは何食わぬ顔でトンデモナイ提案をしてきた。

「どうですか？ 正直この階層のモンスターでは歯ごたえがありませんし……もう一つ下の階層に降りてみては？」

「え？ も、もう一つ？」

唐突な進言に、流石にベルも困惑の声を漏らす。
当然だ。

石橋を叩いて渡るが通説のダンジョン攻略に於いて、このサポーターは全く真逆の事を言ってきたいるのだから……。

何より、冒険者^{自分}がいるというのに、そんな舐めた提案……。

いったいどんな思惑での発言なのかと、マシロは少し、彼女の言い分を聞いてみる事にした。

「大丈夫です！ 何人もの冒険者様のお手伝いをしてきたリリの目に間違いはありません。ベル様の實力なら、この下の階層でも通用します！」

「でも、この階層に来たのだから今日初めてだし……」

「實力に見合わない所でいつまでも足踏みをしている理由はないでしょう？ それに、今回は「リトル・アイズ」様も同行してくれていきますしね」

「え……？」

「ベル様もご存じの通り、「リトル・アイズ」様はLv. 3。第二級冒険者です。本来なら、こんな上層域にいる方ではありません」

「う、うん……」

「リリとベル様だけなら確かに自殺行為ですが、彼がいる今なら一つと言わず、二つでも三つでも——」

「ちよ、ま、待ってよりり……!?!」

どんどんヒートアップしていくリリルカの熱弁を、ベルは青い顔で遮った。

サポーターは一瞬目を見開きながらも、次の瞬間には混じりけのない笑顔に戻っている。

「すみません、ベル様。サポーターの分際で差し出がましい提案をしてしまいましたね……。勿論、決定権はリリには有りません。最終的な決断はベル様が」

淀みない口調でその様に言われ、ベル・クラネルは眉をハの字にして、マシロの顔を伺い見た。

まるで、か弱い子兔が意見を、助言を乞うかのように……。

——まあ、流されなかつただけ上出来か……。

そう溜息を吐いて、マシロは助け舟を出した。

「下りたきや下りろ。但し、その場合はあのアドバイザーに報告させてもらう」

「ヒ……ッ!?! こ、この階層にします!」

エイナ・チュールの折檻を想像したのか、ベルは短い悲鳴を挙げながら宣言する。

その宣言を受けても……自分の提案を否定されても尚、リルカの様子一ミリもは歪まなかつた。

本当に思惑が読めない。

いつそ不気味なくらいだが、マシロは飲まれまいと彼女に忠告する。

「おい、サポーター。今の内に言っておくぞ」

「はい。なんででしょうか?」

人形のように精緻な表情がマシロに向けられた。

相手に一切嫌悪感を与えないであろう完璧な笑顔。

リルカ・アーデは、それをずっと張り付けている。

一部の隙もなく……まるで、感情を読み取らせないと言わんばかりに。

しかし無駄だと、マシロは内心で嘲った。

ずいぶん大層な役者ぶりだが、最初から疑ってかかった俺の勝ちだと……。

マシロは昨日、ギルドを出てベルと別れる直前……もつと正確に言

うなら、ベルにまた一緒にダンジョンに潜って欲しいと打診される直前、『誰かの視線』を感じ取っていたのだ。

無論、『誰かの』と表現している以上、視線の主は分かっている。けれど、その種類は判別できた。

端的に言ってしまうえば、あれは『ハイエナの視線』だ。

右も左も分からぬ新米を狩ろうとする猛禽類の匂い。

そんな視線が、ベルに注がれているのを感じ取ったからこそ、パーティー継続を承諾したのである。

だから、ベルからサポーターと契約を結んだと聞かされた時は、正直驚きを隠せなかった。

このタイミングで彼と接触してくるような人物を、とても白とは思えなかったからだ。

十中八九、あの視線の主か、その関係者だろう。

つまり、勝手知る先達冒険者との関りを仄めかしたというのに、それでも構わずアタックを仕掛けて来たという事だ。

どう考えても愚策。嵌める相手としては不適切な筈なのに……。

ハッキリ言ってみれば、このリリルカ・アーデの内心が読み切れなかった。

しかし、信用してはいけないという事だけは確かだろう。

「当面、攻略進度の判断は俺が下す。お前の意見は不要だ」

「……」

リリルカの返答は無言。

しかし、反感を顕わにしている訳では無い。

一ミリも動かぬ微笑みを、そのままマシロに向けてきている。

「俺もいつまでもコイツとパーティーを組む訳じゃない。暫くこの階層で、最低限の状況判断能力を磨かせる」

「なるほどなるほど、分かりました。つまり、『冒険者様の腰ぎんちゃくであるサポーターの判断は、信用には値しない』という事ですね？」

「そうだ」

リリルカの解釈に即答してやる。

すると、即座にベルから非難を帯びた声が上がった。

「ま、マシロ!？」

しかし、それを無視して「リトル・アイズ」はサポーターをなじり続ける。

「お前は今日ダンジョンに潜る時も、進出階層を伸ばす様に提案していたな。それに関して俺も了承したが、これ以上は未だ無理だ。見当外れな戯言を聞き入れて、コイツの命を危険に晒す訳にはいかな
い」

「ちよつと、マシロ……そんな言い方……!」

「いいんです、ベル様。お気になさらないで下さい」

「リリ……、でも……」

ベルを「どうどう」と制しながら、リリルカは悲しみを孕んだ……どこか諦めた様な微笑を湛えた。

まるで、冒険者からの不当な扱いは慣れていても言いたげな、悲し気な表情。

十二分に、相手に哀愁を感じさせる演出だ。

「実際に戦闘を行う冒険者様の嗅覚の方が何倍も正確です。所詮、リリ達の様なサポーターは、端で冒険者様たちの戦いを見ているだけ……。こここそ安全圏でサポートに回っているから、万年Lv.1ですすね」

「リリ……」

ベル・クラネルは呟く。

その声音には多分に同情の色が含まれている。

そして、リリルカは、あざとくバツと頭を下げた。

「差し出がましい提案をしまして、本当に申し訳ありませんでした……!」

驚くベルを尻目に、サポーターは細い声音を奏で始める。

「リリは、役立たずのサポーターです。何人もの冒険者様を見てきたとは言いましたが、ここ最近は落ちこぼれの悪評が広まって全然契約が取れないのが、現状でした」

滔々と語り始めたリリルカは、やるせない告白内容と連動するように、ギョツと拳を握りしめた。

「だから、ベル様が雇ってくれて、とても嬉しかった。こんなリリを必要としてくれる人がまだいるんだって……。だから、少しでもランクアップのお助けをしたくて……。理に適わぬ提案を……」

「そんな、リリが責任を感じる様な事じゃ……」
ベルがフォローの言葉を口にした瞬間、再びリルカは頭を下げた。

タイミングを図ったかのように、何度も、何度も。

「すみません！ 申し訳ありません！ あろう事か、冒険者様を危険に晒そうとするなんて……！」

ボロボロと涙を流すサポーターに対して、ベルはあたふたするのみだった。

マシロも、流石に度肝を抜かれている。

十中八九、この悔恨の言葉は嘘だ。演技だ。

しかし、だとしたら途轍もない演技力である。

人はこんなにも自在に涙を流せるものなのだろうか……？

そして、そんな二人の間隙について、リルカは涙で腫らした顔を上げた。

「リリはサポーター失格です。ベル様……もしベル様が、リリなど不要とおっしゃるなら……」

「そ、そんなことないよ……！」

「ベル様……？」

「だって、リリは僕の為を思って提案してくれたんでしょ？ 僕も、リリみたいな親切なサポーターと契約出来て嬉しいよ。だから、これからも一緒に頑張っていこう」

「ベル様……！」

ガツと両手を握り合うベルとサポーターの姿を見て、マシロは困惑しつつ白けていた。

なんだ……この茶番は。

神々
ロキの言う所の、お涙頂戴展開は……。

そんな感想ばかりが頭に浮かぶ自分を、今回ばかりは嫌にはならなかった。

コレに関しては、流石に自身の狭隘ではないと思いたい。

頭痛を覚えながらそんな事を思っていると、不意に、リリルカのブラウンの瞳がマシロを射抜いた。

しおらしい、不安に満ち満ちた瞳だ。

「その……【リトル・アイズ】様……」

次の句を聞かなくとも分かる。

要は、このまま同行してもいいか、その許可に相当する言葉を引き出そうとしているのだ。

そして、現状、マシロには選択肢などないに等しい。

ベルは最早、このサポーターとの契約を切らないだろう。

ここでリリルカを拒めば、ベルの不信はマシロに向けられる。

そうなれば、今後、マシロを除いて二人でダンジョンに、という流れになりかねない。

それでは本末転倒だ。

「……余計な口は挟むなよ」

だから、そう、遠回しに了承を伝えるしかない。

数瞬後、予想通りにリリルカの表情が華やぎ始めた。

今しがたベルにした様に、無邪気な喜びを表現しようと、マシロの両手を取ろうとしてくる。

そして、少女の小人族のような小さな手が、マシロの手に触れようとした、その瞬間――。

「……ッ!？」

リリルカ・アーデは大仰に肩を震わせた。

そして、数秒の沈黙の後、慌てた様に両腕を引っ込める。

「あ?」

その行動を、マシロは不審に思った。

人畜無害のか弱いサポーターを演じる為には、あのまま手を取っておくべきだ。

どう考えても、ここで引つ込めるのは道理に合わない。

それは、リリルカ本人も重々承知しているのだろう。慌しく、苦しい言い訳を始めた。

「す、すみません！　あまりに綺麗な手だったので、リリなんか触ったら汚れちゃいますね！　直前で気づけて良かったです！」

「……」

当然、マシロの手は特別綺麗でも神聖でも何でも無い。

ベルの手を取れておいて、マシロの手を取れない理由などない筈だ。

これは、100%単なる言い訳。

では、本当の理由は一体……。

これについては、幾ら考えても答えなど出なかった。

大凡の見当すら付けられない。

「さあ、そろそろ行きましようか、お二人共！」

「あ、う、うん……！」

だから、小休止を切り上げて歩き出すベル達に、マシロは追従することしか出来なかった。

：

リリルカ・アーデは胸中で、コレでもかという程に首を左右に振り回していた。

いち早く危険を察知する為に冒険者二人を先導しながら、動揺を悟られぬよう細心の注意を払って。

——なんなんです……？

——なんなんですか、今の悪寒は……

!?

しかし、そんな事に神経を使っているが故、中々心の動揺を鎮める事ができなかった。

いつまで経っても、あの衝撃を、恐怖を、忘却することができない。

——あれは殺気です……それも超特上の……！　なんで、【リト

ル・アイズ」に触れようとした瞬間あんな……っ！

もし、あのまま彼の手を取っていたら、命はなかった。

冗談でもなく、誇張も抜きにして、首と胴が独立していた。その確信が何故だか持てる。

——「リトル・アイズ」からではありません……。彼からはリリに対する猜疑心しか感じられない……。そもそも、触れたら殺す精神の異常者が、パーティーなんて組む訳がない……！

だとしたら、あの殺気の主は、第三者しかないとリリルカは結論付ける。

無論、ベル・クラネルからではない。

彼は、リリルカの事を信じ切っている。腹立たしい事に、同情心すらあるだろう。

第一、「リトル・アイズ」に誰かが触れて激昂する理由がない。

それに、仮に彼だったとしても、隣にいるのだ。

流星に気づく。

——だとしたら……誰かに後を付けられている……？　リリが気付けない程の尾行の腕を持つとなると、第一級クラスの……。

そこまで考えて、今度は最小限の動きで本物の首を振った。

——あ、あり得ません……！　第一級冒険者が、こんなしようもないパーティーを尾行する訳がない。彼の所属は「ロキ・ファミリア」。第一級の宝庫ですが、わざわざLv. 3程度の冒険者の動向をチエツクなんてしない……！

リリルカは、密かに「リトル・アイズ」に視線を送る。

銀の瞳に銀の髪。

金眼金髪の姉の片割れだと全力で主張しているカラーリングだ。

顔も「剣姫」の弟というだけあって、決して見れないものではない。

これで、女の子であったならもつと世間にもチャホヤされていただろう。

けれど、彼は男。

無情にも、妹ではなく弟だ。

女の子なら『可愛らしい』で済む幼い容姿も、小人族の如き低身長

も、男では武器になり得ない。只の貧相な餓鬼。そう見られて終わりである。

……
——こんなガキンチョに、熱狂的な信者がいるとも思えませんし……。

——それこそ、【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインくらいにならないと……。

……。

——アイズ・ヴァレンシユタイン？

その可能性に考え至った瞬間、リルルカ・アーデは狂乱の渦中に落とされた。

——全身の産毛が逆立ち、汗が噴き出す。
血液すら逆流してる様だ。

——そうでなければ可笑しい程の負荷が、心臓にかかったのが分かる。

——あり得ません、ありえませんが、ありえませんがありえませんが!!
——だって、だってそんな……! あとを付けているのが……あの殺気の主が【剣姫】だなんて、そんなの……恐ろしすぎます……!
——そんな理不尽、絶対にあっちゃいけません!

——だって、そうでしよう? ありえない! リリの情報網を舐めないで下さい……! 【剣姫】と【リトル・アイズ】が不仲な事くらい知っています! 【剣姫】が弟に興味がない事くらい、サポーター界限では常識なんです!

——そりゃ、最近弟の存在すら知らない情報屋気取りも多いですが、リリをそんな輩と一緒にだと思ってるんですか!?

——同僚達は先日、街でヴァレンシユタイン姉弟がデートしているのを見たと言っていました！ リリもです！ リリだって目撃しています！ でもリリは、ちゃんと最後まで見ているんです！ 最後の最後、会計を弟に押し付けて走り去る姉の姿を！

——鮮やかなまでの『上げてから落とす』でした！ あんな極悪非道な迷惑行為、好きな相手にする訳がありません……！ アイズ・ヴァレンシユタインは、マシロ・ヴァレンシユタインが大嫌いなんです！ そりゃ、もうドン引きするくらいに！！

——だ、だから……、ありえないんです。「リトル・アイズ」に触れようとしたリリに嫉妬して、リリに【剣姫】が殺意を覚えるなんて……。

——そんな事は……絶対……。

「……リ……。リリ……。？」

「……!?」

自身に声をかける声に、リリルカは驚いた。それはもう、心臓が飛び出そうになる程に。

「べ、ベル様……。？」

顔を上げると、ベル・クラネルが心配そうな表情を作っていた。

「大丈夫、リリ？ さっきから、なんだか様子が変だけど」

「だ、大丈夫です。すみません、気を遣わせてしまつて……」

笑顔を湛えながら、リリルカは振り返る。

こんな時でも、自分に優しい声をかけてくれる純朴な少年に、初めて心の底から笑顔を向けて、そして、目を開けた。

当然、その眼前はベル・クラネルを捉える。

そして、白兔の背後の風景も……。

彼の背後……と言っても、かなり後方に位置するが、とにかく、少年の背後には曲がり角があった。

それは、直角で身を隠すには丁度いい地形だ。

加えて、距離的にも尾行者が潜んでいておかしくない場所。

リルルカは、嫌々ながらその地点を凝視してしまう。

やめておくと本能はがなり立てていたが、眼を離せなかった。

安心したかったからだ――。

あの如何にも誰かが身を隠していそうな曲がり角。

そこに誰もいないと知って、今までのくだらない妄想が杞憂であつ

たと、そう確信を得たい。

だから、目を凝らした。

そして――。

「――！」

リルルカは、視てしまった。

彼女が眼にしたのは、微かになびく一本の金糸。

女神すら裸足で逃げ出す艶を、たったの一本で見せつけて来る綺麗すぎる金髪。

それは、かのアイズ・ヴァレンシユタインが持つ色と、全く同じ色味の髪の毛だった。

第十二話

自分の感情が、常軌を逸していると自覚したのは何時いつからだっただろう……。

周りは少女の事を『人形姫』と呼んだ。

淡々と、時には激情に駆られながら幾多ものモンスターを屠り去る姿を見て、二つ名をもじり『戦姫』と揶揄されていた事も知っている。とにかくモンスターが憎かった。

憎くて憎くて、瞋恚の炎を燃やさない日などない程だった。

醜い怪物共を、この世から一匹残らず殺し尽くしてしまいたい。

その悲願を果たす為ならなんだってできる。

どんな厳しい訓練にも耐えてみせる。

どんな絶望に見舞われても乗り越えてみせる。

普通の女の子みたいにオシヤレや恋愛なんかも要らない。

とにかく、どんな手を使っても強くになりたい。

その結果、自分の身を滅ぼす事になったとしても……どうしても、両親の仇を取りたかった。

——僕、姉ちゃんが死んじやう方が嫌だ……。

けれど、その言葉が少女の心を満たしていく。

在りし日の夜、実の弟から告げられた一言が、彼女の決意をいとも容易く溶かしていくのだ。

もし、自分が死んだら弟が悲しむ。

何より、大好きな弟と会えなくなってしまう。

仮に不倶戴天の敵たる『あのモンスター』を倒す事が出来たとしても、そんな結末を迎えてしまったら本末転倒であるように思えた。

勿論、少女は相も変わらずモンスターの事を憎んでいるし、根絶すべき存在だと本気で考えている。故にスキル『復讐者』アウエンジャーは健在で、依

然として全モンスターに対する高域のステータス補正は続いている。

でも……。

それでも、以前ほど心がモンスターの根絶を求めなくなりました……。

結局、少女にとっては両親の仇より、弟と過ごす時間の方が大切だったのだ——。

その事を彼女が自覚するのは、もつとずっと先の話なのだが……。

：

アイズ・ヴァレンシユタインは、モヤモヤしていた。

現在地は、ダンジョンの上層域。

そこで探索を続けるとあるパーティーを、彼女は尾行している。

それは何故か？

理由は単純で、構成員の中に『弟』がいるからだ。

パーティーそのものではなく、弟を尾行していると言い換えても良い。

マシロ・ヴァレンシユタインとの仲直りの糸口を掴む為の行動である。

無論、これはアイズの独断専行だ。

フィンからのゴーサインは出ていない。

それでもアイズは動いてしまった。

先日の『やらかし』で、再び冷え切ってしまった弟との関係をどうにかしたい一心で。

そんな姉の視線は、しかし弟ではなく、彼のパーティーメンバーである少女に向けられていた。

大きなバックパックを背負い、フードで頭部をスッポリと隠したサポーター。

一見小人族に見える犬パルウム 人の女の子である。シアン・スロープ

どうやら彼女は、ベル・クラネル……元々マシロと臨時パーティー

を組んでいた白髪の少年と知り合いだったらしく、彼が引き入れる形でパーティーに加わったらしい。

正直、女の子が入った事にヤキモキしない訳ではなかったが、別に『マシロと二人きり』という訳ではないので、この時点ではアイズもそれほど気を揉んではいなかった。

だが、その考えが甘かったと、【剣姫】は直ぐに思い知る事になる――。

ダンジョンに入った一行は、何度かの戦闘を終えて、ルームで休憩を取り始めた。

すると、周囲を警戒しながらも程良く弛緩した空気の中、サポーターの女の子が何やら熱弁を始める。

相手は、ベル・クラネルだ。

距離が離れている為、内容は聞き取れなかったが、それでもベルが困っているという事だけは分かる。

思わず身を乗り出しそうになったアイズだったが、微かに聞こえてきたマシロの声に我に返った。

物陰から再び彼らの様子を静観する。

どうやら弟は、ベルに助け舟を出してあげたらしい。

やさしい……と、アイズはホクホクする。

だが、浮かれた視線を戻した瞬間、その異変に気が付いた。

……何か、パーティーの空気が重い。明らかに場の雰囲気が悪くなっているのだ。

多分……原因はマシロだろう。

アイズはその様に当たりをつけて弟の後姿を視界に入れた。

あの子はとても優しいが、かなり口ベタなところがある。

二人に勘違いされるような事を言ってしまった可能性はゼロではない。

サポーターの少女はともかくとして、ベル・クラネルに嫌われてしまうのは姉として複雑な気持ちだった。

せつかく出来たお友達が、弟の前から居なくなってしまうかも知れない……。

アイズがしょんぼりしていると、また事態が動いた。
少女がベルに向かって謝罪を始めたのである。

声を振り絞りながら何度も何度も頭を下げている。その悔恨にまみれた泣き声が此方まで届いた。

そして、ベルが何かを告げた後、彼女の涙が感涙に変わる。

そのまま、サポーターは白兎の手を取って満面の笑みを浮かべた。

正直……とても可愛らしい、素敵な笑顔だと思った。

先の告白を聞いて、アイズはこの時、少女に対して『好感』に近い感情を抱き始めていたのだ。

懺悔の言葉を聞く限り、彼女はかなり出過ぎた提案をしてしまったらしい。

だが、それも全て、ベルの役に立ちたいと思うが故の過ちだ。

ただ熱意が空回りしてしまっただけで、とつても良い子ではないか。

だと言うのに、弟の前に現れた異性というだけで嫉妬してしまうなんて……。

ごめんなさいと、アイズは素直にそう思う……。

彼女女豹が、シレっと弟の手を取ろうとするまでは――。

「……………は？」

その光景を目の当たりにした瞬間、アイズのサポーターに対する心証は180度変貌した。

戻った・と言っても良いかも知れない。

一体何をやっている？

実の姉たる自分ですら取れないその手を、どうして取ろうとしてい

る……？

同じフアミリアですらない癖に……。

ティオナやレフィーヤ達にだって最近は嫉妬しかけるのに……。
なのに、どうして部外者のお前なんか……っ。

アイズは一気にドス黒い感情を抱いた。

それは、まるでマグマのようだった。

とても一つの腸はらわただけでは御しきれそうになく、身体全体から『怒気』
として放たれる。無論、サポーターの少女に向かって――。

その瞬間、少女は寸前で手を引つ込めた。

威圧感が伝わったのか、はたまた別の理由なのかは分からないが、
ともかく弟の手が汚されずに済んだのだ。

アイズはホッと胸を撫で降ろした。

：

その日も、マシロ・ヴァレンシユタインは、ベル・クラネルやリリ
ルカ・アーデと共にダンジョンに潜っていた。

進出階層は、三日前と変わっていない。

今日も、これからも……少なくとも自身が同行しているうちは、そ
の方針を変えるつもり等なかった。

なかったのだが……。

その認識を改める必要があるのかも知れないと、マシロは今、割と
本気で考えていた。

眼前には、大量のモンスターと戦う新米冒険者、ベル・クラネルの
姿がある。

流れるような所作だ。

美しい体裁き。

黒く煌めく短剣の軌跡が、弧を描きながら噴き出す真紅の液体と交
わり、薄暗い迷宮の空間で輝いている。

それは、まるで変則的な舞を踊るほうき星の様だった。

かなり上から目線の評価になってしまいが、見事としか言いようが

ない。

ほうき星が舞う度に、モンスターの数に着実に減っていく。

勿論、怪物共のレベルが低いからというのものもあるだろうが……最早この動きは——。

「あ、あの……もう良いんじゃないですか？ コレ、下の階層に降りても……」

左隣から、そんな声が聞こえて来る。

声の主が誰かは分かっていたが、マシロは視線だけを其方に向けた。

リリルカ・アーデ。

パーティーのサポーターを務める茶髪の少女が、戦いに釘付けになりながら冷や汗を流していた。

普段の様な、綺麗に整えられた声音や口調ではない。

恐らくこれが、彼女の素なのだろう。そんな喋り方をしてしまったている点からも、リリルカの驚嘆が伺える。

ハツキリ言つて、マシロも同じ気持ちだった。

「……そう、だな」

正直、これを見てまだ『この階層に留まるべき』と主張するのは不毛でしかない。意地になって、自分の意見を曲げられない哀れな奴だと思われるのがオチだろう。

それ程までに、今のベルは強い。

「……」

最初に彼とダンジョンに潜ったのは三日前だ。

その時でさえ、既に新人離れした身体能力に驚かされた記憶がある。

二日前……一昨日は、このリリルカを加えての探索となった。

マシロはこの日、彼女の進出階層を更新するべきという提案を一蹴したが、それは領けば主導権を渡すモノだと思つたからだ。

正直、単独ソロでないのなら、一つくらい下っても問題はなかった。

昨日の攻略は、怪物祭の兼ね合いで見送っている。

そして、今日——。

ベル・クラネルは、異常とも取れる成長を見せている。それこそ、この階層程度なら単独でも問題なく行動できる程度には……。

「ふう、数が多くて最初はビックリしたけど、どうにかなったよ……」
そんな事を言いながら、ベル・クラネルは戻って来た。
あれだけいたモンスターは、一匹残らず消失している。

この無害そうな白兔だった一人の手によって、いとも簡単に全滅させられてしまったのだ。

「流石です、ベル様！」

魔石を回収する為に、リルルカがベルと入れ替わる。

そして、マシロの隣まで来ると、タハハと後頭部を搔いた。

「流石にあの数は心臓に悪いね……。倒しても倒してもキリがないし、ちよつと焦ったよ」

「……」

まるで自分の未熟を恥じるような事をベルは言う。

正直、同期の冒険者が聞いていたら嫌味にしか聞こえない発言だろう。

ベルに特段疲れている様子はない。

息を乱してその場に座り込んで仕方のない場面で、暢気にパーティーメンバーに笑いかけている。

無論、大怪我もしていない。

目立つ外傷は左頬に出来た数本の掠り傷のみ。防具はそれなりに汚れてしまっているが、そんな事は些末な問題だ。

一体どこの世界に、数十のモンスターと戦って、その程度の消耗で済ませる新人がいる。

普通は死を覚悟して当たり前。

半ばイレギュラーに近い状況に、自身の不運を呪って然るべき場面の筈だ。

ハッキリ言って、彼はLv. 1の時の自分より強いだろう。

いや、それどころか大半の冒険者達のLv. 1時代をぶち抜いてしまっている。

唯一負けていないと断言できるのは、精々【劍姫】ぐらいのモノだろうか。

「ベル、一階層下るぞ」

「え……!?!」

その提案に、ベルは仰天した様に目を丸くした。

「どうやら、『これなら進出階層を増やせるかも……』という期待は一切持っていないかったらしい。

「今のお前なら、こんなトコに居ても不毛なだけだ。エイナ・チュールも文句は言わないだろう」

「で、でも、この前は暫くこの階層に留まるって……」

「俺は『今のお前なら』と言った筈だぞ。一昨日のお前なんか知らねえよ」

「……！　そ、そつか……神様は成長期って言ってたけど、ホントに強くなってるんだ、僕……!」

嬉しさを堪え切れない。

そんな様子で震えるベル・クラネルに、マシロはつい口が滑った。

「当然だろ。お前が強くなってないなら、俺はなんなんだ」

「あ、そ、そうだよ。せつかくマシロが見てくれてるんだから、強くなってるって当然だよ」

「……っ」

失言をしてしまったと慌てて弁解してくる白兔。

マシロは「そういうんじゃないよ……」とほぼ無音で呟きながら、魔石を拾うリリルカを手伝い始めた。

「ご、ごめん！　僕も！」

ベルもすぐさまそれに習う。

「手助けは不要だから休んでいる様に」と注意を飛ばすサポーターを無視しながら、マシロは、黙々と収集作業を続けた。

その時彼の脳内を埋め尽くしていたのは、魔石集めとは全く関係のない思考だったが。

ベルが冒険者になったのは約半月前だと、本人から聞かされてい

た。

半年ではなく、半月だ。

その言葉を鵜呑みにするなら、彼は冒険者になってから、まだ一月も経っていないと言う事になる。

だというのに、こいつはL v. 1の最上位クラスまで到達している。

正直、もう一つどころか、二つ階層を下つても問題ない。

一昨日は、この階層でさえ隙を付かれたら危なかった筈なのに……。

——成長期だと？ ふぎけるな。そんな次元の話じゃねえ……！

戦闘技術という点では、ベルはまだまだ凡庸だ。

いや、冒険者歴二週間と考えれば十分すぎる域に達してはいるが、それでもまだ『すごい』の範囲内。

生きの良い新人が出て来たと、先達冒険者たちが沸き立つ程度のレベルだろう。

だが、身体能力……『ステイタス』の値は、確実にL v. 2昇格ラインに到達している。

未だ大半の冒険者がL v. 1で燻つていると言うのに、たったの14日で。

こんなの、幾ら何でも異常事態すぎる。

もし、今後もこの速度で成長していったらL v.^俺 3なんかあつと言う間に……。

マシロの脳裏に、自分を追い抜いたベル・クラネルの姿が浮かんだ。今はか細く弱々しい人畜無害な白兔が、逞しい歴戦の勇者に成長した姿だ。

……そして、彼の隣には【剣姫】が居て——。

「……ズ様……【リトル・アイス】様！」

「……！」

耳朶を叩いたその声に、マシロは弾かれた様に頭を上げた。

リリルカとベルが、それぞれ不思議そうにマシロの顔を見ている。

「どうしました？ ボーつとされて……らしくない」

「大丈夫？ もしかして体調悪い？」

その質問に、マシロは漸く状況を理解した。

眼前には下階に通じる階段がある。

降りる前に、L v. 3である自分に最終確認を取っていたのだから。

「あ、ああ。なんでもない」

誤魔化す様に顔を逸らす。そして、一言だけ返した。

「行くぞ……」

先導する形で、一足先に下り階段に足をかける。

コツコツコツと、足音が鳴る。

それに追従するかの様に、別の足音が二種類ほど産声を上げた。

階段を降りながら、マシロは自分に言い聞かせる。

くだらない事を考えるな。

ここはダンジョン。

怪物達の楽園だ。

まだまだ上層域だが、油断すれば足元を掬われる。そういう場所だ。暢気に考え事なんて以ての外……。

その様に、自戒していた時だ。

不意に、リリルカがベルに尋ねた。

「そう言えばベル様……今日は一昨日とは武器が違うんですね？」

「ん？ ああ、うん」

ベルは答えながら、指摘された武器を取り出した。

その音を聞きながら、マシロも彼の方へと顔を向ける。

新米冒険者の右手に握られていたのは、「ヒエログリップ神聖文字」が刻まれた黒い短刀ナイフだった。

戦闘中は『武器が変わっているな』程度にしか思っていなかったが、こうして改めて見てみると、それがトンデモナイ業物であると言いう事が分かる。

言い方は悪いが、低レベル帯の冒険者に持たせるような武器ではない。

「お前……そんなモンどこで……」

「えつと、神様……ヘステイア様が、僕の為に用意してくれて……」

驚愕しながら訊くと、ベルは照れくさそうに頬を掻いた。そして、同時に嬉しそうに口元を綻ばせる。

「ベル様は、主神様に大切にされているんですねー」

「いや、そんな事……」

リルカの指摘に、再び照れるベル。

正直その事について謙遜する余地があるのかと思いつながら、マシロは見逃さなかった。

「でも、ベル様はきつとこれから大活躍間違いなしの冒険者様ですし、ちようどいい先行投資かもしれませんね！」

黒いナイフを見たサポーターの瞳が、猛禽類の様に鋭くなったのを――。

第十三話

「それじゃあ、ベル様、【リトル・アイズ】様。本日もありがとうございますございました！ 明日もよろしくお願いします！」

「うん。また明日」

茜色に染まるバベル。

それを背に快活に別れの挨拶を告げたサポーターリトルカに、ベル・クラネルは笑顔で手を振った。

大きなバツクバツクを背負った小さな身体が、ダンジョン帰りの冒険者達の人混みに消えて行く。

その姿を最後まで見届けた後、ベルはぐぐーつと背筋を伸ばした。気分が良い。

適度な疲労や達成感……それらを得られている証拠だろう。

進出階層を更新したというのに気疲れはあまり無く、寧ろ晴れ晴れとした気持ちで満たされている。

それもこれも全て、優秀なパーティーメンバーのお陰だというのが、白兔の見解だった。

サポーターであるリルカ・アーデは、細やかな補佐でこちらの負担を軽減してくれるし、先輩冒険者マシロ・ヴァレンシュタインは、Lv. 3の見識で今のベルに見合った戦場を用意してくれる。

正直どちらも、新米冒険者自分などには勿体ない存在だ。

そんな相手とパーティーを組んでいる幸運に感謝しつつ、ベル・クラネルは先輩冒険者に視線を向ける。

すると、彼は何やら、ジツとある一点を見つめている様だった。

「マシロ……？」

「……」

マシロ・ヴァレンシュタインは答えない。

無視……ではないだろう。

恐らく、話しかけられたこと自体に気づいていない……これは、そんな感じだ。

ここ最近共にダンジョンに潜っている影響か、ベルはほんの少しだ

け、この気難しい冒険者の機微を読み取れるようになってきていた。
「マシロ、どうかした？」

「……あ、いや」

肩を叩くと、ようやく反応が返って来た。

振り向いた彼の顔はどこかバツが悪そうで……きつと、無視をした形になってしまった事を気にしているのだろう。

その様に解釈しつつ、ベルはマシロが見ていた雑踏に視線を移す。
「ずっと見てたけど、こっちに何かあるの？」

と同時に、先刻の光景が脳内にフラッシュバックした。

——あれ？ 確かこっちつて、リリが帰って行った方角じゃ……。

「ベル……」

「ん？」

下から聞こえて来たマシロの声。

それに相槌を打つと、彼は目を背けたまま訊いてきた。

らしくない……まるで言葉を選ぶかのような、たどたどしい口調で……。

「その、リリルカ・アーデについてだが……」

「う、うん」

「……………」

黙って言葉の続きを待つが、そこで彼の肉声は途絶えた。

それほど言い辛い事なのだろうか……？

ダンジョンで、リリや自分にズバズバ意見する時とはえらい違いだ。とても同一人物とは思えない。

故に、一体何を告げられるんだと、ベルは身構えていたのだが……。

「……………いや、なんでもない」

「へ？」

あれだけ引っ張っておいて、彼の口からは飛び出たのは取り止めの台詞だった。

——本当にらしくない。

こんな煮え切らない態度を他の者が取ったら、真っ先に文句を言う

のは自分だろ^{マシロ}うに……。

そんな事を思っていると、先輩冒険者は『これ以上掘り返されたくない』とでもいう様に、そそくさと歩き出してしまった。

「あ、待ってよ、マシロー！」

ベルは慌てて追いかける。

横に並ぶと、マシロは明らかに歩調を落とした。

追及はされたくないが、一緒に帰る意思はあるらしい。

なんと言うか……今の彼からは、本当にチグハグな印象を受ける。

いつそ、調子でも悪いのかと心配になる程だ。

——どうしたんだろう、マシロ……。

そう気を揉んでいると——。

「おーい、ベルくん！」

遠方から、元気いっぱいな声が聞こえて来た。

耳触りの良い、聞く者の心を温める声色……。

ベルにとって、それは安寧の象徴で——胸のモヤモヤなど一瞬で霧散し、声の主を探してしまう。

そして、探し人は直ぐに見つかった。

きめ細やかな黒髪を持ったツインテールの少女が、たわわな双丘を揺らしながら此方に走って来ていたのだ。

周囲の視線など気にも留めずブンブン手を振り回しているこの少女は、ベルの主神だった。

「神様！」

「とうっ！」

可愛いらしい掛け声と共に跳躍する女神。

彼女の携えるマシユマロのように柔らかい二つの果実が、ベルの顔面にめり込んだ。

万人が喜ぶだろう猛烈なハグ……それを受け止めた眷属は、真っ赤な顔で主神・ヘステイアを引き剥がしつつ尋ねる。

「ど、どうしたんですか、神様？ バイトは？」

「いま終わった所さ！ たまたま君を見つけてね！」

嬉しくなって抱きついてしまったのさ！

そう、天真爛漫にはにかむ慈愛の女神は、飛び跳ねるような所作で我が子の顔を覗き込む。

「キミもダンジョン帰りだろう？ 一緒に帰ろうじゃないか。というか、たまにはご飯食べに行かないかい？ 実は今日、ボーナスが出てねえ」

「え、ホントですか!？」

どやあつと、パンパンに膨らんだ金子袋を見せつけてくる主神親に、ベルも顔を輝かせる。だが、それは一瞬で、直ぐに眉毛が垂れ下がった。

「で、でも、悪いですよ。神様……僕の為にナイフを用意して下さいたばかりですし……」

「ボーナスは別腹！ というか、たまにはガス抜きしないとボクの身体が持たないぜ！ いや、ホントにそろそろ限界なんで付き合って下さいおねがいます……」

「えつと、はい、そういう事なら……」

キラキラ親指を突き出したかと思えば光の速さで萎れていったヘスティアに、ベルは冷や汗を流しながら了承する。

このボーナス分も自分が稼ぎ直して帳消しにしなければ……と、密かに気合を入れ直したタイミングで、彼は先輩冒険者の存在を思い出した。

不機嫌になっているだろうマシロの顔を想像し、ベルは慌てて振り返る。

すると意外な事に、視界に入った彼は決して嫌な顔はしていなかった。

しかし、少しの時間放置してしまったのも、紛れもない事実な訳で……。

これ以上、彼の時間を奪う訳にもいかないので、ベルは早々に断りを入れる事にした。

「ごめん、マシロ。そういう訳だから今日はここで……」

「あれ？ キミはいつぞやの……」

すると、主神がツインテールを揺らしながら反応を示す。

意外に思つてベルは尋ねた。

「神様、マシロのこと知ってるんですか？」

「ちよつとね！」

大きく頷いたヘステイアは、膝を曲げてマシロと視線を合わせる。

そして、花のような笑顔を咲かせながら、彼の小さな肩をポンポン叩いた。

「やあやあ、久しぶりだね、マシロ君！ 元気してたかい？」

「……相変わらず声のデカい神だ」

対して、マシロは鬱陶しそうに女神の美しい右手を振り払った。

ある意味でいつも通りの反応に、ベルはついつい安堵感を覚えてしまふ。

「相変わらずデレがないねえ、キミは」

邪険に扱われた主神自身も、不愉快な顔など一切見せなかった。

実際、気にしていないのだろう。自分の神様が大海の様に広い心を持つている事を、眷属であるベルは知っている。

「まあ、いいさ。ベル君の影で見えなかったけど、ずっとそこで話は聞いていたんだろう？ どうだい、キミも一緒に——」

「結構だ」

慈愛の化身の提案は、夕餉のお誘いだった。

しかし、大多数の者が嬉々として付いて行くだろうそれを、マシロはにべもなく一蹴してしまう。

が、それでもヘステイアは、寧ろ楽しそうに表情を綻ばせた。

「早いねえ。もし夕食の誘いじゃなかったらどうするつもりだったんだい？ キミ、そういう勘違いすごく恥ずかしがるタイプだろうか？」

「……」

無言のマシロに、女神はクスリと笑う。

「なんなら、お姉さんを連れて来てもいいんだぜ？ どうせ、キミが誘えば秒で飛んでくるだろう？」

「……！」

主神が放つたその何気ない一言。

瞬間……マシロの瞳が揺れたのを、ベルは見逃さなかった。

しかし、両目を瞑っていたヘステイアは、相手の些細な異変に気付かない。

「あの子とベル君と同席させるのはちよつと嫌だけど、キミがいればキミの方に……」

「……失礼する」

「行くだろうし……って、あれ？ マシロくん？」

当然……というべきなのだろう。

マシロは身を翻し、黙々と帰路についてしまった。

慌てた様子の女神の声は、完全に無視。いつそ清々しい程の速度で彼我の距離が離れていく……。

困惑するヘステイアに、ベルはそつと耳打ちをした。

「その……彼、お姉さんと喧嘩中みたいで……」

その表現が適切なのかは分からなかったが、まあこの場で端的に説明する分には問題ないだろう。

すると、女神は姉とも面識があつたらしく、眼をひん剥いて口をあぐりとさせた。

「なんだって!? ま、まさか、あのド天然……遂にベタベタし過ぎて嫌われやがったかあ……!!」

「か、神様……う？」

「あ、ああ、なんでもないよ、ベル君！ じゃあ、気を取り直してご飯を食べに行こうじゃないか！」

一瞬不穏な空気を纏った主神だったが、声をかけると直ぐに笑顔を取り戻す。

そして、ベルの手を取ってスキップ混じりで歩き出すのだった。

：

時は、ベルとマシロが、リリルカ・アーデと別れた地点まで遡る――

今日も今日とて、弟の尾行を続けていた
アイズ・ヴァレン^姉シユタインは、^{シアン・スロー}犬人の少女が帰っていく姿に、
ホツと胸を撫でおろしていた。

「うん、今日も……大丈夫」

彼女は、噛み締めるように呟きを零す。

か細い肉声は容易く雑踏に掻き消されてしまったが、漸く訪れた安
寧の時に【剣姫】が心を寄りかからせたのは事実だった。

しかし、直ぐに気を引き締め直す。

今日は乗り越えたが、まだ明日もあるのだ。

それどころか……明後日も、明々後日も。

ベル・クラネルがリリルカ・アーデとの契約を切らない限り、この
心臓に悪い時間はずっと継続する。

いったい何が、そこまでアイズの心を揺さぶらせるのかと問われ
ば、それは一昨日のリリルカの行動が原因だと言う他ない。

マシロの手を取ろうとした少女の、あの満面の笑みを見た瞬間……
姉は確信してしまったのである。

たぶん、あの子はマシロ^弟のことが好きなのだ、と……。

故に、アイズはリリルカを警戒するのだ。

男の子は、小さな女の子を好ましく思う傾向があると聞いたことが
ある。

マシロがどんな異性を好んでいるのかは分からないが、一般的な観
点で考えるなら、あの小柄な少女はそうとうアウトゾーンだと言える
だろう。

もし恋人なんかできてしまったら、ますます自分とは話してくれ
なくなる……。

というか、眼中にも入らないだろう。

今だって入っていないのに……。

だから、絶対に認めない。

そもそも、あの子に恋愛なんてまだ早い。

まだまだ、お姉ちゃんに甘えていて良い年頃の筈なのだ。

だというのに、どうして私の手から奪い去ろうとする……？
そんなことは許されない。

渡さない。

ぜったい渡してなるものか……。

というのが、アイズが募らせている感情だった。

酷くドス黒い嫉妬心。

それが胸中で渦を巻き、彼女の意識を蝕んでいく。

それだから、気づけなかったのだ。

自身に一直線に猛進してくる、無遠慮極まりない足音に――。

「アイズ！」

「わっ」

強めの衝撃を、背中に感じた。

同時に、褐色の細腕が首元に回され良い香りが漂ってくる。

その声と匂いに覚えがあつて、アイズは瞬時に、誰が抱きついてきたのかを理解した。

「ティオナ……？？」

振り返りざまに言い当てる。

すると、ティオナ・ヒリユテ……健康的な褐色の肢体を持ったアマ

ゾネスの少女は、頬擦りをしたのち飛びのいた。

そして、人好きのする笑を浮かべながら訊いてくる。

「ダンジョン帰り？ 中で会わなかったねえ、どの辺潜ってたのー？」

「えーっと……」

流石に、上層とは答えづらく言い淀んでしまった。

すると、今度は別の少女の声が耳朶を叩く。

「コラ、馬鹿ティオナ。いきなり飛び出したら危ないでしょ？」

「えー？」

自身に寄せられた文句に、天真爛漫な少女はプクーっと頬を膨らませた。

そんなティオナと共に振り返ると、呆れ顔で近づいてきている瑞々

しい褐色肌の少女が目に入る。

ティオネ・ヒリユテ。

ティオナの双子の姉であり、妹とは違って豊満なボディを持ってアマゾネスだ。

彼女は、申し訳なさそうに耳打ちしてくる。

「ごめんなさいね。この馬鹿、アイズを見つけた途端に一目散に走り出しちゃって……」

「いいじゃん、別に。あ、そだ、アイズ？ 私達これからご飯食べに行くんだけど、一緒に行かない？」

「え、うん……と」

アイズは一瞬動揺する。

いつもなら二つ返事で了承する提案だが、今は絶望的なまでに間が悪。

よもや弟の尾行中に誘われるとは。

でも……。

「だめえ？」

こんなふうには、悲しそうな上目遣いをされてしまつては、とてもじゃないが断れない。

ティオナとティオネは友人なのだ。

親友と言つても言い過ぎではないかも知れない。

それくらい彼女らには良くして貰っているし、アイズ自身も好ましく思っている。

何もこの誘いを断つたぐらいで、彼女達との絆にヒビが入ると思わないが……。

……もう脅威は去つたのだ。

もうしばらくベル・クラネルと歩いた後、弟はホームに帰る筈。

だから、これ以上尾行する必要はない。

そんな状況で、ティオナの誘いを断る理由などある訳がないのだ。その様に折り合いをつけて、アイズは小さく頷いた。

「ううん。私も一緒に行きたい……な」

:
:

本拠地に帰還した【剣姫】の弟、マシロ・ヴァレンシユタインは、大浴の脱衣所で服を脱いでいた。

洗い流すべき汗や肉体疲労があつた訳ではない。

削ぎ落してしまいたかつたのは精神疲労だ。

マシロにそれを与えたのは、彼が今臨時パーティーを組んでいるメンバーの一人……。

無論、リリルカ・アーデという名のサポーターだ。

マシロは脱衣所がガラガラなのを良い事に、服を籠に放り込みながら思考の波にのまれる。

ベル・クラネル……もう一人のパーティーメンバーの持っていたあの黒いナイフ。
ヒエログリフ

【神聖文字】の刻まれたソレは、考えるまでもなく高価な代物だろう。恐らく、リリルカはこれから、あのナイフを盗み出す為に全力を尽くす筈だ。

本来なら、L.V. 1のサポーターの挙動を見逃すなど有り得ない。故に、そこまで気を張る事態でもなのだが……奴は上級冒険者自分とのツテがあると知った上で、ベルに近づいてきている。

つまり、何か此方の想定し得ない理外の作戦があるのかも知れない。

ベルにこの事を打ち明けるのが一番だが、彼は既にリリルカ・アーデの事を信じ切っている。

奴がナイフを狙っている証拠のない現状では、話した所で無駄だろう。

下手を打てば、ベルの心証を悪くするのみで、奴の動きやすい状況を作ってしまう可能性だってある。

「……チツ」

マシロは舌打ちを漏らした。

完全に、あの犬シアンスロープ人に翻弄されてしまっている。

その事実を忌々しく思いつつ、洗い場への戸を引くと――。

「やあ、奇遇だね。君もお風呂かい？」

悩みとは無縁そうな、朗々とした声音に背中を叩かれた。

その声を、マシロは知っていた。

いや、ホーム内なのだから当然ではあるのだが、「ロキ・ファミリア」程の大所帯にもなると、特段会話の機会のない団員達も往々にして存在する。

だが、彼の事は全団員が知っているだろう。

振り返ると、そこには予想した通りの人物がいた。

マシロより低い背丈に、姉とはまた違った系統の金髪。

子供然とした容姿には似合わぬ叡智を感じさせる瞳。

【ロキ・ファミリア】の頭目、フィン・デイルムナがそこにはいた。

腰にタオルを巻きつけた上裸の姿で……。

第十四話

「……なんの用だ。フィン」

ちやぶちやぶと揺れる湯船の音を聴きながら、マシロ・ヴァレンシユタインは問いかけた。

対して、苦笑と微笑を織り交ぜながら悠然と答えるのは、バルウム 超える妙齡の小人族だ。

「なんだい藪から棒に？ 僕は単に、君とお風呂に入っているだけじゃないか」

フィン・デムナ 手元のお湯を弄りながら、ぴゅーぴゅーと水鉄砲を飛ばし始める
【勇者】。

彼らしくない子供じみた行動だ。

完全にけむに巻く構えの団長に苛立ちつつ、「リトル・アイズ」は追及を続ける。

「はぐらかすな。用がないなら、なんでピツタリくつついてくる？」

「テンションが上がっているんだよ。なにせ可愛い末っ子との、久しぶりのお風呂だからね」

「……俺は、お前の息子でも弟でもねえよ」

「そうだね。君はアイズの弟だ」

マシロはここで口を閉じた。

流石に舌戦では敵わない。

いや、それ以外でも勝てる要素など背丈以外ないのだが……とにかく、こうなってしまうては向こうから切り出してくるのを待つしかないだろう。

その思考が通じたのか、それとも読んだのか……フィンは都合よく小振りな口を動かし始めた。

「アイズとは、最近どうだい？」

「……」

「折角この前一緒に出掛けたというのに、それ以降音沙汰がないじゃないか」

沈黙を返したというのに、この団長はズケズケと踏み込んでくる。

ファミリアの頭脳たる彼が『話したくないオーラ』を察せないわけがない。つまりは、わざと敷居をまたいでいるのだ。

その様は、まるで無遠慮な父親のようで、マシロは苦々しく思いながら吐き捨てた。

「音沙汰ないならそれが全てだろう。そもそも、あれだけで俺達の不仲が解消される訳がねえ」

「不仲か……どうしてそう思うんだい？」

「は？」

その問いかけに、マシロは思わずフィンの顔を凝視してしまった。まさか、『不仲』であること自体に疑問を投げかけられるとは思っていなかったからである。

オラリオ随一のモテ男。

その整った微笑と美しい碧眼からは、なんの心情も読み取れない。「君達はお互いを嫌い合っている訳ではないだろう？　ただ、会話がないだけだ。それで不仲というなら、この世の大半の人間が不仲になってしまうんじゃないかい？」

フィンは話術の天才だ。

柔和な声色は万人の心に入り込み、詐欺師顔負けの口八丁で容易くその気にさせてしまう。

けれど……今回ばかりは違った。それは詭弁だと、そう、マシロは思ってしまった。

「姉弟と赤の他人を同じ尺度で考えるなよ……。少なくとも、どちらかが嫌ってなけりゃ、こんな状態にはなってねえだろ」

「確かにそうだね。なら、マシロ……君はアイズが嫌いかい？」

「……………」

出し抜けに放たれたその質問……。

マシロは何も答えられなかった。

長い長い沈降に対し、団長は静かに口を開く。

「それとも、憎いかい？」

「……………」

なんとかその言葉を捻り出した。

だが、【勇者】^{フレイバー}の台詞は続く。

「嫌いで嫌いで不幸になれば良いと思っっている？　もしかして、オラ
リオ一の剣士として名声を得ている姉に嫉妬していたり……？　も
しくは……」

「やめろ……」

「姉弟の縁さえ切りたいと——」

「やめろツツ!!」

マシロは絶叫した。

風呂場だというのに。

情けない叫び声が脱衣所の外まで届くと分かっているながら……そ
れでも、彼は続く言葉を聞きたくなかった。

「やめてくれ……たのむ……から」

浴室に響いた自身の声に我に返り、【リトル・アイズ】は弱々しく懇
願する。

そして、その直後フィンの気配が一層近くなった。

同時に「ふう」という息遣いと、頭部に掌の暖かな感触が……。

「すまなかつたね。ちよつと意地悪が過ぎた」

気遣わし気な手付きで、フィンが頭を撫でてくる。

落ち着かせる様に、何度も何度も。

「やめろ……うつつとうしい」

それが嫌で、手を弾いた。

それでも、団長は笑っていたが……。

「ははは。でも、今の様子だと別にアイズが嫌いな訳じゃなさそうだ
ね」

「……………どうだかな」

マシロはそっぽを向きながら吐き捨てた。

正直な所、自分でもよく分からないのだ。

当然、先日のあの行動に対して憤りはある。

けれど、それ以外に負の感情を抱いていないのもまた事実だった。

そして、その憤慨さえ日を跨ぐごとに霧のように薄れていく。

代わりに胸を蹂躪するのは、どういう訳か『焦燥感』に近い感情で

……。

「マシロ、アイズは君を嫌っていない。と言ったら信じるかい？」
頓狂な主張に顔を上げる。

荒唐無稽な言葉を吐き出したフィンの表情は、真剣そのものだった。彼にしては珍しく大きく読み違えているようだ。

「……信じねえな。それだけは有り得ない。神ロキに誓っても良い」

「どうして？ アイズは実際、君と遊びに行つたじゃないか」

「……」

【勇者】の瞳は告げている。

『嫌いな相手とわざわざ遊びに出かける訳がないだろう』と。

確かに、そうだ。

それが道理だ。

フィンがそう考えるのも無理はない。

けれど、違うのだ。

その一般論こそが落とし穴……。

姉は、弟の事が嫌いだったからこそ共に外出したのである。

しかし、『豊穰の女主人』的一幕を知らない彼はその事に気付けない。
い。

だから、涼しい顔で見当違いの推論を語っていられるのだ。

「確かに、アイズは君と口をきかなくなった。でも、それすら何か理由があるとしたら？」

「理由……」

そんなもの『嫌いになったから』に決まっている。

実に単純明快な答えだ。

それに足るだけの心当たりが、マシロにはある。

だと言うのに、フィンは頷きながら朗々と語り続けた。

「それをこの場で僕が告げるのはやめておくけれど……近い内に、本人の口から知らされる筈さ」

「……なんだそれ」

「それを聞けば、君も——」

話の途中だったが、マシロは勢いよく立ち上がった。

これ以上話を聞いても仕方ないと思ったからだ。

ザバアンという音に言葉を遮られたフィンは、溜息をつきながら言ってくる。

「マシロ……もう少し付き合って欲しいんだけど……」

「断る」

当然そのように返事をして、マシロは歩き出した。

ジャバジャバジャバと、抵抗凄まじい湯船を両足でかき分ける。

フィンは知らない。

あの日の夜……自分がアイズに何を言ったのかを……。

知らないから軽く考えているのだ。……ヴァレンシユタイン姉弟の軋轢を――。

「いいや、今回だけは付き合って貰う」

「なっ」

しかし、隙を付いて、フィンは組みついて来た。

ガッツリと肩を掴まれたマシロは抵抗するも、L.V. 6の力に抗える訳もなく、バランスを崩して湯船の中で尻餅についてしまう。

そして、当然ながら自然な成り行きとして、フィスが身体の上に押し掛かるような形となった。

「フィン……、テメエ……ッ」

「本当にすまない。けれどこれは、君達の重大な話だ」

「何を……」

言っついていやがる……ッ！

そう、叫ぼうとした瞬間だった。

勢いよく、浴室の戸が開け放たれたのは――。

「……!」

突如鳴り響いた開閉音に、マシロとフィンは弾かれた様に扉の方を見る。

入室して来たのは、灰色の毛並みを引つ提げた大柄の狼ウエアウルフ人……。

「たく疲れたぜ。たまにやあ早風呂も……て、何してやがるフィン、てめえ!?!」

そんな眩きを零すベート・ローガは、此方の状況を認めると、ギョッ

と目を見開いた。

当然の反応である。

何故なら、今……彼の目に飛び込んでいる光景は――。

「ち、違うんだ、ベート！ 誤解だ！ これは――」

そして、これまた面白い程にフィンが狼狽え始めた。

いつもは頭脳明晰な彼だが、今しがたの言い訳からは普段の知性など微塵も感じられない。

そして、慌てふためく団長の隙を付いて、マシロは湯船から脱出した。

「あつ、待つんだマシロ！」

フィンの声は当然無視。

脱衣所へ向かって、一直線に駆ける。

「そうだ、そのままこつち来い！ てかお前、フィンにいったい何され……て？」

その様に叫びながら手招きしてくるベートの横を、マシロは無言で通り過ぎた。

そして、身体を拭くのもそこそこに、手早く着替えて出て行く。

「な、なんだあ……？」

無人となった脱衣所を啞然と見つめるベートの横に、フィンは無音で近寄った。

そして、「こほん」と咳払いをした後、切り出す。

「べ、ベート……説明しても信じてくれなさそうな匂いがプンプンするから、せめて穏便に……」

「うるせえ、ヘンタイ団長。言い訳ならババアにでもしてろ」

「ぐ……ッ！！」

：

『豊穡の女主人』に訪れたベルとヘステイアは、さっそくテーブル席に通されていた。

お冷を持ってきてくれたエルフの店員、リユー・リオンに注文を伝

え終わると、ヘステイアは改めて店内を見渡し始める。

「なかなか良い雰囲気じゃないか。あのエルフ君もちよつぱり不愛想だけど、接客は丁寧だし」

「はは、そうですね」

ベルは乾いた笑みを返した。

不愛想という表現には積極的に同意したくないものの、丁寧な接客という点では疑問を差し込む余地がない。

故に、そんなどつちつかずの反応になったのだが、ここで主神の瞳が若干鋭くなった。

「でも、ちよつと店員の子達が可愛いすぎるんじゃないかい？ 誰かお目当ての娘こなんていないだろうねえ？」

「ま、まさか！ とんでもないですって！」

ズイツと顔を寄せてくるヘステイアに、ベルは赤面しながら首を振った。

『確かに、ここの皆さんは美人ですけど、僕なんか相手にされませんよ！』という主張を、全力で両手首の動きに込める。

が、そんな不断の努力も虚しく、あっけなく横から刺される事となった。

「あ、来てたのかニヤ、白髪頭。でも残念、シルは休みニヤ」

「アーニヤさん!!」

突如として爆弾を投下してきたアーニヤ・フロームルは、どうやら他のテーブルに料理を運んでいる最中らしい。

『シル』という名と、『彼女が休みで残念』という情報だけを残して、無責任にもさつきと通り過ぎてしまった。

当然、女神から放たれる圧力は重く濃いモノに変化する。

「おーい、ベルくん。猫キャットピーパー人君があんなこと言ってるけど、シル

君っていうのは誰だあい？」

「えっと、シルさんはここの店員さんで……」

「そんな分かり切ってる事を訊いてるんじゃないー！」

うがあつと、飛びかかろうとしてくるヘステイア。

を……遮るかのように、タイミングよく料理が運ばれてきた。

立ち昇る湯気が物理的に二人の間を蹂躪し、香ばしい匂いが強引に怒気を霧散させる。

「どうぞ」

「……」

コト……。

小気味良い音と共に、エルフの店員リュール・リオンの手によって皿が並べられていく。

ヘステイアは露骨に『何か言いたげな視線』を送ったが、どこまでも澄まし顔の妖精に結局は毒気を抜かれる結果となった。

その隙を見逃さず、ベルは大仰に拍手を鳴らす。

「わ、わあ、おいしそうですね！　じゃ、じゃあ、いただきますでしょうか、神様!？」

「……………」

「は、ははは……」

眷属の苦笑いに、主神は大きなため息を漏らした。

「まあいいか。うん、いただきます」

「は、はい！」

許しを得た。

ベルはここぞとばかりに箸を持って、ぶり返されない様に別の話題を提供する。

それは、自分とヘステイア……双方と面識のある人物についての話題だった。

「そ、そういうえば神様……、マシロとはいつ知り合ったんですか？」

「ん？　ああ、ちよつと前にね」

溶けたバターが滴る肉厚のステーキに齧り付きながら、ヘステイアは当時のことを懐かしむ様に話し始める。

「ジャガ丸くんの材料を運ぶのを手伝ってくれたんだよ。材料を乗せた荷車が重くて重くて『もうダメだ』ってなった時に、『いつまでも目の前でヒーヒーやられたら目障りだ』とか言ってたさ」

「ああ、目に浮かびますね。その言い方」

「だろう？　もうちよつとデレてくれれば可愛げもあるんだけど

ねー」

「あははは」

すっかり弛緩した空気の中ひとしきり笑うと、今度はヘステイアの方が聞いてきた。

「とうか、ボクだって驚いたぜ？ あの子、ヴァレン何某君の弟ってことは【ロキ・ファミリア】の所属だろう？ 言っちゃ悪いけど、ド新人のベル君がよく知り合えたねえ」
「い、色々ありまして……」

詳しくあらましを説明するとなると『アイズ・ヴァレンシユタインとの特訓』の事も話さなければならなくなるので、ベルは言葉を濁す。そして、追及される前に、彼は気になる事を主神に尋ねた。

「あの、神様……マシロの事でちよつと気になる事があるんですけど」
「……ん、なんだい？」

真剣さが伝わったのだろう。

ヘステイアは何も聞かずに佇まいを直して、聞く体勢を整えてくれた。

そんな主神を頼もしく思いつつ、ベルは今日の別れ際……マシロ・ヴァレンシユタインに対して感じた違和感を告げる。

「……という事なんですけど、何か分かりますか？」

一通り説明し、その様に締めくくると、ヘステイアは「うんうん」と数回頷いた後、断言した。

「なんだ、そんな事か。そんなの一つしかないじゃないか」

「え？」

主人が余りにもあつさり言うものだから、ベルは思わず目を丸くする。

「確認するけど、マシロ君は犬シアンスロープ人君が帰っていった先を見つめてたんだらう？」

「は、はい」

「で、キミが声をかけてもしばらく気付かずに、その後も歯切れの悪い様子だったと」

「そ、そうなんです」

コクコクと頷くと、彼女の笑みは殊更に深まった。孤を描いた艶々の唇は、本来なら扇情的な気持ちしてくる筈なのに、その微笑みが余りにも露骨なせいで、まるでマスコットキャラの笑顔を見ているかの様だった。

自身の眷属にそんな感想を抱かれている女神は、興奮しているのか特に大きな声で自身の考えを口にする。

「恋だよ恋ー・マシロ君は、その犬シァンスローフ人君に恋しているんだ！」

自信満々に親指を立てる主神。

だが、ベルは理解が追い付かなかった。

半ばショートした思考は、店内に突如発生した『バンツツ!!』という爆音によって引き戻される事となる。

酒屋である以上、酔った客が何処かにぶつかったのだろうと考えつつ、ベルは、驚くヘスティアに自身の考えを伝えた。

「で、でも、マシロって、その……結構、リリ……サポーターの子に辛辣で……」

「ベル君？　ベル君は分からないかも知れないけど、男の子ってというのは、好きな女の子にイジワルしちゃうものなんだよ」

その回答は、ベルには全く理解できないモノだった。

「え？　好きなのに意地悪するんですか？　どうして……？」

「照れくさいのさ。気を引きたくてちよつかいを出しちゃう。誰も彼も、キミみたいに素直な子って訳じゃないからね」

そう言いつつ、ヘスティアは慈しむ様に目を細める。

「逆にキミは、マシロ君が好きな子相手に、素直に好意を示せると思うのかい？」

「そ、それは……確かに……」

気が付けば、ベルは言い負かされていた。

確かに、考えれば考える程、マシロが素直になる絵が浮かばない。しかし、そうなる……。

「僕……どうしたら良いんでしょう？　応援はしてあげたいですけど、マシロは嫌がるでしょうし……」

「うーん、そうだねえ……」

ヘステイアが唸る。

彼女からの啓示を黙って待っていた——その時だ。

「ねえねえ、さっきから『マシロマシロ』って言ってるけど、もしかして弟くんの話し〜?」

「わっ!? い、いきなりなんだい、キミ!?」

突如として乱入してきた明るい声に、炉の女神は肩と胸を揺らしながら振り返った。

そして、彼女とベルの視界に、褐色の肌を持った黒髪の少女が飛び込んでくる。

整っているが、美しいと言うよりは可愛らしいという表現が適切であろうそのアマゾネスは、ヘステイアの驚愕に対し口を尖らせた。

「だって〜、弟くんの事話してるっぽかったんだも〜ん」

「お、弟くんって……」

脈絡と主語のかけた主張に困惑していると、乱入者の少女に注意の聲が飛んでくる。

「コラ、ティオナ! 何勝手に他のテーブルに突撃してるのよ!」

そして、ティオナというらしいこの少女を諫める為だろう。彼女の連れと思しき女性が二人、近寄って来た。

そのどちらもが、乱入して来た少女に負けず劣らずの美貌を持った『アマゾネス』と『ヒューマン』で——。

「あ」

ヒューマンの方は、ベルの知る人物だった。

金の瞳に金の長髪。

女神さえ裸足で逃げ出す人形然とした美しさを誇る第一級冒険者……そして、マシロ・ヴァレンシユタインの実姉。

【剣姫^{けんき}】アイズ・ヴァレンシユタインが、気絶でもしているのかという程の能面でそこに立っていた。

第十五話

「ああ、ムシヤクシヤします……ッ！ 何なんですか、あのガキンチョは……ッ」

夕日の沈みかけた迷宮都市オラリオ。

そこに存在する無数の路地裏の一角で、小さな石と文句が舞った。放物線を描きながら落下した石ころは何バウンドかした後、コロコロと地面を転がっていく。

小石が静止したのは、……日陰と日向の境目だった。

「……ッ」

蹴者の少女、リリルカ・アーデは息を呑む。

『日向には行けない』。

まるで、そう言われているようで、彼女は酷く気分を害した。

『お前は絶対逃げられない』

『日の当たる場所には出られない』

嘗て告げられた同僚の肉声が脳裏に響く。

大嫌いな下賤な声だ。

グツと唇を噛む。

血の味が滲むと共に、幻聴が遠のいていく。

やがて、耳が痛むほどの静寂がリリルカの鼓膜に帰還した。

「うるさい……分かってるんですよ……。今に見ていて下さい。今度こそ、リリは……」

そんな悪態を吐きながら、彼女は誰に聞かせるでもなく……寧ろ誰の耳にも届かない様な声量で、その言葉を空気に溶かした。

「響く十二時のお告げ」……」

ビュウウウウウウ——！

瞬間、一際強い風が発生。

被っていたフードが煽られた。

即座に手で押さえつけようとしたが、一步遅い。

リリルカの頭髪を隠匿していたソレは、いつそ薄情なほど呆気なく己の役割を放棄してしまった。

白日の下に晒されたのは綺麗な栗毛。

そこに、亜人や獣人の様な『特徴な耳』はなかった。つまり、彼女の種族は『ヒューマン』か『小人族^{バルム}』のどちらかに絞られたという事だ。

「……くッー」

憎々しい顔でフードを被り直し、リリルカは慌てて周囲の確認を行う。

念入りに確かめ、『誰もいない』という確信を得た彼女は、ホッと息を吐いた。

が、次の瞬間——荒れる。

——くそ……くそ……くそ……くそ……

小さな足で地団太を踏む。極力音を響かせない様に……。

——もう、本当にふざけないで下さい……！　なんで、あんなタイミングで風が吹くんですか!?

——誰にも見られなかったから良かったものの……もし、ベル様に見られていたら全部ご破算じゃないですか！

——つくづく気に入らない……本当に邪魔な奴です！　【リトル・アイズ】……!?

気付けば彼女の怒りは『風』ではなく、とある『風使い』の冒険者へ向いていた。

無論、先程の突風とあの少年が無関係なのは分かっている。

分かっているが……そもそもリリルカは、彼のことが嫌いなのだ。理不尽だろうが何だろうが、怒りを向けずにはいられない。

マシロ・ヴァレンシュタイン。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインの実弟にして、姉^{彼女}と同じく風の魔法を扱う第二級冒険者。

折角見つけたベル^カ・クラネル^モにベツタリとくつつく疎ましい存在。

Lv. 3の彼が騎士^{ナイト}気取りで目を光らせている所為で、少女は下手に動く事が出来なくなってしまった。

「チ……ッ、姉の七光りでしかない癖に、調子に乗って……ッ!!」

積りに積もった不満……それが遂に音になって外界に漏れる。

ハツとして、直ぐに口を押えたりリルカだったが……。
パチパチパチ。

場に、乾いた拍手が鳴り響いた。

まるで、『手遅れなのに』苦勞』と、そう労っているかのよう
に。普段の彼女なら、その煽りに憤りを感じる所だったが、今はそれ
どころではない。

聞かれた。

見られた。

人がいた。

その事実混乱しながらも、少女は音のする方……反対側の通路を
睨みつけた。

まだ闇しか見えない。

けれど、確実にそこに潜んでいるのは分かる。それだけの存在感
が、影の中にあつた。

ドクンドクンと自身の心音が喧しい。

けれど、そんな状態でも……拍手の中に足音が混入し始めたのを、
リルカは聞き逃さなかつた。

足音も拍手も、どんどん大きくなっていく。

否、近づいて来る。

もう、姿を現す――。

そう生唾を飲み込んでから、既に数秒の時が刻まれた。

だというのに、音の主は未だに姿を見せない。

一体どういふことなのかと小さく首を傾げたタイミングで――。

「ごっちだよ。リルカちゃん」

「……？」

直ぐ背後から……本当にすぐそこから肉声が聞こえて来て、リル
カは弾かれた様に振り返つた。

並行して、全力で距離を取る。

顔を上げると、黒いフードを被った人物が立っていた。

「邂逅の仕方の影響もあるのかも知れないが、ネットリとした……肌に纏わりつくような嫌な空気を感じる。」

自然と、リリルカの警戒心は最高潮まで高まった。

「誰ですか……貴方は？」

フードと暗がりのせいで、顔までは分からない。

けれど、声と体つきから、男の冒険者だろうという推測は立つ。

「リリに何か御用ですか？ 見ての通りリリは、しがない——」

「……君の気持ち、凄く良く分かるよ。アーデちゃん」

「はい……？」

不意に放たれたのは情緒たつぷりの声だった。

当然困惑するリリルカだが、そんな彼女を男は置き去りにする。

「本当に良く分かる……。ああ、可哀そうに……」

「あ、あの」

「許せないよね、『リトル・アイズ』。そう、アイツだけは許しちやいけない。やっぱり君もそう思っていたんだよね」

「ちよ……」

「思った通りだ……。僕の、ね。うんうん」

「……………」

リリルカは理解した。

目の前の不審人物は、『人の話を聞かないタイプの人間』なのだ……。

激しくこの場から離脱したい衝動に駆られるが、精神力を振り絞って足を地面に縫い留める。

「……初対面の相手に自分語りは嫌われますよ？ それに、どうしてリリの名前を知っているんです？」

この男は得体が知れない。

というか、気持ちが悪い。

そんな相手に一方的に名前を知られているのだ。

どういう経緯で漏れたのか、最低でもそこだけは明らかにしておきたかった。

けれど……正常すぎるその判断を、彼女は直ぐに悔いる事になる……。
「だって僕、君達をずっと付けていたから……。名前を耳にする機会くらい何度もあったよ」

「……ッ」

本当に気持ち悪い。

いけしやあしやあと成された男からの返答に、リリルカは戦慄を禁じ得なかった。多分、ストーリーカーというのはこういう人種の事をいうのだろうと理解を深めていると、不意に男の片手が此方に向けられた。

「ねえ、リリルカちゃん。手伝ってあげようか。君の計画」

「……計画？ なんの事ですか？」

ドキリとしながらも、少女は気丈に振舞う。

これ以上、この男に踏み込ませてなるものか・と。

けれど、そんな心持ちも、コイツは子供のように踏み荒らした。

「なんの事って……、『ベル・クラネルのナイフを奪う計画』の事だよ。あの【ヒエログリフ神聖文字】が刻まれてる奴」

「……」

なんで、という言葉が出る事だけは、なんとか阻止した。

けれど、動揺はモロに表に出してしまった様で、男の笑みが深まった気配を感じる。

憎々しく思いながら、リリルカは変わらず否定の言葉を吐き出した。

手遅れだとは分かっているが、彼女にはそれしか選択肢がない。

「あ、生憎ですが、皆目見当も付きません。冒険者様の私物を盗むだなんてトンデモない。リ、リリは平凡なサポーターですのよ」

「そんな事言わないの。めっ」

「……」

息が詰まった。

心臓が止まりそうになった。

温度を感じた……唇に。

気が付けば少女の唇には、男の一本指が添えられていた。それはつまり、または彼の急接近を許しているという事で――

再び距離を取ろうとするも、その前に男に片腕を掴まれてしまった。万力の如き力を感じて、とても振り払えそうにない。

「ナイフを奪うには【リトル・アイズ】が邪魔だよ。だから、君は今、こんな作戦を立てているんじゃないのかな？」

「え……？」

「【リトル・アイズ】の目を盗んでナイフを奪うのは至難……。ならいっそ、奴を孤立させればいい」

「……あ」

リリの口からそんな音が漏れた。

男の語ったそれは、本当に彼女の考えていた作戦の一つだったのだ。

より正確に言うならば、現状少女が【リトル・アイズ】を出し抜く上で最も効果的かつ、無理の有る作戦だ。

「例えば、奴にしか対処できないレベルのモンスターを出現させる。つまり、『異常事態』を引き起こすという事だね。そうなれば、リリちゃんはベル・クラネルと共に自然な形で奴から離れる事ができる」
そう……自分にしか対処できない脅威が現れた場合、【リトル・アイズ】はまず間違いなく一人で対処しようとするだろう。

間違っても保護対象であるベル・クラネルや、戦力の足しにもならないサポーターなどには頼らない。寧ろ、足手纏いだと突き放し、避難を推奨する筈だ。

十中八九、ベル標的と簡単に二人きりになれる。

そして、逃げた先でモンスターに襲わ――。

「そして、逃げた先にも手頃なモンスターを用意しておく」
「……な」

「そうだなあ……君が隙を付いてナイフを奪える程度の速度で戦闘が展開しなければならぬから、『ベル・クラネルがギリギリどうにかできる程度の相手』が妥当かな？」

「なんで……」

そこまで知っている……。

思考を読み取る力でも持っているのか……？

男はいつしか、少女にとって蔑みではなく畏怖の対象となっていた。

「問題は奴を苦戦させる程の『異常事態』^{イレギュラー}を発生させなければならぬという点だね。階層を下げれば幾らでも選択肢は広がるけど、奴は臆病だから許可しない」

「……」

「モンスターをタイムして連れて来るのも、怪物進行を起こすのも現実的じゃない。前者は技術的に不可能で、後者は安全面に問題があり過ぎる」

そう、結局は机上の空論なのだ。

上手くいけば必ず「リトル・アイズ」とベル・クラネルを引き離せる。混乱したベルからナイフを奪う事はさほど難しくはないだろう。

しかし、実行する手段がない。肝心なところが宙に浮いている。

「だから、僕がモンスターを連れて来てあげる」

「なんですって……？」

出し抜けに放たれたその言葉に、リリルカは目を見開く事しかできなかった。

信じられない。

そんな気持ちを十全に双眸に乗せるが、奴の自信満々な声は乱れない。

「僕なら、十分奴を苦戦させる程のモンスターを連れて来れる。下層……なんなら、深層モンスターを呼び出しても良い」

「な……！！」

「はは、冗談だよ。でも深層のモンスターを用意できるとするのは本当。選択肢が多くて魅力的でしょ？」

それが真実なのか、虚偽なのか……リリルカには判断が付かなかった。

この男の真理は一切読み取れない。

読み解きたくないと、本能が拒絶してしまっている面もあるのかも知れないが……。

けれど確かに、この作戦に於いてモンスターの選択肢が多いのは良い事だ。

「そうですね……大変魅力的です。ですが解せませんね。本当に貴方にそんな真似ができるとして、リリを利用する理由はなんですか？」

「ははは、利用だなんて人間きが悪いなあ」

朗らかに笑う男に、リリルカは詰め寄る。

「はぐらかさないで下さい！ 貴方にはリリに手を貸す理由がない！

随分と「リトル・アイズ」がお嫌いの様ですが、こんなみみっちい作戦の片棒を担がずとも、貴方が直接手を下せば済む筈でしょう！」

深層モンスターを上層まで連れて来ることが出来る程の実力者。その自己評価に偽りがないのであれば、そのくらい余裕な筈だ。わざわざ少女の作戦を手伝う手間ノイズを挟む必要など何処にもない。

「そうだね。真実……その通りだよ。僕はアイツが嫌いだ。今すぐにもあの小さな頭蓋をこの手で割ってやりたい。そして、それができる程の力が、僕にはある」

呪詛めいた声。

先程迄とは趣の違う圧倒的な殺意を、リリルカは男から感じ取った。

恐らく、この言葉に嘘偽りはない。

比喻抜きで、彼は発言通りの凄惨な殺し方を実行したいと考えている……。

「だったら……」

「でも、事情があるんだ。僕は奴に直接手を下せない。いや、下したくない。だから、君の作戦という蓑に隠りたいのさ」

「そ、その事情と言うのは……」

ここで男は大仰に首を横に振った。

「残念だけど、話せないかな。あまり初対面の人の内情に踏み入るのは良くないよ、リリルカちゃん」

お前が言うなと思いつつ、口を割らせる手立てがないので押し黙

る。

その隙に、男は更なる甘言を垂らしてきた。

「さて、どうする？ 僕と手を組めば、作戦成功を約束するよ。君は無事あのナイフを手に入れて、君を縛る鎖から解放される。晴れて自由の身だ」

「……！」

少女はその言葉に揺れる。

分かっている。この男は信用ならないと。

この男の言っている事は都合が良すぎる。

必ず大きな代償を支払わされるに違いない。

けれど、鎖からの開放。自由の身。

それは、リリルカにとつては甘美過ぎる言葉だった。

あのナイフを手に入れば、決して絵空事ではなくなる未来……。

「でも、決断を先送りにしていたら取り返しがつかなくなる。ベル・ク

ラネル……奴の成長速度は僕の目から見ても『異常』だよ」

「……！」

しかし、ここで一気に現実を引き戻される。

そうだ。

そうなのだ。

ベルは信じられない速さで強くなっている。

あり得ない話だが、目を跨ぐほどに目に見えて……だ。

仮に「リトル・アイズ」を分断できたとして、その先で成長したベルからナイフを奪わなければならない。

時間をかけて良い事などないのだ。

リリルカの中で、答えがほぼほぼ決まる。

しかし、最後。

あと一歩。

どうしても彼女を踏み止まらせるものがあつた。

アレを確認してから出ないと、安易にこの男の……というか他人の手は取れない。

聞きたくないと思いつつも、彼女はその言葉をひねり出す。

「せ、成功報酬は……」

無論、貴方へのという意味だ。

それを聞いた瞬間、男の双眸が闇の中に輝いた。

少女はビクリと肩を震わす。

同時に、路地の塀に止まっていたらしい鳥達が飛び立っていった。

その光は、数多の冒険者たちが瞳に宿す猛獣の如き輝きで——舌なめずりをしながら、獲物を見定めるかの様に、男は答えた。

「リトル・アイズ」の絶望……それが僕の求める、最高の報酬だよ」

：

——ぬおおおおお！　なんで、こうなるんだああああああ！！

夕暮れ時の豊穡の女主人……。

唯一の眷属であるベルと夕食を舌鼓していたヘステイアは、今現在……激しい不満と後悔に駆られていた。

無論、ベルとの食事を後悔している訳ではない。

それは寧ろ望むところで、金と時間の許す限り、毎日でも二人きりの団欒を過ごしたいと思っている程だ。

けれど、だというのに……そんな水入らずを邪魔する不届き者が、今、目の前にいる……。

女神の視界に収まっていたのは、この迷宮都市に於いて『最大派閥』と称されるファミリアの子供達だった。

人好きのする笑顔を振りまく活発なアマゾネスの少女と、その姉を名乗る豊満な双丘を持った少女。そして、女神と見紛う程の美貌と儂い雰囲気同居させた金髪金目のヒューマン。

炉の神と犬猿の仲にある女神……ロキと契約を交わした第一級冒険者達である。

彼女らが突撃してきたばかりに、「ロキ・ファミリア」と「ヘステイア・ファミリア」の相席というアンバランスな異物が形成されてしまったのだ。

当然……万人の頭に『何故?』という疑問符が浮かぶ事だろう。しかし、ヘステイアは既に、襲来の原因に見当をつけていた。

何しろ、三人娘の中にはアイズ・ヴァレンシユタインが居て、アマゾネスの妹の方などは、そもそも乱入する際に言っていたからだ……。

『さつきから、マシロマシロって言ってるけど、もしかして弟くんの話し〜?』
と。

つまり、マシロ・ヴァレンシユタイン……『剣姫』の弟』であり『ロキ・ファミリア』の団員の』話をしていた為に、姉とその同僚達を呼び寄せてしまったのである……。

「ねえねえ、その弟くんの好きな子って、どんな子なの? 可愛い?」「え、えつと」

「こら、ティオナ。あんまりがつつかないの」

しかも、かなり俗な話をしていたせいか、嫌に食いつきが良い。

わざわざ料理や飲み物まで此方のテーブルに移し、しっかりと雑談する体勢を整えてしまっている。

まあ、ヴァレン何某に関しては、心ここに有らずと言った具合で、アマゾネスの姉が代わりに諸々を運んでいたのだが……。

何はともあれ、元々人見知りしない性格なのであろう。快活なアマゾネスは、目を輝かせながらベルに質問攻めをしている。

白兔も白兔で、赤面しながら無駄に高いコミュニケーション能力を發揮。

ぎこちないながらも、円滑な談笑が成立してしまっていた。

マシロの想い人……と、勝手に推測されている少女が犬シアンスロープ人で、自分達のパーティーのサポーターを務めてくれている事。

とても細やかな気配りができる優しい女の子である事。

それと、小人族バルウムの様に背が低い事。

ベルがそれらの情報を伝えると、姉妹は「へえ」と相好を崩しながら、「小さい子が好きなのかなあ」「まあ、あの子の背も背だしね」などと、ニマニマ独自の考察を交え始める。

それはそれは、とても楽しそうな御様子だった。まるで女子会である。

「はあああ……」

ヘステイアは、場の雰囲気のことなど一切気にせず、深い深いため息を吐き出した。

既にちやつかり気に入られてしまっている自身の眷属に、胸中で罵詈雑言を浴びせつつ、もう一人の乱入者を見遣る。

ベル達の話題の中心人物たるマシロ・ヴァレンシユタイン。その実姉である【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインだ。

彼女は、同僚のアマゾネス達とは対照的にずっと沈黙を貫いている。

どころか、酷く盛り下がっている様子だった。

まあ、大好きな弟の恋バナを聞かされて、平素でいられる訳もないとは思っていたが……。

「おーい、ヴァレン何某くーん」

ヘステイアは声をかける。

が、反応はない。

案の定だ。

彼女は、両手でグラスを持ちながら、艶やかな唇に飲み口を付けた状態で固まっている。

中身のジュースに減衰の気配はなく、本当にただ、無為に唇を濡らし続けているだけの様だった。

「おいってばあ」

目の前で手を振るってみるものの、やはり無反応。

炉の女神は仕方なく座席を立て、金の少女に近寄った。

そして、彼女が絶対に飛び起きるだろうホラを、耳元でそつと囁く。

「あー、マシロ君が可愛い女の子と歩いてるー」

「……………」

瞬間——ビクンと、面白い程大きく肩が震えた。

整った金糸も乱れる。

同時に……ある意味で凜としていた【剣姫】の顔は幼子の様にクシャクシャになっていった。やがて、金色の満月が波打つ。

そこから大粒の雫が溢れ出す前に、ヘステイアは彼女の顔を自身の方へと向けさせた。

「冗談だよ、冗談」

「じょう……だん……？」

しっかりと目を見つめながら言っていると、【剣姫】はようやく正気を取り戻した様だった。

金の瞳に反射した自分の碧い眼をヘステイアは見る。

これで、会話の出来る状態になった。

そう判断した女神は、ヒューマンの少女に対してわざとらしく肩を竦めてみせる。

「まったく、せっかくの団欒をメチャクチャにしておいて、キミはいつまで固まってるつもりなんだい？ こちとらしい迷惑だよ」

「ご、ごめんなさい……」

「まあいいさ。それより……」

メチャクチャに詰ってやろうかと思つたヘステイアだったが、小動物の様に身を小さくする何某の姿に毒気を抜かれてしまう。そもそも彼女として『弟の恋バナで盛り上がられてしまっている被害者(?)』だ。

既に気落ちしてしまっている女の子に更なる嫌味も吐けず、女神は真面目な顔で本題に入る。

「で、良いのかい？ 随分勝手に盛り上がってるけど……キミからしたら面白くない話題だろう？」

「……っ」

何しろ現状、彼女らとベルの会話は、『マシロの恋を手伝おう隊』なる部隊の結成にまで発展しているのだ。

ベルがマシロの少女に対する態度を告げ、このままじゃ愛想を尽かされてしまうからお節介を焼こう……という流れになったのである。

今は、その作戦会議中という訳だ。

「もちろん、相手の子がいる訳だからさ。ベル君やアマゾネス君達が協力したって絶対落とせるとは限らないけど……それでも可能性は上がるよね」

「……」

「ボクはキミと仲良くもなんともないけど、少なくともキミがまだ、あの子を誰かに渡したくないって思っているのは分かる。だから、もう一度訊くよ。良いのかい？」

真摯な声で語り掛ける。

ヴァレン何某は、険しい顔をしながら自身の気持ちを整理している様だった。

正直、あの時の様子を見る限り、『良くない』と即答するものだと思っていたが……どうやら彼女の弟に対する愛は、ヘスティアの想像以上に深いらしい。

『弟が幸せになれるなら応援するべき』という考えはちゃんと持っているのだ。

だが、同時に『取られたくない』という思いも同居している。

だから、中々答えを出せない。

だから、こんなに苦しそうにしている……。

「はあ」

くだらないと、率直にそう思った。

確かに相手の気持ちを尊重することは大切だ。この上なく尊い思考である事は疑いようもない。

けれど、だからといって自分の気持ちを押し殺す必要はないのだ。

仮に、『相手に振り向いて貰おうと頑張る弟を邪魔する』なんて行為に及ぶようなら大問題だが……別に良いではないか。

『まだ弟を取られたくない』なんていう可愛らしい我儘を言うくらいは。

——でもまあ、こんな様子じゃ無理に気づかせるのは酷か……。

頑なに懊悩する恋敵の姿に、ヘスティアは攻め方を変える事にした。

先程までの静謐な雰囲気から一転、カラツと能天気な声音を響かせる。

「それにしても、随分と薄情な連中じゃないか。キミのお連れ君達は「え？」」

俯き続けていた【剣姫】は、その一言にようやく反応を見せた。

まだ言葉の意味を上手く呑み込みきれていない様子だが、女神の次の指摘で、彼女の表情は色を持つ事となる。

「だって、こんなに弟大好きなお姉ちゃんの前で、大っぴらにマシロ君の色恋に首を突っ込んでるんだぜ？ デリカシーなさすぎるだろう」

「そ、そんな事ないです……っ」

「どうかなあ？ 大体、キミが一切話に乗ってこない時点で様子が変だとは思わないものかねえ」

無論、この非難は敢えてだ。

アマゾネス姉妹に対する悪感情など、ヘステイアにはない。

まあ、自分を差し置いてベルと楽しくおしゃべりをしているという点には、少し……いや、かなり憤りを感じているが……。

しかし、思う所はあった。

あのアマゾネス達とヴァレン何某が友人であるのなら、彼女らは当然知っている筈なのだ。

何某がどれ程までに、弟を溺愛しているのかを。

マシロが好いている娘の話題など、この姉が気持ちよく聞ける訳がないという事を。

「なのに、こんな話で盛り上がるなんて——」
バン！

ここで、【剣姫】は勢いよく立ち上がった。

テーブルを叩きながら、大きな音を立てて。

当然、これまでのヒソヒソ声とは違い、その音はアマゾネス達の鼓膜にも届く。ギョツとした面持ちで問いかけてきた。

「ど、どうしたの、アイズ？」

「ちよ、すごい顔よ、あなた……」

同僚姉妹の声掛けは彼女の耳には届いていなかった。

なので、代わりにヘステイアが応対を始める。

「ああ、すまないね。ボクが怒らせてしまったようだ。そんな変なことを言ったつもりはなかったんだけど……」

「か、神様……なに言ったんですか？」

おっかなびつくり訊いて来る己が眷属に、ナイスタイミングだと内心グッドサインを送りつつ、ヘステイアはそっと金の少女の肩に手を置いた。

「いやあ、明らかにこの子が盛り下がっていたじゃないか？　なのに、なんでキミ達は気にせずマシロ君話を続けてるんだろうって指摘しただけなんだけど……」

次の瞬間、妹の方がバツが悪そうに視線を泳がせた。

やはり、アイズ^連の様子には気付いていた様だ。その上で、敢えて彼女はマシロの恋バナに興じていた。

無論、一体なんの意図があつてそんな事をしていたのかは分からない。

だが、姉とアイコンタクトを取っていた妹は、やがて観念した様に語り出した。

「その、アイズ……弟くんの事……あんまり良く思っていないから」

「……………はい？」

随分と淀みながら放たれた告白に、ヘステイアは思わず目を見開いてしまった。

全く予想外の返答だったからだ。見当違いと言つても良い。

良く思っていない？

何を言っているんだ。寧ろ、真逆だろう。いったいお前は、普段あの姉弟の何を見ているんだ？　第一、それを知っていて、頑なに弟の話が続けていたなんておかしいじゃないか。

行動に全く妥当性を感じられず、ヘステイアは最初、口八丁で誤魔化そうとしているのかと思つた。しかし、神は下界の民の嘘を見抜ける。

彼女が本心でその様な世迷言を発した事を理解してしまい、混乱の

渦中に墮ちる事となった。

「いやいやいやいや、何某君はマシロ君にゾツコンだろう？ 一体全体、なんでそんな発想になるんだよ？」

「寧ろそういう発想にしかならないわよ。だって、この子、あの子と一切口を利かないんだから」

「へ？」

アマゾネスの姉の証言に、炉の女神は我が耳を疑った。

口を利かない？

ソレは一体どういう……。

「大体、なんで他派閥の貴女が分かった風な事言ってるのよ？」

「うぐ……いや、それは……」

痛い所を突かれ、ヘステイアは言葉につまった。

確かに部外者である自分より、同じファミリアである彼女らの方が、ヴァレンシユタイン姉弟への理解は深い筈だ。

本来であれば、自分の解釈は見当違いであり、彼女らの主張こそが正しいと認識を改めるべきである。

けれど……ヘステイアにはどうしても、金の少女の愛情が偽物であつたとは思えなかつた。

故に、本人に耳打ちする。

「もしかしてキミ……家と外でマシロ君への態度違う……？」

数秒の後、コクリと彼女は小振りな顔を動かした。

うおい。

意識せずとも、ヴァレン何某を見る目が冷たくなってしまふ。

一体どうしてそんな意味不明な事をする必要があるというのだろう。姉妹の主張が事実なら、そりゃあ、仲が悪いと勘違いされても仕方がないではないか。自ら要らぬ誤解を招いているだけである。

ヘステイアは【剣姫】から視線を切つて、今度はアマゾネス姉妹へと向き直つた。そうだとしても、彼女達の行動には、まだ不可解な点があつたのだ。

「い、いや、だとしてもだよ。そう思ってるなら、なんでボクらの席に乱入して来たのさ？ キミ達視点じゃ、何某君への嫌がらせにしか

らないだろう?」

「それは……」

「ごめんね、アイズ」

「え」

しおらしい様子で言い淀む姉と、力なく頭を下げる妹。

一見すると嫌がらせをしていた事への謝罪とも受け取れるその行動に、金の少女は顔を青くした。

けれど、ヘステイアの見解が正しければ、勿論そんな訳はない。

アマゾネス達は、言い辛そうに釈明を始める。

「すごく勝手なだけどき……。あたし、アイズと弟くんに仲直りして欲しくて……」

「え……?」

「ほら、今でこそ疎遠だけど、あなた達……昔はすごい仲が良かったじゃない?」

「何があったのか分かんないけど……やっぱさ、仲良くした方が良いと思うんだよね。その方が絶対楽しいと思うし」

「ティオナ……」

余計な事をしてしまっているのかも知れない。

そんな不安に塗れた様子のアマゾネス妹に【剣姫】は吐息を漏らす。

「だから、何か話すキツカケを作ってあげられないかって、ずっと考えてたのよ。それで、ちょうど良くあの子の話題が聞こえて来たから……。まあ、ティオナがいきなり突撃した時は、流石に目を疑ったけどね」

申し訳なさそうに姉のアマゾネスが此方を見たので、ヘステイアは敢えて大袈裟に鼻を鳴らしてやった。

つまり、ヴァレンタイン姉弟の関係修復に、自分達を利用しようとしたという訳だ。

確かに色恋についての話になら、例え興味のない相手の事であつても面白がって乗ってくる可能性はある。

女の子なら尚更だ。

それを契機の一つにしようという魂胆だったのだろう。

正直、悪くない作戦ではある。

けれど、当然ながら誤算も発生していた様だ。

「なるほどね……。で、乱入したは良いモノの、この子が予想以上に黙り込んでるもんだから、逆に話を振れなくなったと」

「う……」

「ごめんなさい。こっちの都合で」

「全くだよ。ただ——事ヴァレン何某君に限って言えば、全く意味の無い配慮だったね」

その一言で、姉妹の……特に妹の方が露骨に肩を落とす。

二人共、女神の発言の意味を履き違えているらしく、マシロの姉に對し見当違いの質問を始めた。

「ねえ、アイズ……。どうして、そんなに弟くんのこと嫌うの……？ たった一人の弟じゃん……」

「え、えつと……」

對して、金の少女は返答に窮している。

本当は嫌っていないと、そう素直に告白すればいいだけなのだが……そもそも勘違いをさせてしまった原因は彼女にあるのだ。

故に、まずはその誤解を解く必要があるが……口達者ではない何某からすれば、それは途轍もなく難しい作業なのだろう。

だから弁明が出来ず、一方的に詰め寄られてしまっている。

「あの子、あんなにアイズにベツタリだったじゃん。見てるこっちが嬉しくなるような笑顔浮かべてさ」

「……っ」

「本当に楽しそうだったんだよ？ でも、今じゃベートみみたいにカツコつけになっちゃって……。きつと淋しがって——」

「あー、違う違う。そうじゃない」

いつまでも押されているアイズ姉を見かね、ヘスティアはここで助け舟を出す事にした。

姉妹の視線が自身に集まるのを確認すると同時に、目配せをする。

「もう、ボクから言っちゃうけどいいね？」と。

アイズ姉はその意図を汲み取れなかったようだったが、もう知らない。

自分の鈍感さを恨めと、炉の女神は強行した。

「さつきも言ったけど……何某君はマシロ君を嫌ってないよ。寧ろ、その逆さ。意味がない配慮っていうのは、そもそも大好きなんだからキツカケ作りなんか意味ないって意味だよ」

「え、いや……でも」

本当の事を教えてやるが、姉妹の反応は芳しくない。当然だろう。

彼女らには実際、何某の塩対応を目撃してきた日々があるのだ。

それも、話を聞く限り数年の長きに渡って。

いくら『超越存在』の啓示と言っても、部外者である神の言葉など、直ぐに鵜呑みにできる筈がない。

故に今度は、【剣姫】視線が集まった。

結局、証明できるのは彼女しかないのだ。

金の少女は暫く狼狽していたが、やがて決心したかのように唇を動かした。

「その……ヘステイア様の言う通り……なの。私、シロのこと大好き……」

瞬間、場がシンと静まり返る。

実際は、酒場の喧騒に蹂躪されていたのだが、当人達にはその様に感じられていた。

「え、え？　じゃあなんで急に喋らなくなったのさ……？」

熟れた林檎の様に赤面するアイズに対し、当然の疑問が同僚から放たれる。それはヘステイア自身も大いに気になっている事だった。

最初こそ『家族にベタベタしている所を見られるのが恥ずかしい的なアレか?』とも考えたが、外での様子を見る限りそんな羞恥心如きが『弟と触れ合いたい欲』に勝てるとは思えない。

「それは……あの子に嫌われたくなくて……。私、あの時ほつぺにチューとか、一緒にお風呂とか当たり前だと思ってたから」

「……へ?」

「ちゅ、チュー!?!」

【剣姫】の斜め上の告白に、ヘステイアは衝撃で絶句する。

ベルも同様だ。まあ、彼に関しては、一瞬羨ましそうな表情を浮かべたが……。

そして――

「あー、そういえばあったね、そんなのも。流石にアレはちよつと引いたなあ」

「仲悪くなるちよつと前くらいなんて、よく『シロが先にお風呂入りちゃった』って涙目で怒ってたものね……」

同僚であるアマゾネス達も、当時を懐古する様に冷や汗を流していた。

そんな彼女らに、ヘステイアはコソツと確認する。

「……………ちなみに、それってマシロ君が幾つくらいの時の話だい？」

「ええつと、確か……8歳か9歳くらい……？」

「え、は、8!?」

「はい、アウトー。死刑」

その返答を聞いて、ヘステイアはドン引きしながら何某に視線投げた。

他三名も程度の差はあれど、『流石にそれはおかしい』という面持ちで彼女を見ている。

如何に鈍感で天然の【剣姫】と言えど、この眼差しは堪えた様だ。露骨に顔を逸らしながら言葉を紡ぐ。

「それで、ロキ達にあんまりベタベタしていると嫌われるって注意されたから……」

「え、そんな理由だったの？ 話さなくなつたのって」

「バカね……。だからって、何もあんな極端にしなくても良いじゃない……」

「だって、気を抜くと抱きしめちやいそうになるんだもん……」
なるんだもんじゃねえよ……。

片頬を膨らませる少女に対し、女神は内心毒づいた。

認めたくはないが、ロキの判断は正しいと、ヘステイアもそう思う。

8歳の弟にチューなど、そのまま放置していたら姉は間違いなく嫌

われていた筈だ。

だから距離を置かせるのは妥当な決断。

しかし、どういう訳か現状、余りにも距離が開きすぎている。

恐らくは、彼女の無器用さが主な原因なのだろう。

もしかすると……幼心のどこかに、自分の行為が行き過ぎているという自覚があったのかも知れない。

だから、これまでの『行き過ぎ』を帳消にする為に『行き過ぎた塩対応』をしてしまったのだ……。

正直、ただの自業自得であるように感じられる。

勿論、ロキ達のフオローも完璧ではなかったのかも知れないが、その場になかった自分が今更とやかく詰なれる話ではない。

だから、ヘステイアは【剣姫】に……今ここに彼女いる当事者に問いかけた。

「でえ、キミはどうしたいんだい？」

「あの子と仲直りしたいです……。だから、その……。それまでは、眼中になくなっちゃうと思うから……。」

ここで何某は、一旦言葉を切る。

しかし次の瞬間、一思いに言い切った。

「彼女は、出来て欲しくないです」

「……………そっか」

少しの間後、アマゾネスの妹が口を開く。

大人しい声音だ。

普段の活発な印象はなりを潜めており、ともすれば【剣姫】の我儘に幻滅している様にも感じられる。

故に、見るからに【剣姫】の表情は強張った。

ヘステイアの肌も、場の空気が張り詰めている事実を感じ取る。

しかし――

「じゃあ『弟くんの恋を手伝おう隊』は解散だね。代わりに『アイズと弟くんを仲直りさせよう隊』の結成だ！」

次の瞬間、顔を上げた彼女が見せたのは、向日葵のような微笑みだっ

た。

彼女の姉と、眷属であるベルもつられて笑顔を見せる。

「うん、いいんじゃない？」

「ぼ、僕も何かお手伝いしますー！」

「皆……ありがとう」

彼らの返答に、何某の緊張も溶けた様だった。

弛緩した空気が流れる。

まるで、仲間であるかの様な雰囲気形成されていく。

そんな中で、ヘステイアは一石を投じた。

「盛り上がっているトコ悪いけど。その隊も解散だよ。あと、この席もね」

「え？」

そして、シツシツと【ロキ・ファミリア】の美少女達を手で払い始めてしまう。

「ちよ、神様!？」

唐突なその行動に、眷属からは困惑と非難の声が上がった。

だが、女神は取り合わない。

もう限界だったのだ。

いい加減、眷属ベと二人きりになりたい。その欲を塞ぎ止められない。

彼との蜜月を過ごす為には、そろそろ邪魔者共には退散して貰わなければ。

そんな思いを抱きつつ、何某達の背中を押し出すヘステイア。

彼女は、「えく、ここからなのにい」と文句を垂れつつ「またねく」とベルに手を振るアマゾネス妹を威嚇しながら、【剣姫】の背中にアドバイスを送った。

「ヴァレン何某君……勇気を出して、マシロ君と話してみるといい」「え……？」

驚く彼女を無視して、女神は続ける。

さながら幼子を諭すような優しい口調で、ゆっくりハッキリと。

「大丈夫。あの子はキミの事を嫌っちゃいないよ。きつと、怖いのだ。」

キミと一緒にだね」

「……？」

戸惑う【剣姫】に、ヘステイアはクスリと微笑みかける。

「キミはあの子のお姉さんだろうか？ だったら、最初の一步はキミから踏み出してあげるんだ」

その慈愛に満ちた表情は、この女神が何を司る一柱なのかを理解させるのに、十分すぎる物だった。

目撃した者達全ての頬が、無意識に朱色に染まっている。

まさしく聖母。

そんな印象を万人に抱かせた女神は……次の瞬間にはキリキリと歯を食いしばっていた。

「さあ、分かったら向こうへ行くんだ！ これ以上ベル君との二人きりの邪魔はさせないぞ！」

そして、駄々っ子の様な捨て台詞で締めくくる。

ドカッと椅子に座り、豪快に酒を煽る彼女の姿に、「ロキ・ファミリア」の面々は、どんな感情を抱いて良いのか分からなくなっていたが……。

一人……霧が晴れたような顔で頭を下げるアイズの姿を見て、テイオナ達も無言で頷き合うのだった。

第十六話

「じゃ、アイズ頑張つてねえ」

「まあ、弟と会うのに頑張つても可笑しな話だけどね」

「うん。ありがとう、二人とも」

本拠地である『黄昏の館』に戻って来たアイズ達は、玄関ホールで早々に解散する事になった。本来であれば、このままお風呂に行く事になつてもおかしくない時間帯だったが、今日ばかりは外せない用が、アイズにはある。

それを知っているティオナとティオネは、笑顔で彼女を送り出くれた。そんな姉妹に感謝の念と、少しの羨望を送りつつ、アイズは目的地へと歩み始める。

しかし、その進行は直ぐに妨害される事になった。

「帰つたか、アイズ」

男子部屋区画へと続く階段。

その一段目に足を掛けた途端、頭上から声が降ってきたのだ。

見上げると、踊り場に立ち、此方を見下ろしている者達が視界に入る。

それは、この世の物とは思えない重厚な鮮やかさを放つ、翠色と朱色だった。

「リヴェリア……、ロキ……？」

何処か神妙な顔をしている副団長と主神の登場に【劍姫】は小首を傾げる。正味な話、彼女らの出迎え自体はそこまで珍しい事ではない。だが、二人の雰囲気がいつもと違う事は、流石のアイズにも察知できた。

嫌な予感がする。非常に……。

白磁の様な肌から、玉のような汗が伝い下りる。

「すまんなあ、アイズたん。帰って直ぐで悪いけど、ちよつと一緒に来てくれるか？」

「……………え？」

主神のお願いに、アイズは思わず顔を顰めた。
命
普段なら断る理由もないのだが、今日……というか、今ばかりは間が悪い。

しかし、そんな心理を見透かすように、主神は眷属の予定を言い当てる。

「分かつとる。これから、マシロントコ行く気やったんやろ？」

「……！」

ドキリとした。

同時に、アイズはバツの悪さに支配される。

マシロの件については、様子を見る様に言われていたからだ。そして、自分自身も同意を示しているのが現状である。だと言うのに、アイズは相談もなしに弟に会いに行こうとしていた……。

これでは何を言われても仕方がないが、次に彼女らにかけられた言葉は、叱咤でも非難でもなく——提案だった。

「アイズ……我々がしたいのは、マシロについての話だ」

「……し、シロの？」

「ああ、ちつとばかり緊急事態が発生してな。このままアタックするより、ウチらの話聞いてからにした方が後悔せんと思うで」

「……」

そんな事を言われてしまえば、最早付いて行く以外の選択肢はない。

『緊急事態』という単語が不穏すぎる。

自分が外出している間に一体何があったというのだろう。聞いた様で聞きたくない……そんなチグハグな心持ちになりながら、アイズはロキトリヴェリアに従うことにした。

【剣姫】が連れて来られたのは『団長室』だった。

素朴かつ悠然な木製の扉に軽いノックを入れ、リヴェリアが躊躇なくその戸を開け放つ。入室すると、そこには余りにも頓狂な光景が広がっていた。

土下座をしていたのだ……何故か、部屋の主の小人族が。

「え、フィン？」

アイズはこれでもかという程に困惑する。

ここはフィンの部屋だ。なので当然、彼が待ち構えているだろう事は分かっていた。

分かってはいたのだが……流石に土下座待機は想定外である。

「えっと、どうしたの？」

戸惑いの声をかけると、漸く【勇者】^{フレイバー}は頭を上げた。

その顔色は酷いもので、心なしかゲツソリと頬がコケている。まるで誰かにこつてり絞られた後であるかの様だった。そんな団長は、改めて深々と頭を下げ、謝罪して来た。

「す、すまない、アイズ。マシロを怒らせてしまった……」

「え……？」

怒らせた……？

怖いぐらいの入念な謝罪より、アイズはその告白の方が気になった。そして詳細を尋ねるより早く、フィンがおずおずと説明を始める。

直ぐそこで仁王立ちをしているリヴェリアにビクつきながら……。

「アイズ……以前僕が、『案外直ぐに、マシロは機嫌を直す』と言ったのを覚えているかい？」

「う、うん」

一字一句覚えていた為、素直に頷いた。

フィンがやけに自信満々に断言したので強く印象に残っていたのだ。アイズ自身は半信半疑だったが……。

「そろそろ頃合いだと思ってるね。確かめる為に、さっきマシロと話をしてきたんだ。だけど……」

結論から先に述べると、弟の機嫌は『直っていた』らしい。十分に、アイズの話聞いてくれる精神状態にあるとフィンは判断した様だ。しかし、そこで団長は少々調子にのってしまったのだという……。

・本人がいなくても関わらず、マシロがアイズに対して『嫌い』という単語を吐けなかった点。

・それが意味する事を未だ自覚出来ていなさそう様子であった点。
・そして、反抗期を迎えて久しい末っ子との久々のお風呂……。
それらの状況に【勇者】は珍しく浮かれてしまった。子供供しい反応に少し意地悪をしてしまったらしい。可愛い子を揶揄ってしまうアレだと、彼は釈明していた。
ともかく、突っ込み過ぎた質問の嵐に、当然、マシロは立ち去ろうとしてしまう。けれど、フィンも『まだ話は終わっていない』とそれを阻止。

その際の弾みで――。

「おし……たおした……？」

「いや、アイズっ。ワザとじゃないんだ……！ 決してワザとじゃっ」
明らかに纏う空気が変わった【剣姫】に団長はサツと制止をかける。が、そんなモノでは、アイズ・ヴァレンシユタインは止まらなかった。

「お風呂で……シロと……ふたりつきり……のおふる」

「お、落ち着くんだアイズ……！ マシロは怪我をしていないし、僕らは男同士だろう?! お風呂に一緒に入ったって、なんの問題も……！」

本題とは関係ない所に引つ掛かりを覚えているアイズ姉に、フィンお父さんは身の危険を感じたらしい。

滝のように冷や汗を流しながら力説するが、彼女が冷静さを取り戻す事はなく……。

「アイズ……頼むから一度落ち――」

「うらやましい……ッ!!」

フィンの懇願を吹き飛ばす形で、アイズは嫉妬心を爆発させた。そして、自身の団長にポカポカとパンチを繰り返す。

その折、リヴェリアが総括する様に告げた。彼女の長細い指は、労わる様に自身の額へと添えられていた。

「そういう訳だ、アイズ。先程マシロの部屋に行こうとしていたようだが、もうしばらく待て。今行っても、恐らく要らん勘ぐりをされて終わりだろう」

「せやなあ。最悪、会話自体拒否ってくる可能性だってあるやろ」

ロキも【九魔姫^{ナインヘル}】に同意する。

そして、彼女らの考えが間違いでない事は、アイズ自身も理解していた。話し合いを拒む弟の姿はいとも容易く目に浮かぶ。慎重を期すのなら、敢えて不機嫌な時に接触を図る必要はないだろう。

その理屈は分かる。痛い程に。

けれど――。

「……嫌」

アイズの口から出て来たのは、拒絶の言葉だった。

彼女らしいか細い声量ではあったが、その眩きを聞き逃すほど首脳陣の耳は飾りではない。故に……諭す様な言葉が口々に放たれる。

「妙に積極的やんアイズたん。でも、そんなに焦らんくても大丈夫やで？ 今回は、自分のやらかしくないや……」

「その通りだ。長くても二・三日時間を置けば――」

「私は――」

しかし、アイズはそれを無理やり遮った。

そして。

「私は……あの子と話したい」

「……」

驚き押し黙る三人の目を見据えながら明確に意思を伝える。

これまでとは明らかに違う気迫に、一瞬場が静まり返る。耳鳴りが喧しい。

「……君の考えを聞かせてくれるかい？」

その静寂^{喧騒}を破壊したのは、フィンだった。

流石に大手派閥の団長と言った所か……つい先ほどまでこの場で最も低いカーストを誇っていた彼の声に、リヴェリア達も聞く体勢を整える。

一同の視線がアイズに集まった。

ロキの面白がるような、それでいて気遣わし気な、

リヴェリアの氷雪の様に鋭く、しかしどこか温もりを感じるような、

フィンの全てを見透かし、その上で全てを包み込むような……。そんな視線の全てを見つめ返しながら……アイズは緊張でより白くなった手を、グツと握りしめた。

そして、口下手な少女は自分の気持ちを伝え始める。

「私……仲直りしたいの。あの子と。その為には、ちゃんと話さないとダメだから……」

勿論、シロが許してくれたら話だけ……。

という言葉は胸に留めるのみにしておいた。口に出してしまうと、決心が揺らいでしまいそうな気がしたから。

そんなアイズに対し、ロキは深く頷きながら問いかける。

「それはウチらも分かってる。仲直りする為には、ちゃんとアイズが話さなきゃアカンって事も含めてな。けど、だったら尚更時間置いた方がエエンとちやうか？ 無理に急ぐ必要もないし、その方が確実やろ？」

正論だった。文句のつけようもない正論だ。

確かに、怒っている時に謝罪に行くより、ほとぼりが冷めた後の方が和解は容易い。子供にも分かる単純な理屈である。

無論、アイズの理性もその方が『確実』だと訴えてはいる。

「ごめん。私、今からすぐくズルイ事を言う……」

「……？ なんだい？」

言葉通り、とても言い辛そうな表情を見せるアイズ。

フィンの穏やかな促しの声に、彼女は意を決して本心を告げた。

「怖かった、の……」

「怖かった？」

「うん……。私、シロに謝るのが怖かった。ちゃんと謝って、説明して、それで許して貰えなかったら……。もう二度と、仲直り出来ないと思ったから」

「アイズ……」

だから、アイズは『謝っていない状態』を維持していたのだ。

謝ってしまえば必ず『結果』が発生する。それを見るのが怖かった。でも、謝罪という行為に移らなければ、いつまでも結果を先送りに

できる。

『まだ謝っていないから……』と、言い訳していられる。

「だから、フィンが待つように言った時……不安もあったけど、心のどこかでホツとした。『あの【勇者】^{フレイバー}がそう言ってるんだから』って、フィンの意見に飛びついて……逃げたの」

「……」

つまり、フィンに責任を押し付けていたのだ。

この状況はフィンの指示に従ったもので、もし何か不都合が起こっても全て彼の所為なのだ。自分の意志ではないんだと……。

そんな醜悪な腹の内を明かされて尚——団長は、神父の様に微笑んでいた。

アイズの罪悪感が、更に更に降り積もって行く。

けれど、それで押し黙ってしまうのは一番いけない行いだと、彼女は声を絞りだした。

「でも、シロからしたら、そんなのこっちの都合だって事も分かかって……。許して欲しいっていうのは私のわがままで、本当はそんなの関係なしに謝るのが筋で……。『確実』だからって謝る期を窺うのは、ズルイ……事で……」

「あら、痛いトコつくなあ、アイズたん」

その台詞に、アイズはビクリと肩を震わせた。

違う。そうじゃない。ロキ達を責めたつもりは無い。

そう弁明する前に、ロキは金の少女の隣にドカツと腰をおろした。そして、その線の細い身体を労わる様に撫で始める。

リヴェリアも膝を折って寄り添ってくれる。

心の中にあるランタンに明かりが灯った気がした。

込み上げて来るモノを外には漏らすまいと、アイズは矢継ぎ早に口を動かした。

「だから、最近は……シロの後を、付けてたりもした……。話しかけるタイミングが、あるんじゃないかって……」

「おっと、それは初耳だ」

「でもっ、やっぱり勇気がなくて……。嫌われちゃうかもって思う

と、足が竦んで……。私は臆病で……。どうしようもなくズルイ奴で……」

「そんな事はないさ。誰だって、嫌われると思う事をするのは勇気がいるよ」

フィンのフォローに異を唱える者はいなかった。

瞬間、アイズは後悔に襲われる。

こんな事を言っても、絶対に彼らは慰めの言葉をかけてくれる。そんな事は分かっていた筈なのに、どうしてこんな事を口走ってしまったのか……。

自分を卑下する【劍姫】の耳に、クスリという苦笑が届いた。

妙に耳触りの良いそれに顔を上げると、今度は少しおちよくる様な台詞が小人族パルゥムの団長の口から放たれる。

「じゃあ、そんな臆病なキミが、マシロと話す気になったのはどうしてだい？ 嫌われるかも知れないだろうか？」

「……今日、テイオナ達とご飯に行つて、そこで会った女神様に言われたの」

「ほおう？」

その告白に、ロキが一層興味深げに身を乗り出した。

『神』という単語を出した所為だろう。

真紅の瞳は冷徹さ浮かんでおり、他の神部外者の介入を拒むような色が伺えた。

「勇気を出して、最初の一步を踏み出すべきだって……。私の方が……その、お姉ちゃんだからって」

「ナルホドなあ。因みに、そいつの名前とかわかるか？ 特徴とかでもエエで」

まるで、その神を値踏みする様な視線がアイズに送られる。

ロキとは違い幼い容姿に豊満な胸を持つ……胡散臭さとは正反対の笑顔を咲かせる女神の事を思い浮かべながら、アイズはどこか主神と近い物を感じさせる彼女の名を口にした。

「ヘステイア様っていう黒髪の神様」

「……………」

沈黙。

その名を口にした瞬間、朱色の神はあからさまに押し黙った。真紅の瞳を真円に見開き、普段では考えられない大きさまで瞳孔を膨れ上がらせる。

肩がワナワナ震えだしたかと思えば、「ど、どどどお……い」という意味不明な単語が唇から漏れ始めた。

「ドチビやおお!? あのチンチクリン……ウチの可愛いアイズたんと何シレッツと関係持つてんねん! てか、文脈的に弟とも知己やないかい! 姉弟共々籠絡しようとかマジで万死やぞ!」

般若の様に吠えるロキに、アイズはタジタジになるしかない。助けを求めようとフィン達に視線を向けるが、彼らは額を抑えながら溜息を吐くばかりだった。

「神へステイアか……」

「まさか、よりにもよって彼女とはね……」

「え?」

「なんで、ファイたんとかやないねん! もしくは、ミアハかタケ辺り! そんなら考えてやらん事もなかったのに!」

狂ったように『善神』として有名な神の名を発していくロキに、アイズは素朴な疑問をぶつける。

「その、ダメ……? ヘステイア様、良い神様だったよ?」

「……!! そ、そら邪神やらなんやらじゃないけどやな……。てか、今の仕草可愛すぎやろアイズたん!!」

怒りなど忘れて野獣の様に飛びかかろうとするロキ。

そんな彼女の進行は、リヴェリアによって阻まれた。溜息を吐きながら翠髪の麗人が話を戻す。

「アイズ。つまりお前は、我々の判断より神へステイアの意見を優先するという事だな」

「……………」

その問いに、アイズは思わず息を詰まらせた。

同時に、来るべくして来た指摘だとも思う。何せ、殆ど見ず知らずの神の助言に従おうというのだから、リヴェリア達からすれば面白い判断だと言えるだろう。

当然、彼女らの方がマシロの事を識っているし、理解も深い。そこに疑問を挟む余地などなく、実際、間違った見解を述べているとは感じていない。

それでも。

足腰に力を入れ直して、アイズは翠の瞳を見つめ返した。

悠然な大自然を思わせる深いエメラルドに吸い込まれそうになるが、どうにか平衡感覚を保つ。

大地に根を張る様なイメージで足の裏を絨毯の地面に括り付け。

ひとつ深呼吸をしながら、少女はその言葉を紡ぎ出した。

「ゴメン。それでも私は、あの子に気持ちを伝えたい」

険しい顔をするリヴェリア。それにフィン。

しかし、顔を逸らさずにいると、不意に二人の口から微笑が漏れた。張り詰めた空気はそれによって溶解する。

「そうか。そこまで決意が固いなら、もう何も言うまい」

「え」

予想できない程あっさりと出された許しに呆気に取られるアイズ。

その放心状態を面白がるように、降参だ、というようなポーズでフィンも告げた。

「僕らの負けだよ。君が本気で謝りたいと考えているなら、止める権利は僕らにはない。そもそも、僕らはマシロの君への好感度を読み間違えていた立場だしね」

良いの？

そう尋ねるのを、アイズは寸での所で思い止まった。代わりに、別の懸念を口にする。

「でも、ロキが」

「……まあ、ええんやないか？ ドチビが言うた事に従うんは癪やけど、イタズラに他人を引っ掻き回す神とちやうしなあ」

窺う様な視線を送ると、主神は不貞腐れた顔をしながらも認める様な発言をする。

リヴェリア達以上に呆気ない。

では、何故あれほどまでに発狂したというのか……。

それに対する答えは、非常に脱力感を覚えるモノだった。

「だって、ウチ、アイツ嫌いやし」

「……」

「ま、とにかくや」

ここでロキは、真面目な顔でアイズに向き直った。

「行くなら止めへんで。どうする？ アイズたん」

それが最終確認である事はアイズにも分かった。

もう一度よく考えてみるべきだ。

今の自分は流れに酔っているのかも知れない。

本当は慎重を期した方が良いのかも知れない。

けれど、幾ら考えた所で『正解』なんて物は分からなかった。いつ

そ、そんな物はないんじゃないかと思える程に。

だから、考えるのなんて無駄だと、アイズは結論付ける。

臆病風に吹かれて、決心を揺るがす時間を作るだけ。良い事なんて

ありはしない。

もう、動いてしまえ——。

いつそ自棄とも思える思考が、アイズの胸に妙にしつくりと落ち

た。もう迷わないと、確信できた。

顔を上げて、三人の顔を見る。

「ロキ、フィン、リヴェリア。ありがとう。いくね」

そう声をかけるが、返答は待たなかった。

アイズは踵を返し、団長室を後にする。

その足は、真っ直ぐ弟の部屋へと向かっていた。

：

「うへへへ、もう食べられないよお」

酒場の店内で、実に愉快そうな炉の神の声が響いた。

グデングデンに酔っぱらった彼女は最早直立できる状態にならず、店員に背負われる形でトイレへと連行されている。何を勘違いしたのか、店員の首筋あたりに顔を埋め、彼女の匂いを堪能している様だった。

「ベルくん。キミはホントにいい香りがするねえ。それにいつの間にかこんな可愛い耳を生やしたんだあい？」

「うぜエニヤ！ ミャーは白髪頭じゃニヤいし、耳ガシガシするんじゃニヤいのニヤー！」

「うぷ」

「吐くニヤよ!! 吐いたらマジでぶっ飛ばすからニヤ!!」

女神の不穏な嗚咽に対し、アーニヤ・フロームルが悲痛の叫びをあげる。

けれど、主神の酔いが醒める気配はない。

ワーキヤー騒ぐ彼女らの様子を苦笑して見ていたベルは、二人の姿が女子トイレに消えたのを契機に、何となしに店内を見渡し始めた。

ヘステイアと違って酒は飲んでいないが、妙にフワフワとした心地に包まれている。美味しい料理を食べた満腹感か、それとも楽しい時間を過ごした充実感故か。

何が原因で夢心地になっているのかは判然としなかったが、それでも近年稀に見る多幸福感を覚えているのは確かだった。

そんな所在なき……意思も無き視線に意識が宿ったのは、店内に飾られている一冊の本が視界に入った瞬間だった。

白い本である。特別珍しい色という訳ではないが、何故か妙に気が惹かれた。綺麗だと、ベルは認識してしまった。

故に、題名は……？ と凝視するのは必然の流れだったのかも知れない。しかし、目を凝らして読める距離ではなかった。席を立て近づけば良いという簡単な解決方法は、相席者がいない今実行し辛い。

嘘みたくに満面の笑みを浮かべた超絶美少女が視界内に降臨したのは、丁度その時だった。

「ベールさん」

「え、シルさん？」

きやぴつと効果音が聞こえてきそうな登場を果たした店員に、白兎は目を丸くする。若干腰も抜けてしまったかも知れない。声は、完全に上ずっていた。

急に顔を覗き込まれたのだから当然だろう。しかも、その相手が【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインに勝るとも劣らない美貌の持ち主とあってはお手上げだ。

赤面を自覚しつつ、ベルは取り繕う様に疑問を尋ねた。

「ど、どうしたんですか、シルさん？ 今日はお休みだったんじゃない……」

アーニヤ・フロームルからは、確かにその様に聞かされていた。詳しい欠席理由までは、彼女が多忙だった故に知らされていないが、あの状況でわざわざ嘘を吐くとは思えない。

すると、シルは不服そうに半目になって、プクーツと片頬を膨らませた。

「えー、何ですか、その反応は？ ベルさんが来店されたっていうから、熱がある重い身体を引きづって来たんですよ？」

「いや、休んでて下さいよ!! あと、絶対風邪とか嘘ですよね!!」
いけしやあしやあと言うシルに、ベルは突っ込む。

蝶のように軽やかな身振り。血色のいい肌。枯れた様子のない美しすぎるソプラノボイス。

どれをとっても体調不良の人のそれではない。

彼女自身も本気で風邪設定を押し付けるつもりは無いらしく、咳き込む演技もそこそこに話題を切り替えた。

「それより、さつきから何を見ていたんですか？」

「え？」

驚いて彼女の顔を見ると、満面の笑みのまま答える。

「何か真剣にあっちの方を見ていたじゃないですか。私の声にも気付かないくらいに熱心に」

「あ、僕に声かけてたんですか？ すみません、気づかなくて」

「いーえ。さて、ベルさんの視線を辿るとお……」

クスリと笑いつつ、鈍色の少女は楽しそうに歩き出す。その進路は、まさしく先程までベルが眺めていた方向。終着点にあるのは、ベルの目を奪ったあの白い本で――。

シルの白い指が、白い本にかけられた。

遠目では同化してしまっている様にも見える白い手に掴まれて、その本は店員と共にベルの元へと近づいて来る。紅色の瞳に本の全貌が収まった。

花柄の様な表紙には『ゴブリンにも分かる現代魔法』と、そう書かれている。

「気になっていたのはコレですか？」

小首を傾げながら訊いてくる小悪魔のように店員に、ベルは頷きつつ尋ねた。

「は、はい。前にこんな飾ってありましたっけ……？」

「ああ、これは。お客様のどなたかがお店に忘れていったようななんです」

珍しく困った様子でそのように教えてくれるシル。けれど、次の瞬間には直ぐにイタズラっ子のような顔に戻っていて……。

「興味あります？」

「そんな悪魔の囁きのような言葉をぶつけて来た。」

「え、でも……」

「取りに来る様子はないし、減るものでもないですし、読み終わったら返してくれればいいですから」

シルの説明が進むごとに、ベルの胸は期待で膨らんでいった。正直、タイトルを読んで一層この本に惹かれていたのだ。

持ち主が一向に取りに来ないのであれば、既に本の存在を忘却している可能性は高いだろう。それに、確かに読んで減るものでもない。食べ物ではないのだ。

本の厚みからして一晩で読破し翌朝返すという離れ業は不可能だろうが、最速で読み切って戻してしまえば……。

ベルの中で、彼にしては最大級に邪な考えが浮かぶ。

最後にシルの顔を見た。そして、彼女の微笑に後押しされる形で決

断する。

「じゃあ、お言葉に甘えて……ありがとうございます！」

白い本が、白い兔の腕の中に抱えられている。

ベル・クラネルがランクアップする為の要素が、揃った瞬間だった。

第十七話

あるところに、ひとりの男の子がおりました。

それはそれは、とても小さな男の子でした。

同年代の子供達と比べても、彼ほど小柄な童はそうは居ないでしょう。未熟児と称しても、最早問題視されない程なのです。

そんな弱々しい男の子でしたので、周囲からは長くは生きられないだろうと見られておりました。心苦しくはありますが、私自身も、三つの誕生日を迎えられるかどうかという見解を立てていたくらいです。

けれど、それら世間の声に反骨するように、彼はすくすくと成長していきました。

肉体こそひ弱な少年でしたが、その代わり、周りの人間に恵まれる才能はピカイチだったのです。そもそも、この両親に産んで貰ったという事自体が、弁舌しくし難い幸運であったと僻まずにはおれません。

男の子の父は、雄々しく精悍な第一級冒険者でした。

男の子の母は、この世の者とは思えぬ美貌を備えた、やはり第一級の冒険者でございます。

容姿も人望も、実力も富も名声も。全てを欲しいままにしてきた男女の間に生まれた子供。そんなもの、勝ち組と言わざるを得ないでしょう。生活に困窮する道理などなく、寧ろ親の七光りで贅沢三昧が約束されています。どれだけ身体を悪くしても、財力にモノを言わせただ最高の医療を受けられるでしょう。

もしかしたらその代償に、丈夫な肉体を取り上げられてしまったのかも知れません。

とにかく、この童は非常に尊い愛情を注ぎこまれました。まるで壊れ物のように優しく扱われ、当たり前前のことができただけでも、過剰

に褒められ、撫でられ、抱擁されたのです。

何かに失敗した時も同じです。誤って皿を割れば「怪我はないか」と血相を変えられ、転んで膝を擦りむけば丁寧に応急処置が施され、泣いて帰ってくればどんな作業を中断してでも慰めて貰えました。

風邪なんて引いた日にはもう一大事です。家にある最も高価な薬を引つ張り出してきて、腕のいい医者を呼びつけてと、てんやわんやでございます。

とにかく、彼は大事に大事に丁寧に育てられました。寧ろ、ここまですされたのですから、すすく育たない方が異常というものです。無事に大きくなっていく彼に、両親はとても喜びました。しかし、それより遥かに大きな喜びを感じていた者が、一人だけ居たのです。

それは、金の長髪と金の瞳を持った女の子でした。

とても綺麗な女の子です。

まだ子供ながら、『可愛い』より『美しい』という印象が勝ってしまった程の美貌を備えておりました。日中などは無邪気な笑顔を咲かせていますので、まだ辛うじて年相応に見えるのですが、表情の無い寝顔などを一たび目にする、その妖艶な雪肌就容易に吸い込まれそうになってしまいます。

しかし、それも仕方のない事象でございましょう。

何故ならこの金髪金目の少女、『この世の者とは思えぬ美貌を備えた少年の母』と瓜二つな容姿しているのですから。まさに生き写しとは彼女の為にあるような言葉でございます。

『天女の子供』。若しくは『子供の天女』。

どちらでも構いませんが、とにかく美の化身たる彼女にとって異性を惑わすなど朝飯前なのでございます。

では、そんな彼女は何者なのか？ 答えは実に明解です。

『娘』です。天女のような母の。

つまり、ひ弱な少年の『姉』にあたる存在なのでございます。

そして彼女は、容姿だけに留まらず、気性までも母親を写し取ったような性格をしておりました。普通、この年頃の幼い姉弟ともなると、親の関心を奪われた姉が弟を敵認定するというのが一般的なので

すが、この少女に関してはその様なイジワルは一切行わなかつたので
す。それどころか、率先して小さな弟を可愛がりました。

最初は両親に良い恰好をしようという目論見があるのかとも勘ぐ
りました。どうもそういう訳ではないようです。親の目の無い
所でもベツタリです。しかも彼らが弟に構っていると『私の子を
取らないで』と言わんばかりに取り返して抱きしめるのですから、流
石に勘違いではありません。正直、弟が乳幼児期を過ぎた辺りから
は、どちらが母親なのか分からなくなっております。

姉が弟をべらぼうに可愛がる。

それ自体は良い事です。微笑ましい事です。母親としても育児の
負担が減つて、幾分楽が出来るでしょう。しかし……。

今でも忘れられません。

幼い息子との触れ合いを、愛娘の手によつて妨害され続ける両親
の、あの何とも形容できない表情を……。

けれど、そんな父母の憂いとは裏腹に、少年は幸せだったに違いあ
りません。当然です。こんなに可愛いお姉ちゃんに、誰よりも愛され
可愛がられているのですから。これで幸せではないと宣うものなら、
全てを敵に回しましょう。

実際、彼の顔から笑顔が絶えた日はありませんでした。

雨の日も晴れの日も、寒い日も暑い日も。家でも外でも、朝でも夜
でも。いつでもどこでも彼は太陽のように笑っております。それ
は、怪我をした時、落ち込んだ時、風邪を引いた時も例外ではありま
せん。

家族は……特に姉は、そんな彼の姿を見て心を痛めました。そし
て、何て優しい子なんだと誇らしくも思いました。辛い時でも、家族
に心配を掛けまいと笑顔を浮かべる。その健気さに彼らは心を打た
れたのです。

でも、私は知っています。知っているのです。

彼らは騙されているのです。

きつと、少年は分かっていたと、私は思うのです。

何を？ と問われれば、すなわち『どういう時に、どうやって振舞

えば、好感度が上がるのか』を・でございます。

彼は動物のように生きています。難しいことは思考できません。けれど、自分に利する事柄なら話は別であります。彼はその持ち前の狡猾さで、自分の振る舞いを決めていたのです。

何故私がそう思うのか？ その答えは簡単です。

だって、家族とはいえ、あんなに美しい母と姉なのですから。好かれないと考えるのが道理に違いありません。そして、好かれる為には、『健気な良い子』を演じるのが一番でございます。

非常に卑しい思惑ですが、その目論見は成功を収めていたと言えるでしょう。

まさかこんなに幼い子供が、そんな策略を巡らせているだなんて夢にも思わないでしょうし、そもそも彼女らは、少年の肉親になるには清い心を持ち過ぎていたのです。

けれど、罰が当たったのでしよう。

卑しい少年の幸せな日常は、ある日、音を立てて崩れ落ちました。

両親が、いなくなったのです。

それは突然の出来事でした……。

いや、厳密には『突然』ではなかったのでしょうか。

あの優しい父と母が、何も言わずに幼い姉弟を置いて行くはずがありません。

なので、きっと、少年が思い出せないだけなのです。

当時の彼の年齢を考えれば仕方のない事ですが、日頃から少しでも脳みそを動かして鍛えていれば記憶に残す事も出来たかもしれませるので、やはり少年の怠慢だと言わざるを得ないでしょう。

彼の記憶が定まったのは、『ロキ・ファミリア』という迷宮都市きつての大派閥に引き取られた後でした。その間の記憶は曖昧なので、正直どういふ経緯なのかは彼の知る所ではございません。

ただ、両親の『死』については、その時には既に胸の中に入ってお

りましたので、多分、引き取られる以前に、誰かしらに教えられたのでしよう。

当時の彼は、悲しみでいっぱいでした。

雨の日も晴れの日も、寒い日も暑い日も。家でも外でも、朝でも夜でも。いつでもどこでも太陽のように笑っていた少年は、一転して毎日滂沱の雨を瞳から流しました。そんな少年を、ファミリアの者達はいつも励ましておりました。

家族でもないのに、まるで本当の家族の様に……。ここでも彼は、人に恵まれる才能を発揮したのです。

そして、特に熱心に少年の心に寄り添っていたのは——やはり彼の、姉でした。

目頭が熱くなりそうです。

だって、彼女も同じく両親を亡くしている立場なのですから。自分だって辛いハズなのに、それを押しつけて泣きじやくる弟に胸を貸しているのです。こんなの、胸が締め付けられない訳がないじゃありませんか。

こんな時でさえ弟を優先する彼女の優しさに、私は必然、心を撃たれました。そして、それに懲りずに甘え続ける少年に嫌悪感さえ湧いて来たのです。けれど、今の私には何もできません。彼を叱りつける事も、姉をふんわりと抱き寄せてやる事も叶わないのです。

私は自身の無力さに打ちのめされながら、少年の蛮行と少女の慈悲を幾日も目に焼き付けるしかありませんでした。

そんな自若たる日々も、やがて終わりを迎えます。

姉と、その他の団員達の努力が実り、少年は次第に活気を取り戻して行きました。

ようやく、彼の心に降り続けた雨は止んだのです。

しかし、それは対岸の太陽が天に戻ったというだけでした。対となる陸の大地は、相も変わらず大雨に地表を抉られています。癒えたのは弟の心の傷のみ。その立役者たる姉の心は、全くと言って良いほどに手つかずでした。

主神や首脳陣の細かなフォローのお陰で壊れはしませんでした、

彼女の心に巢食った闇が晴れた訳ではございません。愚かな少年がその事に気付いたのは、様子を見る限り、彼が「ロキ・ファミリア」の事を第二の家族と認識し始めた頃と言えるでしょう。

ちようどその時期に、彼の姉は神ロキから恩恵を授かりました。それはつまり、モンスターと戦う力を得たという事です。当然、まだ幼すぎるとロキ達は反対しましたが、最終的には彼女の熱意と頑固さに押し切られる形となりました。

恩恵を得た姉は、来る日も来る日も、何かに憑りつかれた様にダンジョンに潜り続けました。この尋常ではない様子に、流石の彼も察します。自分達の両親を殺したのは、モンスターなのだ。だから、姉は毎日モンスターを殺しに出かけているのだと。

モンスターが親の仇。

それを理解した少年ですが、臆病な彼の闘争心に火は点きませんでした。寧ろ、あんなに強かった両親でも敵わなかった怪物だと、更に恐怖が刷り込まれる体たらくです。彼は、もう姉さえ無事でいてくれたらそれで良かったのです。だから、彼は姉が帰って来るまで、絶対に寝ないようにしました。

本当は冒険者なんてやめてくれと言いたかったのですが、自分には決して向けられないあの鬼気迫る無表情を見ると、どうしてもその言葉を口にできないのです。

そうこうしている内に、年月はあっさり経過していきました。

既に姉は十二歳。Lv. 4になっておりました。冒険者として独り立ちどころか、実力の上ではベテラン層にさえ名を連ねております。当然、既に一人でダンジョンに潜っており、実質的な門限もありません。故に、八歳の子供弟が起きているには深すぎる時刻まで潜っている事もザラになりました。

それでも、少年はめげません。もはや意地です。

毎日、根性で、眠気を追い払って、姉の帰りを待っていました。

そんなある日の夜、いつもの様に姉が帰ってきました。

コンコンと、ノック音の聞こえ方で姉の帰還だと知った少年は、躊躇いなくドアへと駆け出します。

開かれた扉の隙間からは、綺麗な金髪と、心地の良い香りが漂ってきます。戸が開け放たれると同時に頭わになったのは、やはり姉でした。直前までは無表情でしたが、駆け寄る少年を認めた瞬間、微笑を孕んだ様子でございます。

何度か頭を撫でて貰った後、少年は彼女をソファアームまで引つ張って行きました。そして、横暴にも膝に座らせてもらい、さも当然の様に雑談を始めるのです。

幾ばくか言葉を交わすと、姉は、内緒だよ？ と微笑みました。

ふつくらとした小振りな唇に人差し指を当てて、教えてくれます。どんな事だろうと能天気と考えていたのですが、次の瞬間、その思考は跡形もなく吹き飛んでしまいました。

なんと、姉は今日、モンスターに吹き飛ばされたというのです。幸い怪我はしていませんが、少年は気が気じゃありません。そういう危険な目にあつたという告白は、これまであまりされた事がなかったからです。

故に少年は訊いてしまいました。それは、姉にとっては聞かれるまでもない事だったでしょう。

「ねえ、まだモンスター嫌い？」

「……シロは嫌だ？ 私がダンジョンに行くの」

少年が尋ね返された質問に頷くと、少女は困った様に笑って続けます。

「駄目だよ。モンスターはお父さんとお母さんの仇だから。この世に存在してちゃいけないものだから」

やっぱり、姉はそういう理由でダンジョンに潜っている様でした。予想は出来ていましたが、いざ本人の口から明言されると重みが違います。親の仇を討ちたい。その心の流動は真つ当なものですし、少年にも理解が出来ます。しかし、彼は悲しそうな顔を作りました。

きっと、自分との時間を削ってでも、姉が敵討ち果たそうとしていく事に納得がいかないのでしょうか。親ときょうだいでは、親の方が大事でも仕方がない筈なのに。どうやら彼は、実の両親相手でも、姉の一番は自分でなければ気が済まない様です。悍ましい独占欲でござ

います。

それを証明するような言葉を、ポロツと、少年は漏らしてしまいました。

「……僕、姉ちゃんが死んじゃう方が嫌だ」

瞬間、沈黙が生まれます。

「あ、お母さんたちが死んで良かったって言ってるんじゃないかって……」
そして、ハツとした少年は、即座に訂正しました。ですが、もう遅いのです。少年はすっかりと言ってしまったのです。親の仇を討つ事なんかより、姉の方が大切だと。

つまりそれは、実の親のことなんかどうでも良いと言っているのと同義でございます。

この発言に姉である少女はショックを受けた事でしょう。弟は自分とは志を異にしている。彼はあの二人の子供には相応しくないのだと。自分の弟には相応しくないのだと。

それが分かって、急激に冷めた筈です。大好きな両親を軽視する奴など、大嫌いだと、心の底から思った事でしょう。

「分かってるよ」

「うん」

その返答を聞いて、単細胞な少年はすっかりホツとした様子です。彼女の声のトーンの若干の変化にも気付かずに、安心しきった顔で眠りに落ちました。

少女は今すぐにでも、自身の腕で眠る少年を振り払いたかったに違いありません。しかし、優しすぎる彼女には、そんな事さえ出来ませんでした。何故か彼の寝顔を愛おしそうに眺めていた気がしましたが、それは流石に私の見間違えでございましょう。何故なら……。

この金髪金目の少女は、次の日から弟とまったく口を利かなくなつたのですから――。

後日、異変に気付いた少年は困惑しました。混乱しました。そして……理解しました。

自分が放ってしまった言葉が持つ意味を。姉の地雷を盛大に踏み抜いてしまったという事を……。

その瞬間、彼の目の前は闇に包まれました。

まるで、自身の銀目に墨を塗られたかの様な景色でした。加えて、体内には鉛が入れこまれてしまった様でございます。異様に重く怠い肉体は、まったく自分の物とは思えませんでした。脳内には『嫌われた』という単語が警鐘の様に鳴り響いており、とても周囲の音を拾う事など叶いません。

そんなふうな絶望を体現したような表情で、少年は立ち尽くしていました。白い肌や銀色の頭髮はいつも通りの筈なのに、色素の薄いそれらは彼の無力さを引き立たせます。

少年は動けませんでした。

その場から、という意味ではございません。

直ぐに姉を追いかけて謝罪をするという選択を実行に移せなかったのです。理由は明快。怖かったからです。謝って、罵倒されるのが怖かったのです。親を軽視するという自分の発言を考慮すれば、怒鳴られる事など仕方がない結果でしょう。

しかし、少年にとつての姉は、いつでも自分を全肯定してくれる優しい存在でした。そんな相手に責め苦を立たされる等、彼に耐えられる筈もありません。

結局、少年は逃げました。目を背けました。

原因が自分にあるのだから、嫌われても仕方がないだろうと、そう開き直る事にしました。

そして、姉のこと等どうでも良い。とも思い込むようにもしました。最初から嫌われても良い相手だった。最初から好きでも何でもなかった。そういうことにして、自分を欺き切れるのであれば、傷つく事もないからです。

弱いですね。

本当に、どうしようもない奴です。憐れみすら覚えます。

純粋な疑問なのですが、一体前世でどんな得を積めば、こんな層があの両親の元に生まれて来るのでしょうか？

彼を産み落としてしまった事が、アリア・ヴァレンシュタイン唯一の失敗だと言えるでしょう。彼女は確かに完璧な女性でしたが、それや人間ですもの。失敗だってします。けれど、この失敗だけは頂けない。

一時期でも、アリアの清い子宮の中にコイツがいたと考えるだけで、吐き気が込み上げてきます。

結果として、アイズ愛娘に要らぬ足枷を残してしまった訳ですし、やはり説教は必要でしょう。けれど、怒ってばかりではいけません。罪を許し合えなくて、どうして家族と言えましょうか？

認めたくはありませんが、奴は私の家族でもあります。だから、家族の一員として僕にはアレをどうにかする義務があるんです。

だから、アイズ。

もう少し待っていて。

もう少ししたら、目障りなそいつを消してあげられるから。

君の、臆病で愚劣で自分勝手に弱虫で泣き虫な愚弟を。

マシロ・ヴァレンシュタインを、もう少しで始末してあげるから。

迎えに行くのが遅くなってしまつてごめんよ。また、一緒に暮らそうね。

僕の、親愛なる――

第十八話

画一化された長方形の四角い扉。

それは、実際に目にせずとも、万人が脳裏に浮かべる一般的な形と言えるだろう。

『最大派閥』『最強のファミリア』等と称される「ロキ・ファミリア」の本拠……悠然かつ巨大な敷地面積を誇る黄昏の館でも、そんな平凡な型を採用していた。なんの変哲もない木の扉は、個室の区画に踏み入れれば幾らでも拝むことが出来るし、なんなら自分の部屋の前に立つだけで視界に飛び込んで来る。

今、目の前にしているこの扉も、それらとなんら変わらない物の筈だ。

だというのに……、アイズ・ヴァレンシユタインは、その一枚の木の板に対して、物々しい迫力を感じずにいられなかった。

「……………」

わかっている。別に、扉は重圧など放っていない。当然だが、この先に魔王がいるなんて事もない。いるのは、この部屋の家主。マシロ・ヴァレンシユタイン。

つまり、弟だ。

先日の迷惑行為の謝罪と、これまでの態度の釈明。そして何より、仲直りをする為に、アイズは彼の部屋の前まで来たのである。

既に、彼女の喉は緊張でカラカラだった。

深層モンスター相手でも臆せず立ち回る事の出来るというのに、彼の事となると【剣姫】は赤子のように臆病になってしまう。斃せば終わりの怪物達とは何もかもが違うのだ。

しかし、いつまでも佇んでいる訳にもいかない。

アイズは意を決して、しかし震える手でノックした。

強く音を立てすぎると威圧感を与えてしまうかも知れないので、気持ち優し目に。しかし、それを意識し過ぎて、一発目は手の甲で木目の表面を撫でるだけに終わってしまった。これでは中まで聞こえない

いので、もう一度コンコンと叩く。今度は思いの外響いてしまい、ビクリとしつつ、アイズは喉から声を絞り出した。

「シロ……、ちよつと良い？ アイズだよ……」

「……………」

返って来たのは、半ば予想していた重たい沈黙……。

「し、シロ……？」

けれど、めげずにノックを続ける。

すると今度は返事こそなかったものの、部屋の中から布が擦れるような物音が聞こえて来た。そして、ノソノソという足音が床を伝って明らかに距離を詰めて来る。程なくして、内側からドアノブに手をかけられたのが分かった。

それが思い違いでないと証明する様に、ドアノブがあっさりと倒れ

。バクバクがなる心臓を押さえつける暇も無く、実に呆気なく、弟は姿を現した。

「……………」

瞬間、アイズは金の瞳を見開く。

既にお風呂を済ませている。

その前情報は仕入れていたのだから、アイズはマシロの格好を想定しておくべきだった。それを怠った故に、ノーガードで飛び込んで来た弟の寝間着姿に、危うくノックアウトされかける。

どこかまだ火照った身体に、少しゆとりのある大きめのパジャマ。湿気を帯びてぺたんとなつている銀髪。眼窩に収まる銀色の宝石も、熱気の影響か何処か潤んで見えた。加えて、鼻孔を擽る石鹼やシャンプーの香り。

控えめに言つて、破壊力抜群だった。

アイズの脳内で『可愛い』だとか『天使』だとかいう単語が濁流のように暴れ回る。勿論、アイズ実姉にのみ効く特効だ。他の者が今のマシロを目にした所で『風呂上りか』以上の反応は示さないだろう。

けれど、ここで重要なのは彼女にとつてはクリティカルだったという事実だ。寝間着姿の寝ている弟までならコソコソ忍び込んでいた

時に耐性もついていたが、起きている状態となれば話は別である。三白眼の上目遣いが、アイズを狂わせる。

「……………なんだ」

あまりの衝撃にカチコチに固まっていると、怪訝そうな弟の声が脳を揺らした。アイズはハツとしながら声を出す。

「あ、いや……………その。話があつて」

「……………」

『そもそも、そうじゃなかったら尋ねてないだろう』という回答をすると、彼の顔に刻まれた警戒心が一層濃くなつた。光の刺さり方が変わった銀目がとても綺麗だ。そんな場違いな感想を抱いていると、不意に長い沈黙が破られる。

言葉こそ発しなかったが、彼が^弟身体を扉の方に寄せ、スペースを作ってくれたのだ。流石のアイズでも、それが『入れ』の合図である事は理解できた。

「お、おじやまします」

故に、身を丸くして入室する。マシロが扉を閉める音を聴き届けた後、アイズは室内を見渡した。一見すると、以前夜中に侵入していた時と何も変わっていない。椅子の位置や小物の配置に細かな差異はあれど小物の種類自体に大きな変化は見られなかった。

無論、女の子にあげそうなプレゼント類も確認できない――。

まあ、仮にそんな物があつたとして、目の付く場所に放つてはおかないだろうが、家主がいる手前、大っぴらな搜索もできない。

するとここで、アイズの目の前に一脚の椅子が置かれた。慌てて視線を正すと、不機嫌そうな弟の顔が目に入る。

「なにジロジロ見てやがる……………」

「あ、ごめん……………」

彼は、無言でベッドに腰を下ろすと、視線で着席を促した。それにアイズが従つたところで本題を切り出す。

「それで？」

「う、うん……………」

しかし、いざ話そうとすると、アイズは声を詰まらせた。

話したいことが沢山あるからだ。どれから始めれば良いのか分からない。

勿論、アイズの目的はマシロとの仲直りだ。

ならば、すべきことはこれまでの冷たい態度の謝罪と、その態度を取るに至った理由……その説明である。

けれど、それはあくまでもアイズの個人的な希望だ。

きつとマシロは仲直りなど望んでいない。というより、そもそも冷たい態度を取っていた事に、怒いらってすらいない。もう彼にとつて自分金の少女は、どうでもいい奴だから……。

彼が真に憤っているのは、金銭トラブルに発展しかねない先日的一件だろう。あれは下手をすれば、自分だけでなく弟にも無銭飲食の片棒を担がせてしまっていた。ならば、やはりその事を先に謝るべきだ。

誠心誠意謝罪して、お金も返して。そこでようやく、アイズは自分の気持ちを伝える権利を得る。仲直り云々の話はそれからだろう。

そう決意すると、アイズは気を引き締め直した。

背筋を伸ばし、弟の瞳を見つめ、頭を下げる。

「この前はごめんなさい。勝手に帰っちゃって。お店に、置き去りにしちゃって……」

「……………」

返って来たのは沈黙。それと、あまり芳しくない耳触りの息遣い。それを聞いただけで、彼の眉間に深々とシワが寄ったのが想像できた。当然の反応だろう。それほど、苦々しい体験だった筈だ。顔を上げずに、アイズは続ける。

「立て替えてくれた代金はちゃんと払う」

「……………」

「勿論、シロの分も。信じられないと思うけど、本当はあの時、私が支払いをしようと思ってたんだよ」

「……………」

「だから、かかった金額を教えて？　お金は持って来てるから、今すぐにも——」

「要らねえよ」

「……………え？」

予想外の返答に、アイズは思わず顔を上げてしまった。そして、視界に収まった弟の表情カオを見て、心臓に氷水を掛けられたような衝撃を受ける。

マシロの顔を塗りつぶしていたのは、『苛立ち』と『怒り』と……………『悲しみ』の形相だった。

「なん……………で」

前者二つは良い。自分のしたことを考えれば、返金すると言っても負の感情を向けられるのは仕方ないと思っていたし、幾らでも受け止める覚悟はあった。

けれど、最後の一つは別だ。

どうして、悲しそうな顔をしている。どうして、シヨックを受けている。他の苛烈な色に紛れられない程、その感情の比重は重かった。自分の発言がまた弟を傷つけてしまった事は明らかだったが、アイズには何がいけなかった全く分からなかった。

故に、彼女が取る行動は単純だ。みっともなくオロオロしながら、ただただ謝罪を重ねる事しか出来ない。彼が何に対して傷ついたのか、【剣姫】はその核心を一切理解せず、ひたすらに無意味な言葉を吐き出し続けた。

「ご、ごめんねっ、遅くなちゃって……………！ 今更だよ……………直ぐに返しに行くべきだったのに、その……………勇気がでなくて……………」

自分でも分かる程に、言葉尻が萎れていった。

多分、いま自分は見当違いの釈明をしている……………。その事には薄々勘付いていたからだ。実際、弟の表情は、目の前で『幻滅』とも取れる形へと変わっていく。

「……………どうしても返すならロキに返せ。アイツから貰った小遣いで払ったからな」

「……………」

完全なる拒否。頑なな意思を感じた。

これは最早、代金の立て替えはなど叶わない。つまりそれは、いつ

まで経っても仲直りのスタートラインにすら立てないという事だ。そう察したアイズは、肩を落しながら木枯らしのように微笑んだ。そして、変わらぬその言葉を口にする。

「そっか。でも、それでも、ごめん……」

あの日、主神ロキが弟マシロにそれなりの額を渡していたのは聞いていた。彼の性格的に、何の理由もなくそれに手を付けるとは考えづらい。恐らくは、自分自身の持ち金では払い切れなかったのだろう。

元々単価の高い酒屋の料理……それをそれなりに頼んで、加えて二人分だ。既に店に入る前に幾らかの散財をしていた事も重なれば、お金が足りなくなってしまうってのも不思議ではない。

支払えたのは只の結果論だ。

ロキの小遣いがなければ、弟はミアお母さんにこっぴどく絞られる事になっていた。以前、別の理由でボロ雑巾にされていた同僚の狼ウエアウルフ人の姿を思い出しながら、アイズは当時の弟にかかったであろうストレスを想像する。

置いていかれた事への困惑、幾ばくかのショック、その後襲ってくる支払いへの不安に、払えなかつた時の代償。それらが荒波のように押し寄せたであろう彼を思うと、酷く胸が張り裂けそうになった。

「本当に……ごめんね」

だから、その事に対する謝罪を行う。お金を払わせてしまった事では無く、先の見えない恐怖を味わわせてしまった事に対する謝罪を。

しかし、心の底から懺悔したアイズ向けられたのは、相も変わらぬ冷めた声音だった。

「……なんで謝る？」

ポツリと、放たれた弟の呟きに、アイズはつい「え？」と漏らしてしまう。

「だ、だって、私……君に酷い事をして、傷つけたから……」

そう答えながら顔を上げると、弟は嘲るような笑みを零した。

「……傷つけただと？」

「シロ……？」

「俺には見当も付かないが、酷い事つてのは何の事だ？ 金を払わなかった事か？ それとも店に置き去りにした事か？」

「も、もちろん、両方だよ。本当にごめ——」

アイズの再三の謝罪の言葉を、マシロは手を翳して遮った。それはそれは、実に煩わしそうな目で……。

「金はロキの小遣いから払ったと言った筈だ。俺が怒る理由がどこにある？」

「でも……」

「そもそも立て替えになら、お前はその日の内に来ただろう。それを拒んだのは俺だ。金の事なんか、全く気にしてなかったからだ」

「……………」

矢継ぎ早にその様に主張され、アイズは言葉を詰まらせる。自分の非を謝りに来たというのに、確実に自分が悪かったのに、その事実すら受け入れて貰えない。それどころか、あれこれ理由を付けて『悪くない』とさえ言い返してくる。

罵詈雑言を吐かれている訳でもないのに、此方の方がアイズは辛かった。

「置いて行かれた事も気にしてない」

そして、弟の弁は続く。

「気にする要素が何処にある？ 元々は、俺一人の予定だったんだぞ？ ただ、余計な奴が勝手にいなくなった。それだけの事だ」

「……………」

マシロの口調は、それこそアイズを嘲笑する様なモノだった。

お前などそもそも連れとして認識していないと。

だから、あまり己惚れるなよと。

そう……心の底から唾を吐いてくれているれば、どれだけ気が楽だったろうと、アイズは思う。姉を小馬鹿にするように喋る弟。その姿は何故か、必死に自分に言い聞かせている様に感じられて……。まるで、自分の心を守る為に頑張つて言い訳をしている様に思えた。

初めて距離を置いた時の、彼の困惑した表情が脳裏に浮かんだ。

「ごめんね……」

「……だから、なんで謝る？」

「こんなお姉ちゃんで、本当に……」

「だからっ」

ここで、弟が勢い良く立ち上がった。もし、椅子に座っていたのが彼の方だったなら、椅子は勢いよく後ろに倒れていた事だろう。

「シ……ロ……う？」

弟の顔を見て、姉は息を詰まらせた。

彼は真赤な顔で此方を睨みつけていた。とても風呂上りだからでは説明できないそれは、激昂の証だ。目も、口も、鼻も、髪の毛も。マシロ・ヴァレンシユタインを構成するありとあらゆる細胞が眦を吊り上げている。目の前に立った彼は、小さな体を面一杯に使って、剥き出しの感情を顕わにしていた。

「謝るなって言っただろ！ なんなんだよ、お前は一体……っ」

先程迄の平静を装った声ではない。魂の叫び。即ち本音。それが今、アイズに向けられている。アイズは初めて、弟の本音^{マシロ}を肌で聴いている気がした。

「お前の中の俺は、まだお前にベツタリだった頃の餓鬼のままなのか？！ だから、ちよつとかまってやれば機嫌が直んのか？！」

だからこそ、鈍い鈍いアイズでも、いやアイズだからこそ、彼の気持ちが手に取る様に分かってしまった。彼女は、彼のお姉ちゃんだから。

「ふざけんなよ……！ そんな訳ねえだろっ！ お前は自分を嫌ってる相手を、いつまでも好きでいれんのかよ!!」

きつと、彼は……淋しかったのだ。

「俺はそんなに優しい人間じゃねえんだよ！ お前にどんな事されようが、ちつとも悲しくねえ！」

アイズはこれまで、自分が弟に好かれている訳がないと思っていた。自分から突き放しておいて、好きでいてくれる訳がないと。そんな虫の良い話はないと、自分に言い聞かせて来た。

けれど、どうやら違ったらしい。

本当に、フィンの言う通り、ヘステイア様の言う通り、自分は弟にそれほど嫌われていなかったのだ。でなければ、こんな感情が伝わってくる筈がない。

嬉しかった。凄く凄く。

この怒りは、弟が自分を好いていてくれた事の証明だから。けれど……。

腹の底から吐き気がした。

その厚顔な面をぶん殴りたくなった。

「もう他人みたいなモンなんだよ……！　俺にとってお前はもうもいい奴なんだ！」

無論、弟の・ではない。

自分の腑抜けた顔をだ。

そして、自分の目的が、どれだけ絵空事であったかどうかを理解する。

「なのに……なのに、なんで俺が傷つかなきゃならねえ!!」

こんなにも彼を傷つけておいて、今更仲直りしたいなんて、お笑いにも程があるだろう。そんな資格など、ハナから無かったのだ。

「俺は、お前の事が——」

次の瞬間、その台詞を奪い取る様に、アイズはマシロの身体を抱きしめた。

「……………は？」

呆けた声が、銀色の頭蓋から伝わってくる。

当然だろう。怒りをぶつけている最中に、その相手に抱きしめられてしまったのだから。意味が分からなくて当たり前。けれどアイズは、構わずその懇願を艶やかな唇にのせた。

「泣かないで、シロ……」

「……………!!」

途端、腕の中で小さな身体が揺れた。

そして、彼は無理やり顔を上げ、自身の頬を指でなぞる。ここで漸く、自分が涙を流している事に気が付いた様だ。そこから弟は、目に見えてクシャクシャになった。

「なんだ、これ……。なんで……。ちが……。つ」

拭つても拭つても、水の玉は両目から溢れて来る。最早自身の意思ではどうにもならないらしいそれは、やがてマシロの喉に嗚咽をもたらした。

久々に見る弟の泣き顔。

アイズは自分の事の様に悲しくなり、再び彼の頭を胸へと寄せた。

「……ッ！ 放せ……。つ。この……」

「私は、君のこと大好きだよ」

「……………」

そう告白した瞬間、暴れていた弟の反応が消える。

悄然とした息遣いが、いつまでも鼓膜にこびりついた。

「嫌いになった事なんて一度もない。君が生まれた時から、ずっと……。君は私の宝物なの」

「嘘……。つくな。俺は、お前に……………」

「ウソじゃない」

弟の身体は冷え切っていた。風呂上がりだった筈なのに、熱が一切感じられない。アイズはそんな弱々しい背中を優しく摩った。幼き日と同じように、泣きじやくる弟を宥めた時の様に。

「私がシロを避けるようになったのは、シロに嫌われたくなかったから」

ビクンと、背中が揺れた。

「は？」

ずんぐりと、顔が挙げられる。ぶつかつた視線には、怒りも悲しみもなく……。

只々、純粹な困惑の色が満ちていた。

当然すぎる反応だ。なんの面白味もない。

そんな反応をさせてしまう程、自分の取つて来た行動は理屈に反していた。

アイズは自嘲気味な笑みを唇に落とし……………。

白状した。

「変だよ。でも、当時の私は、すごく君にベツタリだった。シロが嫌

がつてるのに気付かずに、チューしたり、一緒に寝たり、お風呂に入ろうとしたり……とにかく、ダンジョンに行っている間以外は、君から離れようとしなかった」

「……………」
「だからね。そんな事を続けてたらいつか嫌われるぞって、ロキやりヴェリアに言われたの」

「……………え」

マシロが小さな声を漏らした。それは本当に心の底から放たれた、意外そうな声だった。アイズは抱擁を解いて、弟と顔を見合わせる。困惑の色を濃く頭わにした表情は、どこか怯えているようにも見えた。まるでか弱い小動物だ。丁重に扱わなければならぬ脆い存在。急に弟がそんな風に見えて来て、狂おしい程の母性が、アイズの全身に発芽する。

おかしくなりそうな気持ちを必死に沈め、務めて穏やかな微笑を作った。

そして、弟の餅の頬に手を添える。

「私は、頭の中が真っ白になった。シロに嫌われるなんて想像もしてなかったし、想像もしたくなかったから……。だから、そうならないように、全力で距離をおいた」

言っていて、本当に意味不明な行動だと感じた。

構いすぎて嫌われるから距離をおく。……その理屈は分かる。けれど、一切口を利かなくなるのは流石にやり過ぎだ。そんなの子供でも分かる。

だというのに、当時の自分アイズは思考が狭窄し、『避ける』これ以上嫌われない』という幻想に囚われていた。

「それが君を傷つけるなんて、考えもしなかった。自分の事で頭がいっぱい……私、お姉ちゃん失格だね」
「……………あ」

弟の口が僅かに動く。揺れる瞳が、何かを伝えようとしている。

こんな自分に対してすら、何かしらの言葉をかけてくれようとしているのだ。その事が分かって、アイズは改めて弟の優しさが愛おしく

なった。

しかし——— いったい、どうして、その優しさを受け取る事が出来るだろう。

「ごめんね。淋しかったよね。辛かったよね。今の今まで、気づかなくてごめんね」

自然と、アイズの両目からも涙が溢れ出した。今更後悔しても遅いというのに、傲慢にも我欲にまみれた醜い雫が、アイズの心を代弁する。

「私、本当は今日、仲直りしに来たの。この前の事を謝って、お金を返して。冷たくなった理由も説明して。それで君に許して貰えるなら、また昔みたいに仲良くしたいって……」

こんな汚い鼻声で耳を汚してごめんね。

心の中でその様に謝りながら、アイズは止まらぬ吐露を奏で続けた。

「でも、ダメだよ。私の事、許せるわけがない。ううん。許されちゃいけない」

「……………」

この時、見開かれていた弟の瞳孔が更に広がった。

「いや、次にアイズが何を言うのか……その見当がついたらしい。」

「や———……………」

けれど、アイズはそれを全力で振り払った。

後ろ髪を引かれながら、自身の抱擁から、弟を開放する。即座に伸ばされた彼の右手が上げ切られる前に———。

「でもね、私は君のこと、ずっと大好きだから」

姉は、弟から距離を取った。

そして、慈愛に満ち満ちた微笑を咲かせ、一生後悔するであろう言葉の口にする。

「……………ばいばい、シロ」

涙声の格好のつかない別れの台詞。

！。それを吐き出して、アイズは未練を断ち切る様に扉を閉めた――

第十九話

まるで、意識が身体から半分浮き出てしまっている様だった。

地に足が付いていない。精神と肉体が一致していないから、思考や行動がしつかりしない。前は見えているのに、視界内の物体を判別できない。そんな気持ちの悪い感覚が、ずっと肉体を支配している。

さながら、世界が速度を緩めてしまったかのように……事実、マシロの視界に広がる景色は緩慢だった。迫りくる怪物の攻撃動作は不自然なほどに遅い。最早、避ける気さえ失せる速度だった。

しかし、その解釈は間違いだ。
分かっている。

世界は別に遅くなったりしていない。単にマシロの目にそう映っているだけであり、実際は通常通りの時間が流れているのだ。

分かっている。
そんな事はすべて。

分かっている筈なのに……マシロの世界は、一向に正常な動きを取り戻さなかった。まるで他人事のように、モンスターの鋭い爪が自分を喰い破らんとする光景を眺めているのである。

「マシロ……?! 危ない!」
突如、切迫した叫び声が、マシロの脳髓を揺らした。

「……ッ!」
その刺激が、真上から意識を肉体に押し込んでくれた様だ。瞬間、手足の感触がまともになる。ハツとしたマシロは、寸での所でモンスター鋭爪から逃れた。

そして――
「ファイアボルト!」

目の前で怪物が朱く爆ぜる。一撃でモンスターの頭部を破壊したのは、煌々と燃える拳サイズの火の玉だった。目が覚めるような熱気が、マシロの頬を激烈に叩く。誰がどう見ても『魔法』であるとか分かるその物体は、どうやら彼のパーティメンバーが放った物らしかった。

た。

「べ、ベル様!? なんですか今の魔法……! 短文詠唱どころか、無詠唱!?」

直ぐ傍で、喧しく、犬人のサポーターがヒューマンの少年に駆け寄る。彼女は目に見えて動揺しており、見開かれた大きな瞳はその驚愕の程を物語っていた。明らかに仮面が外れてしまっているが、その気持ちは痛い程良く分かる。新米冒険者の癖に、この白兔は何シレッと魔法など使っているというのだ。しかも、リリルカの言う通り、無詠唱魔法等という聞いた事もない代物を……。

「え、えっと、昨日ちよつと色々あつて……」

「色々つて……あ、いえ、失礼しました。冒険者様に対し、詰め寄るような真似を……」

お茶を濁す様に答えるベルの姿に、リリルカ・アーデはハツとして表情を作り直す。サポーターとして相応しくない態度だったと自覚したのでだろう。精緻な人形のような微笑を取り戻した彼女は、今度はその瞳に僅かな非難の色を乗せて、此方を睨んできた。

「それはそれとして、どうされたんですか? 【リトル・アイズ】様。今日はずっと心ここに有らずといった感じですが」

適当な事を言うな。

反射的にそう言い返そうになったマシロだったが、流石に心当たりが多すぎるのでグツと堪えた。右頬に拵えた掠り傷が良い証拠だ。普段なら、こんな上層の標準的モンスター相手に流血するなど有り得ない。拭っても拭っても滲んでくる鉄臭い液体は、雄弁に自身の落ち度を物語っていた。

こんな有様では、流石に目くじらを立てられても仕方がない。

故に、マシロは素直に頭を下げる。

「……すまん」

「……!?」

すると、その瞬間、どういう訳か場がどよめいた。

ベル・クラネルとリリルカ・アーデ。双方の目は丸く見開かれており、口もポカンと空いている。それは正しく、驚いた人間が浮かべる

表情だった。

——いや、なんでだよ……。

内心そう呟くマシロを尻目に、ベル達は次の様に続ける。

「ま、マシロが、謝った……？」

「ほ、本当にどうされたんですか？ お気は確かで？」

「もしかして、何か悪い物でも……？」

「おい」

セリフ自体は此方を気遣うような物だったが、今の流れでその言動に至る事自体が失礼な話だ。無用な心配をしてくる彼らを睨み付けて、マシロはそっぽを向く。

それは、不愉快に感じていると彼らに伝える為の行為でもあるが、同時に二人の視線から逃れたいというバツの悪さの表れでもあった。

別に、体調が悪い訳ではない。腹が痛いわけでも、頭痛がする訳でも、倦怠感に支配されている訳でもないのだ。肉体的には、何も問題はない。

しかし……。

ある意味で『体調不良』より質の悪い状態に陥っている事は確かだった。何故だか、目の前の事に集中出来ないのだ。それ程までに精神が乱れてしまっている。そしてその原因に、悔しいがマシロは心当たりがあった。

——私は、君のこと大好きだよ。

そんな声が、気を抜くと脳裏に響いて来る。何の混じりけもない慈愛と、幾ばくかの寂寥感が孕まれた何とも言えぬ声音。けれど、それでも胸の内にストーンと落ちて来る、心地の良い声色。

昨晚、姉から告げられたその言葉が、まるで実際に耳元で囁かれているかのように蘇る。何度も何度も。その声が、マシロを現実世界から引き剥がすのだ。

——私がシロを避けるようになったのは、シロに嫌われたくな

かったから。

——ごめんね。淋しかったよね。辛かったよね。今の今まで、気づかなくてごめんね。

そこまでの弁明を許すと、姉は幻となって眼前に姿を見せる。

ここはモンスターの巢食う魔境である筈なのに、現れる姉は『昨夜の姉』。つまりは、装備を外した場違いな格好なのだ。しかし、そんな彼女のコーデイナートに合わせるかの様に、辺りを取り囲む無骨な岩肌は、月明かりの射し込む『自分の部屋』に変化してしまう。

『私は、君のこと大好きだよ』

違う。

そんな訳がない。だって、好かれるような事をした覚えが一切ない。いつもヘラヘラしながら甘えに行つて、何かをして貰っていた立場の人間だ。お返しに、何かを与えた事なんて殆どない。当時の自分は、『貰う』のが当たり前だったから。

これで友好的関係性が成立するのは親子ぐらいのものだろう。

だからこそ、嫌われて……。いや、愛想を尽かされて、奴は自分から離れて行つたんじゃないのか。

『私がシロを避けるようになったのは、シロに嫌われなくなかったから』

違う。

バカな事を言うな。

確かに、当時の姉のスキンシップは過剰だった。自分から抱きつきに行つていた立場上あまり強くは言えないが、それでも頬や額へのキスには流石に嫌悪感が生まれて来ていたのは事実だ。思春期の男子が肉親との過度な接触を煩わしく思うものという見解も間違いではないだろう。

故に、避けるようになった。嫌われないようにする為。というのは

確かに筋が通っている様にも思える。

しかし、それは本当にただ単に『筋が通っているだけ』だ。本当に嫌われたくないからという思いがあるならば、他にやりようは幾らでもあっただろう。それこそ、スキンシップの仕方や回数を標準的な水準に落とすだけで事足りた筈だ。完全無視を決め込む必要性など何処にもない。

『ごめんね。淋しかったよね。辛かったよね。今の今まで、気づかなくてごめんね』

違う。

何が淋しいだ。何が辛かっただ。

分かったような口を利くな。

言った筈だ。悲しむ理由が何処にある。お前との関係が悪化したから、なんで俺がショックを受けるんだ。

それじゃあ、まるで――。

――でも、ダメだよ。私の事、許せるわけがない。ううん。許されちゃいけない。

ガン。と、頭が打ち付けられる。そんな衝撃を思い出す。

――ばいば……

姉の唇がその台詞を紡ぐ瞬間――マシロの視界に映る景色は、元の世界に戻るのだ。まるで、身体中の細胞が、それを聞くのを拒んでいるかの様に……。

「マシロ」

「……！」

思考の波の中に、スウッと少年の声色が混じった。それが、マシロの脳が生み出した幻聴でないと分かったのは、本能的に、今の自分に姉の声以外を想起する余裕がない事を理解していたからかも知れない。

い。

頭を上げると、そこにはベルの顔があった。なにやら神妙に、諭すような色を浮かべている。そして、気遣うような言葉が、彼の口から放たれた。

「やっぱり、今日は終わりにしよう」

「……は？」

その提案に、マシロは思わず表情を歪めてしまう。

まだ、ダンジョン探索は始まったばかりだ。先日までと比べても、四分の一にすら到達していない。序盤も序盤。ポーシヨンや武器の消耗も、疲労の蓄積も、到底引き返す理由には足りない状態。

だというのに、こんな舐めた提案。理由は一つしか浮かばなかった。

マシロはムツとして反論を始める。

「バカ言うな。ここで帰ったら、とんぼ返りもいいトコだろうが」

「うん。でも、やっぱりマシロも調子が悪そうだしさ」

「要らん気を回すな。別にどうって事ねえ。大体、人の心配できる――」

「4秒」

「あ？」

ベルを丸め込もうとしたマシロだったが、唐突にサポーターに言葉を射し込まれた。その発言の意図を瞬時には理解できず、マシロはマジマジとリリルカの顔を見てしまう。すると、何処か誇らしげに、彼女はこんな事を言ってきた。

「今日【リトル・アイス】様が、リリやベル様に話しかけられてから反応するまでの平均的な秒数です」

「……………」

「明らかに遅いですよね。ワンテンポ以上遅れています。それ程深い思考状態が、3回。しかもダンジョンの中で・です」

「……………」

マシロは顔を背ける。

「極めつけはさつき。これまでは戦闘中に考え事などしたことがな

かった筈です。少なくとも、ベル様の動きには注視していたとお見受けしています。ですが、今回はそれすら散漫でした」

「……何が言いたい」

「それは、貴方が一番良くお分かりなのではないですか？ とにかく、現状誰の目から見ても、「リトル・アイズ」様がダンジョン攻略を行える精神状態でない事は明らかです」

「……」

リルルカの指摘に、マシロは沈黙を返す。

それは、『余計な事を気にするな』という無言の圧力ではなく、完璧に正論を付かれた故の絶句に他ならなかった。そして、次の瞬間、何も言い返せない彼の耳に、乾いた柏手が飛び込む。それは、ベル・クラネルが手を叩いた音だった。

「ほら、誰にだって調子が出ない日くらいあるよ。今日は君がその日だってだけで……。そういう訳だからさ、引き返そう。ほらほら」

困ったような微笑と共にそんな事を口走りながら、本来の進行方向とは真逆の方へ背中を押し始めるベル。その手つきには有無を言わせぬ勢いがあり、彼にしては珍しく、此方の意見や言い分を聞く気が無いようだった。

そして、マシロ自身もそれに対して強く反論する事が出来ない。集中力を欠いていたのは、勘違いでもなければ妄言でもなく、只の純然たる事実だったからだ。仮に呆けていたのがベルだったなら、マシロも同じように探索の中止を宣言しただろう。

「分かった。分かったから、押すんじゃないええ」

喧しく背中を押す手から逃れたくて、早々に降参の意を表明するマシロ。しかし、そこは日頃の行いなのだろう。自尊心の高いマシロがムキになって飛び出す可能性を懸念してなのか、ベルの押し出しは一向に収まらなかった。結局、バベルの出口に到達するまで、それは続いたのだった。

：

ダンジョンから追い出されたマシロは、活気あふれる雑踏から逃れるように街の外れに足を向けていた。寂れた路傍に忘れられたように並べられた幾つかのベンチ。その内の一つに腰を預け、少し遠くに窺える人々の喧騒をなんの感慨もなしに眺めている。

いや、正確に言えば眺めてはいない。視界の中には入っているが、網膜に映し出された像を、マシロは一切理解していなかった。要するに、散漫とした意識が継続中なのである。もう、何時間こうしているか分からない。

ベル達にダンジョンから締め出され、ご丁寧にバベルからもある程度離れた所まで見送られたマシロは、ダンジョンに戻るでもなく。けれど、本拠に帰る事もせず、靄のかかった頭をこさえて青空を照らす日光に肌を焼かれていた。

「何してんだ……俺」

ポツリと漏れた言葉は実に弱々しい。まるで小さな雨粒の様で、仮に難聴で人間が隣にいたとしてもなんと言ったか聞き取れなかっただろう。柔らかく輪郭をなぞるそよ風にさえ飛ばされてしまいそうな程の軽い声色。そんな声とは対照的に、彼の腹に落とされた鉛は重量級のモノだった。

マシロは先程の自分の無様さを思い出す。ダンジョンの中で、まるで素人の様な……いや、それ以下の振る舞いを晒したのだ。しかも、何度も注意されていたのに、終ぞ改める事が出来なかった。無論、気を引き締め直してはいた。自分の態度が非難されるべきものだったと、あの時点ですら理解していたのだ。その上で、挽回できなかった。マシロの意思とは関係の無い所で、勝手に意識が別の方を向いてしまうのだ。言い訳にはなるが、今、マシロは自身の身体が自分の物だとは思えなかった。

——ごめんね。

「……………ッ」

不意に、また姉の謝罪が脳裏に響いて、マシロはギツと歯を食いしばった。

——本当に、ごめんね。

昨晚、何度も聞いた姉からの『ごめん』。どうしようも無く苛立ちを覚えたその単語が、まるで数珠つなぎの様に脳を旋回している。泣き出しそうな顔が、脳に焼き付いて離れない。

「うるさい……」

——私、お姉ちゃん失格だね……。

「黙れ……しゃべるな」

——私の事、許せる訳が……

「うるせえ！」

気が付けば、マシロは叫びながら立ち上がっていた。

脳内に居つく姉を黙らせようと半ば無意識に行った事だが、直ぐに正気を取り戻す。遠くに屯している人垣が、此方に注目したのが分かったからだ。

マシロはおずおずとベンチに座り直し、視線を自身の影法師に落とした。そして、大きな溜息と共に頭を抱える。

まただ。

また、昨日の事を考えてしまう。昨日の、姉に告げられた言葉の意味を……。

「どうしちまったんだ。俺……」

項垂れる。

すると、次の瞬間……何やら車輪が動くような音が聞こえて来た。そして、「ぐぬぬ」「ふぬうう」という気張る様な息遣いも。それらの気配が、露骨に近づいて来る。この人混みから外れた路傍のベンチへと。

マシロが顔を上げたのと、ガシャンと、何かが地面に落ちる音がしたのは、ほぼ同時だった。銀の瞳には、ゼエゼエと息を切る小柄な少女の姿がある。黒曜石のような艶髪をツインテールに結わえた少女は、いつぞやの荷車を伴っていた。それは以前と変わらぬ重量のようで、既に持ち手が地面に食い込んでいる。

少女は、まるで痛みを追い出そうとしているか様に、両手をヒラヒラと振っていたが、やがて此方の視線に気づいたのだろう。取り繕う様に笑みを浮かべ、背中に両手を隠しながら訊いて来た。

「やあやあ、マシロくん。奇遇だねえ。何か、嫌な事でもあったのかい？」

ベル・クラネルの主神。炉の女神、ヘスティア。主神を除く神の中ではゴブニュに次いで交流のある存在となりつつある一柱が、マシロの前に立っていた。

：

◇数時間前

リリルカ・アーデがマシロ・ヴァレンシユタインに違和感を覚えたのは、ダンジョンに入って直ぐのことだった。

今日も今日とてベル・クラネルから例の黒い短剣ナイフを奪うべく、マシロ邪・ヴァレンシユタイン魔の監視を掻い潜ろうとしていた時のこと。

リリルカは、嫌にマシロの反応が鈍い事に気が付いたのである。

最初はいつもの通り無視しているだけかと思っていた。リリルカ自・アーデ分は、何故か最初から「リトル・アイズ」から警戒されていたので、『無用に馴れ合うつもりはない』と言わんばかりの態度を取られるのは常だったからだ。

しかし、どうにも今回は、少し毛色が違う様なのである。

流石に無視が徹底的過ぎるのだ。リリルカだけにではなく、ベルに對してもその反応が見られた。何より、確実にパーティー間で相談した方が良い場面に直面した時でさえ、そんな態度を貫くのだから、その非合理性には舌を巻くしかない。

癪ではあるが、リリルカは自分と「リトル・アイズ」は少し似ていると解釈していた。効率厨という訳ではないが、彼も十中八九、無駄を嫌う性分だ。わざわざ危険地帯ダンジョンで、攻略の輪を乱しかねない無意味な意地は張らない。

その理解に間違いがないのであれば、つまり今、彼は素で反応が鈍いのだ。何故かは分からないが、「リトル・アイズ」は現状、酷く集中力を欠いている。

……今なら、隙を付いてナイフを奪う事も。

等という考えも浮かぶが、一秒にも満たぬ時間で『リスクィ』だと結論を下す。確かに今なら成功率は上がるだろう。独力でナイフを盗み、換金してしまえば、あの薄気味の悪い謎の冒険者に借りを作らなくて済む。厄介事に巻き込まれたくないリリルカからすれば、真実、それが最善手だ。

しかし、あくまでも『普段より』は成功率が上がるといっただけの話。^{邪魔者}マシロのレベルは小生意気にも『3』。小人族にしかマウントを取れない貧相な体格をした餓鬼の癖に、中々の実力を有している。Lv.1の自分では逆立ちしてもその差は埋められない。元々の成功率がゼロに近いのだから、それが少し上がった所で知れている。

やはり、今は未だ行動には移せない。

無論、この状態にあるが故に、『リトル・アイズ』が怪物どもに後れを取る可能性もあるだろうし、そうすれば、混乱に乗じてナイフを盗んでしまう事も可能だろう。

しかし、その場合はLv.3を殺せる程のモンスターが目先にいる事になるのだ。

無理である。マシロと一緒に、リリルカ自身も化物に食われて終わろう。この階層域に出現する標準的なモンスターの餌になつてくれれば話は違うが、流石にスペックが違いすぎる。恐らく、間違つてもそんな奇跡は起こらない。

そう諦念していたリリルカの視界に、トンデモナイ光景が飛び込んだ。

「マシロ……?! 危ない!」

そんな絶叫に導かれ、視線を向けると——鮮血の飛沫を双眸が捉えた。

発生源はマシロ・ヴァレンシユタイン。それがこさえる白い頬だった。大した出血量ではないのにやけに鮮明に見えたのは、この周辺で第二級冒険者が怪我をする訳がないと、高を括っていたからだろう。その絶対的な知見が、今、あつさりと覆された。

同時に、リリルカの脳に快樂物質が溢れる。

攻撃を喰らったのだ、奴が。
血を流したのだ、奴が。

自分の命が保証されている領域内では、奴も同じく無敵だった筈だ。けれど、たった今、その前提が崩れた。

殺せるかもしれない。

上手く状況を操れば、モンスターに喰わせる事が可能かも知れない。
い。

そうすれば。

奴さえいなければ、自分だけの力で――。

「ファイアボルト！」

次の瞬間の出来事だった。

だらしなく脳内に垂れ流していた思考が、文字通り、焼かれた。煌々と輝く朱い光が視界を占領する。モンスターの絶叫と、獣の肉が灼ける刺激臭が一带に広がってく。

それが拳サイズの火の玉だと気付くのにそう時間はかからなかったが、それを誰が打ち放ったのかを理解するには、膨大な秒数を要した。まるで本日のマシロ・ヴァレンシユタインの様にたつぷり停止した後、リリは大慌てで自身の契約主の元へ駆け寄った。

流石にこの時ばかりは、内心の動揺を隠す事が出来なかった。

当然だ。仕方がない。今回ばかりは非難される謂れはない。

だって、幾ら何でも規格外すぎる。神から恩恵を授かって、まだ一月も経たない新米中の新米冒険者が、エルフでもない只人が、『魔法』等という奇跡を習得しているのだ。ありえない。

悪いのはお前だ。ベル・クラネル。

お前が規格外すぎるのが良くないんだ。一体何回、常識という存在を嘲笑えば気が済むというんだ。

そんな心中を知らぬベル・クラネルは、後頭部を搔きながらケロリと答える。

「え、えっと、昨日ちよつと色々あつて……」

またこの白兔はこんな事を言う……。何、ちよつと色々あつたくらいで、一晩で魔法なんて代物を手に入れているのだ……。そのこと自

体が異常だという事実気付いてくれ。

内心そう悪態を吐きながら、リリルカはもう幾ばくの猶予もないと理解した。

こんな出鱈目なスピードで進化する相手だ。これ以上強くなられ
たら、とてもナイフを奪えない。

元々、何故か最初から上級冒険者に目を付けられていた分の悪い相
手だったのだ。

その上で、ベル迄手に負えなくなれば……。

もう、今日しかない。今日奪うしか。

その為には、「リトル・アイズ」を消す必要がある。幸い、今の彼は
絶不調。口八丁でもう数階層下に連れ出し、怪物どもに殺して貰えば
――。

等という無理の有る思考に意識を取られていた時だ。

「やっぱり、今日は終わりにしよう」

ベルのそんな提案が、リリルカの耳に飛び込んだ。

寝ぼけた事をいうな。そんな事をすれば「リトル・アイズ」を始末
できないではないか。と、そう思ったのは一瞬だった。直ぐに正気を
取り戻し、リリルカは全力でその意見を後押しする。

その甲斐あって、暫くはごねていた「リトル・アイズ」から了承を
得ることが出来た。ベルと共に、彼を迷宮の外へと追い出す。それを
成し遂げ、あの憎らしい小さな背中が見えなくなったタイミングで
……。

リリルカ・アーデは何でもない様に切り出した。

顔に貼り付けた微笑が、内心の嘲笑にすり替わらぬよう最新の注意
を払って――。

「ベル様。もしよろしければ、このまま二人でダンジョンに戻りませ
んか？」

第二十話

「あつついねえ、今日は。太陽神アポロンのヤツをぶん殴ってやりたい気分だよ」

突如現れた汗まみれの女神は、フラフラとした足取りで距離を詰めると、マシロが座るベンチの空きスペースに腰を下ろした。『隣』ではなく『空きスペース』に、だ。

そんな所に割って入ったモノだから、当然、両者の間には何の空間も存在していない。ベツタリと、互いの肩がくっつき合う。

加えて重い台車を引いて来た女神の身体は、激しく発汗していると共に熱も放っている状態だ。『神の恩恵』を得た影響で神々の肉体よりは『暑さ』に耐性のある冒険者マシロだったが、流石に熱源がゼロ距離にある状況では話は別だった。

「殴られるべきはお前だ、炉の女神。周りを見やがれ、なんでこのベンチに座る」

数メートル間隔に設置された二つの空きベンチ。それらを指差してやるが、女神が佇まいを直す事はなかった。それどころか……。

「いやあ、だって……」

何故か、ユラユラ振り子のように揺れ始める。一見暑さにやられてしまった様にも思えたが、どうやら彼女の身体は、しっかりと彼女の意思のもと動いているらしい。不意に悪戯っぽい笑みが見えたかと思うと、「えいっ」という掛け声とともに、此方へ身体を傾けてきた。
「……が!」

マシロは、ギョツとしながら自身の直ぐ横にある頭部を見る。

いや、正確にいうなら、頭部ではなく『顎』だろう。彼らの身長差では、寄りかかった状態でも、女神の顔がマシロの頭頂部を飛び越えてしまう。極端な表現をすれば、冒険者の頭頂部に、女神の顔面が乗っていると言い換えても良い。

「ああ、思った通り。キミは肌がヒンヤリしているねえ。冷たくて気持ちがいいよ」

「……離れろ」

「あとなんか、キミの周りだけ気温が低い気がする……。冷たい風が吹いているって言うか……」

「おい」

「ちよつと、服の中に手を突っ込んで良いかい？」

「ふざけるな。頭沸いてんかテメエ」

即座に拒否したマシロだったが、どうやらそもそも、この女神は此方の返答を待つ気などなかったらしい。質問という体で訊いて来たくせに、汗でベタ付いた五本の指が、既に衣服と素肌の間に入り込もうとしていた。

無論、汗まみれの手に腹を触られて喜ぶ特殊な性癖などマシロにはない。どんなに美しい女神が相手だったとしても、正常な感性を持つた人間なら、その行為には嫌悪感を抱く筈だ。

故に、指先が肌に到達する前……もつと言うなら炉の神が服を捲ろうとした瞬間から立ち上がったのだが――。

「ああ、待つておくれよ。まだ涼み足りないんだあ」

一瞬早く察したのか、神は目ざとくマシロの両肩に手の置き場を移した。そして、今度は背中に覆いかぶさる形で、耳元にこんな問いを落とされる。

「そういえば、お姉さんとは仲直りできたかい？」

瞬間、マシロは動きを止めた。

背に一柱を背負っているという物理的重みは、脳内から掻き消える。代わりにその場を占拠したのは『何故そんな事を訊いて来るのか』という疑問のみだった。その間の沈黙に、何を思ったのか女神はこんな事も訊いて来る。

「あれ？ 昨日キミの元を尋ねなかったかい？ 何某君……」

不安そうで、どこか非難めいたニュアンスも含んだ声色。それを聞いて、マシロは理解した。どういう思惑があるかは知らないが、昨晚のアレはコイツが仕組んだ事なのだと。

同時に姉のあの不可解すぎる数々の言動の謎が、加速度的に解消していくのを感じた。ストーンと、胸の中に落ち込んで、納得のいく事象

へと変化する。

自分でも驚くほど、低い声が出た。

「成程……アレはお前の差し金か」

「まるで、ボクが裏で糸引いていた、みたいな言い草だね。助言はしたけど、最終的な決断をしたのはヴァレン何某君だよ」

何故か誇らしげな様子でそんな事を告げて来る炉の女神。姉が自分と接触した確証を得たからか、彼女は元から大きな胸をさらに膨らませてウキウキと質問を続けた。

「で？ どうだったんだい？ 凄かったらろう？」

「……………」

「というか、逆にちよつと引いちやったんじやないのかい？ あの子、

キミのこと好き過ぎて——」

「なに一人で盛り上がってやがる……」

「へ？ うわあ!?!」

マシロは女神の身体を強引に振り払った。直ぐ後ろのベンチに吸い込まれる形で着席する。一歩間違えば暴力行為と捉えられても仕方がない行動だ。被害を受けたのが真ん中ド直球の善神故に訴えを起こされる事はないが、普通に不敬罪である。

にもかかわらず、マシロの口からついて出た事は謝罪でも釈明でもなく——詰問だった。

「目的なんだ？ あんな入れ知恵までして、いったい何を狙ってやがる？」

「ちよ、どうしたんだい？ 急にそんな怒って……」

「質問に答えろ……ッ。わざわざアイツとオレを接触させて、お前になんの得があるのかと訊いてるんだ！」

「いや、だから。さもボクが黒幕でしたくみたいな解釈はやめておくれよ。さつきも言っただろう？ ボクが接触させたんじゃないくて、何某君が自分の意思で……」

「でまかせを言うな！」

「もー、違うってえ」

物凄い剣幕で詰め寄っている筈なのに、女神は全くペースを崩さな

い。どころか、ポリポリと背中を搔きながら、半目になって状況を整理し始める。

「あのねえ、マシロ君？　ボクは昨日、たまたま、キミとお姉さんが仲違い状態なのを知ったんだよ？　これ、①ね」

そう告げながら、神はそのスラツと伸びた人差し指を立てて来る。そして、間髪入れずに、隣の中指も持ち上げた。

「で、②。ボクは何某君のキミへの入れ込みっぷりを実際に見て知っていたから、あの子が凄いショックを受けてるんじゃないかと思っただ。で、実際そうだった」

「なに勝手な……」

「はい、割り込み禁止！　③！　他にもちよくちよくキミには言いにくい事もあつたけど、とにかく何某君を色々論じて自分の気持ちを再認識させた！」

そこまで一息に言い切り、最後の溜と言わんばかりに一度言葉を区切る。この間、既にマシロの方が女神の剣幕に圧される形となっていた。

「④。その結果、あの子が自分で決めたんだ。キミと会って、話して、仲直りするってね。だから、あれはボクが無理やりさせたとかじゃない。昨日……あの子がキミにかけて言葉は、全部あの子の本心だよ」

「……………」

女神の主張を聞き終えたマシロは、暫くの間、場に沈黙を落とすことしか出来なかった。彼女の言葉を、面白い程に脳が処理しきれていない。だから……。

「うそだ」

ポロツと、口からついて出たこの言葉にも、なんの意味もないのだろう。

そんな空っぽに対し、神は「ヤレヤレ」と肩を竦める。そして、彼女なりの慈悲なのだろう。律義にきちんと反論してくれた。

「ホントだよ。ウソだと思う根拠は？」

「……先に本当だという根拠を出せ」

「……………」

ここで一瞬、女神の返答が途絶えた。別に答えに窮した・という訳ではないだろう。『そんな詰まらない返しをするな』という、無言の誹り。そんなふうに感じられた。

「キミ達の所に双子のアマゾネス君がいるだろう。彼女達に訊いてみると良い。あの場に一緒にいたからね」

あつさりその様に返されて、今度はマシロが押し黙る番になった。この場での証明ではなかったが、本拠ホームに帰ればいつでも確認可能。その上で、仮に？だった場合、確かめられた時点でアウトな嘘だ。流石にヒリユテ姉妹が証人だというこの発言は本当だと考えて良いだろう。

「それで？ ボクがウソつきだっていう根拠はなんだい？」

「……アイツが俺と仲直りをしたい訳がない」

マシロは俯きながらそう答える。

目の前のベンチに座っているその女神。その直ぐ前方に立っているマシロ自分。

こんな位置関係にも関わらず、マシロの視界には、自分の足元と女神の素足しか映っていなかった。それが、もうずっと続いている事を、マシロは漸く自覚する。

「それはどうして？」

顔を上げなくとも、女神の顔面に刻まれた呆れの色が、濃くなっているのが分かった。

「アイツは俺が嫌いだからだ」

「嫌いじゃないよ。それはボクが保証しよう」

「嫌いなんだよ」

「だから違うって。イジツ張りだなあ、キミは」

すくつと、立ち上がる神の気配を感じた。そして直後、両の頬を両手によって挟まれる。文句を言うより早く、女神のその手によって、マシロは顔を上に向けさせられた。眼前にあるのは当然、女神の童顔だ。宝石の様に輝く碧い眼が、マシロの銀目を覗き込んで来る。

『逃げるな』。

暗に、そう言われている様に感じられた。

やがて、女神は語り始める。

「キミのことが大好き過ぎて、キミに構い過ぎていたから、年頃になって鬱陶しがられる可能性を忌避してキミから距離を置くようにした……て、そう説明されなかつたかい？」

「そんな世迷言、誰が——」

「まあ、誰もが納得できる理由ではないよね。単純に、常識的な接し方をすれば良かっただけの話だし」

眼前で、女神の顔がコクコクと頷く。

目を閉じながらウンウンと。

ある種、金縛りを引き起こしていた目の束縛から外れる形となったが、既にマシロの動きは鈍くなっていた。いや、思考が白く塗りつぶされており、『逃げる』という選択肢が驚くほどに浮上してこない。

そして、やつとの思いで、『それ』が浮かんで来たかと思えば、再び神の目に射抜かれてしまう。

「でも、どんなに有り得なくても、これが真実さ。神にウソはつけない。それはキミも知っている筈だよ」

「……………ッ」

知っているも何も、それはこの下界に於いて絶対の常識。決して覆すことの出来ない不変の一つだ。神が是と判断したのなら、それは本当という事になる。

つまり……。

『君が生まれた時から、ずっと……。君は私の宝物なの』

『私は、君のこと大好きだよ』

『嫌いになった事なんて一度もない』

『私がシロを避けるようになったのは、シロに嫌われたくなかつたから』

姉の昨晚のあの言葉は、すべて——。

ほんとう。

そう思いそうになる気持ちを、マシロは必至に噛み殺した。歯茎からの出血による鉄の匂いを感じながら、キツと、碧眼の女神に喰っかかる。

「なら今、お前が嘘を言っていない保証は何処にある?! 確かにお前達は俺達の嘘を見抜けるが、俺達はお前等の嘘を見抜けないんだぞ……! なら、いくらでも——」

「なんでボクがわざわざウソを教える必要があるんだよ? ボクにはなんの得もないじゃないか」

確かにその通りだ。

この女神が、マシロに個人的な怒りを覚えて嫌がらせを仕掛けている・というのなら分からなくもないが、流石に嫌われるには交流が希薄すぎる。加えてファーストコンタクトでは、重い荷物を運ぶという手助けまでしているのだ。普通に考えれば、好感度自体はプラス寄りでもおかしくない。

まあ、今現在。その貯蓄を全力で食いつぶしている最中なのだが、彼女がアイズの気持ちを言及したのは、それより前の話だ。個人的好き嫌いからの嫌がらせの可能性は低い。

だが——。

「神々お前らが俺達を揶揄う理由に理屈があるのか?」

「いや、確かに、そういうヒン曲がった連中も多いケドさ」

女神は不満げに頬を膨らませる。愉快犯的神々と同列に語られた事に憤懣しているらしい。けれど、それも直ぐに収まり、次に彼女の顔に浮かんでいたのは『うんざり』と言わんばかりの表情だった。

「ていうか、もうやめようぜ。いいかげん不毛だよ」

「なんだと?」

「神にウソはつけないんだぜ? 当然、ボクにはお見通しさ」

「……………なにを」

そう問い返しつつも、マシロも心のどこかで、何を見透かされているのかを理解していた。そしてそれを、なんの躊躇いもなく言い当てられる。伶俐且つある意味で冷ややかな眼差しと共に、その指摘がマ

シロを襲った。

「キミ、本当はボクがウソを吐いてるなんて思ってたないだろ」
「……………」

沈黙すると、女神はニツと、幼子の様に笑う。それすら美しく感じる辺り、目の前の少女はやはり神なのだと、憎々しく思わざるを得ない。

「正確には、ボクがウソをついていると『頑張ってる思い込み』としてい
る』って感じかな？」

ソレはまるで、自分でも気付いていなかった腹の内を、無理やり曝け出されているかのような感覚だった。無論、違う、と叫びたい。お前に何が分かるかと喚きたい。

しかし、いざこうして言葉にされると、妙にしつくりきてしまう自分もいるのだから質が悪い。そして、ここで両頬を挟む女神の手の圧力が増した。

「さあて、答え合わせの時間だ、マシロ君。正直、こういう無理矢理な感じは好きじゃないけど、流石にちよつと分らず屋すぎるからね、キミ」

「……………何をやる気だ」

「言っただろう？ 答え合わせだよ。何某君にあれだけ啖呵切っておいてこれじゃあ流石に格好がつかないからね。何より、あの子はちゃんと一歩を踏み出した。なら、次はキミの番だ」

「……………」

女神はすべてを此方に説明する気はないようだ。

疑問符を浮かべるマシロを半ば無視しつつ、進行する。

「さあ、素直に答えておくれ。『キミは、お姉さんが嫌いかい？』」

「……………はっ!!」

「何を驚いているんだい？ 只の質問だろうか？ さあ、どうなんだい？ 嫌いか、そうじゃないか」

「……………きらい……………」

「はい、ウソ。次。『お姉さんから避けられるようになって淋しかった

かい』?」

「そんなわけっ」

「ウソ。じゃあ……」

「やめろ」

「やめない。『昨日、本人の口から嫌われていた訳じゃないと聞かされて、ホツとした』」

「してない……」

「キミは、本当にウソが下手だね。ボクじゃなくてもバレバレだよ」

「……ッ! さつきから、適当なことばかり抜かすな!」

「適当じゃないよ。それは、キミ自身が一番良く分かっている筈だろう?」

女神の右手が、肩を離れて胸辺りを指し示す。この中にある物は、わかっているのだろうか? と。

そして、彼女はマシロの頬から掌を離し、肩に手を置きながら中腰になる。そうして、じつくりと、視線の高さをマシロに合わせた。

「これが、最後の質問だよ。『キミも、お姉さんと仲直りしたいと思っている』。違うかい?」

「それ……は……」

「どうなんだい?」

「……」

もう頬を抑えられている訳ではないのに。
顔を固定されている訳ではないのに。

その空よりも澄んでいて、海よりも深い碧色の神瞳ひとみから、マシロは目を背ける事が出来なかった。

「さあ」

「……その、思っていない……訳じゃ、ない……と思う」

気づけば、そんなふうな事を口にしていた。

盛大に言い淀んだ割には、妙にスツと出て来た言葉な気がする。という事は、存外、本当にこれが自分の本心なのだろうか……。

そんな事を思っていると、目の前の女神は、まるで『正解』だとも言うように、小さな微笑を咲かせた。

この時より、それまで彼女が放っていた神聖は消え去り、代わりに普段通りの親しみやすい空気を纏い直す。

「ずいぶんと足掻いたねえ、ギリツギリまで」

ニヤニヤと揶揄うように、マシロの髪をクシャクシャにしながら、その女神は改めて彼に告げた。

「ソレがキミの本心だよ。このボク、ヘスティアの名において保証しよう」

「……………」

「キミはもうちよつと素直になるべきだ。なり方が分からないなら、ベル君を見習うと良い」

「は？」

思わぬ名前が出て来た事で、つい女神の顔を凝視してしまった。

それが可笑しかったのか、クスリと笑い、女神は続ける。

「流石に、あの子ほど素直になれとは言わないぜ？ でも、もうちよつとカッコつけずに生きられたら、きつと楽しい」

「……………」

カッコつけずに……………」

その言葉が、妙に胸に刺さった。

これまで自覚はなかったが、自分はカッコつけていたのだろうか。

無理をして、一匹狼を気取って、自分の心を偽っていたのだろうか……………」

マシロ・ヴァレンシユタインという人間の、本当の気持ちは何処にあるのか……………」

マシロは、知らず知らずの内に自分の胸に手をやって、拳を固めていた。

そんな自問自答をしている時だ。

すっかり普段の調子に戻った炉の女神が、なにやら身体をくねらせ頬を赤らめている。

ギョツとしたのも束の間。噛み締めるように瞳を瞑った女神は、自身の眷属の自慢話を始めた。

「あの子は本当に良い子でねえ。昨日なんかも」

……自慢話、というか、殆ど『のろけ話』と形容して良いかも知れない。大半の者達にとつてどうでも良いと感じる……つまり羨ましくもなんともない些細なエピソードから、まあ自慢話で良いかと感じるそれなりの出来事まで。

聞いてもないのに、長々と。

その表情が本当に楽しそうで、嬉しそうで、愛おしそうで。

この女神が、どれだけベル・クラネルに入れ込んでいるのかが伝わって来た。

確かに、これなら……あんなバカ高そうな『ナイフ』だって、与えてもおかしくないかも知れない。

『神聖文字』が刻み込まれた、明らかに業物の短刀。

新米冒険者には相応しくない、最高級武器だって、親馬鹿心で――

そんなふうにいる時だ。

唐突に……いや、漸く。マシロはとある可能性に行き着いた。

同時に頭を思い切り殴られた様な衝撃を覚える。

「しまった……」

「へ？」

その眩きは蚊の鳴くような小さな声だったが、自分の世界に入っていた女神の耳にも届いた様だった。それ程に、焦りと悔恨が滲んだ肉声だったのかも知れない。此方を訝し気に見つめる女神を無視して、マシロは脱兎の如く駆け出した。

「あ、おおい？ マシロくん?!」

女神の声などとつくに置き去りにしている。

それはマシロの背中を掠める事さえ叶わず……既に、神々の身体能力ではどうあがいても追いつけない程の距離が出来上がっていた。

*

懸命に走りながら、マシロは己の迂闊さを呪う。

今日、自分達のパーティーは、自分の不調を理由に解散した。パー

テイーメンバーであるベル・クラネルとリリルカ・アーデが、マシロ・ヴァレンシユタインを街へと送り届ける形で・だ。

三人で同時解散し、同時に帰路に就いた訳ではない。

パーティーの中から、自分だけが離脱したのだ。

もし、リリルカ・アーデがベルに、二人だけでの迷宮探索の続行を提案していたら。

もし、ベル・クラネルがそれを飲んでいたら。

ベルは今、地下迷宮でリリルカと二人きりという事になる。

十中八九、あの犬シアンスローフ人は、ベルの持つ黒いナイフを狙っているだろう。少なくとも、あの業物を目にした瞬間からは、アレのみのターゲットを絞っている筈だ。

奴がどのような方法でナイフを奪うつもりなのかは知らないが、最悪の場合、ベルをモンスターに襲わせ、その隙に……という強硬策も考えられる。

とにかく、こんな絶好の機会をあの手見逃すわけがない。

雑踏を駆け抜け、マシロはバベルへと向かう。

だが、その前。

商店街の一角に差し掛かったところで、思いもよらない台詞が両の耳に飛びこんで来た。

「抜かせ。『神聖文字』が刻まれた武器の持ち主など、私は一人しか知らない」

「!?」

それは、とうてい聞き逃すの逃せるわけの無いフレーズだった。『神聖文字』が刻まれた武器。そんな代物、マシロだつてこの世に一振りしか知らない。声の主の主張通り、ナイフが本来の持ち主の手を離れていたというのなら、それは譲渡されたか、売買されたか、あるいは盗まれたという事になる。

酷薄な笑みを浮かべたりリリルカ・アーデの顔が、脳裏に浮かぶ。

マシロは、舌打ちを零しながら声の間こえた方角へ進路変更した。決して大きな声ではなかったが、走っていたマシロの耳に入ったという事は、つまり大して距離が離れていないという事だ。今から向かえば、十分現場に辿り着けるだろう。

果たして、その予想は正しかった。

一人の少女が、裏路地から大通りへと飛び出して来るのが目に入る。フード付きのローブを着込んだ、栗色の髪を持つ犬シァンスローブ人だ。体格的に一瞬小人族かとも思ったが、頭部に生えた獣人の耳が彼女の種族を喧伝している。

彼女がリリルカ・アーデ本人だと気付くのにそう時間はかからなかったが、その事実気付いたのは、丁度裏路地の前を歩いていた白髪のヒューマンとぶつかって共倒れした後だった。

「いててて……。あれ？ リリ？」

「へ？ ベル様？」

奇しくも、マシロはリリルカとほぼ同じタイミングで、その通行人がベル・クラネルであると視認する。

だが、倒れ込む二人に介入する前に、新たに、二つの足音が近づいて来た。先程、リリルカが飛び出してきた路地裏からだ。その足音に、犬シァンスローブ人はピクリと小さく反応を見せる。

現れたのは、見覚えのある制服を着た緑葉色の髪のエルフと、そのエルフと同一の衣装を纏った鈍色髪のヒューマンだった。二人とも、豊穡の女主人……。あの酒場で働くウェイトレスである。

「リユーさん、シルさん……。それに、マシロも……」

辺りを見渡したベルは、何が起きているのか分からないという感じで呟く。だが、直ぐに顔を青くして尋ねて来た。

「あ、あああの、三人とも！ 上から下まで真っ黒のナイフを見かけませんでしたか……?!」

「……コレですか？」

若干呂律の回っていないその質問に、エルフのウェイトレスは即座に一本のナイフを掲げて見せる。それは確かに、ダンジョンで見たナイフと同じ物であるように見えた。

ベルは見る見るうちに瞳を潤わせ、エルフの左手ごと黒いナイフを握り込め始める。他者との肌の接触を嫌う種族に対しての軽々な行動。マシロは一瞬身構えたが、彼女がベルの手を振り払う事はなかった。それどころか若干困った様に顔を赤らめている。その様子に、当のベルは全く気付いていないようだが……。

「すみません、これ、何処に落ちてました？」

「落ちてた……？」

ベルの質問に、エルフは怪訝そうな顔を作った。

マシロも恐らくは同じような表情をしていただろう。そして、数秒遅れで理解する。つまり、ベル・クラネルは、未だナイフを盗まれた事に気付いていないのだ。本当に、人を疑うという事をしない奴である。

マシロは、その純粹さに無性に腹の立つ思いさえしたが、『まあ、それもここまです』と、なんとか気持ちを静める。

まず間違いなく、このエルフ達はリリルカ・アーデの事を追いかけていた。それはつまり、奴がベルのナイフを所持していたという事だ。

『その犬 シアンスローブ 人が所持していました』。

一言そう聞かされれば、流石のベルも理解するだろう。

しかし、次の瞬間、エルフから放たれた言葉はマシロの予想に反するモノだった。

「落ちていた……というより、一人の小人族が所持していました」

「……?!」

マシロはその返答に、耳を疑った。

そして、思わず口を挟んでしまった。

「小人族 バルウム だど？ シアンスローブ 犬 バルウム 人じゃねえのか？」

「え、ええ。確かに、小人族 バルウム だっと思うのですが……」

歯切れ悪そうに応えながら、エルフの視線がリリルカを貫く。彼女の困惑した様子を見る限り、どうやらリリルカを追いかけていたのは事実の様だ。しかし、いざ追い詰めてみると、種族が違っている。

遭遇した際はフードを被っていた為、小人族に見えた・という事な

のだろうか？ いや、だとすれば、種族断定は早計だ。にもかかわらず、小人族だと言いつつ切ったからには、きっと彼女は、犯人の頭髪も見ているのだろう。

ならば、本当にリルルカは、この件について無関係。犯人と瓜二つの外見の為、不運にも逃走時にそいつと入れ替わってしまったと考える事も出来そうだが……。果たしてそんな偶然が起こり得るのだろうか……。

そんな事を考えている時だ。

「……どうやら【リトル・アイズ】様は、リリが犯人だと疑っていた様ですね」

「……」

不意に、立ち上がったリルルカが、そんな言葉を呟いた。とても暗い声色だ。

俯き、見せつけるように此方に背を向けるその姿は、強い悲壮感を漂わせている。

何もないも知らぬ者達には、十分な同情を誘えるだろう。

『パーティーメンバーから窃盗を疑われた』。

健全な関係のパーティーメンバーなら、確かにショックを受けてもおかしくない案件だ。

つまりは、マシロを悪者に仕立て上げ、この場を切り抜けようという魂胆なのだろう。

そして、こんな安っぽい悲劇のヒロインムーブを真に受ける者が、この中にはいる。

「リ、リリ？ 違うよ、マシロは別に君を疑っている訳じゃ……」
そう、ベルだ。

ベル・クラネル。リルルカの三文芝居は、十中八九このお人好しに向けられたモノだろう。現状、奴が犯人だという実利的な証拠はない。最初から疑ってかかっている偏屈な上級冒険者の心証がすこぶる悪いというだけの話だ。

ならば、その冒険者の魔の手から守ってもらえばいい。他でもない、被害者の手によって。
ベル・クラネル

「お、おい。ベル……！」

「もう、マシロ……そんな態度じゃ、いつまでたっても……」

「良いんです。【リトル・アイズ】様がリリを良く思っていないのは、最初からですので……。それでは、失礼します」

「あ、リリ……?!」

そそくさと駆け出すリリルカの背中を、ベルは律義に追いかけた。

「おいー！」

「大丈夫！　ちゃんと誤解を解いて来るから！」

何を勘違いしているのか、ベルは妙に意気込んで人混みの中に消えて行ってしまおう。こういう時の行動はやはり早い。無害そうな顔の割に遠慮がないというか無鉄砲というか……。とにかく、口にした事を即実行に移す愚直さはマシロとは正反対だった。

伸ばした手が、虚しく空気を掴む。追いかけてようにも、既に二人は雑踏に紛れて何処にいるのか見当もつけられない状況だ。

「くそ……ッ」

毒づくマシロの横に、スツと、エルフのウェイトレスが身体を並べる。

「クラネルさんの口から貴方の名前を何度か聞いてはいましたが、本当に知己の仲でしたか。では、パーティーを組んでいるというの……？」

「……ああ」

「経緯は聞きません。ですが、ひとつだけ。貴方の目から見て、あの栗毛の小人族……いえ、シアンスローブ人の少女はどう映りますか？　黒か、白か」

「……黒だ」

「そうですか」

「俺からも聞かせろ。お前が追跡対象の入れ替わりに気付かないとは思えない。お前が最初に見たのは、本当に小人族バルウムだったのか？」

その問いに、エルフはしばし考えるような素振りを見せる。恐らく、当時の記憶を想起しているのだろう。

「ええ、間違いなく。彼女が逃走を図る際、フードがはだけ、その頭部を目にしましたが、獣人の耳は存在しなかった」

「……………」

「無論、追跡中、一度も視界から彼女の姿が外れなかつたとは言いません。私の目を盗み、作り物の耳を取り付ける事も可能かも知れない」
「……お前の中で、それを見落とす可能性はどれくらいある？」

「砂粒ひとつ程度……と言ったところでしようか？　そもそも、逃走中に正確な位置に寸分違わずレプリカの耳を取り付けられたとは思えない。装着に手間取る内に、捉えられた筈です」

「だろいな」

「はい」

結局、リリルカを黒だと決めつける手掛かりは存在しない。自分だけでなくこのエルフの証言もあれば、あるいはベルを説得できるかも知れないと踏んでいたが……どうやらその目論見は叶わない様だ。

結局は、これからも奴の行動に注視するしかないという事である。まあ、今回の件がある為、暫くは大胆な行動は控えるだろうが……。等と今後の奴の出方を推察していると、不意にクスリという微笑が鼓膜を撫でた。顔を上げると、鈍色の髪の毛のウェイトレスが何処かの女神を想起させる表情で此方を見ている。

「……………なんだ？」

「いや、なんだか意外だなーって思っちゃって」

「意外……ですか？」

同僚の疑問に、鈍色のウェイトレスは大仰に頷いた。

「うん。だって、凄くベルさんのこと気にかけてくれているみたいだから。私、【リトル・アイズ】様とベルさんって、絶対合わないだろうなって思っていたんだよね」

満面の笑みでそんな事を言っただけの鈍色のヒューマン。

確かに性格が正反対の両者は一見相性が良いとは思えない。実際、仲良くしているとは言い難いだろう。衝突がなく、それなりの形にまとまっているのは、偏にベルの温厚さに助けられている面が大きい。それは、マシロ自身も分かっている。

だからこそ、その指摘は巧妙な皮肉に感じられた。

「はっ。こんな偏屈な餓鬼は、あの純朴兎とは反りが合わないか？」

だから、皮肉を返してやる。
すると……。

「はいー」
「……………」

淀みの無い笑みで、ハキハキとした声色で、ストレートにカウンターを喰らわされた。

その尻込みしない様子に絶句していると、エルフの窘めすら聞き流しながら、彼女は次の様に続ける。

「でも、気持ちは分からなくもないですよ？ ほら、ベルさんって、とっても気持ちの良い方じゃないですか。だから、彼の為に何かをしてあげると、凄く良い事をした気分になれるんですよね」

「何が言いたい……………」

「善意には善意を返したくなるものではないでしょうか？ 例えそれが、自分が気持ちよくなりたいたってという自己愛的な精神からくるものとしても、ベルさんを助けてあげたって結果は変わらない」

「……………」

「【リトル・アイズ】様くらい擦れていると、もうそれだけで悦に——」

「シル。それ以上はいけない」

ここで、エルフによる強制的な待ったが入った。マシロとウエイトレスの間に物理的に割って入り、視線を遮る。その背中越しに見える鈍色の少女の顔は、変わらぬ微笑が浮かんでいた。

「ごめんなさい。ほら、私この前【リトル・アイズ】様に『嫌い』って言われてるでしょ？ それを根に持つてて」

「それこそらしくない。シル、あなたは……………」

「ふふ。さあ、そろそろ戻ろう、リユー。いいかげん、ミアお母さんに怒られちゃうよ」

「ああちよつと、シル!?!」

ヒューマンは、お小言など聞きたくないと言わんばかりに会話を打ち切り、綺麗な歩き姿で立ち去ろうとしてしまった。その背中には『制止はきかない』と書かれている様であり、エルフは此方に会釈を一

つ残すと、慌てて彼女を追いかけて行ってしまおう。

一人、その場に取り残されたマシロは、拳を固く握りしめ、荒ぶる心を落ち着けるように、深く息を吐いた。

心の内を見透かされた様な気がした。

神ですらない、只の酒屋のウェイトレスにさえ。

自分でも良く分かっていない、ベル・クラネルを気にかける理由……。リルルカ・アーデの魔の手から逃そうとしている訳。

それが、醜い自己陶醉からくるものだと、突きつけられた様なきがして――。

「くそ……………ッ」

マシロは殊更、自分自身が分からなくなった。

第二十一話

大地を一步踏みしめるだけで、『ちやぷつ』という音が鼓膜を突いた。

水気のない階層で。

雨など降る筈のない、迷宮で。

いとも容易くブーツが濡れる。ドス黒い赤色に。

「……………」

それはまるで、ここまでの道のりの道筋を描いている様だった。

無残に斬り捨てられた怪物達の残骸。それが、血に濡れた地面に点々と転がっている。数秒遅れで跡形もなく霧散する無数の亡骸は、自身の生きた証である『魔石』を血の池のカーペットに落としていく。

そんな置き土産を拾い上げつつ、リヴェリアは金の長髪を振り乱す団員に話しかけた。

「……………もう十分だろう。引き返すぞ、アイス」

「まだ……………もっと」

しかし、金の少女の口から漏れる返答は、独り言とも取れる曖昧な呟きだった。ただひとつ言えるのは、彼女に未だ帰還の意思はないという事。

ここは、ダンジョンの下層域。中層までとは格の違うモンスター共の生息域である。

けれど、そこで行われているのは、怪物達による凄惨な蹂躞劇ではなく、『剣姫』アイズ・ヴァレンシユタインによる壮絶な八つ当たりだった。

リヴェリアは、もう何枚目になるとも知れない魔石収納用の麻袋を用意する。同時に役目を終える程いっぱいになった麻袋の群れを見^み眇^すめ、思わず溜息を零しそうになった。このパンパンに膨らんだ袋の数こそが、『剣姫』の不満の大きさの証明だ。中に入っている魔石の数だけ、下層産の魔物が屠られている計算になる。

馬鹿げた話だ。

だが、それを成せる程の荒唐無稽な力を、視線の先の華奢な少女は持っている。『第一級冒険者』とはそういう生物だ。

しかし、だとしても……今、彼女が行っている『憂さ晴らし』は、異常の一言に尽きる。

「アイス……」

「私は……私が許せないから……」

怨嗟を感じさせる声色。

荒い吐息と共に発せられたそれは、物理的に灼熱を帯びているかの様だった。仮にも只のヒューマンでしかない筈の小娘が、まるで『竜』を思わせる気迫を放っている。

原因は、マシロ実弟との接触になるのだろう。

一昨日の夜、アイズは弟と話した。彼の部屋を訪ね、自分の気持ちの全てを伝えた筈だ。

その結果がコレである。

昨日の朝から、アイズはかつてない程ダンジョンに入り浸る様になってしまった。もう、この事実だけで結果が芳しくなかった事が窺えるが、未だ詳しい話は聞けていない。とても尋ねられる雰囲気ではないし、訊いても口を割らない事は明らかだったからだ。

鬼気迫る様子でモンスター共を魔石に……時はそれごと塵の藻屑に変えるアイス。

まるで『何か』から目を背けるように剣先を打ち込む【剣姫】の姿は、かつて【神の恩恵ファルナ】を授かったばかりの彼女を見ているようだった。

つまり、スキル【復讐姫】の補正值が最も高かった頃のアイズを。それは、危うさの具現化だ。

今の【剣姫アイズ】はいっ崩れてもおかしくない。

幾らLv. 5の第一級冒険者といえども、乱れた心で生き残れる程、迷宮ダンジョンは甘くないのだ。

けれど、そんな常識的な言葉は、今の彼女の耳には入らないだろう。アイズの心に巣くう、怪物種に対する苛烈なまでの復讐心。それを根本から取り除くには、悲願を遂げるしかない。だから、アイズ・ヴァ

レンシユタインは何処まで行っても『強さ』を求め続ける。
寧ろ、ここ数年が異常だったのだ。

意識の大半を『弟』が埋めていたお陰で、強さへの渴望が薄れていた。
た。

けれど、なにがあつたのか、今のアイズは以前の【戦姫】に……【人形姫】と呼ばれていた時に逆戻りしている。

もう、こうなつては気が済むまでやらせるしかないだろう。一時的にでも気が晴れるまで暴れさせて、詳細を聞き出せば御の字。例え聞き出せなくとも、目の届く場所で爆発してくれた方が気が楽だ。

リヴェリアは嘗て、自分達がアイズ姉に行つたアドバイスを恨めしく思いつつ、『子育て』という物の難しさを改めて痛感するのだつた。

：

もう潮時だ。

決断するしかない。

これ以上は引き延ばせない。

午前8時50分。

集合時間の10分前。集合場所であるバベル前に差し掛かりながら、リリルカ・アーデとはある事柄を熟考していた。

彼女の頭をもたげるのは、例のフードの冒険者の提案。

あの妙な男の力を借りるかどうかについて思考を回している。
保留にしていたのだ。

奴と初めて接触した時、リリルカは甘言に乗せられその場で了承してしまいそうになった。しかし、寸での所で思い止まって、一か八か考える時間を要求したのである。幸いな事に、男はそれを飲んでくれた。
た。

別に、日和つて保留にした訳ではない。

ベル・クラネルに情が沸いた訳でもない。

その証拠に、昨日、単独でベルからナイフを盗み出している。紆余曲折あつて、結局持ち主の元に戻つてしまつたが、リリルカは未だ、あのナイフに一攫千金を夢見ているのだ。

だというのに、フード男の誘いに即座に乗らなかつたのは、偏に奴が余りにも怪しかったからである。顔を隠しているという外間的要素も勿論あるが、それ以上にリリルカの嗅覚が告げていたのだ。この男と関わつても碌な事にはならないと。

冒険者を忌み嫌い、唾棄し、視つけてきた彼女だからこそ分かる肌感。男の纏うステレオタイプの気持ち悪さに、信用の置けない人種だと身体中の細胞が警鐘を鳴らしている。

だから、奴を頼るのは本当に最終手段だ。

手を借りずにナイフを盗んでしまうのが一番良い。そして、さつさとファミリアから脱退し、知らんぷりしてしまうのだ。

そう思つて、いたのだが……。

「はあ……」

リリルカは大きなため息を吐く。

もう、そんな悠長な事を言つていられる状況ではなくなつた。昨日のしくじりで、『手を借りる前に奪つてしまふ』という選択肢が完全に潰れたのだ。

あの一件で、マシロ・ヴァレンシユタインの警戒心は最大限まで引き上げられただろう。レベル差が2つもあるが故の慢心も、もう有つて無いようなもの。

ベル・クラネルについても同様だ。彼が底抜けの世間知らずで……お人好しである事は、流石にもう分かつている。その一点を疑う事の不毛さは、これまでの迷宮探索で嫌という程に思い知つた。

けれど、それでも警戒されているだろう。

あの後直ぐ、追いかけて来て……、

『マシロは素直になれないだけなんだ。ホントはリリを犯人だなんて思つてないし、寧ろ仲良くしたいって……』

等と、意味不明な弁明を垂れていたが、流石に状況が状況だ。如何にベル・クラネルといえど、ヴァレンシユタインの入れ知恵で此方の

警戒を解くための演技をしていたとしても驚かない。

仮に、心優しい彼が本心で自分と【リトル・アイズ】の仲を取り持とうとしていたとしても、一晩冷静に考えれば、流石に不信感を覚える筈だ。

L v. 3の冒険者と、L v. 1だが既に同レベル帯最強格の冒険者。

どちらも格上だ。圧倒的に、リルルカよりも強い。

そんな連中に警戒される中、独力でナイフを奪い取る等もはや不可能に近い。

正直、トonzラを決め込んでも良いぐらいだ。

ベルの持つ、この世に二つとないであろう【神聖文字】^{ヒエログリフ}の刻まれた業物ナイフ。それをみすみす見逃す事になるのは癪だが、欲を出し、盗んだ瞬間を抑えられては目も当てられない。

彼らの事だ。恐らく腹いせにモンスターの群れに放り投げる……なんて凶行には及ばないだろう。だが、同時に見逃しもしない筈だ。仮にベル・クラネルが穏便に済ませようとしてくれても、マシロ・ヴァレンシユタインは必ずギルドに突き出すだろう。

だったら、ここは我が身可愛さに手を引くのも一つの手。

だということに、相も変わらずあのパーティーの元に向かおうとしているのは、昨日のベルのしつこいくらいの説得が効いているのか、一攫千金を狙えるナイフに未練があるのか、それとも――。

「……………」

最後に脳裏に過った推測に、リルルカは思考の渦から弾き出された。そして、それを脳が完全に理解するより早く、ブンブンと首を振って思考の残滓を体内から追い出す。

パン！ と、頬を叩き、強制的に意識を切り替えた。

「とにかく、今日……………」この探索で決めるんです。手を引くか……奴を頼るか……」

雑踏の中、誰にも聞こえない様な声量で、しかし自身の耳には届くように、器用に決意の言葉を舌で転がす。そんな微調整に僅かでも神経を割いていたからだろう。いや、冒険者がごった返すこの場で、

それに気付くこと自体が、そもそも不可能だったのかも知れない。

リリルカ・アーデは今、遠方より、『何者か』に視られている。

そして、彼女には預かり知らぬ事ではあつたが、その視線の主は……ベル達がパーティーを組んでダンジョン探索を始める丁度前日

——ベル・クラネルに視線を注いでいた者と同一の存在だった。

：

……重苦しい空気というのは、こういうのを言うのだろう。

マシロ・ヴァレンシユタインは平静を装いながら、しかしハツキリとパーティーの不和を感じ取っていた。

正確に言うなら、ベルに関してはいつも通りだ。

しかし、サポーターである犬人、リリルカ・アーデについては、明らかに昨日までと態度が違う。

当然だろう。信頼関係などハナからない相手ではあつたが、表面上は一応協力関係となっていた。そんな相手に対し、マシロは昨日『信用していない』と受け取られるような発言をしてしまったのだから。

正直な話、リリルカ本人はなんのショックも受けていないだろう。所詮、彼女にとってマシロはどうでも良い相手。というか、邪魔な存在だ。寧ろ、ベルからの同情を引けると、内心ほくそ笑んでいるに違いない。

『自分はパーティーメンバーから疑われていた可哀そうなサポーターなんです。とてもショックです』と、そんな空気を周囲に……いや、ベルに向けて放っている。そうする事で、マシロを除け者にしようとしているのだ。恐らくは。

そして、現状その作戦は功を奏している。

純粋なベルは、ものの見事に犬シアンスローブ人の狡猾な策略に嵌り、リリルカ

の纏う雰囲気居心地を悪そうにしていた。険悪な空気を敏感に察知し、どうにかしたいが、かける言葉を見つけれあぐねている。彼の心情はそんな所であろう。

今はまだ中立の立場を保っているが、今後もこの空気が続けば、流石に向こうへ傾きかねない。少々大袈裟ではあるが、今のマシロとリルカは『加害者』と『被害者』の関係だ。どちらに同情が集まりやすいかは、火を見るより明らかだろう。

「……………」

いつそ、この場で昨日の非礼を詫びておくか……。

そんな選択肢が、マシロの脳裏を過る。

一見すると妥当な一手である様にも見える。心にもないが、『謝罪』という形を示しておけば、奴も頑なに今の空気を放ち続けることは出来ないだろう。

というより、ベルがいの一番に食いついて、必死に互いの仲を取り持とうとしてくる筈だ。あの白兔に引つ掻き回されて、全く態度を軟化させないとは考えづらい。本気で傷ついているのならともかく、十中八九、リルカも演技なのだから。

しかし、無視できない問題点も内包している。

形だけとは言え謝罪をしまえば、それはつまり自身の非を認めるという事だ。『リルカ・アーデをナイフ窃盗の犯人だと思っていた』という考えを、自ら否定する事になってしまう。

そうなれば、ベルは大いに喜ぶだろう。

そして同時に、胸の中に僅かでもあった『リルカへの猜疑心』さえ完全に消え失せてしまうに違いない。見事に『偏屈な冒険者に疑われた、可哀そうな無実の少女』という認識が出来上がる訳だ。

流石にそれはマズイ。

仮にマシロ自分を省いて、彼らだけでダンジョンに行くような間柄まで関係性が発生した場合、警戒心ゼロのベルがリルカに嵌められないとも限らない。

この如何にも『わたし落ち込んでます』という空気はどうかかした。しかし、ベルの中の猜疑心も消す訳にはいかない。

どうしたものか……。

そう頭を抱えていると、不意にリルルカが雑談を振って来た。

「そういえば、お二人はどうしてパーティーを組んでいらつしやるんですか？」

「え？」

まさかそんな質問が飛んでくるとは思っていなかった……。そんな風な顔で、ベルが反応する。

「ああ、いえ。そういえば、お聞きしていなかったなと思ひまして……。ほら、お二人は、レベルも派閥も違うじゃないですか？」

しかも、ベル様は『新興ファミリア』で「リトル・アイズ」様は、あの「ロキ・ファミリア」。正直、知り合われた経緯すら想像がつかなくて」

まあ、そういう疑問は確かに幾らでも湧いて来るだろう。

マシロ自身、もし当事者でなければ首を傾げている自信がある。

本来であれば、教える義理はない。

だが、今は空気軟化の突破号にさせて貰う方が合理的だろう。

とは言え流石に事細かに語るには少々面倒な説明もしなければならいので、うまく要点のみ伝える必要がある。

等と考えていると、先にベルが口を開いた。

「えーっと、アイ……じゃない。マシロのお姉……も、まずいかな。えーと……」

「……………」

個人名を出さない気遣いをしてくれるのは有難いが、どうやらベルのこういうアドリブ力は自分以下の様だ。マシロはため息を吐きながら、白兔の説明を攫った。

「ウチの身内がコイツに少し無礼を働いてな。その穴埋めだ」

「ほお、それは相当な事をされたんですねえ。わざわざ何日もパーティーを組むくらいですし……」

「ああ、いや。別に僕は何もされてなんか……。つ。寧ろ僕の方が非常識なお願いをしていたというか……」

「……………」

ベルの釈明のリリルカが小首を傾げる。

まあ、確かに、何日も「ロキ・ファミリア」の団員を拘束できる程のやらかしではない。

「元々は俺も一日だけのつもりだった。今もパーティーを組んでるのは、コイツの誘いに乗ったからだ」

親指でベルを差しながらそう告げると、リリルカは大きな目を見開いた。

「成程、では今は単なる善意でパーティーを？」

「……………そう、なるな」

『単なる善意』というワードを否定しない事に若干罪悪感を覚えるが、間違っても『お前を監視する為だ』とは言えないので素直に肯定しておく。

すると、一瞬、リリルカの瞳が胡散臭い物を見る形へと変わった。

「お優しいですね、【リトル・アイズ】様！」

「……………笑顔が固いぞ。思ってもないのが丸わかりだ」

「いやいや、そんな事ないですよ。本当にお優しい方だって、本心でそう思ってます！」

「くどい。俺がそんな奴じゃない事ぐらい、これまでの態度で分かっている筈だろう」

「またまたご謙遜を。だって、貴方には義理が無いじゃないですか」

「……………なに？」

その指摘に、何故か、マシロの時が一瞬止まった。

次の主張を聞きたくない、そう思うが、リリルカの弧を描いた唇は止まらない。

「身内の無礼に対する義理は、初日に果たしているのでしょうか？ 二日目以降は貴方の独断。それにしても、少々ベル様への指導が熱心でした」

「……………」

「リリを警戒していたのもその所為ですよ？ リリはどここの馬とも知れぬ未知のサポーター。見ての通り、人畜無害そうなチンチクリンですが、腹の中では何を考えているか分からない」

「……………」

「だから念の為、一線を引いていた。間違っても、ベル様を危険な目に遭わせない為に……………」

「……………」

「義理も責務もない相手にそこまでするなんて、よほどベル様を気に入ったか、底抜けのお人好し以外ありえませんか」

「そ、そうなんだよ、リリ！ マシロはとっても優しくして——」

「黙ってる、ベル」
何故か自分の事の様に嬉しそうに入って来る白兔を一喝する。シユンとする彼の姿に少々苛立つ。けれど確かに、リリルカの指摘通りだとも思った。

どうしても、自分はベルに対しこんなにも過保護になっていたのだろう。

そこまで考えて、昨日の夕方、『豊穰の女主人』に務める鈍色の髪のヒューマンにも、似たような指摘を受けた事を思い出した。

そして、彼女の声が鮮明に、脳内に再生される。

『ベルさんはとっても気持ちの良い方ですから。だから、彼の為に何かをしてあげると、凄く良い事をした気分になれるんですよ』

違う。

そんな理由じゃない。

そんな情けない理由で、ベルとパーティーを組んでいた訳じゃない。

必死にあのウェイトレスの言葉を否定しようとするが、追い打ちをかけるように、現実でリリルカの声が聞こえて来る。

「どうして否定するのですか？ 良い事ではないですか。優しいという評価は決して悪いものではないでしょう？」

やめろ。

分かっている。お前が本心で言っていないことくらい。

煽る目的で、優しいと連呼していることくらい。

お前は優しくもなんともない。酷く利己的な理由でベルに親切にしている。ただ、自分が気持ちよくなる為だけに。

そう、暗に言いたいのだろうか？

ふざけるな。

見当違いも甚だしい。

俺がベルを目にかけた理由は――。

「……………あ」

その理由を考えて、マシロは『理由が無い』事を理解した。

正確に言うなら『無い』ではなく、『分からない』だ。マシロ本人にも分かっていない。それは、空っぽである事と同義だった。

……明確な理由が無いのであれば、彼女らの言うように、本当に利己的な感情でベルに手を貸していたのかも知れない。その可能性は否定できない。

心のどこかで、俺は――。

「もう一度言います。貴方は『優しい』」

「おれ……は……」

決して非難でも罵倒でもない、やさしいリリルカの賞賛に、マシロは掠れた声を出した。隣でベルが困惑している気配がする。どうしてコイツは褒められているのに消沈しているのだろうか、きつとそう思っているのだろう。

ベル・クラネルは、リリルカ・アーデの台詞をそのまま受け取っているに違いない。なんの疑いもなく。その純朴さが疎ましく……そして、少しだけ羨ましく感じた。

「えっと……マシロ――」

場に激震が走ったのは、その時だ。

『緊張』ではなく『激震』。
文字通り、地面が、『揺れた』。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

そして、程なくして『咆哮』が大気を揺らす。

凄まじい勢いで近づいて来ていた『揺れ』が『足音』だと気付いた時には、既にそいつの巨体は雄叫びと共に姿を現していた。

捻じり曲がった二対の大きな角が頭部から生えている。二足歩行で強靱な腕があり、一見すると人型だが、それは明らかに人ではない。体格も、肌も、顔も、口も、耳も、目も。何もかもが、只の怪物。モンスターだ。

しかも、そいつは本来、この階層にいる筈のない化物。雄牛型の荒くれ者。

『ミノタウロス』。

「な、なんでミノタウロスがこんな所に……。し、しかも、大きい」

恐怖で足を震わせるサポーターの発言通り、この個体は通常より強靱な肉体を有している様だ。本来であれば、ミノタウロスの推定レベルは『2』。Lv. 3のマシロなら、問題なく倒せる程度の相手だ。

しかし――。

「……………ッ」

目の前の個体から放たれる圧は、通常のそれではない。確実にLv. 2からは逸脱している。恐らくはLv. 3。マシロと同格。Lv. 1を二人も抱えた状態では分の悪い相手……。

「り、【リトル・アイズ】様……!! どうにか――」

して下さい!

そう続けようとしたであろうリルカの叫びが、ミノタウロスを刺

激してしまつたらしい。姿を現し、此方を吟味していたモンスターは短く雄叫びをあげると共に、シアンスローブ犬人の少女に特攻を仕掛けた。アタック

だが、その数瞬間前に、マシロは動く。

サポーターと化物の間に割つて入り、武器の腹で、ミノタウロスの突進を受け止めた。

我に返つたらしいベルが、震えた声を出す。

「ま、マシ……ロ……？」

「……ッ。呆けてんじゃねえ！ 死にたくないなら、アーデを連れてとつとと失せろ！」

「で、でも……ッ!?」

「このミノタウロスは強化種だ！ お前等を守りながら戦える保証はない！」

「………ッ」

「分かつたら、行——」

『分かつたら、行け!』。

そう叫ぼうとした瞬間だった。

目の前の、この唾競り合いを続けているミノタウロスとは比較にもならない程の轟音と衝撃……それが、マシロの全身を右側方から襲った。

ミノタウロスと会敵したのは、十字路だ。

右側からの物理的な衝撃に、マシロは左側の通路へと吹き飛ぶ。それも、途轍もない速度で、途方もない距離を。

「が……あ……ッ」

通路の壁に激突し、漸く止まる。

身体中の空気を肺から吐き出し、暫く呼吸すらままならない中で、その足音が、鼓膜に届く。同時に、『何者か』の気配を感じた。

どうにか息を整え、四つん這いになりながらも顔を上げる。

まず目に入ったのは、黒い二本の細い棒だった。それが人の足だと気付くのに、そう時間はかからない。

そのまま身体を起こし、前方にいる『襲撃者』の顔を確認して――

—マシロは戦慄した。

「お、まえ……は」

ウソだ。

うそだ、うそだうそだ。

ありえない。

意味が分からない。

なんで。

そんな感情が、悉く脳を支配する。

マシロの銀目が捉えたのは、全身黒い装備を纏った細身の男だった。身長もそこまで高くはない。無論、マシロに比べれば圧倒的に長身だが、屈強な男の冒険者たちの平均身長と比較すれば『小柄』と言わざるを得ないだろう。

顔は、目元を隠す面に殆どを隠されている。だが、そんな程度の隠蔽で『彼』の素性を見誤る者など、このオラリオには存在しない。

「……どうして、お前が……ここに……」

漆の様に黒い髪。

そこから生える、キャットピープル猫人の証たる耳。

右手に握られた、身の丈程の長さの銀の槍。

「なぜ、お前が邪魔を……しやがる?」

それは、迷宮都市オラリオに於いても、数える程しかない冒険者の頂点。

【ロキ・ファミリア】の「幹部陣」よりも格上であり、「首脳陣」と同格の『規格外』。

「ヴァナ・フレイヤ女神の戦車」……………！」

あのベートを差し置いて、『都市最速』の称号を手に行っているL.V.
6の第一級冒険者。

「ロキ・ファミリア」と双壁を成すもう一つの最大派閥……………「フレイヤ・ファミリア」の幹部。

アレン・フロームルが、そこにいた——。

第二十二話

「あ……………ああ……………」

訳が分からなかった。

理解が、1ミリだって追いつかない。追いつくわけがない。だって……………ッ。

ベル・クラネルは目の前で起こった度重なる異常事態を、ただ、呆然と眺めることしかできなかった。

突如として、目の前に『ミノタウロス』が出現した。

そして、自分達を庇う形で応戦をはじめたマシロ・ヴァレンシュタインが、何者かの手によって通路の奥へと吹き飛ばされた。

結果として、この場に残されたのはLv. 1の弱小冒険者と、サポーターの少女。そして、彼らが逆立ちしても勝てないだろう格上のモンスターだ。

これら一連の出来事が一瞬の内に発生し、ベルは完璧に置き去りを喰らってしまった。

「マ……………シロ……………」

彼が、声を上げる事ができたのは、それからたつぷり6秒も経ってからの事である。随分と悠長な反応だ。きつと、この間にも既に、マシロ・ヴァレンシュタインは襲撃者との戦闘を始めているだろうに。それなのに、亀の様な自分の足は、未だ動き始めない。

しかし、これは仕方のない事だ。幾ら異常な成長性を誇ると言っても、ベルはまだまだ駆け出しの冒険者。階位は当然のごとく『1』であり、イレギュラーに見舞われた際の行動も、適切なモノなど選べるべくもない。

そして、それら全てを頭では理解しつつ、愚直に先達冒険者との『差』に打ちひしがれる事が出来る所もまた、彼の数ある魅力のひとつだった。

ただ、ひとつ擁護できない点があるとすれば、それは——。

まだ『脅威』が健在であるにも関わらず——それから早々に意識を逸らした事だろう。

「ベル様——!!!!」

絶叫。

もはや殆ど怒鳴りに聞こえる悲鳴が、ベルの脳を揺らした。途端、一気に眼前の景色がクリアになり、同時に彼は自身の迂闊さを痛感する。そして、それを猛省するよりも早く、顔面に大剣の刃が迫っている——。

「~~~~~ツ!!!!」

声にならない悲鳴を漏らしつつ、紙一重で、本当にギリギリのギリで、ベルはどうかそれを回避した。

けれど刃は僅かだつて掠めていないのに、剣圧だけで皮膚が薄く食い破られてしまう。決して小さくない掠り傷が、頬からドクドクと鮮血を流す。

その衝撃が、驚愕が、一瞬にしてベルの全身に『恐怖』を巡らせた。白い兎^{ベル}は、捕食者から大きく距離を取る。これでもかというぐらい、大きく。無様に足を連れさせながら、半分地面を転がる様な形で。前方から駆け寄って来たリルカの姿に、彼女よりも更に後ろに下がってしまった事を理解するも、恥じている余裕など無かった。直ぐに前を向き、怪物を己が視界に入れる。

幸い、ミノタウロスは追撃してこなかった。だから助かった。けれどそれは、猛牛気まぐれと、連撃に繋げるのが困難な大振りだった事に救われた部分大きい。当然だが、何度も同じことは起こらないだろう。奴は、今この瞬間にだつて相対する白髪頭を握りつぶせる圧倒的な絶対強者なのだから。

「ハア……ハア……ハア……ツ」

ベルは、どうしたつて乾く喉にゴクリと唾を流し込む。そして、精一杯の強がりであり背中を中に隠すと、ガチガチに震える手で武器を構えた。神様から貰ったナイフだ。あんなにも心強かった一品が、今は酷く心許ないナマクラに感じてしまう。きつと、圧倒的にリーチが短いからだ。この得物である怪物と戦うには、相応に接近しないといけ

ないから……。

ゆつたりとした挙動で此方に向き直る牛頭。『ミノタウロス』の泰然たる振る舞いに、ベルは卒倒しそうになった。それ程までに強い重圧を感じる。これまで、一度だって体験した事のない感覚だ。怖い。恐ろしい。

自分が、一体どれだけマシロにおんぶに抱っこだったかが良く分かる。リリルカも言っていたが、彼は決してベルに過剰に危険な橋は渡らせなかった。『冒険者は冒険したら駄目』。担当アドバイザーであるエイナ・チュールの教えを最も強く実践していたのは彼と言えよう。少しでもベルの手に余ると感じたなら、即座に介入して討伐してくれていた。

けれど、今、そのマシロはいない。

目の前で虎視眈々と此方の動きを窺っている怪物は、マシロなら問題なく一人で斃せる相手だろう。引き換え自分達では、一矢報いる機会すら与えられず惨殺されるような相手だ。

勝てるはずがない。挑む事さえ自殺行為。

逃げるのが最善手。そうだと逃げよう。

逃げれば――。

「べ、ベル様……」

「……！ リリ……」

涙目になりながらそこまで考えたベルの耳に飛びこんで来たのは、リリルカの継る様な声だった。

――ダメだ……！ ここで逃げたら、きっと僕はリリを見捨てる。逃げるので精いっぱい、この子を置き去りにしてしまう……！ 自分とリリルカの走る速度に差があるのは歴然だ。きつと、ミノタウロスの犠牲になるのはリリの方が早い。逃走中に背後から聞こえてくる彼女の断末魔……。それを聞いて、ベルは助けに戻れる自信も、狂わずにいられる自信もなかった。

だから、戦わなければならぬんだ。今、この怪物と。

マシロみたいに。

あの人みたいに。

瞳の奥で煌めいた懸想の相手。その姿に、ベル・クラネルはグツと腹を括った。

「リリ……僕がアイツを引き付ける……。だから、隙を見て逃げて」

「え？ ベル様……!?」

ベルは、震える声で宣言する。

何でもない、ただ一人の女の子を守る為だけに。

彼は、命を投げ打つ事を決めたのだ。

「う、うわああああああアアああアア!!」

後になって振り返ってみると、非常に情けない雄叫びだったと少年は頬を掻く。これではまるで悲鳴だと。物語の英雄たちは、決してこんな頼りない叫び声など上げたりしない。やっぱり僕はまだまだなんだと。

けれど――。

この時、ベルは頭にも無かったが……その無謀とも取れる勇敢たる姿は――

彼自身が憧れた数多の英雄たちの姿と、とても良く似ていた――

:
:

L v. 6の第一級冒険者からの襲撃を受けたマシロは、ふらつく足をどうにか正して立ち上がった。身体が軋む……。倒れたままでいろと、肉体が全力で訴えかけてくる。しかし、それらすべての危険信号を無視して、2メートル程離れた位置で立ち塞がっている件の冒険者を睨みつけた。

「……………なんのつもりだ？」

【ヴァナ・フレイア
女神の戦車】

「フレイヤ・ファミリア」の副団長、アレン・フロームル。そんな大物との個人的な因縁などマシロにはない。「ロキ・ファミリア」に所属している以上、派閥単位の因縁なら無くもないが、だからと言ってわざわざLv. 3の構成員を襲ったりはしない筈だ。

故に、どうしても「女神の戦車」^{ヴァナ・フレイヤ}が、あのミノタウロスを庇った様に見えてしまう。タイミング的にも、まるでマシロが戦うのを嫌ったかのような印象を受けた。そして、確かにマシロさえ排してしまえば、あの場に奴を殺せる冒険者は存在しないのだ。推定Lv. 2を超えるあの個体が相手では、ベルやリルカ・アーデなど、餌にしかないだろう。

つまり、あの2人のどちらか、若しくは両方を殺す為に、ミノタウロスを差し向けたような構図になってしまう。わざわざ、Lv. 6の冒険者が……。それは流石に有り得ない。幾ら何でもチグハグ過ぎる。だからこそその問い掛けだったが、アレン・フロームルからの返答はマシロの疑問を解消するものではなかった。

「……………あの兎から手を引け」

「兎だと……？ ベルの事か？」

寧ろ、別の疑問が湧いてくる。

都市でも最強クラスの第一級冒険者と、只の新米冒険者との接点を、マシロはどうしても見いだせない。

「お前ほど奴が、何故アイツを知っている？ まだ駆け出しも良いトコだぞ」

「テメエに教える義理があんのか？」

「……………ふざけてんのか？ あんな無名の新人に、ミノタウロスなんかかけしかけてお前になんの得がある？ それともアイツに、何か個人的な恨みでもあるのか？」

「……………」

返事はなかった。

既に会話に応じるつもりは無いようだ。只無言で道を塞ぎ、通す意思が無い事だけを言外に伝えて来る。ならば此方も、これ以上質問を重ねるつもりはない。

「そこをどけ……ッ！」

マシロは全速力で駆け出した。

アレン・フロームルは通路の真ん中を陣取っている。通り抜けるには、奴の左右どちらかを潜り抜けるしかない。スペースが同じなので、難易度は同一。そしてそれは同時に、【女神の戦車】ヴァーナ・フレイヤ自身も、マシロがどちらを選択するか予測できないことを意味している。

右か、左か。

その駆け引きの中で、マシロは敢えて、理外の正面突破を選択した。

「……………」

これには流石にアレン・フロームルも驚く。

無論、虚を突かれた事に対する動揺ではない。愚かな選択肢を取った事への困惑の色が強いだろう。

しかし、驚いたことには変わりはない。

それはつまり、コンマ数秒でも反応を遅らせられたという事だ。

「目覚めよ……………」

「……………」

マシロはフロームルに肉薄した瞬間、魔法を発動する。緑色に可視化された暴風が、マシロの肉体を包み込む。

この付与エンチャント魔法の出力は異常だ。只のヒューマンの扱える一魔法の威力を遥かに逸脱しており、至近距離で暴発させれば第一級冒険者だって無傷ではられない。

それをゼロ距離で使い、僅かながらでもアレン・フロームルを怯ませ……………そして。

風の力の全てを、加速の為に利用する……………。

瞬間、足下に爆薬が落とされた……………。そう錯覚する程の衝撃が走った。肉体が、これまでにない程の風を受ける。僅かに残したエアリエルの壁ではガードしきれぬ程の圧倒的な風速が全身を押し返そうとする。しかし、それ以上に、加速する力が凄まじかった。最早自分自身でも制御できないスピードに到達する。そう確信した瞬間……………。

凄まじい力に肩を掴まれ、そのまま乱雑に地面に押し倒された。

「ぐ……………ッ!!」

何が起こったのか分からない。未だマシロは、今の自分の状況を理解できていない。彼の思考を埋め尽くしているのは、ただただ、『痛い』という感情だけだった。現状を把握したのは、L.V. 6の細足に腹を踏みつけられた瞬間だ。

「たく、真正面からの無謀な特攻……。何かあるとは思ったが、無茶しやがって」

【女神の戦車】ヴァーナ・フレイアの視線はとある一点に……。いや、二点に注がれていた。視線に先にある物は『足』だ。マシロの足。体勢的に確認する事は叶わないが、見ずともマシロは自身の足がどうなっているのか理解していた。

「その足じゃ、歩けたとしても満足には戦えねえだろ」

「……………」

エアリエルの風を加速に使う。

それはつまり、力の大半を足に集めたという事だ。防御を薄くする代わりに凄まじい速力を手に入れる。けれど、その代償は見ての通り。得た恩恵に耐えられる肉体強度を、マシロは未だ有していない。「バカな野郎だ。その足じゃ大した戦力にもなれねえだろうに……。そんな後先も考えられねえほど、あの兎を助けたかったのか？」

「……………はッ。気色悪いことを言うな……。見当違いも良いトコだ」

「……………」

瞬間、黒い猫キャットピープル人の放つ雰囲気はまた、変わった。今のはマシロの強がりだ。普段通りに、特に意味も無く放った意味の無いセリフ。それに対し、何か感じる所があったらしい。マシロの腹を抑えていた足の力が明らかに弱まった。

「……………そうだな。お前は兎の事なんざ、どうでも良い。ただ、『助けようとした』って実績を作ろうとしているだけだ」

「……………は？」

思いもよらないその指摘に、マシロは間の抜けた声を漏らしたが、アレンの追及は止まらない。

「違うとは言わせねえぞ。お前自身が今、『見当外れ』と言ったんだ」「そ、それは……………」

から離れる。自分の目の高さと同じ位置に、【女神の戦車】^{ヴァナ・フレリア}の顔があつた。

「ここまで痛みつけられたんだ。助けに行きたくても行けなかったと、言い訳は十分に立つ」

「……………」

……確かに、そうだろう。

もう十分だ。武器で貫かれてはいないとは言え、それでもL v. 6の蹴りを気が遠くなるぐらい受けたのだ。きつと内臓も無傷ではない。その外側にある肋骨は言わずもなだろう。L v. 1なら即死。L v. 2でも、正直怪しい。耐久のアビリティが低い者なら普通に死んでいてもおかしくない。それ程のダメージを負っている。

「誰もテメエを責めたりしねえ……。だから、とつと尻尾巻いて地上に帰れ」

都市最速の冒険者は甘言と共に、空いた左手にポジションを掲げて見せて来た。流石に大派閥の幹部格だけあり、携帯している回復アイテムの質も段違いである。腹の傷は無理にしても、足の自滅傷に関しては、おおかた回復するだろう。

まさに奇跡の薬。

それを飲めば、この苦痛が消える。この地獄から逃げられる。地上の空気を吸える。そして、完治はしないから言い訳もできる。恐怖に耐えかね、パーティーメンバーを見捨てて逃げ帰った腑抜けと、皆に思われなくて済む。

完璧だ。

それさえ飲めば――。

パリーンと、乾いた音が遙か下より聞こえて来た。

ガラスの破損音だ。高級ポーションが、アレンの手を離れ、地面に落ちて割れたのだ。

意地の悪い猫^{キャットヒール}人が意図して落とすとした・という訳ではない。

ペット、マシロは緩慢に、困惑している奴の顔に唾を吐きかけた。そして、鬱陶しそうに頬を拭う猫人に言ってる。

「帰るのは、テメエ……だ、【女神の戦車】ヴァナ・フレイヤ。帰って、フレイヤ主人様の胸でも……啜って、ろ……」

「……………」

瞬間、アレン・フロームルから表情が削ぎ落ちた。無論、目元は仮面で隠れている故に確かな事は言えないが、そう断言出来てしまう程、目に見えて身に纏う雰囲気が変わった。

そして『後悔』の2文字が頭を過るより早く、固められた拳がマシロの右頬を襲う。構えもクソも無い、半ばノーモーションで放たれたそれは、しかしマシロの口内に広大な血の海を作った。右側に生えていた歯の半分近くが砕け、残りも何かしらの異常をきたしている。歯茎や舌も、歯の破片により傷ついた。

それほどの衝撃に吹き飛ばされなかったのは、偏に、髪を掴んでいたフロームルが、即座に手首を掴み直したからに他ならない。マシロの左手首は、乾燥菓子の様に容易く握りつぶされた。そして、悲鳴を挙げる間も無く地面に叩きつけられる。

加えて……無事な右手首には、無慈悲に銀の長槍を突き立てられた。

「……………ぐ……………ア」

「敵を煽るのは相応の力をつけてからにしやがれ、糞餓鬼」

忠告とも取れるその囁きは、静かなものだった。

しかし、声の震えから途轍もない怒りを内包している事は分かる。

『後悔』の2文字が、ようやく、マシロの脳内に浮かび上がったが、もう遅い。アレン・フロームルの頭には、完全に血が上っている。ここからは最早、死ぬまで成す術もなく蹂躪されるのみ。

……………そう。死ぬ。

この状況を切り抜け生還する未来を、マシロは思い描く事が出来なかった。既に虎の尾を踏んだのだ。他でもない、マシロ自身の意思で。こうなると分かっているながら、【女神の戦車】ヴァナ・フレイヤを挑発した。何の事はない。自分の、ちっぽけな自尊心プライドを守る為だけに。

まったく、下らない選択をしたものだ。

アレン・フロームルの見立て通り、仮に逃げても、誰もマシロを責めなかっただろう。そもそも、ダンジョン内での出来事だ。口を割らなければ誰にも真相は分からない。

そもそも、そうまでして守る程の義理もない筈だ。リルルカ・アーデは言わずもがな、ベル・クラネルだって本来、付き合いは1カ月にも満たない。

だと言うのに、勢いでこんな事をしてしまった。

愚かだ。

こんな事で死ぬ。

もう、地上に戻ることは無い。

地上の空気を吸う事も無い。

日の光を浴びる事も、雨に降られる事も、風に吹かれる事も。出かける事も、食事を摂る事も、寝る事も、起きる事も、訓練する事も、だらける事も、怒る事も、笑う事も、泣く事も、叫ぶ事も。

ロキの悪巧みに付き合わされることも

フィンの勇敢な姿に胸を躍らすことも

リヴェリアに説教に慄くことも

ガレスのガサツな笑い声に安らぐことも

アイズに……会うことも――

大好きなのだ。

それは、昔と何も変わらない。仮に、向こうが既に、此方に愛想を尽かしてしまっただとしても……。

——私は、シロのこと大好きだよ

「……………あ」

背骨が折れるんじゃないかという衝撃を受けつつ、マシロの頭にはそんな声が響いた。月明りに照らされ、白い肌をつたう涙がキラキラと光る。濡れて揺れる金色の瞳が、朱く色付いて行く頬が、唇の動きが、息遣いが、こんな時だと言うのに鮮明に思い起こされた。

あの日あの夜、嘘だと突っぱねた姉の言葉が、圧倒的な暴力の嵐の中で燦然と輝く。まるで、それがマシロの希望の光であるかの様に。

——嫌いになった事なんて一度もない。君が生まれた時から、ずっと……

殴られ、潰れた頬に。

感覚なんて、碌に残っていない筈なのに。

掌の温もりを感じた。優しくさすられる感触を、慈愛に満ちたアイズの眼差しを——。

——君は、私の宝物なの

「……………ッ」

アイズ・ヴァレンシユタイン^姉の姿を、マシロは幻視した。

都合よくも、未だ自分を受け入れてくれる事が前提の幻を。一度、

拒絶した分際の癖をして……。

——生きたい。

そう……純粹に願った。

会いたくはない、生きたい。

生き残らなければ意味がない。死んで、地上に運ばれて再会するなんて真つ平ごめんだ。

生きて、顔を突き合わせて、そして言うのだ。

ごめんなさいと。

仲直りしてくださいと。

そうしなければ、俺は——。

「テン……ペストおおオ……ッ！」

「——!?」

最早血に染まっていけない箇所がないんじゃないかというぐらいにボロボロにされながら、マシロはその詠唱式を唱えた。残るすべての力を注ぎ込んだ、真正銘、最大出力のエアリエルだ。流石のアレン・フローメルも、これには飛び退いて回避する。

「テメエ……まだ諦めてなかったのか！」

まだそんな力が……!? とは奴は言わない。

魔法の源は精神力だ。例え体力が空でも、気持ち死んでいなければ発動すること自体は出来る。無論、それを効果的に使いこなすには、肉体の力が必須な訳だが。けれど、今はコレで良い。この強すぎる猫キャットヒール人と距離さえ作れば構わない。

距離さえあれば、こうやって……。

「は……? おい、テメエ何してやがる……?」

妨害されることなく……。

「おかしいだろ、それは……。いったい、どれだけ痛みつけてやったと思ってるんだ……!?」

アレン・フローメルが、驚愕に声を荒げる。恐らく、両目も見開か

れているのだろう。Lv. 6がLv. 3相手に情けない……とは、思わない。それぐらい荒唐無稽なことが、今の奴の眼前では起きている。それを引き起こしているマシロ自身、よく動いたものだ、と、乾いた笑みが出る程だ。

マシロの視線が、完璧に、あるべき高さ^{位置}まで戻る。

瞬間、堪らずといった調子で、【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイア}は喉を鳴らした。

「その傷で……その身体で立てる訳がねえ……ッ。テメエ、いったい何をしやがったッ!」

折角こうして立ち上がったても、見下ろされる身長差なのが口惜しい。

マシロは、肉体が挙げる悲鳴のすべてを黙殺して、今にも折れそうな2本足を大地に突き立てる。身体の傷は一切合切その通りだ。痛みも同様。息を吸うだけでも、酷く肺が痛む。けれど、無視すればいい。どれだけ痛くとも、身体は動く。

【隷属演陣】。俺の、スキル……だ」

「スキル……だと?」

「ああ……使い勝手最悪の……ゴミスキルだよ。一度、発動すれば、丸1日……解除できない。意識を……失っても……」

「………?!」

「効果、は……1日……強制的に発動……し続ける。その間……一切の回復効果は、俺の身体……に作用しない。ポーションも……治療魔法も」

「……はッ! 随分面倒なデメリットだな。だったら、効力は相当――」

「ゴミスキルだって……言っただろうが。【隷属演陣】^{スレイブ・アクト}の効果は……」

『どんな状態でも身体を動かせるようになる』。それ……だけ、だ」

「………なに?」

「……少しづつ傷が、塞がる……なんて副次的効果も、無ければ……痛みを感じなくなったりも……しない」

「……」

「ただ……本当に、身体を動くようにする……だけのスキル。身体能

力の……僅かな上昇効果……すらない」

「……成程な。確かにゴミスキルだ。要するに今のテメエは、ただ？せ我慢してるだけなんじゃねえか。健気な野郎だ」

アレン・フロームルの語気が、驚愕から苛立ちに変化する。警戒に値しないスキルだと理解できたからだろう。けれど、そんなゴミスキルを発動しなければ、最早マシロは立つ事さえ出来なかった。

「痛えだろ。立ってるだけでも辛い筈だ。なのに、そんな意味のねえスキルを使つてまで、どうして立ち上がる？ 何故、そこまでしてあの兎を助けようとしやがる……？」

当然の疑問だろう。それは。

マシロがベル・クラネル救出の為にスキルを使ったのは明白だ。仮に逃げるのが目的なら、わざわざ向かい合つて効力の説明をする必要など無い。発動させた瞬間、一目散に逃げだせば良かっただけの話だ。

「……………俺は……ベルが、気に喰わなかった……………」

「は？」

答えにもなっていない唐突な自白に、黒い猫キャットピーパー人は眉を顰めた。

「アイズと……隠れて、特訓してるって……知った時から。ずっと、モヤモヤ……してた」

「……オイ」

「なんで……そんな奴と、いるんだって。零……細ファミアアの……新米冒険者なんてお前の、視界に……入るわけ、ないだろって」

「テメエ、いったい何の話をしてやがる？」

「ベルと……ダンジョンに、潜るようになって。コイツは……その他大勢なんかじゃ、ないって……分かった。気持ちの……いいやつって事も……」

「……………」

「だから、嫉妬……した。アイズを……取られるんじゃ……ないかって、コワくなったんだ……………」

「知らねえよ……。そもそもテメエら、仲が悪かったんじゃねえのか？ それとも、テメエが【劍姫】から一方的に嫌われてただけか？」

「……いいや。宝…物らしいぜ」

「どうでも良い」

ニヒルに笑ってやると、アレン・フロームルは心の底から吐き捨てた。次いで、こんな言葉をつむぐ。

「要するに、テメエは兎が大嫌いなんだろうが。だったら、尚更——」

「……言っただろう。ベルはいい奴だ。底抜けの……お人好し、なんだ」

ここで、酒場のウエイトレスの言葉がフラッシュバックする。

『ベルさんは、とても気持ちの良い方ですから』

『彼の為に何かしてあげると、凄く良い事をした気分になれるんですよね』

『善意には、善意を返したくなるものでしょう——？』

——ああ、お前の言う通りだ。シル・フローヴァ。

ベル・クラネルには、返さなければならぬものがある。そんなもの無いと、きつとベルは言うだろうけど……。俺は——。

マシロは、歯を食いしばって駆け出した。

身体が壊れそうだ。風圧に、肉体が耐えきれていない。それでも、止まらない。

都市最速の冒険者との距離を一瞬で詰め、鍛え上げられた細身の肉体に武器を吸い込ませる。左手首の骨は粉碎され、右手首にも槍を刺された。けれど、握れる。それが、このスキルの力だから。

無論、こんな攻撃がLv. 6の絶対強者に届く筈がない。事実、長槍によって容易く防がれてしまった。だが、その瞬間、マシロは少しの無茶をする。普段、絶対にしないような『風』の使い方を実践したのだ。

エアリエルは付与魔法^{エンチャント}。

文字通り、物質に風を纏わせる魔法だ。

その対象は、何も自分の身体だけに留まらない。

アイズ・ヴァレンシユタインは、自らの風を剣に纏わせ、必殺の一撃を打ち放つ。彼女の愛剣、《デスペレート》は不壊属性持つ特殊な武器だ。只の剣では、エアリアル^{ヴァナ・フレイヤ}の出力に耐え切れずに砕けてしまうから。

それは、マシロの風も同じ事。ただ彼は、中古の安物を大量に仕入れ、数の暴力で問題を強引に解決している。だから、今の特攻で、剣が壊れても困りはしない。想定内。

しかし――。

そもそも、そう易々と壊れる事を想定していない業物が砕け散ったとしたらどうだ。

【女神の戦車】の目的が、ベル達とマシロを引き剥がす事なら、今日、得物が大きく消耗する想定などしていない筈。

ならば、きつと、替えの武器だって用意している訳がない――。

「デメエ……ッ!!」

アレンの、忌々し気な声色が、鼓膜に届いた。

そして、耳触りの悪い、硬い何かに亀裂が入る音も。

狙い通りだと、自然と口の端が吊り上がる。

マシロは、アレンと武器を打ち合わせた瞬間――エアリエルの風の全てを奴の銀槍に纏わせた。

あの出力を一気に移されて、即座に砕けなかったのは流石と言えるだろう。デスペレートに迫る相当の業物を使っているという事だ。やはり【フレイヤ・ファミリア】の副団長。恐れ入る。

けれど、これで、もう満足に槍は振るえない。ヒビが入ったのだ。第一級冒険者の腕力でそんな事をすれば、自らの手でトドメを刺すようなもの。

武器は潰した。あとは――。

マシロは、新しい武器を構えながら、立ち塞がる難敵に向かって叫ぶ。痛みなど無視して、腹に精一杯の力を込めながら。

「そこを……どけ、アレン・フロームル!! 俺は、ベル達の所へ行く……ッ!!」

第二十三話

ダンジョン37階層。

『深層』と呼称される魔境の一角で、アイズ・ヴァレンシユタインの第一級冒険者とウダイオス階層主が激戦を繰り広げていた。両者が衝突する度に、並の冒険者やモンスターでは消滅しかねない衝撃が発生している。空間さえ歪み、余波すら凶器と化す。まさしく、怪物同士の狂宴だ。

けれど、決して、両者の実力が拮抗しているという訳ではなかった。押ししているのは、『明確に』階層主の方だ。

「アイズ、やはり私も——」

「ダメ……！ 手を、出さないで……！」

自若たる思いで傍観していた王族妖精リヴェリア・リヨス・アールヴが、痺れを切らして加勢しようとする。

けれど、本来であれば嬉しい筈の救援の手を、アイズ本人が振り払った。そして、金の長髪を振り乱しながら、骸の王の巨体に飛び込んでいくのだ。何度も、何度も。幾度、地中から生えるパイルによって弾き返されても。皮膚を裂かれ、鮮血を流しても。まるで、それしかできない鉄砲玉であるかのように、ガムシヤラに突撃を繰り返す。

「アイズ……」

妖精の憂いの声音は、吐息と共に空気に溶けた。

リヴェリアは翡翠色の慧眼をたたえ、歯がゆい気持ちで今にも動き出しそうな自身の肉体を抑制する。本当は直ぐにでも魔法を撃ち込みたい。けれど、それが駄目な事は彼女自身も分かっていた。仮に、自分の助力でウダイオスを討滅しても、アイズは絶対に納得しないだろう。冒険者が冒険者を犯す理由はただ一つ。これまでの自分を超克し、器を昇華する事……。

今回に関しては、弟の件が上手くいかない事への八つ当たりの側面も多分に有るのだろうが、そもその前提からして、アイズは力を追い求め続けている子供だ。不完全燃焼で終えてしまえば、後日、知らないところで無茶をしないとも限らない。

リヴェリアも忙しい身である。無論、フィンやガレスも。

今日のように、毎回都合よくアイズに同行できる保証はない。だから今回は多少の無茶無謀には目を瞑るつもりだった。中途半端が一番よくないからだ。限界までガス抜きをさせてこそ意味が生まれる。

加勢するのは、本当に命の危機に瀕したその時で良い。そう念仏のように自分に言い聞かせ、「ロキ・ファミリア」の副団長は、特に目をかけている団員の戦いを目で追いつけた。時間と共に生傷を増やしていく娘同然の冒険者の姿に、苛烈なまでのストレスを感じながら。

そして、意味のない仮定だとは理解しつつも、彼女大事さからこんな思考に囚われてしまうのだ。

もしも、アイズのスキル、アウエンジャー「復讐姫」の能力補正值が以前のままであったなら、もう少し善戦できていたのだろうか、と。攻撃は最大の防御だ。骸の王をもう僅かでも守勢に回らせることができたなら、アイズの肉体の傷が今より少なかった可能性は、正直否定できない。

そういう意味では、マシロ・ヴァレンシユタインの存在が、アイズの強さに歯止めをかけていると言えるのかも知れない。無論、そんな事は言いたくもないし、彼を責めるつもりは毛頭ない。あの小さな弟の存在がなければ、アイズは復讐の奴隷と化し、無茶に無茶を重ね、とつくの昔にのたれ死んでいた事だろう。マシロがアイズに良い影響を与えているという事実は、どう見たって疑いようがない。

……けれど、アウエンジャー「復讐姫」は憎悪の丈に比例して攻撃能力が上昇するスキルなのだ。つまり、アイズは怪物種を憎み恨むほど、怪物種に対しては何処までも強くなれる。

要するに、あつたかも知れないのだ。

アイズの憎悪がマシロへの慈愛に負けていなければ、骸の王を圧殺し、自分の血では無く、モンスター^の返り血のみをその白い肌^に滴らせていた未来も……。

皮肉な話である。あまりにも無慈悲で救いがない。腹の底から込み上がる嫌悪が悪態となって唇を突き破ろうとする。

マシロ・ヴァレンシユタインのおかげで、アイズ・ヴァレンシユタインの心は壊れずに済んだ。しかし同時に、彼女の大願からは大きく

遠ざかっているのだから。

『オオオオオオオオオオオオ——！！』

咆哮。

それが、無意味な『もしも』に没頭していたリヴェリアの意識を、強制的に戦場へと引き戻す。人としての根源的恐怖心を煽る、平坦で無機質な大音響が、骸の怪物から放たれた。それは、どこか勝利の雄叫びの様にも聞こえて——。

瞬間、突風が吹き荒れ、途轍もない勢いで、何かが飛んで来た。視界の端に金色がチラついたかと思えば、既にそれはリヴェリアを遥かに抜き去り、背後の壁へと激突している。

「アイズ……！！？」

都市最強の魔導師が血相を変えて振り返ったのと、強かに背中を打ち付けた【剣姫】^{けんき}が、ズルリと地面に腰を落とすのは殆ど同時だった。岩に背を預けながら、アイズは一向に動き始めない。戦闘中、常に彼女の身を守っていたエアリエルの風も、今は霧散し見る影もない。気絶している。

それが、遠目にも分かった。険しく隆起していた眉はハの字に垂れ、迷いと怨嗟に駆られていた瞳は凧のように閉じられている。固く食いしばられていた口は柔らかく艶めいており、あれだけ強く剣を握りしめていた右手は、だらんと半開きになっていた。そして、放り出された肢体には力が入る気配が一切ない。

まさしく、猛獣の巣に放り込まれた餌だ。

今の【剣姫】^{けんき}は強靱な第一級冒険者などではなく、ただ蹂躪され食られるだけの無力な生娘。意識が無ければ、か弱い少女と何も変わらない。

「くそー」

リヴェリアは駆け出した。

魔法での迎撃は間に合わないと判断したからだ。既に、漆黒のパイルがアイズに迫っている。砲撃で相殺などすれば、確実にあの眠り姫を巻き込んでしまう事になる。故に、直接の回収だ。意識のない【剣姫】を救い出すにはそれしかない。

けれど、かなりギリギリだった。リヴェリアは後衛の魔道士だ。Lv. 6 故に大抵の冒険者よりは俊足を誇るが、それでも特別秀でている訳ではない。この場に居たのが、フィンやベート辺りだったら、問題なく助け出せていたのだろうが……。

「……ッ！ 起きろ、アイズ！」

ほんの僅か……ハナ差で間に合わないかと悟ったハイ・エルフは、その種族らしからぬ大声を鳴らして眠り姫に呼びかけた。瞬間、その声が呼水になったのか、アイズ身体が痙攣する。「うっ」という呻き声と共に眉根や目元に力が入り――。

そして、弾かれた様に見開いた「剣姫」は、状況を理解したのか顔を歪めて魔法の詠唱式を口にした。

「……ッ。目覚めよ……！」

次の瞬間、リヴェリアは信じられない物を目にする。腰まで伸ばした翡翠色の絹髪を、前髪を、これでもか錯乱させながら――悄然と瞠目した。

「な、なんだ、コレは……?!」

ボウッ！ と音を立ててアイズの身体からエアリエルの風が放出される。そこまでは良い。普段通りだ。この過程を経て、精霊の息吹はアイズの身体を包み込んでいく。おかしな所など何もない……。

ただ一つ――、解き放たれた風の出力が『異常』だった事を除いては。

エアリエルは付与魔法だ。本来、纏って白兵戦を演じる為のものであり、間違つても風の塊を相手にぶつける魔法ではない。というより、そんな用途は想定していないので、出来ない。

けれど、今生み出した風は違っていた。アイズを中心に全方位に隙間なく広がったソレは、巨大な階層主の体躯を物理的に押し返してしまつたのだ。風そのものが、既にそれだけの威力を持っている。放出方向に指向性を持たせ、砲撃魔法のように撃ち放てば、それだけでも雑に通用してしまいそうだ。

そして、纏う段階に移行して尚、フィールド魔法のような顕現範囲を維持し続けている。最早、纏っているのではなく、荒れ狂う嵐の中

に、ポツンとアイズ^{少女}が立っている。そんな感じだ。

「アイズ?! 一体どうなっている?! 本当にソレは『エアリエル』なのか?! どうしてこんなにも巨大に——」

際限なく叩きつけられる風から顔を守りながら、リヴェリアはアイズに向かつて叫びあげる。聞こえているかどうかは分からない。この事態はアイズ本人も想定外らしく、呆けた様子で左の掌を見詰めているから。

しかし、やがて瑞々しい唇が動いた。

「……………わからない。でも、温かい」

「……………なに?」

「これは、シロの風…………?」

：

なんなんですか、コレは。

話が違う…………!

猶予をくれるのではなかったのですか…………!?

いったいぜんたい、なんでこんな事に…………。

突然の出来事に、リリルカ・アーデは狂乱していた。恐怖と絶望を感じ、憤る。常に冷静さを保っていないなければならないダンジョンで、経験豊富なサポーターは無様なほど動転していた。

けれど、きつと、そんなリリルカを、腑抜けと嗤う者は一人としていないだろう。彼女のレベル。階層の深度。そして、パーティーの厚みを鑑みれば、この状況に絶望しないなんてあり得ない。それはつまり、目の前の怪物の危険度を、正しく認識できている事の査証だ。愚者か狂人でなければ、必ずリリと同じ感情を抱くだろう。

リリルカ・アーデと。

そして、ベル・クラネルの前に現れたのは、人型の屈強な体躯に闘牛の頭を融合させた格上のモンスター、『ミノタウロス』だった。本来なら、もつと下の階層に出現する怪物種であり、ギルドの定めた推定

階位はLv・2。Lv・1が2人しかいないこのパーティーでは、奇跡が起きても勝てない相手だ。マシロ・ヴァレンシユタインが消えた現状、リルルカとベルにとっては『災厄』にも等しい存在である。

そんな相手と鉢合わせた不運を、リルルカ・アーデは偶然だとは思わなかった。彼女の頭に浮かんでいるのは、数日前に接触した薄気味悪いフードの冒険者の姿である。顔はわからない。けれど、顔面に張り付いた卑しい笑みだけはありありと想像できてしまい、胸中で罵詈雑言を浴びせまくる。奴が、約束を反故にしたとしか思えなかったからだ。

約束とは、計画実行の保留の事である。

男の手を取って良いものか即決できなかったリルルカは、返答を先送りしていたのである。

そして、その計画とは、モンスターを使ったマシロ・ヴァレンシユタインとベル・クラネルの襲撃だ。屈強な怪物種にマシロ・ヴァレンシユタインをいたぶらせるのがフード男の目的で、その混乱に乗じてベル・クラネルからナイフを奪うというのが、リルルカ・アーデの目的だった筈であらる。

しかし、マシロ・ヴァレンシユタインは何者かの奇襲を受け、遙か彼方へと吹き飛ばされてしまった。対【リトル・アイズ】用に連れてきたと思しきミノタウロスは今、ひ弱なりルルカ達に向いている。

本当にふざけた男だ。

これでは、ナイフを掠め取る余裕など無いではないか。それどころか、生命の保障も怪しい。いや、絶望的。何が『ベル・クラネルがギリギリ対処できる程度の相手』だ……。【リトル・アイズ】が直々に手を下さなければならぬレベルの相手を用意する必要がある何処にある？　こんなの、巻き込まれただけで10回は死ぬる。

きつと、ヴァレンシユタインを襲撃したのは奴自身だ。異常なまでにあの生意気な銀髪を嫌っていた様だし、口では自身の手は下せない等と言いつつも、歯止めがきかなかったのだろう。いたぶるのなら、やはり自分の手で。モンスターなんかには任せておけない。と、心変わりしたに違いない。その身勝手の所為で、リルルカの『死』がほぼ確

定してしまった。

ベル・クラネルは確かに強い。だがそれはあくまで、L.V. 1という規格の中での話だ。既に同ランク帯の中では最上位。その上で、異常な成長を見せ、唯一無二の無詠唱魔法さえ習得している。……けれど、それらを加味しても、やはりまだ足りない。階位が1つ違うとはそういう事だ。

——せめて、ミノタウロスがベル様を喰っている隙に、遠くへ……。

「……ッ」

無意識にそこまで思考を回して、リリルカはハツとした。ミノタウロスに食い殺されるベル・クラネルを想像していた筈が、いつの間にか、贅となるを自分自身に置き換えてしまったのだ。そして、その傍らで、脱兎の如き遁走を繰り返す白髪の冒険者の姿も。

リリルカは自身のヌルさに下唇を噛んだ。

——そうです……。なにを暢気に構えているんですか、リリは!!
——片方を見捨てて逃げる。そんな事、リリ以外だつて考えるに決まっているじゃないですか……!!

——それが、この場を切り抜ける最善手なんですから!

——幾ら、お人好しのベル様でも……。

酷薄な色を帯びた深紅の瞳が見下してくる。そんな姿を幻視しながら、サポーターは恐る恐る冒険者を見上げた。

「リリ……僕がアイツを引き付ける……。だから、隙を見て逃げて」

「え? ベル様……?!」

耳を疑った。発言内容が衝撃的過ぎて。

でも、それは確かに、ベル・クラネルの声だった。

そう言って油断させておいて、首根っこを掴み牛の怪物へと放り投げる算段か……。と、そなりリルカが疑心を巡らしていふと、なんの前触れもなく、兎が特攻を開始する。

「う、うわああああああアアああアア!!」

悲鳴にしか聞こえない情けない雄叫びが、流星のように、一直線に伸びていく。あつという間にミノタウロスへと接敵した新米冒険者

は、敵による大剣の振り下ろしを不恰好に躲しつつ、引き付ける様に巨体から離れる。それは、リリルカが呆けているのは正反対の方向で……。

「な、なんで……？」

リリルカには、ベル・クラネルという人間が理解できなかった。善人である事は知っていた。清い心を持っている事も。まだ、穢れを知らない事も。けれど、それは彼自身が良い人であろうと努めている結果だと思っていた。ダンジョンは魔窟だ。窮地に立たされれば、彼自身も気付いていないかった醜悪な本能が顕わになる筈だと、高を括っていた。

なのに、ベルはまるでリリルカから危険を遠ざけるかのような行動に出ている。一撃でも喰らえばアウトだ。仮にリリルカを逃がした後離脱すれば良いと考えているのだとしても、そう簡単に振り切らせてくれる相手ではないことぐらい、彼にも分かっている筈なのに。

ベル・クラネルは、英雄ではないのだ。まだ。

駆け出しの弱い弱い、ちっぽけな有象無象。第一級冒険者どころか、「リトル・アイズ」の領域にすら達していない。そんな存在が、こんな英雄紛いの敢行をした所で――。

「ああ——ッ!!」

「べ、ベル様!!」

ミノタウロスの腕に払われ、ベルは地面に吹き飛ばされた。思わず身を乗り出すと、彼の紅い瞳と目が合う。恐怖に、痛みにも、支配された双眸だ。弱々しく揺れる赤目が、どうしようもなく懇願している。助けてくれ、と。そんなところにはいないで、加勢に入ってくれ。そして、自分を逃がしてくれ、と。

兎の口端が震えた。瞳の訴えを肉声に変えるつもりなのだと、リリルカは直感した。

「早く…逃げて」

「――」

まただ。

また、違った。読み間違えた。

それは、本来なら耳を疑うべき台詞だ。この極限の状態で出る言葉ではないと、聞き取り間違えと断ずるべき場面だ。自身の命の窮地に、我が身ではなく他人の心配など出来る筈がないのだから。けれど――。

この兎だったらそんな事も出来ると、リリルカは心の片隅で納得してしまった。

――本当に、この人は何処まで

茶髪の小人族は瞠目せずにはいられない。ベル・クラネルという人間の選択に、性根に、生き方の清廉さに、未だ慣れる事が出来なかった。

偽善者であれば、今、ここでボロが出ていた筈だ。後悔と逆上の感情を、ひ弱なサポーターに叩き込んで来た筈だ。いや、そもそも、身を挺して庇うという行動自体に移れない。

これではまるで、物語の英雄ではないか……。

否、かの英傑たちには『力』がある。

ベルとは違い、万軍の敵勢力を振り張られる程の『武』を有しているのだ。

ならば、それが無いこの白兎の行動には――かの英雄たちをも凌ぐ『真勇』が秘されているという事になる。

もし。

もしだ。

もしも、この少年の様に、勇気的一端でも振り絞ることが出来たのなら……。一族の勇者の様に、勇猛果敢な雄叫びを上げる事ができたなら。

そうしたら、リリルカ・アーデという少女の日常も、少しは――。

「リリ……！ 早く！」

「ベル様……で、も……」

胸の奥に生まれた小さな熱を、しかし彼女は燃焼させることが出来なかった。

何も変わらず、ただ、少年の切迫した声に狼狽える事しか出来ない。臆病だから。リリは力のない弱虫な小人族バルウムだから。

「早くしろよー！」

「…………ツ」

ベルらしからぬ強い口調の命令に、リリは頭を被り振って走り出した。モンスターの咆哮が、破壊音が、それを必死に避ける少年の苦悶が、ぐんぐんと遠ざかって行く。最早自分の足音の方が鮮明に耳を付く。小人族バルウムの小さな心臓の鼓動如きに、戦闘の大音響が掻き消されているよう……。けれど、手足は激しく、無様に、軽やかに回った。遁走の途中で振り返る。

ほんの一瞬、白い兎と目が合った。心底ほつとした様な、穏やかな深紅ルベライトと目が合う。綻んだ口元は、確かにその言葉を紡ぎ結ぶ。

——ありがとう、リリ。

「…………ツツ!!」

眩しい。

どこまでも、この白いヒューマンは太陽の様である。自分とはまるで違う。

惨めだ。

こんなの——。

こんなの…………ツ！

「う、うわあああああああああ!!!!」

悔しい…………ツ。

情けない…………！

こんなにも胸が熱いの！ 慟哭を叫びあげているのに！
勇気を進らせ、少年を救わんと災禍に飛び込む事ができない自分が

…………!!

この場から遠ざかる事を止められない自分が…………ツ!!

「あつー！」

癩癩を起すかの様に、感情の濁流に呑み込まれていたリリルカは、自身の肉体が制御できる速力の限界を見誤った。何てことない小石に足元を取られ、勢いを殺せずに半ば宙を舞う。そして、自ら嬉々として地面に飛びこむような形で、その顔面と両膝を擦り剥いた。

「うう……」

痛い。

容赦なき鈍痛が頬と顎を襲う。迷宮の湿った空気が鋭い刃と化して、傷口に触れる。

血の味さえする口内。

鉄の味を感じる舌を、リリルカは無意識に動かした。

「リトル・アイズ」……様」

ポツリと呟かれたのは、いけ好かない生意気な冒険者クツガキの二つ名。オラリオ中にその勇名を轟かせる【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの弟。

「どこ、ですか……？ 【リトル・アイズ】様……。どこに、居るんですか!？」

拳を冷たい地面に叩きつけ、リリルカ・アーデは叫喚する。

「アナタしかいません……！ この絶望を覆せるのは……ッ。ベル様を救い出せるのは、アナタしかいないんです……!！」

ググつと、つま先に、足裏に、ふくらはぎに、膝に、太ももに、腰に。下肢の全ての部位に力を入れる。骨から鳴る奇妙な音が気持ち揺らすが、聞こえないフリを決め込んだ。ふらつきながらも立ち上がった小人族バルウムの瞳は、まだ不安に魅入られている。けれど、迷いは消えていた。

恐怖はある。けれど、彼女は今自分がすべき事を——否、自分がしたい事を自覚した。

「返事を……して下さいー」

それは、一見すると馬鹿げた願いだ。

せつかくこうして怪物の魔の手を逃れたのだから、さつきと地上に

戻るべきである。

彼我の差を考えれば、じきにベルは殺される。そうなれば、あの化物は自分を追いかけて来るだろう。こんな危険な魔窟に留まってい
い理由は一つもない。

——でも……！

灼熱の激情が、衝動が、リリルカを突き動かしていた。

「返事をしなさい……ッ、返事をしろ！ マシロ・ヴァレンシユタイン
!!」

ダンジョンの際限なく仄暗い不気味な虚空に咆哮を放ち、齒を食い
しばって、リリルカ・アーデは地下世界の大地を駆け出した。憎らし
い銀髪の子供を見つけ出し、ベルの元へと導く為に——。

：

カラン……と、銀の長槍が地面を叩く。アレン・フロームルの細い
足元に転がった彼自身の得物は、静寂を取り戻した迷宮に静かに溶け
る。

「……よかったのか？ 手放して……」

「チツ。これを狙ってたくせに白々しい事抜かすんじゃないやねえ。俺の武
器は、テメエ如きにくれてやるほど安くねえんだよ」

「……そう、かよ」

「……喜べ、糞餓鬼。テメエの望み通り、丸腰で相手をしてやる。だか
ら——」

【女神に戦車】の眼光が鋭くなった。最早、仮面を付けている意味が
ない程に、漆黒の眼差しが目に浮かぶ。

「さっさと風を纏い直しやがれ」

「……」

マシロ・ヴァレンシユタインは銀の双眸を細め、ガタガタの肉体を
律し、檻樓の剣を構え直した。そして、気持ちいを静め、残り僅かな
精神力をかき集める。先程の攻防で無茶な用途を強いた反動で、『工

アリエル』の効力が途切れた。だから、アレンの指摘通り、再び発動させ纏い直す必要がある。

真実、次が最後の激突だ。ここで勝負が決まらなければ、マシロ・ヴァレンシユタインは敗北する。アレンの横を突破できず、ベル達の元へは到達できない。正直、精神疲弊マインド・ダウンしない保証は無かった。そもそも、発動できるかどうかも賭けである。それほどまでに、精神力はギリギリだ。けれど、素の状態では勝ち目がない。無謀だろが何だろうが、発動できることに賭けるしかないのだ。

「目覚めよ——」
テンペスト

静かに、淀みなく、その詠唱式を口にした。

すると次の瞬間、予想だにしない現象が起こる。

ボオウツツ！ と、途轍もない勢いの風が自身を中心に円環のように広がったのだ。それは最早、嵐と見紛う程の規模と風速で、隣接する地面や壁を軽々抉って行く。

「な……んだ、これは……」

思いもよらない凶風の発生に、面を喰らったのはマシロ自身だった。無理もない。これは明らかに、万全状態の最大解放時よりも出力が上がっている。それも、10%や20%の上昇率ではない。体感の話ではあるが、優に倍近い力が出ている様に感じられた。だが、なぜこんな事になっているのかは、皆目見当もつかない。

「なんだこりゃあ……別物じゃねえかつ。テメエ、いったい何をしやがった!？」

この急展開に息を呑んだのはマシロだけではなかった。対峙する、アレン・フロームルの叫喚が暴風の合間を縫って辛うじて鼓膜に届く。緑色の風が視界を埋め尽くしている所為で様子は伺い知れないが、流石の第一級冒険者もこの事態には瞠目している様だ。

やがて大量の風がマシロの身体に纏わりついてゆく。視界を遮る乱風でしかなかった精霊の息吹が、次第に静寂の色を覗かせて始める。掌握できる気配など微塵もなかったじゃじゃ馬は、まるで品行方正な淑女であるかの様に、あっさりと、「リトル・アイズ」の支配下に収まった。

瞬間、マシロは本能的に理解した。

身に余るこの神風を、リスクなしに扱えるという、余りに都合が良すぎる事実を――。

驀進――。

マシロはアレンが冷静さを取り戻す前に、予備動作もなく猛進した。出発地点から轟然と鳴り響いた爆発音は、ダンジョンの悲鳴の様にも聞こえる。自身の想定を5段階ほど超える速力で空気の壁を幾層もぶち破り、あつという間に【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイア}の端正な顔と肉薄した。「な……ッ!!」

罵り声専用の発射口から、驚愕の肉声が漏れ出る。

それが演技ではない事が、コンマ数秒遅れで動く身体から伺い知れた。これは、正しく奇跡だ。Lv. 3でしかないマシロが、本当の意味でLv. 6の虚を突くことに成功したのだから。光の矢と成り迫る【リトル・アイズ】に、アレンは迎撃か回避かの狭間で揺れ動く。そして……『回避』を選択した。一秒にも満たない逡巡の果てに。

最大最強最悪の障壁が飛び退き、クリアになる視界。広がるのは、怪物の腹の中のように暗くうねり曲がる迷宮路だ。マシロはその中へ、速力を緩めずに飛びこむ。【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイア}を一切振り返らず、ただ、前へ前へと歩を進める。

分かっていたからだ。全能感溢れる今の状態を以てしても、奴がその気になれば簡単に追いつかれてしまう事が。だから、一分一秒でも早く遠くへ。アレンに捕捉される前に、何としてでもベルの所へ……。

そんな思いを胸に、マシロは複雑怪奇なダンジョンをひた走った。

……

マシロの予想は正しかった。

迷宮の一角にて、彼が遙か彼方に置き去りにした第一級冒険者、アレン・フロームル。強力無比なその猫^{キャットビートル}人は、第二級冒険者如きに後れを取るといふ『ありえない展開』に打ち震えていた。

そう、ありえないのだ。こんな事、天地がひっくり返ってもありえない。

手足が震える。怒りの衝動が細身の肉体を満たしていく。

此度の事態が起こった原因を、「リトル・アイズ」の道理に合わない覚醒の所為だと片づけるつもりは無かった。確かにマシロ・ヴァレンシユタインが覚醒していたのは認める。けれど、それを込みで、本来なら出し抜かれる筈などないのだ。3レベルの差とは、そういうもの。だというのに突破されてしまったのは、アレン・フロームルがマシロ・ヴァレンシユタインを舐め切っていたからに他ならない。

どうせコイツは【劍姫】の様にはなれない。あんなふうに冒険できる人種の間ではないと、そう初めから決めつけて侮蔑していた。都市最速の猫人は、故に、今こうして無様な姿を晒している。

認める訳にはいかなかった。

相手が自身の力量を上回った訳ではない。

これは、完璧に、自分の油断が招いた失態。

自分の悔りが原因で、自分の意志で、女神の神意に背くような形になってしまった。その事実を、【女神の戦車】は認めてやる訳にはいかなかった。

「……………ツツツ!!」

だから、アレン・フロームルは怒りを剥き出しにして地面を蹴る。

銀の冒険者を追いかけて、その行く手を阻む為に。黒い猫人が行動を起こしたこの瞬間、マシロ・ヴァレンシユタインは命運尽きた——筈だった。

「待て、アレン」

「……………」

武人然とした太く静かな制止と共に、アレンの華奢な肩に丸太の様な手が掛けられた。猫人は、誰が自分を引き留めたのか見当がついているようで、一瞥をくれるより先に、憎々し気な声色を吐き出す。

「オツタル……………」

【猛者】オツタル。【フレイヤ・ファミリア】の団長にして、迷宮都市唯一のLv.7。比喩でも持ち上げでも何でもなく、オラリオの頂

天であり、最強の冒険者だ。

凶猫からの射殺さんばかりの視線を受け止め、涼しい顔で最強は告げる。

「追う必要はない。兎は、既に産声を上げた。女神の神意通りにな」

「だったら尚更だろうが。奴が兎の戦いに割って、台無しにしない保証が何処にある？」

「……有り得ん」

「何……？」

【女神の戦車】から視線を外し、【猛者】は確信めいた声音で呟いた。

「他者の冒険を邪魔をするような無粋な真似を、冒険者がするなど有り得ぬ事だ」

「………チツ」

オツタルの一见『だからなんだ』という返答に、しかしアレンは悔しそうに舌打ちを零す。それは、彼自身が認めてしまっている事を意味していた。どんな思惑があったにしろ、白兎の為にボロボロになりながら自身という大きな壁をぶち抜いた【リトル・アイズ】は、疑いようもなく『冒険者』なのだ……。

アレンはマシロ追跡を断念しつつ、団長を睨む。

「まあいい。それより、猪野郎。テメエ【剣姫】の足止めはどうした？」

「……【剣姫】は居ない」

「は？」

「何処にいるかは知らんが、少なくとも今日、兎たちを尾行してはいない様だ」

「……数日前からずっとだな。結局、奴らを見守ってたのは単なる気まぐれだったって訳か」

どこまでも哀れな野郎だ……。と、アレン・フロームルは【リトル・アイズ】の必死な顔を想起する。

「どうした？ アレン」

「なんでもねえよ」

オツタルの質問にそう吐き捨てると、アレンは銀槍を拾い上げ薄闇の洞窟を進んでいくのだった。

第二十四話

『エアリエル』。

それは、あの【千妖精】すら『異常』と評した、イカレた威力の風属性付エンチャント与魔法だ。

使用者は、アイズ・ヴァレンシユタインとマシロ・ヴァレンシユタイン。

本来、同一の魔法を複数の人間が有する事などあり得ない。

魔法の発現は、個々人の資質や歩んで来た軌跡、内に秘めた思い等が大きく影響するからだ。

故に、これは『バグ』と言つて差し支えないのだろう。ヴァレンシユタイン姉弟は、正しく、下界の常識を覆したのだ。

そして、その『バグ』が、本人達でさえ知らなかった『共鳴』レゾナンスという共振現象を引き起こしたのである。姉弟の纏う精霊の風を、暴風に変えてのけたものの正体がコレだ。それは、0.001秒の誤差すら許されない完全なる魔法の『同時発動』を成功させた時のみに発生する奇跡であり、タイミングさえ一致してしまえばどれだけ離れていようと関係ない。例えば、片や『上層』、片や『深層』に居たとしても。当人達にその意図がなかったとしても、問答無用で発動する。

その厳しい発動条件かつ完全制御不能の様相からも分かる通り、共鳴した際に得られる力は莫大だ。ざっと見積もっても1階位強……2レベル分にはギリギリ届かない程度の、余りに馬鹿げたステータス補正を得る。つまり、そもそもLv.3中堅クラスの力を持つマシロは、凡そLv.5の真ん中あたりの力を手に入れる計算になるのだ。中でも、元から突出してた『俊敏』に関しては、Lv.5最上層に食い込むだろう。

その上で【リトル・アイズ】は、風の力の殆どを『足』に振り分けたのだ。無論、そんな事をすれば他の補正值は下がる。『攻撃』と『防

『御』はモロに影響を受け、L v. 5未満となった火力と耐久ではL v. 6の牙城を崩すのも、猛撃に耐えるのも難しいだろう。けれど、それでも彼は『速力』を強化した。

マシロ・ヴァレンシユタインの目的は、アレン・フロームルの打倒ではなく、ベル・クラネルの救出だ。L v. 1の冒険者である彼は、今、L v. 2……若しくはL v. 3かも知れない『ミノタウロス』に襲われている。つまり、時間がないのだ。故に戦闘行為など論外。超スピードを以てして、アレンの横を飛び越えてしまう以外に彼を救う道はない。

しかし、それが最も困難な選択肢だった。

『女神の戦車』は『都市最速』の冒険者。よりにもよって、速力を最大の武器としている猫^{キャットレーパー}人だ。確実に、アレン・フロームルの『敏捷』はL v. 6最上位。……いや、L v. 7が存在するこのオラリオで『都市最速』の看板を背負っている以上、その速力は『迷宮都市最高階位』まで到達している可能性すらある。L v. 5程度の敏捷性では、どうあがいても勝ち目はない。

——しかし。

『共鳴』^{レゾナンス}状態の『エアリエル』。その風の力を一点に集中させたとすれば話は別だ。無論、『体感』故に確かなことは言えないが、下手をする^と3階位分の補正が掛かっている様にも感じられる。つまり、一時的にだが、マシロはL v. 6に匹敵する速さを得るのだ。

もちろん、その目測が正しかったとしても、まだ届かない。穴はかなり埋めたが、数値の上では負けている。けれど、流星にここまで詰めれば、間違いは起きる。

何故なら、アレン本人は何処まで肉薄されているのか知らないからだ。当然、これまで以上のステータス上昇は想定しているだろうが、それでも——『L v. 6クラスの速力を手に入れている』とは考えない。長く冒険者をやっていたい程、そんな馬鹿げた可能性は無意識に排除してしまう。単純に、あり得ないから。

マシロが着目したのは、その認識の乖離である。

せいぜいL v. 4の最上。あってもL v. 5の下——。それが、

【女神の戦車】が想定しうる現実的なラインだろう。しかし、実際に叩き込まれるのは、Lv.6自身と同領域クラスの超スピード。幾らアレン・フロームルと言えども、完璧に抑え込むのは不可能である筈だ。

そして、その予測は正しかった――。

マシロは現在、嵐の化身となって迷宮路を爆走している。

既に猫キャットビークル人は遙か後方へと置き去りにしているが、尋常ならざる速度で駆け抜けている為、経過時間はほんの十数秒だ。その間、ほとんど直線の道のみを走れたことは、マシロにとって間違いなく幸運だっただろう。何故なら、彼は今、理外の速力で駆けている。その手綱は、完全に彼の手にはない。

「く……ッ」

故に、曲がり角などは、こんな具合に通路壁に激突しながら、無理やり切り返すしかないのだ。僅かに残した風の防壁のお陰で衝撃の緩和はできているが、それでもゼロになる訳ではない。2回、3回、4回と繰り返していく内に、加算されるダメージは無視できないモノになっていく。元々アレン・フロームルにボロカスにされ、限界を迎えていた肉体だ。これ以上の負荷は、些細なものでもマズイ。

だから、マシロは逸る気持ちを抑えて、足の回転数を落とした。風の方は細かい調節が利きそうになかったからだ。

けれど――そんな彼の判断に失望したかの様に……精霊の風は、あつさりマシロ・ヴァレンシユタインにそっぽを向いた。なんの前触れなく唐突に、烈風が消滅したのである。

「な……っ!!」

身体中を包み込んでいた全能感が消えて行く。

全ての力の残滓が肉体から抜け落ちる感覚と共に、マシロは地面に膝をついた。その膝さえ、容易く崩れて四つん這いになりながら両手を付く。けれど、既にアレンによって貫かれた右手首と、碎かれた左手首だ。元から骨なんか無かったみたいに脆くもひしゃげた。

抵抗虚しく、マシロはその場でうつ伏せになってしまう。地面の硬

さや冷たさが、肌に伝わる事はなかった。既に、肉体の感覚はぼやけていた。重いとも痛いとも思わないのに、身体は1ミリだって動かない。

「クソ……なん……で」

辛うじて回る口で、悪態と、ありつたけの血を吐く。

けれど、マシロは吐血を続けながら、同時に理解もしていた。神々の言葉を借りるのであれば『無敵タイム』が終わったのだ。至極当然の話だが、約2レベル分にも及ぶ超絶強化が、そう都合よく長続きする訳がない。そして、解除されれば、残されるのは強化前の肉体だ。マシロで言えば、『女神の戦車』に痛めつけられた死に体の肉体。更に突き詰めるなら、限界を遥かに超えた超加速により、更にダメージが加算された肉体である。

『共鳴』により加算された風は、使用者の身体に負担を強いけない。

けれど、超強化の末に本来の肉体の限界を超えて発揮される至上のパフォーマンス……。その無茶に対する取り立てが無い訳ではなかったのだ。血も涙もない世界執行人の摂理が、粛々と己が役目を全うする。抗う術は存在しない。

もちろん、『隷属演陣』スレイブ・アクトの効果は継続中だ。理論上は動かせる。だが、あれは『身体を動かす助力をするスキル』ではなく、『身体を動かせるようにするだけのスキル』である。動力源となる気力やエネルギーが枯渇してしまえばどうしようもない。

「くそ……、こんだけやって……柄にもないこと……して、これ、かよ……」

あまりの情けなさに、マシロは涙が出そうになった。

結局自分は何も成せないのだと理解してしまった。ベルを助ける事も。アイズに謝ることも。

動け動け動け——と、必死に胸に衝動を滾らせているけれど、反比例するように身体の芯は冷めていく。その心の熱さえ、氷のような静寂に囲まれて勢いが死んでいく。あれだけ生きて本拠ホームに帰ってきたのに、今ではどうしてそう思っていたのかも分からない。

溶けていく。

闇に。

消えてゆく。

願いが。

ダンジョンという巢窟に呑み込まれ、たったひとり、誰にも知られる事なく死んでいく。幾万人の同業者が、そうして命を散らしていったのと同じ様に。

でも。

そんな不名誉が、孤独な結末が……。意地を張り、己の本心と向き合おうとしなかった自分には分相応である気がした。結局、何事も誠実に向き合った奴が強いのだ。マシロ・ヴァレンシユタインは、何もかもが遅すぎた。そんな奴が、どうして今更、姉に会いたい等と言える。どの口が謝りたい等とほざく。それは単なる我儘だ。顔を合わせる機会も、腰を据えて話す機会も、後悔の末に謝る時間も、幾らでもあった筈なのに。それを無碍にし続けたのはお前自身だろう。

——ああ……。そうか

——おれには……。あやまりたいと思う資格すら……。なかったのか
……

今にも消えそうな意識の中で、マシロはようやく自分の犬死運命を受け入れた。もう碌に何も見えていない銀に双眸に、背を向け、遙か遠くに歩いて行く金の少女の後姿が浮かぶ。此方に一瞥をくれる事はない。気付きもしない。声を出す力も、手を伸ばす力さえ、既に無い。目を開け続ける力さえも。重い瞼が、ゆっくりと下りてゆく——。

「……様！」

真っ白い感覚の中に、微かに、波紋が生じた——。

「ど……。で……。か!?」
【リトル・アイズ】様！」

誰かが、自分の事を呼んでいる。

その認識だけが、辛うじてマシロの意識を繋ぎ止めた。

「どこにいるんですか……!?」

誰の声かは分からない。

ただ、必死なのは伝わって来る。無我夢中で声を鳴らして、自分の事を探している。

そんな事をすれば、近くのモンスターを呼び寄せてしまうかも知れないのに。

そんな危険を冒してまで、どうしてそんなに頑張っているのだろうか……。

「助けて下さい！……このままじゃ……ベル様が……！」

ベル………？

その人名を、マシロは臍げに反芻した。

ベル……白い……兎。

目は、きつと紅い。

声の主は、白兎を知っている。

白兎の為に必死になっている。

白兎の為に、自分の事を探している………？

だったら、その兎は、きつと牛の化物に食べられそうになっているんだろう。

まるで………ベル、みたいだ。

ミノタウロスに襲われている、ベル・クラネル……。

ベル・クラネル………？

「………!?」

瞬間、弾かれた様に、マシロの意識が浮上した。

鉛のように重かった瞳は、ギリギリ物を識別できる世界を映し出す。ゼエハアゼエハアと、半ば供給の途絶えていた酸素を、急ピッチで肺に送り込んでいく。お陰で、体中の細胞がどうか目覚め始めた様だった。肉体は依然として動かないが、その原因は重すぎるから。つま

り、感覚自体は戻っている。

「この……声……。リリルカ・アーデ、か………？」

あの犬シアンスローフ人が、必死になってマシロの事を探している。ベル・クラネルに、救援を差し向ける為に。マシロには、その事実が信じられなかった。

だって、リリルカ・アーデは、ベルのナイフを狙う敵である筈だから。奴は、金目の物を狙って、ベル・クラネルに近づいた筈だから。

「お願いです……！　なんでもしますから……あの人を助けて下さい！」

けれど、幾ら否定しても、事実としてリリルカの声は兎の救助を求めていた。

そこに、打算や欺瞞は感じられない。本心から、ベルを助けたくて喉を枯らしている。

マシロには、とても受け入れがたい現実だった。

なんだそれは。

ふざけるな。

お前は、そんな奴じゃないだろう？

新米の冒険者をカモにし、陥れ、食い物にする。

そんな下賤な存在じゃなかったのか。

「リトル・アイズ」様あああああ!!」

「……………」

ガリツと、マシロは右手の爪で地面を搔いた。

頭に浮かぶのは、恥ずかしそうにはにかむ白兎の顔だ。

ふざけるな、結局お前も、アイツに絆されたって言うのか……。

利用する為に……その前提で近づいてきた癖……そんなお前すらも……。

ざまあない。マシロは心の中で自嘲する。

俺も、お前も、どいつもこいつも、結局アイツの善性には敵わないって事だ。

皆、アイツの事が好きになる。嫌いになんてなれない。それくらい、ベルは心が綺麗なんだ。

……アイズだって、きつと、そんなベルの事が好きになる。そもそも、今、彼らの関係が希薄なのは、マシロが無理やり介入して引き離しているからだ。本来、接点など持てる筈のない『第一級冒険者』と『新米冒険者』が隠れて特訓をしていた。その事実一つを取っても、アイズとベルが強く引き寄せられている事は疑うべくもない。きつと、マシロ邪魔者さえ消えれば、2人の道は自然とまた交わるのだろう。

そして、2人で幸せな未来を歩いて行くのだ。どこまでも、どこまでも、どこまでも。

俺はもう、ここから出られないというのに……。

——それは、くやしいなあ……。

マシロは、声にならない眩きを漏らした。

アイズは英雄を求めている。

決して自分の前から居なくならない、ずっと自分の横に並び立ってくれる、自分だけの英雄を——。もしかしたら、ベルがそうなのかも知れない。そう成りえる何かを感じ取ったからこそ、稽古をつけていたのかも知れない。

ならば、真実、ベル・クラネルはアイズ・ヴァレンシユタインの運命英雄の相手なのだろう。

実際、そうなるだけの可能性は秘めている。

奴の才能は……成長速度は、それくらい『規格外』だ。

本当は、喜ぶべきなのだろう。真に姉の幸せを願っているというのなら、将来性抜群の王子様の出現を、もろ手を挙げて祝うべきなのだ。でも……。

それでも、悔しいモノは悔しい。

自分は今、ここで死ぬというのに。

アイズ姉に会う事が出来なくなるのに。アイズの隣に立って、いくらでも笑い合うことの出来るベルが……羨ましくて仕方ない。これは非常に複雑な弟心だった。自分でも面倒臭い自覚はある。けれど、面白くないと思わずにはいられない。ベルが良い奴だと分かっているが……これは理屈ではないのだ。

『じゃあ、みすてようよ』

そう、耳元で幼いマシロが呟く。

リリルカ・アーデの声を無視して、立ち上がらず、ここで惨めに朽ち果てればいい。そうすれば、十中八九ベルも死ぬ。運よく上級冒険者に救われる可能性もあるが、それは希望的観測というものだろう。

そうだ。それでいい。いいじゃないか。

マシロ・ヴァレンシユタインは、直じきに死ぬ。それが避けられない程、既に血を失った。数時間以内にベ足ートの速速・ローガ冒険者辺りに発見され、可及的速やかに治療院に担ぎ込まれた上で、塞がらない傷口から無限に流れ出てしまう血を、スキルが切れる迄永遠と提供してくれる変わり者がいれば話は別だが、そんなご都合展開には恵まれないだろう。生きて帰りたいと願ったが故に使ったスキルが、逆に自身の命脈を断つ決定打となってしまった。なんとも皮肉な話だ。

とにかく、死ぬのだ。

それは、ベルを助けようが助けまいが変わらない。

どっちにしても、マシロがアイズと言葉を交わせる機会を訪れない。

『じゃあ、みすてても、いっしょだね』

「……だまれ」

幼い自分の舌足らずな囁き。甘言。

それを、マシロは拳を握りしめて押し潰した。

確かにそうだ。一理ある。

子供ガキの意見の癖に筋が通っている。

でも、それじゃあ、駄目なんだ。意味がない。

気が変わってしまった。このまま犬死にする訳にはいかない。

『どうして？』

大きなまんじゅう頭が傾いた。

素で分かっている様子、キョトンとした大きな瞳が腹立たしい。マシロは、矜持も何も備わっていない『守られるのが当たり前』の

甘ったれた馬鹿餓鬼を睨みつける。

だって、悔しいじゃないか。このまま死んだら。俺は、何も残せない。

『のこす？ なにを？』

……アイズに英雄ベルを……。

いや、違う。そんな殊勝な理由じゃない。また格好をつけた。未だいま抜けきらない悪い癖だ。

マシロは改めて内心と向き合って、そして嘘偽りない本心を語った。

残したいのではない。残りたいのだ。

誰かではなく、アイズの記憶に――。

忘れられるのは嫌だ。

『私の弟は誰かを助けて死ぬくらい立派な子だった』って、姉さん褒めて貰いたい。

『私の弟がマシロ・ヴァレンシユタインで良かった』って、そう思っ貰いたい。

『ベルを残してくれてありがとう』って……。

せめて……最後の最後まで足掻いて、そんな死に方が出来たなら――
——この犬死にも少しくらい意味が生まれる気がするから。

『うわ、きもちわる』

過去の自分に最大限の嘲笑を浴びせられる。

マシロ自身、これが酷く自己中心的な願いである事は分かっている。

言われるまでも無く、気持ちが悪いのは重々承知だ。

ベルだって、こんな奸計塗れで助けられたくはないだろう。

けれど、それでもマシロは止まらなかった。

グツと、手足に力を入れる。痛い。軋む。

少しでも動かさうものなら、全力で骨と筋肉が反発してくる。でも、無理やり叩き起こした。全身に雷が落とされたような激痛と衝撃が走るが、まあ、良いだろうと思う。どうせ、死ぬのだから、どれだけ痛くても怖くない。これ以上壊れても、困らない。ベルを、ミノタ

ウロスから逃がし切るまでの間だけ、持たせれば良いのだから。

マシロは、ズルズルズルズルと足を引きずり、壁に血の尾を引きつつ、声のする方へと歩いて行った。

「うるせえぞ……リリルカ・アーデ……。キズに響くから、すこし……だまれ」

依然としてこの周辺で絶叫を上げ続けるサポーターの少女に、聞こえないと知りつつも悪態を漏らしながら、最期に、自分のエゴで命を使い切る為に――。

：

：

「……まさか、本当にひとりで斃してしまうとは」

時を少し戻し、ダンジョン37階層。

マシロがアレン・フロームルの妨害を振り切り、猛進の果てに風の精霊に見放された瞬間より僅かに間を置いた頃、リヴェリアは単独で階層主を討伐してみせたアイズに対し、深い深い嘆息を漏らしていた。

最後、『エアリエル』の謎の超強化があったとは言え、これは間違いなく『偉業』を成したと言えよう。心なしか、此方に向かって歩いて来る娘の顔も晴れやかだ。まあ、階層主の単独撃破でも満足しないのなら、一体どうすればいいのかという話だが。

リヴェリアは改めて金の少女の全身を視る。

無傷ではない。体力の消費も著しいだろう。

けれど、決して満身創痍ではない。寧ろ、達成した偉業に対して傷が少なすぎるくらいだ。それもこれも、全てがああ『エアリアル』の超強化現象のお陰だろう。かつての闇派閥との大抗争に於いて、冥府からの怪物種相手^{モンスター}に纏った『黒い風』に勝るとも劣らない暴風は、決してアイズの肉体を蝕まず、敵対する階層主のみを討滅してのけた。『ウダイオス』により遣わされた無数の雑兵^{スバルトイ}は、ゴブリンかコボルトの様に薙ぎ払われ、厄介な地中からのパイル攻撃も、暴風の壁により砕かれる。正直、ほんの少しだけ骸の王に同情してしまっただけくらい

だ。

ギルドの定めたウダイオスの推定レベルは『6』。そして、アイズはLv. 5。だが、アイズが暴風を纏ってからは、その力関係がそのまま逆転してしまったと言って良いだろう。否、それまでに蓄積していた【剣姫】へのダメージが無ければ、その差はもっと顕著になっていた筈だ。とにかく、骸の王はアイズの手によって、割と容易く打倒された。戦いを終えた今でさえ『エアリエル』強化の理由には見当も付かないが、無事に帰って来たアイズをリヴェリアは安堵しつつ迎え入れる。

「よくやった、アイズ。少しは気も晴れた様だな」

「うん……」

若干バツが悪そうに頷く愛娘に最高級のポーションを手渡し、口を付けている最中、問いかける。

「今更だが、どうしてこんな無茶をした？ 予想はできるが、お前の口から聞いておきたい」

「その……」

青い液体を飲み干したアイズは、湿った唇を小さく動かした。そこから紡がれる弱々しい声に、リヴェリアは黙って耳を傾ける。

「私……この前、シロと話したでしょ？」

「ああ」

やはり、それが原因だったか……と、リヴェリアは密かに頭を抱えた。

ともすれば、マシロとの和解が失敗した・という事になるのだろうが、正直そこが解せない。他派閥の神からの助言があったとは言え、自分の頭で考えに考え抜いた上での彼女の決断は本物だった筈だ。そこに打算や保身はなく、本気で弟との関係修復のみを望んでいた。

その気持ちは、ちゃんとマシロにも伝わっている筈である。彼は頑固で気難しい質だが、決して愚か者ではない。アイズの勇気に応えられるだけの度量は十分に育っている。

しかも、団長フインからの弁を聞くに、マシロは例の支払いの件に関して、別に腹を立てている訳ではない様なのだ。ただ引っ込みがつかない

為に反発してしまっているだけ。本心では、姉との和解を望んでいる印象すら受けたと言う。

けれど、この結果を見るに、それらは全て自分達の都合の良い願望だったのだろうか……？

「私、ちゃんと謝ったの。でもね、気にしてないって……。そもそも酷い事なんてされてないって、そう言われた……。だから、謝るなって」

「！」

それは、一見優しいように見えて、実は真逆の対応だ。

ただ謝罪を拒絶されるのとは訳が違う。己の非を悔いている相手に対し、非の存在そのものを否定する等、残酷過ぎて笑いも出ない。懺悔すら許されなかった当時のアイズの心境を想像して、リヴェリアは胸が張り裂けそうになった。

「でもね。私、それでも何度も謝ったの……。なんでシロが怒ってるのかも考えずに、あの子が望んでもいない『ごめん』言葉をずっと吐き続けていた」

「……………」

「そしたらね。シロ、泣いちゃった」

「なに……………」

思いもよらない情報に、乾いた声が出た。

当然、文脈やアイズの様子から察する、その『泣いちゃった』は『嬉し泣き』という訳ではないのだろう。マシロはショックを受けて涙を流した。その認識で間違いない。

しかし、何に対してショックを受けたというのだろうか。そもそも、この件の真相に、悲しむ要素などある筈がない。

だって、アイズがマシロを避ける様になった原因は、リヴェリア達の『思春期の弟に構いすぎると嫌われるぞ』というアドバイスを聞き入れたからだ。つまり、マシロは姉から嫌われていた訳ではなく、寧ろ好かれていたから距離を置かれていたという訳で。脱力こそすれ、

憤る理由など何処にもない筈。

『お前の中の俺は、まだお前にベツタリだった頃の餓鬼のままなのか？ だから、ちよつとかまってやれば機嫌が直るのか？——』
「……………」

そんな事を考えていると、前触れなくアイズが誰かの台詞を諳んじ始めた。

マシロが発した言葉だと、気づけないリヴェリアではない。

『ふざけるなよ。そんな訳ないだろ。お前は自分を嫌ってる相手を、いつまでも好きでいられるのかよ』

「……………」

ジトツと、ハイエルフの肌に汗が滲み始めた。

気付いてはいけない、気付きたくはない。けれど、気付かなければならない真実に、緑の麗人の動悸が早くなる。

『お前にどんな事をされても、ちつとも悲しくない』

恐らくは泣きながら……………感情を剥き出しにして言い放ったのであろう慟哭を聞いて——。

『もう他人みたいなモンなんだよ。俺にとってお前はいつでもいい奴なんだ。なのに、なんで俺が傷つかなきゃならない？』

「あ……………ああ……………」

リヴェリア・リヨス・アールヴは、己の勘違いを根本から悟った。

途端に、欠片ながらも抱いてしまっていたマシロへの苛立ちが、跡形もなく爆散する。そして、明晰な頭脳で彼の思いの全てを察し、海よりも深い後悔に身を投げた。

平気だと思っていた。

アイズが急に距離をとっても、マシロは大丈夫だと。困惑こそすれ、大きなショックは受けていないと。平然と過ごしている彼を見て、そんな判断を下していた。

何が……………平気なものか……………。

大丈夫な訳が、あるものか……………。

そんな訳がないだろう。あれだけベツタリだった姉に急にそつぽ

を向かれて、心が傷つかない訳がないだろう——！！

それは、考えてみれば当然の話だった。

彼にとつて、アイズは残された唯一の肉親だ。常に寄り添い、両親喪失の悲しみから搦り上げてくれた張本人。アイズにとつてのマシロが、そうである様に世界の中心なのだ。

きっとアイズから冷たくされる事に、マシロは一瞬だって耐えられなかったのだろう。気にしていない風を装ってはいたが、その実、彼の心は常に蝕まれていたに違いない。

だから、自衛の為に己の気持ちを偽った——。

無意識の内に、『そもそもアイズなんてどうでも良い相手だった』
『だから、この現状に堪える点など一つも無い』と、そんなふうに思い込む様にして、己の心を守ったのだ。そうしなければ、どうにかなってしまいそうだから。

気付けない筈である。

リヴェリアはあるかフィンやガレス、果てはあのロキでさえ一杯食わされる訳だ。幾らロキと言えども、マシロ自身が本当だと本気で信じ込んでいる事は疑えない。

神や……自分自身すら欺き切る心の擬態。

そんな事をしなければ壊れてしまう程、アイズの拒絶は彼に絶望を与えたのである。

そして、その原因を作ったのは他の誰でもない、リヴェリア達自身だ——。

【九魔姫】は、Lv. 6の常人離れした握力で、己が拳を握った。柔らかい肌は容易く破れ、ジワつと鮮血が滲み始める。その痛みを脳に送り続けなければ、今にでも叫んで自身の喉を引き裂いてしまいそうだった。

つまりは、そういう事なのだ。

自分達が、余計な事をした。

アイズの為を思ってしまった『あまり構いすぎると嫌われるぞ』というアドバイスは、余計なお世話でしかなかったのだ。

無論、全くの見当違いだったとは思わない。

それくらい当時のアイズのスキンシップは『異常』だったし、実際、マシロも嫌がり始めてはいた。きつと、放置すればいずれ本当に嫌われてしまっただろう。今でさえ添い寝やら頬ずりやらに抵抗感を覚えていないアイズの姿を見るたびに、その予想は確固たるものになっていく。

そう……問題なのは助言の内容なんかじゃない。

真に不味かったのは、足りなかったのは——その後のリヴェリア達の対応だ。

どうして、マシロの変化をおかしいと思えなかった？

何故、たったの4日で姉からの拒絶に折り合いをつける事の出来たあの子の心情に疑問を覚えなかった？

なんで、簡単に騙された？　なんで、無理をしていないと安堵した？

どう見ても急すぎるアイズへの関心の消失に、どうして警鐘を鳴らせなかった？

お前はいつたいあの子の何を見て来たんだ……。

すんなり受け入れられたこと自体が、『異常事態』だと何故気付かない——!!

リヴェリアは、アイズやマシロの母親ではない。

けれど、ヴァレンシユタイン姉弟を「ロキ・ファミリア」に迎え入れてからは、曲がりなりにも実の子供の様に接して来た。少なくとも、リヴェリア自身はマシロの事を本当の息子の様に想い、愛していた……つもりだった。

——ふざけるな……ふざけるなよ、リヴェリア・リヨス・アールヴ……!

——なにが、息子だ……!　何が母親だ……!!　戯言を抜かすな、恥を知れツ!

——本当にマシロの事を想っているのなら、何故あの子の痛嘆を分かってやれなかった?!　何故、あの子の偽りにむぎむぎと騙された

!?

——ロキすら欺いたマシロの偽心を賞賛すべき……!! ああ、そう
うだ！ 全く以てその通りだ！ 神でさえ見通せなかったその本心
を、私如きが推し量れる道理はない！

——それが何だ!! お前はあの子の母親なのだろう!! そう自
負していたのだろう!! だったら、己さえ気づけぬあの子の本心ぐら
い悉く見透かせてみせろ！ そんな事も出来ずに母を名乗るな！

——結局、お前はアイズとマシロの仲を引き裂いただけだ！ 双
方の心に傷を作って、悲しませているだけだ……!!

——何が、アイズ自身が解決しなければならぬ問題だ!! 無駄
に事態を引つ掻き回して、悪化させた癖に、上からモノを言うとは何
事だ……この厚顔無恥なハイエルフが……!!

リヴェリアは、雪色の肌を真赤にしながら、考えつく限りの罵倒を
自分に浴びせる。

俯いているアイズは、まだその変化に気付いていない様だ。当時の
事を想い出しながら、自嘲するように言葉を紡いでいる。

「私ね、バカだから、そんな風に怒鳴られてやっとなつて気づいたの。ああ、
この子は怒ってるんじゃないやなくて、悲しんでるんだって……」

ああ、そうだろう。

悲しかったのだ。淋しかったのだ。

怒鳴って当然だ。

しかし、それはアイズではなく、リヴェリア達に向けられるべきも
ので——。

「結局、私、ずっとシロのこと傷つけてたんだよね……? 4年間も、
ずっと淋しい思いをさせていた。なのに、私は何よりも先に自分の要
件を優先した……」

『自分の要件』とは、支払の件の謝罪を言っているのだろう。アイズか
らすれば、そこに真っ先に手を付けるのは当然だ。彼女の視点では、

マシロを怒らせている一番の要因なのだから、最初に触れておくのが寧ろ誠意と言うものだろう。

けれど今回ばかりは、その極々真つ当な考え方が悪い方向に作用した。

マシロが求めていたのは謝罪などではない。

そもそも、そこにマシロの意識は向いていない。

彼が本当に求めていたのは、助けた。

本当は、アイズと仲直りしたい。どうして自分から離れて行ったのか……何がいけなかったのかを教えて欲しい。そう思っている。

けれど、完璧に心を偽っているマシロには、心がそう叫んでいる事に気付けない。

リヴェリアは、全身から力が抜けていくのを感じた。

純粹に、これは無理だと思ったからだ。

アイズはマシロに負い目を感じている。だから、『まだ弟が自分の事を求めてくれている』とは考えない。故に、謝罪より先に、仲直りしたい旨を伝えるなどと言う、そんな不誠実な行動には出られる訳がないのだ。

けれど、今回ばかりは、その不誠実こそが正解だった。

皮肉な話である。マシロに対して誠実に向き合っていたからこそ、アイズは和解のチャンスを逃したのだから。

「そんな私が、シロの側について良い訳ないよね……」

「……………は？」

突如、眩かれた囁きにリヴェリアは思考がショートした。

「そんな資格、あるわけない」

「……………なにを言っている、アイズ？」

「ごめん、リヴェリア……。せっかく手伝ってくれてたのに……。色々、作戦を考えてくれてたのに……。でも、もう、いいから」

「おい……………」

「私、シロとの仲直り、あきらめる」

「……………!!」

アイズの頬を伝うキラキラと輝く涙。

それは、こんな陰鬱とした迷宮の中では、まさしく宝石の様に感じられた。

諦念を孕んだ作り笑いが、震える声が、少女の儂さをいつそう浮き彫りにする。

今にも透けて消えてしまいそうな程に弱々しい。

ここで食い止めなければ、この子は駄目になってしまう。冒険者としても、アイズ・ヴァレンシユタインという少女としても……。

そう思った時には、リヴェリアは既に動き出していた。強引に、エルフラしからぬ形相で、ガツと愛娘の両肩をガツシリ掴む。

そして、目を丸くする金の少女に、緑色の麗人はあらん限りの声で叫び掛けた。

「諦めるだと……？ そんな世迷言、二度と口にするなッ!!」

「え……？ え？」

「あの子を傷つけていたのは私達だ！ お前ではない……、お前な訳があるものか……！ 悪いのは我々だ……ッ！ 許される資格がないのは、この私なんだ……！」

「り、リヴェ——」

「罵れアイズ！ 全てお前達の所為だと！ お前が余計なことを言わなければ、あの子を傷つける事はなかったと！ 私を唾棄しろ！ 蔑め！ 弟を傷心させる原因を作った諸悪の根源に、お前の考えつく憎悪の言葉の全てを浴びせろ！」

懇願する様に叫ぶリヴェリア。その姿に、普段の冷然とした面影は欠片も感じられなかった。らしくないのは自分でも分かっている。けれど、止まらない。エルフ由来の潔癖症が、理性より早くリヴェリアの身体を突き動かす。

「ま、待って、リヴェリア!! 別にリヴェリアは悪くない！ リヴェリア達のアドバイスが無かったら、私は鬱陶しがられて嫌われてた！」
「そうになっていたとしても、今の状況よりは遥かにマシだ！ 少なくとも、あの子が泣くほど傷付くことはなかった！」

「でも、その場合は私が嫌われて傷ついてた！ ソレが分かってたから、アドバイスをくれたんでしよう!! 私に悲しんで欲しくなかつ

たから……そんな優しいリヴェリア達を、どうして責めなけなきやいけないの!？」

「ああ、そうだ！ お前は傷付いていただろう……！ 悲しんでいただろう！ だから我々は、お前を優先した！ 無意識の内に、お前の方がファミリアにとって重要な存在だと勝手に優先順位を付けて、あの子の気持ちを無視した！ これの何処が『優しい』と言うんだ!？」

「そんなの捉え方の問題でしょ!？」 どうして、そんなに自分を悪者にするの!？ 私がリヴェリア達という『丁度いい接し方』をうまくできていれば、シロを傷つけることもなかったのに!？」

「お前は……!？」 どうして……!？」

そんなにも、優しいんだ。

お前こそ、どうしてそんなにも自分を悪者にするんだ。明らかに、もつと悪い奴が目の前に居るじゃないか。そいつに全てを被せてしまえば、潔白でいられるというのに……。

リヴェリアは一転して、そつとアイズの身体を抱き包んだ。

そして、耳元でゆつくりと囁く。

「お前がなんと言おうと、悪いのは私だよ。何度でも言おう。今回の件、お前に責任はない。その接し方の問題にしたって、困惑するあの子を、私達が根気強くフォローしておけば良かっただけの話なんだ」

それこそ極端な事を言えば、全ての事情を話してしまえば良かったのだ。

アイズがお前に構わなくなったのは、構いすぎてお前に嫌われるのを阻止する為。

そう知らせておけば、マシロが傷心する事はなかっただろう。

そして、物理的に接触がないのだから、過度なスキンシップによって嫌われる危険性も皆無。

少々不格好な形ではあるが、これでも十分な成果は得られた筈だけれど、そうしなかった。

愚かにも、マシロは大丈夫だと、勘違いしてしまったから――。

「すまない、アイズ。本当に、すまない……。勝手な言い分なのは分かっている……。だが、言わせてくれ」

「リヴェリア……?」

「あの子を……マシロを、諦めないでやってくれ……」

「!」

「勿論、あの子がお前の言葉を信じられなくなってしまった原因は私達だ。だから、これは私達の尻拭いをさせる形にも、凶らずもなってしまうのだろう」

「……………」

「きつとお前の言葉は、中々あの子に聞き入れて貰えないだろう。我々が付けてしまった傷は、あの子を際限なく疑心暗鬼に導くだろう。そんな状況で、根気強く声を掛け続けるのは、きつと想像以上に辛い」

本当に、お前は何様だ。

何も悪くないこの子に、そんな道を歩ませようとしている。本来なら、何に変えてもマシロを説得し、アイズと仲直りさせるのが筋というものだろう。

しかし、マシロが望んでいるのはリヴェリアの説明ではない。きつと自分の声は、あの子には届かない。けれど、アイズの想いならきつと届く。

要するに丸投げだ。余りにも情けない。己の失態を娘同然の少女に拭わせようとしている自分に、どうしようもなく失望する。

だというのに、アイズはこんな私の言葉を真剣に聞いてくれているのだ。

良く出来た子だ。

本当に、私などには勿体ない……。

「だが、それでもお前は……お前だけは、あの子に寄り添ってやってくれ。お前はあの子の希望なんだ。だから——」

「リヴェリア……」

続く言葉は、アイズの声によって遮られた。

祈る様にギョツと目を瞑っていたリヴェリアは恐る恐る顔を上げる。

そこには、穏やかに……しかし力強く微笑むアイズの姿があった。

金色の瞳から、目が離せない。

霧が晴れたような彼女の表情は頼もしく、この時ばかりは年上にさえ感じられた。

そのぐらい、覚悟を決めたアイズ・ヴァレンシユタインの姿は眩しく、リヴェリアの目には鮮烈に映った。

——ありがとう。

形の良い柔らかな唇が、そう囁いたような気がした。

第二十五話

「もう……これ以上、マシロ・ヴァレンシユタインに助けられる訳には、いかないんだッ！」

「リトル・アイズ」の仲介を拒み、猛牛へと挑みかかったベル・クラネルの姿に、リリルカ・アーデは頭を抱えて青ざめた。

マシロ・ヴァレンシユタインとの奇跡的な合流を果たし、その凄惨な姿に彼を白兔の元に送り届けるという目的を見失いそうになりつつも、それでも『死ぬ前に連れていけ』という懇願を聞き入れ、肩を貸しつつここまで戻って来た矢先の出来事だ。

残り少ない力を振り絞って両者の間に割って入り、兔を斬撃から守った「リトル・アイズ」。ベルはその姿を何やら震えた様子で眺めていたかと思うと、唐突に救援の手を押しつけ、冒頭の台詞を吐いてミノタウロスに立ち向かっていったのだ。

激しい戦闘が繰り広げられる。押され気味ではあるものの、互角に見える。

また、成長している……。

その事実には驚愕しつつも、やはりリリルカは心の中でベルの事を罵倒した。

いったい何をしているんだ？

これで、お前がミノタウロスに殺されたら「リトル・アイズ」が無駄死だろう。最期に、死にゆく同業者に華を持たせてやろうという気は欠片もないのか。

確かに今のマシロ・ヴァレンシユタインに勝ち目などない。戦えば、間違いなく殺される。けれど、それはベルが戦い続けたとしても同じ事。この出血量ではどのみち助からない。戦って死ぬか、血を失いすぎた末に出血死するかの違いでしかないのだ。

だったら、マシロに戦わせてやるべきだろう。

彼に死に場所を与えて、自分達は速やかにここから離脱するべきな

のだ。他でもない、「リトル・アイズ」自身がそれを望んでいるのだから。それが、少年の命を無駄にしない唯一の方法だと言うのに……。

リルルカは、恐る恐る死にゆく冒険者の顔を窺った。

彼は今、絶望しているのだろう。

せつかくここまで来たと言うのに。リルルカの喚声によつて導かれ、行く手を阻む為に迫りくる怪物共を斬り捨て、更なる傷をその身に負いながらどうにか辿り着いたのに。最後の最後、よりにもよって助けようとしていた兎自身に役目を奪われてしまった。きつと、やるせなさのあまり、呆然と戦いの行方を眺めているに違いない。

けれど、実際に目にした彼の顔は、想像とは少し違っていた。

視界が捉えるのは大きく見開かれた銀色の瞳。その双眸には、仮借の無い驚愕と……少しの熱が込められていて――。

「……………え？」

熱……？ と、彼女は再びマシロの目を見遣った。

やはり、見間違いではない。彼は消沈などしていない。絶望もない。諦念すらもない。

ただ、食い入るように何かを見ていた。見て、心を躍らせていた。

「い、いったい、何を……」

視ているのかと、リルルカも其方に顔を向ける。

即ち、ベルとミノタウロスの戦いに。

そして、意味が分かった。

「す、すごい」

思わず感嘆が漏れる。

ベルは、死闘を演じていた。圧倒的な格上を相手に、怯まず、果敢に、勇敢に、雄叫びを上げていた。攻めあぐねる猛牛の姿に、如何に兎の猛攻が激しいのかが分かる。サポーターの、リリにすら分かる。Lv. 1の域を逸脱した驚異的なステータスにモノを言わせた強引な戦法ではない。これまでの「リトル・アイズ」の教えを実践し、時には応用し、見事にモンスターを翻弄している。そうして生まれた隙に、戦略の欠片もない重い一撃を叩き込んで、確実に体力を削っているのだ。

「……………」

マシロ・ヴァレンシュタインが目を奪われる訳である。

ベル・クラネルは、今、冒険をしているのだ。

英雄の雄叫びを上げ、魂を燃やしている。

そんな彼の戦いに、どうして割り込めよう？ 何故、同業者が邪魔できよう？

「ファイアボルト……………」

大剣を奪い、その刀でミノタウロスの身体を袈裟切りにした兎は、例の黒いナイフを奴の胸に突き立て、無詠唱魔法を発動させた。神聖文字の刻まれた刃によって灼熱の炎雷が、エネルギーロス無しに猛牛の体内に送り込まれる。

『ゴおおオオオオオオ——！！』

絶叫が、ルームに響く。

無理もない。体の中から魔法で焼かれているのだ。

でも、流石ミノタウロスと言えよう。並のモンスターなら一発で消滅しかねないその非道な攻撃に、普通に耐えている。けれど、兎の手は…………いや、口は止まらない。

「ファイアボルト……………」

もう一撃、化物の体内が炎と雷に荒らされる。

当然、悲鳴が上がる。

けれど悲しいかな。猛牛はまだ倒れない。その馬鹿げた耐久が、まだ彼を楽にはしない。

「ファイアボルト……………」

三撃目。

ようやく、ミノタウロスの肉体が内部から火照り始めた。牛の口から、白い煙が漏れ出る。

が、まだ死なない。

「ファイアボルト……………」

ゴホツと、灰色の煙と共に、黒い血がモンスターの口から溢れ出た。

死んではいない。けれど、もう死ぬ。

そう、リリルカが確信したのと同時に——。

「ファイアボルトオおおおオ——!!」

声帯をはち切らんばかりの叫喚。

それと、内部から無牛を喰い破り破壊した魔法の炎上音が、木霊した。

モンスターの脂を可燃材に有り得ないほどに燃え盛る橙色の炎が、仄暗いダンジョンを染め上げる。そんな綺麗な姿とは裏腹に、炎雷はミノタウロスの亡骸を容赦なく燃やし尽くした。残されたのは、魔石と、静寂と、焦げた空気。そして、立ったままピクリとも動かない、ベル・クラネル。

「べ、ベル様……?」

恐る恐る近づき声を掛けるも反応はない。

それもその筈だった。回り込み、少年の顔を覗き込んだりリルカは理解する。

「ぎ、気絶……してる」

「立ったまま、マインドダウン精神疲弊……か。器用な……やつ……だ」

少々呆れたような声と共に、背後からドサツという音がした。

振り返ると、地面に崩れ落ちたマシコの姿が目に入る。ベルの戦いを見届け精魂尽き果てたのか、身体からみるみる力が抜けていくのが分かった。

「[リトル・アイズ]様……」

憐憫を孕んだ声に、銀の子供は反応しない。

まるで脱け殻になってしまったかの様な彼に、リルカにはかける言葉が見つからなかった。

正直、同情する。ベル・クラネルが自力で危機を脱した以上、彼にはもうするべき事がないのだ。後はただ、黙って息絶えるのを待つのみ。

正に道化である。兎を猛牛から救わんと、瀕死の重傷さえおして駆け付けたと言うのに、救援の手を兎本人から拒まれて、たった一人で過酷を乗り越えられてしまったのだから。

結局、すべて不要だったのだ。なら、最初から此方へは向かわず、地上を目指せば良かった。そうすれば、もしかしたら助かっていたかも

知れない。

無論、ベル・クラネルは何も悪くない。彼はただ守ろうとしただけだ。マシロの『矜持』ではなく、『命』を。その命が、既に手遅れだったというだけで……。

リリルカは、グツと唇を噛み締めた。

冒険者の死には慣れていて。立ち会った事だつて何度もある。

そもそも、死と隣り合わせの職業だ。だから、いちいち知己の死に、心を痛めたりなんかしない。

でも……。

それでも……、自分より3つも年下の子供の死に、何も感じない訳では無かった。そのぐらいの人間性は残っている。その事実には、秘かに驚く。

「……どうして、ですか……?」

気が付けば、訊いていた。

多分、もう耳は聞こえていない。届いたとしても、口をきける気力があるとは思えない。それでも、リリルカは尋ねずにはいられなかった。

「逃げれば良かったじゃないですか……? 見捨てれば良かったじゃないですか……?! リリも! ベル様だつて! 貴方にとつては一月にも満たない関係だつた筈でしょう?!」

どうして、自分はこんなに彼を責め立てているのだろう。今にも息を引き取りそうな子供相手に。本来なら『頑張りましたね』と、『勇敢でしたよ』と、労いの言葉をかけてやるべきなのだ。所詮他人なのだから、そんなお為ごかしでお茶を濁して、彼に最後の安寧とやらを与えてやるべきだろうに……。

だというのに、何故こんなにも感情を剥き出しているのだろう。

これではまるで、自分がマシロ・ヴァレンシユタインの死に心を痛めているみたいではないか。

「なのに、傷が治らなくなるスキルまで使つて……! 無理矢理に身体を動かして……そんな事をしなければ、助かったかも知れないのに……! ここまで血を流す前に地上に戻っていたら、間に合ったかも

「知れないのに……！」

グチャグチャの、もう殆ど温度のない小さな右手。それに触れてようやく、少女はマシロに駆け寄っていた事に気が付いた。

「何なんですか貴方は……?! 他人の為に自分を犠牲にするとか……英雄譚の主人公にでもなったつもりですか?!」

「痛かったでしょう?! 怖かったでしょう?! 泣き叫びたかったでしょう?! 恐怖に打ち震えて、みっともなく逃げ帰ったって良かったんです! そんな貴方を責める人なんて誰も居やしない!」

「なのになんで……ッ! なんで、あの時リリを助けたんですか?!? なんで、ベル様を見捨てなかったんですか?!? 貴方にとって、ベル様ってなんなんですか?!?」

捲し立てる様に、積もりに積もったモヤモヤをぶちまけ、肩で息をするリリルカ・アード。その栗色の瞳からは、いつしか大粒の雫が流れだしていた。それらが間断なくマシロの手に落ちては溶ける。いけないと思いつつも、彼女にはどうしても止められない。

「………知る…かよ………」

「………」

抑揚のないかすれ声が、鼓膜を撫でた。

顔を上げると、「リトル・アイズ」の口元が僅かに動いている。

「でも………そうしなきゃって………思っちゃったんだ………」

「………馬鹿………なんですか………ッ」

そうだな。と、銀の子供が笑った気がした。

リリルカは項垂れながら涙をぬぐう。これから自分がしなければならぬ事を自覚しつつも、彼女はへたり込んだまま動けない。

本来なら今すぐにでも、ベルにポーシオンをかけて叩き起こすべきなのに。そうして、確実に脱出しなければ、マシロの努力が無駄になるのに。だというのに、動かない。まるで、涙と共に、全身の力が出て行ってしまったかのようにだった。

「ほら、なにやってるのさ？ 早く、ベル・クラネルからナイフを奪いなよ」

「――」

突如……。

何の前触れもなく。

ヌルツと聞こえて来たその声に、リリルカ・アーデは怒りを覚えた。生暖かい息が顔にかかる。

さも当然の様にそこにある不気味な気配に、奴が現れたのだと理解する。リリは、視線すら向けずに問いかけた。

「……………マシロ様には、手を下せないじゃなかったんですか？」

「うん？ なんの話だい？ リリルカちゃん」

「とぼけないで下さい……………。これ、貴方がやったんでしよう？」

滔々と問いかける。

自分の斜め前、マシロの真横に居るだろう男に対して、驚くほど冷たい声が出た。

対して、男は「うーん」と唸りながら首を捻る。

フードで碌に見えない口元に、人差し指を当てる仕草をしながら。

「これって…………『コレ』の怪我の事？ だったら違うよ？ 濡れ衣さ。

僕だってビックリしてるんだよ。いやあ、困った困った」

「困った…………ですって？」

いけしやあしやあと言う男に対して、リリルカは顔を上げて目尻を吊り上げた。

瞳に映るのは、やはり路地裏で遭った件の冒険者だ。つまり、マシロの事を異様なまでに憎悪していた人物。そんな奴が『濡れ衣』だと

主張して、誰が素直に信じようか。

しかし、そんな此方の心情もお構いなしに、男は痛い所を突いて来る。

「ていうか、なんで怒ってるのさ？ 君にはそんな資格ないだろう？

アーデちゃんも『コレ』の失脚を望んでいたじゃないか」

「……………ッ」

「それとも、いざ死にかけてるトコ見て、同情しちやった？」

「それ、は…………」

リルルカは深く言い淀んでしまった。

指摘された通り、彼女はマシロの存在を疎ましく思っていたからだ。故に彼に対しての情は一切無く、寧ろどうやって排除するかを考えていたぐらいである。その中には、実現可能かどうか別にしても命を奪いかねない作戦も含まれていて…………。

そんな自分が今更「リトル・アイズ」の死に狼狽える等、確かにどうという見かという話である。

「でもまあ、無理もないよねえ。こうやって見ると、『コレ』は本当に只の子供だもん。一般的に大人の死より子供の死の方が心理的なストレスが大きいとも聞くし、そういう意味じゃ、リリちゃんがシヨツクを受けるのも仕方がない。けど…………騙されちゃあいけないよお？」

ガシリと、骨にひびびでも入れるつもりなのかという程の力で、男はマシロの顎を掴んだ。そして、ほとんど意識のない彼を、乱暴に引き寄せる。

「ちよ……………」

引き寄せて、リルルカの眼前で、マシロの顔を固定した。

「それはさ、『コレ』の術中なんだよね。ほら、冒険者に年齢は関係ないって言っても、やっぱり大人と子供じゃ扱いに差があるでしょ？ それで、子供の中でも小柄な方が同情を誘える。可哀そうって、思っただけでいいよ」

「…………なにを…………言ってるんですか？ まさか、「リトル・アイズ」様が小柄なのは、皆の同情を引くためだと…………そんなイチャモンを付けているんですか…………!!」

「イチヤモンじゃないよ、事実だよ」

「……………ッ！」

フード男の意味不明な言い分に、改めてリリルカは戦慄を覚える。奴がマシロを嫌っているのは知っていた。狂った思考回路の持ち主だという事も。けれど、ここまで理不尽な言いがかりをつける程とは思わなかった。きっとこの男は、「リトル・アイズ」の『何か』がというよりも、『存在そのもの』が許せないのだろう。いったい過去にどれだけの恨みを買ったというのか……。まあ、常人には理解の出来ないほどの些細な諍いで、ここまで怒りを募らせている可能性も否定できないが。

「放して下さい……マシロ様を」

「え？ 『コレ』を？ なんで？」

キョトンと聞き返して来るフードがゆっくりと傾く。

本当に、いちいち癩に障る仕草だ。まるで、自分のことを可愛いと思っている勘違い女のように……。それを男がしているのだから始末に負えない。

鳥肌を立てつつそんな事を考えていると、不意に、なんの躊躇もなく、男の手が開かれた。まるで手を放す気が無い様な態度を取っていたクセに、あっさりとは。

「……………ッ！」

落下するマシロの頭を、リリルカは大慌てで抱き留めた。

間に合った事に安堵しつつ、男を睨みつける。

けれど奴は、か弱いサポーターに凄まれても怖くないよでも言う様に、「あらら」と両手を広げてお道化る。それが悔しくて、でも立ち向かったって絶対に敵わないから、リリルカはグツと堪えてその場で吠えた。

「消えて下さい！ 『リトル・アイズ』がこうなった以上、貴方がここに留まる理由はない筈です！」

「いや、理由ならあるよ。でも、そうだね。モタモタしていると間に合わなくなるし、始めようか」

「……………！ 触らないで！」

ヌルリと、マシロに男の手が伸びる。咄嗟にそれを弾いて自身の背中に小さな冒険者を隠すと、奴は困ったような態度で愉しそうな声を発した。

「やれやれ、君の勘違いを解こう、リリルカちゃん。僕は死にゆく『ソレ』の無様を嗤笑しにきたんじやあない。『ソレ』の死に、意味を与えに来たんだ」

「……………え？」

「殺させに行くようなモノだと分かっているながら、ミノタウロスに『ソレ』をぶつけ合わせようとした君と同じだよ」

「何を……………言っているんですか……………？」

「ねえ、アーデちゃん。アーデちゃんは、『ソレ』がなんの為に産み落とされたか知っているかい？」

「……………」

聞いてはいけない。

そう、リリルカは思った。

今、奴が口にしようとしているのは、耳を塞ぎたくなるような……救いのない真実であると、直感が告げていた。

『それはね』と、男の唇が動く……………そんな光景を幻視しながら。

リリルカ・アーデは、その音を、自分の背後で聞いた。

ガツ。ボキ。クチャ。ブチブチ。

——え？

酷く耳障りな、それでいてどうしたら奏でられるのかが想像できてしまう、生々しい音。

それは、何かを噛む音だ。

硬い物を噛み砕く音だ。

肉を——噛み千切る音だ。

今も、絶え間なく流れて来る『咀嚼音』を聞きながら、リリルカはバクバクと鳴り響く心臓と共に後ろを振り返る。

「——」

そして、視てしまった。

目の当たりにしてしまった。

つい数秒前まで前方に居た筈のフードの冒険者が、さも当然の様に、後ろそこに居る。

背後ろ中に匿かくっていたマシロ・ヴァレンシユタインの右手を掴み上げて……喰くっている。

「な——ッ!？」

何をしてるんだ?! と、怒鳴りつけるより早く、反射的に身体が動く。

銀の冒険者を抱えて、大きくその場から飛び退いた。

改めて彼の右手を見てみると、根本から人差し指と中指が消滅している。

今は、フード男の口の中だろう。

その信じ難い事実に血が引き、眩暈を覚え、動機どうきの早まりを感じながら奴を見た。

奴は、マイペースに咀嚼音を響かせて、ゴクンと喉仏を鳴らす。そして、口元を拭く動作の後、日常会話と変わらぬテンションで答えた。

「僕に、食べさせる為だよ」

「……………」

「つまりは、家畜さ。僕に捧げる為の、僕専用の生贄だよ。だから、人間のリリちゃんちゃんが、ショックを受ける必要は何処にもない」

「……………」

「ホントはさ、赤子の時に食べる予定だったんだ。でも、色々あってね。折角だからLv. 4になるまで待つ事にしたんだよ。欲を言えばLv. 5まで泳がせたかったんだけど、『ソレ』が第一級冒険者になるなんて土台無理だろうからね」

本当に……本当にナチュラルに、男はマシロ・ヴァレンシユタイン

を食料の様に語る。

そして、それはある意味当然の感情なのだろう。コイツの言葉が事実であるならば、彼の親は、いつか喰われる事を了承した上で、マシロを出産したという事だ。

あの【剣姫】の弟として生を受け、最大派閥である【ロキ・ファミリア】に所属し、姉やその他有益な冒険者達の所為で目立たないものの、それなりにバグった速度でランクアップを繰り返したLv. 3の少年。

それが、リリルカのマシロに対する評価と認識である。

自分とは違い、随分と恵まれた少年だと、そう思っていたのに――

なんだそれは……。

幾ら何でも、惨たらしいにも限度があるだろう。

神ソーマ謹製の『神酒』に溺れ、娘を金を運ぶ道具としか見なかったりリリルカの両親。それに通じるものがある。その腹から産み落とされた自分と同類……いや、もつと悲惨な生い立ちだ。流石のリリルカも、産まれた瞬間から食い殺される運命など確定していなかった。アイズ・ヴァレン実姉シユタインとの仲が悪いのも、そういう事なのだろう。

正確に言えば、興味を持たれていないのだ。きっと、彼女はそんな様に育てられた。幼い頃から徹底的に、間違っても弟に情など抱かせない様に。

だって、そもそも、そういう前提で産んだから。マシロの両親が我が子と認識しているのは、第一子であるアイズだけだから。

「ま、とにかくそういう訳だから、早く『ソレ』をこっちに渡して？死ぬ前に食べちゃうからさ」

「……………嫌です」

「あー！でも、真面目な話、死ぬ前に食べきるのは無理だよ。只でさえ死にかけなんだし……。ぶっちゃけ、あと一口でタイムオーバーかなあ。ねえねえ、リリちゃん？何処を食べたら良いと思う？僕的には『脳味噌』か『内臓』が王道かなって思うんだけど」

「知りませんよ……っ！」

リルルカは密かに携帯していた簡易的な煙玉を地面に叩きつけた。そして、ぐったりとしたマシロを背負い、その異常なまでの軽さに瞠目しながらも大地^{迷宮}を蹴る。

「え!! わあ!?! ど、どどどどどどど、どうしたの、アーデちゃん!? どうして僕から逃げるんだい!?!」

白々しすぎる台詞が、前とも、後ろとも、右とも、左とも分からぬ場所から響いて来た。きつと、遊ばれている。奴はいつでも、リルルカを捕まえられる。でも、それでも彼女は、必死に距離を作ろうとした。

マシロはもう持たない。

寧ろ、何故まだ呼吸をしているのかが分からないぐらいだ。そこは、流石Lv. 3。器を2度も昇華させた上級冒険者の生命力というべきだろう。だが、それも既に薄氷だ。ボロボロの生命の糸は、いつ途切れても可笑しくない。

そして、マシロが死ねば、奴の目的も消失する。マシロを喰らって何が得られるのかは分からないが、少なくとも『生きたまま』喰う事に意味があると、言葉の端々からは感じ取れた。ならば、彼が息を引き取るまでの僅かな時間ぐらい稼いでみせよう。絶対に、この少年を奴の血肉の一部になんてさせない。そんな事は許さない。許容できない程度には、リルルカ・アーデはマシロ・ヴァレンシユタインに情が移ってしまった。

今、自分が冷静でないことを、彼女は嬉しく思う。平時通りの自分だったら、絶対にこんな馬鹿な判断はしなかった筈だから。

そんなふうに、自分自身を分析している最中――。

闇から……いや、白い煙の全体から、奴の声が届いた。

「んん、やっぱりここは『脳味噌』かな? 血を取り込むって意味じゃ内臓の方が良い気もするけど、人体で一番重要って考えたら脳な気がするし……。あ、離れてた方がいいよ、リルルカちゃん?」

「え?」

「もう、一分一秒も惜しいから――」

濃密な気配と共に、白い煙に黒い人影が浮かび上がった。

斜め右後方の煙幕が斬り裂かれ、リリとマシロの頭部目掛けて『誰か』が飛来する。栗色の横目がいの一番に捉えたのは、大きく開かれた『口』だった。

獣の様に涎が滴った赤い舌が、蛇のようにならねている。狼と人の中間ぐらいの歯が整然と並び、薄暗い迷宮の中で煌めいていた。歯や、削ぎ落された唇に花を添えているのは、銀の冒険者の血液だろう。2本の指を齧り取った時の物と思われる血痕は、口元だけでなく小作りの鼻や頬にも及んでいる。決して質のいいとは言えぬ肌に、新鮮な血が付いているサマは何処か歪だ。此方を見下ろす2つの瞳は闇よりも黒く、白目は赤い。決して鮮やかな色ではなく、どす黒い赤だ。一見すると、眼窩に闇が嵌っている様にすら見える。それがまん丸く見開かれているのだから、普通にホラーだ。無駄に艶やかで半端に伸ばした黒髪が、不気味さを助長させている。

「――」
『人外』。

それが、その恐ろしい風貌に対しての、リリルカの率直な感想だった。

正直、『死神』に見える。男の武器が『鎌』だったなら、ハッキリ言っ
て疑えなかつただろう。根源的な恐怖が、リリの全身を貫き痙攣させ
――足を止めさせた。

――あ、死にました

静かに、冷静に、他人事のように……彼女は自身の最期を悟った。
『死神』のような男の右手に大きな鎌を幻視しながら、マシロの頭ごと、自分の頭が喰い破られる未来を幻視する。それはもう避けられない。そのぐらい、奴の速力は圧倒的すぎる。スローモーションに見えるのに、身体は全く動かない。

――痛くなければいいな……

なんて益体も無い事を考えつつ、リリルカは現実感のない『死』を待った。

だからこそ、静寂を荒らし尽くすかのような暴風の発生――。そ

して、その暴風に死神が吹き飛ばされ、容赦なく壁に叩きつけられた事実を、彼女は即座に受け入れる事が出来なかった。

リリルカの世界に『音』と『感覚』と『時間』が戻ったのは、怖いぐらいに美しい『金色』が、視界に降臨してからたつぷり10秒以上経つての事である。

「え……う？」

呆けた眩きを漏らすと、金の髪が揺れ、金の瞳に貫かれる。

何を考えているか読み取れない超然とした眼差しに、リリルカは同性だと言うのに目を奪われた。いつそ神聖とも言えるような美の化身が一步一步近づいて来る。血生臭い据えた空気が、心地の良い香りに蹂躪されていく。

「け……【剣姫】……！」

その人物を【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインと認めた時にはもう、彼女のスラツとした指がマシロの顔に触れていて——『いけない』と距離を取るよりも早く、一瞬で【リトル・アイズ】を奪われる。瞬き一つする前までは自身の背中にいた銀の子供が、今は金の少女の腕の中に居る。マシロを『贅』と教え込まれて育つて来た筈の少女の腕に。

「は、放して——」

焦燥の余り叫ぼうとするリリルカは、途中で言葉に詰まる。

【剣姫】の様子に、大きな違和感を覚えたからだ。

華奢な身体が、いつそ大袈裟なぐらいに震えている。笑っているのか、と一瞬憤った。けれど、直ぐに違うと分かった。【剣姫】の口角は、1ミリたりとも上がっていない。どころか、彼を抱き抱える腕は何処までも柔らかだ。しきりに頭を撫でている右手の手付きは驚くほど優しい。思考が……感情がショートしているかのように、瞳は曇っている。だが、その震えが、動揺を隠し切れていない。

やがて——

第二十六話

分からない。

分かりたくもない。

なんだ、これは。

いったい何が起きている？

とても自分の物とは思えぬ咆哮が、口から出た。

いや、自分どころか人の物とも思えない。あれだけ憎み恨んできた怪物種を彷彿とさせる大絶叫。不倶戴天のそれらと同列に堕ちてしまふような錯覚さえ感じられたが、最早どうでも良かった。そんな事が些事と思える程の『絶望』が目の前に広がっていたから。

あかアカ赤緋朱紅赫——。

目を見張るほど綺麗な銀色が、目を背けたくなるぐらい醜悪な血色アカに染まっている。まるで良くないモノに憑りつかれてしまったかの様に、冗談みたいな量の血が彼の身体から抜け出していた。

身体の熱は8割方失われ、呼吸はアイズ自身の轟声が呑み込んでしまっている。手足に力はなく、こうして抱き抱えていなければ地面と抱擁を交わすだろう。半開きの銀目に光が灯る気配はない。血の気の引いた白い顔には、特に口元周辺にベツタリと血の化粧が施されている。

………素人でも分かる。

物心ついた程度の幼子に見せても、きつと同じ事を言うだろう。

『もう、この子は助からない。』

『弟が』

したきつた様子からは、とてもマシロ^{L v. 3}を殺せるようなポテンシャルは感じられない。恐らくは潔白。けれど、知った事か。可能性がゼロでない限り全員敵だ。

同じ理由で向こうで立ち尽くしているヒューマン^{ベル・クラネル}にも殺気を飛ばす。正直に白状するなら、一番怪しいのは断トツで最初に吹き飛ばした異形の男なのだが、アイズはこの場に最初からいた訳ではないのだ。状況を正しく把握しきれない以上は全員が容疑者。砂粒程度の可能性とて、絶対に逃がしはしない。

「あ、あの……今、あなたが吹き飛ばした……」

恐る恐るといった声色で、栗毛の少女が崩落した壁を指し示す。つまりは、一番怪しかった黒髪の冒険者が、順当に犯人だったという訳だ。

「……そう」

アイズは、少女と少年への殺気を消す。

消して、とある一点に全ての瞋恚を集中させた。《テスペレート》の柄を握り直し、最初に攻撃を加えた相手に止めを刺しに行く。だが、あろうことか、味方に制止をかけられた。

「待て、アイズ！」

「止めないでリヴェリア。あの男だけは、この手で殺す」

「奴ならもう死んでいる！ 出会い頭にお前の不意打ちをモロに喰らったんだぞ!? 良くって重傷だ！ 放っておいても直に息絶える！」

何を言っているんだ、リヴェリアは。だから、急いで止めを刺すんじゃないか。確実に、この手で……最も痛みを、苦痛を、後悔を、絶望を与えられる場所を抉って殺すのではないか。絶対に、このまま楽に逝かせてやるものか。マシロ^{あの子}に手を挙げておいて、そんな生ぬるい最期が許されてたまるか。神が許しても、私が許さない。私が――

「言った筈だ！ お前だけはその子の事を諦めるなど！ マシロはまだ死んでいない！ 今も必死に！ 生きるために心臓を動かしている！」

「――！」

「上級冒険者の生命力に賭ける場面だろう！　こんな無駄な時間で、僅かに繋がっている希望の糸を切るつもりか!？」

「……………」

「走れアイズ！　私も後から追いつく…………お前の全力で、マシロをアミッドの元へ届けろ！」

「リヴェリア…………ごめん！」

我に返ったアイズは、マシロを抱き抱えたまま、地上へ向けて驀進を始めた。風はもう黒くない。外界への怒りが、実弟への想いで上書きされたからだ。そして、早々に諦めた己を唾棄する。冒険者としての歴が長い弊害だろう。傷の状態を見れば、助かるか助からないかの凡その見当は付けられる。今回は完全に後者だったから、無意識の内に『敵討ち』を優先してしまった。まだ、弟は死んでいないのに。

「ごめんね、シロ…………。こんな時まで…………、こんな、馬鹿なお姉ちゃんで…………」

本当に自分は我儘で子供だと思う。簡単に黒い感情に囚われる。最期の時まで彼と一緒に居てあげべきなのに。どれだけ絶望的でも、助けるために尽力すべきなのに。けれど、両親が死んだあの時より時間の止まった彼女は、直ぐに癩癩を起してしまう。心の傷に堪えられず、周りにあたり散らしてしまう。ほんの一時でも苦しさから逃れる為だけに…………。

アイズは、思い切り下唇を噛んだ。

柔らかな唇は第一級冒険者の咬合力に些細な拮抗すら出来ず、艶やかな薄い肌に鮮血が咲く。滲んだ血は、涙と混ざってボタボタ落ちる。赤い雫が際限なくマシロの頬に着地し、悉くその肌を滑った。そして、流れ着いた先は…………。

：

「痛いよおお、アイズお姉ちゃああああん!!?　なんで、いきなり攻撃するのおお!!?」

風を切り、足を地面にめり込ませる勢いで戻って来たその男は、言

葉を選ばなければかなり毒々しい風貌をしていた。血走った赤黒い眼球に、唇の削ぎ落された口回りだけでも中々シヨツキングだと言うのに、それらの不気味さを助長する様に肌の色は当然の如く悪い。

けれど、小作りの鼻や、女のように手入れを施された小綺麗な黒髪。そして、成人男性の領域内には収まっているものの何処か華奢な印象を受ける身体つきが、この男が本来中性的な顔つきをしていたであろう事実を伝えて来る。

そういったアンバランスさが、印象の気持ち悪さを際立たせているのだろう。確認するまでもなく、この亡霊の様な男がマシロを殺そうとした張本人に違いない。リヴェリアは腹の底から湧き上がる怒りを抑えつけ、口を開いた。

「貴様は何者だ？ 何故マシロを狙った？」

「なんで『ソレ』を連れて行くのさあああ!! 『ソレ』を食べなきゃ、僕たちはホントの家族にはなれないんだよお!! そりゃあ、気持ちの上じゃもう家族だけどさあああ!!」

「……………おい」

「そもそも感動の再開シーンじゃないか!! あんな半死人ほつといて私を抱きしめて下さいよおおオオ……………」

「おい!」

「なんですか!?! うっさいよ、おばさん!!」

「貴様……………」

一人で興奮し、勝手に逆上してくる男に対し、リヴェリアの心証がどん底を突き破る。怒気を一層込めた視線を送ると、奴はようやく此方と会話をする気になったようだった。

「アレレ?.. もしかして、『おばさん』は禁句だった? エルフは年齢感が他種族とズレていていけないね……。でもお姉ちゃんは烏澁がましいし、お母さん?」

「黙れ。私は貴様の姉でも母でもない。そして、アイズもお前の姉などではない」

アイズの弟はマシロただひとりだ。

どういう意図で奴がアイズの事を『お姉ちゃん』と呼んでいるのか

は知らないが、その一点だけは訂正しておかなければならない。

「もう一度訊く。貴様は何者だ？ 何故マシロを襲った？ 自分の意思か、それとも誰かの命令か？」

一方的に質問をぶつけながら、しかしリヴェリアは適切な距離を保ち続けた。【剣姫】の殺す気の一撃を喰らって生きている相手だ。全身血みどろではあるが、見た目ほど堪えている様子もない。確実に『第一級冒険者』^{L.v.5以上}の強者だろう。如何にリヴェリア・リヨス・アールヴ^{L.v.6}と言えども、決して油断できない相手だ。けれど、『都市最強の魔導士』の警戒を余所に、男は緊張感のない台詞ばかり吐き紡ぐ。

「まったく、君といいリリちゃんといい、どうして僕を疑うのさ？

『アレ』をボロボロにしたのは僕じゃない。私だってビックリしたんですよ。『まだ食べるつもりなかったのに死にかけてる!? 急いで食べなきゃっ』て」

「……………食べる、だと？」

「そーだよ」

男は丸い目をこれでもかと細めながら微笑んで、自身の口の中に片手をつっ込んだ。唾液でぬらぬら濡れた指が、何かを掴まんでいる。一見ではそれが何か分からなかったが、直ぐに奴が『回答』を告げて来た。それはそれは愉悦に歪んだ表情で。

「コレ、『アレ』の指」

「――」
【九魔姫】の脳が停止した。

奴のいう『アレ』がマシロであることは疑いようがない。『アレ』の指とはつまり、マシロの指。要するに、『食べる』という発言は比喻でも何かの隠語でもなく……………実際に、マシロの指を^{肉体}噛み千切ったという事。

「ふざけるな……………、ふざけるなよ貴様！ どうしてマシロを狙う!?

アイズを姉と呼んだ事といい……………貴様はいったい何者なんだ!？」

「ちよ、なんでそんなに怒ってるの？ ああ、そうか、自己紹介が遅れて怒っているんですね！ 失礼しました、リヴェリアさん！ 僕の名前はねえ……………」

舐めた態度で見当違いの認識を顕わにする狂気の男。リヴェリアは会話が成立しない事に嫌気が差しつつも、僅かでも素性を探ろうと返答を待った。しかし……。

「名前……名前、は……。あれ……。？　なまえは、えつと。『僕』の……『私』の……え？？」

唐突に、頭を抱えて混乱し始める。その様子に作為的な気配は認められず、素で自分の名前が分からない印象を受けた。「うう……うう……」と苦しそうに呻く男は、数秒そうしていたかと思うと、唐突に天を仰ぐ。次に口が開かれた時には、混乱は収まった様だった。

「でもでもでもでも、アイズお姉ちゃんも酷いよね。まだ指しか食べてないのに連れてっっちゃうんだもん。何の為に『アレ』を産ませたのか、親から聞いてないのかなあ。ちゃんと伝える様に、『兄さん』に頼んでおいたのに……」

短期記憶が無いのかと疑う程の豹変ぶりに、リヴェリアは怒りよりも困惑が勝った。明らかに第三者に理解させるつもりのない、不親切な講釈。それを、半ば呆^{ほう}けながら聞いていると、次第に弁に熱が籠り始める。

「兄さんなんて嫌いだよツ。僕の方が先に好きだったのに、姉さんを……アリアを横取りするし……！　そんな姉さんと瓜二つのアイズちゃ……アイズお姉ちゃんとも中々合わせてくれないし……！　私は、こんなに好きなのに！　僕も○○になりたかっただけなのに！」

「き、貴様、さつきから何を言ってる——」

「あああああああああああ!!　好き好き好き好き、大好き！　アリアお母さんもアイズも大大大好き！　笑顔が好き！　声が好き！　仕草が好き！　髪が好き！　匂いが好き！　目が好き！　優しい所が好き！　鼻が好き！　歯が好き！　天然な所が好き！　口が好き！　家族思いな所が好き！　指が好き！　まつ毛が好き！　耳が好き！　ちよつと意地っ張りな所も好き！　首が好き！　鎖骨が好き！　肌が好き！　皮膚が好き！　胸が好き！　太ももが好き！　腕が好き！　眉毛が好き！　くびれが好き！　爪が好き！　腰が好き！　足が好き！　お尻が好き！　身長が好き！　手が好き！

ウエストが好き！ おへそが好き！ 息遣いが好き！ 肩が好き！
舌が好き！ 唾液が好き！ 鼻孔が好き！ ほっぺが好き！
骨格が好き！ 眼窩が好き！ ふくらはぎが好き！ 血液が好き！
天使！ 絶世の美少女！ アリアとアイズお姉ちゃんの前じゃ、美
の女神なんて塵も同然！ フレイヤだつて凡夫に成り下がる!! だ
から、私は！ 僕も！ 私だつて！、アリア姉さんやアイズちゃんと
同じになりたいんだあ！ そう言つたじゃないか兄貴イイ！ もう
僕私の邪魔しないで下さいよおおおおお!!」
「……………ッ！」

「く、狂つてる…………」
ボソツと呟かれた犬シアンスロープ 人の少女の言葉に、流石のリヴェリアも同調
せざるを得なかった。発狂から始まり恍惚とした笑みで好き好き連
呼したかと思えば、唐突に美の女神達に喧嘩を売り、眷属達に聞かれ
たら大惨事になりかねない暴言さえ吐き、最後は呪詛の籠った涙声で
天を仰ぐ。

控えめに言つて気が触れているとしか思えなかった。

常人ではない。その風貌どおり『狂人』の域に達している。既に
色々と壊れているのだろう。一人称や、人名の呼び方、口調がつぶさ
に切り替わるのが良い証拠だ。きっと、この男は自分の立ち位置すら
分かつていない。

こんな破綻者相手に、『マシロを喰う理由』を問い質しても答えが
返つて来るとは思えなかった。仮に返つて来たとしても、信憑性に欠
ける。そもそもここはダンジョンだ。階層域を鑑みれば考えづらい
が、シンプルにモンスターにやられただけという可能性も無くはな
い。

それに、精霊の血を宿すマシロを喰う理由など、深く考えずとも
想像は付く。本当にこの推測が正しかった場合、目の前に男は稀代の
夢想家という事になるが、何せ奴は破綻者だ。正常な思想を求める方
がどうかしている。

「もう良い。貴様と話して得られる物は何も無いと知れた」

「あれ？ まさかおばさん、僕と戦うつもり？ リヴェリアさんは生

粹の魔導士でしょう？ 長つたらしい詠唱してる内にお腹かつ捌いちやうよお？ 平行詠唱もLv. 5の私の前で易々できるとは思わない事です。白兵戦なら僕の方が強いんじゃない？」

流石に臨戦態勢に入ったLv. 6を前に狂ってはいられないのか、奴は発狂をピタリと止めて舌を回した。けれど、興奮は収まっていないらしく、酷く早口だ。聴力に優れたリヴェリアでさえ、言葉の半分も聞き取れなかった。が、要点は理解する。つまりは、『魔導士が一人で戦えると思うのか』と嘲笑っているのだ。確かに、その主張は一部理解出来る。基本的には、後衛は前衛に守られながら一撃必殺の砲撃を放つ役職だ。【九魔姫】は、純粋な後衛魔導士に分類される。如何に『都市最強の魔導士』と言えど、その前提からは逃れられない。

「あまり舐めてくれるな、小僧。貴様如きを往なす程度、私ひとりで作もない」

「……随分大きく出るんだねえ。もつと謙虚な方だと思っていましたよ……。僕に倒される前振りとしては、十分ですね」

丸い目がギラついたかと思うと、男は肩まで伸ばした黒髪を後ろになびかせ、怪我人とは思えぬスピードで迫って来た。まるで影の中から現れたかの様に、ヌツと視界の中に入って来る。恐らく、奴が同じレベル⁶だったなら、リヴェリアはそのまま腹を斬られていただろう。だが、今回ばかりは相手が悪い。

「成程、確かに機敏だな」

そう嘯きながら、『都市最強の魔導士』は軽々と男の斬撃を躲した。速い事には速い。そして、地形や薄暗さを利用して、敵の目に留まりにくい動きで攻めて来る。多少大袈裟ではあるが、時間が飛んだような錯覚さえ覚える為、かなり戦い辛いと言えるだろう。

しかし、リヴェリアには通用しなかった。

蝶のように舞い、髪にすら刃先を引つ掛けずに、踊るように回避を続ける。そこに無駄な動きはなく、消耗する気配すらない。このまま小一時間踊り続けた所で、【九魔姫】は息一つ乱さないだろう。

「くそー！ なんで……!?!」

ブンブンと得物を振りかざす男の呟きに答える気すら起こらない。

単純に身体能力が違いすぎるのだ。その上で彼女は冷静に全体を視ている。敵対する冒険者を見失わぬ様に、目を凝らしたりはしていない。常に俯瞰的な視点で動きを追っている為、惑わされる事がない。正直、奢りでも何でもなく、リヴェリアにはこの相手に負けるビジョンが視えなかった。それ程までに、年季が違う。

「【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を^{うず}卷け——】」

「!!?」

詠唱を諳んじ始めた瞬間、目に見えて男の動揺が伝わった。撤退するか、このまま攻めて来るかは分からない。けれど、リヴェリアからすればどちらでも構わなかった。攻めて来るならこのまま詠唱を完成させ、魔法で蹂躪する。撤退するなら深追いはせず、立ったまま気絶しているらしい白髪のヒューマンと、そこで腰を抜かしているサポーターの少女を連れて地上に帰還する。とにかく、始末できなくともマシロから遠ざければいい。考えたくはないが、恐らくこれがアイズとマシロの最後の時間となる筈だ。たとえそれが僅かな時間だったとしても、絶対に邪魔はさせない。

「【閉ざされる光、凍てつく大地——】」

「くっそ……い！」

煌めく凶刃が、一瞬前までリヴェリアの頭部のあつた場所を突き刺した。空を切った刃を横目で見ながら、一層激しさを増した攻撃を難なく避ける。『継戦か……』と、胸の内では呟いて、王族妖精はいよいよ詠唱を完成させようとした。その瞬間——。

「がッ!？」

翡翠色の麗人が、赤色に染まった。

男が唐突に自身の左手首に得物を突き刺したのだ。その返り血を浴びて、リヴェリアは染まった。余りの事態に、流石の彼女も詠唱を中断し、身構える。

「いきなり何を——」

「ふ、ふざけるな……い！　こんな時に出て——」

どんな企みかと思えば、男は恨めしそうな言葉を吐いた。しかし、それは敵対者に向けられたものではない。彼の視線は自分にも、サポーターの少女にも、白髪のヒューマンにも向いていない。では一体誰に対してなのか……。その答えは、直ぐに察せられる事となった。

「逸るな。お前では【九魔姫】には勝てない」

『狂人』だった筈の存在が、『賢人』を思わせる声色を奏でる。声質は先程までと同じなのに、まるで異なった印象を受けた。それこそ、他人の声だと錯覚する程に……。『なんだ、お前は？』。そう口を挟む前に、『狂人』の言葉が男の口から発せられる。

「そんな事ありません！ 見ていなさい、今にでもリヴェリアさんの首をー」

「黙れ。彼我の差も理解出来ん若造がピーピー喚くな」

「何を……ッ！」

「事実だろう」

それは、実に不思議な光景だった。

男は『狂人』と『賢人』を行ったり来たりしている。まるで、同一の身体に二つの精神が宿っているかの様だ。思わずそう認識してしまう程、目の前では自然な会話が成立していた。普通に考えれば『狂人』故の一人芝居にしか思えないが、それにしても『賢人』の瞳に知性が宿り過ぎている。もし仮にコレが演技であるならば、この男は『冒険者』ではなく『役者』に転職した方が良いだろう。

「なんなんだ、貴様らは……」

リヴェリアは、そう呟いてしまった。『貴様』ではなく『貴様ら』と漏らしてしまったのは、完全に無意識である。それに反応したのは『賢人』の方だった。

「ああ、すまないな【九魔姫】。直ぐに消えるから、数々の無礼は水に流してくれ」

「……………逃がすと、思うのか？」

「思うさ。そもそも、お前に深追いする気はないだろう？」

「……………」

心理を見透かされている。

やはり、先程までとは別人だ。比喻抜きで人が変わったとしか思えない。あれだけ不気味だった容姿が、今では『変わり者の学者』のようにさえ見える。本当に、印象が360度変わってしまった。

「そうだ、『九魔姫』。アイズとマシロの世話を焼いてくれているそうだな。礼を言わせてくれ。これからも、2人をよろしく頼む」

「——!!」

『ソレ』や『アレ』ではなく、急にマシロを名前で呼び始めた『男』の言葉に、リヴェリアは弾かれた様子を睨みつけた。そして、直ぐに表情を歪め、『賢人』と化した男を睨みつける。

「なんの当て付けだ……………？ マシロは……………もう」

「あいつは死なないぞ」

「……………!？」

さも当然の様に断言する男に、リヴェリアは瞠目した。どうしてか、『この男がそう言うのなら、そうなのではないか』と考えてしまう。そうさせるだけに力が、今の彼にはあった。

けれど、そんな訳はないのだ。常識的に考えて助かる訳がない。何故なら、スキルの効果で治療行為そのものが始められないからだ。それでもアイズを治療院に奔らせたのは、彼女に後悔をさせない為である。『最後まで弟を救おうと奔走した』という事実は、今後の彼女の大きな心の支えになる筈だから。

「まあ、お前達が現れなければ死んでいたがな。アイズが近くにいるのなら、マシロは死なない。というより、それで死ぬならよほどの藪医者に当たったという事だ」

「アイズがいれば……………だと？ 何を言っている？ あの子は回復魔法など使えない……………。そもそも、今のマシロに治療行為は——」

「俺は事実を述べているが……………信じられないのならそれで良い。ここで幾ら語り合った所で、結果は変わらない」

「……………」

「俺に噛みつく暇があるなら、さっさと地上に戻れ。その方がよほど建設的だろう」

反論できなかった。

その通りだと、【九魔姫】をして思ってしまったから。

俯いていると、男の足音が耳に付く。遠ざかっている。本当に撤退するらしい。視線を上げると、既に奴の背中は小さくなっていく。目の錯覚ではない。気配も実際に離れていく。とても何かを企んでいる人間の足取りには見えなかった。

『賢人』の消えたダンジョンの一角で、リヴェリアは肺から深い息を吐きだした。頬に伝った冷や汗と共に――。

：

：

「……………な……………にを、言ってるの……………アミッド？」

「……………手遅れだと、申し上げます」

「……………」

【ディアンケヒト・ファミリア】の運営する治療院。その数ある緊急処置室の中の一室で、迷宮都市最高峰の治療師^{ヒーラー}が、金の少女に残酷な現実を突きつけていた。打ちひしがれながら沈黙する【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインに対し、アミッド・テアサナーレは目を伏せながらも説明を始める。

「重症には違いありませんが、外傷一つ一つは上級冒険者の生命を脅かすものではありません。偶然か意図的か……………急所への攻撃は極力避けられている印象を受けます。腹部の鬱血と内臓へのダメージは流石に看過できませんが、それも我々が命を繋げられない程ではないでしょう」

そう、傷の程は問題ではなかった。

【ディアンケヒト・ファミリア】所属の優秀な治療師^{ヒーラー}達なら、悪戦苦闘はしても、十分完治まで持つていけるレベルだろう。無論、新人や能

力に劣る者ならその限りではないが、この状態の重傷患者にそんな未熟者が付く事など有り得ない。故に、成立しない仮定だ。

「ですが、血を失い過ぎています。その影響で肉体の衰弱具合が尋常ではありません。おまけに、傷口が塞がらない為、今こうしている間にも血液が減り続けているのが現状です」

聖女は自若たる思いで薄い唇を噛んだ。回復魔法や万能薬エリクサーを使用しても一向に良くならない傷口を仇敵のように見つめる。真っ赤な顔で泣き腫らした金の少女アイズが言うには、この少年は『どんな状態でも動けるようになる代わりに、一切傷が治らなくなるスキル』を使っただけらしい。

まさしく、治癒師ヒーラー泣かせのスキルである。『全ての傷を癒す』という信念のもと、蘇生一步手前の治療さえ可能にしてしまう【戦場デア・セイントの聖女】の荒唐無稽な治療能力すらも通用しない。どれだけ高度な治療行為も、今のマシロの前では等しく無力だった。

唯一、物理的に傷口を縛って血を止める方法なら効果はありそうだが、それも焼け石に水。留めておくのにも限界があるし、何より、縛りようの無い切り傷からは容赦なく血が逃げていく。

「正直、まだ息がある事自体が奇跡のようなものです。アイズさんの仰ったスキルの効果に偽りがないのなら、彼の傷はあと23時間以上塞がらないという事……。とても、持たせられません」

「……………アミッド、でも?」

ポツリと落とされたか細い呟きに聖女は瞑目するしかなかった。が、心を鬼にし、更なる絶望を唇に乗せる。

「予想できる死因は、何も出血死だけではありません」

「……………」

「彼の体力が尽きたらそれ迄です。内臓に蓄積したダメージが原因で衰弱が早まるかも知れません。いつ心肺機能に支障が現れるとも知れませんし、身も蓋もない話ですが、今この瞬間にショック死する可能性だって十分あります」

加えて、塞がらない傷口からは細菌が入り放題だ。流石に、治療院ヒール内で感染する可能性は低いだろうが、この少年はダンジョンで

傷をこさえて来た。正直、既に何らかの細菌に蝕まれていても不思議ではない。

「……………」

「……………アイズさん。酷な提案を致します」

「……………」

はい」

返事は無いと思った。

けれど、彼女は確かに掠れ声で応答した。

恐らく、これから何を言われるか、予測が付いているのだろう。【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインは天然だなんだと言われているが、愚鈍ではない。この状況で治療師ヒーラーが口にしななければならない言葉など分かってている。ただ、聞きたくないだけで…………。

「〃外部からの一切の治療を受け付けない〃。ならば、患者自身の自然治癒力を向上させる方法なら通用する可能性があります」

「ほんと——」

そう告げた途端、一瞬で金の瞳に希望の光が灯った。しかし、【戦場の聖女デア・セント】は硬い面持ちのまま、前のめりになった少年の姉を目で制す。聡い彼女は、それだけで全てを察したのだろう。今度こそ、その端正な顔が絶望に染まった。都市最高の治療師ヒーラーは、派閥に団長としての仮面を貼り付けながら、酷薄に事実のみを伝える。

「しかし、この方法では爆発的な治療効果は望めません。強引に自然治癒能力を引き上げたとしても、これほどの傷を生存可能ラインまで癒すとなると法外な体力を消耗させる事になります。既に衰弱しきっている彼が耐えられる保証はありません」

「そんな……………」

という呟きが、微かに、だが確かに鼓膜を突いた。

改めて【剣姫】の顔を見る。横になって目を瞑れば死体と見紛う。そう確信する程、彼女は蒼白だった。

「選択肢は2つ。このまま何もせずに〃最期〃を待つか、1%にも満たない可能性に懸けて治療を行うか……………」

「……………」

『治療を行う』。

そんな言い方をしてしまった自分に腹が立つ。生き繋げる確率が限りなくゼロに近いと断言しておいて……。こんなもの、二択と言いつつ一択だ。結局、治療をしようがしまいが、マシロの行き着く先が『死』である事には変わりない。

アミッドは、寝台の上で死んだように目を瞑る患者の顔を静かに見遣る。マシロ・ヴァレンシュタイン。特別親密な関係ではなかったが、決して知らない間柄でもない。【ロキ・ファミリア】は【ディアンケヒト・ファミリア】のお得意様だ。顔を合わせる機会も、言葉を交わす機会だって、それなりにはあった。

それこそ、【神の恩恵】^{ファアルナ}を授かるまで、彼はファミリアの者達に連れられてよく買い物に来ていたのだ。自分よりも若く背丈も低い希少な同族^{ヒューマン}を相手にお姉さん風を吹かせた事は、一度や二度ではない。

「……………輸血も、ダメ……………なの？」

過去を懐古していると、アイズの弱々しい質問に、現実に戻される。アミッドは密かに息を吐いた。その類の質問が飛んでくると、予想できていたからだ。ここで、出来ないと偽るのは簡単である。単純に、血のストックが無いと、そう嘘を伝えれば良い。しかし、聖女は敢えて本当のことを語った。それは、弟を助けてあげられない事に対する、ほんの少しの罪滅ぼしだった。

「傷を塞げない以上は、輸血をしても最終的に体外に流れ出てしまいます。無論、入れた傍から直通で、という訳ではないので一時凌ぎにはなるでしょう。ストックしてある血を全て使えば、スキルの効力が切れるまで持たせられるかも知れない」

「だ、だったら……………」

「ですが、持たないかも知れない。いえ、その可能性の方が遥かに高い。仮に持ったとしても、そこから治療して間に合う保証は何処にもない。一命をとりとめたとしても、その後急変して命を落とすかも知れない」

「……………」

「もう……………そういう段階なのです。徒労に終わる可能性が高い以上、

輸血は出来ません。血液のストックは、そう簡単には貯まりませんから……」

その血があれば救える患者が、これから運び込まれてくるかも知れないのだ。たればではあるが、決してあり得ない話ではない。ならば治療師^{ヒーラー}として、残酷な判断もしよう。例え、それで【剣姫】に恨まれる事になったとしても、1人でも多くの命を救う事が、自分に課せられた責務なのだから……。そんな覚悟と共に、アミッドは友人からの言葉^{罵倒}を待った。けれど――。

「だったら、私の血を使つて」

「え？」

悪魔だなんだと罵られる想定をしていた聖女は、予想外の要望に反射的に声を漏らす。すると、それが呼び水になってしまった様に、アイズが肩を掴んで来た。まるで、取っ組み合いでもしようかという勢いで、Lv. 2の身の上ではとても抗えない。

「私とシロは同じ血液型だから……！ 私[！]の血、全部使つて良いから！ お願だからマシロを助けて!!」

「……………」

気圧される。いつそ、恐怖さえ覚える。

それ程までの必死の懇願だった。

歴の浅い治療師^{ヒーラー}なら、心を打たれ、彼女の意を汲んでしまう者も出てくるかも知れない。その気持ちは理解出来るし、人として正しいとも思う。けれど、アミッドは心を殺した。人形のような精緻な顔に一切の同情を乗せず、同じく人形のように美しい少女の願いを斬り捨てる。「出来ません。アイズさん1人分の輸血では焼け石に水です。それに、実際に移せる血の量はもつと少ない」

「だから、全部あげて良いって――」

「ですから！」

「……………」

「無理なんです……。分かってください。彼はもう助からない」

「……………」

瞬間、アイズの唇が小さく震えた。肩も、瞳も……。二筋の涙が頬

を伝う。

やってしまったと、アミッドは己の未熟を呪った。無力感に蝕まれ、足下がグラつく。傷心の親族相手に声を荒げて、メンタルケアどころか我儘を言うなど黙らせるなど治癒師ヒーラーとしてあるまじき行いだ。医療に従事する者として、こんな対応はあり得ない。最後の最後まで手を尽くして欲しいと思うのは、遺族として当然の事なのに。合理的かどうかなんて、考えてもいられないのに……。

だと言うのにあるう事か、自分は他の患者の命を優先している。まだ現れてすらいない、架空の重症者の命を。

「あ……あああ……」

まるで何かに操られているかのように、金の少女はよろめきながら寝台へと向き直った。そして、両膝を床に付きながら、死人のように眠る弟を抱きしめる。まるで温度を感じ取ろうとしているかの様に何度も頬を擦りつけて、子供の様に泣きじゃくった。

「シロ……シロ……いやあ、死んじやいや……」

「……………他でもない貴女に、そこまで想って貰えて彼も幸せでしょう。最期の時は、おふたりで——」

アミッドは慇懃に腰を折る。

けれど、退出しようと顔を上げた瞬間、その瞳に信じられない光景が映り込んだ。

「……………え？」

真つ赤なのだ。

金の少女が。別に、全身という訳ではないが、視線の殆どを奪う程度には、その色が目立っている。室内を満たしていた薬品の匂いも、みるみる内に鉄臭さに汚染されていく。【剣姫】の足元では、彼女の愛剣《デスペレート》が鮮血に濡れていて——。

「アイズさん!!」

アミッドはようやく、アイズが自傷行為に走ったのだと理解した。

両腕から流れる血を弟の傷口に注ぎ込もうとしている。しかし、専用機器も無しに上手くいく筈もない。大量の血が容赦なく寝台の色を変えていく。

「何をしているんですアイズさん!? そんな事したら貴女が!」

「だって! だって……! もう、こうするしか……! アミツドが助けてくれないなら……こうするしかないじゃない!」

「落ち着いてください! それが無意味な事だと分からない貴女では——」

「邪魔しないで!!」

取り抑えようとするが、手負いとは思えぬ力で振り払われ、聖女は成す術なく尻餅を付いた。その状態で【剣姫】の狂気を目撃する。

「大丈夫だからね、シロ。お姉ちゃんが助けてあげるから……何も怖がる必要ないからね?」

実弟に寄り添うアイズのその姿は、慈愛に満ち満ちた天女にも、人を墮落させる狡猾な魔女にも、親しみやすい柔らかな生娘にも見えた。相反する印象に何度も殴りつけられるが、同性の自分アミツドでさえ息を呑む妖艶さを誇っている事だけは共通していた。

あんなに蠱惑的に微笑まれ、脳さえ蕩けかねない肉声で囁かれたら、例え肉親であろうと容易に落ちてしまうのではないだろうか……。それこそ、『美の女神』達の扱う「魅了」が、同性女性や神々にすら通用してしまうのと同じように。

【剣姫】の纏う現実感のない雰囲気に、聖女はしばらく放心していた。もしかしたら、畏怖の念すら抱いていたのかも知れない。彼女は自分と同じヒューマンの筈なのに、もっと高次元の存在に思えてならない。ともかくアミツドはアイズに声を掛けられなかった。

治療師ヒーラーとしての嗅覚が、『死の香り』の陰りを感じ取るまでは——

「……………え?」

喉が弱々しい声を発したのと、無意識の内に立ち上がったのは、ほぼ同時。

恐れ知らずに失意の姫を押しつけ、患者マシロの状態を確認すると、聖女は困惑した。

「嘘……傷が、塞がっている?」

そんな事はありません。

なんの治療も施さずに、こんな一瞬で塞がる傷など存在しない。そんなもの、浅く小さな切り傷だって不可能だ。だというのに、腹部の化膿も、手足の傷も、指の断面も——。完璧とは言わないまでも、ひとりでに塞がり始めている。

「どいて、アミッド! このままじゃ、シロ……が……?」

アイズも直ぐに、弟の異変に気が付いた様だった。

何度も、何度も血色の良くなった彼の頬を摩りながら、困惑の面持ちで口端を綻ばせる。

「なんで……アミッドが治してくれたの?」

「わ、私は何も……アイズさんが何かしたのでは……?」

この様子を見るにそんな訳はないのだろうが、そう尋ねずにはいられなかった。だって、直前まで彼に触れていたのは彼女なのだから。

「呼吸も、脈も正常……。傷も塞がり、出血も止まった……。只の重傷患者に戻っている……」

アミッドは瞠目しながら、咄嗟に治療魔法を行使した。相変わらず、効果は弾かれる。つまり、スキルの効力は継続中だ。にも拘わらず、状態が回復した。それはつまり……。

「奇跡が……起こったと言うのですか? 天が彼を助けたと……」

そう呟いて、聖女は即座に否定する。

違う。そんな運天賦の出来事ではない。奇跡とは、最大限の努力の末に、必然の結果として起きるものだ。なんの死力も尽くさずに引き起こせるものでは決してない。治療行為自体を諦めていたのに、それが起こる道理はない。

ならば、奇跡を起こしたのは——。

「アイズさんの……『血』?」

勿論、彼女の血に治療能力が含まれているなんて話は聞いた事がない。第一、本当にそんな力があつたとして、それは外部からの治療行為だ。スキルに邪魔をされない説明が付かない。けれど、他に考えられる要因は無かつた。

「アイズさん、貴女はいいたい——」

「良かった……」

「え？」

「良かった……生きてる……シロが、生きてる……！」
「……………」

心の底から漏れ出た眩きに触れて、アミッドも心を解きほぐす。奇跡を起こした要因は気になる。しかし、追及は後で良い。少なくとも、今は少年の回復を喜ぶべきだと思った。

依然として治癒魔法は意味を成さないが、この状態なら助けられる。無論、体内の血液は枯渇したままなので、油断は禁物だ。しかし、傷が閉じられた今、輸血は絶大な効果を発揮するだろう。血液さえ足りていれば、まず間違いは起きない。そして、あと約23時間を持ちこたえてくれたなら、自分の命に代えても生き永らえさせて見せよう。

それが、『都市最高の治癒師』としての……そして、一度は見殺しにしようとしてしまった者の責務だと、アミッドは気を引き締める。

結論から述べれば、マシロ・ヴァレンシユタインは助かった。彼が目を覚ましたのは、今日より1週間後の事である——。

第二十七話

ねえ、まだモンスターきらい？

まだダンジョン行く？

『……いくよ』

どうしても？

『シロは嫌だ？ 私がダンジョンに行くの』

やだ

『駄目だよ。モンスターはお父さんとお母さんの仇だから。この世に存在してちゃいけないものだから』

……ぼく、お姉ちゃんが死んじゃう方がイヤだ

『……』

あ、お母さんたちが死んでよかったって言ってるんじゃないかと……

『分かってるよ……』

うん



——平気だと、思っていた。

『いやあ、それにしても勿体ないよなあ』

そう同情されることが、以前まえはよくあった。

何がだ？ と尋ね返せば、ロキ連の眷属中達は決まって同じような答えを口にする。

『せっかく【剣姫】の弟なんて恵まれポジなのに、仲悪いんだもん』

『それな、俺だったら絶対もつと上手くやるわ』

『肉親じゃ恋人とかにはなれないけど、オレらじゃどうせ無理だしな。だったら、割り切って可愛い弟として甘やかされたい』

『いったい何やらかして嫌われたんだ、マシロちゃんよお？』

面白がつて冷やかしてくるのは、殆どがここ4年以内に「ロキ・ファミリア」に入団した冒険者だった。つまり、アイズが俺から距離を置くようになってから知り合った者達。それ以前からファミリアに在籍していた団員は、いっそ不自然なまでにこの件には触れて来ない。『その手の話は耳にタコだ。いったい何度同じ話題を振れば気が済む？』

俺は、どちらの反応も気に喰わなかった。

だから、大抵の場合嫌味を込めて言い返してやる。

けれど冒険者になるような奴らはどいつもこいつも神経が凶太くて、此方の辟易など気にも留めない。野生の動物であるかのように、本能のままに言いたい事を口にする。

『だって歯がゆいんだモンよ』

『ちな、俺だったら自殺してる。アイズさんに嫌われるってのはそういう事だぜ？』

『大袈裟……じゃあねえなあ。なんせ、相手はあのアイズ・ヴァレンシユタインだ』

彼らを含む多くの冒険者達にとって、【剣姫】は崇拜と羨望の対象だ。本来、『第一級冒険者』というだけでそう言った感情を向けられる物だが、姉の場合は容姿や最大派閥所属のブランドが合わさって殊更群を抜いている印象を受ける。

だからこそ、そんな人物の『弟』である俺は手頃な話の種なのだろう。勿論、本人に直接絡みに行く勇気がないから、俺をイジって妥協しているという側面もあるのだろうか。

『正直、マシロが嫌われるって意味分かんねえんだよなあ』

『それな？』口は悪いけど、誰彼構わず罵ったりとかしないし』

『意地の悪いこともしないしな』

天下の【ロキ・ファミリア】の構成員が、高だか『姉弟喧嘩』の理

由について真剣に考察している。仮に原因を突き止めた所で、単に『俺の失言により嫌われた』という事実しか浮かび上がらないというのに……。なのに、まるで難解事件のように囃し立てるコイツ等が、俺には下らない人間に思えてならなかった。

——大丈夫だと思っていた。

『やっぱアレ系かね……ラッキースケベ?』

『お前に見られたならともかく、弟相手にそんな尾を引くか? 精々、その場でタコ殴りにする程度だろ』

『ちよつと待て?! タコ殴りぐらいで許されるなら今から決死覚悟で風呂でも覗きに行った方が良くないか!?!』

『馬鹿野郎! 許されんのはマシ実弟ノの特権だ! 俺らじゃ骨も残んねえぞー!』

『ちゞくゞ じようゞ……アイズさんの弟になりたい……!!』
……でも、同時に『なんで?』とも思ったんだ。

俺はアイズとの冷めた関係を気にしていない筈なのに。

もう、どうでもいい他人と認定している筈なのに……。

どうして……野次馬根性丸出しで突いて来るコイツ等に、こんなにも腹を立てているのだろう。

当時の俺には、その理由が本気で分からなかった。

——もう、痛む胸などないと、そう……思い込んでいた。

『オイ、いつまで下らねえ話をしてやがる?』

『げっ! ベートさん!?!』

『そんなだから雑魚のままなんだよ、テメエら。目障りだ。消えろ』

『は、はいいいいいい！』

狂暴な狼ウエアウルフ人の出現。それに伴い、「ロキ・ファミリア」の下級冒険者達は蜘蛛の子を散らすように霧散していった。予定調和だ。これも、いつもの光景である。今回は「凶狼」ヴァナルガンドだったからこんな反応になったが、俺が似たような会話に巻き込まれている時、必ず何処かでフィンを含めた幹部の誰かが現れるのだ。まるで、『デリケートな問題だからそつとしておけ』と苦言を呈すように。それが、気を遣われているみたいで気に喰わなかった。

『……余計な真似を……助け船でも出したつもりか？』

あらん限りの悪態と共に尋ねると、ベートは嘲笑う様に鼻を鳴らす。

『勘違いすんな。雑魚共がヘラヘラ群れて目障りだったただけだ。ついでに、いつまでもメソメソしてるテメエの顔ツラもな』

『なんだと？』

『はっ、凶星つかれてお冠か？ お姉ちゃんが恋しいって、昔みたいにアイズに泣きついてみるよ』

『テメエ……黙って聞いてりゃ——』

『なんだ、やんのか？ いいぜ、構ってやる』

——だから、反発した。以前の自分とは正反対の自分を創り上げた。それこそ、目の前の狼を無意識の内に参考にして、強い男を演じた。

——そうしていく内に、本当に自分が強くなったような気がしていた。姉に嫌われたことを引きずる弱い自分なんて最初から居なかったのだと、そんな錯覚をできるようになった。

『大丈夫ツスか？ ダメつすよ、あの人にケンカ売っちゃ……』

『まあどうせあの馬鹿が何か言っただけで来たんでしようけど、相手にしないの。手加減の手の字も知らないチンピラなんだから』

『ほら、ジツとして下さい。急に動いちゃダメですよ?』

『うるせえ。つか、潔癖症はどうしたスイーツエルフ……』

『そんなこと言う子には回復薬あげません』

案の定、俺はベートにボコられた。それはもう盛大に。いつそ笑えるぐらいに。半年ほど前にランクアップしていたお陰で耐えられたが、L v. 2のままだったら「ディアンケヒト・ファミリア」の厄介になっていただろう。けれどまあ、最初に喧嘩を吹っ掛けたのは此方なので文句も言えない。

そんな暴虐の嵐から逃れられたのは、ラウル・ノールド、アナキティ・オータム、レフィーヤ・ウイリデイスの介入があったからである。正直、実力的には3人まとめて叩き潰されてもおかしくなかったが、幸いベートは舌打ちを一つ残して退散してくれた。

綱渡りの状況だったからか小言を漏らすラウルの額には大量に汗が滲んでいる。アナキティは暗にもつと賢く立ち回れと助言を寄越し、レフィーヤは安堵のため息を吐いた後、俺の頭部を膝の上に乗せた。そして、携帯していた回復薬ポーションの蓋を開けて口元に近づける。

『やめろ、ひとりで飲める』

『そこまで来たんなら飲ませて貰いなさい。エルフに膝枕つきで介抱して貰えるなんて中々できない経験よ』

『ちよつと、アキさん!? そんなお得だから貰うときなさい、みたいな言い方しないで下さい!』

『同感だな……。こんな社交性マックスの異端エルフ相手に、今更ありがたみなんか沸くかよ』

『意地でも憎まれ口叩かないと気が済まないんですか貴方は!』

『まあまあ、それにしても災難だったツスねえ。実は自分達、マシロのこと探してたんすけど……』

『俺を?』

俺は痛む腕でどうにかレフィーヤから回復薬ポーションをもぎ取り、無理やり上体を起こす。そして、自分の手で液体を飲み干し、十分に痛みが引

いた事を体感した後、ラウルの台詞に相槌を返した。

すると、次に口を開いたのはアナキティで。

『マシロ、明日お誕生日でしょう？ 何か欲しいものはある？』『ゴブ ニュ・ファミリア』や『ヘファイストス・ファミリア』のオーダーメイドとかじゃない限り買ってあげるわよ？』

『随分と大盤振る舞いだな。つーか、こういうのは普通サプライズにするもんじゃねえのか』

『それも考えたけど……貴方、要らない物を貰って愛想笑い浮かべられるタイプでもないでしょ？』

『……それは、まあ』

サプライズの場合は、各々プレゼントする物品を考え、調達しなければならぬ。「ロキ・ファミリア」のような大所帯の派閥で、団員一人一人の趣味趣向を把握しきるのは不可能に近い為、このような対応も仕方がないのだろう。神々は『つまらない』と口を尖らせるだろうが、不要な物を渡されるよりはずっと良い。

けれど、いざ考えてみると、欲しいものなど思い浮かばなかった。

無欲……と言えば聞こえは良いが、なんてことない。俺の場合は趣味が無いだけだ。

そんな自覚を持ってみれば、自分はいったい何に喜びを感じる人間なのだろうという疑問が頭をもたげる。今まで、考えもしなかった。そして、まったくと言っていいほど答えが出ない。昔の俺ならば――

。そここまで考えて、途端にノイズがかかったように思考が乱れた。まるで、以前の情景を思い出すのを拒んでいるかの様に。誰がかけた『待った』なのかを理解する事もできず、俺は案山子のように黙りこくった。ただ、『この先に踏み入りたくない』という感情だけを漠然と抱きながら。

不自然な沈黙が生まれる。耳鳴りが喧しい。場の空気を察してか、レフィーヤが取り繕うように口を開いた。

『す、直ぐに思い浮かばないなら、明日私達と街を回ってみませんか？

何か良い物が見つかるかも知れませんし』

『おお、いいツスね!』

『そうね。もし欲しい物が見つからなくても、美味しいごはんでお祝いも出来るもの』

レフィーヤの提案に対し、満場一致で採用という空気が流れる。

俺は慌てて制止をかけた。

『おい、なに勝手に進めてやがる? 俺は行くなんて一言も——』

『ええ、マシロは私達とお出かけするの嫌なんですか?』

『いや、それは……』

『もう……なら、今欲しい物を決めてちょうだい』

うるうるとうとエルフラしからぬ馴れ馴れしきで瞳を潤ませるレフィーヤと、ヤレヤレと手を腰に当てながら希望のプレゼントを催促するアナキティ。

『そもそもプレゼントなんか要らねえよ。別に団員全員の誕生日を律義に祝ってる訳でもないだろ』

構成員の少ないファミリアならそれも可能だろうが、「ロキ・ファミリア」程の規模になると物理的に無理がある。第一、冒険者などという利根的な生き方を好む連中は、自分の生まれた日など意識していない者が多い。俺もその例に漏れず、正直、今アナキティに言われるまで失念していたぐらいだ。そして、それはきつとコイツ等も同じだろう。恐らくは、俺が派閥の最年少だから気を遣ってくれたのだ。けれど、特別扱いをする必要など何処にもない。

『まあまあ、そう言わずに。なんなら物じゃなくても良いツスよ?』

例えば……』

『ラウルを丸一日扱き使える権利とか?』

『アキ!? 何すか、その恐ろしい発想は!?!』

『いいだろう。それで手を打ってやる』

『マシロ!?!』

話を終わらせるためにアナキティの冗談に乗っかる。

すると、ラウルの悲痛の叫びに隠れる形で、モジモジとレフィーヤが控えめに声を上げた。

『あ、あの、そういうので良いなら、こういうのはどうですか?』

『ん？ 何、レフィーヤ？ ラウル召使い券より良い物なんて相当ハードル高いわよ？』

『ラウル奴隷券（一生）に代替できるレベルなら考えてやる』

『どんな名前が酷くなってるツス!』

等と、半ばふざけていると……。

『アイズさんとお出かけできる券……なんて？』

沈黙が、場に鎮座した。

言い出したレフィーヤもその空気に耐え兼ねてか、『てへ』なんて首を曲げている。まるで地雷を踏んだと言わんばかりに、恐る恐る此方を窺うラウルたちの視線が煩わしい。きっと俺が口を開かない限り、この沈黙は永続するのだろう。

『……それがプレゼントになるのはお前ぐらいだろ。そもそも、アイツに話は通してるのか？』

『ま、まだですけど……』

『なら頼んでみるといい。首を縦に振るかどうかは知らんがな』
『……』

今度はレフィーヤが押し黙ってしまった。

ふざけるな、結局こんな空気になるのかよ。

そう内心毒吐いていると……。

『そんな悲しいこと言わないで下さい……。きつと、アイズさんだつて』

続きの言葉は、いつまで経っても彼女の口から放たれなかった。

『まあまあ、その辺にしておきましょう。マシロ、欲しい物が決まったら今日中に私かラウルに伝えに来なさい。来なかったらこっちで勝手に選ぶからね』

そう言い残し、アナキティはラウルとレフィーヤを連れて去って行く。

小さくなつていく奴等の足音が妙に耳に響いた。

——こんなやり取りがあつたからだろう。柄にもなく、誕生日だからという理由で、街をぶらつく事にしたのは……。

——いや、なんとなくあの3人のいる本拠ホームに居づらいつつたのも理由の一つなのかも知れない。

後日、図らずもレフイーヤの言う『プレゼント』が実現する事となつた。なんの間違いか、アイズが俺との外出を了承してしまつたのだ。最初は当然困惑した。何しろ、4年近くも会話すらなかつた肉親である。何を喋つたらいいか分からないし、正直気まずい。

けれど、実際に息苦しい時間は最初だけだつた。これまでの無関心が嘘であるかのように、姉が積極的に話しかけてきたからだ。……いや、あれが『積極的』と表現できるレベルなのかは分からないが、元来口数の多くないアイズが俺に対してと考えると考えれば充分異常事態と言つて良いだろう。

当時の俺は気付いてすらいなかつた。

いや、気付こうとさえしなかつた。

だが、今なら分かる。

俺はこの時、『楽しかつた』のだ。

何気ない会話に花を咲かせる。

並んで街を練り歩く。

ジャガ丸くんと一緒に頬張る。

武器屋や雑貨店を見て回る。

行きつけの酒屋で夕食を摂る。

そんな当たり前の時間をアイズと共有できた事が『嬉しかつた』。長年胸につかえていた引つ掛かりが取れたみたいで、酷く気持ち晴れた。それこそ、4年間にわたる長期の冷戦状態を、何かの間違い

だったと考え始めるぐらいには。

この時間が、もつと続いて欲しいと何処かで思った。今日限りの誕生日プレゼントなんてケチ臭いこと言わずに、明日以降もずっと、こんな風に。昔みたいになれ……。

でも、やっぱりそんなのは都合の良い妄想で……。

結局、奴は、俺の前から姿を消した。

設定金額が高めの『豊穰の女主人』で、2人分の料理の会計を押し付ける形で、突然走り去っていったのだ。俺が咄嗟に口にしたのは店の会計に対する心配だったが、それはせめてもの抵抗である。置き去りにされた事に対してではなく、支払いを押し付けられた事に対して憤っている。そういう体を装わなければ、心がもたなかったから。

だって、こんなの完全に嫌がらせだ。悪意があったとしか思えない。嫌いな相手を困らせる為に会計を押し付けた。それ以外に解釈の仕様が無い。

要するに、今日の楽しそうな素振りとは全て演技だったという事だ。

きつと『マシロと一緒に出かけさせてあげて下さい』とでも、あのお節介妖精レライヤに頼まれていたのだろう。可愛がつている後輩の頼みは無碍にも出来ず、渋々了解した。だが、ついさつき限界を迎えて仮面を脱いだ。

きつと、そういう事なのだ。

やっぱり俺は、4年前のあの日から嫌われていて、アイズの中で許容できない存在に分類されていたのだろう。この日から、俺の中でアイズから嫌われているという認識はいっそう強固なものになった。

また昔みたいになれる。

そんな期待をしてしまうから、裏切られた時にショックを受ける。だったら、最初から期待しなければ良い。今回の一件で身に染み込めた。徹底的に、アイズは俺の事が大嫌いなんだ。和解なんて出来ない。過去の発言は取り消せない。姉との関係は一生このままで、俺達の道は未来永劫交わらない――。

そういう認識で生きていけ。
簡単なことだろう。今までも、ずっとそう言い聞かせて来たんだから。

なのに、そんな俺の決心を色んな奴らが否定してくる。

【勇者】が。

善神の女神が。

彼らが信用できる連中だという事実が始末に負えない。
派閥の団長は言わずもがな、ヘステイアは『超越存在』である神だ。そんな両名に同じ事を言われれば、どうしたって心が揺らぐ。そうなのではないかと、期待の感情が芽生えてしまう。

そして、何より――。

『私は、君のことが大好きだよ』

アイズ自身にも、そう吐露された。

嘘だと思った。条件反射で。

わざわざ部屋を尋ねてまで、そんな嘘を吐く意味は無いと頭では分かっているけど、どうしても姉に自分が好かれているという方程式が結びつかなかった。

けれど、追い打ちをかける様にアイズは続けた。彼女が俺を無視するようになったのは、ロキやリヴェリア達に『あまりベツタリしていると、その内嫌われるぞ』と助言されたからだ。その弁明を聞いた瞬間、げんきんにも俺の心は軽くなったんだ。

完全に初耳……寝耳に水。でも、同時にあり得なくもない助言だとも思った。当時は当たり前すぎて気付いていなかったが、確かに以前の姉のスキンシップは『異常』の一言だったから。そんな相手に甘えに行っていた俺自身も大概だが、とにかく常識的な感性を持つ首脳陣なら、上記のような注意をしても不思議ではない。寧ろ幼い姉弟を引き取り実の子の様に育てて来た身からすれば、苦言を呈して当然の案

件だろう。

無論、どうして一切口をきかなくなったのか？ という疑問は残る。けれど、それに関しても、無器用すぎる姉の調整ミスだと考えれば、苦しくはあるが一応の筋は通ってしまう。

仮にこの弁明が事実だった場合、アイズが俺から離れた事実とアイズ自身の感情は全くの無関係という事になる。要するに、これまで熱心に刷り込んできた『姉に嫌われてしまった』という認識その物がひっくり返ってしまう訳で――。

魅惑の果実に手を伸ばしそうになる。

でも、実際には伸ばせない。

これで心を許して、油断して、そしてまた裏切られたら。

リヴェリア達に注意されて距離を置いたという発言自体が嘘だったら。

結局、アイズに嫌われていたら。

その事実を知ってしまったら。

きつと、俺はもう耐えられない。

俺は動けなかった。信じたい気持ちと臆病な心に板挟みになって、頭が真っ白になっていた。そんな中で、姉の言葉が滑り込む。それは決別の言葉だった。自分には俺と仲直りする資格がないから。それが分かったから、もう関わったりしない・と。耳を塞ぎたくなる台詞が紡ぎ出される。

『……………ばいばい、シロ』

そう、悲しそうに微笑まれても、俺は彼女を追い駆ける事が出来なかった。そればかりか。

ほら、見ろ。

やっぱり遠ざかるんじゃないか、と。

なんだかんだと理由をつけて、結局俺から離れていく癖に、と。

心の中で悪態を吐いて、必死に自分を守った。これ以上傷つかない様に、期待しそうになる心を上書きするのに躍起になった……。本当は、今すぐにも駆け寄って、その白い手を取りたかった癖に。

結局、俺が自分の気持ちを確認する事ができたのは今の際に立つてから。【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイア}に文字通り殺されかけて漸くだ。我ながら強情すぎて笑えない。

—— やつと、アイズと仲直りしたいと思えたのに。

例え、やつぱり嫌われていたんだとしても関係ないと。謝って、関係修復の努力をしたいと、そう心の底から思える様になったのに。そんなちっぽけな願いさえ叶えられずに息の根が止まる。

—— でも、それは仕方のない事だ。

だって、これはきつと、死の恐怖に支配されるまで自身の気持ちにも気付けない……愚鈍すぎる俺への報いに他ならないのだから。もしくは、最期まで外面を気にし、新米冒険者を助けようと思いがつたツケなのかも知れない。結局、ベルは俺の助力など借りず過酷を征して見せた。俺なんて、はじめから必要なかったのだ。完璧にこちらの独り相撲。道化のように馬鹿げたスピードで成長していく兎なんかより、俺の方がよほど道化というもの。

—— そんな哀れなピエロには、こんな結末がお似合いだ。

後悔に塗れたまま、何一つ成し遂げられずに息絶える。

犬死こそ、俺に相応しい末路というもの。

—— だから……もう、やめろ。

—— いつまで未練がましく生に縋りついているつもりだ……。

—— 助かる訳がないんだ。上層域とは言え、地下迷宮内部で法外な重傷を負い、スキルで治療の芽を丸1日摘んでいる状態だぞ？

—— リリルカ・アーデが救い出すのはベル・クラネルだ。

—— 俺はまず間違いないダンジョンの中。

—— 仮に運よく他の冒険者に運び出されたとしても、治療ができない事には変わりはない。アミッドが治療に当たったとしても、その事実は動かない。

—— なのに……どうして、まだ自我が残っている？ 何故思考できる？ 意識がある？ 肉体はもう限界の筈なのに、なんでまだ精神が引つ付いたままなんだ？

—— さつさと沈め、みつともない。この期に及んでまだ生きようとしているのか？ 無理な理由は散々あげつらった筈だろう。あれだけの要因を挙げられて、どうして未だ納得できない？ そんなに死ぬのが怖いのか、臆病者め。

—— お前は冒険者だろう。自分の命を質に出して、迷宮に潜っていた筈だろう。

—— なのに、なんで。

—— なんで、俺はこんなものを視ている？

—— どうして、過去の映像が浮かんでくる？ どうして、姉の後ろ姿が消えて無くならない？

—— なんで……手を伸ばせば届きそうな所に……アイズが見える？

—— もうやめてくれ。どうせ死ぬのに、こんな妄想をしないでくれ。俺は、もう死ぬから。大人しく消えるから。だから……。

—— こんな希望ものを見せないでくれ……。

『そんなになら追いかければいいじゃん』

頭を抱えていると、幼い自分の声が脳内に響いた。

すぐ横に視線を落とせば、過去の自分がそこにいる。心底不思議そうに、俺を見上げて首を傾げている。

『どうせ、死ぬんでしょ？　じゃあ最後ぐらい好きなようにすれば？
へるものでもないし』

『……………うるさい』

『また、つまらないイジはって。はいはい、もういいですよお』

『……………！』

呆れた顔をひとつ残して、昔の俺は軽やかに駆け出した。前に向かって、真っ直ぐに。

進行方向には金の長髪が靡いていて。

小さな俺が、当たり前のように、アイズの手を取って微笑みかける。アイズはそんな俺の頭を一度撫でると、手を繋ぎ直して歩き始めた。昔の俺と一緒に、俺から遠ざかって行く。ドクンと、心臓が大きく跳ねる。嫌な汗が出る。

——行かないでくれ。

その言葉が、喉から出そうになった。でも、吐き出せない。

苦しい。呼吸が止まりそうだ。

けれど、そんな時。

不意に、小さな俺が、俺に顔を向けた。

そこには、此方を煽る様な勝ち誇った笑みが浮かんでいて——。

瞬間、俺の中で何かが弾けた。

気が付けば、足が途轍もない勢いで回転している。見る見るうちにアイズ達との距離が縮んで行き……無我夢中で過去の俺からアイズの手を奪い取った。まるで、そこは俺の場所だと主張する様に。

突き飛ばし、体勢の崩れた昔の俺の顔が視界に入る。昔の俺……俺の本心は、満足した様に笑っていた。

次の瞬間、唐突にマシロの視界がホワイトアウトする。そして、視界に白い何かが広がった。それを天井だと理解するのにたつぷり10秒以上時間をかけ、終ぞ理解するよりも先に他の感覚が復活し始めた。唐突に薬品の匂いが鼻孔を満たし、全身に痛みと重み、それと倦怠感が襲って来た。けれど、何故か右手だけは心地の良い温もりに包まれていて――。

「シロ……っ？」

「……………え？」

名前を呼ばれて反応を示すのに、ワテンポ以上遅れる。発した声も、驚くほど小さい。首が思う様に動かず、殆ど眼球のみで横を見る。どうやら、包帯まみれの自分の手の上に、誰かが手を重ねている様だ。だから、手だけは温かい。痛みも薄い。あんなに雪みたいないない手なのに……。

「シロ……っ？」

また、名前を呼ばれた。今度は、さつきよりハッキリと。聞き覚えのあるその肉声に、脳裏に誰かの顔が浮かび始める。しかし、完璧に像を結ぶより先に、頭上からサラサラとした金の髪が垂れ下がって来た。次いで、まん丸い金目が視界の枠内に収まり、『心配』を絵に描いたような表情が眼前に広がる。小振りな唇が、そつと動いて――。

「大丈夫……？ 私のこと、わかる？」

「アイ……ズ……？」

アイズ。

姉がそこにいる。

どうして居るのかは分からない。

けれど――その事実を認識した瞬間、胸に何かが入り込んできた。目頭も急激に熱くなり、肉体が正常な状態にないことが理解できる。まるで体内に溶岩が出現し、洪水が発生しているかの様な。『気を抜けば情けない姿を見せる』……そんな認識だけが脳内を駆け巡り、マシロは無意識の内に自分の喉を閉めた。

でも――。

「よかった……よかったよ。シロ……」

ボロボロと涙を流す姉の顔を見て、マシロの喉はあえなく決壊した。嗚咽が漏れ出る。聞くに堪えない、不格好で不細工な声の塊だ。哄笑とも慟哭とも取れない中途半端なソレが、濁流の様に不規則に喉から漏れた。

自分は生きているのか？ 生きているなら、ここは何処で、何故助かったのか？

そんな疑問は当然ある。けれど、今はどうでも良かった。正しい行動なんか二の次で、少年は、姉に一番言いたい事を口にした。

「いめん……なやん」

「えっ？」

やっと告げることのできた謝罪の言葉。

対して、アイズは驚いた表情を見せる。さんざん意固地になって、自身を突っぱねて来た相手からの謝罪だ。いったいどんな心変わりがあったのだと驚倒に支配されるのは仕方ない。本来、マシロは自身の心境の変化の流れを説明するべきなのだろう。それは分かっている。しかし、どうしても涙も懺悔も止まらなかった。

「ごめんなさい……ごめんなさい！ ひどい態度ばかりでごめんなさい……！」

口が堅い。舌が重い。喉が痛い。声が細い。

ちゃんと喋れているだろうか。きちんと、謝れているだろうか。その自信がないからか、マシロの謝罪は途切れる事が無かった。そして、マシロ自身、最早涙でアイズの様子が分からない。許されているのか、それとも今更遅いと憤られているのか。目元を拭えば直ぐに確認できるが、両手は物理的に動かせなかった。

けれど次の瞬間、視界には微笑を湛える姉の顔が映し出される。

アイズが目元を拭ってくれたのだと理解した瞬間、口元に人差し指を当てられた。

「あやまらないで？ シロはなにも悪くない。ごめんね、君が怖い思いをしている時に、側にいれなくて……。こんなに、ボロボロになって……」

責任のない事に対して謝って来る姉に、マシロはブンブンと首を左右に振った。「ちがう」と、「この傷は、俺のせいだから」と、そんな主張を涙声でする。

きつと、碌に聞き取れはしなかっただろう。

けれど、どうやら姉は弟の言いたい事を汲み取ってくれたらしい。

「ありがとう、シロ。生きていてくれて……、私を独りにしないでくれて……！　ほんとうに……！」

感極まった様子 of アイズに、そっと抱きしめられる。マシロの身体を動かさない様にといい配慮が働いたからだろう。上から覆いかぶさる形で、しかし体重はかからないよう細心の注意が払われている。人肌の温もりが身体を包んでいく。

『ありがとう』『生きていてくれて』『私を独りにしないでくれて』

それらは、以前なら冗談だと決めつけて取り合わなかった類の言葉だ。けれど、今はスルリと胸の中に入ってくる。すんなりと受け止められる。『信じるな』『気を許すな』と未だに片隅で叫ぶ臆病な自分を押しつけて。マシロの心は、アイズによって溶き解されていった。

【リトル・アイズ】マシロ・ヴァレンシユタイン。彼はこの日、ようやく何重にも着込んでいた棘だらけの鎧を脱ぎ捨てた。脇目もふらず、目の前の姉にどう思われるかも度外視にして……騒ぎを聞きつけた【戦場の聖女^{デア・セイント}】等が駆け付けける迄、ただただ幼児の様に泣き続けた。

それは、時を止めた彼の本心の発露に他ならない。4年間も自分の心を偽り続けた空虚な少年は、ようやく己の弱さと向き合い、認め、時計の針を進める事ができたのだ。

第二十八話

午前8時00分。

それは【ディアンケヒト・ファミリア】の治療院が、入院患者に朝食を提供すると定めている時刻だった。各個室に各患者に合わせた食事が運び込まれ、必要に応じて看護師が食事介助を行う場合もある。

こういった対応をされるという事は即ち、自力摂取ができないほど衰弱しているか、何らかの理由で利き手が使えなくなっているという事なので、本来決して喜ぶべき状態ではないのだが、【ディアンケヒト・ファミリア】の女性眷属は何故か誰も彼も超絶美人。絶世の美少女達に合法的に食べさせて貰えるとあって、介助決定を喜ぶ者が大半だった。

そして、他の冒険者達からは、僅かな羨望とえげつない嫉妬心向けられる事になる。人手の問題でアミッドが担当した際などは、その患者が退院後同業者にリンチにされてしまった程だ。まあ、調子に乗ったその冒険者が、誰彼構わず自慢しまくった自業自得でもあるのだが……。

こういう前例がある以上、『彼』も似たような運命を辿ってしまう可能性は否定できない。何故なら彼の食事介助を行っているのは、あの【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。この迷宮都市に於いて、聖女と同等かそれ以上に男性人気の高い有名人だからだ。

「はい、シロ。あーん」

一時期は、その無表情さを『人形姫』と揶揄されていた彼女が、砂糖何杯入ったと言うぐらいに甘ったるい声を添えて、スプーンに掬ったお粥を差し出す。しっかりと、自身の息を吹きかけ適温にしてから・というオマケつきでだ。ロキやレフィーヤ含め、大半の冒険者達が鼻血を噴射して地面に後頭部を打ち付けるシチュエーションだろう。とんだ恵まれ野郎が居たものだが、ではソイツはいったい誰なのか。

「ん……」

パクリと、小振りな口でお粥にパクついたのは、銀髪銀目の小柄な少年だった。マシロ・ヴァレンシユタイン。アイズ・ヴァレンシユタインの弟にして、唯一の肉親。ダンジョンで瀕死の重傷を負い、【剣姫】直々に治療院に運び込まれた彼は、1週間の昏睡期間を経て2日前に目を覚ました。アミッドによる懸命な治療のお陰か、アイズの血液を浴びた際に起こった肉体回復の度合いが想像以上に大きかったのか、既に容態は少量なら食事を摂れる程度まで改善している。

但し、それは『両手以外』の話だった。槍で貫かれ、人差し指と中指を丸々失った右手と、粉砕骨折している左手首。流石にこれらは一朝一夕で治るものではなく、当然何か物を持てる状態でもない。だから、こうして誰かに食べさせて貰う必要がある、その役目に姉が名乗りを挙げたという訳だ。

無論、最初こそ『治療院の人間が行うから』と渋られたが、結果的にその役割を、面会時間を無視した24時間の看護権と共にもぎ取る事に成功している。

「おいしい?」

「あ、ああ……」

弟の顔を覗き込む姉は、嘘だろと思うぐらいの笑顔を輝かせていた。まるで、日の光を存分に浴びた満開の花々の様だ。加えて、全身からハートマークが噴出している様にも見える。ノリノリだ。いっそ、怖いぐらいに。対してマシロの方は、アイズの余りにも過保護過ぎる対応に困惑を隠せない様だった。加えて、何か言いたげに顔を曇らせている。

「……? どうかした?」

「その……もつと事務的というか、普通に食わせて欲しいんだが……」

その要望に、【剣姫】はキョトンと頭を傾げた。

「普通にしてるよ?」

「嘘つけ、普段そんな馬鹿みたいにニヤケてねえだろ。あと、フィンに発情するティオネみたいな声もやめろ」

「えつと、ティオネみたいな声はよく分からないけど……。顔はごめ

ん、無理……かな」

「なんで？」

マシロの問いに、アイズはスプーンをお盆に置いて、自らの両手で頬を挟んだ。そして、一瞬無表情を作ったかと思うと、即座に口角がゆるゆるになる。

「ニヤケてるつもりはないんだよ？ でも、ダメなの。どうしても頬が緩んじやって」

「……………」

「シロはイヤ？ 子供扱いって思う？」

「それは……………」

答えは、なかなかマシロの口から発せられなかった。

どう答えるべきなのか。否、どう感じているのかをどう表現したら良いか分からない。彼の表情からは、そんな心境が読み取れる。仮にマシロの気持ちを代弁するなら、『子供扱いは嫌だが、嫌悪感は思ったほどではない』と、言った所だろう。

つまりそれは、アイズに構われているこの状況を、幼児の様に接せられる以上に喜んでしまっている事を意味している。

「嫌じゃない……………。嫌じゃない……………。けど、その……………くて」「ん？」

思い切り言い淀んだその回答を、アイズは聞き逃してしまった。ズイツと、元から近かった顔を更に接近させる。パーソナルスペースなんて概念、在った物じゃない。対してマシロは、プイツとそっぽを向きながら更に小声で呟いた。

「……………は、恥ずかしくて」

「恥ず、かしい……………」

パチクリと、金の瞳が瞬きする。その返答は、アイズにとって完全に想定外だった様だ。呆然と復唱したかと思うと、今度こそ椅子から立ち上がる。何をするつもりなのかは、今の彼女の表情からは読み取れない。だが、無理にでも考察して身構えておくべきだったと、マシ

口は3秒後に後悔する事になる。ヌルツと、なんの前触れもなく、病室と廊下を繋ぐ出入り口に向かってアイズは叫んだ。

「アミッドいる!? シロが……シロがとっても可愛いのだ!!!」

とても華奢な少女の腹から発せられたとは思えない超特大音量の惚気が、治療院の1階フロアに木霊する。唐突且つ意味不明……それでいて妖精の唄をも想起させる美しい歓声は、廊下を歩いていた職員や患者のみならず、別の病室や診察室にいた者達の注目さえも容易に奪った。ガチャガチャと扉が開き、何事かと幾人もの従業員が廊下に顔を覗かせる。

ひとつ上の階にいた【戦場の聖女】^{デア・セイント}も例外ではない。純粋なヒューマンである彼女の聴力は平凡の一言だが、それでも作業中の彼女の耳に届いてしまった。やがて、小柄な人間の足音が廊下を駆ける。凄まじい速度でこの病室に迫って来るかと思うと、あつという間にアミッドが姿を現した。正直、声の大きさはともかくとして、何故あの発言内容でそんなに血相を変えられるのか分からなかったが……。

「ど、どうしました!? 途轍もない大声が聞こえてきましたが、まさかマシロさんの容態が——」

どうやら、他の階にいたが故に、アイズの叫び声は断片的にしか聞き取れていなかったらしい。それならば、世にも珍しい【剣姫】の大声に、そんな勘違いをしてしまうのも無理はない。

けれど実際、マシロはピンピンしている。上体を起こし、気まずそうに顔を歪める姿を目の当たりにし、聖女はこれでもかと困惑を滲ませた。アイズに視線で説明を求めるも、彼女に混乱をもたらした張本人は、見せつけるかの様にマシロ^弟を抱きしめ始める始末で……。

「あ、あの……、これはいったい……?」

「……なんでもない。大声出して悪かった」

「は、はあ……」

謝罪するマシロから追及されたくない空気を感じ取り、アミッドもそれ以上は踏み込めなくなる。同時に、これまで見た事もない【剣姫】

の姿に絶句した。ファミリアぐるみでの付き合いのある彼女は、アイズが世間で思われているほど怜悯な人物でない事は知っている。想定以上の天然ぶりに肩透かしを喰らった経験だって何度かあるが。

流石にコレには実感が湧かなかった。夢でも見ているのかと思う。こんな……特定の誰かに仮借ない『愛情』をぶつける姿など、【剣姫】というより、フィン・デイムナに対するティオネ・ヒリユテのイメージに近い。しかも、肉親である分、此方の方が遠慮がないと来ている。ここで、蕩けた顔で弟に頬擦りを繰り返していたアイズが、ガバツと聖女へと向き直った。

「あのね、アミッド」

「は、はいー」

アミッドは現実には引き戻される。

アイズの口調に特別重苦しさがあつた訳ではない。ただ、普段通りに戻っただけだ。いつも見ている人形のような表情。それが、先程迄の面持ちとのギャップを産み、シリアスな空気を創り出している。

【戦場の聖女】デア・セントは、【剣姫】としての彼女の言葉を待つ。が、残念ながら真面目な空気は、長く続かなかつた。

「シロがね、私の『あーん』に照れちゃって」

「……………はい?」

「もう、本つつつつつつつ当に可愛くて!」

「……………」

唾然と困惑が入り混じった聖女の瞳がマシロを射抜く。彼は、盛大

に冷や汗を流しながら目を逸らした。頭から湯気を噴出し、全身をトマトの様に真っ赤にして。

ここで、アミッドはようやく理解した。この騒動は緊急事態でもなんでもなく、『弟狂い』^{アイズ}による只の傍迷惑な暴走でしかないのだと。凄まじい徒労感と脱力感が彼女を襲う。そんな心情も知らずに、アイズは更なる燃料を投下した。

「なんで実のお姉ちゃんに照れちゃうのかなあ？ この子は、もうもう♪」

「もう出禁になれよ、お前………」

その後、「剣姫」が聖女からありがたいご教授……もとい、長時間の説教を頂戴したのは言うまでもない。ついでに、また今回みたいな騒動を起こした場合、即出禁にするといい渡され、この世の終わりみたいな表情を浮かべていた。

：

時を2日ほど巻き戻す。

マシロ・ヴァレンシユタインが一命を取り留めてから7日目のこと。【ロキ・ファミリア】の本拠、^{ホーム}『黄昏の館』にて、首脳陣が話し合いの場を設けていた。議題は、『マシロを襲撃し、瀕死にまで追いやった犯人』についてである。

マシロがパーティーを組んでいたという新米の冒険者の少年とサポーターの少女、そして実際に治療に当たったアミッドへの聞き込みも既に終わらせている。現状、最も疑わしい冒険者と会敵した^{副団}リヴェリアの意見も統合した上で、フィン・ディムナは自らの見解を口にした。

「恐らく、リヴェリアが接触した『異形の冒険者』は、今回の件に関わっていない。マシロを襲撃した主犯は他にいる」

場に動揺は広がらない。

件の『異形の冒険者』にマシロの指が食い千切られているのは事実

だというのに、この場にいる全員が目の前の男の推測に水を差す事を良しとしなかった。リヴェリアアでさえ、自身の所感よりも【勇者】の推測の方が信用できると静観を決め込んでいる。

「リヴェリアアと、リリルカ・アーデという少女が聞いた限りでは、奴の目的はあくまでも『マシロを食べる』ことらしい。間違っても『喰い殺す』ことが目的ではない」

「喰らう事を殺しの手段としている」訳ではなく、『喰らう事そのものが目的』……か。恐らく、マシロを喰うことに何かしらの『益』があるんじゃないが、確かにそれなら瀕死になるまで攻撃を加える必要はないな」

フィンの主張に、ガレスが納得した様子で頷く。

冗談抜きに、【リトル・アイズ】は死ぬ寸前だった。アイズの血が起こした奇跡がなければ、そのまま天界に還っていただろう。感覚的な話にはなるが、こういう『誰かを喰って、その誰かが持っていた特別な力を奪い取る』という話に於いて、『殺してから喰う』は通用しない気がする。死んだ肉体にまで、特別が宿っているとは思えない。仮に関係なかったとしても、わざわざリスクを取る必要はない。『異形の冒険者』は推定Lv. 5以上。Lv. 3程度、生け捕るのは容易だろう。

「じゃが、マシロは【隷属演陣】^{スレイブ・アクト}を使ったのだろうか？ 奴にその気が無くとも、意図せず殺しかけてしまったという線はないのか？ 実際、マシロの肉体に、致命傷になるような傷は無かったという話じゃが……」

同調すると同時に、ガレスは不可解な点もぶつけて来る。そして、それは確かに有り得なくもない観点だった。マシロが生死の境を彷徨ったのは、あくまでも回復不能のデメリットを抱えるスキルを使っただが故の事故。意図せず出血死させかけてしまったと、そう考える事も出来る。

その指摘に対し、フィンは聞き取りを行った少女の証言を思い起こした。

「リリルカ・アーデという少女から聞いた話では、『異形の冒険者』は

マシロに並々ならぬ憎悪を抱いていたらしい。故に、その可能性も大いにあるだろう」

そして、ガレスの主張の妥当さを肯定した上で、ハッキリと反対意見を口にする。

「でも、もしそうだったなら、その場で喰い殺せば良かっただけの話さ。わざわざ一度見逃し、ベル・クラネルの救出に向かさせる必要はない」

「！」

「道中でマシロが死んでしまう可能性もあったんだ。奴からすれば、どうしたって『その場で喰う』が最適解だよ」

「成程な……」

ここで、ようやくリヴェリアが口を開いた。唯一『異形の冒険者』と相対した彼女は、他2名より奴が犯人に違いないという認識が強い。だから、自分の中で白か黒かの決着が着くまで己の意見はノイズにしかならぬと発言を控えていたのだが……。

「フィン、お前の考えは分かった。私もその意見に賛同しよう」
そこまで言って、リヴェリアは翡翠の瞳に鋭く細める。

「但し、奴は本物の『狂人』だ。直接会っていないお前達は、まだ真の意味で理解できていないだろうが、我々の理論理屈が通用しない可能性もあり得る」

「あまり、常識的な考え方に囚われるべきではない……そういう事か
い？」

「ああ。だが、こう忠告しておけば、お前なら足元を掬われる事もないだろう」

「期待に沿えるように頑張るよ」

フィンがおどけて見せた所で、空気を締めるようにガレスが本題を口にする。

「では、フィン。お主は、真の襲撃者の正体をいつたい誰だと思ってる？」

「……………見当も付かない」

「おこ」

あまりにも神妙な顔で言い切る団長に、エルフとドワーフは口を揃えてつつこんだ。

「というより、候補が絞り込めない。マシロのやられ振りから見ると、相手の力量はあの子を遙か超越している。それこそ、風を纏った彼の長所スビドさえ赤子扱いできるぐらいの実力差だ」

「確かに、『エアリエル』を扱えるマシロがL v. 4程度に殺されかけるとは考えづらいな。勝つのは無理でも、逃げるぐらいは出来たはずだ。仮に戦っても、あれほど一方的な蹂躪にはなるまい」

マシロが発現させているのは、【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインと同一の魔法だ。攻撃性能防御性能共に尋常ではない。ステイタスそのものは、同レベル帯L v. 3に中でも中間層だが、魔法さえ使ってしまうばトップ層に躍り出る。

「ああ。そうなると、マシロを襲ったのは必然的にL v. 5以上。幾らオラリオが広いと言っても、『第一級冒険者』の数はそう多くない」
フィンの発言に、ガレスとリヴェリアは脳内に、都市内の主だった『第一級冒険者』の顔を思い起こした。

「ロキ・ファミリア我々」は除くとして、「ヘファイストス・ファミリア」の樁も排除してよかろう。派閥ぐるみで懇意にしているというのを取っ払っても、あの鍛冶師がマシロを殺そうとするなど考えられん」
【ガネーシャ・ファミリア】のシャクテイ・ヴァルマも同様だな。都市の憲兵……その長が、我々に牙を剥く理由がない」

そして、大半の者達が即座に半人候補から消えてゆく。しかし、とあるファミリアの幹部たちが浮かんだ瞬間、その作業はピタリとストップした。頭痛をこさえたような表情で、老兵が唸る。

【フレイヤ・ファミリア】の連中は……正直人格的にも派閥の關係的にも白とは言い切れんかう」

「ああ。だが、流石に事が事だ。我らと全面戦争になる事は容易に想像できただろう。幾ら彼らでも、そこまで不用意なこととはしな思いうが……」

「彼らは気まぐれな所があるからね。今の所、『未確認の第一級冒険者相当の力を持った敵』と同じぐらい【フレイヤ・ファミリア】も容疑

者の一角だ」

「……もし、マシロを襲ったのが本当に「フレイヤ・ファミリア」だった場合は」

「決まっとるやろ！」

バンと、注目を集める様に、団長室の扉が開け放たれた。ドカドカ大股で入室してくるのは、朱い髪が目を引き麗人……。否、人ではなく、『神』だ。唐突に現れた主神ロキに首脳陣は目を丸くする。

そんな反応もお構いなしと言わんばかりに、ロキは躊躇いなく言い切った。

「戦争や。『二大派閥』だとか、『パワーバランス』だとか、そんな大人の事情関係あらへん。ウチの子らに手え出したらどうなるか、あの色ボケ女神に存分に思い知らせたる」

平時では考えられないドスの利いた声は、「ロキ・ファミリア」の『第一級冒険者』をして肝を冷やす程だった。実力では負けようがない。しかし、計略で首を落とされる事が容易に分かる。

けれど、主神はそんな雰囲気、次の一瞬で一辺させた。

「と、まあ、物騒な話は一旦お終いや。ビッグニュース持って来たで！」

「ビッグニュース？」

リヴェリアが聞き返した所で、開け放たれた扉から忙しない足音が聞こえて来た。程なくし、ラウルとアナキティが大慌てで入室し、挨拶もなく報告する。

「だ、団長……！」

「マシロが……、マシロが目を覚ましたそうです！」

「……！」

その一報は、瞬く間に『黄昏の館』全体に広がった。

そして、大いに沸き立つ。

彼と仲の良かった者、それ程でもない者関係なく、
弱冠¹ミア²最年少の少年が死にかけたと言う事実にならず動揺
し、衝撃を受けていたからだ。

無論、自らの意思で冒険者となった以上、全ての傷は自己責任。子
供だからと言って、問答無用で庇護対象にして貰えるというのは、単
なる甘えである。実際、Lv. 3のマシロは「ロキ・ファミリア」内
でも、どちらかと言えば『庇護する側』だった。

が、そんな厳しい意見を持つ現実主義者達も、の実際ベッドに寝か
されたマシロの姿を見た瞬間、心を折られる。実年齢より遥かに小柄
なマシロは、意識が無い状態では本当に脆い子供にしか見えなかった
のだ。

どうして自分達は、この子が襲われている時、その場においてやれな
かった。どうして、別の場所でのうのうと攻略していた。若しくは、
何故ダンジョンにすら籠っていないかった。そんな、無茶すぎる後悔が
心を覆う。若い構成員などは、レフィーヤやエルファイ等を筆頭に泣き
じやくった。

故に、既に21時を回っていたにも関わらず、「ロキ・ファミリア」
の眷属達は治療院へと殺到した。無論、本拠^{ホーム}に居た者達のみ
の強行にはなるが、それでもかなりの人数で押し掛けた事には変わりはない。
治療院内の従業員は既に担当や常駐医以外は帰宅しており、大人
数への対応は熾烈を極めた。

後日、「ディアンケヒト・ファミリア」から「ロキ・ファミリア」へ、
直々に苦情の連絡を入れられたのは言うまでもない。

第二十九話

マシロが目を覚ましてから4日目。窓から心地の良い陽光が射し込む、14時頃の出来事である。その祝福の言葉は、弟の口から唐突に告げられた。

「そういえば、Lv. 6になったんだってな。おめでとう」
「……………」

慣れない手つきでリングの皮を？いていたアイズは、ハツとした顔で青ざめた。まるで、親に隠し事がバレた子供のような反応だ。想定していたリアクションとの余りの乖離に、マシロは眉を顰める。

「なんだよ。嬉しくないのか？」
「う、嬉しいんだけど……………」

アイズは口籠りながら目を逸らす。確かに、それは本来なら喜ばしい事柄の筈だ。ランクアップに胸躍らない冒険者などいない。特に強さに執着する【剣姫】からすればその嬉しさはひとしおだろう。しかし、今回ばかりは器が昇華する程の激戦に身を投じに行った事を、彼女は猛烈に後悔していた。

「その……、私がウダイオスと戦ってた時に、シロは襲われてた訳で……………」

「いや、ウダイオスってお前……………」

「いつも通りシロの尾行を続けてたら、今回みたいな事にもならなかったのに……………」

「……………」

「…………怒ってる…………よね？ お前だけ好き勝手して……………」

不安に濡れた瞳が銀の少年を射抜く。しかし、怒鳴られる事さえ覚悟していた彼女の耳に飛び込んだのは、呆れたようなため息だった。

「…………怒らねえよ。どれだけ俺のこと低く見積もってたんだ」

「で、でも……………」

「冒険者がダンジョンで負う傷なんて全部自己責任だろうが。それを他人に押し付けるほど、俺は落ちぶれてねえよ」

「それは……そうなんだけど」

一般論ではそうだ。

仮に重傷を負って戻って来たのが他の冒険者だったなら、アイズも同じことを思うだろう。心配こそすれ、ここまで露骨に自分を責めたりはしない筈だ。しかし、弟の事となれば話は別である。実際、ダンジョンで死にかけているマシロを見つけた時、彼女は本当に彼以外のことがどうでも良くなった。

正直な所、アイズは現状『黒竜』への憎悪の陰りを感じている。そんなものより今は、己の最愛を死の淵へと追いやった『誰か』と、彼の指を食いちぎった『異形の冒険者』を八つ裂きにしてやりたい。ロボロにされたマシロの姿を思い浮かべる度に、腹の底から黒い炎が際限なく燃え盛るのだ。既に1週間以上経過しているというのに、憎悪は一向に収まらない。

が、それも次の指摘により一旦鎮火させられた。

「つーか、お前いま、『いつも通り俺への尾行を続けてたら』とか言わなかったか？」

「え!? あ……、いや、えっと」

「……………」

失言に気付いた時にはもう遅い。テンパリつつもどうにか誤魔化そうとしたアイズだったが、弟から注がれるジト目に早々に白旗を献上した。

「ご、ごめんなさい。シロと話すチャンスがあればいいと思って……。

あと、……から」

「あ?… なんて?」

「そ、その……………女の子も……いたから……」

「……………は?」

カアアアアと、顔が火照る。真っ赤になったアイズは、羞恥心から金目をグルグル回す。が、言うべきことは言わなければと腹を括った。

「あ、あのね、シロ! お姉ちゃん、シロにはまだそういうの早いと思

う……………」

「お、おう?」

「シロも男の子だし、その……可愛い女の子に興味があるのは分かるけど……」

「ここで、マシロもアイズが何を言いたいのか察したらしい。鳩が豆鉄砲を食ったような表情で、慌てて弁明を始めた。

「いや……待って待って待って! なんてそんな認識になってる!? 男女混合のパーティーなんて何処にでもあるだろうが!」

「好きじゃないの? あのサポーターの子……」

「当たり前だ! つーか尾行してたんなら、俺がそんな素振りしてないのも分かってんだろ!」

「だって、ヘステイア様がそうだって……」

「はあ!? あの女神、何を根拠にそんな大ホラ吹いてやがる!」

よほど衝撃的だったのか、マシロは今日一番の大声をあげた。けれど、神が下界の住民の心情をそうそう見誤るとは思えない。加えて、ヘステイアは疑いようもない『善神』だ。面白半分で嘘を吐くとは考えづらい。

けれど、姉としての直感が『弟は本気で否定している』と告げており……。混乱の末、【剣姫】は自分以外の人間には意義を見いだせないであろう質問を投げかけた。

「じゃあ、私とあの子、どっちが好き?」

「……………!!?」

「どっち?」

弟は目を丸くして驚倒する。しかし、アイズは彼の気持ちを理解しながらも催促するように回答を求めた。その有無を言わせぬ圧力は、これまでのマシロに対する駄々甘な態度からは想像も出来ない。少なくとも、【リトル・アイズ】を献身的に看病する【剣姫】の姿を見て来た治療院職員には及びもつかないだろう。

「そ、それは……」

「うん」

「その……」

「うん」

「まあ……お前……だけど……」

「もう大好き！」

感無量。

アイズは間髪入れずにマシロの頭を、腕全体でギューツと包み込んだ。無論、力加減は完璧だ。痛がらせるようなヘマはしていない。そして、それが振り払われる事もない。以前なら拒否されていたスキンシップも、今のマシロは受け入れてくれる。

だが、今回に限って言えば振りほどく努力ぐらいはしておくべきだっただろう。結果論にはなるが、それを怠ったばかりに、姉からの抱擁を受け入れる弟の凶を、第三者に目撃されてしまう事になるのだから。

突如、勢いよく病室の戸が開け放たれた。

「目が覚めたんだってえ？ お見舞いに来たよお、マシロくん！」

「!!?!」

「あ、ヘステイア様」

快活な挨拶と共に入って来たのは、先程アイズの口からも名前の挙がった炉の女神だった。そして彼女の後ろに遠慮がちに続くのは、白兔を彷彿とさせる少年と、小人族と見紛う犬シアンスロープ人の少女である。途端に、アイズの腕の中でマシロが慌てふためいた。

「べ、ベル!? は、離れるバカ姉貴！」

「んー？」

が、姉は片時も離さない。それどころか抱擁を強め、最後に入室した茶髪の少女に対して勝ち誇った視線をぶつける始末である。

「うわ、すっごいドヤ顔」

「というか……なんでそのドヤ顔をリリに向けて来るんですか？」

「あ、あははは……。元気そうで良かったよ、マシロ」

「よくない……なんもよくない……帰れお前ら……」

「まあまあまあ」

茹蟄のように赤くなるマシロを、ヘステイアが愉快そうに宥める。そして、こそっとアイズに耳打ちをひとつ。

「仲直りできたみたいで良かったよ」

「……！」

そして、彼女が何かを言うより早く、お見舞いの品と思しき紙袋を手渡した。仄かに漏れ出る臭いから、中身が『ジャガ丸くん』であると見抜いたアイズは反射的にそれを受け取る。必然的にマシロは抱擁を解かれる形となった。

「……………」

ほんの僅かに、彼の顔が不服そうに膨れる。鈍チンな姉はその様子に気付いていない。まあ、気付いているのはヘステイアぐらいのものだった。

どうでもいい所で妙な目眦さを発揮する女神は、「おばちゃんに頼んでたくさん揚げて貰ったんだ！」と一頻り胸を張り終えた後、表情と態度を改めた。姿勢を正し、真面目な顔でマシロを見詰め始めたかと思うと、次の瞬間、躊躇なく腰を折る。仮にも『神』である彼女がだ。

「マシロ君。ベル君を助けてくれてありがとう」

「……！」

「親バカって思うかもだけど、ボクはベル君この子が本当に大切なんだ。だから、本当にありがとう」

「ぼ、僕も……！ マシロのおかげ生きて——」

「やめろ」

100%他意は無い……アイズ傍目から見てもそうだと分かるふたりの純粋な感謝に、マシロは気まずそうに制止をかけた。

「シアンスロープその犬 人から聞いてんだろ。俺は助けてない。その前に、お前は自力でミノタウロスを倒して助かった」

「でも、僕がミノタウロスに勝てたのは……」

「自分の功績を他人の手柄みたいに語るな。言われた方は惨めになる」

「……………」

マシロの言い分に、ベル・クラネルは眉をハの字にして押し黙る。流石にアイズも、今のは『余計な一言』だと思った。このままでは、弟

が場の空気を悪くした悪者になってしまおう。そう危惧した弟狂いの心配を、黒髪ツインテールの女神は一蹴した。ヒョイツと、軽やかにベッドに身を乗り出し……。

「えいつ」

「!?」

デコピンをお見舞いする。額を抑え、『?マーク』を大量に浮かべるマシロに対し、女神は満面の笑みを向けた。そして、アイズが文句を飛ばす前に口を開く。

「相変わらずデレがないねえ。『キミの素晴らしい功績をボクの手柄になんかできないよ……!』って、素直に言ったらどうだい?」

「……勝手に良いように取るんじゃないやねえ。俺は別に——」

「いや、絶対こう思ってるね。だって、キミは優しい子だもん」

「そういうのは、他に褒めるトコが無い奴に使う常套句なんだよ」

彼の捻くれた返答にアイズは心が締め付けられた。薄々気づいてはいたが、マシロは徹底して、己に対する『良い評価』を拒んでいる節がある。誰しもが持つ自己肯定感……それが満足に育っていないのだ。不遜な物言いをするから分かりづらいが、言葉の端端から自信の無さが滲み出ている。自分が周りより価値のない人間だと思っていなければ出せない歪みだ。それもこれも全部、アイズが彼を突き放し、多大なストレスを与えて来たからに違いない。

「そうかい?　じゃあ、優しくもなんともないキミが、なんでベル君を助けようと必死になってくれたのかな?」

「……それは」

「ああ、因みに『助けようとしてない』は通用しないぜ?　サポーター君……リルカ・アーデ君からの証言があるからね」

白い長手袋を嵌めた女神の腕が、大人の少女に向けられる。彼女はおずおずと一歩前を出た。

「リリ……私が『リトル・アイズ』様を見つけた時、貴方は既に満身創痍でした。身体の傷を理由に、ベル様を見捨てても許される状態だったと思います。ですが、貴方はベル様の元へ案内しろと譲らなかつた……」

初めて知る事実には、アイズは弟に視線を向ける。見当違いの発言に困惑している様子はない。つまり、自分の命を蔑ろにしてまで、マシロはベル・クラネルを助けようとしたという事だ。その事実には、アイズは明確にモヤつきを感じた。無論、誰かの為に頑張れるというのは素晴らしい事なのだけれど……。

「結果的にベル様がひとりで倒してしまいましたけど、私はあの時の【リトル・アイズ】様の行動は、賞賛されるべきものだと思います」
「……………気色悪い。自然な顔で何言ってるやがる」

「自覚はありますよ。でも、おふたりの行動に、リリも思う所はあったんです」

少女は儂い微笑で締めくくり、一步身を退く。

次に話始めたのはベルだった。真摯な深紅の瞳が銀の少年を見つめる。

「マシロ……、キミが戦い方を教えてくれたから僕はミノタウロスに勝てたんだ。マシロは違うって言うだろうけど、僕が生きているのはキミのおかげなんだよ」

「あれあれ？　続々とマシロ君の良いエピソードが出て来るね？

これで『優しくない』は無理があるんじゃないのかあい？」
「……………」

「同じファミリアの子達にも聞いてみると良い。短い付き合いのボク等ですら分かるんだ。他にも、キミの良い所を知ってくれている子は沢山いる筈だよ」

ヘステイアの小さな手が、【リトル・アイズ】の小さな頭に伸びた。ワシヤワシヤと、しかし優しく銀の髪が揉みクシヤにされる。上目遣いで女神を睨む弟の姿が愛くるしい。だからアイズも、無理に炉の神の手を振り払ったりはしなかった。彼の為に善意100%でフォローしてくれているという点も大きい。以前アドバイスをくれた恩もあり、【剣姫】の中で女神ヘステイアという存在は、主神ロキに匹敵する大きさになりつつあった。

「ありがとう、マシロ。僕を助けてくれて。生意気かも知れないけど、次は僕がキミを助けたい。だから……………良かったらまた、僕らと一緒に

ダンジョンに潜ってくれないかな……?」

スツと、ベル・クラネルが右手を差し出す。他でもない、マシロの前に。

ドクンと、アイズの心臓が跳ねた。純真な筈の兎の手が、何か良くないモノの様に見えた。それこそ、死神の手招きにさえも。

マシロは一向に手を握り返さない。

『無言の拒絶』。そう取れるだけの時間が経過する。

悲し気な笑みを浮かべた白兎が、手を引つ込めようとする。

良かった……と、アイズが胸を撫で下ろした。

その時。

「勘違いするな。今の俺は、手がまともに使えない」

「え?」

「見ろ、箸すら持てん」

マシロが両手を掲げて見せた。これまでアイズや布団が影になっ
て見えていなかったであろう腕の先の惨状が顕わになる。包帯でガ
チガチに固められ、動かせない様にされた両の手が。

「……………アイズ。代わりに握ってくれ」

「……………え?」

「じゃあ……………」

アイズとベルが目を瞬かせたのはほぼ同時だった。

「その……………まあ……………、わざわざ解消する理由もないし。別に、また潜つてやらん事も……………ない」

マシロの回りくどい発言に、兎の顔が明るくなる。そして、何かに気が付いたのか、露骨に緊張し始めた。その証拠に、差し出されていた右手が小刻みに震え出している。まるで、手を握られるのを恐れている様な……………そんな感想を抱いたアイズの横では、炉の女神が暢気に身体をくねらせていた。

「くう! 可愛いかよ……………! ヴアレン何某君、一回でいいからボクにもマシロ君をギュってさせておくれ! でも、ベル君との握手は一瞬だぞ!」

流石にそんな事は認められない。例えば、神ヘステイアであっても。

当然の如く戯言として聞き流したアイズは、軽くマシロの身体を自分に寄せつつ、小鹿のように震える兎の手を見つめ続けた。

白状してしまえば、本当は握り返したくはない。この手を取れば、今後もパーティーが継続してしまう。彼らのパーティーの最高戦力はマシロ・ヴァレンシユタインだ。緊急事態に見舞われた際、メンバーを助ける側の立場になるのは必然的にマシロという事になる。そして、彼はその役割を放棄しない。今回の事でそれが身に染みて分かった。もし、また弟の手に余る相手に襲われてしまったら。そうしたら、今後こそ――。

パン。

気が付けば、アイズは兎の手を弾いていた。

乾いた音が病室に響く。

まさかこの流れで拒絶されるとは思っていなかったのだろう。マシロとベル・クラネルの見開かれた瞳が酷く印象的だった。

：

：

正直この様な反応が返って来る可能性自体は、ヘステイアもある程度予見はしていた。

ただ、身内の欲目というか……惚れた弱みというか、『こんなに可愛いベル君が女の子に嫌われる訳がない』と高を括っていた面は否めない。

無論、ベルが人柄的に嫌われている訳では無いだろう。彼が素直な良い子・というのもあるが、そもそもアイズ・ヴァレンシユタインとは交流が希薄な筈だ。好かれるにも嫌われるにも関わった時間が短すぎる。

だから、手を払われてしまった原因は別にある。そして、その原因を推測した時、ヴァレン何某の高慢とも取れる態度にも一定の理解を示す事ができた。というか、立場を丸ごと入れ替えて想像してみれば、多分自分も同じような対応をしただろう。そんな風に思いながら、女神は艶やかな唇を動かした。

「まあ、何某君からしたら複雑だよな。勿論、ベル君達は悪くないし、なんだつたら被害者なんだけど……、弟君が死にかけたのは事実なんだから」

「……………っ！」

女神の言葉に、サーッとベルの血の気が引く。

どうしてアイズに拒絶されたのか、その理由に察しが付いたのだろう。そして、察してしまえば、もう引き下がるしかない。彼女が抱いている不安は、姉として当然のものなのだから。しかし、実の弟だけは食い下がる。

「だからそれはベルの所為じゃ」

「うん、分かってるさ。でも、こういうのは理屈じゃないんだよ。しかも、『ベル君達と一緒に強敵に襲われて死にかけた』じゃなくて、『逃げられる余力があつたのに、ベル君を助ける為に死にかけた』訳だからね」

「ー！」

「キミのお姉さんからしたら、『必要ないのに死にかけた』と、そう感じてしまっうんじゃないのかい？　そして、パーティーを組み続けるな

ら、また今回みたいな事が起きるかも知れない」

「それは……」

言い淀む【リトル・アイズ】に、ヘスティアは諭すように言葉を続ける。
「緊急事態イレギュラーに見舞われて成す術なく……ていうならまだ納得できる

かも知れないけれど、『仲間を助ける為に自分を犠牲にする』じゃ無理だよ。それが勇敢で素晴らしい行為だっていうのは分かるけど、家族なら『仲間を見捨てて生き残って欲しかった』って思うだろうね」
「……………」

マシロは完全に言葉を失う。

そして、チラリと姉の方を見た。その視線を受けて、アイズはポツポツと本音を吐露し始めた。

「その……正直、私はもう、シロにひとりでダンジョンに潜って欲しくない。私と一緒に、フィン達みたいに強い冒険者と一緒じゃないイヤ」

飛び出したのは随分と無茶な要望である。

ダンジョンに向く条件が、『第一級冒険者』の随伴など前代未聞だ。そんなのオラリオの9割の冒険者が満たせない。【ロキ・ファミリア】所属のマシロには不可能ではないだろうが、毎回好きな時に気の赴くままに……という訳には行かなくなるだろう。

しかし、それもアイズの心情を考えれば妥当な条件に思えた。大切な人に危険な場所に行って欲しくないというのは正常な真理だ。事実、『死にかけた』という実績を近々で詰んでしまったのだから実姉が敏感になるのは当然だろう。マシロ自身もそれが分かっているのか、珍しく反論の言葉が出ないようだった。

この時点で、半ば済し崩し的にパーティー解消が成立する。否、正確にはマシロ・ヴァレンシユタインの脱退脱退だろうか。【剣姫】の望みはあくまでも『弟の離脱』であり『パーティーの解体』ではない。

無論、ヘスティア的には痛手だ。ベルが女の子と2人きりになる事や、単純な安全面を考慮しても決して喜べる状況ではない。しかし、マシロの身を鑑みれば、彼女の言う様に『第一級冒険者』の同伴が望

ましいのは間違いないのだ。幸い、彼はそれが不可能ではない環境にいる。

チラリと、女神は隣りで気落ちしているベルに視線を向けた。仕方がない事とは言え『憧憬』に拒絶されたという事実……。そして、自分の不甲斐なさが原因でパーティーが解消してしまった事にダメージを受けているのだろう。そんな眷属を励ます為、ヘスティアは彼の背中を豪快に叩いた。

「ホラホラ、何をそんなにシヨボくれているんだい？ パーティーを解消した所で、個人的な交流まで無くなる訳じゃないだろう？」

「そ、そう……ですね」

力なく微笑むベルに、幼女神は続ける。

「それに、ヴァレン何某君的には、マシロ君を守れるぐらいの強い冒険者なら一緒にダンジョンに行っても良いんだらう？」

「え、あ、はい……」

【剣姫】からの了承。それを耳にし、ベルがパツと顔を上げる。

愚直な反応に、ヘスティアはニツコリと微笑んだ。

「聞いたね、ベル君？ 自分がするべき事が分かったんじゃないかい？」

「は、はい……！ アイズさんに認めて貰えるぐらい強くなって、またマシロと一緒にダンジョンに潜ります！」

「その息だ！ 落ち込んでるヒマなんてないぜ!？」

「はいー」

眷属を勇気づける事に成功した上で、ちやつかり目標を『憧れのアイズに追いつきたい』から『友人のマシロの隣に立ちたい』に変更させたヘスティアは思いの外したたかだった。

「こっちの意見も聞かないで勝手に盛り上がってんじゃないやねえよ」

ここで、今まで黙っていたマシロが口を開く。

その表情は嫌に真剣だ。

そして――。

「……3人だけで話したい。アイズ、ヘステイア……様、席を外してくれ」

リルルカ・アーデに対し、鋭い眼光を向けて言い放った。

第三十話

【劍姫】と雇用主^白の主神が退出し、病室の扉がバタンと閉まる。2人の足音が遠のいていく。気配も離れる。リリルカがその様に認識したタイミングで、【リトル・アイズ】が小さく口を開いた。

「外に響くような大声は出すなよ」

『第二級冒険者』の鋭い眼光に思わず喉が閉まる。雇用主^{ベル・クラネル}は「え、うん？」と、とりあえずの返事をしたが、雇用者は彼の忠告の意図を正確に読み取っていた。否、正確にはではない。正直、人払いをするとは思わなかった。マシロの目的を考えれば、少なくとも女神ヘステイアを追い出す理由は無い筈だからだ。そんなリリルカの思考とは裏腹に、彼はベルにこんな忠告をする。

「お前の主神はともかく、アイズに本気で聞き耳を立てられたら察知できないからな」

「えつと……、神様やアイズさんに聞かれたら不味い話つてこと？」
「ああ」

ここでようやく兎の表情に緊張が滲む。恐らく彼の事だからマシロが何を話そうとしているのか、まだ具体的には分かっていないだろう。だが、それでも物々しい雰囲気から、どういう系統の話題なのかは感じ取ったらしい。

そう。

恐らくこれから始まるのは、血も涙もない魔女裁判だ。

陰惨かつ物騒で、身の毛もよだつような吊し上げ。

リリルカ・アーデにとって、絶対に口にさせてはいけない議題である。

なのに、唇が動かない。

妙に腹も座っている。

どうしてか、それを受け入れている自分がいるのだ。

ヤダヤダと駄々を捏ねる自分も居るといふのに。

「今後、俺はパーティーから抜ける。だからその前にハッキリさせておきたい」

「何を……？」と白兔が尋ねるより早く、銀の少年が瞳を細めた。その双眸が捉えるのは栗毛のサポーターただひとり。次の瞬間、想像通りの言葉が、想像をなぞる様に放たれる。

「リリルカ・アーデ。お前がベルの味方なのか、敵なのかをだ」

◇・◇

敵ですよ、と。

本来なら答えるべきなのだろう。

事実、リリルカはベルの稼ぎを吸い上げる目的で近づき、契約を交わした。生来の人の良さを見通し、数多の新米冒険者選の中から彼を選んだ。結果、大正解だった。不要な上級冒険者択が付属してしまつた事を除いて。なんなら、底の見えない『お人好し度』に若干ドン引いたぐらいである。

加えて、駆け出しには分不相応な業物ナイフの所持。正に、鴨が葱を背負つて来るような状況だった。あれさえ奪い取れば、『リトル・アイズ』の監視を加味してもおつりが来る。なんの躊躇もなく、冒険者嫌いのサポーターは件のナイフを奪い取る方向に舵を切つた。

別に薄情だとは思わない。

心も痛まない。

空気を吸うのに。

水を飲むのに。

申し訳ないと思う人間がいないのと同じように。
リリルカ・アーデという少女にとって、それは単なる日常の1ページだったから。

だからこういう時、口にするべき回答は決ま^{こたえ}っている。偽りの笑顔を張り付け、^{へりくだ}遜った表情を浮かべて、言ってやるのだ。

嫌だなあ、「リトル・アイズ様」……

「そんなの味方に——」

「な、何言ってるのさ、マシロ!? リリは仲間じゃないか!」

瞬間、言葉を遮って雇用主が叫ぶ。

曇りなき眼というのはこういう物を言うのだろう。ベル・クラネルはいまだに彼女の事を信じ切っている。対してマシロ・ヴァレンシユタインは、彼の発言内容には言及せず、ただ、声量だけを咎めた。

「でかい声を出すな。それとも主神の判断を仰ぎたいのか?」

「……!」

ヒュつとベルの喉が鳴る。

ベル・クラネルは正真正銘『愚者』だ。性善説とやらの信奉者。だから、下界の住民の嘘を見破る神々の介入を、^{リリルカ}雇用者の潔白を信じて促す可能性だっただろう。

しかし、同時に物事を冷静に俯瞰する目も持っていた様だ。女神ヘステイアが、どれだけマシロ・ヴァレンシユタインを気に入っているかを理解している。考えてみれば当然だ。彼女にとって「リトル・アイズ」は、己の眷属の命の恩人に近い相手なのだから。そんな人物から疑念を向けられているという事実が知られば、ロリ神のリリに対する心証は地に落ちるだろう。

ヘステイアが騒ぎを聞きつけ、戻ってきた時点でゲームオーバー。少なくとも、リリルカを信じてあげたいと願っている少年にとっては

望ましい展開ではない。

要するに、今この状況は「リトル・アイズ」の温情なのだ。

彼は部外者を排除する事で、リリルカ・アーデに対する疑惑や問題を、この3人当事者の間だけで清算片付けてしてしまえる状況を創り出したのである。

そして、「リトル・アイズ」は兎に語り出す。

「ベル。理由は省くが、俺は最初からリリルカ・アーデを疑っていた。お前をカモろうとしてる悪質なサポーターなんじゃないかとな」

「え?」

「疑念が確信に変わったのは、パーティーを組んだその日の探索だ。真面目にサポーターとしての働きを見せつける一方で、そいつは常にお前を下の階層に向かわせようとしていた」

「それは……っ」

ベルの顔が曇る。心当たりがあったのだろう。実際、誘導していたのだから当然だ。

けれど、「リトル・アイズ」の介入で早々にそれは断念している。以降、別段怪しまれるような行動はしていない。少なくともベルの目には、効率的に魔石を集め、時には敵の出現を即座に伝え、献身的に支援してきたように映った筈だ。ベルの収入を増やし、受け取れる分前を増やそうという思惑があったとも知らずに。

しかし、そんな抜け目のないリリルカも、ひとつだけ決定的な『やらかし』をしていた。そして、その『やらかし』についても、マシロは容赦なく追及してくる。

「ベル。お前、最近ナイフを失くした事があっただろう? 正直俺は、まだコイツが盗んだんじゃないかと疑っている」

瞬間、兎は弾かれた様に反論した。

「待つてよ!? あれは、小人族バルウムの誰かが持つてたつて、リユーさんが
言つてたじゃないか!? リリは犬シアンスローブ 人だよ!」

そう。

ベルが主張したその事実は、リリルカの潔白を証明する強力な
手札カード。如何にその盗人小人族バルウムと犬リリルカ・アーデ 人が瓜二つでも、『別種族』という
事実が同一人物である可能性を否定する。そして、ナイフの窃盗犯が
小人族バルウムだという事実の証人は、あの場にいた全員だ。ベル・クラネル
や『豊穰の女主人』の給仕2名はおろか、『リトル・アイズ』自身も、
捕縛された只人の頭部を視認している。

『窃盗犯』小人族バルウム』という前提が覆らない限り、『リリルカ・アーデ
が犯人』という方程式は成り立たない。だから、どれだけ怪しくても、
マシロ・ヴァレンシユタインはその話題を蒸し返さなかった。証拠が
ない以上、下手にほじくり返してもベルの心証を損ねるだけだから
だ。

だというのに、彼がナイフの件に言及して来たのは、自身の離脱が
決定したからだろう。どうせパーティーから抜けるのだから、どれだ
けベルに不快に思われても同じ事。なら、少しでも危機感を覚えさせ
るために自爆覚悟で腹の内を晒すのは、ある意味で合理的だ。

正直、この考え方は普通にすごいと思った。

理由は知らないが、『リトル・アイズ』はベル・クラネルに相当入れ
込んでいる。そんな相手に嫌われかねない言動を取っているのだ。
平然と、顔色一つ変えずに、何でもない様な声色で。それは、純白兎ベル
とはまた違った形の、ひとつ善性なのではないか。

悔しいと……リリルカ・アーデは素直に思った。

何に對して、何故そう思ったのかは良く分からなかったが。

悔しいという感情を覚えたことは、漠然と自覚した。

次の瞬間、サポーターの少女は彼女自身も意図しない言葉を放つて
いた。

「……響く十二時のお告げ」

「あつ」と思ったがもう遅い。

口にしたのは彼女が習得している唯一無二の変身魔法『シンダー・エラ』の解除スペル。主人の命令に従い、頭部に生えていた大人の証は無情なほどあつさり魔力の粒子となった。無論、獣人の尻尾も消滅し、残されたのは小人族パルウムの見窄らしい身体のみである。

雇用主の深紅ルベライトがまん丸く見開かれている。「リトル・アイズ」も一瞬動揺を覗かせたが、直ぐに納得した様子で瞳を細めた。

「変身魔法か……。成程な。確かにそれなら、酒場のエルフの証言にも頷ける。その魔法で種族を偽っていた訳か」

「そ、そんな……。嘘だよね？ リリ……」

「……………」

「リリ……………」

ベル・クラネルの懇願が、動揺が、少女の胸に突き刺さる。

多分、ここで嘘だと答えれば、この兎は騙されてくれるのだろう。他にもない、彼自身がそれを望んでいるから。彼の望む現実は、依然としてリリルカ・アーデの潔白だから。

……………まだ、誤魔化せる。

「嘘じゃないですよ。見ての通り、リリは小人族パルウムです。そして、「リトル・アイズ」様の見立て通り、貴方のナイフを盗んだ犯人でもありません」

「な……………」

まだ、誤魔化せた……。筈なのに。

どうしてかりリルカは、馬鹿正直に真実を告白していた。

絶句する兎の代わりに、マシロ・ヴァレンシユタインが質問を重ねる。

「……何故、ベルを狙った？」

「チヨロそうだったからです」

「盗みを働く目的は？」

「お金の為ですね。大体皆そうでしょう？」

「稼いだ金は何に使う？」

「……そんな事が気になるんですか？ 貴方はリリに個人的な興味は無いと思っていましたか……」

自身の理解不能な行動に、半ばヤケクソでそれらの詰問に答えていたりリリだったが、流石に最後の踏み込んだ質問には違和感を覚えて聞き返した。けれど、彼は厳しい態度を崩さず、毅然とした口調で言葉を紡ぐ。

「黙秘できる立場だと思うのか？ さつさと答えろ。少なくとも、ベルにはそれを聞く権利がある」

それはそうだ。リリはすんなり納得した。

この場における被害者はベル・クラネルで、加害者はリリルカ・アーデ。その論法でいくとマシロ・ヴァレンシユタインは席を外すべきだとも思うが、まあ彼も全くの無関係では無い。

「【ファミリア】から抜ける為です」

「……なに？」

「えっと、リリが所属してるのって……」

「【ソーマ・ファミリア】です」

瞬間、マシロの眉が僅かに歪んだ。派閥の名前を出しただけでこの反応……。流石と言うべきか、自分達のファミリアの悪評はバツチリ都市全土に轟いているらしい。その事実を再認識しつつ、最早事情の7割程度は察していそうな【リトル・アイズ】と、頭上に？マークを浮かばせるベル・クラネルに、ソーマ派閥の悲惨な内情を暴露した。

構成員の皆が、主神ソーマの作る『神酒』に溺れ、求め、それにありつく為に躍起になっている事。我先にと仲間同士で蹴落とし合いを演じる眷属たちを見限り、主神がファミリアの運営を放棄している事。実質的に派閥を取り仕切っている団長の独裁により、劣悪な環境が出来上がっている事。そして、派閥を抜けるのにも金が必要になる事。

粗方話し終えると、ゴクリと、喉を鳴らす音が聞こえる。発生源は当然ベルだった。その青い顔色は、まるで彼自身がリリと同じ境遇に置かれている様である。喉を震わせながら、どうにか兎は言葉を発した。

「ひびく……」

勿論それは、リリルカ・アーデに対する非難ではないだろう。リリを取り巻く壮絶な環境への感想であり、決して彼女を責めている訳ではない。寧ろ可哀想とすら思っている筈だ。けれど、ここにいるのは優しい少年だけではない。

「……お前の境遇には同情しよう。だが、それが全ての悪行を帳消にするわけじゃない」

マシロ・ヴァレンシュタイン。

最早、『リリルカ・アーデIIソーマ派閥の被害者』という図式が成立しそうな空気が流れる中で、彼は意にも介さず事実のみを口にした。

「【ソーマ・ファミリア】が、酒造の資金繰りの為に作られたファミリアだという事は知っている。神ソーマが造る『神酒』の価値もな」
「……………」

「脱退金なんて制度があるのも、酒造費の足しにする為だろう。つまり、眷属達から集めている普段の献金じゃ、全く足りないって事だ。そんな状態で、脱退金がマトモな額な訳がねえ」

ここで一度言葉を切り、第二級冒険者の鋭い視線に射抜かれる。

「標的にしたのはベルだけじゃ無いだろう。お前からの窃盗被害に遭った人数は、それぞれ両手両足の指じや足りない筈だ」

その通りだった。

「リトル・アイズ」の推測は正しい。誰も彼も、ベル・クラネルの様に分け前を等分にしてくれる訳ではない。良くて2割。1割どころか踏み倒される事だつてザラだ。その上で、そもそもの稼ぎが寂し事も多い。必然的に、カモにする冒険者の数は膨れ上がっていく。

チラリと、リリは白兔を見遣る。

此方を覗う彼の瞳には、未だ侮蔑の色すら浮かんでいない。

多分、まだ巻き返せる。口八丁で、この純朴な新米冒険者は味方になることができる。

……………でも。

もう、いいかな。と、彼女は思ってしまった。

疲れてしまったのだ。

これ以上、人畜無害な兔を騙し続ける事に。

心が痛むのだ。

彼の馬鹿みたいな甘さに触れてから。

ミノタウロスから命懸けで逃がされてから。

どうしようもなく、彼を謀る事が苦しい。

最初は偽善と唾棄していた彼の善性が、今では自身の良心を際限なく蝕む毒となっている。

多分、柄にもなく、あの真つ直ぐな魂に当てられてしまったのだろう。

だから、断罪を受ける覚悟が決まった。

やってくれと、栗毛の小人族パルウムは銀の冒険者に目配せをする。

きつと、ベル・クラネルは、リリルカを罰したりはしない。だから、非情な判断を下せる冷徹な冒険者に、代わりに裁いて貰うとしよう。

きつと、彼なら躊躇する事もない。

しかし、マシロの返答は思いもよらぬものだった。

「……………勘違いするな。俺は今回、これ以上出しや張る気はねえ」

「……………え？」

言葉の意味を図りかねているリリを尻目に、第二級冒険者はベルへと視線を移す。

「コイツをどうするかは、お前が決める。ベル」

「ちよ、ちよと待つて下さい！ 『リトル・アイズ』様が裁いてくれるのではないのですか!?! ベル様じゃ——」

「うるせえぞ、当然だろ。お前と契約を交わした雇用主は誰だ？ お前にカモられる所だった被害者は？」

「それは…………」

ぐうの音も出ない正論に、リリは押し黙る。確かに、直接の被害者はベルだ。リルカの処遇はベルが決めるのが筋。だから、あんなにも踏み入った質問を繰り返していたのだろう。少女の動機と実際の犯行。そして、そうするに至った経緯と背景を事細かに暴露させ、ベルが判断材料に困らない様に計らったのである。

—— だったら、あの事を

未遂…………というか、リルカがしり込みしている間に相手が痺れを切らしてしまい、未履行となったあの作戦…………今回マシロを襲った『狂人』結ぼうとしていた『リトル・アイズ』にモンスターをけしかけ、その機に乗じてベル・クラネルのナイフを奪い取る』という契約を話してしまおうと考えた。

正直に言うと、それを告げた所で何も変わらない。リルカはあく

までも作戦を持ち掛けられた側であり、自ら立案した訳ではないからだ。しかも、即決せずに考える時間を貰う形で、実質実行を先延ばしにさせている。これは見方によっては普通にファインプレーと言える。その上で、『マシロに傷つける行為を良心が咎めた』と解釈する事も出来だろう。事実、ベルならそう考える筈だ。

けれど、断罪されたくて必死なりルルカは、その事に気付かない。気付かずに、意図せず自身の心証を良くしかねない証言をしようとしたその瞬間――。

コンコン、と。

控えめなノックが聞こえた。

曲がりなりにも内緒話をしている一同は、そのささやかな異音にもビクリと肩を揺らす。リリ達は顔を見合わせ、ひとまず話を中断する事に決めた。

コンコン。

催促のように再び叩かれた扉を、ベルが慌てて開ける。

そこに居たのはアイズ・ヴァレンシユタイン……でも、女神ヘステイアでもなく、兎よりも小柄な冒険者だった。手入れの行き届いた黒髪を背中に流した色白の少女である。小作りの鼻と、大きな双眸。そして桜色の唇。『可憐』と表現して何ひとつ過大ではない女の子。身に着けた衣服は女性的とも男性的とも取れるが、逆にそれが彼女の純朴な印象を強めている。多分、神々なら『大和撫子だあ!』と騒ぐだろう。

「えっと、どなた……ですかっ?」

ベル緊張気味にが尋ねると、少女は花のようにニコリと微笑んだ。

瞬間、兎の耳がカツと赤くなる。確かに彼は、こういう『女の子らしい女の子』には弱いだろう。リルルカがそんな事を思っていると、美しい少女は恭しく告げた。

「【ロキ・ファミリア】の者です。マシロが目覚めたと聞いて、お見舞いに来ました」



「こーら、聞き耳なんか立てるんじゃない。何の為にマシロ君がボク等を追い出したと思ってるんだい！」
「でも……」

気配を殺して扉に耳をビタ付けしたアイズ・ヴァレンシユタインの腕を、炉の女神が引つ張る。マシロに退出を懇願され、実際に部屋を後にした直後の事だ。トボトボと扉から離れたブラコン少女を攫いつつ、女神は座れるスペースを探して治療院の廊下を練り歩く。

正直ヘステイアには、どんな意図を持つてマシロが自分達を除け者にしたのかは分かっていた。大方、きな臭いサポーターの処遇を隠れて決めてしまおうという魂胆なのだろう。

無論、勝手なことを……と思わなくはない。ヘステイアはベルの主神なのだ。しかし、彼女は広い心でその不満を飲み込んだ。それはある種、マシロへの信頼の表れに他ならない。彼が、イタズラに誰かを傷つける事が出来ない気質の少年である事を、女神は会った瞬間に見抜いていた。

そんなマシロが、こういう形を取ったのだ。恐らく、リリルカ・アーデを無害だと判断したのだろう。実際、ヘステイアも対面して、そのしおらしさに拍子抜けしたぐらいだ。無論、だからと言って彼女を全面的に信用する訳ではないが、ひとまずは眷属の決断に身を委ねるのも悪くない。

能天気な顔からは想像もできない思考をバチ決めしつつ、グータラ幼女神は天性の嗅覚で休憩所を見つけ出した。丸テーブルの周りに置かれた椅子の1つに腰を下ろし、たわわな双丘を震わせながら着席する。金の少女も静かに対面の席に座った。

女神も裸足で逃げ出す絶世の美少女が、ヘステイアの正面でソワソワと廊下に眼を向けている。否、正確には廊下ではなく、『廊下の先に

ある病室』にだろう。その心配に顔を曇らせた姿は、とても百戦錬磨の『第一級冒険者』とは思えない。内心「分かりやす過ぎるだろう……」と呆れつつ、炉の女神は言葉を投げる。

「そんなにベル君達の会話が気になるのかい？」

「えつと、はい……」

嘘だな。

まるで凶星かのように肩が揺れたが、ヘステイアは視線が泳いだのを見逃さなかった。

無論、会話内容に全く関心が無い訳ではないだろう。だが、彼女が真に気にしているのは、マシロ・ヴァレンシュタインの安全だけだ。今こうしている間も、彼が心配で仕方がないのだろう。

「不安かい？ 自分の視界からマシロ君が外れるのが」

「はい……」

本心だろう。これは間違いなく。

常に弟の無事な姿を隣……若しくは手の届く範囲で確認していないと安心できない。少々、病的過ぎるとも感じてしまうが、今は無理もないだろう。彼女の弟が死にかけたのはつい先日の出来事なのだから。

「ま、気持ちは分かるけどね。でも大丈夫だよ。こんな白昼堂々襲撃してくる刺客なんていやしないさ。ここは冒険者の出入りも多いし、騒ぎを起こそうものなら一瞬でお縄だろう？」

そもそも、この規模の治療院だ。どう考えても凄腕の用心棒を複数人雇っている。それ以前に「ディアンケヒト・ファミリア」内にだって、Lv. 2やLv. 3の眷属ぐらい居るだろう。幾ら医療系派閥と言ってもディアンケヒトの所はそのレベルの派閥だ。仮に良からぬ事を考える輩が院内に紛れ込んでいたとしても、些細な挙動から怪しまれ動き出しで取り押さえられるに違いない。

故に間違いが起るとすれば、善意でお見舞いに来た患者の友人や

家族の凶行だが……。

「それにキミだって、まさかベル君達がマシロ君を襲うだなんて思っ
てないだろう？」

「それは、……………そうです、けど」

声色を聞く限り、これは若干警戒していた様だ。

確かに可能性は0ではない。勿論、ベルが悪いとかではなく、この
世に『有り得ない』事など存在しないという意味で。例えば0.000
1%しかない事でも、それは『起こり得る事象』なのである。

けれど、それでもヘステイア的には良い気はしない。ベル・クラネ
ルという少年の本質を理解し、信頼しているからだ。故に、ベルが間
違いを起こさない前提で話を進める。

「万が一病室が襲撃されてもベル君がいるし大丈夫だよ。あの子なら
キミが駆けつけるまでの時間稼ぎぐらいは出来るさ。腐っても上級
冒険者だしね」

実際問題、L v. 3のマシロを襲おうという輩に対して、L v. 2
のベルは無力だろう。もし本当に襲撃があればヘステイアとて大切
な眷属を失う危険性がある。だが、やはりどう考えても襲撃者(仮)側
の、リスクとリターンが合わないのだ。マシロ・ヴァレンシユタイン
に危害を加えるという事は、即ち『「ロキ・ファミリア」を敵に回す』
という事。そんな目に見えた地雷を踏みに行く奴はそうそう居ない。
アイズを安心させる為。そして、親バカ的な思想から眷属を自慢す
る意味もあつて告げた内容だったが、金の少女は思いの外驚いている
ようだった。

「上級冒険者……………？ 誰が？」

そして、その質問にヘステイアも驚く。

「誰がつて、ベル君だよ。まさか知らなかったのかい？ ボクが言う
のも何だけど、レコードホルダー世界最速兎とか言つて、今めちやくちや騒がれるじや

ないか??」

「私、ずっと病室にいたので……」

「ずつとつて……面会時間中はずつとつて事かい? いや、でも、それにしたつて外の情報は入ってくるだろう。ココに来る時や本拠ホームに帰る時には街中まちなかを歩くんだからさ」

冗談抜きで今のオラリオでは、自身ベル・クラネルの眷属は『時の人』だ。それ程、ベルが達成した偉業は凄い。というかヤバイ。今この瞬間であれば下手な第一級冒険者よりも話題性があるだろう。誇張抜きに、人のいる所でベルの名前を聞かない方が難しい。けれど、金の少女は言い辛そうにこう告げた。

「その、アミッド……治療院の人をお願いして本当にずつとここに居て……。殆ど外に出てないんです……」

「!!?」

そのイカレた告白に、ヘスティアは空色の瞳をギョツと見開く。

当然だ。ベルがランクアップしたのは例の騒動の翌日である。当日は治療に専念していた為、スティタスの更新自体が次の日になったからだ。そして、ギルドに報告し、正式に発表があったのが、そのまた翌日。

つまり……。

「え? じゃあ何かい? もう軽く1週間以上ここに泊まってるって事かい?」

コクつと【剣姫】の小さな頭が前方に傾いた。

ヘスティアは信じられない物を見た気分である。

「最初はシロが目覚めるまでつて事だったんですけど、目覚めた後も暫く入院しなくちゃいけないみたいだったので、結構わがまま言つて……」

「はあああ。弟好きも……ここまで来ると……ねえ?」

「……………?」

含みのある視線を向けるが、案の定、アイズは理解できていない様

だった。本当にこの少女は天然というか、無邪気というか、お子ちゃまというか……。今の話が事実なら、目覚めてこの方、マシロは『ひよりの時間が無い』という事になる。勿論、本当の意味で24時間引っ付いている訳ではないのだろう。『第一級冒険者』と言っても人間である以上生理現象には襲われるし、衛生面的観点からもシャワーぐらいは浴びる様に治療院側から言われている筈だ。

しかし、ベルのランクアップを知らなかった事から、移動は周囲の会話が耳に入らない程の速力で。シャワーなども可能な限り速やかに済ませているに違いない。それらをLv. 6の規格で行われたら、マシロに与えられるプライベート時間は微々たるものだろう。恐らく、平均して1日90分もない。年頃の少年にとっては中々に窮屈な空間ではないだろうか。

「やっぱり、あんまりベタベタしていると嫌がられちゃいますか……?」

恐る恐るといったふうに、アイズが尋ねて来た。

どうやら介抱を名目に少々引っ付き過ぎている自覚はあるらしい。ヘスティアは少々頭を捻る。普通に答えるのならば、返事はこうだ。

「……まあ、ベタベタし過ぎないのがベターだとは思うけどねえ。キミだって、ロキに毎日ベツタリされたら嫌だろう?」
「う……ッ」

痛い所を突かれたと言わんばかりに金の少女が押し黙る。対照的に脳内でワーギヤー騒ぐロキを黙殺し、ヘスティアは自分に置き換えを考えてみた。仮に、ベルが大怪我をして入院したら、ヴァレン何某と同じ様な行動を取らない自信は正直ない。寧ろ『神だからいつだって清潔なままだ』なんて暴論を振りかざして、より眷属との時間を捻出しに掛かるだろう。ヘスティアは、自分がそういう神だと知っている。

だから、アイズ・ヴァレンシユタインに対して『嫌われたくなければベタベタするな』と上から物申す資格はないだろう。けれど、同時に『年頃の少年と接するには距離感が大事』という持論も間違えとは思えない。ヘスティアは腕を組みながら、恐らくロキや「ロキ・ファミリア」の面々では踏み込めない『ぶっちゃけ』を解禁した。

「正味な話さあ、今はある程度ベツタリでも大丈夫だとは思うんだよね。マシロ君も九死に一生を得たばかりな訳だし、以前より人が恋しいんだと思う。実際、結構満更でもなさそうだ」

「えへへへ。あの子、私の『あーん』でちゃんとご飯食べてくれるんですよ?」

「そりゃ、今、両手怪我して使えないからだろ……」

「しかも照れちゃうんです」

「はいはい」

コイツめつちや惚気て来るじゃん。

と、若干引きつつヘスティアは続ける。

「今ならマシロ君のガードが緩い。でも、それにかまけて調子に乗るキミの姿も簡単に想像できる」

瞬間、サツと少女が目を逸らした。

「それでね。これはちよつと言いつらいんだけど……」

「……………」

「キミ……ぶっちゃけ手綱を握っておかないと一線超えそうで、怖い」

「……………」

【剣姫】は、キョトンと小首を傾げた。

「どうやら、ここで言う『一線』の意味が分かっていない様だ。多分だが、性知識を殆ど仕入れずにここまで育つたのだろう。16歳とい

う年齢を考えれば天然記念物にも等しい希少性である。女神は、小さくため息を零して、耳元で具体的に告げ直した。『クチビル同士のチュー』とか『恋人や、お父さんとお母さんがする事』みたいな子供にも分かる表現で。

そして、そこまでして、彼女はようやくやく意味を理解したらしい。

バン！ 両手をテーブルにつきながら、勢いよく立ち上がった。少女の顔は真赤……ではなく真つ青で、グルグルと回った瞳は『とんでもない』と猛抗議している。「ち、ちが……っ」と呻く口は呂律が回っていない。

弟を性的に襲いそう……みたいな指摘を受けたのだから当然の反応だろう。動揺するアイズに対し、ヘスティアは『大丈夫だから』と手で制した。

「分かってるよ。キミにそんな気がないって事は。純粹に、マシロ君が可愛くて仕方ないだけだろう？」

コクコクコクコクと、食い気味に首が縦に振られた。

「でも、外からの見え方はそうなんだ」

「……………」

「実際キミ、仮にマシロ君と『そういう行為』に及ぶ事になったとして、嫌悪感を抱けないんじゃないかい？」

金の少女からの返事はない。けれど、その表情が雄弁に『確かに』と言っている。なんなら『ギク』という擬音すら聞こえた。

「積極的に行為に及ぶつもりは無いし、及びたいとも思わない。けれど、及んでしまったなら仕方がない。心の何処かでそんな風に考えているだろうか？」

「……………」

返事はない。しかし、ジトーツと見詰めてやると【剣姫】は分かり易く顔を逸らした。それも、滝の様な冷や汗のオマケつきで。

「はあ……………」

バツの悪そうな金の少女の横顔にため息を漏らしつつ、ヘステイアは推測する。

例の4年の空白期間……………それがあつたとしても、普通はこんな状態にはならない。本能的に人間は、肉親に恋愛感情を抱かない様に出来ている。無論、触れ合えない時間が、弟への感情や執着をより強める結果にはなつたのだろうが、根本的にこんな方向性には行かない筈だ。だから、これはアイズが生来より持っていた『歪み』なのだろう。恐らく、ロキ達も薄々気づいていたのだ。姉弟仲を修復させてやりたいと思う一方で、無意識の内に離れている状態に安堵を覚えていた。そうでなければ、あの食えない女神がこうも後手に回る訳がない。

「勘違いしないでおくれ。だから『キミは異常者なんだ』って、そんな攻め方をする気は毛頭ない。ボクが言いたいのはそんな事じゃないんだ」

「……………」

再び此方に向いた【剣姫】の顔。その金の瞳を見つめ返し、女神は告げる。

「問題は、一線超えそうで怖いなって思うのは、ボクだけじゃないだろうって事なんだよ」

「……………」 周りの人にも私がシロを襲おうとしているって思われるって事ですか？」

「それだけじゃない」

「え？」

「マシロくんだって、そう思うかも知れないのさ」
「!!!?」

ギョツと、【剣姫】は肩を揺らし、大きく目を見開いた。

「まあ、あの子はだいたい自己肯定感が低いから今すぐ勘違いするって事はないと思う。事が事だしね。でも、これから何年もベツタリされ続けたら分らないよ」

「……………」

「もし、マシロ君に気持ち悪がられたり、怖がられたら、キミ、耐えられるかい？」

ブンブンブンブンブンブンブンブンブンブンブンブンブンブンブン
ンブン!!!

アイズが首を横に振り始めた瞬間、ヘスティアの顔面に強烈な風が激突した。「殺人扇風機か！」と暴風に晒されながらも辛うじて突っ込みつつ、身が……とうか顔が持たないので少女の頭部へと手を伸ばす。身をテーブルに乗り出し、巨峰を卓上に押し付けてどうにか両頬を両手で挟み込む事に成功した。動きを止めた扇風機もといアイズの顔は、それはそれはグチャグチャで……。

「わ、わわわ、私…………どうすれば…………!?!」

大真面目に問うている彼女には悪いが、ヘスティアはクスリと微笑んでしまった。頬から手を放し、ポンポンと金の頭を叩く。

「キミのしたいようにすれば良いさ」

「え?!」

「むずかしく考えすぎだよ。今のキミ達は前とは違う。ちゃんと、意思疎通が取れるんだ」

「!」

以前なら、仮にアイズが我慢できず『行き過ぎた行為』をしてしまった場合、マシロはドン引きしてそれつきりになっていただろう。けれど今ならトライ&エラーが可能。そもそも最初から『距離感バグってるけどイケナイ感情はないからね!』と伝えておくという手段も取れる。とにかく、やりようは幾らでもあるのだ。要するに、『ちゃんとマシロと話して、引き際を理解しろ』という事である。

この鈍感な少女にも此方の真意は伝わったらしい。顔色が良くなった。考えが纏まったのかは分からない。しかし、迷いは消えた様だ。

「ありがとうございます。ヘステイア様」

控えめな会釈を残して、アイズは席をたった。

マシロの病室に戻るのだろう。チラリと時計を見遣る。思ったより時間は経っているが、話し合いも終わっているかは微妙なラインだろう。そう判断し、ヘステイアは慌ててアイズの後を追った。

第三十一話

「す、スートトップ……………ッ！」

アイズの後を追って病室の前まで戻って来たヘステイアは、躊躇いなく伸ばされた手をどうにか掴み取った。ゼエハアと極力音を立たない様に息切れしつつ、未だにドアノブに手を伸ばす金の少女に喰つてかかる。

「落ち着くんだ！ 話し合いが終わってるか分からないだろう!？」

「あ……………」

そう訴えると、ようやくアイズは我に返った。本当に直ぐに周りが見えなくなる少女である。灼の女神は、「どいてろっ」と言わんばかりに第一級冒険者を後ろに押しやり、控え目に扉をノックした。

「あゝ、ごめんよお？ ボクだ、ヘステイアだあ。ヴァレン何某君が発作を起こしてしまつてね。そろそろ話し合いは終わったかな〜？」

「?? 発作なんて起こして——」

「うるさい！ 起こしてるだろ！ ブラザー・コンプレックスという発作——」

キョトンとほぎきやがる天然少女に、「どの口が!」と視線で噛みつくロリ神。次の瞬間、ヘステイアは堅い何かに突き飛ばされた。床の冷たさを尻で感じながら目を開けると、数秒前まで向き合っていた病室の扉が開け放たれている。

誰かが勢いよく扉を開け、真ん前にいた自分が巻き添えになった。ヘステイアはそう解釈して、自然と自身の後方へと顔を向けた。そこに居たのは、ヴァレン何某の両手を大切そうに握り込む、黒髪ロングの可憐な美少女で——。

何？ 百合？ 百合？ と思う暇もなく、黒曜石のような女の子は怒涛の勢いでアイズに迫る。声量もそれなり以上で、只でさえ音が響きやすい廊下では軽い公害の域だった。『お淑やかな大和撫子』……といった容姿からはかけ離れた行動である。

「発作って大丈夫なんですか、アイズさん!!? 一体どんなご病気を――!?!」

「え、えつと……」

アイズは突然の出来事に処理落ちを起こしているらしい。黒髪美少女が涙目で捲し立てるばかりで、ちっとも会話が成立していない。正直、イマイチ関係性が見えてこなかった。流石に、知り合いではあるのだろうか……。

ふたりのやり取りに呆気に取られ、放置され続けている女神ヘステイア。そんな彼女に手を差し伸べたのは、純真無垢な白兔だった。

「大丈夫ですか、神様!?!」

「あ、ああ、平気だよ。ありがとうベル君」

大慌てで駆け寄って来た眷^{ベル・クラネル}属に助け起こされ、女神は子供の様にはみかむ。しかし、横でそんなやり取りがされているというのに、突き飛ばした張本人は未だ^{いま}【剣姫】に熱を上げていた。マジかよ……と若干引いていると、病室からナイフの様に剣呑な声が飛んで来る。

「おい、ノース」

呼応するように、アイズに縋りついていた少女の顔が、病室に向く。

「なんですか？ マシロ」

ノースと呼ばれた女の子の声は、酷く冷たかった。

否、表面上は平温だ。他者の感情の機微に疎い人間……ヴァレン何某やベル辺りには、何てことない返事に聞こえるだろう。しかし、神の聴覚は誤魔化せない。この少女は、今明確にマシロに対して不機嫌を向けている。花のような笑みの中には一種の憎悪すら感じた。

「なんですかじゃねえ。他派閥の女神を転ばしといて、いつまで知らんぷりしてるつもりだ？ あとポリウム落とせ」

「ああ……」

その指摘に、清楚な少女ノースの視線が、やっとヘステイアに向けられる。まるで、『今やっと存在に気付きましたよ』とでも言いたげな、路傍の石でも見る瞳だった。が、直ぐに親しみ易い雰囲気を纏い出す。上品に微笑み、彼女は小さく頭を下げた。

「失礼致しました、女神様。とんだご無礼を……謹んでお詫び申し上げます」

「……いや気にしないでくれ」

「そうですか、それは良かった」

良かった、じゃないよ。

ヘステイアは心の中で毒づいた。慇懃無礼とはまさにこの事。見てくれだけは綺麗だが中身は全く伴っていない形ばかりの謝罪である。いや……、「そうですね、それは良かった」の「それは」の部分で既にアイズに向き直っていたので体裁それすらも怪しいか……。

所詮突き飛ばされたただだし悪気があった訳でもないのに、ヘステイアも煩く言う気はなかったが、流星にここまで『アナタには興味ありませんから』という態度を取られるとイラつとする。

恐らくこのノースという少女は、自分の好かれたい人物以外にはどう思われても構わないタイプなのだろう。逆に言えば、彼女にとって重要な人間が近くにいる際は、表面上は愛想よく振る舞う。今この場でいうと、アイズ・ヴァレンシユタインにさえ不審がられなければ後

はどうでも良いのだ。

「な、何なんですか？ この人は……」

再び始まった【剣姫】への連続攻撃に啞然としつつ、サポーターのリリルカ・アーデが呟く。「そんなのこつちが聞きたいよ……」と返しながらマシロの方を見ると、彼は深いため息と共に告げた。

「【ロキ・ファミリア】の団員……。『アイズ親衛隊』の教信者だよ」「な、なんだいそれ？」

ヘスティアは頭痛が痛くなつて聞き返した。

マシロも頭痛が痛そうに答える。

「ファミリア内で非公式に発足された、8割の団員達で構成されてる……。まあ、『ファンクラブ』みたいなモンだ」

「8割って……。それ最早【ロキ・ファミリア】自体が何某君ファンクラブみたいなものじゃないか……」

「それでもねえよ。なんか連中色々兼任してるらしくてな。フィン……団長の親衛隊には団員の7割。副団長のトコに至ってはエルフの団員が全員群がってやがる」

「もうそれ、冒険者派閥じゃないだろ。単なるのオタク軍団だろ」

ロキ主神の悪影響をモロに受けていそうな『最大派閥』の惨状を憂いながら、ヘスティアは海色の瞳を『アイズ親衛隊（笑）』……もといノースに向けた。

要するに彼女は、アイズ・ヴァレンシ推ュタインに会いに來ただけなのだろう。マシロのお見舞いは恐らく建前。態度を見る限り、寧ろ『アイズさんを1週間以上も独占しやがって、コノヤロー』ぐらいは思っっていそうだ。

まあ、同じく『推しがいる身』としては、その気持ちは分からなくもない。ヘスティアとて、ベルを1週間もどこの馬の骨とも知れない輩に占領されたら不満が爆発するだろう。けれど、だからと言ってこの少女のやり方は――。

「……………正直、いい気はしないよねえ」

「え？ 何がですか？」

「なんでもないよ、ベル君」

何も気付いていない眷属の純粹さを微笑ましく思う。多分、白兎との比較で、よりノースなる少女の小狡さを色濃く感じてしまう面もあるのだろう。

彼女の目的は、きっとアイズを本拠ホームに連れ帰ることだ。

アイズに心酔し、マシロに嫉妬している以上、単に『会いに来た』だけで満足する筈がない。その証拠に『アイズさんがいなくて、皆寂しがっていますよ』とか『皆、アイズさんとダンジョンに行きたがっていて……』とか、帰還を促しつつ、病院への足を遠のさせるような発言を繰り返している。『自分』ではなく『皆の総意』という体ていにしていく所も質たちが悪い。下心がバレたくないという保身が見え見えだ。別に、それ自体は悪いことでは無いが……自分が一切傷つかずというのは頂けない。

「まあ、確かに……ちよつと虫の良い話ですよね」

「お、分かってくれるかい？ リリルカ君」

「少しだけ……」

意外な賛同者が出現した為、ヘステイアはノリノリで身を寄せた。共同戦線だとしても言う様に、栗毛の小人族パルウムの肩を組んでコソコソ話を開始する。

「それじゃ、お互いの意見確認といこうか。お見舞いそっちのけで絶賛推し活中のノース君とやらにはさつさとお帰り頂く。異論はあるかい？」

「ありません。【剣姫】様には引き続き病室に残って頂く。不都合は？」

「ないね。ただ、ノース君がちゃんと本音を語るならボク等は引き下

がろう」

「そうですね……。語るとは思えませんが」

同意見だが、中々に手厳しい事を言う。リリルカもノースなる少女に、あまりいい感情は持っていないらしい。正直意外だった。実際に突き飛ばされ、放置を食らい、形ばかりの謝罪を寄越されたヘステイアと違って、彼女は直接的な被害は受けていない筈なのに……。もしかすると表に出していないだけで、それなりにマシロに肩入れしているのかも知れない。

「じゃあ、実際の方法だけど……ノース君のマシロトークを一時的でも止められたら、それで済むと思うんだよね」

「……急に雑になりましたね」

「まあ、聞いておくれよ。ボクの狙いは『ヴァレン何某君に冷静になる時間を与える事』さ」

「冷静になる時間って……。確かに今、ノース様との会話に一杯一杯の様ですが……」

「冷静になれば、客観的に状況を見れる。つまり、『可愛い女の子が』『ひとり』『マシロ君のお見舞いにやって来た』って事実を理解するって事だよ」

ロリ神のたわわな双丘が、「どうだ！」と言わんばかりに揺れる。

「……………まあ、【剣姫】様の執着具合から鑑みて、有効な手段ではありそうですけど」

「だろぅっ!?!」

「でもそれ、【剣姫】様、ここで大暴れしません?」

ヘステイアは預かり知らぬ事だが、ダンジョン内で本気の殺気に向けられたリリルカは、『怒ったアイズ』がトラウマになっていた。そして、それは射た指摘でもある。しかし、女神は余裕の調子を崩さ

ない。

「大丈夫だって。相手も一応【ロキ・ファミリア】の仲間みたいだし、そこまで暴走しないさ。それに、いざって時はマシロ君が止めてくれると思うし！」

「そこは人任せですか……。まあ、良いです。それで、どうやってノース様の口を止めるおつもりで？ 単に声をかけるだけじゃ、聞こえないフリをされるかも知れませんか？」

「そうだねえ……。ヴァレン何某君に至っては素で気付かない可能性もあるし、ふたりの間に物理的に割って入るのは……」

「良いですけどヘステイア様がやって下さいね。【ロキ・ファミリア】の冒険者に迎撃されるなんて死んでもゴメンですから」

「ええ、そんなこと言わずに行っておくれよ？ ボクじや普通に死にかねないだろう……。？」

「だから無理ですって。ベル様は……」

「ノース君のレベル次第だね。ベル君を危険な目に遭わせる訳にはいかないし」

「Lv. 2で危険な可能性がある事をリリにやらせないで下さい！」

「はいはい、分かってるって。て事でマシロくん？ ノース君のレベルって幾つだい？」

女神は声のボリュームを上げて、ベッド上のマシロに問いかけた。

当然、これまでの話を把握していない彼は怪訝な顔を作る。

「なんだ、藪から棒に」

「いいからいいから」

「……Lv. 3」

「たっか！ じゃあやっぱりベル君はナシ！」

「ホントになんの話をしているんですか、神様!？」

「なんでもないよ」

「無理がありますって!？」

ベルの真つ当な主張を黙殺し、ヘステイアとリリルカは再び作戦会議に戻る。

程なくして、ふたりは身も蓋もない結論に至った。

言及したのはリリルカで、ヘステイアは青天の霹靂のような顔をしていた。

「とういか、マシロ様に呼びかけて貰うのは駄目なんですか？ 多分、

一瞬で飛んできますよね？」【剣姫】様」

「た・し・か・に！ マシロくん！ 可愛く『アイズお姉ちゃん』って叫んでみておくれ！」

「断る！ つーか、お前らなんの話をしてやがった!？」

「んー？ どうやったたらあのマシンガントーク止められるか、だけど」

ヘステイアはケロツと答えながら、寝台の上によじ登る。そして、マシロの背後に陣取り、上機嫌でセリフを促した。

「さあ、キミの中にあるシヨタシヨタ成分を集結させるんだ！ 恥じ

らいさえ捨てれば、キミの可愛さはベル君にも迫る！」

「なんだか趣旨が変わっていませんか……？ まあ、ただ漠然と呼びかけるより確実だと思えますが……」

「意味不明なコト言うんじゃねえ！ 大体、それとノースを黙らせるのに何の関係がある!？」

「あの子を黙らせるんじゃないやなくて、何某君を呼び戻すんだよ。話し相手がいなくなればマシンガントークもクソもないだろう？ てコトで、さんはい！」

「ふざけんな！ 神の悪フザケにしか聞こえねえぞ!？」

「違います。大マジメです。ホラホラ、どうしたく？ 照れてるのかい?？」

「うぜえ！ ベッドから降りろ！ ベタベタ触んな！」

ヘステイアはノリノリだった。

それはもう、目に見えて調子に乗っていた。
巷では善神として通っている彼女だが、善神といっても神は神なのだ。

悪ノリ専用のエネルギーリソースだって、それなり以上に確保してある。寧ろ誰も不幸にならないイタズラに關しては寛容な方だった。

故に、恥じらい嫌がるマシロをからかう事に全力を注ぐ。文字通り、背中や頭を猫の様に撫で回して、初心^{うぶ}なベルとはまた違った反応を楽しんだ。彼が数少ない『ヘステイ^自ア^分よりも小さなヒューマン』という点も大きいのだろう。もはや炉の女神にとってマシロに触わる事は、愛玩動物と触れ合うぐらいの感覚になっていた。

だから、このスキンシップにも『アイズに見せつけて嫉妬心を煽つてやろう』等といった意図は一切ない。

だが——誰もがそう受け取ってくれるかどうかは別問題だった。

「……………」

「ひい!? あ、アイズさん!?!」

「殺気ヤバ……………」

病室の空気が尋常じゃなく重くなる。

が、ベルとリルルカが即座に気付いたその変化に、能天気な幼女神は気付いていない。冒険者と神の危機察知能力の差が如実に表れた瞬間だろう。鈍感なロリ神は、未だ「ホレホレ〜」とマシロの頬をツンツンし、【劍姫】からの凍てつく波動を増幅させている。このままでは、下界から一柱の神が送還しかねない。

「あ、あの神様……………」

「なに地雷の上でタップダンスぶちかましてるんですか!?! 死にたいんですか!?!」

「はあ？ なに訳のわからない……………コト……………を……………」

ヘステイアは最後まで言葉を紡げなかった。
見てしまったからだ。

今も尚、大声で喋り続けている黒髪少女の背中から顔を覗かせた、
ブラコン少女のドス黒い眼差しを。

「ま、まままま待つんだ、何某君!? ちがつ……………これはそんな
じゃなくてっ!？」

必死に弁明するが、呂律が回らない。

そして、【剣姫】の様子にも変化はない。

ただひたすら、痛い程の沈黙を貫きながら此方を見続けている。加
えて、時が止まっているのかの様に微動だにしない。まるで、精緻な
人形と睨めっこをしている様な気分だった。

しかし、無情にも時計の針は動き出す。

何の前触れもなく、人形……………否、アイズが小首を傾げたのだ。コテ
ンと、可愛らしく。それは何が起こったか分かっていない幼子の様で
もあり、少し遅れて頬に垂れた艶やかな金糸が、蹂躪開始の合図にも
見えた。

「あば、あばばば……………!？」

ヘステイアはもうガクブルである。涙目である。

恐怖のあまりマシロにしがみつくが、無論悪手だ。アイズの圧力は
病室内の無機物すら軋ませる次元に達し、ヘステイアはより深い恐慌
状態に陥ることになる。結果、さらに激しくマシロに縋りつくとい
う、まさに悪循環だ。

「た、タス……………タスケテくれマシロくん!」

「離れる……………っ、首締まる……………っ」

等と、やっている内にも、「剣姫」はゆつくりと着実に距離を縮めていた。その牛歩の様な足取りがいつそう恐怖心を引き立てる。最早、女神は失神寸前だった。

「も、もう、プリティーボイスで『アイズお姉ちゃん』しかない！ マジで！ 早く！ ヴアレン何某君の怒りを鎮めてくれえええ！」

「死んでもゴメンだ！」

「ボクが死んでも良いって言うのかい!?!」

押し問答の末、ここでヘステイアはトチ狂った。

というか、恐怖心が臨界点を迎えた。

さつさと離れればいいのに、震えあがった幼女神は、マシロの顔面に己の育ち過ぎたメロンを押し付けていたのだ。正直、『恐怖に耐え兼ねた者が、近くの人物と抱き合う』というのは別に珍しくも何ともない反応だが、そんな事、アイズ鬼には関係ない。

「死にましたね。ヘステイア様……」

リルカの眩きを肯定する様に、「剣姫」の瑞々しい長髪が物理法則を無視して乱れ始めた。まるで鬼の心情を象るかのように歪に持ち上がる。比例して、病室内の圧力も、重力魔法が行使されていると言われても納得できるレベルに強まった。サポーターと白兔は成すすべなく片膝を付く。誰もが最悪の結末を想起した——その時。

「おい、ジャガ丸くんを投げろ！ 廊下に思い切りだ！」

絶望を切り裂くように、マシロが鋭く叫んだ。

ヘステイアは狂乱状態でもその意図を正しく汲み取り、ベそをか

「ムリだよお！ たしかにジャガ丸くんなら注意を引けるかもだけど、火に油かも知れないだろお!？」

「ウダウダうるせえ！ 早くしろ！」

「横暴だあ！ 死んだら化けて出るからなあ!？」

結局へスティアは、言われた通りジャガ丸くんをブン投げる事にした。目の前に鬼がいる以上、時間的猶予は無い。マシロに『お姉ちゃん呼び』で有耶無耶にして貰うのは現実的ではないと判断したのだ。

幸い、自身が見舞いの品として持って来たジャガ丸くんの詰め合わせは、ベッド横のナイトスタンドの上に置いてある。手を伸ばせば直ぐそこに有るのだ。「どうにでもなれ！」と、女神は半ばヤケクソで紙袋に手をつ突っ込み、ジャガ丸くんを何個か驚掴みにした。そして――。

「うわああああああああああああああああああん――!!」

大絶叫と共に全力投球。

頼む！ どうかこのジャガ丸くんを追いかけてくれええええええ！
そんな願いを込めて放たれた彼女の渾身のストレートは……。

バアアン!!!

見事、騒音を注意しに来た聖女アミッドの顔面ミッドに収まった。

◇・◇

1時間後。

マシロと、いつの間にか逃亡していた大和撫子ノリスを除く4名は、足に甚大なダメージを負っていた。

説教されていたからだ。

正座で。

超怖いお医者さんに。
アミッド・テアサナーレに。

決して声を張り上げるでもなく、口汚く罵る訳でもない理路整然とした正論は、一度も反撃を許すことなく一同の精神力をフルボッコにした。それまで病室の頂点に君臨していたアイズも、聖女の前ではタジタジである。比喩抜きで赤子のように震え上がり、絵に描いたような没落劇を見せつけていた。

しかし、そんな「劍姫」よりも更にコツテリ絞られたのが『炉の神・ヘステイア』である。まあ、コレに関してはアミッドの顔面にジャガ丸くんを叩き込んだ張本人なので仕方ない。加えて、怪我人のベッドに上がり込んだ挙句、その怪我人への差し入れが『ジャガ丸くん』というオマケ付きだ。無論、女神に悪気があった訳ではないが、善意ならば何をしても赦されるといふ訳ではない。

余りに一方的な蹂躪を見かね、マシロも『俺も食べたかったし、嬉しかった』とか、『ジャガ丸くんを投げる様に言ったのは俺だ』と参戦したが、医者の前で自身の体を蔑ろにする発言はご法度だ。寧ろ火に油を注ぐ形となり、盛大に自爆した。

結局、誰もアミッドの怒りを鎮火することは出来ず、彼女の気が収まるまでヘステイア、アイズ、マシロを中心にノーガードで殴られ続けたのだった。

聖女が去った後、病室に残されたのはグロッキー状態の3名と、『お連れを止めるぐらいしろや(意識)』との注意を頂戴したベルとリルカだった。ベル達ですらゴリゴリに精神を削られたのだから、ガチ説教を食らったヘステイア達の消耗は計り知れない。

誰も言葉を発さない死屍累々の室内で、緩慢に動き出したのはアイズである。長時間の正座の影響で四つん這いになりながらも、患者という事で唯一正座を免れた弟に縋りついた。

そして――。

「シクツ……こわかったよお……シロお」

ガチ泣きである。

【剣姫】が。この場で誰よりも格上の冒険者が。なんなら、泣かせた相手よりも格段に強い筈なのに。

しかし、それを茶化そうとする輩は居なかった。

怖かったのは事実だし、何なら普通に全員涙目だったからだ。

「ふう……まさかマシロ君関連でキレた何某君より恐ろしい子がいるなんてね……。下界は広いぜ……」

「何ちよつとカツコつけてるんですか……。ガクブルですよ？」

「いや、キミもだろっ」

「ハハハ……。で、でも、本当に怖かったですね。夢に出るかも……」

「笑えねえからヤメロ」

「そうだよベル君、オネシヨしちゃうだろ？」

この場に居る全員が、嘗てない程大きな恐怖を味わった。それを同時に体験することで、奇妙な一体感さえ生まれ始める。

喉元過ぎれば熱さを忘れるとは良く言ったもので、場には『怒られちゃったね、たはは〜』みたいな空気がすら流れていた。

けれど、そんな和やかな雰囲気は直ぐに消し飛ぶことになる。

「……………つーか、ノース^元どこ行つた？」

まず、初めに禁断の一言を発したのはマシロだった。

それだけで場が静まり返り、剣呑な空気が蔓延する。

「そりやあボク等も騒ぎはしたさ……。けど、一番最初に騒いでいたのはあの子だよね？ 説教の時にはもういなかったけど……」

「まあ、【戦場の^{デア・セイント}聖女】様が現れたタイミングからして、ヘステイア様ではなく彼女の声を聞きつけて来たのでしょね……」

低い声で同調したのは、ヘスティアとリリルカだ。

ふたりとも完全に目が据わっている。

無論、彼女達にも怒られるに足りる正当な理由は有った。しかし、それでも、大元の原因がまったくの無傷というのは納得がいかない。第一、周囲の迷惑も鑑みずにマシンガントークに興じていたノースと、それを止めようとした結果騒がしくしてしまったヘスティア達では、どう考えても前者の方が巨悪だろう。

兎にも角にも、やられっぱなしは性に合わない。程度の差はあれど、彼女らは全員負けず嫌いなのだ。冒険者であるマシロは勿論、サポーターのリリルカや、一見平和主義者に見えるヘスティアすらも殺気を滾らせている。

「あの野郎、退院したら覚えてやがれ……!」

「まあ、待てマシロ君。暴力はいけない。どんな理由があってもね」

「あ?」

「ごめんよ。でも、こればかりは炉の神としての矜持なんだ。ボクの顔を立てておくれ」

「……………」

「それに、そんなのより、もっとスマートで、効果的な方法がある」

血の気の多いマシロを制したヘスティアは、しかし聖母のような言い分とは裏腹に悪い顔でアイズの肩を掴んだ。湖畔のように美しい碧眼をギラつかせ、未だ半ベそ状態の少女に告げる。

「泣いている場合じゃないぞ、ヴァレン何某君! 思い出すんだ……今日、ノース君が、たったひとりでマシロ君のお見舞いに来た事実を!」

「…………?? えっと、それが……なにか?」

「つまり『可愛い女の子』が、『ふたりつきり』で、『マシロ君に会おうとしていた』って事だよ!? 分かるかい? この由々しき事態が??」

「………………!」

瞬間、【剣姫】の金目がカツとで見開く。

勝った——。と、ヘステイアは内心ガッツポーズをとった。

これで、まず間違いないくアイズは嫉妬に狂う。弟に群がる害虫認定をするだろう。進んでノースを虐めたりはしないだろうが、それでも警戒心から多少風当たりは強くなる筈だ。あの少女への仕返しとしては、丁度いい塩梅と言えるだろう。

けれど、【剣姫】の反応は、此方の期待したものでは無かった。

「女の子……？ ノースが？」

「……………ん??」

ボケでもすっ呆けでもなく、本気で分からないと言いたげなヴァレン何某に幼女神は戦慄を覚える。まるで、『ノースⅡ女の子』がしつくり来ていない様な顔だ。まさか、あの容姿の彼女ノースが男に見えているのだろうか。確かにアイズ・ヴァレンシユタインは天然だが、流石に限度がある。ここは、視点を変えるべきだろう。

そもそも、アイズとノースは同じファミリア所属の冒険者なのだ。性別を間違えて覚えているとは考えづらい。

つまり、つまり……………。

ヘステイアは、脳をフル回転させて1つの結論に辿り着いた。恐る恐る、ヴァレンシユタイン姉弟に尋ねる。

「えーっと……、もしかしてあの子って……………『男の子』？」

「……………？ はい」

「そうは見えないけどな」

『何を分かり切った事を…………』とでも言いたげに姉アイズは肯定し、マシロ弟は『気持ちちは良く分かる』というふうに頷いた。

瞬間、ヘステイアは、膝から崩れ落ちそうになる。

ノースが『男』…………。何度彼女…………否、彼の顔を思い出しても信じ

られない事実である。服装は別として、あの顔面と声質、立ち振る舞いで男はもう詐欺の域だろう。けれど、同ファミリアの人間が証人では疑いようがない。

それはつまり、自身の思い描いた目論見が根底から崩れ去った事を意味していた。

「ど、どうするんですか、ヘステイア様？ ノース様が男となると、【劍姫】様に嫉妬させる作戦は無理ですよ？」

「ぐ、ぐぬぬぬ」

リルルカの指摘にヘステイアは頭を抱える。

完璧に、アイズを焚き付けること前提で考えていたからだ。他力本願が裏目に出た形である。無論、ノースにお灸は据えたい。けれど、他派閥の冒険者への仕返しにこれ以上の労力をかけるのも、物臭な女神としては気が進まなかった。

「しかたない……」

故に、彼女は発動させる。

満面の笑みで銀の少年にサムズアップし、必殺スキル『丸投げ』を

「マシロ君……後でノース君をギツタンギツタンにしておいておくれ！」

「矜持ブン投げてんじゃねえよ、駄目神」

光の速さで前言を撤回したヘステイアは、順当に己の神格を落としたのだった。

番外編
番外編 第一話

……………頭がおかしくなりそうだった。

「お兄ちゃん」

脳が溶けそうなほどの甘ったるい声で、馬鹿みたいにニコニコしながら、金髪の少女が腕に擦り付いてくる。彼女は記憶の中にある『姉』と、よく似ていた。

「えへへへ」

だから、この少女が『姉』と同一人物な筈がない。幾ら同じと言っても、それはあくまで『過去の姉』との話。『現在の姉』は、こんな子供でもなければ、だらしないニヤケ顔を晒す事はない。勿論、自分に擦り寄って来たりもしないのだ。

しかし、朱色髪の主神が言うには、彼女は『アイズ・ヴァレンシユタイン』で間違いないらしい。

それどころか……………。

記憶よりどこか頼りない印象を受ける、やじ馬根性丸出しで集まって来た男の団員達。

バスタオルを身体に巻きつけながら此方を睨んでいる幼いアマゾネスの姉妹。

そして、それを凌駕する形相で殺気を滾らせている、やはり記憶より若干印象にズレのあるエルフ共。

これらに關しても、マシロの知っている彼ら彼女らと、同一人物との事だった。

全く訳が分からない。

だが、神が言うのならそうなのだろう。きっと彼らは何かしらの珍事に巻き込まれ、5年ほど時が巻き戻ってしまったのだ。

身体中を蝕む痛みすら忘れ、マシロはそんなふう^にに現実逃避をした。

そう、現実逃避である。

アイズを含めた複数名の団員達が、何らかの原因で若返ってしまった……。

もしそうだったならどれだけ気が楽だったかと、マシロ・ヴァレンシュタインは心に曇天の空模様を描く。

それなら、マシロは『傍観者』でいられたのだ。今、この瞬間の様に、『昔の姉』にしばらく付きまとわれる事にはなるだろうが、その内にフィン達が原因を突き止めて事件を収束させてくれるだろう。それまでの間だけ、この小さな【剣姫】を煙に巻いていればいいのだ。

しかし、現実是非常である。決してマシロに楽な道など歩ませない。『傍観者』^{第三者}でいる事を許さなかった。

彼の鼻孔を突くのは、何処か懐かしい本拠^{ホーム}の香りだ。

腰や背中を支えるソファーには、遙か昔に失われた『張り』を感じる。

銀の瞳が捉えるのは、直近の物より何巡も古い内装の団長室だった。

そして——、先述した通り幾分若々しい顔つきの見知った団員達。それらが、物珍しそうにだったり、バツが悪そうにだったり、怪訝そうにだったり、親の仇を見る様にだったり……。とにかく、多種多様な顔つきで、マシロを見ている。

この状況が指し示しているのは、注目を集めている人物が、マシロであるという事実だった。決して、コアラに擬態しているアイズのあられない姿ではない。

そう。

マシロは『傍観者』ではなかったのだ。寧ろ、その逆。

この珍事に於ける『当事者』^{被害者}は、紛れもなく彼自身だったのである。

「ああ、えーっと、君が驚くのも分かるけど、僕らの見解を述べさせて貰うよ」

半ばショートした脳髓に、同情を含んだ声が届けられた。

記憶の中と寸分違わぬ姿をした、黄金色の髪を靡かせる小人族^{パルサム}だ。

「ロキ・ファミア」の団長を務める男で、混沌としたこの場に一声で秩序を齎した。

部屋にいる者全員の視線を受け止めながら、粛々と話を纏め始める。

「俄かには信じられない話だけど、ロキが言うには、君は『マシロ・ヴァレンシュタイン』で間違いないらしい。実際、アイズも懐いているし、僕の目から見ても、恐ろしくマシロの面影を感じるのには確かだ」

団長の発言に、改めて周囲がざわつき始めた。

ヒソヒソと「マジで、マシロなんスか?」「メチャクチャ反抗期拗らせてるじゃないか」「ああ、クリツとした可愛いお目めのマシロたんが、あんなドギツイ三白眼に……。ウチの天使はいつたい何処へ行つてもうたんや……」等と言いたい放題である。

散々な言い草に苛立ちを覚えるマシロ。その心情を目敏く察したらしいフィンが、苦笑を漏らしながら続けた。

「そんな君は数刻前……突然、僕らの本拠ホームの女子風呂に現れた。アイズの胸に収まる形でね」

その瞬間、いつそ面白いくらいに、場に滞留していた殺気が膨れ上がった。もし、それに実体があったなら、容易く天井を突き破っていただろう。発生源は、無論エルフ共だ。身体にタオルを巻きつけた連中である。そして、その膨大な殺気を向けられているのは、当然マシロで……。

「ああ?」

「なにさあ?」

癪なので正面からメンチを切つてやると、今度はアマゾネスの姉妹も参戦して来た。一気に一触即発という雰囲気蔓延する。

が、次の瞬間――。

「やめんか、馬鹿者。全く、きかん坊になりおつて」

「お前達もだ。今回の件が不可抗力であった事は疑うまでもないだろう」

マシロはガレスに、テイオナ達はリヴェリアに、それぞれチョップ

を落とされてしまった。

両陣営とも不満げな顔であったが、流石に首脳陣に釘を刺された上で喧嘩をする程の命知らずではない。身を引くハイエルフやドワーフと入れ替わる形で、小人族バルツムの雄弁は続いた。

「丁度その時間、この時代のマシロはアイズとお風呂に入っていた。君が本当に5年後のマシロだと言うなら、現れる際は、この時代のマシロと入れ替わる形になってしまうと推測できる。同じ時間軸に、同じ人間は存在できないだろうからね」

ここで言葉を切つて、フィンは諭す様な表情を姉妹やエルフ達に向けた。

「ならば、今回みたいな現れ方にもなるだろう。リヴェリアの言う通り、完全に不可抗力だよ。どうしたって、そこにいるマシロには防ぎようがない事故さ」

団長にも断言されてしまえば、流石の彼女らも突っかかっては来れないようだった。最初からバツの悪そうにしていた一部のエルフ連中に合流する形で、バスタオル共が全員目を背ける。実に痛快な光景だった。

自分で言い負かした訳でもないのに、何故かしてやったり顔をしているマシロ。そんな狭隘な彼の顔面に、不意に影が差す。

見上げると、柔らかな瞳を湛え、フィンが此方を見下ろしていた。

「ロキの証言に加え、これだけの状況証拠が揃ってるんだ。君は未来のマシロでまず間違いない。歓迎するよ。気が気じゃないと思うけど、問題が解決するまでここでゆっくりとしていると良い」

そう言つて、スツと、団長の手が差し出された。

これは、なんの因果か、アイズ・ヴァレンシユタイン含め、複数名の団員達が若返つてしまった物語………ではない。

何の因果か、マシロ・ヴァレンシユタインが過去に戻ってしまった

物語だ——。

番外編 第二話

不意に、何か温かい物が顔面に触れた。

それは奇妙なまでに柔らかかった。

巨大なマシユマロに顔を埋めたとしたら、きっとこんな感触に包まれるのだろう。いや、お菓子特有の甘ったるい匂いやベタつきが無い分、それよりも数段上等だとも言える。所々に見られる白い泡の様な物も、別に生クリームという訳ではないらしい。それは『泡の様』ではなく、正しく泡である様で、マシユマロの肌にツルツルとした質感が加わっている。

ある意味『ヌメリ』とも取れる肌触りだったが、不思議と不快な感じはしなかった。何処からともなく漂ってくる石鹼の心地よい香りが、そういった感覚を打ち消してくれているのかも知れない。

これはなんだ？

どういう状況だと、顔を持ち上げる。

すると、まん丸い月と目が合った。

いや、違う。月ではない。これは目玉焼きだ。黄色い真円の周辺を純白色の白身が取り囲んでいる。何故皿の上ではなく宙に浮いているのかはわからない。

だが、それにしても不味そうな目玉焼きだ。

二つある黄身は両方とも淵と中心部が焼け焦げており、不自然に射し込んでいる光は夜空に輝く星屑のようだった。まるで硬い宝石か何かである。黄身の色自体も何処かくすんでいて、『黄』というよりは『金』に近い。コレで食欲が湧くような奴は、きっと偏食家か何かだろう。

しかも極め付けは、この目玉焼き、ギョロギョロと生き物の様に動くのだ。

中央の黒点が胎動する様に大小を変化させるのだから気味が悪い。その内、白身の中を我が物顔で泳ぎ始めそうな雰囲気すら放っている。

目玉焼きの癖に、いったい何を勘違いしているのか……。これでは『目玉焼き』ではなく、『目玉』では――。

「……………は？」

現実逃避のような思考を巡らせていたマシロ・ヴァレンシユタインは、ここでようやく自身の視野と聴覚の拡がりを感じ取った。

不自然な程に眼前の『目玉』しか捉えていなかった彼の視界は、『小造りな鼻』、『桜色に染まった雪色の頬』、『艶やかに濡れた唇』、『金の絹糸の垂れた額』等といった、人間の女の部位と思しき器官を次々と認識していく。

鼓膜の方も同様だ。それまで完璧にボイコットを決め込んでいた分際で、何が引き金になったのか、急に働き者となったそいつは周囲の雑踏をつぶさに拾い始めた。

「え？　ちよ、ヤダ、あの子、男の子じゃない？」

「なんで、ここにいんのっ？」

「というか、アイズちゃん抱き付かれてない？」
聞こえてきたのは、動揺と困惑を孕んだとよめき声である。

加えて、その全てが女性の喉から生み出された物らしく、間違っても男の無理な高音には聞こえない。

この場にいる者、全てが女。

そして、男がいる事が非常識であるという風な反応。

湿気が異常に高く、常に湯気が充満している特異な場所。

「おい、まさか……」

……そんな条件に該当する所など、マシロは一つしか思い浮かばなかった。

けれど。

だからこそ、彼はまんじりとも動けない。

身体が、脳が、その予測を認める事を拒否している。頭の何処かで、『即刻逃亡』が最適解である事を理解しながらも、マシロは目の前に佇む『少女の素肌』から視線を外すことが出来なかった。

銀の瞳が、眼前の景色を映すだけの鏡に成り下がる。生々しすぎる肌色の身体が、何も纏わずにそこにある。いや、泡は纏っている。頬で触れた時は大きく感じた双丘は、こうして俯瞰で見ると中々貧相な物だ。まあ、目の前で固まっている少女の年齢を考えれば、これが普通――。

「アイズから離れろ、このドヘンタイがああああ!!」
「……………!!?」

突如、獣のような咆哮と、『バシャーン』という爆音が轟いた。途端に、途轍もない威圧感が発生する。物理的に重力でも発生しているのかと勘違いするほどの圧力だ。それを一身に受け、マシロは比喻でも何でもなく、己の『死』を直感する。

肉体に住み着く生存本能の全てが、宿主を生かそうと警鐘を鳴らした。最早、悠長に現実逃避をしている猶予はない。直ぐにでも状況把握に移らなければ、冗談抜きで死ぬ。

目を背けたい衝動を必死に抑え込み、マシロは強大な圧を感じる方へと顔を向けた。そして、そこに広がっていたのは予想通りの光景だった。

同時に、理解できない光景でもある。

視線の先には立派な湯船があった。そこまでは予想通りだ。

しかし、天にさえ届く、この湯の柱は何だと言うのか……。

湯船から荒々しく隆起するお湯の姿は、いつそ火山の噴火さえ想起させる。神々しいまでの圧倒的質量は『柱』というより寧ろ『壁』と形容した方が良いかも知れない。

天井に激突した壁は、轟音と共に『雨』へと変わる。残りのお湯は湯船から逃げ出すかの如く床に這い出て、浅い海を作っていた。

温かな雨に打たれ、足元を湯に包み込まれる。だというのに、マシロは自身の肉体が冷え込んでいくのを感じていた。

無理もない事である。

何故ならマシロは、『湯の壁』の中に、自分に向けられた濃密な『怒気』を感じ取っていたのだから……。

マグマという物体の核を、職人の手によって幾重にも濃縮させたかのような、圧倒的な死の香り。最早ここまで来ると『殺気』と言い換えても差し支えないだろうそれが、複数……そこにいる。

『液体』を、こんな規模で持ち上げることが出来る化物が、一人以上、確実に・だ。Lv. 3の自分にも恐らくこんな芸当は難しい。余程『力』に特化したステイタスの持ち主か、それともLv. 4以上の怪物なのか。どちらにしても、あの中にいるのは、生半可な相手ではないだろう。

次の瞬間、殺気が一段と濃くなった。そして、分厚かろう湯の壁に、ハッキリと人影が現れる。まずは、二人。

先陣をきるように、顔立ちのよく似たアマゾネスの少女が二人、湯の中から姿を現した。マシロよりは大きいというだけの小柄な体軀ではあるが、立ち姿や佇まいの端々から、彼女らの実力が如実に伝わって来る。恐らくは自分と同等かそれ以上の力を有しているだろう。

この時点でLv. 3同士の二対一だ。既に勝ち目がない。だといふのに……。

まだ絶望は終わらない。

続々とお湯の壁をぶち破りながら、血気盛んな連中が歩き出て来た。誰も彼も凄まじい形相をしている。最早、個別に憤りの大きさを推し量る事など叶わない。莫大な怒りがうねり混ざって、一つの巨大な生命体に成ったかの様だ。

言うまでもないだろうが、この殺気の主は全員『女性』である。それも、皆例外なく『生まれたままの格好』だ。エルフだろうが、獣人だろうが、ヒューマンだろうが、関係なく一律に。

別に、彼女らを痴女集団と言うつもりはない。

ここでは、それが当然だ。正装と言っても良い。

入浴の際に、服を着たままにいる奇特な奴は居ないだろう。

そう、ここは風呂なのだ。そして、女湯なのだ。

「……………」

だから、彼女らは男であるマシロの存在に憤っている。女湯に出没

したので。ボコボコにされる正当な理由が、マシロにはある。

無論、自らの意志でこの場に乱入した訳ではないが、彼女らからすればそんな事はどうでもいだろう。ここで重要なのは、不可抗力とはいえ、大勢の女性の裸を見てしまったという事実だ。

けれどだからと言って、はいすみませんでした。と、自ら首を差し出す訳にはいかない。こんな理不尽に痛めつけられてたまるものか。女湯を覗く意思が一ミリでもあったと言うなら仕方ないが、そんな事実は一ミクロンも無いのだから。

すると、不意にアマゾネスの片割れの声が聞こえて来た。

「ちよつとオイタが過ぎたかなあ？ ほら、早くその子から離れてあげて」

彼女に関してはそこまでキレている・という感じはしない。だが、決して瞳が笑っていないのもまた事実だ。察するに、自分の裸を見られた事でよりも、マシロに抱きつかれる形になってしまった金髪の少女の事を想って怒っているのだろう。

そして、そんな彼女の意見に同調する様に沢山のヤジが飛んでくる。

「そうよそうよ！」

「アイズちゃんが嫌がってるでしょ！」

「このヘンタイ！」

「エロガキ！」

「ドスケベ！」

「は？ あつ、いや」

ここまでボロクソに言われてようやく、マシロは自分が未だ、金髪の少女に密着している状態である事を思い出した。此方は服を着ているので肌同士が触れ合っているという訳ではないが、同年代の女の子に抱きついていてる時点で大問題だろう。

マシロは大慌てで、身体を離す。気恥ずかしさとバツの悪さから、少女の顔など当然見れない。裸体を見てしまっただけでなく、不躰に身体を触ってしまったのだ。この場における最大の被害者は間違いなく彼女で間違いない。

故に、彼女にだけは流石に謝罪が必要だ。

如何にマシロの意思ではないとはいえ、流石にコレを不可抗力だと言いつけるのは無理がある。いや、不可抗力ではあるのだが、最早やらかしの内容が重過ぎて、そんな事では相殺できない。

だが、謝ろうとした次の瞬間、エルフが一人、ゆつくりと此方は近づいて来た。顔は伏せられている為、表情は良く見えない。だが、とても綺麗な薄い栗色の髪を持っている。その物腰からも、殆どの者は柔和な印象を受けるだろう。御多分に漏れず、マシロもそうだ。だからこそ、この剣呑な雰囲気は恐ろしい。

そして、こんな風に怒りを露にする、普段は温厚なエルフを、マシロは知っていた。

「……………貴方、年齢は？」

「……………あ？」

出し抜けに放たれた質問に、マシロは直ぐに反応できなかった。ただ、脳内で、この声の主と、頭に浮かんでいる者の声が一致する。瞬間、マシロは二つの意味で嫌な汗をかいた。

「年齢は？」

だが、そんなマシロの心の内など知らぬとばかりに無機質な質問が繰り返される。

「……………十二だが」

「そうですね……………十二歳。まだ子供ですね」

年齢を告げた途端、エルフの声色が柔らかくなった。

そして、上げられた顔には慈愛に満ち満ちた微笑が浮かんでいる。その顔を、その微笑みを、マシロは知っていた。

アリシア・フォレストライト。

【ロキ・ファミア】に所属する第二軍の実力者。つまりは、同僚だ。

どう見ても本人にしか見えないが、本物ならわざわざ歳を確認する必要はない。仮に正確には分からなかったとしても、同じファミアなのだから、流石に大まかな見当くらいは付けられる筈だ。

つまり、彼女は極端にアリシア酷似したそっくりさんという事になる。が、同時にこんなに似通った人物が存在するのかもしれない。顔だけではない。声も、所作も、雰囲気も、何もかもがアリシアそのものだ。

普段から彼女ともっと親密にしている者からすれば相違点など一目瞭然なのかも知れないが、少なくとも、マシロの関わり程度ではそれを見付ける事など出来なかった。

故に、彼の中では彼女はアリシアだ。

幾ら違うと頭で分かっている、心の何処かで彼女とであると判断してしまう。

だから、マシロはこのアリシア似のエルフの、アリシアにしか見えない微笑が恐ろしかった。対した交流など無くとも、「ロキ・ファミリア」の同志なら誰でも知っている。

こういう笑い方をする時のこのエルフは、爆発寸前であるととー。

「乙女の湯あみを覗くなんて恥を知りなさい！ 子供のイタズラでは済まされませんよッ!!」

「……………ッ!!」

まさしく怒髪天。

予想通り、目を見開き、柳眉を吊り上げ、アリシア似のエルフは怒りの丈をぶち撒けた。

瞬間、ビリビリと、電気でも走っているかのように、肌もひりつく。

エルフの中でも特に潔癖な彼女の爆発を合図に、場のボルテージが鰻登りになったのをマシロは感じ取った。

「……………チィッ！」

脇目も振らず、マシロは脱衣所へと駆け出す。

『奴等を刺激しない様に、行動には最新の注意を払わなくてはならない』……等という保守的な思考は、遥か彼方にぶん投げる。

今のマシロは、服こそ着ているモノの、全裸で猛獣の檻に入れられている様なものだ。最早、話し合っただけの留飲を下げる等という選択は論外。そんな悠長に事を構えていたら、即刻食い殺される。

背後で「逃げたわよ!」「追え!」「逃がすな!」「直ぐに捕らえて殺すわよ!」等という物騒な雄叫びが聞こえて来た。幸いそれらに背中を押される形となって、直ぐに最高速度トップスピードに到達する事が出来たのだが……。

「ふぐ……ッ!」

次の瞬間、唐突に視界が急下降する。

したたかに顔面を床に打ち付けた時にはもう、マシロは自分が転倒した事に気付いていた。足を取られたのだ。泡に。

風呂場なのだから十分にあり得る現象だ。故に、マシロは一割だけでも意識を自身の足元に割いておくべきだった。それをしなかったのは、明確に彼の落ち度ではあるが、駆け抜ける事以外に気をかけている余裕がなかったのもまた事実である。

故にマシロは体中の痛みも無視して、むくりと起き上った。鼻孔の中が鉄臭い。完璧に出血している様だが、無論、構っている暇などなかった。

「は、ははははは、鼻血をそんな大量に……なんて汚らわしいッ!」
すると、頭上からそんな罵声が降ってくる。

同時に、自分の身体と床に影が差す。上空から飛びかかってきているという事は分かったが、マシロは顔を上げて敵との距離を測る前に、そこから飛び退いた。自身に被さる影の大きさから、そうしないければ避け切れないと判断したからだ。

はたして、その推測は正しかった。影の範囲から逃れる事一秒後、それ迄自身が存在していた場所に、栗毛のエルフが降って来たのである。碌に体重なんてないだろうに、エルフの蹂躪した床は、見るも無残な姿になっていた。

湯気と共に立ち上がりながら、彼女は喚声をぶつけて来る。

「いったい我らの肢体で何を考えていたのですか!?! やはり下賤な覗き魔……子供と言っても、中身は野獣と変わらないようですね!!」

器用に胸と腰回りを腕で隠しながら激昂するアリシア似のエルフ。

『今転んだの見てなかったのか』とか『お前魔導士の癖になに率先して突っ込んで来てんだ』とか色々突っ込みたい所はあったが、そんな

事に熱を出しても状況が好転するとも思えない。喋る分のエネルギーさえ惜しんで、マシロはグツと口を嚙む。

そして、その瞬間、エルフの背から素早い影が飛び出して来た。褐色の影だった。それが二つ。左右から挟撃する様に此方に突っ込んで来る。褐色の影の正体は、おそらく姉妹であろうアマゾネスの少女達だった。

「おらー！ 死に晒せえ！」

「大人しく捕まんなよお」

まるで舞でも踊っているかの様に張り付きながら攻撃してくる二人。そのコンビネーションは見事の一言で、マシロはあつと言う間に劣勢に立たされる。

そして、同時にその動きに強い既視感を覚えていた。

——こいつら、まさか、ティオナとティオネか……!?!

その思考に至った途端、急速に少女達の姿がヒリユテ姉妹の姿と重なる。が、マシロは二人の双撃を捌きながら瞬時にその考えを否定した。

——何馬鹿な事考えてやがる……奴等はこのガキじゃねえだろ！

「考え事かよ？ 余裕じゃねえか」

瞬間、ドスの効いた声が耳元で響いた。

「——！」

気が付いた時には、既にティオネの面影を持つアマゾネスの拳が、頭蓋に迫っていて——。寸での所で躲すと、今度はティオナ似の少女が溝内目掛けて片足を振り上げていた。

「く……ッ」

避けられない。

速度的にも、体勢的にも。

そう理解したマシロは、観念した。

観念して、使った。

『目覚めよ』
テンベレスト

瞬間、小さな暴風がマシロの周りに発生する。自身と姉だけが扱え

る風のエンチャント魔法。その圧倒的な風量に、張り付いていたアマゾネス達が成す術なく吹き飛んだ。近くにいたエルフも飛ばされないう様に踏ん張るのが精一杯の様相だ。

煩わしい邪魔者共は無力化した。これで、短い間だが、進路を阻む者は誰もいない。このまま脱衣所まで逃げ切れる。

マシロは、そんな風に考えた。

別に自分に都合の良い解釈をしていたつもりはない。風を纏った時の自身の速度。脱衣所までの距離。敵勢力との距離を総合的に考えて、客観的判断を下したまでだ。

しかし、そう言った物に対し、神々は嬉々として唾を吐きかけるのだろう。『それは、死亡フラグだ』と笑い転げながら。

次の瞬間、マシロの身を包む精霊の風。

それが、そよ風に感じられる程の、暴力的な熱量が浴室内に発生した。

「なっ!?!」

驚き、振り返ったマシロが見た物は——魔法陣マジックサークルだった。

それも一つや二つではない。

エルフは勿論の事、魔法を使えるそれ以外の種族達の物も交え、視界を埋め尽くす程の無数の魔法陣が出現していた。この場にいる魔導師のほぼ全てが隊列を組み、短文から中文の詠唱で完成する放出系魔法を一斉掃射しようとしている。

しかも、魔力を読む限り、『風魔法』には『炎魔法』。『水魔法』には『雷魔法』を複合させる等、それぞれに相乗効果をもたらす二組をセットで放とうとしている様だ。

無論、一つ一つの威力は風の鎧を貫通する程ではないだろうが、こゝも効果的に組合されればその限りではない。というか、そもそもそんな効率的な使い方をしなくても、これだけの膨大な数の魔法に晒されれば、それこそマシロの風など容易く霧散してしまうだろう。

完全に、オーバークイルだ。

「撃ちなさい、魔導師達!!」

直撃すれば普通に死にかねない馬鹿火力。

それが、今、小さな浴室内にて乱射された。アリシア似のエルフによる、なんの躊躇いもない号令によつて。

死が。

確実な死が、轟音を伴なつて此方に迫つて来る。

最早回避不可能な圧倒的数の魔法群。

それを目前に、マシロの思考は停止した。

——ちよつと待て……、コレ、俺が避けたらとんでもない事に……。

いや、状況の打開を放棄したというべきだろう。

それ程までに、『無理』な状況だった。だからつい、する必要のない、この建物の被害にまで考えが及んでしまう。

『エアリエル』の出力を最大まで高めれば、もしかすると耐えきれるかも知れない。

だが、それをすれば、マシロは自分の魔法によつて内部からズタズタにされる事になる。奴らの魔法を凌いだとして、結局動けなくなるなら、その後の追撃に対応できない。

終わりだ。

まさか、覗き魔の汚名をきせられ処刑される事になるとは思わなかった。

無論、こんな最期は不本意だが、今の自分ではどうすることもできない。

マシロは目を瞑った。

身を固くして衝撃に備える。自身の肉体は悉く打ち滅ぼす強豪たる暴力に。

……だが、一向に終わりは訪れなかった。

魔法とは別の轟音が前方で轟いた音は聞こえたが、それが此方に飛び火する気配は全くない。どころか、死を感じさせる魔法の圧力が一切消えていた。

マシロは、恐る恐る瞼を開く。

まず、視界に飛びこんできたのは、金色の髪だった。

周囲に満ち満ちている乱気流のような風に弄ばれている金糸は、主の白い背中を隠す役割を放棄している様である。

信じ難い事だが状況を見る限り、彼女がああのような魔法の群れを相殺してくれたらしい。少女の遙か向こう側で、自身と同じ様に驚愕している魔導士達の顔が目に入る。いや、驚愕というよりは、少し怯えているような……。

そんな感想を抱いていると、不意に、少女の顔が此方に向いた。金色の瞳と目が合った瞬間、マシロは無意識に呟いていた。

「……あ、アイズ………?」

知らず知らずの内に漏れ出た言葉に、マシロは直ぐに首を振る。

確かにこの少女は、どこか姉と似ている。しかし、ヒリユテ姉妹と同じだ。面影はある。だが、彼女はこんな小さな子供ではないのだ。

「大丈夫? 怪我してない?」

姉の声をそのまま幼くしたような音が、少女の口から放たれた。

「あ、ああ……」

警戒しつつ、肯定の意を伝える。すると彼女は無遠慮に顔を近づけ、つぶさにマシロの全身を確認し始めた。

「ちよ、アイズ!」

すかさずアマゾネス達から制止の声がかかるが、少女は聞く耳を持っていないらしかった。まるで聞こえていないかのように無視をして、両手でマシロの肌に触れ始める。どうやら、視覚だけでなく触覚でも怪我の有無を確かめるつもりらしい。

それはまさしく異様な光景だった。

突如女風呂に出現した駆逐対象の^男身体を、本来狩人でなければいけない被害者の^女方が率先して触りにいつているのだから。

だが、そんな周囲の空気を歯牙にもかけず、やがて少女は満足気に微笑んだ。そして、小さな掌をマシロの頭に乗せ、撫で始める。

「うん。ほんとうに怪我はないみたい。よかった」

少女の言葉に偽りは無いようで、本当に心の底から安心した。という心情が伝わって来た。それ程迄の柔らかな微笑に、マシロは文句の

言葉を引つ込める。どこまでも慈愛に満ちた眼差しは、まるで息子が弟を見ている様だった。当然、この少女とは面識など無い筈なのに……。

等と思っていると、次の瞬間、少女から底冷えする様な空気が放たれた。ついに豹変したか・と一瞬身構えたマシロだったが、どうやらそれは背後のエルフ達対して向けられた物らしい。少女は其方に振り返り、冷たい言葉を放つ。

「鼻以外は」

ゾワリ……。

マシロは全身が凍り付くような錯覚を覚えた。

別に怒鳴られた訳でも、睨まれた訳でもないのに、エルフ達のこれまでの怒りが嘘だったと思うほどの瞋恚をこの少女から感じる。

そして、当然アマゾネスやエルフ達の当惑も相当な物の様だった。

「え、ちよ、アイズ？　なんで怒ってるのさ？」

「そ、そうよ。そいつは覗き魔なのよ？　ちよつとぐらい怪我しても自業自得じゃない」

「……ちよつと？」

ティオネ似のアマゾネスがそう口走った途端……目に見えて金の少女の纏う雰囲気が変わる。既にこれ以上ない程の怒りを放っていたというのにまだ上があるのかと、マシロは隣りで困惑する事しかできなかつた。

その折、金髪少女に身体を引かれる。背後から抱き抱えられる形で、改めてアマゾネス達の前に鼻血に染まった顔面を晒す事となった。そして、耳元で……。

「これが？」

という声が聞こえて来た。

囁き声と言っても差し支えない声量だというのに、少女の言葉はこの場にいる物全員の耳に入っていた。

少女の圧力に飲まれたのか、『ちよつと』では済まない出血量に怯んだのか。そのどちらなのかは分からないが、エルフ達の威勢が目に見えて萎んでいったのは事実だった。

「いや、でもその鼻血はその子が勝手に転んだから……」

「テイオナ達が凄い顔で襲いかからなかったら転ばなかったと思う。それを勝手に言うの？」

「う……」

最早こいつ無敵なんじゃないのか……。

そう思えるぐらい、この姉に似た少女は、この場において強者だった。彼女が味方をしてくれている以上、もう襲われることはなさそうだが、どうしてもこんなにも味方をしてくれるのかは、相も変わらず見当もつかない。

あれだけ怒り狂っていたアリシア似のエルフでさえ、しおらしく頭を下げて来る。

「そ、それについてはごめんなさい。確かに、少し過剰でした……」

だが、全面的に非を認めている訳ではないらしく、「ですが」と食い下がり始めた。

「ですが、最初に女風呂に入って来たのは其方です。アイズ、貴女だって急に抱き着かれて怖かったですでしょう？」

マシロも、コレに関しては全力で非を認めざるを得ない。確かに、気が付いたら少女の胸に抱かれていたという、此方では回避不能の状態ではあったが、それでも大きな恐怖心を与えてしまったのは確かだろう。だからこそ、この少女からの友好的な態度が理解できない。よもや、余りの衝撃的な状況にバグってしまったのではないかと心配になる程だ。

「L v. 4 だからと言って強がる必要はありません。赤の他人に抱き付かれたのだから、それが普通です」

これも正論だろう。

こういう事に関して、レベルが高かろうが低かろうが関係ない。本能的に女性は恐怖を感じるモノだ。いや、状況をもう少し苛烈に煮詰めれば男だって怖がる者も出て来るだろう。それくらいデリケートな問題。

故に、これだけ丁寧に諭されれば、この少女も心変わりしてしまうかも知れない。若しくは、本当に思考がショートした故の行動だった

場合正気に戻って敵対される可能性もある。彼女が向こうサイドにつけば、蹂躪が再開されるのは時間の問題だろう。

「赤の……他人？」

不意に、少女の肩が震えだす。ワナワナと、小刻みに。だ。

マズイ。マシロはそう直感し、身構える。

これが怒りからくる震えだとしたら、その矛先は間違いなく自分だろう。アリシア似のエルフが放った台詞に、少女が憤りを覚える要素などなかったからだ。

が、結果から言うと、その心配は杞憂に終わった。

マシロがその異変に気付いたのは、彼女の瞳に滲んだ涙を見た時だった。それなりに距離が離れている事と、湿度の高さから発生している湯気によって他の者達は気が付いていない様だが……。

「ひどい……アリシア……なんて事言うの……ッ」

「え？… え？… いや、しかし……」

震えている姉似の少女の声。それに対し、エルフ達は困惑するしかないようだった。彼女らからすれば、急に涙声が聞こえて来たのだから当然だろう。特にアリシア似のエルフの動揺が大きい。セリフを聞く限りでは自分の発言が原因であると読み取れるので無理もないだろう。

若干栗毛のエルフに同情心さえ芽生えて来た。

そんな折、マシロは突然、金髪少女の手により顔を抱かれる形で耳を塞がれる。何事かと身構えた瞬間には、慈愛に満ちた励ましが耳元で囁かれた。

「聞かなくて良いからね。大丈夫……気にする必要ないからね」

それは、まるで心ない暴言から幼子を守っているかのようだった。本来なら、まるで母か姉のように振る舞うこの少女に対し、羞恥心から悪態の一つでも吐く筈なのだが、今回ばかりはなんの反応も示せない。意味不明過ぎて、脳がショートしていたからだ。

そんな中、テイオネの面影を持つ少女が恐る恐るという体で、当然の疑問をぶつけた。

「ね、ねえ、アイズ？ その子が他人じゃないってどういう事？」

その問いに対し、金の少女はあっけらかんと答える。

「だって、この子、シロだもん」

『シロだもん』

その回答に、半ば無意識で周囲のやり取りを聞いていたマシロは、完璧に正気を取り戻した。そして、脳内に様々な疑問と憶測が飛び交う。

『シロ』。

自分の事をそう呼ぶのは、自身の知る限りでは『姉』のみだ。そして、この金の少女は、姉とよく似た容姿をしている。というより、そのまま『数年前の姉の姿』と形容して良いだろう。それは、姿だけではない。声も、仕草も、喋り方も……少なくともマシロには『在りし日の姉』と重なる。

まさか、こいつは本当に、昔の姉なのではないか。

等という、馬鹿げた想像が脳内浮かび上がる。しかし、有り得ないとは思いつつも、これまで感じた既視感が、完全否定を拒むのだ。

アリシア似のエルフに、ヒリユテ姉妹の面影を持つアマゾネス。そして、アイズ・ヴァレンシュタインに酷似した少女。

ここまで都合よく、瓜二つの人間が存在し、あまつ一か所に集まるものなのか。大体、コイツ等は互いのことを「アリシア」「テイオネ」「テイオナ」「アイズ」と、呼び合っている。

よくよく後方に待機している奴らを見てみると、彼女らにも「ロキ・ファミリア」の団員の面影を感じる事が出来た。

流石にここまでの類似点があるなら、彼女らを記憶の中に人物と同一人物と考える方が自然なのではないのか……。

そんな風に思い始めたタイミングで、目が覚めるような絶叫が浴室に響いた。それは、テイオナ似のアマゾネスの物だった。

「え、えええ!?! いや、違うでしょ! 弟くん、そんな大きくないじゃん!」

「そうよ! まあ、こいつも相当チンチクリンだけど、あの子はそれ以下よ!?! 大体、顔立ちは確かに似てるけど、顔付きがまるで違うじゃない!」

「シロだよ。私がこの子を間違えるわけない」

「いや、でも……」

「私、間違えないよ。お姉ちゃんだから」

「……」

全く論理的な回答ではないのに、何故こうも言い負かしてしまうのだろう。

否、別に言い負かしている訳ではないか。ただ単に、有無を言わせぬ圧力で、問答無用に黙らせているだけの事。

誰しもが少女の迫力に負け、更なる追及の手をこまねいていると……。

不意に、ドタドタと此方へと迫って来る足音が、脱衣所の方から聞こえて来た。足音の主はかなり慌てている様で、浴室へと続く引き戸の曇りガラスに人影が写ったかと思うと、些かの間も空けずに開け放たれる。

瞬間的に入り込んだ冷たい外気が肌を突き刺す。冷気と共に飛びこんで来たのは、マシロも良く知る王族のエルフだった。彼女に關しては『似ている』とか『面影がある』とか、そんな次元ではない。

仮に記憶の中の彼女と、今、目の前にいる彼女を小一時間見比べた所で、マシロには違いなど見つけられなかっただろう。

「リ、リヴェリア様……!!」

「一体なんの騒ぎだ?! 凄まじい轟音と魔力を感じたぞ!」

「そ、それは……」

アリシア似の少女を筆頭に、目に見えて顔を青くするエルフ達。そんな彼女らの様子と、浴室の惨状……そして、マシロの姿を見て、聡明なエルフの王は何かを察したらしい。

「……どうやら、面倒な事態になっているようだな」

一つ溜息を吐いて、団長室へ来るよう、この場の者達全員に指示を出したのだった。

番外編 第三話

「話はまとまったようだな。では、マシロ。アイズには……不要としても、アリシア達には謝っておけ」

リヴェリアがそんな事を言ってきたのは、マシロがフィンの握手に応じた瞬間だった。「ロキ・ファミリア」の副団長を務めるハイエルフの発言に、場の視線がタオルを巻いた女性陣達に集まる。

この姿から察せられる通り、彼女らは全員風呂上がりだ。

そして、未来からきたマシロに、入浴中の姿を見られた被害者達でもある。

故に、彼女らに対する謝罪をリヴェリアが要求する事に、何も可笑しな所はないのだが……。

「……………」

当のマシロは、ブスツと不満げな顔をこさえた。

確かに、女性の裸体を見てしまうのは『悪』だ。女湯に紛れ込む事も『悪』だろう。下心が有ろうが無かろうが、基本的にその類のやらかしは、男サイドの一方的な過失と断じてしまってもいい。

実際、あの場ではマシロ自身も自分が悪いと思っていたし、ボコボコにされても仕方がないと諦念していた。

が……、こうして女湯を離れ、第三者と共に客観的に状況を俯瞰してみると、言うほど俺が悪いのか？ と思ってしまうのだ。

勿論、今回の絶対的な『被害者』は彼女達で間違いない。

しかし同時に、マシロもまた、勝手に過去に飛ばされただけの『被害者』なのである。出現した場所が、たまたま女湯だったというだけの話。フィンも言っていたが、完全に不可抗力である。寧ろ回避可能だと言うのなら、その方法を教えて貰いたいぐらいだ。

そんな訳の分からない状況下で、殺気立ったアマゾネスに襲われ、更に殺気立った魔導士どもの超極大魔法に晒された。『風』を纏ったうえで死を直感する程の膨大なエネルギーに……だ。

確かに、覗きは重罪。それは事実だ。

だが、流石に死罪ではないだろう。

アレは明らかに過剰な攻撃だった。

それらを踏まえると、此方の情状酌量の余地が示されている現状、一方的に謝罪を促されるのは正直納得がいかない。寧ろ、不公平に感じる。

「不可抗力だって、お前もフィンも認めただろうが……」

故に、リヴェリア自身の発言を引き合いに出して訴えるが、舌戦だろうがなんだろうが、マシロが彼女に敵う道理などなかった。

「ああ。だが、頭では分かっているけど割り切れないこともあるだろう？ 幾らお前に落ち度が無くとも、彼女らの胸にはシコリが残る。このまま、お前がなんの謝意も示さなければ、永遠にな」

「それは……」

「マシロ……もしお前の中に、一欠片でもそれを忍びなく思う気持ちがあるのなら、謝っておけ。今、ここで」

「……………」

——くそ。

その諭し方はズルイだろうと、マシロは心の中で毒づいた。

場の視線が、今度は自分に向いている。敵対勢力が向けるような『刺すような視線』ではない。だが、友好的でもない。大体が困惑し、此方を見定めようとする様な、そんな眼差しだ。

誰も彼も、未来からきたマシロ・ヴァレンシュタインなる存在に動揺している。団長や主神が認めたのだから、表向きは受け入れざるを得ないが、内心では『未来人』等と宣う頓狂な存在を図りかねているのだろう。

当然すぎる反応だ。

そして、健気すぎる反応でもある。

敬愛する団長や、信頼を寄せる主神。その双方が認めてしまった以上、自分達もこの子供をマシロ・ヴァレンシュタインだと認識しなくてはならない。彼らの言う事ならきつと真実なのだから、その一挙一動にマシロとの類似性を見出すべきなのだ。

と、彼らの心持ちは大方こんな所だろう。

気持ちは分からなくもないが、正直、居心地は悪かった。

これ程の大衆が注目する中立ち上がるのは中々胆力を要する。

頭を下げるのはもつとだ。

が、先延ばしにする意義も感じない。意を決して、マシロは座つていたソファから立ち上がった。

その際、隣で密着していた「劍姫^姉」が連動するような動きを見せたが、即座に手で制す。この頃の姉はまだ弟に甘い。引くほどに。

そんなアイズが背後で圧力をかけてしまえば、それは最早『強制和解イベント』だ。それではなんの意味もない。

故に、マシロは一人で被害者連合の前まで歩み寄る。

改めて彼女らと相對し、そして――。

「その……悪かった。この通りだ」
ぶつきらぼうに頭を下げた。

瞬間、周囲から喝采にも似た息遣いが聞こえて来る。声色を聞くに、騒ぎを聞きつけて集まってきた男共のものだろう。

前方……つまり、アリシア達からは、特になんの反応も見られない。

しかし、静寂の中頭を下げ続けていると、不意に観念した様な吐息が聞こえて来た。

「顔を上げて下さい。マシロ」

アリシアの声だ。

とても優しい声色である。

まるで、鬱蒼と生い茂る木々の葉の隙間から、柔らかかに射し込む温かい木漏れ日のような……酷く清廉な囁き声。

とても怒っている様には聞こえないが、相手は満面の笑みで敵対者に恐怖を与えられる種族である。決して油断はできない。

恐る恐る頭を起すと、そこには半ば予想通り、美しいエルフの微笑みがあった。一見すると、それは安直に聖母マリアを彷彿とさせるのだが……。

「ちよ、ちよつと、どうして身構えるのですか？ せっかく貴方を怖がらせない様に、努めて柔和な笑みを心掛けているというのに」

「いや、正直お前エルフ共のそういう顔は、大噴火前の予兆にしか見えな
いっつーか……」

「怒りますよ?」

「……すまん」

所謂、暗黒微笑というモノに対し、マシロは呆気なく降参に意を示した。こういう笑顔を浮かべる人間に突っかかっても旨味はない。圧倒的实力差で叩き潰されるか、不要な徒労感を覚えるかの二択である。今回の場合は確実に前者だ。

そんな事を思っていると、マシロの眼前で、アリシアが表情を引き締めた。そして、此方の眼を見つめながら真摯な声で続ける。

「先程の非礼をお詫びします。私達は危うく、仲間の命を消し炭にする所だった。本当にごめんなさい」

それは、実に見事な謝罪だった。

マシロが行った物とは天と地。最早、比べる事すら烏滸がましい程の『差』を感じる……。

『エルフの作法を取り込んでいるから』とか『美人がきつちりと腰を折っているから』とか、そんな要素では説明が付かないぐらい、彼女の姿は絵になっていた。ただ、形式に沿って頭を下げたのとは訳が違う。申し訳ないという感情が、そのまま形を成して現れたような、そんな錯覚すら感じさせてくる。

「ごめんね、マシロくん」

「やり過ぎた〜」

「気が動転しちゃって……」

「というか、ぶっちゃけマシロだったら怒る必要なかったような……」

「それよね〜」

「いっつもアイズちゃんと一緒に女湯に来てるしね」

「ぶっちゃけ未来マシロ、見た目まだまだお子ちゃまだし……」

「いや、流石に怒りましょうよ、そこは!!」

そして、他の者達も次々と謝罪の言葉を口にし始めた。

正直、半数ぐらいは謝罪ではなく、ただ単に感想を述べているだけな気もしたが、それでヘイトが消し飛ぶなら文句は言うまい。寧ろ、

あのような程度の低い謝罪で怒りを鎮めてくれた彼女らの人間性に感謝するべきだろう。

そう、自分に言い聞かせている時だ。

マシロは己の背後に、途轍もなく大きな気配を感じ取った。その余りの巨大さ故、相手の正体と正確な距離関係を瞬時に導き出す事ができない。

「——ちゃんと謝れてえらいね。良い子だね」

しかし、お構いなしに猫なで声が耳じ朵だを撫でた。

確認するまでもない。【剣姫アイズ】だ。この時代の。

大きな気配の正体はアイズ。

ならば、急接近しているのも——。

振り返った瞬間には既に、彼女の顔面が鼻先まで迫っていた。比喩抜きにイグアス並の速度と言って良い。

そして、艶あでやかな唇が滑らかに動き、眼前でこんなセリフを吐くのである。軽くホラーである。

「なでなで……してあげる——」

「……ッ」

瞬間、途轍もない突風が、マシロの隣を横切った。

抱擁という名の突進を繰り出したアイズが通過したのは、間違いなく、つい数秒前までマシロが立っていた床である。

避ける事ができたのだ。

瞬間的に、反射神経が限界を超えた。

だが、単なる偶然だ。二度目はない。奇跡は連続しないからこそ、奇跡。

こちらを見据える姉の金目が、マシロには爛々と輝く猛獣まなこの眼に思えた。

しかし、幸いな事に、アイズの来襲を止める者が現れる。

「止せ、アイズ。はしたないぞ」

「ひゃっ!!」

リヴェリアだ。

彼女の手刀が【剣姫】の頭部に落ちる。

そして、それを尻目に、【勇者】^{フレイバー}が苦笑交じりで語り掛けて来た。「すまないね。精悍に成長した君の姿を見て、どうやらタガが外れてしまったらしい。できれば引かないであげてくれるかな?」

「そいつは……無理な相談だ」

「アハハハ。まあ、そう言わずに。さて、マシロ……少し真面目な話をしたいかい?」

「……ああ」

「君は未来から来た。本来はこの時代にはいない人間だ。そんな君の存在が外部に漏れると、流石に面倒なことになる」

真剣な面持ちで告げられる団長の意見。その正当性に、疑問を差し込む余地はなかった。

フィンの言う通り、自分は本来この場にはならない人間。完全なる異物。些細な行動の一つ一つが、未来に多大な影響を与えてしまう可能性は、残念ながら否定できない。

「安心しろ。こんな状況だ。暢気に出歩く気なんか、ハナからねえよ」
「それを聞いて安心したよ。まあ、とはいえ、一切の外出を禁じようという訳じゃない。時と場合によっては許可しよう」

「そりゃ、どうも」

そんな時が訪れるかどうかは甚だ疑問だが、せつかくの厚意だ。素直に受け取っておくことにする。すると次の瞬間、左腕全体が妙な温かさに包まれた。

「ねえ、シ……お兄ちゃん。ジャガ丸くん買いに行こう?」

同時に、耳元で頓狂な提案が囁かれる。

どうやら、弟の腕^{マシロ}を木の幹か何かと勘違いしているらしい姉^{アイズ}が、リヴェリアの手から逃れて帰還を果たした様だ。

L v. 6がL v. 4に振り切られるなよ……と、マシロは【九魔姫】^{ナイン・ヘル}に非難の視線を向けるが、彼女から返ってきたのは、深いため息と『お手上げ』のジェスチャーのみだった。

「フィンの話聞いてなかったのかテメエ。無暗に出歩くなって言われたばかりだろ」

「何味がいい? 私のおすすすめは、小豆クリーム味のクリームマシマ

シ」

「聞けよ。つーか、もう屋台閉まってんだろ」

「うーん。予想以上に、花畑モードになってしまっているみたいだね……」

「そんなレベルじゃねえだろ。コイツ、ホントにあの【剣姫】か？」
「残念ながら」

さも助け舟を出すふうに口を挟んで来たにも関わらず、一向にアイズに注意を促さないフィン。少々無責任にも思えるその態度に若干苛立ちを覚えつつ、マシロは長に問いかける。

「それより、俺はこれから何処で寝ればいい？ 空き部屋ぐらいはあると思うが……」

「え？ わざわざ空き部屋に移るの？ 元々の部屋使えば良いじゃん」

驚きながらそんな指摘をしてきたのは、テイオナ似のアマゾネス……ではなく、テイオナ・ヒリュテ本人だった。ある意味、実にアマゾネスらしい思考ではあるが、同時に凄まじい頭痛も与えてくる。

「馬鹿野郎。それだとこの金髪コアラと同室になるじゃねえか」

「いいじゃん、別に」

「いいわけあるか。当時ならともかく、今の俺らは殆ど同じ年だぞ」

本来なら、アイズとマシロは4歳差の姉弟だ。

この時代の姉が11歳なので、弟は必然的に7歳という計算になる。人によっては十分アウト認定も有り得るだろうが、基本的には同室OKという判定が下される筈だ。

だが、今の二人は1歳差。

11歳と12歳の姉弟である。

赤の他人同士では当然相部屋など有り得ないし、仮に『きょうだい同士』だったとしても、今度は本人達が嫌がる事だろう。

だから、部屋を分けるという選択に、可笑しな所など一つもないのだ。寧ろ、そこに違和感を見出す方が、一般的にはズレているというもの。

けれど、どうやらこのアマゾネスの中に『常識』という二文字は無

いようだった。

ニヤニヤと悪い顔で、見当違いな解釈を垂れ流す。

「気にし過ぎだつて〜。あ、もしかして照れてる?」

「は?」

「まあ、しようがないよね。アイズ、かわいいもんね。キレイだし。歳が近くなったから、ドキドキしちやつてるんでしょ?」

ピキリ。

自分の血管が切れる音を、マシロは初めて耳にした。

どうやら、頭お花畑という言葉は、アイズではなくコイツの為にある物らしい。

いったいどこの世界に実の姉に照れる弟がいる。マシロは自身の名誉の為に猛反論を始めた。

「頭沸いてんのか馬鹿ゾネスてめえ……俺は16のコイツを知ってるんだぞ?! 今更ガキのコイツに照れるもクソもあるか!」

「へえ、じゃあ16歳のアイズには照れてるんだあ?」

「なんでそうなる?! どんだけ頭のネジ弾け飛んでやがんだテメエは?!」

「ネジなんか飛んでませんー! てか、弟くん口ワルすぎない?」

ベート2号でも目指してる?」

「目指してねえ!」

「だったらワルぶるのヤメなよお。ほら、いつもみたいに『ティオナ姉ちゃん』って言うてみる? 『ティオナちゃん』でも良いケド」

「ふざけるな……何が『お姉ちゃん』だ! 今の俺はお前らと年代だぞ!」

「身長はまだアタシ達のが大きいケドね」

「~~~~~ツツツ!!」

マシロは目をひん剥きながら、声にならない声を口内で爆発させた。

それは、今、最も聞きたくなかった言葉だ。

今の自分達は同年代。同年代の『男』と『女』なのだ。その状況ですら、身長で負けている。こんな残酷極まる事実を口にされて耐えら

れる程、マシロの精神は成熟していない。

だからだ。

だから、流石に女性に対して……いや、ティオナに対しては不味かろうと自重していたセリフを、マシロは反射的に解禁してしまう。

「う、うるせエんだよ！ テメエだつてガキみてエな体型の癖に……ツ。言つとくが、お前のその幼児体型、5年後も大して変わつてねえからな！」

「は、はあああああ!! ちょ、アンタなんてこと教えてくれてんの!! 聞きたくなかつたそんな事！ てか、ホントに？ ティオネと間違えてるとかじゃなくてっ!!」

「成長格差つて残酷だよなあ、双子の姉妹なのに！」

「うがああああああああ!!!!!!」

必然……と言うべきか、盛大に発狂したティオナが、ボロボロと涙を撒き散らしながら襲い掛かってきた。迎え撃とうとするマシロだが、丁度その時、両者の間に割って入る人影がひとつ。

金の長髪が、目の前で揺らめいた。

鼻孔を擽る石鹼の匂いと共に、アマゾネスの拳を受け止める音も響く。

「あ、アイズ……」

介入して来たのは幼き【剣姫】だった。

彼女の背中に隠れてティオナの顔は判然としないが、耳に届いた声からは戸惑いと気まずさ、そして恐れ of 感情が見て取れる。恐れ of 対象は言うまでもなくアイズだろう。

位置関係的に当人の表情を確認することは叶わないが、確かに物々しい雰囲気を感じる。この時代の彼女の前で、自分に拳を向けたのだ。どんな経緯があつたにせよ、逆鱗に触れてしまった可能性は否定できない。

滂沱の汗を流すティオナに対し、やがて【剣姫】は不機嫌そうに口を開いた。

「暴力はダメ」

「え？ あ、うん……」

思いの外、常識的な主張にアマゾネスの妹は、『拍子抜け』という反応を見せる。だが次の瞬間、静かに怒気を爆発させたアイズに容易く分からせられる結果となった。

「次やったら許さないから」

「は、はい！ ゴメンなさい！」

「うくん。結構ジャレ合いに近い喧嘩だったと思うけど、それでも『暴力』判定か……。キビシイね」

「ジャレてねえよ」

二人のやり取りにそんな感想を零すフィン。

その台詞の一部を否定したマシロに対して、アイズがぐるりと振り返った。互いの息遣いが聞こえる距離まで顔を近付け、一言。

「シロも、女の子にあんなこと言っちゃダメだよ？」

「お、おう……」

ギョツとしながら頷くと、隣でクスリとフィンが笑う。

『お兄ちゃん』じゃないのかい？ アイズ」

「……！ あんなこと言っちゃダメだよ、お兄ちゃん」

「……言い直さんでいい」

年齢が逆転しているからか、妙に『兄呼び』に固執する姉に対し、マシロはそっぽを向きながらそう告げた。すると、ここでパンパンと、一際大きな拍手の音が鳴る。

発生源はフィン。

場の空気を一心させた彼は、どこか覚悟を決めたというような表情で、先のマシロの要求に応じた。

「さてと……じゃあ、マシロ。部屋に案内するからついて来てくれ。リヴェリアとガレスは、アイズを抑えていてくれるかな？」

そして、最大派閥の最高幹部二人に、狂犬を封じ込むよう指示を出す。無論、レベル差を考えればL v. 6なんて二人も要らない。万全を期すにしても、より脅力に優れたガレスをつけるだけで十分な筈だ。

だというのに、フィンがこんな馬鹿げた采配をした理由はただ一つ。

弟の事となると、アイズは、常識外の力を発揮するからだ。

実際、先程も強引に【九魔姫】の拘束から逃れている。

そして、今回は内容が内容だけに、死に物狂いの抵抗をしてくるだろう。それこそ、剣すら抜きかねない。彼女からマシロを引き剥がすというのは、そういう事だ。

しかし、その想定に反して、アイズは恐ろしいぐらいに静かだった。

無論、納得はしていないらしく、ガレスの太腕に挟まれながら、恨めしそうに【勇者】を睨んでいる。

が、それ以上の事はしてこない。『どうして』と叫ぶ事も、ガレス達から逃れようと大暴れする事も無く、只々、その小さな歯を食いしばっていた。

結局——フィンがマシロを連れて団長室を出て行った後も、アイズが痙攣を起す事はなかった。

：

「ふうふうふう………」

【ロキ・ファミリア】の団長が唐突に深いため息を吐き出したのは、廊下に出て、暫く歩いた後のことだった。胸を撫で降ろす彼の表情には普段の飄々とした色はなく、本気の本気で無事ここまで距離を稼げた事に対する安堵が伺える。

正直、違和感しかない反応だ。

Lv. 6の……それも最大派閥の頭目が、高だかLv. 4の一団員に見せるような態度では決していない。

「大袈裟だな。仮に奴が暴れたとしても、お前なら簡単に無力化できるだろ」

「無力化はできるさ。でも、簡単ではないよ。それは、アイズを舐めすぎだ。正確に言うなら、君が関わっている時のアイズを……だけどね」

「……………情けねえ」

「手厳しいね。でも、理解はできるだろう？ あの子の『君狂いつぶり』には他でもない、君自身が一番手を焼いている筈だ」

なんの疑いもなく、フィンはその様に断言する。

まるで、5年後も変わらず、マシロが姉に愛されているかのような

発言だ。その淀みない口調から、不仲になっっている可能性など微塵も考えていない事が伝わって来る。

あらゆる可能性を考慮し、何千何万の局面に備える小人族の英雄、フィン・デイルナらしからぬ脳死思考と言えよう。

実際は、もう何年も口を利いていないと言うのに……。

しかし、同時に無理もない見当違いだとも思う。

それ程までに、この時代の彼女は弟に構いつばなしだった。マシロ当人でさえ、嫌われるとは夢にも思っていなかったのだから、他人が察するなんて無理だろう。そもそも、嫌われた今となっても、この頃は純粹に好かれていたという自信がある。

ただ、その度合い。愛情の深さに関しては、彼や周囲が思っているほど凄まじい訳ではなかったのだ。

何の事もない。

『最愛』の両親が死んでしまい、愛をぶつけられる身内が自分一人だったから、必然的にそう見えていたというだけの事。

結局、彼女の中では、どこまで行っても両親の一強なのだ。

だから、それを貶されれば容易に冷める。例えそれが『二番手』のマシロであったとしても。

当然だ。『両親』と比べれば、『自分^弟』など塵にも等しい存在である事に、なんの疑いがある。所詮『弟』など、『家族』の中に途中から割って入った『異物』に過ぎないのだから。

そこまで思考が及ぶと、不意にマシロの耳にフィンの呼びかけが届いた。

「さて、着いたよ。今日から、ここを使ってくれ」

見ると、そこは5年後の自分に与えられている一室だった。つまり、今のマシロにとっては馴染みのある自室だ。内部を確認してみると、当然だが内装の違いはあるものの、間取りに変化は見られない。

「二人部屋だから少し狭くはなるけど、問題ないかい？」

「ああ」

「おや？ 何だか嬉しそうだね？ もしかして、ここが未来の君の部屋だったりするのかい？」

ラになっていたのだ。

その後、アリシア等に謝る際には離れて貰ったが、終了後はまた定位置に戻ろうとして来ている。リヴェリアに捕らえられた後も、一度は強引に振り払ってきた程だ。

確かに、部屋を別ける云々の下りでは静かだったが、それを差し引いても既に十分すぎる程のスキンシップが実行されていたと言えるだろう。まあ、マシロ自身、もう久しく姉と絡んでいないので、この時代の標準値が分からないというのもあるのだが……。

「正直、君が別室を要求した時、もつと発狂すると思っていたんだ。それこそ、むりやり君を部屋に閉じ込めて半ば軟禁状態にしようとするんじゃないかとさえ、ね」

「恐ろしいこと言うんじゃないよ」

「けれど、実際は新しい部屋に忍び込む為の尾行すらしてこない……。これは僕の勘だけど、彼女なりに過干渉を嫌がられていると察して、遠慮しているんじゃないかな」

「遠慮してる奴の姿か？ アレが……」

マシロは、長時間抱え込まれた影響で、未だに姉の温もりを幻視できる左腕に右手を伸ばす。

「確かに、一般的には遠慮の『え』の字も感じられない行為だけど、相手はアイズだよ？ 成長した君の姿を見てあの程度に留めるなんて、誰も予想できなかったさ」

「……………」

「とにかく、今のアイズは諸々溜め込んでいる状態だ。爆発されたら骨が折れる。宥める僕らも、渦中に居るだろう君も・ね」

「俺にどうしろと？」

「……で、フィンが不敵に笑た。」

「アイズが満足する迄甘えてやってくれ」

「……………!!」

「……とは流石に言わないよ。君も年頃の男子だ。そんな事を強要するのは、色々と問題がある。でも、多少の我儘はきいてやって欲しい。それこそ、『一緒にジャガ丸くんを買いに行く』ぐらいはね」

「外出は避けて欲しいんじゃないのか？」

「時と場合によつては許可するとも言った筈だよ。それに、秘策もある」

「秘策だと？」

「ま、それは明日になってからのお楽しみさ。それじゃあ、マシロ。よい夢を」

キザな台詞を残して、フィンは颯爽と去って行った。

扉を閉め、マシロは改めて辺りを見渡す。殺風景な部屋だ。空き部屋だったのだから当然だが、必要最低限の家具や寝具しか存在していない。まるで生活感のないその部屋は、現在のマシロの個室と大差なかった。

『お前は本当に何も無いな』

そう、部屋自体に馬鹿にされている様な気がして、マシロはガシガシと頭を掻くと、シングルベッドの中に飛び込んだ。仰向けになれば、目に映るのは白い天井だ。コレばかりは誰の部屋も同じ。

心の安寧を取り戻したマシロは、ホッと息を吐いて目を瞑る。

そして、思考の海に落ちた。

ここは、『黄昏の館』だ。それは間違いない。

ここに居るのは、『ロキ・ファミリア』のメンバーだ。それも間違いない。

ただ、時代が違う。

ここは自分がいるべき場所ではない。

一刻も早く帰る方法を模索しなくてはならない。

その為には、こんなイレギュラーに見舞われた原因を探り出し、仮に人為的なモノであるなら、この手で『犯人』を始末する必要がある。

逆に、突発的な自然現象である場合は、手の打ちようがない。故に、敢えてその可能性は考えない。

人為的なモノと仮定した場合、下手人の候補はかなりの人数に絞られる。

仮にも天下の『ロキ・ファミリア』の団員に仕掛けて来たのだ。『弱

小ファミリア』の仕業ではない。十中八九『大手ファミリア』……最低でも『中堅ファミリア』以上の仕業だろう。

その上で、『対象を過去に戻す』等というバグレベルの事象を引き起こしている。馬鹿げた効力の『魔法』か『スキル』か……それとも『マジックアイテム』か。

どれだったとしても相当厄介な敵であることに変わりはない。『魔法』や『スキル』なら、『実力』が。『マジックアイテム』なら『技術力』や『資金力』が、それぞれズバ抜けている証拠だろう。

では、そんな相手对自己に対し『過去戻し』を行った理由は何か。正直しつくりくる動機は思いつかないが、無理矢理にこじつけるのなら、『ロキ・ファミリア』の戦力削減と推測できるかも知れない。

この時代のフィンは言っていた。

『君は、この時代のマシロと入れ替わる形で現れた』と。

実際、本来いる筈の7歳のマシロ・ヴァレンシユタインは、現在進行形で影も形もない。自分が今、ここにいる代わりに、彼も5年後に飛ばされたと見るべきだろう。

つまり『L v. 3の冒険者』と、『^{ファルナ}神の恩恵』を刻まれる前の幼子のトレードに成功しているという訳だ。

流石にコレは、『ロキ・ファミリア』の戦力を大幅に削いだと言えるだろう。

しかも、入れ替えた対象を首尾よく殺す事ができたなら、それは即ち、成長後の対象も始末できたという事だ。冒険者ですらない子供を殺すだけで、第二級冒険者をひとり道連れに出来る。コストパフォーマンスで言えばこの上ない戦果に違いない。

そう考えれば、自分が狙われた理由にも納得が行く。

時間逆行等という大仰な現象まで引き起こしたのだ。そんな状態で、わざわざ低レベルの冒険者なんて狙う筈がない。

自ずと、標的はL v. 3以上に限られる。

その上で、5年前は只の無力な一般人。

こんな条件に当てはまる『ロキ・ファミリア』の構成員など、自分ぐらいのもだろう。L v. 3以上は吐いて捨てる程いるとして、

『5年前に一般人』はそうそう居るものではない。

そこまで考えて、マシロは遅巻きながら身震いした。

当然である。今、自分の心臓は、無力な5年前の自分に握られていたのだ。過去の自分が死ねば、自分も死ぬ。

もし仮に、未来のフィン達の言いつけを守らず、勝手に本拠ホーラムを抜け出してもしていたら……。その先で、『敵』に捕らえられる様な事があつたら……。

今、この瞬間に、マシロ・ヴァレンシユタインの命脈が絶たれても不思議ではない。

そもそも、自分はここに来る前、何処で何をしていただろうか。

12歳の誕生日を迎え、たまには街に出て羽を伸ばそうと考えていたのは覚えている。せつかくだから、普段よりも豪華な買い物と食事をしようと思にもなくテンションを上げていた。

だから、その資金集めの為に、朝早くからダンジョンに潜ったのだ。無用なトラブルは避けたかった為、上層域までに留めてはいたが、それなりの時間粘った為、懐は十分温まった。

地面に散らばった大量の魔石を、ホクホク顔で回収しきった所までは覚えて……。。

その後は、いったいどうなったのだろう。

当然、魔石を換金する為に、ギルドに向かった筈だ。そして、予定通りなら早起きした分の睡眠時間に帳尻を合わせる為に、本拠でもうひと眠りしていた筈である。

けれど、記憶にない為、確かめることができない。

予定通りに行っていたら良い。けれど、もし、ダンジョンの中で『犯人』に接触されていたとしたら……。もし、そこで過去に飛ばされたのなら……。

代わりに未来に現れた幼い自分は、既に敵の手中にある事に……。

「……………やめだ。くだらねえ」

際限なく『もしも』の泥沼に嵌って行ったマシロは、ここで遂に思考を放棄した。

悪い想像は幾らでも出来る。キリがない。現状、自分には覆す術などないのに、そんな事ばかり考えていたら精神的に参るだけだ。

そもそも、『今こうして生きている事こそ』が、未だ過去の自分が無事である証明ではないか。少なくとも、ダンジョンに一人取り残されている訳じゃない。そして、本拠に居るのであれば、最低限の安全は保障されている。

今は、仲間達に保護されているものと考えよう。

どうせ過去にいる自分に、未来にいる自分をどうにかする事など出来ないのだから。こんな時ぐらい樂觀主義者であるべきだ。幾ら『最悪の想定』に胃を痛めても、それは想定域を出ないのだから。

その様に自分に言い聞かせ、マシロはどうか微睡に落ちていった。

番外編 第四話

「あつ。おはよう、シロ……お兄ちゃん」

「……………さっそく嗅ぎつけられてんじゃねえか」

5年前の世界、2日目の朝。

着替えを済ませ、食堂に向かおうと部屋の扉を開けたマシロは、当然のように、実姉アイズ・ヴァレンシユタインにより出迎えられた。窓から射し込む陽光に照らされた姉の笑みが眩しく煌めいている。張り艶のあるその白い肌からも、瑞々しく流れる金の長髪からも、既に寝起きの残滓は確認できない。

未だ朝の8時前だと言うのに、いったい何時からそこに居たのだろう……。無論、偶然居合わせた可能性も否定できないが、確率的には相当低いと考えて良い。ここは穿った見方などせず、部屋を割り出し待機していたと見るべきだが、どのように特定したのかは、完全に不明だった。

「よく眠れた？」

しかし、そんな弟の疑問などお構いなしに、姉は一步身体を近付け、小首を傾げながら尋ねて来る。

「……まあな」

対して、マシロは、ため息を零して偽りの返答を示した。

本当は碌に眠れてなどいない。自身の置かれた状況を憂い、浅眠状態のまま朝を迎えている状態だ。けれど今は、この『黄昏の館』に厚意で滞在を許して貰っている立場。

幾ら実姉^{アイズ}相手だろうと、部屋の文句とも捉えられる言動は避けるべきだろう。実際にベッドの所為ならともかく、原因はマシロ自身のメンタル面にあるのだから。

「シ……お兄ちゃんは、ひとりで寝れるようになったんだね」

——そりゃ5年も経てばな……。

どこか感慨深そうに微笑むアイズに内心そう独り言ちながら、マシロは逃げるように顔を背けた。今はもう、すっかり向けられる事のない

くなつた、姉からの慈しむような眼差し。それが、真つ直ぐ自分を貫いている事に違和感とこそばゆさを覚えて、誤魔化す様に吐き捨てる。

「当たり前だ。この歳になつてまで、姉と一緒に寝てる弟なんている訳ねえだろ」

「……わたしは一緒でもいいのに」

残念そうな声色で、アイズはそんな事を言う。

本心だろう。

今は、まだ。

けれど、それももう終わる。

正確には1年と少し……。

それで、ヴァレンシユタイン姉弟の良好な関係は呆気なく瓦解するのだ。他でもない、マシロ・ヴァレンシユタインによる配慮なき失言を契機にして。

そんな事を考えていると、不意に右手に暖かな感触が灯った。雪の様に白い両手が、スツポリとマシロの手を包み込んでいる。顔を上げると、同時に姉の唇が動いた。

「朝ごはん、食べに行こう？」

「……………」

その誘いを断る理由は何処にもない。

どうせ同じ場所に、同じ目的で向かうのだ。出発地点すら同じな現状、わざわざ別々に向かう道理はないだろう。

だから、マシロは姉の動きに逆らう事なく歩き出した。

しかし、完全に廊下に出たタイミングで、握られた手を振り払う。

「えっ」と目を丸くする姉を尻目に腕組みをし、手を繋ぐ意思が無い事実を暗に伝えた。偏に「子供扱いされている気がするから」という、子供じみた感情からの行動だ。

無論、今のアイズにそんな意識はないのだろうか……。

「ね、ねえ。お手で、つながろう？」

「断る」

「どう、して…………？」

彼女は、困惑した様子で尋ねて来る。きつと、当時の弟と接する感覚が抜けていないのだろう。確かに以前の自分なら、にべもなく差し出された手を握り返していた筈だ。

しかし、今はもう何もかもが違う。現在のマシロにとって、姉と仲良く手を繋ぐなど、天地がひっくり返っても有り得ぬ行いだ。

けれど、それをこの時代のアイズに伝えた所で栓無き事だろう。同一人物ではあるが、無関係の人間でもある。故に、別の理由をでっち上げた。

「意味ないだろ。ここは本拠ホームの中だぞ。それともお前は、住み慣れた居住地内部で俺が迷うとでも思ってたのか？」

「……………」

我ながら妥当な言い訳を捏造できたと思ったマシロだったが、返つて来たのは予想に反して重い沈黙だった。チラリと斜め後ろを見遣ると、そこに姉は……いる。

しっかりと、少し後ろを付いて来ている。けれど、あからさまに俯き加減で、消沈している様子だった。瞳には、薄っすらと涙さえ浮かんで見える。

「あ、いや……………」

その姿……というか涙を見て、マシロはあっさりと狼狽した。

彼女は実の姉とはいえ、今は自分より年下の女の子だ。配慮はしたつもりだったが、少々言い方がキツかったかも知れない。

周囲が年上ばかりの環境でぬくぬくと育ってきたマシロは、年下との正しい接し方が分からなかった。年上になら軽く流して貰える歯に衣着せぬ発言も、年下相手には鋭利なナイフと化してしまうのを真の意味で理解できていない。

けれど、姉はこんなことを言うのだ。

「そっか、そうだよね。ごめんね。お姉ちゃん、我慢する」

健気に笑い、手を引込めてもう一方の手でそれを抑える彼女の姿に、マシロはバツの悪さを感じた。そして、仮にも年下に気を遣わせ気丈に振る舞わせてしまった事に対する罪悪感も…………。

しかし、マシロには前言を撤回して彼女の手を取るなんてキザな真

似は出来なかった。それを実行に移すには、彼の精神はまだ未熟過ぎたからだ。

：

無言のままひた歩き、そして食堂へと到着した。

入室すると、朝だというのに活気がある。ワイワイガヤガヤと、雑談の音が鼓膜に届く。

それなりの人数が揃っているのも原因の一つだろうが、大半の理由が探索系のファミリアだからだろう。職業柄、冒険者という人種は寝起きからアグレッシブに活動できる者が多いのだ。

そんな体力のあり余った連中の視線が、一手にマシロらに集まった。

そして、一瞬の静寂の後、けたたましい歓声が鳴り響く。

「うおおおおお！ 噂のデカマシロが来たぞおおオオ！」

「キヤー！ 小っちゃーい！」

「アイズより小っちゃーい！」

「当然！ 大きなマシロなんて、マシロじゃないもん！」

「腕組んじやって、可愛いなあ！」

「姉弟揃って登場かよ。シスコンは健在かあ!!」

誰も彼もが狂ったようにゾロゾロと此方に近づいて、囲い込んで来る。まるで珍しい動物を見るかのような反応だ。まあ、彼らにとつて今の自分は『未来人』。ある意味これは当然の反応なのだろう。マシロ自身、他の誰かが同じような状況に陥った時、こんなふうには野次馬根性を発動させない自信は正直ない。

「ほら、こっち来て肉食えよ！ いつまで経っても育たねえぞ？」

「待ちたまえ。背を伸ばすなら牛乳がベターだろう？ して、偶然にもここにワタシ自ら配合したカルシウム百億倍の牛乳が——」

「お姉ちゃん達と一緒に朝スイーツと洒落込みましょ！ 牛乳なら生クリームにも入ってるし、カルシウムも摂れるわよ！」

「なーに言ってるんのアンタら！ 小っちゃいから可愛いんでしようが、マシロは！ 無暗にカルシウムなんて与えて長身ノツポになつたらどう責任——」

此方の意向も確認せずに、団員達は口々に様々な料理を勧めてくる。

だが正直、最初の肉の誘い以外どれも願い下げだった……。

朝っぱらから甘味三昧は胃が可笑しくなりそうだし、通常の百億倍のカルシウムなど、なんら毒と変わらないだろう。

最後の奴に関しては論外だ。男というのは、基本的に長身の自分に思いを馳せる生き物。『小さい』も『可愛い』も決して誉め言葉には成りえない。つまりこれは、男の全てを敵に回す発言である。

数多の冒険者に揉みくちやにされながら、どうにか『男の敵』だけでもぶん殴ってやろうと腹積もりを決めていた時、不意に身体が軽くなった。

いや、自由になったというべきだろう。

素肌に空気が触れ、そして直ぐに誰かの身体に押し付けられる。鼻孔が姉の香りに包まれ、マシロはアイズに抱き寄せられている事を自覚した。

「乱暴しないで……。あと、シロと朝ごはんを食べるのは、わたし」
ムツとした姉の声が鼓膜に届く。

その剣呑さに、目に見えて他の冒険者たちは及び腰になった。

「そ、そんなムキになんなくても……ちよっとジャレただけだって」「そうそう。ていうか、アイズちゃんはいつも一緒にいるんだから良いじゃない。姉離れの予行練習だと思って、たまには私達と……」

「わ・た・し・は——」

ここでアイズが、彼らの主張を遮るように言葉を差し込んだ。有無を言わせぬ口調に、全員が黙って続く姉の台詞を待つ。

「この子のお姉ちゃん。一緒に居るのは当然。離れ離れになるなんて

ありえない」

……正直、マシロは隣で聞いていて困惑してしまった。

昔の姉は、ここまで独占欲が強かったのか・と。

“朱に交われれば赤くなる”。

その諺の通り、当時のマシロにとつてはコレが普通の距離感だった。だからこそ……彼女の『行き過ぎ』にいつさい気付くことが出来ず、寧ろこのように増長させてしまったのかも知れない。

お互いが、このまま成長していたらと思うとゾツとする。仮にそうなっていたら『変態姉弟』としてオラリオ中にその名が轟いていた事だろう。嫌われたのは、ある意味でフアインプレーだった可能性すらある。

そう……自身の失言を棚に上げてしまう程、姉の威圧は強烈だった。とても11歳の少女が放つて良いものではない。対峙する歴戦の冒険者たちは、ようやく弁明の言葉を口にし始めた。

「そんな大袈裟な……ちよつとこつち来てご飯食べるだけじゃないか」

「そうだよ。こんなの離れ離れのうちに入らないし、なんならアイズちゃんも一緒に……」

「誰にも渡さない……。この子だけは、絶対に——」

「い、いや、だから——」

明らかに声が届いていない。

まったく話を通じず、それぞれどころか『弟を攫おうとする敵』と認識し始めた様子 of アイズに、【ロキ・ファミリア】のメンバー達は頭を抱えた。恐らく、色んな感情が脳内に渦巻いているのだろう。

朝食を摂りに来ただけの筈なのに、なんでこんな面倒な感じになつてるんだ……。

そう、辟易とし始めた時、ようやくこの場にアイズの暴走を制圧できる者が現れた。美しい指先を携えた白い手の側面が、少女の頭部に落とされる。

「落ち着けアイズ。そして、良く話しを聞け。ここにマシロを奪う『敵』などいる訳がないだろう」

「り、リヴェリア……」

副団長のハイ・エルフの登場に、アイズが正気を取り戻す。場の雰囲気が一気に弛緩し、誰もが安堵のため息を漏らした。同時に――

「ホンマ、アイズさんは、マシロたんLOVEやなあ。ウチ、キュンキュンするわ〜」

「そうだね。正直数年後が心配ではあるけれど……」

「ガハハハ！ 数年などと悠長な事を抜かすな、フィン。〴〵男子三日会わざれば刮目して見よ〴〵。小童の成長は早いぞ？」

ロキ、フィン、ガレスの3名も連れ立って現れる。そして、年の功からか、ガレスはアイズの内心を見透かし言い当てて見せた。

「大方、マシロが自分の手から離れていかないか心配になっておるのだらう？ 最近ちよくちよくお主の誘いを断って、男湯に入っているようじゃからのお」

「……………」

何か言いたげな上目遣いでアイズがガレスを見上げる。だが、ガレスはそれをサラリと流し、次の様に放った。

「そう睨むでない。姉離れの予兆……情緒が正常に発達しておる証拠じゃ。逆に訊くが、10代後半や、20、30になった時も、今の様に引っ付いておるつもりか？」

「……………何か問題ある？」

「問題しかねえだろ、ふざけるな」

姉の余りにも斜め上の返答に、マシロは思わず口を挟んでしまった。その瞬間、密着している身体越しに、動揺の震えが伝わって来る。そして、以降は不規則な揺れが、嗚咽と共に鼓膜を襲った。

慌てて姉を見上げると、予想通り、彼女の金の瞳から、透明な雫がポロポロと流れ出しており――悲痛なまでの涙声がマシロにある問いを尋ねて来た。

「シロ……わたしのこと、嫌いになっちゃったの？」

「……………！ 違うっ！」

――嫌いになったのはお前だろう。

「うそ……だって、昨日からずっと……冷たい……」
「……そんなこと……」

「ない……。とは、正直言い切れなかった。この時代のアイズは未だ自分^弟にベツタリだ。それを分かっているながら、マシロは特に態度を軟化させたりはしていなかった。単純に、以前の自分の振る舞いを踏襲する気が起こらなかったからだ。」

「未来のわたし……、君に嫌われること、しちやった？」

「そうじゃねえ……ッ！ 何処の世界にいつまでも姉とベツタリの弟がいる？ ティオネとティオナは一緒のベッドで寝てんのか？ 幾ら仲が良からうが、プライベートは分けるのが普通なんだよ」

「普通じゃなくて良い！」

「……………」

「嫌いじゃないなら……ずっと側にいてよ……」

クチャクチャな顔で、継りつきながら訴えかけてくるアイズ。

その姿が、発言が、泣き顔が——かつての自分の慟哭と重なった。思い出さないよう、必死になつて意図的に記憶の奥へと追いやつていた幼き日の記憶。それらが、胸の内に飛来する。

あの時、姉弟仲の破綻を決定づけるあの発言をしてしまった後日——。

姉の態度の急変に戸惑い、しつこく継り寄っていた3日間。その丁度3日目に、マシロは今のアイズと似たような台詞を吐いたのだ。

「ああ、泣いてるアイズたんも可愛いなあ。でも、ウチは笑ってる顔のが好きやで〜」

ここで、空気も読まずにロキがズカズカと近寄って来る。

別に無神経な行動ではない。『あえて』道化に徹しているのだ。そういう気遣いが、この主神にはできる。

「もうこんなハナシは終いや。もっと楽しいハナシしよ」

「楽しい……はなし？」

「せやせや、特にアイズたんにとっては超楽しいハナシやと思うでえ」
ニヒヒと、口元に弧を描くロキ。背中に伏せた両腕を見る限り、『何

か』を後ろに隠し持っている様だ。ロキの細い身体に隠せる、アイズが凄く喜ぶ物。その条件で、真っ先に思い浮かぶのは――。

「……ジャガ丸くんの新味でも手に入れたか？」

「ちやうちやう、確かにアイズたんと言えばジャガ丸くんやけど、もつと喜ぶもんや」

それは、些かハードルを上げ過ぎているのではないだろうか。それとも、アイズのジャガ丸ジャンキーっぷりを甘く見ているのか……。

当のアイズも、ジャガ丸くん以上のモノとなると直ぐには思い浮かばないらしく、泣いて膨らんだ顔のまま、キョトンとしている。

そして、次の瞬間「じゃじゃーん」という合の手と共に『ソレ』がお披露目された。

ソレは、かなりサイズの小さな、『女の子用の服』だった。

こういう物に対する知見などマシロには無いが、素人目にも『可愛い』に特化した少女向けの洋服である事が理解出来る。

だが、理解できるのはそこまでだ。

確かに可愛い服ではある。しかし、アイズがジャガ丸くんを押しつけてまで喜ぶかと言われれば、首を傾げざるを得ない。

無論、アイズとて女の子だ。服に対し、欠片の興味も無いわけではないのだろうか……。

等と思っていると、ロキは服を掲げながら、それを胴体に被せて来た。

同時に「うんうん、サイズピッタリや」とか「にしても似合うなあ。

ウチの慧眼っぷりには舌を巻くで〜」等と、勝手に一人で盛り上がっている。

どういう了見か、マシロの身体に服を合わせながら――。

「オイ、間違ってるぞ。アイズは隣りだ」

即座に指摘してやるが、ロキは慌てる様子もなく、イタズラ小僧のような表情を作った。

「いんやあ？ 別に間違えてへんでえ？」

「は？ いや、だってお前それ――」

女物の……と、言いかけた瞬間だ。ロキは、バツと両腕を上には伸ば

し、周囲に吹聴するように宣言を始めた。

「皆、ちゅうもーく！ 見ての通り、マシロは未来から来た人間や！ 普通やったら、未来への影響やなんや考えて、極力外には行かせられへん！」

突如始まった現状確認に、マシロは理解が追い付かない。そんな分切り切った事、わざわざこの場で改める必要もないだろうに。それと、この服との繋がりも見いだせない。

しかし、そんなマシロの疑問を置き去りにして、ロキはどんどん突き進む。

「けど！ 道行く人に、『未来のマシロって認識されなかったら』どうや？」

「……！」

その発言に、場がどよめく。

そして、マシロ自身も主神が何を言いたいのか察しが付く。

だから、酷く脂汗をかいてしまった。

「いや、待てロキ！ まさかテメエ——」

「認識されな影響はない！ そんでもって、認識されん為には『変装』や！ 加えて、見抜かれる可能性を極限まで抑える為には……」

もう既にこの場にいる者全員が、次にロキが口にしようとしている単語を予測できている。それは確信に限りなく近い予測だ。それはロキ自身も分かっている筈。

だというのに、この主神は敢えて、一息には告げずに『溜め』を作った。より、その宣言を印象的にする為の細工だろう。無駄に知恵が回る。忌々しい事この上ない——。

「もう、『女装』するしかないやろうがあああああ!!」

「タイムの弟でもある」

「……それは」

「断言したるわ。只の変装じゃ気付かれる。そういうの見抜く連中は、ホンマ些細な違和感も見逃さんからなあ。ハナっから女の子のフリして、フィルターの外にいた方が安全や」

「だったら俺は外に出ねえぞ！ そんな恰好するぐらいなら一生引き籠ってやるー！」

「なんや、ニート宣言かいな？ でも認めへんで？ んな事したら監禁やなんやって大騒ぎになって、世間サマにぶっ叩かれてまうからなあ」

「何わけ分かんねえことを……」

「ホレ、アイズたん。これで愛しのマシロと遊びに行けるでえ？ 嬉しいやろ？」

「女の子みたいに可愛い恰好をした、可愛いシロとお出かけ……嬉しい、かも」

期待に満ち満ちた視線をアイズから受ける。さつきまで泣いていた少女の面影は、もはや何処にもない。両目の下の赤みも、頬の色づきに掻き消されてしまった様だ。

「シロ、早くコレ着て？ お出かけだよ？」

「テメエ、マジで人の話聞いてねえんだな……。散々行かないって喚き散らしたばかりだろ！！」

「往生際が悪いで。埒もアカンし強制執行や！ 行くで、野郎共ー」
ロキの号令により、四方八方から冒険者達が雪崩れ込んで来た。到達した者達によって、有無を言わず服を脱がされそうになる。人数が膨大過ぎて互いが互いの邪魔をしてしまっている感は否めなかったが、それでも多勢に無勢。このままでは身包みはがされるのも時間の問題だろう。

絵面的には、大人数でマシロ一人を襲っているという相当にアレなものなので、スイッチの入ったアイズが薙ぎ払ってくれる可能性も無くはなかったが、悲しいかな、既に奴もロキの術中。寧ろ、率先して脱がそうとしてくる最大の難敵となっている。

それでも、必死に抵抗した。
マシロは、頑張つて抗つたのだ。

けれど、終わってみれば全くの無意味だった事が分かる。
結果は最初から決まっていたのだ。

風を纏つて吹き飛ばそうという試みも、同じ魔法を使えるアイズが常に最前列で張り付いている為効果が薄く、目敏く気付かれ対応されてしまう。

もつと言うなら、相手にしているのは「ロキ・ファミア」に属する上級冒険者達だ。昨日の風呂場の時の様に、武装解除している訳でもないし、数もずつと多い。仮にアイズに魔法の発動を邪魔をされなかつたとしても、屈強な彼ら相手では、粘り粘られ、いつかは根負けしてしまつた事だろう。

だから、仕方がないのだ。自分がこんな恰好になつてしまうのは、どうする事もできない確定事項。神が定めた変えようのない運命なのだ――。

最後に、ウィックを被せられながら、頭の中でそんな言い訳をマシロは永遠と繰り返していた。

「ウヒャーッ！ メツチャ可愛い！ なあ？ ウチの見立てに狂い無かつたやろ、アイズたん!!」

「うん！ 美の女神様たちより可愛いよ」

うつとりと、恍惚とした表情で抱き締めてくるアイズ。その際、誰かからスツと差し出された手鏡を無感情に覗き込むと、そこには女装をしたマシロの姿が映し出されていた。

本当に、ただ女装をしただけのマシロ・ヴァレンシュタインだ。

それは、女兒物の服を身に纏い、長髪のウィックを被つただけのマシロの姿。決して服装やカツラ、そして元の顔が超常的な相乗効果を

もたらし美少女化している訳ではない。大半の男が陥るであろう、『なり切れていない女装』の域を出ていない印象を受けた。

しかし――。

「ちよつと待つて？ どつからどう見ても女の子じゃん、ヤバ！」

「いやはや、元から男とは思えない背丈でしたが……ここまでサマになるとは。感服の極みです……」

「これで正体見抜けたら人間じゃねえな」

「小っちゃい頃のアイズたん降りーん！ 天使の再来か！ 匂い嗅がせて！」

どいつもこいつも、本当に眼が付いているのかも疑わしい様な反応を見せてくる。恐らくは身内の欲目だ。補正がかかり、格段に美化して見てしまっているのだろう。

この反応を、外部の者の前でされるかもと思うだけで背筋が凍る。唯一の救いは、マシロ自身は自分の状態を正しく認識できている事だ。もしもアイズ達の反応を鵜呑みにしていたら、本当に地獄だった。身内に持ち上げられ、外で勘違いした振る舞いを見せる事ほど、後々ダメージになる失態はない。

「へえ、似合ってるじゃん。さっすが、アイズの弟！」

「そうね。三白眼と生意気な目つきをやめれば、まんまアイズの妹よ」

鏡の中の自分を呆然自失に眺めていると、不意にこれまでとは感じの違う声色が耳に飛び込んだ。食堂の入り口に視線をやると、そこにはたった今入って来た様子のアマゾネスの姉妹の姿があった。どちらかと言えばロキを思わせるイタズラ小僧のような笑みを浮かべながら、愉快そうに此方に近づいて来る。

「ティオナ……ッ、ティオネ……ッ」

サアツと、自身の顔から血の気が引いたのが分かった。

5年前の世界とはいえ、「ロキ・ファミリア」のメンバーは、大半がマシロよりも年上だ。というより年下はアイズくらいであり、何だか

んだ言いつつ身内であるから、こんな恰好を見られる事もまだ我慢できた。

けれど、ヒリュテ姉妹は別である。

現状、彼女らはマシロと同一年。そして、血の繋がりもない。そんな相手に、女装した姿を見られたのだ。この屈辱と羞恥は想像を絶する。

「ほらほら、笑って弟くん。せつかくの可愛い服が台無しだよ〜?」
「声も無理に低くしないで良いのよ? 女の子らしく可愛く喋りなさい」

「テメエら……、絶対あとでぶっ飛ばしてやるからな」

額に青筋を立てながらマシロは恨めし気に呟いた。が、ティオナは気にも留めずにこんな提案をして来る。

「それより、アイズと弟くん、遊びに行くんでしょ? アタシ達も一緒に行きたいなあ」

「ふざけるな。なんでお前らなんかと——」

「アレ〜? イヤなの〜? そつかあ、アイズと2人つきりが良いんだね!」

「は?」

頓狂すぎる発言に真顔になるが、ティオナの間違った推論は止まらない。

「悪ぶってても、やっぱりお姉ちゃんは大好きなんだね〜。ゴメンねえ、気がきかなくて。邪魔されたくないんだもんねえ?」

「……ツ。馬鹿げた妄想垂れ流すな! そもそも俺は、外出するなんて一言も——」

「何? アンタ出かけないのにそんな恰好になったの? もしかして、そういう趣味?」

「テメエ、冗談でも言つて良い事と悪い事が——」

「はいはいはい、そこまで〜」

男として、絶対に認めるわけにはいかないティオナの発言にマシロが真っ赤な顔で反論している最中、ロキが柏手を鳴らしながら介入し

て来た。そして――。

「ホレ、マシロ。これ使い」

朱色髪の女神は、なにやらチャリチャリと音のする小袋を投げて寄越してくる。何処か既視感のある光景だ。片手で受け止めたそれは、小さな見た目に反してズッシリと重かった。

中身を確認すると、やはりのそこには大量のヴァリス硬貨が詰まっていた……。

「ウチからのお駄賃や。自由に使ってエエから、4人で楽しんでいい」
『4人で』……。

この4人の中に、ティオナとティオネが含まれている事は明らかだった。外出させる為に『女装』を強要したロキが、金を渡して迄遊びに行かせようとするのは理解も出来る。しかし、何故ヒリユテ姉妹も同行させようと言うのか。

そんな心情を読み取ったかの様に、神は都合よく説明を始めた。

『アイズたん
【剣姫】と2人つきりじゃ流石に目立ちすぎるからなあ。『アレ？』

【剣姫】と一緒に歩いてるあの可愛い子いったい誰や?!』ってなって、余計な注目集めてまう」

考えすぎだろ……とは、流石に思えなかった。

それ程までに有名なのだ。【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインは。最早、存在自体が広告塔。そんな人物と刺しで練り歩いているともなれば、確かに大衆の目は釘付けだろう。そして、人目に付けばつく程、女装を見抜かれる確率は上がってしまう。

「でもティオナ達がおつたら、『ロキ・ファミリア』で遊びに来てんなあ』くらいに収まるやろ？ 万が一バレそうになっても、2人がおった方が誤魔化しやすい。てか、アイズだけじゃ絶対ムリや」

「それは……そうだが」

思っていた以上にしつかりとした理由が飛び出し、マシロは反論の言葉を封殺される。

けれど、それと出掛けるかは話が別だ。何故か普通に遊びに行くような流れになっているが、まだ首を縦に振った訳ではない。大体、何が悲しくて、こんな恰好で外に出なければならぬのだ。

是が非でも女装姿を外部の人間の目に晒したくないマシロは、どうにか断る理由を脳内で模索していた。が、ここでそれを邪魔する様に、フィンに話しかけられる。

「マシロ……。昨夜、僕がキミにしたお願いを覚えているかい？」
「……………なんだ急に」

今話しかけるな。

そんな心情とは裏腹に、マシロの脳は昨日言われた「勇者」の懇願が再生し始める。

——アイズが満足する迄甘えてやってくれ……。とは流石に言わないよ。

——でも、

——多少の我儘はきいてやって欲しい。

——それこそ

——『一緒にジャガ丸くんを買いに行く』ぐら

いはね。

「シロ……。やっぱり、イヤ？」

フィンの言葉を思い出し終えたタイミングで、視界をアイズの顔が独占する。

不安そうな瞳で、眉で、口で、息遣いで、此方を覗き込んでいた。

この『イヤ？』には、『女装して外に出るのは』という事以外にも、『わたしと出かけるのはイヤ？』という問いも込められているのだろう。

無論、嫌だ。

女装して外に出るのは絶対に。これは、男なら皆そうだろう。

しかし、改めて考えてみると、姉と共に出かける事については、別にそこまで嫌という訳ではない。……無論、元の時代のアイズと出かけるのは嫌だ。正直これに関しては何こうの方が強く拒否するだろうから意味の無い仮定なのだが……仮に共に出かける事になったとして、沈黙が気まず過ぎるので願ひ下げである。

けれど、この時代の……まだ仲違いしていない状態の姉となら、出かける事になんら苦痛はない様に思える。過度なスキンシップにさえ目を瞑れば、あえて拒む理由は存在しない。

何より、断れば彼女の顔は更に曇るだろう。そして、泣きそうな表情でこう言うのだ。『ごめんね』と。何故か謝って来る。悪い事など、何一つしていないのに……。

それはとても駄目な事だと、理屈は分からないがマシロは思った。

「仕方ねえな……」

だから、無意識の内に、その様に呟く。

髪の毛をガシガシ掻きながら、視線も合わせずに淡々と告げた。

「朝メシは程々にしとけよ」

「え？」

「え、じゃねえ。ジャガ丸くん買いに行くんだろが。腹いっぱい食えなくなっても知らねえぞ」

「……！ うん！」

アイズの、キョトンとした顔が鮮やかに色づく。

灰色の顔に満開の花が咲き、『幸福』という感情をまざまざと見せつけて来た。

きつと、『価値のある笑顔』とは、こういうモノの事を言うのだろうか。見た者の心を温かく満たす、そんな微笑み。それが、アイズの顔には浮かんでる。

この笑顔の前では、自分の羞恥心など下らない。ちっぽけ過ぎて、取るに足らないプライドだと、殊勝にもマシロはそう思う事ができ

た。

「え、何今の？ 普通に『一緒に行こ、お姉ちゃん！』で良くない？

『朝メシは程々にしとけよ』って何？」

「本当、誰に影響されたんだか……。ベートでもあんな回りくどい言い方しないわよ？」

「アタシ、元の弟君に戻って欲しいな。メツチャ可愛かったのに……。」「成長って、残酷なのね……」

「聞こえてるからな、テメエら」

：
：

某所 とある神と眷属の雑談現場

「さてと、そろそろ彼らが動くみたいだぜ？」

「そうですか……。それは良かったですね」

「おいおい、発言と表情が一致してないぜ？ まるで月の残業時間が

50時間を超えた社畜サラリーマンみたいだ」

「……誰の所為ですか誰の……」

「俺と、ロキと、まあ強いて言うなら彼の所為かな？　まあ、彼は只の被害者だけど」

「……しかし、未だに信じられませんね。この時代の人間と未来の人間を入れ替えるだなんて」

「おいおい、信じてなかったのかよ？　まったく、俺も信用の無い神だなあ」

「自虐のつもりですか？　只の事実ですが……」

「手厳しい！　まあ、仕方ない。折角の機会だ。心の療養の為にも、今日は一日彼らを観察しようじゃないか。どうせ期限はまだ少し先だしね」

「……なるのですか？　観察するだけで療養に」

「なるさ。なんたって、相手はあのロキの所の秘蔵っ子だ。そんな彼の可愛くて面白可笑しく、ちよっぴり滑稽な姿を見る事ができる——」

「そういう姿を見る事でしか得られない栄養素ってものが、この世界にはあるんだよ」

番外編その2 番外編その2 第一話

「……………」

アイズ・ヴァレンシユタインは、とある一室の前に立ち尽くしていた。何やら神妙な面持ちで扉を見詰めており、普段は能面に近い顔から流れる冷や汗が、彼女の心境を物語っている様である。

無論、そうする事を目的としている訳ではない。アイズはこの部屋に用があつて来たのだ。より正確に言うのなら、この部屋の主に。

しかし、いざ扉をノックしようとしても、伸ばした手が力を失ってしまう。

何度も、何度も何度も何度も。

手の甲が扉を叩く直前で、目的を忘れたかの様に宙を彷徨う。すべては、アイズが緊張している所為である。

彼女の尋ね人は、マシロ・ヴァレンシユタイン。正真正銘、アイズの血の繋がった弟だ。もう何年も口を利いていない、冷え切った関係値の弟。そんな相手が扉を挟んだ先に居るのだから、躊躇してしまうのも無理はないだろう。

けれど、今日は彼の12歳の誕生日。

アイズはどうしても、直接『おめでとう』と伝えたかった。

『そんな事でわざわざ来たのか』と、弟には怪訝がられることだろう。仲の悪い相手の為にどうして・と。きつと、他の団員達も同様の反応を見せるに違いない。

それでも此処にやって来たのは、アイズがマシロの事を溺愛しているからだ。矛盾している様だが、事実である。諸事情により接触を最初に断つたのは彼女からだ。その愛情は年単位の膨大な空白期間を経て、寧ろ肥大化していると言えよう。最近では触れ合いたい欲が抑えきれなくなり、真夜中に忍び込んで添い寝をするという問題行為を繰り返している程なのだ。それも、週一というふざけたペースで。

それ程までに想っている相手が生まれ落ちた日である。

例え変に思われても、会いに行きたいと思うのは自然な摂理だった。今回の接触が、少しでも関係を改善するキツカケにならないかなと密かに期待しつつ、アイズはようやく腹を括る。ひとつ深呼吸をし、コンコンと扉を叩いた。

「シ、シロ……くん。いる……?」

控えめな声を部屋に向ける。けれど、当然と言わんばかりに返事はない。時刻はまだ午前5時半だ。正直、普通に寝ていて気付かれていない可能性は十分にある。しかし、アイズは極限まで視野が狭まっていた。

皆が活動を始める常識的な時間だと、彼を捕まえられないかも知れない。かと言って、いつもの様に真夜中に忍び込んで起こす、という選択肢が論外であることも流石に分かっていた。加えて、いの一自分に声をかけたい欲も少なからず存在して……。

だから、こんな常識外れの時間に訪問してしまったのだ。正直あと1時間遅らせていればまだ『常識的な時間帯』の範疇に収まったと思うのだが、そこは『一番に自分が』という気持ち先走り過ぎてしまった結果だろう。

けれど、やはり時期尚早だった様だ。一切物音を立てない室内の様子からもソレが伝わって来る。

「シロくん……?」

泣きの一回。

おそらく、他の団員達もまだ夢の中だろう。無暗に大きな音は立てられない。これで反応がなければ諦めよう。そう心に決め、ノックをした瞬間だ。

「ひゃっ!!」

一秒にも満たない間の後、悲鳴のような声が聞こえて来た。ドア越しなので確かな事は言えないが、アイズはそれに違和感を覚える。女の子のように聞こえたのだ。弟は近年、意図して低めの声色を作っている。今のは一致しない。それとも、寝起き故に素の声が出てしまったのだろうか……。

等と考察していると、布が擦れあうかの様な音が忙しなく鼓膜に届き出した。時折何かにぶつかるような音も聞こえて来る。慌てているのは確かな様だ。声もおかしいし、もしかしたらトラブルでも発生したのかも知れない。

そう思い至ったアイズは、早朝であるも忘れて必死に扉を叩き始めた。

「大丈夫?! 中で何かあったの?! 開けるよ?!」

すると、即座に部屋から返答がある。

「ま、待って! あげるから、ちよつと、まって……!」

明確に放たれた制止の声。

それは、確かに弟のものである様だった。他の者が聴けば、別人の女の子と判断するだろうが、根つこの声帯は同じだとアイズは確信する。中に居るのは弟。それが確定したのは良いが、どうして声色を作り忘れる程慌てているのかは、依然として不明だった。

その疑問を解消できずにいると、ゆっくりと部屋の扉が開き始める。

「……!」

全開には成らなかつた。

半分にも到達していない。

その小さく開かれた扉の隙間から姿を覗かせたのは、小山のように隆起した掛布団。

否。掛布団を頭から被った、小さな子供だった。

本当に小さい。

弟も大概小柄だが、それ以上である。頭頂部が、ドアノブの高さにさえ届いていない。掛布団の大部分は床に垂れており、明らかにサイズが合っていない事が窺える。ドアを開くために伸ばされた腕は短く、掌は2つ纏めて片手の中に納まりそうだ。不安げに歪められた大きな銀目は、か弱い小動物を想起させる。

「あ、あの……だれ、ですか?」

女の子とも男の子とも分からぬ子供の小さな口から、そのような質問が飛んできた。此方を恐れているような素振りだ。

——弟の部屋から出て来た謎の子供。

本来であれば、それだけでアイズに特上の警戒心を抱かせるに余りある。事マシロのこととなれば、相手が年端も行かぬ子供かどうかなど関係ない。

『お前は誰だ』

『何故此処にいるんだ』

『弟とはどんな関係だ』

そして『弟は今何処に居るのか』。それら諸々を、鬼の形相で問い質していた筈だ。

けれど、アイズはそういった詰問は一切行わなかった。代わりに、なんの前触れもなく子供へ両手を伸ばす。別に攻撃という訳ではない。ガシリと掴んだのは、全身を隠している掛布団だった。アイズはそれを熱心に剥ぎ取ろうとする。

「え……？ やめ、やめて……！」

子供は必至に抵抗した。それこそ、泣き出してしまいそうな形相で。

けれど、彼我の差は圧倒的だった。

子供の全身が、あっけなく白日の下に晒される。

子供は服を着ていなかった。上も、下も、何もかも。完璧に産まれた時の状態。まるでお風呂にでも入っていたかのように、銀色の髪の毛を含め全身が濡れており、身体には石鹼の泡がついている。

わざわざ掛布団に包まって出て来る訳だ。そして、必死の抵抗も領ける。布団が取っ払われてしまえば、この通りスツポンポンの姿をお披露目する事になるのだから……。

そう納得しつつ、アイズは子供の身体を舐めるように見渡した。とても既視感のある姿だ。饅頭のように白くもっちりした肌にも、天使を思わせる銀髪にも、宝石と見紛う銀の瞳にも見覚えがある。

羞恥に駆られ、今更前を隠すように両腕を交差し始めたが、もう遅い。既に、全てを視た。そして、こんなふうな反応にも覚えがある。信じがたいが間違いない。

彼を目撃した瞬間から雄叫びを上げ続けているアイズの本能も、こ

うして過去の記憶と照らし合わせて確認した特徴さえもそうだと高らかに告げている。

ならば、如何に荒唐無稽であろうと、アイズは直感を信じよう。

この子は、間違いなく——在りし日のマシロ・ヴァレンシユタインだと。

「そ、その……あんまり見ないで……」

「……」

ゼロ秒と言ってしまったぐらいの秒数でそこまでの思考を展開していたアイズは、自らが弟だと断定した幼子の弱々しい要望に正気を取り戻した。

しかし、そんな物は直ぐに手放す事となる。

【剣姫】の瞳に飛びこんで来た銀髪の子供は、眉をハの字に顰め、細めた両目に涙を滲ませていた。頬はロキの髪の色のように色づいており、口元には握り拳が添えられている。

その姿を認めた瞬間、アイズの中で何かが弾けた。そして、正常な判断ができる精神状態ではなくなつた。だから、この時の行動は、後に振り返ってみても、アイズ自身、正当性を見出す事が出来ない。しかし、半狂乱状態というのは得手してそういうモノなのだろう。

アイズは懐かしい弟の両脇に両手を突っ込み、ガバツと持ち上げて引き寄せた。俗に言う、『抱っこ』の状態だ。石鹼の所為で肌が滑る。気を抜くと落つこととしてしまいそうだ。そんな事は許されないと、彼女は殊更気を引き締めた。

「い、いや……放して！ ハダカなの……！」

「あぶないよう？ ジツとしてて？」

銀色の頭を自身の鎖骨付近に押し付け、頬で毛並みを堪能する。この間も、嫌がる子供の声は耳に入っていたが、敢えて無視した。それ程までに熱心に、小さくなつた弟の温もりを噛み締めていた。

……無論、どんなに容姿が似ていたとしても、先ずは『幼き日のマシロに良く似た別人が本拠内に忍び込んだ』という、可能性を疑うべきである。どれだけ理屈を並べたとしても、『マシロの肉体時間が巻き戻ってしまった』より『マシロに瓜二つの別人』の可能性の方が、圧

倒的に確率が高いのだから。故にアイズの行動は、客観的には『浅慮』だと誹られて然るべき暴挙なのだが……。

弟の事となれば、この姉が超次元の嗅覚を発揮するのも、また事実だった。そして、運命の悪戯か、都合よくそれを証明する者が現れる。「なんや、物音する思うたらアイズたんかい。男子部屋の区画におけるなんて珍しいなあ。てか、ナニ抱えてるん？」

ロキだった。

関西弁なる方言を操る胡散臭い女神。自分達の主神。

それが、奥から此方に近づいて来る。まだ仄暗い廊下には、彼女の朱色の髪はよく映えた。

「あ、ロ——」

「ロキ……？ ロキ?! たすけて、ロキ！」

途端、アイズを遮って、小さなマシロが過剰な反応を示す。そして、これでもかとい程の大暴れを始め——本来であれば逆立ちしても逃れられる筈のないLv. 5の拘束から抜け出すという奇跡を引き起こした。万に一つでも落下させる事を嫌ったアイズによって、床に降ろされる形で開放されたのだ。

「し、シロ……!!」

「は？ ちよ、えええ!! 裸の子供お!! どないなってんねん!! まさか自分、どつかから攫って来たんやないやろな……ってか、マジでなんで全裸やねん！」

駆け寄って来た銀髪の子供へ反射的に手を差し伸べつつ、ロキは驚愕を顔にする。流石の彼女も、瞬時には理解が追いつかない様だった。まあ、自身の眷属が真つ裸の子供を抱きかかえている所を目撃したのだから、無理もない話ではある。

「ロキ！ ロキい！ あの人がね……急に部屋にきておふとんはがしたの！ ハダカだから嫌だったのに、むりやりい……！」

「そ、そうかあ。そら、大変やったなあ。んで？ 自分ダ——」

レや？ ……という台詞は喉に詰まった。

『それでね』と続ける銀髪の子供に、あまりにも強すぎる既視感を覚えた為だ。ロキは彼の背中を摩りながら、改めてその姿を見定める。

糸のように細い目を、珍しく見開きながら。

そして、数秒後、神は理解を得た。この子供の正体。そして、なぜアイズが彼を抱っこしていたのかを――。

「自分……、マシロか？」

「……うん。なんでそんなこと、聞くの……？」

鼻水を啜りながら銀髪の子供はキョトンと頷いて答える。まるで、自分がロキに認知されているのが当然の事とでも言いたげに……。

女神は目を細めた。

『嘘』は吐いていない。

つまり、少なくとも、この子供自体は、自身をマシロ・ヴァレンシユタインだと認識しているという事。ロキを知っている事からも、瓜二つの同姓同名の別人……というオチは考えづらい。そして、神としての勘。何より、あのアイズ・ヴァレンシユタインが、『弟』だと認識している点を踏まえれば……。

彼をマシロ・ヴァレンシユタインだと断定するのに、そう時間は掛からなかった。

無論、今のマシロはここまで幼くも小さくもない。つまり、目の前にいる子供は、『過去のマシロ』という事になる。年齢はおそらく7歳程度。一般的な外見年齢に当て嵌めるなら5歳ぐらいだろうが、小柄なマシロの事だ。2歳ぐらいは上に見ていた方が良い。

どうしてこんな事態になっているのかは流星に皆目見当も付かなかったが、とにかく、マシロだと分かれば問題ない。ファミリアに仇なす可能性を秘めた知らぬ子供ではないのだ。存分に、宥める方向へと舵を切れる。

「すまんなあ、マシロ。びっくりさせてもうたなあ」

「うう……」

ロキは、ヒクつと嗚咽を漏らすマシロの頭に手を乗せ、優しく撫で始めた。ゆっくりと、手の動きに合わせて呼吸を整えられる様に。その甲斐あってか、目に見えて彼は落ち着きを取り戻していった。しかし、直ぐに平穏を乱す声が乱入する。

「シロ……？　なんでロキに抱き付くの??」

「アイズ。ええから、とりあえずマシロン部屋から毛布持ってき」

「お姉ちゃんはコツチだよ？ ほら、早くこつちに——」

「アイズツ!!」

「……!!」

ロキの思いがけない大声に、アイズはようやく正気を取り戻した。継る様に主神に引付く弟の怯え切った瞳を見て、姉はやつと自身の暴走を自覚する。罪悪感でいっぱいになりながら、早急に床に落ちている毛布を拾って差し出した。

それを奪う様に受け取ったマシロは、即座に身体に巻き付ける。『寒かったんだね』という見当外れな解釈は、もうしない。無論、それもあるだろうが大部分は違う。恥ずかしかつたのだ。何しろ全裸だ。当然である。状況が逆だったら、アイズだって同じ反応を見せるだろう。

隠すべきところを隠したマシロに、アイズは羞恥心と憤りの籠った瞳を向けられる。ぷっくりと膨らんだ頬の所為で可愛いという感想が勝るが、それを表に出すのは不誠実というものだろう。アイズは膝を折って誠心誠意謝罪した。

「ご、ごめんなさい……! 怖かったよね……? キミがあまりにも可愛くて、つい……」

「かわいくないもん。男だもんっ」

「あう……あ」

腕を組みながらピイツとそっぽを向く幼い弟に、アイズは悶える。

ついでにロキも。

「いやいやいやいや、そらムリあるで、マシロたん。どう見ても可愛エエもん」

「ロキまでそんなこと言う……」

「唇尖らせたトコも可愛エエなあ。じゃあ、そんなこと言うウチのこと、キライになつてもうた?」

「きらい……じゃないけど」

そこまで会話を発展させると、ロキは愉しそうに矛先をアイズへと変えた。

「じゃ、このキレイな金髪のお姉さんは？」

「きらいー！」

ツーンと、両頬をこれでもかと膨らませながら幼マシロは即答する。瞬間、アイズが真っ白になったのは言うまでもない。そんな姉に対し、ロキは白々しい言葉を吐いた。

「あちやく、ついにアイズたんも嫌われてもうたかあ。ま、流石に全裸抱っこはなあ」

「……？　なんでお姉ちゃんのなまえが出てくるの？　お姉ちゃんは大好きだよ？」

「ホント？！」

その台詞を聞いた瞬間、石灰の塊と化していたアイズが復活する。キラキラ目を輝かせて、顔と顔が密着しそうな程に距離を縮めた。故に、マシロの小さな手にグイグイと押し返されてしまう。

「なんでヘンタイさんが反応するの！　ボクが好きなのはお姉ちゃん！　ヘンタイさんじゃないの！」

「えへへへ」

「だから、なんでよろこぶの……？！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ！　なんでやろなあ？！」

拒絶しているのに身を引くどころか嬉々として頬擦りをしてくるアイズに、マシロは酷く困惑した。両者の認識のズレからこのような状況になると予見し、的中した光景を存分に楽しんだロキは、ここでもうやく事態の鎮静化に取り組む。

「マシロ、そのお姉さんの顔、よく見てみ？」

「え？！」

「エエから、変態って色眼鏡は一旦外して、フラットに見てみるんや」「う、うん……」

ロキの言葉に従い、渋々ながら視線を向けるマシロ。アイズも空気を読んで、一定距離まで顔を離し視界に収まる配慮を見せる。見詰められ、頬の緩んだアイズは普段の凜としたイメージからはかけ離れているが、幼マシロにとっては、その方が馴染み深かったらしい。まだ

半信半疑の様だったが、それでもキツチリと言い当ててきた。

「……もしかして、アイズ……お姉ちゃん……？」

「そうだよ、アイズだよ……！」

感極まったアイズは、今日、何度目とも知れない抱擁を繰り出す。

「う、うそだっ!! だって、お姉ちゃん、こんなにお姉さんじゃないよ? もっと小さいよ?」

「そら、自分とこのアイズたんはそうやろなあ。多分、まだ11歳ぐらいいやろ?」

「……? 自分とこのつて?」

「ここで衝撃の事実判明や! マシロ、実はここ、未来の世界なんやで!」

「……………???'」

驚愕! というよりは、言葉の意味を飲み込み切れていない様子の幼いマシロに、ロキは立て続けに質問をぶつけた。

「今、自分いくつなん?」

「な、7才……」

「おお、ウチの見立て通りやん! んじゃ、自分は5年前の過去からここに来たゆう事やなあ」

「へ?」

「だから、ここは5年後の世界なんや。アイズは今16歳。そら、えらい別嬪さんのお姉さんにもなっとるわ」

「……………」

マシロは、胡散臭い宗教の勧誘を聞いているような顔になる。見るからに信じていない。まだ7歳とは言え、荒唐無稽な事を言われている自覚はある様である。とはいえ、ロキもこのような反応は想定していた。如何に素直な時期のマシロとは言え、分別が付かない訳ではないのだ。というより、無条件で相手の発言を信じ込むのと素直な事は、完全に似て非なる物。前者は単なる考えなしだ。年相応に思考する力があるからこそ、マシロは戸惑って訝しんでいる。

「信じられん?」

「だ、だって、そんなの……」

「じゃあ、聞くけども、今マシロんことを抱きしめとる姉ちゃん、改めて見てアイズ以外に見えるんか？」

「え？ それは……」

その指摘に、幼いマシロは押し黙った。

思った通りという顔を、ロキは浮かべる。

「ムリやろ？ 一度アイズって認識してもうたんや。幾ら理性が違っても叫んでも、本能が理解してもうてる。外見の面影だけやない。匂い、仕草、声、雰囲気。全部が全部、アイズたんやってなあ」

ロキは確信を持ってその様に告げた。何も根拠のない自信ではない。神の勘などというズルイ言葉で片付けるつもりもない。マシロがアイズをアイズと認識し始めてしまっている事は、誰の目から見ても明らかだった。何故なら――。

「それに自分……もう全然抵抗してへんやん」

「……………あ」

ロキの指摘に、マシロは呆けた声を漏らした。

それは青天の霹靂といった感じで、自分でも気付いていなかった内心を言い当てられた・とでも言いたげな反応だった。この時代のマシロだったら、きつと羞恥心から反発していただろう。12歳にもなっ姉からのスキンシップを拒まないのは格好が悪い。そういう思いが、根底にある筈だ。けれど、この小さなマシロは違う。

「そっか……。そうだね」

俯き加減で呟いた。

かと思うと、むくりと顔を上げた。視線の先では金目とかち合う。アイズが懲りずに破顔する……前に、マシロは釘を刺した。

「あとで、やっぱり別人でした・とかナシだからね？」

「…………… うん……………」

ズイツと今度はマシロの方から、顔を近付けた。アイズは言葉の意味こそ呑み込めていない様だが、嬉しそうである。大好きな相手の方から近づいて来てくれた。警戒心の強い小動物が懐いてきてくれた様な感覚なのかも知れない。次の瞬間、マシロが『にぱっ』と笑った。それはそれは、たいそう嬉しそうな満面の笑みで。

そして、「えい！」と、マシロがアイズへとダイブする。

「……………!!!!?」
~~~~~  
!!!!  
♡○△□———!!  
!!」

端的に言うのなら、マシロの方から抱き着いた・というだけの話だ。本当に何てことない。散々アイズから抱擁していたのだから、姉弟の抱き合うこの形は皆が見慣れたモノだろう。

だが、それは第三者目線の話だ。

当事者……アイズの視点ではそう単純な話ではない。

天使のように可愛い弟が、自分の意志で抱きついてきてくれた。コレが意味する事は、想像以上に大きかった。勿論、如何ともし難い愛情を一方的にぶつけられる事に不満はない。現状、アイズはそんな独りよがりさえ満足にできない状態だったのだ。それを考えれば、抱きしめられるだけでも僥倖というもの。

……しかし、やはり、好きな相手から愛情を向けられるのは良いモノだ。流石にソレを疑う余地はなく、向ける愛より受ける愛の方が特別に感じるのは人として当然の事。無論、仲違いする前のマシロに抱き付かれる意味は、あまりない。それは、現在のマシロとの関係とは切り離されており、今のマシロから愛を向けられるのが一番ではある筈だからだ。

けれど、時代は違えど、マシロはマシロ。不足した弟成分を補うには余りある相手である。寧ろ、慣らしという意味では昔のマシロの方が遥かに適切であろう。

何故なら——。

「あ、そうだ。おねえちゃん……さつきは『ヘンタイ』とか言つてごめ……つて、あれ？ お姉ちゃん!! お姉ちゃん！」  
「う、うへ……うへへへ……」

抱き付かれても不思議ではない過去のマシロ相手でも、アイズは絶頂のあまり昇天してしまったのだから……。

「謝らんでエエで、マシロ。変態はその通りやから……」

きつと、こんな姿を目にしたら、世の男共の方が仰天するだろう。こんなのは俺達の天使じゃないと、理想と現実の差に発狂するに違いない。

幸福感のあまり、笑顔を浮かべたまま気絶した【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの醜態を目の当たりにして、ロキは頭を抱えながら呟いた。